

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第268集

大里郡岡部町

大寄遺跡 I

岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—II—

〈第1分冊〉

2000

岡 部 町

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景



遺跡群全景（合成写真）



大寄遺跡Ⅰ区全景



大寄遺跡Ⅱ区全景



II区 第21・23号住居跡出土遺物



平安時代後期の土器群

I区 85・86・93～95・134・146・155・156・161・176・211号住居跡 II区 7・8・76～78号住居跡

発刊によせて

新たな千年紀を迎え、いよいよ21世紀の扉が開かれようとしています。

岡部町は、町民一人ひとりが真の豊かさを実感できる「みどりと活力、そしてふれあいのまち」を将来の都市像とした第3次岡部町総合振興計画を策定し、基本計画にもとづく諸施策を積極的に進めてまいりました。

工業の振興を図ることを目的とした西部工業団地整備事業もそのひとつであります。平成8年から10年にかけて、榛沢地区に23.1haの工業用地が造成され、平成11年からは一部の工場で操業が始まりました。こうしてまとまった用地が整備され、本町への企業立地の受け入れが円滑に行われるようになれば、今後の地域経済の活性化につながるものと多に期待されるところであります。

ところで、本町は豊かな自然の恵みを受け、古くからの歴史と文化に支えられた伝統のある町です。特に原始・古代の遺跡が数多く所在し、全国的に知られた遺跡も見つかっております。近年では、中宿遺跡で発見された建物跡群が、古代の榛沢郡の郡衙正倉として高い注目を集め、平成3年に県史跡「中宿古代倉庫群跡」の指定を受けました。町は指定地の公有地化や、古代倉庫の復元など史跡の保存整備を進め、現在は中宿歴史公園として町民の憩いの場となっております。

西部工業団地整備事業地内にも、国の重要文化財に指定された「緑軸手付瓶」が出土した西浦北遺跡をはじめとした榛沢遺跡群が所在し、これらの遺跡の発掘調査を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団にお願いいたしました。今回は、奈良・平安時代の大規模な集落跡が見つかった大寄遺跡の調査成果が、報告書にまとめられ刊行されることになりました。この報告書には、かつて岡部の地にくらした人々の足跡が記録され、その積み重ねのうちに長い歴史が築かれてきたことを知ることができます。こうした先人たちの営みによって生まれてきた特色ある地域文化を大切に伝えることから、21世紀に向けた個性豊かで魅力的な町づくりを進めていきたいと考えております。

平成12年12月

岡部町町長

伊藤 幸徳

序

埼玉県では、豊かな彩の国づくりを実現するため、調和と均衡ある発展を目指し、それぞれの地域の特性や文化に応じた整備事業を行っております。都市と農村が調和をおりなす県北地域では、自然環境と共生し、創造性に満ちた活気ある産業社会の構築に向けて、先端技術産業を軸とした構想が推進されております。岡部町西部工業団地造成事業は、県北地域の都市機能と居住環境の調和を図り産業の発展と雇用の拡大を目的として岡部町により計画されたものです。

工業団地造成地内には5か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しておりました。その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、岡部町の委託を受け当事業団が実施いたしました。

岡部町は、埼玉県内でも多くの埋蔵文化財が分布する地域として知られております。特に、「中宿古代倉庫群跡」は古代における榛沢郡衙の正倉と考えられており県の指定を受けています。重要文化財に指定されている緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡は隣接地にあたります。

岡部町西部工業団地関係としましては既に、沖田Ⅰ・沖田Ⅱ・沖田Ⅲ遺跡の報告書が刊行されております。今回は大寄遺跡Ⅰ区とⅡ区の一部を報告いたします。遺跡の内容は縄文時代前期および古墳時代から平安時代の集落跡を中心とするもので、特に平安時代後期（10世紀後半以降）の集落としては、県内でも最もまとまった遺跡の一つであり、当時の生活ぶりを示す貴重な資料といえましょう。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました岡部町教育委員会、鹿島道路株式会社、株式会社横森製作所、東洋エクステリア株式会社ならびに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年12月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 中野 健一

例言

本書は、大里郡岡部町に開発された岡部町西部工業団地造成事業地内に所在する大寄遺跡・沖田Ⅰ遺跡・沖田Ⅱ遺跡・沖田Ⅲ遺跡・宮西遺跡のうち大寄遺跡Ⅰ区とⅡ区の一部に関する発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

大寄遺跡第1次（OYR）

大里郡岡部町大字榛沢293-8番地他

平成9年2月18日付け教文2-202号

大寄遺跡第2次

大里郡岡部町大字榛沢298-4番地他

平成9年4月30日付け教文第2-9号

大寄遺跡第3次

大里郡岡部町大字榛沢293-10番地他

平成10年4月24日付け教文2-10号

3. 発掘調査は、岡部町西部工業団地建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、岡部町の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。
4. 本書は、第1章の組織により実施した。平成8年度は元井 茂、橋本 勉、磯崎 一、木村春夫、宮瀧山紀子、島羽政之、宮本直樹が担当し、平成9年1月6日から平成9年3月31日まで実施した。平成9年度は橋本 勉、中村合司、磯崎 一、富田和夫、木戸春夫、平田兼之、松田 哲が担当し、平成9年4月1日から平成10年3月31日まで

実施した。平成10年度は、磯崎 一、福田 型、石坂俊郎、斎藤欣延が担当し、平成10年4月1日から平成10年4月30日まで実施した。また、整理報告書作成作業は木戸が平成10年12月1日から平成11年3月31日まで、磯崎が平成11年4月1日から平成11年10月31日、平成11年12月1日から平成12年3月31日まで、富田が平成12年4月1日から平成12年9月30日まで実施した。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。土器の胎上分析は國第四紀地質研究所に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真は犬塚道則が撮影した。
7. 出土品の整理・凶版の作成は木村、磯崎、富田が行い、遺物尺測は縄文土器を金子直行、金属製品を龍瀬芳之、それ以外は桜井元子、永井いずみの補助を受け、木村、磯崎、富田が行った。本文の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、縄文時代の遺物は金子、土壙に関する遺構は永井が、それ以外は富田が行った。
8. 本書の編集は、富田が担当した。
9. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
岡部町教育委員会 荒川正夫 佐藤忠雄 鈴木秀雄 外尾常人 知久裕昭 島羽政之 平田重之 松田 哲 宮本直樹 渡辺 一

凡例

本書の遺跡全測図におけるX・Yの座標値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

- グリッドは10m×10m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の枕番号である。
- 遺構図及び穴測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

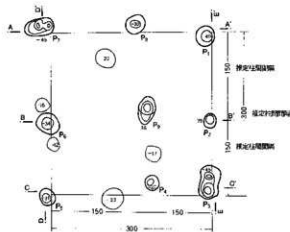
遺構図	住居跡・掘立柱建物跡…1/60
	土城・井戸跡・柵列跡
	性格不明遺構……………1/80
	溝跡……………1/200
遺物図	土器…1/4 石器・鉄製品…1/3
	石環図…1/3 土製品…1/2

上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。

- 全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

S J…住居跡	S B…掘立柱建物跡
S K…土城	S D…溝跡
S A…柵列跡	S X…性格不明遺構
	S E…井戸跡

- 掘立柱建物跡については、推定される柱間隔を遺構平面図に示した。
- 挿入中のスクリーントーンは以下のことを示す。



遺構断面図 斜線部分…地山

遺物図については灰釉陶器の灰釉塗布部分に網をかけて示した。断面黒塗りは須恵器を表す。

- 遺構図中に示したドットは、遺物の出土位置を示す。
- 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位mである。
- 遺物観察表は次のとおりである。

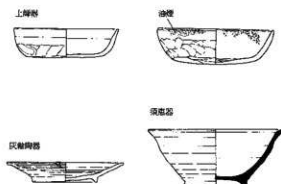
・胎土は、肉眼で観察できるものについて次のように示した。

A…赤色粒	B…石英	C…長石
D…角閃石	E…白色粒	F…白色針状物質
G…雲母	H…砂粒	I…片岩
J…礫		

・色調については、小林・竹原「新版標準土色帖」1992に拠った。

- 本書に掲載した地形図等は以下のものを使用している。

国土地理院	1/50000地形図「高崎」
	「寄居」
国土地理院	1/25000地形図「本庄」
	「寄居」「深谷」「二ヶ尻」
国土地理院	1/25000国土基本図
	「IX-JC 25-2」
	(昭和36年作成)



目次

〈第1分冊〉

口 絵

発刊によせて

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4
II 遺跡群の立地と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 周辺の遺跡	8
III 遺跡群の概要	12
1. 遺跡群の概要	12
2. 大寄遺跡の概要	13
IV 大寄遺跡 I 区の遺構と遺物	16
1. I 区の概観	16
2. 縄文時代の遺構と遺物	27
(1) 竪穴住居跡	27
(2) 土壌	28
(3) グリッド出土縄文土器	32
(4) グリッド出土石器	37
3. 古代・中世の遺構と遺物	40
(1) 竪穴住居跡	40
(2) 掘立柱建物跡	263
(3) 溝跡	287
(4) 井戸跡	296
(5) 土壌	303
(6) 櫛列跡	329
(7) 性格不明遺構	331

(8) ビット・グリッド・表採出土遺物	334
(9) I 区出土鉄製品	335

〈第2分冊〉

V 大寄遺跡 II 区の遺構と遺物	339
1. II 区の概観	339
2. 縄文時代の遺構と遺物	347
(1) 竪穴住居跡	347
(2) 住居跡・グリッド出土遺物	348
3. 古代・中世の遺構と遺物	350
(1) 竪穴住居跡	350
(2) 掘立柱建物跡	498
(3) 溝跡	507
(4) 井戸跡	510
(5) 土壌	520
(6) 櫛列跡	533
(7) 土壌墓	534
(8) 性格不明遺構	536
(9) ビット・グリッド出土遺物	539
00 II 区出土金属器	542
00 追加・訂正遺物	544
VI まとめ	547
1. 羽釜出現期以降の土器群について	547

附編

大寄遺跡出土土器の胎土分析鑑定報告	563
-------------------	-----

挿図目次

第1図	年度別調査範囲	3	第35図	第16～18号住居跡	50
第2図	埼玉県の地形	6	第36図	第16～18号住居跡出土遺物	51
第3図	遺跡周辺の地形区分	7	第37図	第19・20号住居跡	53
第4図	周辺の遺跡	9	第38図	第19号住居跡出土遺物(1)	54
第5図	関連遺跡遺構分布図	14・15	第39図	第19号住居跡出土遺物(2)	55
大寄遺跡Ⅰ区					
第6図	大寄遺跡全測図	16・17	第40図	第20号住居跡カマド	56
第7図	大寄遺跡Ⅰ区遺構配置図	18	第41図	第20号住居跡出土遺物(1)	57
第8図	大寄遺跡Ⅰ区全測図区測	19	第42図	第20号住居跡出土遺物(2)	58
第9図	大寄遺跡Ⅰ区全測図(1)	20	第43図	第21号住居跡・出土遺物	59
第10図	大寄遺跡Ⅰ区全測図(2)	21	第44図	第22・23号住居跡	60
第11図	大寄遺跡Ⅰ区全測図(3)	22	第45図	第22・23号住居跡出土遺物	61
第12図	大寄遺跡Ⅰ区全測図(4)	23	第46図	第24～26号住居跡	62
第13図	大寄遺跡Ⅰ区全測図(5)	24	第47図	第24～26号住居跡出土遺物	63
第14図	大寄遺跡Ⅰ区全測図(6)	25	第48図	第27・28号住居跡	66
第15図	第1号住居跡	27	第49図	第27・28号住居跡出土遺物(1)	67
第16図	第2号住居跡	28	第50図	第27・28号住居跡出土遺物(2)	68
第17図	第3・4号住居跡	29	第51図	第29・30号住居跡・出土遺物	69
第18図	第3号住居跡・出土遺物	30	第52図	第31～34号住居跡	71
第19図	第3号住居跡出土石器	31	第53図	第31・32・34号住居跡出土遺物(1)	72
第20図	グリッド出土縄文土器(1)	33	第54図	第31・32・34号住居跡出土遺物(2)	73
第21図	グリッド出土縄文土器(2)	34	第55図	第35号住居跡カマド・出土遺物	75
第22図	グリッド出土縄文土器(3)	35	第56図	第36～39号住居跡	76
第23図	グリッド出土縄文土器(4)	37	第57図	第36～38号住居跡出土遺物(1)	77
第24図	グリッド出土石器	38	第58図	第36～38号住居跡出土遺物(2)	78
第25図	第4号住居跡出土遺物	40	第59図	第40～44号住居跡	80
第26図	第5号住居跡・出土遺物	41	第60図	第40～42号住居跡出土遺物	81
第27図	第6号住居跡	41	第61図	第43・44号住居跡出土遺物	81
第28図	第7号住居跡	42	第62図	第45～47号住居跡	83
第29図	第8・9号住居跡・出土遺物	42	第63図	第45～47号住居跡出土遺物	84
第30図	第10号住居跡・出土遺物	43	第64図	第48～51号住居跡	86
第31図	第11・12号住居跡・出土遺物	45	第65図	第48号住居跡出土遺物	87
第32図	第13～15号住居跡	46	第66図	第49・51号住居跡出土遺物	89
第33図	第13～15号住居跡出土遺物(1)	48	第67図	第52号住居跡・出土遺物	90
第34図	第13～15号住居跡出土遺物(2)	49	第68図	第53号住居跡カマド・出土遺物	91
			第69図	第54・55号住居跡・出土遺物	92

第70回	第56号住居跡・出土遺物(1) ……………93	第107回	第101~107号住居跡 ……………139
第71回	第56号住居跡出土遺物(2) ……………94	第108回	第102・104・106・107号住居跡出土遺物(1) ……140
第72回	第57号住居跡・出土遺物 ……………96	第109回	第102・104・106・107号住居跡出土遺物(2) ……141
第73回	第58号住居跡・出土遺物(1) ……………97	第110回	第108~110号住居跡・出土遺物(1) ……144
第74回	第58号住居跡出土遺物(2) ……………98	第111回	第108~110号住居跡出土遺物(2) ……………145
第75回	第59号住居跡・出土遺物 ……………99	第112回	第111号住居跡・出土遺物 ……………146
第76回	第60号住居跡・第7号土塚・出土遺物 ……100	第113回	第112号住居跡 ……………147
第77回	第61号住居跡・出土遺物 ……………100	第114回	第112号住居跡出土遺物 ……………148
第78回	第62~65号住居跡 ……………102	第115回	第113号住居跡・出土遺物 ……………150
第79回	第62~64号住居跡出土遺物 ……………103	第116回	第114号住居跡・出土遺物 ……………151
第80回	第66~68号住居跡 ……………104	第117回	第115・116号住居跡・出土遺物 ……………152
第81回	第66~68号住居跡出土遺物(1) ……………105	第118回	第117号住居跡・出土遺物 ……………154
第82回	第66~68号住居跡出土遺物(2) ……………106	第119回	第118・119号住居跡・出土遺物(1) ……156
第83回	第69・70号住居跡(1) ……………109	第120回	第118・119号住居跡出土遺物(2) ……………157
第84回	第69・70号住居跡(2) ……………110	第121回	第120・121号住居跡・出土遺物(1) ……158
第85回	第69・70号住居跡出土遺物 ……………111	第122回	第120・121号住居跡出土遺物(2) ……………159
第86回	第71号住居跡・出土遺物 ……………112	第123回	第122・123号住居跡・第29号土塚・出土遺物…161
第87回	第72号住居跡・出土遺物 ……………113	第124回	第124・125号住居跡・出土遺物 ……………163
第88回	第73・74号住居跡 ……………114	第125回	第126号住居跡・出土遺物 ……………164
第89回	第75~77号住居跡・出土遺物(1) ……116	第126回	第127号住居跡・出土遺物 ……………165
第90回	第75~77号住居跡出土遺物(2) ……………117	第127回	第128~130号住居跡・第27号土塚・出土遺物…167
第91回	第78・79号住居跡・出土遺物(1) ……118	第128回	第131号住居跡・出土遺物 ……………168
第92回	第78・79号住居跡出土遺物(2) ……………119	第129回	第132号住居跡・出土遺物 ……………169
第93回	第80・81号住居跡・出土遺物 ……………121	第130回	第133号住居跡・出土遺物 ……………171
第94回	第82~84号住居跡・出土遺物(1) ……122	第131回	第134号住居跡・出土遺物 ……………172
第95回	第82~84号住居跡出土遺物(2) ……………123	第132回	第135号住居跡・出土遺物 ……………173
第96回	第85・86号住居跡・出土遺物 ……………125	第133回	第136・137号住居跡・出土遺物 ……………174
第97回	第87・88号住居跡 ……………126	第134回	第138~142号住居跡・第53号土塚・出土遺物…176
第98回	第89号住居跡・出土遺物 ……………127	第135回	第143~145号住居跡・第63号土塚・出土遺物…178
第99回	第90・91号住居跡・第57号土塚 ……128	第136回	第146号住居跡・出土遺物 ……………180
第100回	第90・91号住居跡出土遺物 ……………129	第137回	第147号住居跡・出土遺物 ……………181
第101回	第92号住居跡・第21号土塚・出土遺物 ……130	第138回	第148・149号住居跡・出土遺物 ……………183
第102回	第93~95号住居跡・出土遺物 ……………131	第139回	第150号住居跡・出土遺物 ……………184
第103回	第96~98号住居跡 ……………133	第140回	第151号住居跡・出土遺物(1) ……………186
第104回	第97号住居跡出土遺物 ……………134	第141回	第151号住居跡出土遺物(2) ……………187
第105回	第99・100号住居跡 ……………135	第142回	第151号住居跡出土遺物(3) ……………188
第106回	第99・100号住居跡出土遺物 ……………136	第143回	第152号住居跡・第80号土塚・出土遺物…189

第144图	第153·154号住居跡	……………191	第181图	第194·195号住居跡・出土遺物	……………242
第145图	第153号住居跡出土遺物(1)	……………192	第182图	第195号住居跡出土遺物	……………243
第146图	第153号住居跡出土遺物(2)	……………193	第183图	第196号住居跡・出土遺物	……………243
第147图	第153号住居跡出土遺物(3)	……………194	第184图	第197・198号住居跡・出土遺物	……………245
第148图	第153号住居跡出土遺物(4)	……………195	第185图	第199・200号住居跡	……………247
第149图	第154号住居跡出土遺物	……………197	第186图	第200号住居跡掘り方	……………248
第150图	第155・156号住居跡・出土遺物(1)	……………198	第187图	第200号住居跡出土遺物(1)	……………249
第151图	第155・156号住居跡出土遺物(2)	……………199	第188图	第200号住居跡出土遺物(2)	……………250
第152图	第157・158号住居跡・出土遺物	……………201	第189图	第201号住居跡・出土遺物	……………251
第153图	第159号住居跡・出土遺物(1)	……………202	第190图	第202・203号住居跡・掘り方	……………253
第154图	第159号住居跡出土遺物(2)	……………203	第191图	第202・203号住居跡出土遺物(1)	……………254
第155图	第160号住居跡・第99号土塼・出土遺物	……………204	第192图	第202・203号住居跡出土遺物(2)	……………255
第156图	第161号住居跡・出土遺物	……………206	第193图	第204・205号住居跡・出土遺物	……………256
第157图	第162・163号住居跡・出土遺物(1)	……………208	第194图	第206号住居跡・出土遺物	……………257
第158图	第162・163号住居跡出土遺物(2)	……………209	第195图	第207号住居跡・出土遺物	……………258
第159图	第164号住居跡・出土遺物	……………210	第196图	第208号住居跡・出土遺物	……………259
第160图	第165号住居跡・出土遺物	……………211	第197图	第209号住居跡・出土遺物	……………260
第161图	第166~168号住居跡	……………212	第198图	第210号住居跡・出土遺物	……………261
第162图	第166・168号住居跡出土遺物	……………213	第199图	第211号住居跡・出土遺物	……………262
第163图	第169~171号住居跡・出土遺物(1)	……………216	第200图	第212号住居跡・出土遺物	……………263
第164图	第169~171号住居跡出土遺物(2)	……………217	第201图	第1号掘立柱建物跡・出土遺物	……………264
第165图	第172号住居跡・出土遺物	……………219	第202图	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	……………265
第166图	第173・174号住居跡・出土遺物	……………220	第203图	第3号掘立柱建物跡	……………266
第167图	第175号住居跡・出土遺物	……………221	第204图	第3号掘立柱建物跡出土遺物	……………267
第168图	第176号住居跡・出土遺物	……………223	第205图	第4号掘立柱建物跡・出土遺物	……………268
第169图	第177~179号住居跡	……………225	第206图	第5号掘立柱建物跡・出土遺物	……………269
第170图	第178・179号住居跡出土遺物(1)	……………226	第207图	第6号掘立柱建物跡	……………270
第171图	第178・179号住居跡出土遺物(2)	……………227	第208图	第7号掘立柱建物跡	……………271
第172图	第180・181号住居跡・出土遺物	……………228	第209图	第8号掘立柱建物跡	……………272
第173图	第182~184号住居跡・出土遺物	……………230	第210图	第9号掘立柱建物跡	……………273
第174图	第185・186号住居跡	……………232	第211图	第10号掘立柱建物跡・出土遺物	……………273
第175图	第185・186号住居跡出土遺物	……………233	第212图	第11号掘立柱建物跡	……………274
第176图	第187・188号住居跡・出土遺物	……………235	第213图	第12号掘立柱建物跡	……………275
第177图	第189号住居跡・出土遺物	……………236	第214图	第13号掘立柱建物跡・出土遺物	……………276
第178图	第190号住居跡・出土遺物	……………237	第215图	第14号掘立柱建物跡・出土遺物	……………277
第179图	第191・192号住居跡・出土遺物	……………238	第216图	第15号掘立柱建物跡・出土遺物	……………278
第180图	第193号住居跡・出土遺物	……………240	第217图	第16号掘立柱建物跡	……………279

第218図	第17号孤立柱建物跡	280	第254図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(4)	344
第219図	第18号孤立柱建物跡・出土遺物	281	第255図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(5)	345
第220図	第19号孤立柱建物跡	282	第256図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(6)	346
第221図	第20号孤立柱建物跡(1)	283	第257図	第1～3号住居跡	347
第222図	第20号孤立柱建物跡(2)	284	第258図	第1号住居跡・グロッド出土遺物	349
第223図	第21号孤立柱建物跡・出土遺物	285	第259図	第4・5号住居跡・出土遺物	350
第224図	第22号孤立柱建物跡・出土遺物	286	第260図	第6号住居跡・出土遺物	351
第225図	溝跡(1)	288	第261図	第7号住居跡・出土遺物	352
第226図	溝跡(2)	290	第262図	第8号住居跡・出土遺物	353
第227図	溝跡(3)	292	第263図	第9～13号住居跡	355
第228図	溝跡出土遺物(1)	293	第264図	第9～13号住居跡出土遺物	356
第229図	溝跡出土遺物(2)	294	第265図	第14・15号住居跡・出土遺物(1)	359
第230図	溝跡出土遺物(3)	295	第266図	第14・15号住居跡出土遺物(2)	360
第231図	第1～6号井戸跡	297	第267図	第16・17号住居跡・出土遺物(1)	362
第232図	井戸跡出土遺物(1)	299	第268図	第16・17号住居跡出土遺物(2)	363
第233図	井戸跡出土遺物(2)	300	第269図	第18～20号住居跡	365
第234図	井戸跡出土遺物(3)	301	第270図	第18～20号住居跡出土遺物	366
第235図	井戸跡出土遺物(4)	302	第271図	第21号住居跡	369
第236図	土壌(1)	305	第272図	第21号住居跡カマド・出土遺物(1)	370
第237図	土壌(2)	307	第273図	第21号住居跡カマド出土遺物(2)	371
第238図	土壌(3)	309	第274図	第21号住居跡カマド出土遺物(3)	372
第239図	土壌(4)	311	第275図	第22号住居跡・出土遺物	373
第240図	土壌(5)	313	第276図	第23号住居跡(1)	374
第241図	土壌(6)	315	第277図	第23号住居跡カマド	375
第242図	土壌出土遺物(1)	317	第278図	第23号住居跡(2)	376
第243図	土壌出土遺物(2)	319	第279図	第23号住居跡出土遺物(1)	378
第244図	土壌出土遺物(3)	321	第280図	第23号住居跡出土遺物(2)	379
第245図	第1～6号櫓列跡	330	第281図	第24～27号住居跡	382
第246図	第1・5号不明遺構出土遺物	331	第282図	第24～27号住居跡出土遺物	383
第247図	第2号不明遺構・出土遺物	332	第283図	第28・29号住居跡	386
第248図	ビット・グロッド・表探出土遺物	334	第284図	第28号住居跡出土遺物	387
第249図	I区出土鉄製品	336	第285図	第30号住居跡・出土遺物	388
大寄遺跡Ⅱ区			第286図	第31・32号住居跡・出土遺物	389
第250図	大寄遺跡Ⅱ区遺構配置図	340	第287図	第33号住居跡・出土遺物	390
第251図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(1)	341	第288図	第34・35号住居跡・出土遺物	391
第252図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(2)	342	第289図	第36号住居跡・出土遺物	392
第253図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(3)	343	第290図	第37～40号住居跡	394

第291图	第37-40号住居跡出土遺物	395	第328图	第79-83号住居跡出土遺物(2)	450
第292图	第41-44号住居跡	398	第329图	第84号住居跡・出土遺物	452
第293图	第41-44号住居跡出土遺物	399	第330图	第85-87号住居跡・出土遺物(1)	453
第294图	第45-48号住居跡・出土遺物(1)	402	第331图	第85-87号住居跡出土遺物(2)	454
第295图	第45-48号住居跡出土遺物(2)	403	第332图	第88-90号住居跡	456
第296图	第49-52号住居跡	404	第333图	第88-90号住居跡出土遺物	457
第297图	第49-52号住居跡出土遺物	405	第334图	第91-93号住居跡	460
第298图	第53号住居跡	407	第335图	第91-93号住居跡出土遺物	461
第299图	第53号住居跡出土遺物	408	第336图	第94・95号住居跡・出土遺物(1)	463
第300图	第54号住居跡・出土遺物	410	第337图	第94・95号住居跡出土遺物(2)	464
第301图	第55号住居跡	411	第338图	第96号住居跡・出土遺物	466
第302图	第55号住居跡出土遺物	412	第339图	第97号住居跡・出土遺物	468
第303图	第56号住居跡	414	第340图	第98・99号住居跡・出土遺物	469
第304图	第56号住居跡出土遺物	415	第341图	第100-103号住居跡	471
第305图	第57号住居跡・出土遺物(1)	416	第342图	第100-103号住居跡出土遺物(1)	472
第306图	第57号住居跡・出土遺物(2)	417	第343图	第100-103号住居跡出土遺物(2)	473
第307图	第58号住居跡・出土遺物	419	第344图	第104号住居跡・出土遺物(1)	476
第308图	第59・60号住居跡	422	第345图	第104号住居跡出土遺物(2)	477
第309图	第59・60号住居跡・遺物分布图	423	第346图	第105号住居跡	478
第310图	第59号住居跡カマド	423	第347图	第106号住居跡・出土遺物	479
第311图	第59・60号住居跡出土遺物(1)	424	第348图	第107号住居跡	480
第312图	第59・60号住居跡出土遺物(2)	425	第349图	第108・109号住居跡・出土遺物	481
第313图	第59・60号住居跡出土遺物(3)	426	第350图	第110-113号住居跡	483
第314图	第61・62号住居跡	427	第351图	第112・113号住居跡遺物出土状況	484
第315图	第61・62号住居跡出土遺物	428	第352图	第110-113号住居跡出土遺物(1)	484
第316图	第63-66号住居跡	430	第353图	第110-113号住居跡出土遺物(2)	485
第317图	第63-66号住居跡出土遺物	431	第354图	第114-117号住居跡	489
第318图	第67・68号住居跡・出土遺物	434	第355图	第114・115・117号住居跡出土遺物	490
第319图	第69-74号住居跡	436	第356图	第118・119号住居跡・出土遺物	492
第320图	第71号住居跡1号・2号鍛冶炉	437	第357图	第120・121号住居跡・出土遺物(1)	494
第321图	第69-73号住居跡出土遺物(1)	438	第358图	第120・121号住居跡出土遺物(2)	495
第322图	第69-73号住居跡出土遺物(2)	439	第359图	第122号住居跡・出土遺物	496
第323图	第75号住居跡・出土遺物(1)	442	第360图	第123号住居跡・出土遺物	498
第324图	第75号住居跡出土遺物(2)	443	第361图	第1号獨立柱建物跡	499
第325图	第76-78号住居跡・出土遺物(1)	445	第362图	第2号獨立柱建物跡	500
第326图	第76-78号住居跡出土遺物(2)	446	第363图	第3号獨立柱建物跡・出土遺物	501
第327图	第79-83号住居跡・出土遺物(1)	449	第364图	第4号獨立柱建物跡・出土遺物	502

第365区	第5号獨立柱建物跡・出土遺物	503	第382区	第1号土壇墓	537
第366区	第6号獨立柱建物跡・出土遺物	504	第383区	第1号性格不明遺構・出土遺物	537
第367区	第7号獨立柱建物跡・出土遺物	505	第384区	第2号性格不明遺構・出土遺物(1)	538
第368区	第8号獨立柱建物跡・出土遺物	506	第385区	第2号性格不明遺構出土遺物(2)	539
第369区	第9号獨立柱建物跡・出土遺物	507	第386区	ピット出土遺物	540
第370区	第10号獨立柱建物跡	508	第387区	グリッド出土遺物	542
第371区	第1～4号溝跡・出土遺物	509	第388区	II区出土金属製品	543
第372区	井戸跡	512	第389区	追加・訂正遺物	545
第373区	井戸跡出土遺物(1)	513	第390区	大奇遺跡A期の土器	548
第374区	井戸跡出土遺物(2)	515	第391区	大奇遺跡B期の土器(1)	550
第375区	井戸跡出土遺物(3)	516	第392区	大奇遺跡B期の土器(2)	551
第376区	井戸跡出土遺物(4)	517	第393区	大奇遺跡C期の土器(1)	553
第377区	土壇(1)	521	第394区	大奇遺跡C期の土器(2)	554
第378区	土壇(2)	523	第395区	大奇遺跡D期の土器	555
第379区	土壇(3)	525	第396区	大奇遺跡E期の土器	557
第380区	土壇出土遺物	527	第397区	参考資料	559
第381区	第1～3号横列跡・出土遺物	535			

表 目 次

大奇遺跡 I 区

第1表	大奇I区グリッド出土縄文土器一覧表	39	第17表	第35号住居跡出土遺物観察表	75
第2表	第4号住居跡出土遺物観察表	40	第18表	第36～38号住居跡出土遺物観察表	78
第3表	第5号住居跡出土遺物観察表	41	第19表	第40～42号住居跡出土遺物観察表	82
第4表	第8・9号住居跡出土遺物観察表	43	第20表	第43・44号住居跡出土遺物観察表	82
第5表	第10号住居跡出土遺物観察表	44	第21表	第45～47号住居跡出土遺物観察表	85
第6表	第11・12号住居跡出土遺物観察表	44	第22表	第48号住居跡出土遺物観察表	88
第7表	第13～15号住居跡出土遺物観察表	47	第23表	第49・51号住居跡出土遺物観察表	88
第8表	第16～18号住居跡出土遺物観察表	51	第24表	第53号住居跡出土遺物観察表	91
第9表	第19号住居跡出土遺物観察表	52	第25表	第54・55号住居跡出土遺物観察表	92
第10表	第20号住居跡出土遺物観察表	56	第26表	第56号住居跡出土遺物観察表	95
第11表	第21号住居跡出土遺物観察表	58	第27表	第57号住居跡出土遺物観察表	95
第12表	第22・23号住居跡出土遺物観察表	60	第28表	第58号住居跡出土遺物観察表	98
第13表	第24～26号住居跡出土遺物観察表	64	第29表	第59号住居跡出土遺物観察表	98
第14表	第27・28号住居跡出土遺物観察表	65	第30表	第62～64号住居跡出土遺物観察表	101
第15表	第29・30号住居跡出土遺物観察表	70	第31表	第66～68号住居跡出土遺物観察表	107
第16表	第31・32・34号住居跡出土遺物観察表	74	第32表	第69・70号住居跡出土遺物観察表	108

第33表	第71号住居跡出土遺物觀察表	………113	第69表	第147号住居跡出土遺物觀察表	………182
第34表	第72号住居跡出土遺物觀察表	………114	第70表	第148・149号住居跡出土遺物觀察表	…182
第35表	第75～77号住居跡出土遺物觀察表	………117	第71表	第150号住居跡出土遺物觀察表	………185
第36表	第78・79号住居跡出土遺物觀察表	………120	第72表	第151号住居跡出土遺物觀察表	………188
第37表	第80号住居跡出土遺物觀察表	………120	第73表	第152号住居跡出土遺物觀察表	………190
第38表	第82～84号住居跡出土遺物觀察表	………123	第74表	第153号住居跡出土遺物觀察表	………190
第39表	第85・86号住居跡出土遺物觀察表	………124	第75表	第154号住居跡出土遺物觀察表	………197
第40表	第89号住居跡出土遺物觀察表	………127	第76表	第155・156号住居跡出土遺物觀察表	…199
第41表	第90・91号住居跡出土遺物觀察表	………129	第77表	第157・158号住居跡出土遺物觀察表	…200
第42表	第92号住居跡出土遺物觀察表	………130	第78表	第159号住居跡出土遺物觀察表	………203
第43表	第93～95号住居跡出土遺物觀察表	………132	第79表	第160号住居跡出土遺物觀察表	………205
第44表	第97号住居跡出土遺物觀察表	………133	第80表	第161号住居跡出土遺物觀察表	………207
第45表	第99・100号住居跡出土遺物觀察表	………137	第81表	第162・163号住居跡出土遺物觀察表	…207
第46表	第102～104・106・107号住居跡 出土遺物觀察表	………142	第82表	第164号住居跡出土遺物觀察表	………209
第47表	第108～110号住居跡出土遺物觀察表	…145	第83表	第165号住居跡出土遺物觀察表	………210
第48表	第111号住居跡出土遺物觀察表	………147	第84表	第166・168号住居跡出土遺物觀察表	…214
第49表	第112号住居跡出土遺物觀察表	………149	第85表	第169～171号住居跡出土遺物觀察表	…218
第50表	第113号住居跡出土遺物觀察表	………149	第86表	第172号住居跡出土遺物觀察表	………219
第51表	第114号住居跡出土遺物觀察表	………151	第87表	第173・174号住居跡出土遺物觀察表	…220
第52表	第115・116号住居跡出土遺物觀察表	…153	第88表	第175号住居跡出土遺物觀察表	………221
第53表	第117号住居跡出土遺物觀察表	………155	第89表	第176号住居跡出土遺物觀察表	………222
第54表	第118・119号住居跡出土遺物觀察表	…155	第90表	第178・179号住居跡出土遺物觀察表	…227
第55表	第120・121号住居跡出土遺物觀察表	…160	第91表	第180・181号住居跡出土遺物觀察表	…229
第56表	第122・123号住居跡出土遺物觀察表	…162	第92表	第182・183号住居跡出土遺物觀察表	…231
第57表	第124号住居跡出土遺物觀察表	………163	第93表	第185・186号住居跡出土遺物觀察表	…234
第58表	第126号住居跡出土遺物觀察表	………164	第94表	第187号住居跡出土遺物觀察表	………234
第59表	第127号住居跡出土遺物觀察表	………166	第95表	第189号住居跡出土遺物觀察表	………236
第60表	第128～130号住居跡出土遺物觀察表	…167	第96表	第190号住居跡出土遺物觀察表	………237
第61表	第131号住居跡出土遺物觀察表	………168	第97表	第191・192号住居跡出土遺物觀察表	…239
第62表	第132号住居跡出土遺物觀察表	………170	第98表	第193号住居跡出土遺物觀察表	………240
第63表	第133号住居跡出土遺物觀察表	………170	第99表	第194号住居跡出土遺物觀察表	………241
第64表	第134号住居跡出土遺物觀察表	………171	第100表	第195号住居跡出土遺物觀察表	………241
第65表	第136・137号住居跡出土遺物觀察表	…175	第101表	第196号住居跡出土遺物觀察表	………244
第66表	第139号住居跡出土遺物觀察表	………177	第102表	第197・198号住居跡出土遺物觀察表	…244
第67表	第143～145号住居跡出土遺物觀察表	…179	第103表	第200号住居跡出土遺物觀察表	………246
第68表	第146号住居跡出土遺物觀察表	………181	第104表	第201号住居跡出土遺物觀察表	………251
			第105表	第202・203号住居跡出土遺物觀察表	…255

第106表	第204・205号住居跡出土遺物観察表 ……257	第142表	第57号住居跡出土遺物観察表 ……417
第107表	第208号住居跡出土遺物観察表 ……259	第143表	第58号住居跡出土遺物観察表 ……419
第108表	第209号住居跡出土遺物観察表 ……260	第144表	第59・60号住居跡出土遺物観察表 ……420
第109表	第210号住居跡出土遺物観察表 ……261	第145表	第61・62号住居跡出土遺物観察表 ……429
第110表	第211号住居跡出土遺物観察表 ……262	第146表	第63～66号住居跡出土遺物観察表 ……432
第111表	溝跡出土遺物観察表 ……295	第147表	第67・68号住居跡出土遺物観察表 ……433
第112表	井戸跡出土遺物観察表 ……302	第148表	第69～73号住居跡出土遺物観察表 ……440
第113表	土壇出土遺物観察表 ……323	第149表	第75号住居跡出土遺物観察表 ……443
第114表	大寄Ⅰ区土壇一覽表 ……326	第150表	第76～78号住居跡出土遺物観察表 ……447
第115表	第1・5号性格不明遺構出土遺物観察表…333	第151表	第79～82号住居跡出土遺物観察表 ……451
第116表	第2号性格不明遺構出土遺物観察表…333	第152表	第85～87号住居跡出土遺物観察表 ……454
第117表	ビット・グリッド表採出土遺物観察表…335	第153表	第88～90号住居跡出土遺物観察表 ……458
第118表	大寄遺跡Ⅰ区遺構新旧対照表 ……338	第154表	第91～93号住居跡出土遺物観察表 ……462
大寄遺跡Ⅱ区		第155表	第94・95号住居跡出土遺物観察表 ……465
第119表	第4号住居跡出土遺物観察表 ……350	第156表	第96号住居跡出土遺物観察表 ……467
第120表	第6号住居跡出土遺物観察表 ……351	第157表	第97号住居跡出土遺物観察表 ……467
第121表	第7号住居跡出土遺物観察表 ……353	第158表	第100～103号住居跡出土遺物観察表 ……474
第122表	第9～13号住居跡出土遺物観察表 ……357	第159表	第104号住居跡出土遺物観察表 ……477
第123表	第14・15号住居跡出土遺物観察表 ……358	第160表	第106号住居跡出土遺物観察表 ……479
第124表	第16・17号住居跡出土遺物観察表 ……364	第161表	第108・109号住居跡出土遺物観察表 ……480
第125表	第18～20号住居跡出土遺物観察表 ……367	第162表	第110～113号住居跡出土遺物観察表 ……486
第126表	第21号住居跡出土遺物観察表 ……368	第163表	第114・115・117号住居跡 出土遺物観察表 ……491
第127表	第23号住居跡出土遺物観察表 ……380	第164表	第118・119号住居跡出土遺物観察表 ……493
第128表	第24～27号住居跡出土遺物観察表 ……384	第165表	第120・121号住居跡出土遺物観察表 ……495
第129表	第28号住居跡出土遺物観察表 ……385	第166表	第122号住居跡出土遺物観察表 ……497
第130表	第30号住居跡出土遺物観察表 ……388	第167表	井戸跡出土遺物観察表 ……518
第131表	第31・32号住居跡出土遺物観察表 ……389	第168表	土壇出土遺物観察表 ……528
第132表	第35号住居跡出土遺物観察表 ……391	第169表	大寄Ⅱ区土壇一覽表 ……532
第133表	第36号住居跡出土遺物観察表 ……393	第170表	欄列跡出土遺物観察表 ……534
第134表	第37～40号住居跡出土遺物観察表 ……396	第171表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表 ……537
第135表	第41～44号住居跡出土遺物観察表 ……400	第172表	第2号性格不明遺構出土遺物観察表 ……539
第136表	第45～48号住居跡出土遺物観察表 ……403	第173表	ビット出土遺物観察表 ……541
第137表	第49～52号住居跡出土遺物観察表 ……406	第174表	グリッド出土遺物観察表 ……541
第138表	第53号住居跡出土遺物観察表 ……409	第175表	追加・訂正出土遺物観察表 ……545
第139表	第54号住居跡出土遺物観察表 ……409	第176表	大寄遺跡Ⅱ区遺構新旧対照表 ……546
第140表	第55号住居跡出土遺物観察表 ……412		
第141表	第56号住居跡出土遺物観察表 ……413		

写真図版目次

図版1	大寄遺跡I区 全景	I区 第37・38号住居跡
	大寄遺跡I区 北半全景	I区 第37・38号住居跡 遺物出土状況
図版2	大寄遺跡I区 掘立柱建物群	I区 第38号住居跡 カマド
	大寄遺跡I区 全景(北西より)	I区 第43・44号住居跡
図版3	大寄遺跡I区 全景(南東より)	I区 第45～51号住居跡
	大寄遺跡I区	図版9 I区 第49～51号住居跡
図版4	大寄遺跡I区 全景(西より)	I区 第52号住居跡
	I区 掘立柱建物群(南西より)	I区 第54号住居跡
図版5	I区 第1号住居跡	I区 第54・55号住居跡
	I区 第1号住居跡	I区 第56号住居跡
	I区 第2号住居跡・第3号性格不明遺構	I区 第57号住居跡 遺物出土状況
	I区 第3号住居跡	I区 第57号住居跡 竊物石出土状況
	I区 第3号住居跡 埋裏跡 ¹⁾	I区 第58号住居跡 遺物出土状況
	I区 第3号住居跡 か ¹⁾	図版10 I区 第58号住居跡 遺物出土状況
	I区 第5号住居跡	I区 第59号住居跡
	I区 第6号住居跡	I区 第61号住居跡
図版6	I区 第8・9号住居跡	I区 第64・66・67号住居跡
	I区 第10号住居跡	I区 第66・67号住居跡
	I区 第11号住居跡	I区 第67号住居跡 遺物出土状況
	I区 第14号住居跡	I区 第68・70号住居跡
	I区 第14号住居跡 遺物出土状況	I区 第71号住居跡
	I区 第16号住居跡	図版11 I区 第72号住居跡
	I区 第18号住居跡	I区 第73号住居跡
	I区 第19号住居跡	I区 第73・74号住居跡
図版7	I区 第19号住居跡 カマド	I区 第75～77号住居跡
	I区 第19号住居跡 遺物出土状況	I区 第78号住居跡
	I区 第19号住居跡 遺物出土状況	I区 第78号住居跡 カマド 遺物出土状況
	I区 第20号住居跡 カマド	I区 第79号住居跡
	I区 第21号住居跡	I区 第80号住居跡
	I区 第21号住居跡 カマド	図版12 I区 第82～84号住居跡
	I区 第24～26・28号住居跡	I区 第87・88号住居跡
	I区 第24～26・28号住居跡	I区 第90号住居跡
図版8	I区 第31号住居跡	I区 第90号住居跡 カマド
	I区 第32号住居跡	I区 第91号住居跡
	I区 第32号住居跡 遺物出土状況	I区 第92号住居跡

	I区 第93号住居跡	I区 第150号住居跡
	I区 第93号住居跡 鉄器出土状況	I区 第150号住居跡 カマド遺物出土状況
図版13	I区 第93・94・96・97号住居跡	I区 第151号住居跡
	I区 第97号住居跡	I区 第151号住居跡 カマド周辺遺物出土状況
	I区 第99号住居跡	I区 第151号住居跡 カマド周辺遺物出土状況
	I区 第99号住居跡 遺物出土状況	図版18 I区 第152号住居跡
	I区 第101号住居跡	I区 第153号住居跡
	I区 第102・106号住居跡	I区 第153号住居跡 遺物出土状況
	I区 第103号住居跡 遺物出土状況	I区 第153・154号住居跡
	I区 第103号住居跡 カマド	I区 第153号住居跡 カマド周辺遺物出土状況
図版14	I区 第106号住居跡	I区 第153・154号住居跡 カマド
	I区 第109号住居跡	I区 第155号住居跡
	I区 第110号住居跡	I区 第155・156号住居跡
	I区 第111号住居跡	図版19 I区 第156・157号住居跡
	I区 第111号住居跡 遺物出土状況	I区 第157号住居跡
	I区 第112号住居跡	I区 第158～160号住居跡
	I区 第113号住居跡	I区 第159号住居跡
	I区 第113号住居跡 カマド	I区 第160号住居跡
図版15	I区 第114号住居跡	I区 第161号住居跡
	I区 第117号住居跡	I区 第162・163号住居跡
	I区 第119号住居跡	I区 第164号住居跡
	I区 第126号住居跡	図版20 I区 第165号住居跡
	I区 第127号住居跡	I区 第166・168号住居跡
	I区 第128～131号住居跡	I区 第168号住居跡
	I区 第132号住居跡	I区 第170・171号住居跡
	I区 第132号住居跡 遺物出土状況	I区 第171号住居跡 カマド遺物出土状況
図版16	I区 第132号住居跡 カマド遺物出土状況	I区 第172号住居跡 掘り方
	I区 第133号住居跡	I区 第172号住居跡 貯蔵穴
	I区 第134号住居跡	I区 第175号住居跡
	I区 第134号住居跡 カマド遺物出土状況	図版21 I区 第176号住居跡
	I区 第136・137号住居跡	I区 第177～179号住居跡
	I区 第139号住居跡 カマド遺物出土状況	I区 第178号住居跡
	I区 第143～145号住居跡	I区 第178号住居跡 カマド
	I区 第146号住居跡	I区 第180・181号住居跡・第78・79号土壇
図版17	I区 第146号住居跡 カマド	I区 第186号住居跡
	I区 第147号住居跡	I区 第186号住居跡 遺物出土状況
	I区 第149号住居跡	I区 第186号住居跡 カマド周辺遺物出土状況

図版22	I区 第186号住居跡 カマド	I区 第10・11号掘立柱建物跡
	I区 第187・188号住居跡	I区 第13号掘立柱建物跡
	I区 第187号住居跡 カマド	I区 第15号掘立柱建物跡
	I区 第189号住居跡	図版27 I区 第16号掘立柱建物跡
	I区 第190号住居跡	I区 第17号掘立柱建物跡
	I区 第193号住居跡	I区 第18号掘立柱建物跡
	I区 第194号住居跡	I区 第19号掘立柱建物跡
	I区 第194号住居跡 2号土壌	I区 第20号掘立柱建物跡
図版23	I区 第194・195号住居跡	I区 第21号掘立柱建物跡
	I区 第195号住居跡	I区 第21号掘立柱建物跡
	I区 第196号住居跡	I区 第22号掘立柱建物跡
	I区 第197・198号住居跡	図版28 I区 第9号溝跡
	I区 第200号住居跡	I区 第1号井戸跡
	I区 第200号住居跡 遺物出土状況	I区 第2号井戸跡 断面
	I区 第202・203号住居跡	I区 第2号井戸跡
	I区 第202・203号住居跡 遺物出土状況	I区 第2号井戸跡 遺物出土状況
図版24	I区 第202号住居跡 貯蔵穴	I区 第3号井戸跡
	I区 第203号住居跡 カマド	I区 第5号井戸跡
	I区 第204・205号住居跡	I区 第3号土壌
	I区 第205号住居跡 遺物出土状況	図版29 I区 第17号土壌 遺物出土状況
	I区 第207号住居跡	I区 第28号土壌
	I区 第208号住居跡	I区 第56号土壌
	I区 第208号住居跡 カマド	I区 第78号土壌
	I区 第209号住居跡	I区 第124号土壌 人骨出土状況
図版25	I区 第209号住居跡 カマド	I区 第2号性格不明遺構
	I区 第210号住居跡	図版30 大寄遺跡II区 全景
	I区 第211号住居跡	大寄遺跡II区 全景
	I区 第1号掘立柱建物跡	図版31 大寄遺跡II区 全景 (中心より南西)
	I区 第2号掘立柱建物跡	大寄遺跡II区 西側住居跡群 (西より)
	I区 第3号掘立柱建物跡	図版32 大寄遺跡II区 西側住居跡群 (北より)
	I区 第4・5号掘立柱建物跡	大寄遺跡II区 西側住居跡群 (北より)
	I区 第4・5号掘立柱建物跡	図版33 大寄遺跡II区 第1号横列跡周辺
図版26	I区 第4・5号掘立柱建物跡	大寄遺跡II区 第1号横列跡周辺
	I区 第6号掘立柱建物跡	図版34 II区 第1号住居跡
	I区 第7号掘立柱建物跡	II区 第4・5号住居跡
	I区 第8号掘立柱建物跡	II区 第7号住居跡
	I区 第9号掘立柱建物跡	II区 第7号住居跡 遺物出土状況

	Ⅱ区 第7号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第38号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第8号住居跡	Ⅱ区 第39号住居跡
	Ⅱ区 第9号住居跡	Ⅱ区 第39号住居跡 カマド
	Ⅱ区 第12号住居跡	Ⅱ区 第41号住居跡
図版35	Ⅱ区 第12号住居跡 カマド周辺遺物出土状況	Ⅱ区 第46号住居跡
	Ⅱ区 第13号住居跡	Ⅱ区 第48号住居跡
	Ⅱ区 第14号住居跡	Ⅱ区 第48号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第14号住居跡 遺物出土状況	図版40 Ⅱ区 第50・51号住居跡
	Ⅱ区 第15号住居跡	Ⅱ区 第53号住居跡
	Ⅱ区 第15号住居跡 カマド	Ⅱ区 第53号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第16号住居跡	Ⅱ区 第55号住居跡
	Ⅱ区 第16号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第55号住居跡・第7号井戸跡
図版36	Ⅱ区 第16号住居跡 カマド	Ⅱ区 第55号住居跡 カマド
	Ⅱ区 第18号住居跡	Ⅱ区 第56号住居跡・第25号井戸跡
	Ⅱ区 第18号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第57号住居跡
	Ⅱ区 第21号住居跡	図版41 Ⅱ区 第57号住居跡
	Ⅱ区 第21号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第57号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第21号住居跡 カマド	Ⅱ区 第57号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第23号住居跡	Ⅱ区 第58号住居跡
	Ⅱ区 第23号住居跡	Ⅱ区 第59号住居跡
図版37	Ⅱ区 第23号住居跡 カマド	Ⅱ区 第59号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第23号住居跡 貯蔵穴	Ⅱ区 第59号住居跡 カマド遺物出土状況
	Ⅱ区 第26号住居跡	Ⅱ区 第59号住居跡 カマド
	Ⅱ区 第26号住居跡 カマド	図版42 Ⅱ区 第60号住居跡
	Ⅱ区 第27号住居跡	Ⅱ区 第61・64・65号住居跡
	Ⅱ区 第28・29号住居跡	Ⅱ区 第61号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第28号住居跡	Ⅱ区 第61号住居跡 遺物出土状況
	Ⅱ区 第28号住居跡 カマド	Ⅱ区 第63号住居跡
図版38	Ⅱ区 第29号住居跡	Ⅱ区 第64号住居跡 カマド遺物出土状況
	Ⅱ区 第30号住居跡	Ⅱ区 第67号住居跡
	Ⅱ区 第30号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第70号住居跡
	Ⅱ区 第33号住居跡	図版43 Ⅱ区 第71号住居跡 1号鍛冶炉
	Ⅱ区 第35号住居跡	Ⅱ区 第71号住居跡 1号鍛冶炉
	Ⅱ区 第35号住居跡 カマド	Ⅱ区 第71号住居跡 2号鍛冶炉
	Ⅱ区 第36号住居跡	Ⅱ区 第75号住居跡
	Ⅱ区 第38号住居跡	Ⅱ区 第75号住居跡 カマド
図版39	Ⅱ区 第38号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第78号住居跡

	Ⅱ区 第78号住居跡	Ⅱ区 第123号住居跡
	Ⅱ区 第81号住居跡	Ⅱ区 第123号住居跡 カマド
図版44	Ⅱ区 第87号住居跡	Ⅱ区 第3号掘立柱建物跡
	Ⅱ区 第87号住居跡 カマド	Ⅱ区 第5号掘立柱建物跡
	Ⅱ区 第88号住居跡	Ⅱ区 第6号掘立柱建物跡
	Ⅱ区 第88号住居跡 カマド	図版49 Ⅱ区 第9号掘立柱建物跡
	Ⅱ区 第89号住居跡	Ⅱ区 第7号井戸跡
	Ⅱ区 第89・91～93号住居跡	Ⅱ区 第10号井戸跡
	Ⅱ区 第91～93号住居跡	Ⅱ区 第22号井戸跡
	Ⅱ区 第94・95号住居跡	Ⅱ区 第28号井戸跡 遺物出土状況
図版45	Ⅱ区 第94号住居跡 カマド	Ⅱ区 第1号溝跡 東側
	Ⅱ区 第95号住居跡	Ⅱ区 第1号土壇
	Ⅱ区 第95号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第1号土壇墓
	Ⅱ区 第95号住居跡 遺物出土状況	図版50 Ⅱ区 第1号土壇墓 遺物出土状況
	Ⅱ区 第96号住居跡	Ⅱ区 第1号土壇墓 遺物出土状況
	Ⅱ区 第97号住居跡	Ⅱ区 第1号性格不明遺構
	Ⅱ区 第100号住居跡	Ⅱ区 第2号性格不明遺構
	Ⅱ区 第100号住居跡 遺物出土状況	Ⅱ区 第2号性格不明遺構 遺物出土状況
図版46	Ⅱ区 第101号住居跡	Ⅱ区 第2号性格不明遺構 遺物出土状況
	Ⅱ区 第102号住居跡	Ⅱ区 第2号性格不明遺構 遺物出土状況
	Ⅱ区 第102～105号住居跡	図版51 Ⅰ区 第10・13～15・19号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第103号住居跡	図版52 Ⅰ区 第19・20・21号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第104号住居跡 貯蔵穴 遺物出土状況	図版53 Ⅰ区 第27・28・31・32・37号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第112・113号住居跡 遺物出土状況	図版54 Ⅰ区 第38・40・42～44号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第113号住居跡 遺物出土状況	図版55 Ⅰ区 第46・49・58・66～68号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第113号住居跡 遺物出土状況	図版56 Ⅰ区 第66～70号住居跡出土遺物
図版47	Ⅱ区 第114号住居跡	図版57 Ⅰ区 第70・75～78号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第114号住居跡 遺物出土状況	図版58 Ⅰ区 第82～85・90・92・97号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第114号住居跡 カマド 遺物出土状況	図版59 Ⅰ区 第99・100・102・103号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第118号住居跡	図版60 Ⅰ区 第103・104号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第118号住居跡 カマド 遺物出土状況	図版61 Ⅰ区 第108～110・112～116号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第119号住居跡	図版62 Ⅰ区 第116・119・120号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第120号住居跡	図版63 Ⅰ区 第122～124・126・131号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第120号住居跡 カマド 遺物出土状況	図版64 Ⅰ区 第131・132・134・136・139・144号住居跡出土遺物
図版48	Ⅱ区 第121号住居跡	図版65 Ⅰ区 第144・146・149号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第121号住居跡 カマド	図版66 Ⅰ区 第149・150・151号住居跡出土遺物
	Ⅱ区 第122号住居跡	

- 図版67 I区 第151号住居跡出土遺物
- 図版68 I区 第151号住居跡出土遺物
- 図版69 I区 第151号住居跡出土遺物
- 図版70 I区 第153号住居跡出土遺物
- 図版71 I区 第153・154号住居跡出土遺物
- 図版72 I区 第161・162・164号住居跡出土遺物
- 図版73 I区 第166・170～172号住居跡出土遺物
- 図版74 I区 第172・176号住居跡出土遺物
- 図版75 I区 第176・178・179号住居跡出土遺物
- 図版76 I区 第179・180・185・187・190号住居跡出土遺物
- 図版77 I区 第190・193・194号住居跡出土遺物
- 図版78 I区 第194・200号住居跡出土遺物
- 図版79 I区 第200・202号住居跡出土遺物
- 図版80 I区 第202・203・205・208・211号住居跡出土遺物
- 図版81 I区 第10号掘立柱建物跡・第7～9号溝跡出土遺物
- 図版82 I区 第9号溝跡・第3号井戸跡出土遺物
- 図版83 I区 第3号井戸跡・第3・17・54・79・105号土壇・第2号性格不明遺構出土遺物
- 図版84 I区 第2号性格不明遺構・ビット・グリッド出土遺物
- 図版85 I区 第14・19・20・31・32号住居跡出土遺物
- 図版86 I区 第45～48・56～58号住居跡出土遺物
- 図版87 I区 第58・59・66・70・90・91号住居跡出土遺物
- 図版88 I区 第90・91・93・97・103・111号住居跡出土遺物
- 図版89 I区 第112・118・119・134・144・151号住居跡出土遺物
- 図版90 I区 第151・153号住居跡出土遺物
- 図版91 I区 第153・156・166・176・179号住居跡出土遺物
- 図版92 I区 第179・185・194号住居跡出土遺物
- 図版93 I区 第14・195・200号住居跡・ビット出土遺物
- 図版94 I区 第14・20・32号住居跡出土遺物
- 図版95 I区 第31・32・48・56号住居跡出土遺物
- 図版96 I区 第99・146・151・153号住居跡出土遺物
- 図版97 I区 第153・179号住居跡出土遺物
- 図版98 I区 第179・185・190号住居跡出土遺物
- 図版99 I区 第3・200・202号住居跡出土遺物・グリッド出土縄文土器
- 図版100 I区 第28・30号土壇出土縄文土器
- 図版101 I区 グリッド出土縄文土器
- 図版102 I区 グリッド出土縄文土器
- 図版103 I区 グリッド出土縄文土器・石器
- 図版104 I区 第3号住居跡出土石器・I区出土磁石
- 図版105 I区 出土灰釉陶器・緑釉陶器
- 図版106 I区 出土鉄製品
- 図版107 I区 出土土鏃
I区 第89・112号住居跡出土櫛
- 図版108 I区 出土紡錘車・土玉・瓦・白玉
- 図版109 II区 第7・8・10・12号住居跡出土遺物
- 図版110 II区 第14・15号住居跡出土遺物
- 図版111 II区 第16・18号住居跡出土遺物
- 図版112 II区 第18・21号住居跡出土遺物
- 図版113 II区 第23号住居跡出土遺物
- 図版114 II区 第23号住居跡出土遺物
- 図版115 II区 第23・25・27・28・30・31・35号住居跡出土遺物
- 図版116 II区 第35～37・39・41号住居跡出土遺物
- 図版117 II区 第41・42・48・50・51・54号住居跡出土遺物
- 図版118 II区 第53・55～58号住居跡出土遺物
- 図版119 II区 第59・60号住居跡出土遺物
- 図版120 II区 第60・61・63・64号住居跡出土遺物
- 図版121 II区 第63・67・69・70号住居跡出土遺物
- 図版122 II区 第70・72・75号住居跡出土遺物
- 図版123 II区 第75・78・80～82号住居跡出土遺物
- 図版124 II区 第82・88・90号住居跡出土遺物
- 図版125 II区 第90・91・94号住居跡出土遺物
- 図版126 II区 第95～97・100号住居跡出土遺物
- 図版127 II区 第100・101号住居跡出土遺物

岡版128 II区 第103・104・110・112号住居跡出土遺物
岡版129 II区 第113～115号住居跡出土遺物
岡版130 II区 第117・118・120～122号住居跡・第2
号溝跡・第2・7号井戸跡出土遺物
岡版131 II区 第16号井戸跡出土遺物
岡版132 II区 第16・27号井戸跡・第36号土壇・第2号
性格不明遺構出土遺物
岡版133 II区 第2号性格不明遺構・ピット・グリッド
出土遺物
岡版134 II区 第16・21・30・36・41号住居跡出土遺物
岡版135 II区 第48・52・57・59号住居跡出土遺物
岡版136 II区 第59・61号住居跡出土遺物
岡版137 II区 第63・68・75・87・91号住居跡出土遺物
岡版138 II区 第95・101・103・104号住居跡出土遺物
岡版139 II区 第113・118・121号住居跡・第2号性格

不明遺構出土遺物

岡版140 II区 第21号住居跡出土遺物
岡版141 II区 第21号住居跡出土遺物
岡版142 II区 第23・57号住居跡出土遺物
岡版143 II区 第57・59号住居跡出土遺物
岡版144 II区 第59号住居跡出土遺物
岡版145 II区 第59・64・72・75号住居跡出土遺物
岡版146 II区 第95・101号住居跡出土遺物
岡版147 II区 第1号住居跡・グリッド出土縄文土器・
石器・II区出土砥石
岡版148 II区 出土土錘・灰釉陶器
岡版149 II区 出土灰釉陶器・金属製品
岡版150 II区 出土金属製品・紡錘車
岡版151 ヘラ書集成
岡版152 ヘラ書集成

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

岡部町は県北部に位置する面積30.57km²、人口約19,000人の農業を主体とした町で、特産品のブロッコリー生産は日本一を誇り、トウモロコシ、鶏卵、肥育牛も県下一の生産量である。

岡部町は、農業を中心とした町づくりから、産業構造の転換を図り、工業、商業、農業のバランスがとれた創造性豊かな活力に満ちた町づくりの実現に取り組んでいる。

事業の目玉となる道の駅おかげ、中宿歴史公園、古代倉庫復元など県指定史跡中宿遺跡を中心に史跡を活用した総合的な整備と、岡部駅周辺の区画整理事業が始まった。事業地内の熊野遺跡の事前発掘調査も実施され、和同開寶や三彩磁枕などの注目すべき出土品から、熊野遺跡は律令時代の橿原郡衙の中心地と推定されている。

こうした開発事業に対応するため、町は新たに平成5年度から文化財保護体制の整備と充実を図るため、教育委員会に文化財保護室を設置した。県はこれに応え県の職員を派遣して体制の強化を支援している。

一方、町は工業の導入振興によって税収の増大と雇用の促進をはかるため、榛澤地区に開発面積231,000m²の民間企業3社が進出する岡部町西部工業団地建設を誘致した。

工業団地建設予定地には埋蔵文化財包蔵地が存在するため、町は事業者とその取り扱いについて協議を重ねてきた。町教育委員会は平成8年9月から11月にかけて、予定地内の試掘調査を実施し、5ヵ所の遺跡の所在を確認した。遺跡の面積は合計約86,200m²に達することが明らかとなった。

町は遺跡を出来るだけ保存する方向で開発企業3社に設計変更を要望して、調査期間の短縮、調査費用の縮減をはかった。しかし、町文化財保護室の体制は区画整理や歴史公園建設、町史編纂事業等と並行して、工業団地の発掘調査に対応するだけの条件が整わず、

町主体となつての発掘調査計画は暗礁に乗り上げた。

行き詰まった状況を何とか打開するため、岡部町長は工業団地建設促進に伴う埋蔵文化財の発掘調査協力について、県の協力が得られるよう県教育委員会に陳情し、指導及び協力を依頼した。

町は苦しい財政状況の中で6人の専門職員を配し、文化財行政の積極的推進に努め先進的な体制づくりに努力している。県はこうした町の姿勢を高く評価した。この上さらに工業団地の発掘調査を実施するだけの余力は残されていないと判断した。そこで県文化財保護課は調査の受皿として財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「埋文事業団」とする。）が受託事業として実施できるかどうか検討に入り、関係各方面と調整を図り、受託条件等を整備した。そして局内の合意を得て市町村支援の観点から、埋文事業団が委託を受けて発掘調査を実施する旨、正式に町と事業者へ伝え、理解と協力を求めた。その方針は、調査主体を埋文事業団とし、町も調査組織に職員を派遣して全面協力体制をとるものである。さっそく関係者間で具体的な調査期間、方法、経費を中心に協議が行われた。

かくして平成8年12月19日付け教文第1246号で県から事業者の鹿島道路株式会社・株式会社横森製作所・東洋エクステリア株式会社あて、岡部町と事業委託契約の締結を、岡部町は埋文事業団と事業委託契約の手続きを行うよう通知した。

発掘調査の委託契約は、町が発掘調査から整理報告書刊行まで、契約上の義務と責任を履行することとして契約上の形を整えた。

発掘調査に先立ち事業者からは文化財保護法第57条の第2項に基づく発掘通知が、埋文事業団からは同法57条の第1項に基づく発掘調査届けが提出され、平成9年1月6日から沖田・大寄遺跡をかわきりに発掘調査が開始された。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

岡部町西部工業団地造成用地内に所在する周知の遺跡は、大寄遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡の3遺跡である。各遺跡の範囲及び遺構確認を目的とした試掘調査は岡部町教育委員会によって行われた。その結果前記2遺跡において遺構が確認された。さらに新たに沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡、沖田Ⅲ遺跡の存在が確認された。特に大寄遺跡、宮西遺跡については濃密に遺構が分布

することが明らかとなった。西浦北遺跡については、対象範囲では遺構は確認されなかった。以上の結果から前記5遺跡について調査を行うこととなった。

調査に当たっては文化財保護課、岡部町教育委員会、開発担当者代表である鹿島道路株式会社と秘密な協議を行い、各遺跡の調査時期と調査部分について決定した。各遺跡の調査期間及び面積は第1表に示したとおりである。

第1表 各遺跡の調査期間と面積

	平成8年度					平成9年度					平成10年度									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
大寄遺跡 34,100㎡	—————																			
沖田Ⅰ遺跡 3,700㎡	———																			
沖田Ⅱ遺跡 4,500㎡	————— ———																			
沖田Ⅲ遺跡 4,800㎡	————— —————																			
宮西遺跡 18,180㎡	————— —————																			

以下に本報告に関する遺跡の調査経過について記す。

大寄遺跡

大寄遺跡は、西部工場団地用地内に所在する遺跡群の中では、西北部に位置する。調査は平成9年1月6日から平成10年4月30日まで行われた。調査面積は約34,100㎡である。

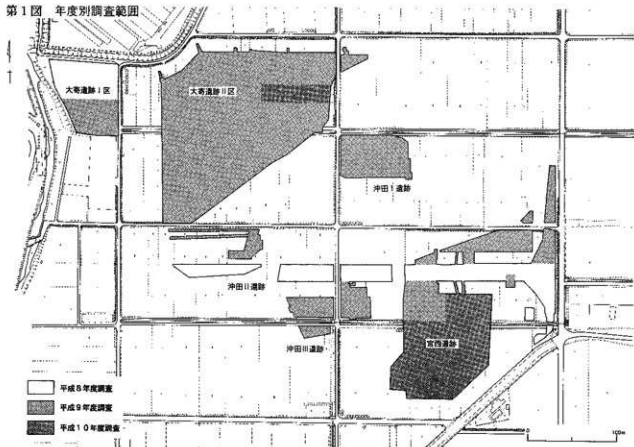
保存区域を挟んで西側のブロックを、便宜的に大寄遺跡Ⅰ区、東側のブロックをⅡ区と称する。調査は小山川に面した大寄遺跡Ⅰ区から開始された。最初に電機による表土掘削を行ったところ、遺跡全体に黒色土が厚く堆積し、住居跡が密集して重複していることが判明した。黒色土中に含まれていた住居跡の大半は、

掘り込みが浅く、中には床面の痕跡を残すみの住居跡も存在し、遺構確認及び精査は困難を極めた。

精査の結果、縄文時代前期の住居跡及び古墳時代から平安時代に至る住居跡が計21軒、掘立柱建物跡2棟等、多数の遺構とそれに伴う遺物が検出された。調査は平成9年度に継続し、6月図化作業、航空写真撮影を行い、調査は終了した。

大寄遺跡Ⅱ区は平成9年度4月、Ⅰ区と一部平行しながら調査を開始した。調査区南部は埋没谷が入り、遺構密度は比較的薄かった。特に南東部は地形が傾斜しており、居住域としては利用されなかったようである。反面、調査区北半は、相対的に高い地形を生かし

第1図 年度別調査範囲



て居住域として長期間使用されていた。遺構密度は極めて濃く、多数の遺構が複雑に重複しており、調査は難航した。平成11年3月、調査はほぼ終了、航空写真撮影を実施した。年度が変わって、平成11年4月、残った図化作業の一部と図面点検を行い、調査は全て終了した。

整理・報告書作成事業

整理事業は、平成10年4月1日から平成12年9月30日まで実施した。平成10年度は沖田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ以西の

整理と平行して実施した。遺物の水札、注記を経て、接合、復元、実測作業、遺構図の整理と二次原図の作成、トレース作業などを進めた。平成11年度は遺物の接合・復元作業と拓本採り、実測作業を本格的に進めた。また、遺構図のトレースはほぼ終了した。平成12年度、遺物の実測作業と平行してトレースを実施した。その後、遺構図・遺物図版の版組、遺物写真撮影、原稿執筆、遺物観察表等の作成を経て、9月割付を作成、入札。校正を行い、12月本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成8年度

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 古川 岡男
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

庶務課長 依田 透
主任 西沢 信行
主任 長滝 美智子
主任 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一大
調査第二課長 大和 修
主任 査 元井 茂
主任 査 橋本 勉
主任 査 磯崎 一
主任 調査員 木戸 春夫
主任 調査員 宮瀬 由紀子

同部町教育委員会

主任 鳥羽 政之
主任 宮本 直樹

平成9年度

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 塚野 博
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

庶務課長 依田 透
主任 西沢 信行
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

調査部

調査部副部長 今泉 泰之
調査第一課長 井上 尚明
主任 査 橋本 勉
主任 査 中村 倉司
主任 査 磯崎 一
主任 調査員 富田 和夫
主任 調査員 木戸 春夫

同部町教育委員会

主任 事 平田 重之
臨時職員 松田 哲

平成10年度

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

庶務課長 金子 隆
主任 査 田中 裕二
主任 任 長滝 美智子
主任 任 腰塚 雄二

専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 任 江田 和美
主任 任 福田 昭美
主任 任 菊池 久

調査部

調査部長 谷井 彪

依田 透
西沢 信行
長滝 美智子
腰塚 雄二
関野 栄一
江田 和美
福田 昭美
菊池 久

今泉 泰之
井上 尚明
橋本 勉
中村 倉司
磯崎 一
富田 和夫
木戸 春夫

平田 重之
松田 哲

荒井 桂
飯塚 誠一郎
鈴木 進

金子 隆
田中 裕二
長滝 美智子
腰塚 雄二
関野 栄一
江田 和美
福田 昭美
菊池 久

調査部副部長
 調査第二課長
 主任 査
 主任 調査員
 主任 調査員
 岡部教育委員会
 臨時職員

水村 季行
 井上 尚明
 磯崎 一
 石坂 俊郎
 福田 聖
 斎藤 欣延

専門調査員兼経理課長
 主任
 主任
 主任
 庶務課長
 主任 査
 主任 任

関野 栄一
 福田 昭美
 腰塚 雄二
 菊池 久隆
 金子 隆
 田中 裕二
 江田 和美
 長 滝 美智子

(2) 整理・報告書作成事業

平成10年度

理事長
 副理事長
 常務理事兼管理部長
 管理部

荒井 桂
 飯塚 誠一郎
 鈴木 進

庶務課長
 主任 査
 主任
 主任
 専門調査員兼経理課長
 主任 任
 主任 任
 主任 任

金子 隆
 田中 裕二
 長 滝 美智子
 腰塚 雄二
 関野 栄一
 江田 和美
 福田 昭美
 菊池 久隆

資料部
 資料部長
 専門調査員兼資料部副部長
 専門調査員
 統括調査員

高橋 一大
 石岡 憲雄
 大和 修
 磯崎 一

平成12年度

理事長
 副理事長
 常務理事兼管理部長
 管理部

中野 健一
 飯塚 誠一郎
 広木 卓

管理部副部長
 主席(庶務担当)
 主席(施設担当)
 主任
 主任(経理担当)
 主任
 主任
 主任
 主任

関野 栄一
 阿部 正浩
 野中 廣幸
 菊池 久隆
 江田 和美
 長 滝 美智子
 福田 昭美
 腰塚 雄二

資料部
 資料部長
 主任兼資料部副部長
 資料整理第二課長
 主任 調査員

増田 逸朗
 小久保 徹
 市川 修
 木戸 春夫

調査部

調査部長
 資料部副部長
 主席調査員(資料整理担当)
 統括調査員

高橋 一大
 鈴木 敏昭
 磯崎 一
 富田 和夫

平成11年度

理事長
 副理事長
 常務理事兼管理部長
 管理部

荒井 桂
 飯塚 誠一郎
 広木 卓

II 遺跡群の立地と環境

1. 地理的環境

岡部町西部に粟田地造成用地にかかる遺跡群は岡部町大字横沢地内に位置する。この地域は岡部町の中でも最も西寄りにあたり、西側は小山川を挟んで本庄市と接する。最寄の交通はJR岡部駅で、駅から西北西に約3.2kmに位置する。周囲は畑と水田の広がる農村地帯で大規模な養鶏も行われている。特に畑作ではトウモロコシとブロッコリーが広く栽培され、岡部町のブロッコリーは日本一の生産量を誇る。

遺跡群の所在する岡部町は、埼玉県北西部に位置する。荒川以北のこの地域は、西は神流川、北は利根川によって区切られ、東は安沼低地に続く。全体的な傾斜は南西から北東に向かって低くなる。したがって等高線は利根川の流向にはほぼ平行し、利根川に向かって高度を減じている。

河川は荒川左岸の上武山地が分水嶺となり、南面は荒川に注ぐが、北面は利根川に流れる。本地域にかかわる河川は女堀川、見馴川（下流で小山川）、志戸川、

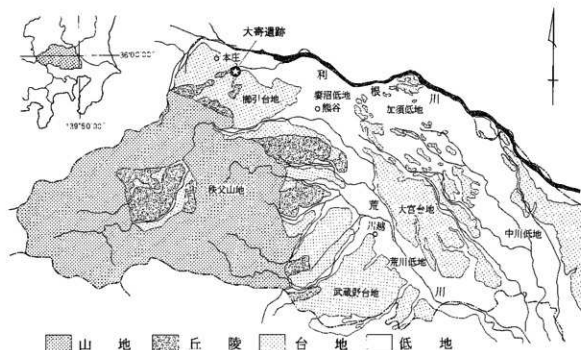
藤治川等があり、いずれも傾斜にしたがっておおむね北東流し、利根川に注ぐ。

本地域の上武山地はその北東縁にあたり、見馴川を境として西は御荷鈴山地、東は不動山に分かれる。

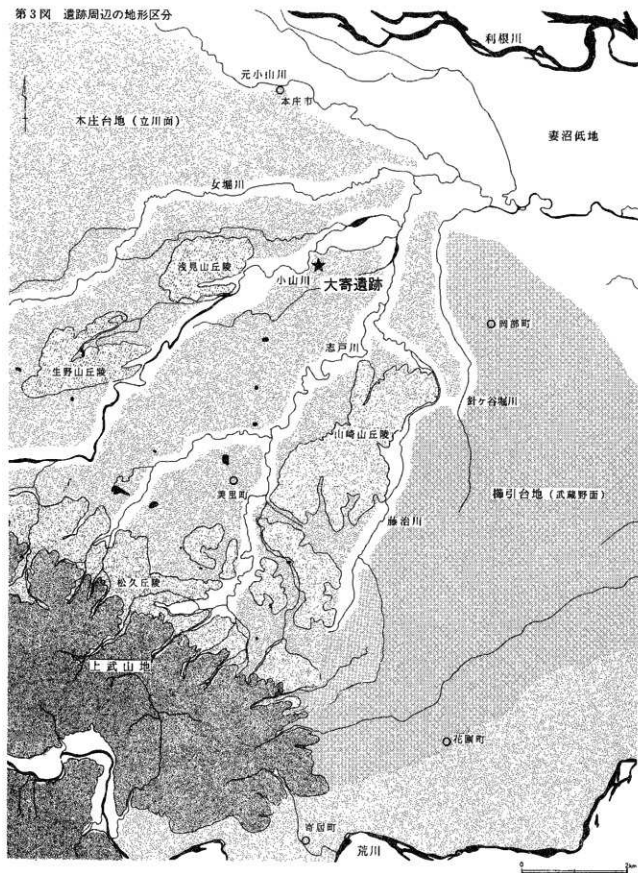
山地に続く丘陵は山麓に沿って帯状に展開するが、この丘陵地帯も見馴川を境として西は見玉丘陵、東は松久丘陵に区分される。さらにこれらの丘陵は、小河川によって浸食され、北東方向へ伸びる半島状の地形を呈する。丘陵の標高は100～130mを計る。丘陵に続く台地部分には見馴川の西側に生野山（139m）、浅見山（105m）、東側には山崎山（117m）と呼ばれる残丘がある。（山崎山残丘は北半を山崎山、南半を諏訪山と呼ばれる。）これらの残丘は丘陵の発達方向と一致することから前者は見玉丘陵と、後者は松久丘陵と一連のものであるとされる。残丘はこの他に仙心山残丘（深谷市）、観音山残丘（熊谷市）がある。

台地は櫛引台地と本庄台地に分けられる。いずれも扇状地形を呈し本庄台地は神流川、櫛引台地は荒川に

第2図 埼玉県の地形



第3図 遺跡周辺の地形区分



よって生成された扇状地性台地である。

本庄台地は神川町池田付近が扇頂部にあたり標高約110mを計る。そこから北東方向に高度を減じ、本庄市諏訪町では約50mとなる。扇端は急崖となって婁沼低地と接する。西は神流川を境とし、東は志戸川支流の藤治川で櫛引台地と面する。女堰川以来の地域は見瀬川、志戸川などによる浸食が進んでおり、低地として扇状地と自然堤防に分類されることもあるが(註1)、自然堤防とされる部分については本来の台地が浸食を受け、その上に堆積物がたまったものと推定される。本遺跡群はこのような地形に立地している。発掘調査では遺構の確認される面はローム面であり、基本的には集落はこのような台地上に形成されている。

櫛引台地は寄居町付近を扇頂部とし扇端までの標高は約100~35mである。西は藤治川で本庄台地に面し、南は荒川で区切られる。扇端部は西寄りの岡部町西田や岡付近では、本庄台地と同じように急崖となって婁沼低地に続く。その東の普賢寺や深谷市西島付近は比較的緩やかに低地に移行するが、更に東の深谷市東方近辺から熊谷市西別府にかけてはまた急崖となる。扇端部には湧水が多く、古来人々の生活の場となっている。台地中央部は極めて平坦で起伏に乏しく、わずかに仙心山(98m)、観音山(77m)の小残丘が見られる。河川は少なく、唐沢川などの小河川が見られるが浸食は進んでいない。台地面は2面に分けられ、高い面は櫛引面、南の低い面は寄居面と呼ばれる。寄居面は荒川によって櫛引面の南側が浸食された段丘面である。

低地は婁沼低地と呼ばれ、利根川の乱流によって形成された低地である。南は前述の台地に接し、北は利根川で限られ、東は加須低地へと続く。低地内にはおおむね利根川の流向に沿って多くの自然堤防が発達している。現在でも集落はこれらの自然堤防上に営まれ、「矢島」・「大家島」などの地名に地形の特徴が表されている。

第4図は、明治18年測量の迅速図に埼玉県地質図等を参考にして作成した地形分類図である。細部については正確さに欠ける部分もあるので、正確には専門書

を参考にされたい。

2. 周辺の遺跡

この地域は多くの遺跡が存在する所として知られており、特に古墳時代以降の遺跡はその量とともに内容において県内屈指のものである。調査件数も多く既に数多くの報告書等が刊行され歴史的背景についても分析が加えられている。ここでは本遺跡群周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡は丘陵部に立地している。現在のところ、他時期の調査の折に単独で遺物が出土しているだけである。岡部町でこの時期の遺物を出土したのは北坂遺跡1カ所である。ナイフ形石器、彫器、尖頭器が出土している。これらの遺跡は台地上でありながらもそれぞれ河川に近い台地の縁辺部周辺に立地している。深谷市を含む櫛引台地ではこの時期の遺物は検出されていない。

縄文時代草創期~早期の遺跡は主に美里町などの丘陵部を中心に分布する。本庄市においても、浅見山残丘に見られる。岡部町では櫛引台地の縁辺部に立地する西谷遺跡、水久保遺跡から押印縄文、爪形文等、清水谷遺跡では押型文、捺底文系土器片が、東光寺裏遺跡では微隆起線文、爪形文が出土している。この時期の遺跡は丘陵部に集中が見られ、台地部におけるありかたは旧石器のそれと共通するものがある。

前期になると丘陵部に集中する傾向は変わらないが、丘陵部における遺跡数はほぼ倍増する。またこの時期には丘陵の奥から山地にかかる場所まで遺跡が見られるようになる。台地部では依然として密度は薄いが、荒川左岸の寄居町、花園町にも分布が広がる。また、婁沼低地に面する台地先端部、さらに婁沼低地の自然堤防上でも調査されている。

榛沢遺跡群周辺は見瀬川と志戸川に挟まれた台地上に立し、四十坂遺跡、西浦北遺跡で岡山式期の住居跡、茶臼山遺跡では諸磯a式期の土壌、清水谷遺跡では諸磯b式期の遺物が、東光寺裏遺跡では諸磯b式期の住居跡3軒が検出され、菅原遺跡では諸磯c式期の

土城が検出されている。北坂遺跡でも黒浜式期および
諸磯式期の遺物が若干検出されている。

中期には棚形台地縁辺部に点々と遺跡が見られるよ
うになり、さらには今まで遺跡密度の薄かった台地内

部にもその痕跡が見られる。岡部町清水谷遺跡では加
曾利E式土器が、原ヶ谷戸遺跡、大寄B遺跡では加曾
利E式期の埋設土器が検出され、水窪遺跡、菅原遺跡
はこの時期の拠点的な集落と考えられる。北坂遺跡に

第4図 周辺の遺跡



においても加曾利B式期の遺物が少量ながら出土している。

後・晩期の遺跡はあまり調査されていないが分布の傾向は、前代において丘陵から台地にかけて集中的に展開していたものが散在するようになり、代って古地縁辺部及び低地部に広がりが見られるようになる。特に深谷市域で国道17号深谷バイパスの調査により、妻沼低地においても該期の遺跡の存在が確認されるようになった。このような現象には生活基盤の大きな変化を窺わせるものがある。同部原川ヶ谷遺跡では住居跡1軒が検出され、儀礼に伴う遺物や装飾品などが多量に出土している。砂山前遺跡では堀之内式期の住居跡が1軒、上宿遺跡では同期の敷石住居が検出されている。東谷遺跡では加曾利B式が、北坂遺跡では堀之内I式土器破片が少量出土している。四十坂下遺跡では住居跡が検出されている。菅原遺跡でもこの時期の遺物が少量ながら検出されている。

弥生時代の調査事例は少ないが、引き続き前代の遺跡分布と似たような傾向を取ると思われる。現状では浅見山丘陵および見馴川周辺の扇状地部分に比較的多くの調査事例が見られる。深谷市、熊谷市域では土敷免遺跡、横間栗遺跡等があり、土敷免遺跡では遺賀川式土器が検出されており、古い時期の資料として注目される。近辺では四十坂遺跡で再葬墓が検出され、変形I字文を施した土器が出土している。大寄B遺跡では中期・後期の住居跡各1軒が検出されている。石崎A遺跡では榎田式文系や吉ヶ谷系土器が出土している。古墳時代に入ると飛躍的に遺跡数が増加する。

集落は原ヶ谷F遺跡、大寄B遺跡、石崎B遺跡、水窪遺跡、六反田遺跡、滝下遺跡等で前期の住居跡が検出されている。中期の住居跡は六反田遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡、東光寺裏遺跡等で検出されている。後期には六反田遺跡、砂山前遺跡などの大規模な集落が営まれる。

また、この周辺一帯は方形周溝墓、古墳が密に分布する地域である。石崎B遺跡は美里町の南志渡川遺跡とともに前方後方形周溝墓がよく知られている。原ヶ

谷F遺跡や大寄B遺跡では方形周溝墓が検出されている。古式の古墳としては見玉町鷺山古墳があり、ついで美里町長坂型大塚古墳、川輪型天塚古墳があげられる。安光寺遺跡、千光寺遺跡や、台地先端部の四十坂遺跡、中宿遺跡にも方形墳が検出されている。

その後各所に群集墳が形成される。遺跡周辺では本庄市西五十丁古墳群、東五十丁古墳群、西山古墳群、千光寺古墳群、四ノ塚古墳群などがある。また、宮西遺跡では古墳跡が検出され、平安時代の住居跡では埴輪が甕の袖として転用されていたことなどから、極沢地区内にも古墳群が存在することが予想される。主要な古墳としては前記の他に浅間山古墳、寅御荷塚古墳、御手長山古墳等がある。これらの古墳を造り得る社会を支える生産基盤は、主に周辺の低地部に求められる。石崎A遺跡では、既に古墳時代前期から灌漑を目的とした施設が造られていたと見られ、早くからこの地域に、水に対する管理技術が取り入れられていたことがわかる。このような伝統的な生産基盤の上に条里制が施行されるようになる。遺跡周辺には見玉条里、十条条里、同部条里などがあり、調査例も増えている。

奈良・平安時代になると本遺跡群を含む小山川中流域の極沢、後極沢に加えて新たに、櫛引台地先端部の同地区に集落が営まれるようになる。前者には六反田遺跡ををはじめとして今回調査された大寄遺跡、宮西遺跡、石崎遺跡や重要文化財に指定されている緑釉手付瓶等を出土した西浦北遺跡がある。後者には櫛沢郡正倉跡に推定される県指定史跡中宿遺跡があり、7世紀後半から9世紀にかけての倉庫跡が検出されている。

中宿遺跡の南に広がる熊野遺跡は中宿遺跡とともに郡衙に関連する遺跡と推定されており、前代までと違った遺跡の有り方を示している。熊野遺跡からは大型の掘立柱建物跡や石組井戸、道路跡のほか、多数の住居跡が検出されている。遺物面では多数の畿内産土師器、唐三彩の陶枕、円面硯、帯金具など一般集落からは出土例の少ない遺物がみられ、郡衙を取り巻く集落の様相が判明しつつある。いずれ、政庁、正倉とともに周辺部を含めた具体的な都府衙が明らかになるに違

周辺の遺跡

1 沖田I遺跡	2 沖田II遺跡	3 沖田III遺跡	4 大寄遺跡	5 西宮遺跡
6 西浦北遺跡	7 稲荷塚遺跡	8 六反田遺跡	9 東光寺裏遺跡	10 伊勢塚遺跡
11 石崎A遺跡	12 石崎B遺跡	13 地神祇A遺跡	14 地神祇B遺跡	15 原ヶ谷戸遺跡
16 四ノ坂遺跡	17 新井遺跡	18 水窪遺跡	19 上宿遺跡	20 滝下遺跡
21 中宿遺跡	22 砂山前遺跡	23 岡部桑里遺跡	24 岡遺跡	25 樋詰遺跡
26 内手遺跡	27 熊野遺跡	28 新田遺跡	29 菅原遺跡	30 上原遺跡
31 西能ヶ谷津遺跡	32 水久保遺跡	33 西谷遺跡	34 石原山瓦窯跡	35 霧山祭祀遺跡
36 北坂遺跡	37 田端屋敷遺跡	38 笠ヶ谷戸遺跡	39 鎌塚遺跡	40 元富遺跡
41 七色塚遺跡	42 久下東遺跡	43 山根遺跡	44 大久保山遺跡	45 東谷遺跡
46 有勝寺北裏遺跡	47 古川端遺跡	48 村後遺跡	49 口の森遺跡	50 向居遺跡
51 志波川遺跡	52 南志波川遺跡	53 石神遺跡	54 清水谷遺跡	55 安光寺遺跡
56 砥麩神社前遺跡	57 甘粕山遺跡群	58 神明ヶ谷戸遺跡	59 普門寺西山遺跡	60 こぶヶ谷戸祭祀遺跡
61 峯遺跡	62 用土平遺跡	63 島の上遺跡	64 矢島南遺跡	65 川輪聖天塚古墳
66 長板聖天塚古墳	67 公卿塚古墳	68 前山1号墳	69 前山2号墳	70 浅間山古墳
61 寅稲荷古墳	72 御手長山古墳	73 愛宕神社古墳	A 塚合古墳群	B 御堂坂古墳群
C 鶴の森古墳群	D 東五十子古墳群	E 西五十子古墳群	F 東冨田古墳群	G 浅見山古墳群
H 塚本山古墳群	I 西田古墳群	J 四十坂古墳群	K 水窪古墳群	L 白山古墳群
M 上原古墳群	N 中南古墳群	O 後橋沢古墳群	P 茶白山古墳群	Q 千光寺古墳群
R 西山古墳群	S 諏訪山古墳群	T 路山古墳群	U 大明神古墳群	V 木部山古墳群
W 羽黒山古墳群	X 普門寺古墳群	Y 猪俣北古墳群	Z 猪俣南古墳群	

いない。

10世紀以降については本中市久保山遺跡、美里町向田遺跡、中宿遺跡等て竪穴住居跡、東光寺裏遺跡で羽釜などが出土している。今回の調査で人寄遺跡から該期の住居跡がまとまって検出されている。古代後半

期の集落構造を具体的に窺うことのできる資料であり、その意義は大きい。

註1 「土地分類基本調査」では「見脚川低地」として細区分しているが、『新編埼玉県史別編3』においてはなされてない。

参考文献

- 埼玉県 1978 「土地分類基本調査 高崎・深谷」
- 埼玉県 1982 「新編埼玉県史」資料編1
- 埼玉県 1982 「新編埼玉県史」資料編2
- 堀口萬古徳 1986 「埼玉県の地彩と地質」 『新編埼玉県史 別編3』 埼玉県
- 堀口萬古徳 1987 「荒川流域の地形」 『荒川 自然』 埼玉県
- 本中市 1976 「本中市史」 資料編
- 増山逸朗徳 1986 「埼玉県古式古墳調査報告書」 埼玉県史編さん室
- 美里町 1986 「美里町史」 通史編
- 村本達郎 1975 「埼玉県地理図集」

上記以外の文献は文末に記載した。なお、本章は、木戸春夫 1998『沖田I／沖田II／沖田III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第231集を一部改変のうえ転載した。

Ⅲ 遺跡群の概要

1. 遺跡群の概要

岡部調西部工業地は大宮橋沢地内に位置する。この地域は本上古地が小山川と志月川によって開析された扇状地である。遺構の検出される面は基本的にローム面であり通常の古地でのあり方と同じであるが、遺跡は時に埋安河川を含みその埋積上によって複雑な状況を示す。本遺跡群は橋沢地内の西寄りに当たり、小山川に面して本庄市と接している。小山川と台地との比高差は3~4mを測る。北側は小山川の古い流路によって形成されたと思われる急勾配の斜面によって低位面に続く。台地上は旧河川の流路跡が南西から北東方向に伸びるが、その痕跡をたどるのは現状では困難となりつつある。

この地域には六反田遺跡、西浦北遺跡を始めとして多くの遺跡が存在し、橋沢遺跡群の名称と呼ばれている。六反田遺跡は古墳時代前期から続く集落で、150軒以上の竪穴住居跡が調査されている。稲荷家遺跡、大寄A遺跡、大寄B遺跡、西浦北遺跡、宮西遺跡は昭和40年代の圃場整備に伴って一部が調査されている。

大寄A遺跡は水路部分の調査で、大寄遺跡Ⅱ区中央付近を東西に貫通する。大寄B遺跡は圃場整備によって完全に削平された部分の調査である。ここからは縄文時代中期の埋設土器、弥生時代中期及び後期の住居跡、古墳時代前期から奈良時代までの住居跡および方形周溝墓などが検出されている(佐藤1979)。この2遺跡はいずれも現在の大寄遺跡に含まれるもので、遺跡は大寄B遺跡の所在した古地縁辺を北限とし、南西方向に伸びる微高地全面に及ぶと考えられる。

西浦北遺跡は、縄文時代前期及び中期の住居跡、古墳時代から平安時代の住居跡および製鉄・精錬遺構などが検出され(佐藤1979)、出土した緑釉手付瓶と灰釉長頸瓶は重要文化財に指定されている。西浦北遺跡は独立した弧状を呈する畑の高まり部分に遺構が集中していたと思われる。遺跡南側の宮西遺跡とは埋安河川をもって地形的には独立しているが、内容的には共通

する部分が多いと思われる。今回の調査では遺跡西側の低い部分が用地内にかかっていたが、試掘調査の結果では遺構は確認できなかった。遺跡の範囲が東側にどのように広がるのか、埋没地形が複雑であるだけに注目されることである。

宮西遺跡は大寄A遺跡と同じく水路部分の調査であった。その一部が今回の調査区内に含まれている。遺跡は前述の古流路を西限として東に広がる。東側一帯は、大寄八幡神社があり、現在も集落が広がる居住域で、遺跡の範囲も相当の広がりを持つものと推測される。今回の調査では新たに沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡、沖田Ⅲ遺跡が確認された。これらの遺跡は大寄遺跡と宮西遺跡の間にあるやや低い水田部分にあり集落跡の存在は予想されていなかったところである。試掘調査の結果、このような比較的低い部分にも小規模な微高地が確認され遺構が存在することが明らかとなった。このような小規模な微高地は開発が進んだ現在では地形図に表れることは殆どないが、沖田Ⅰ遺跡については昭和36年の地図には畑としての高まりを見ることが出来る。

今回の調査で検出された各遺跡の内容は以下のとおりである。

沖田Ⅰ遺跡

縄文時代前期から平安時代の遺構、遺物が検出された。縄文時代の遺構は前期の竪穴住居跡6軒、土壇7基である。遺構は検出されなかったが中期の土器片もわずかながら出土した。古墳時代に属するものは竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、土壇5基、溝跡10条である。いずれも後期に属する。平安時代のものは竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土壇18基である。

沖田Ⅱ遺跡

土壇3基、溝跡1条、河川跡1条、ピットが検出された。遺物は縄文時代前期及び平安時代のものが出土

している。

沖田川遺跡

縄文時代前期から近世までの遺構、遺物が検出された。縄文時代に属するものは前期の竪穴住居跡3軒である。古墳時代前期では方形周溝墓7基、竪穴状遺構5基、後期では竪穴住居跡10軒、溝跡14条である。平安時代は井戸跡1基、道路状遺構1条、溝跡2条、土壇12基である。中世以降の所産としては土壇墓が1基検出されている。

2. 大寄遺跡の概要

大寄遺跡は工業団地予定地の北西部に位置する。今回調査対象となった5遺跡の内でも、最大規模の遺跡である。遺跡は標高約53～55m、概ね平坦な台地上に立地する。遺跡の西側及び北西側は身願川（小山川）によって形成された崖線によって画かれている。遺跡南東部は、西南西から東北東に抜ける浅い埋没谷が入り、標高は若干低くなっている。この低地帯を挟んで南側には沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡が形成されている。

遺構分布の面からも、この低地帯とその北側にある相対的に高位な台地部では大きな相違が認められる。Ⅱ区南側に広がる低地帯は、遺構密度が薄く、古墳時代の住居跡が数軒と、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が数棟分布する程度で、居住エリアとしては不適地であったようである。一方、北側の台地部では竪穴住居跡、掘立柱建物跡など、極めて多数の遺構が複雑に重複した状態で検出された。縄文時代前期の住居跡を嚆矢とし、古墳時代中期の土壇、古墳時代後期～平安時代に至る住居跡、中世の建物や井戸跡、また遺構としては検出されなかったが、縄文時代中期・後期、弥生時代や古墳時代前期の土器もあり、長期にわたり居住適地として利用されたことが判明した。

さて、大寄遺跡Ⅰ・Ⅱ区から検出された遺構は、竪穴住居跡485軒、掘立柱建物跡98棟、井戸跡64基、土壇340基、土壇墓8基、溝跡57条、柵列10条等である。竪穴住居跡は縄文時代前期のものが4軒、不明2軒、古墳時代後期～平安時代に至るものが479軒検出された。縄文時代の集落は群としての明確なまとまりをもたず、

宮西遺跡

縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が検出された。中心となる時期は平安時代である。奈良時代の区画施設や粘土採掘場、平安時代の製鉄炉跡、道路跡、平安時代と推定される小倉銅仏等も出土している。調査時における遺構数は竪穴住居跡327軒、掘立柱建物跡36棟、井戸跡28基、土壇264基、溝跡60条、古墳跡1基、道路状遺構3条、粘土採掘場9基、製鉄炉跡2基などである。

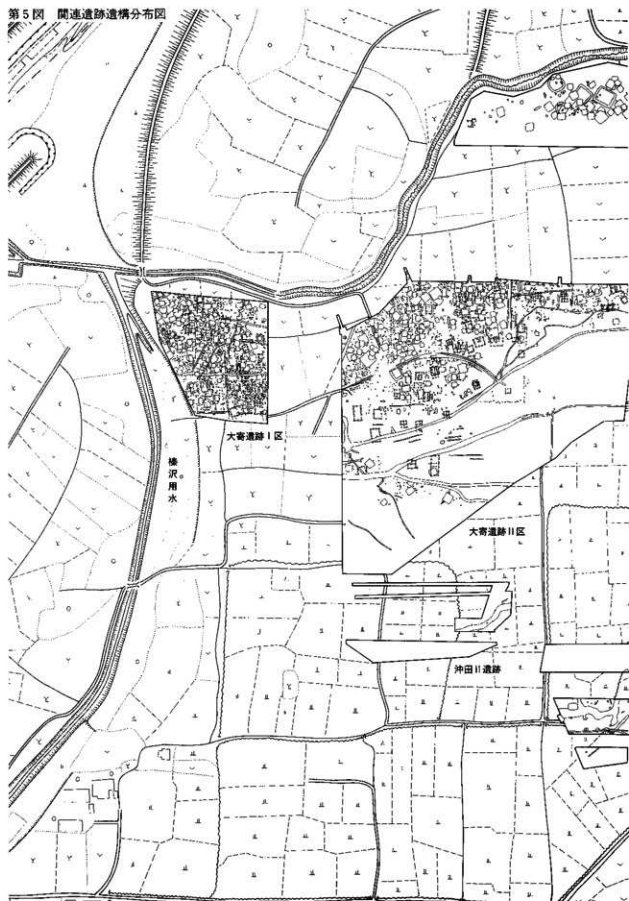
散在的である。古墳時代後期、特に6世紀前半代に位置づけられる集落は、Ⅱ区南端の低地部に散在する。この段階では北側の台地部には集落が営まれない。北側に集落が進出するのは6世紀末葉～7世紀前後である。以降10世紀後半～11世紀に至る頃まで、安定的に集落域として機能したものと考えられる。特に10世紀後半以降の集落が多い点は本遺跡の最大の特徴といえ、該期の集落としては県内でも最大規模の一例である。

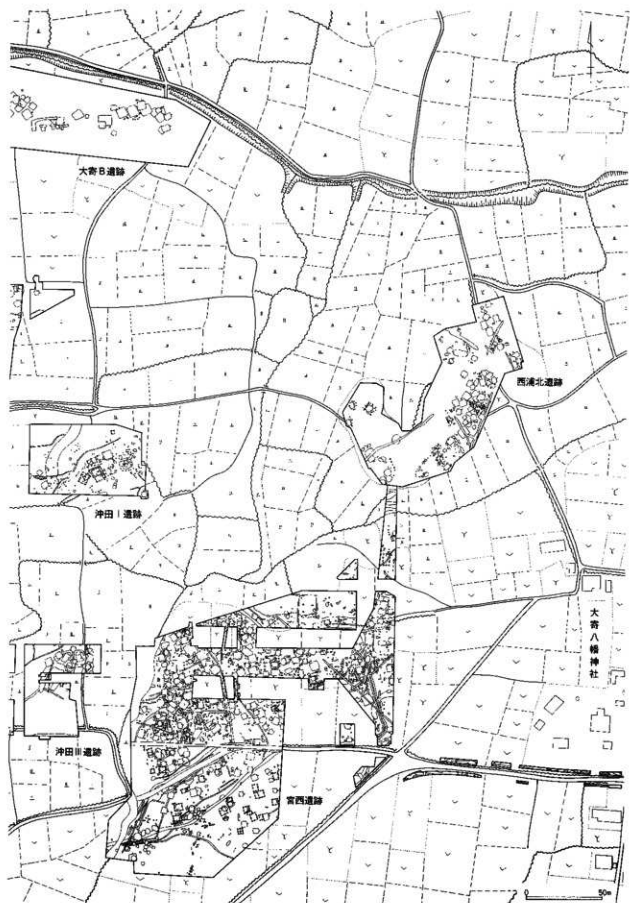
中世段階の様相はあまり明確ではない。Ⅰ区南東部に方形で小型の柱穴が密集して検出され、おそらく、掘立柱建物跡群が存在したと思われるが、具体的に建物として捉えられなかった。また、中世段階と思われる井戸跡、土壇がⅠ区・Ⅱ区双方に検出され、Ⅱ区には中世段階と推定される柵列、火葬臺（茶毘跡）が検出された。

近世以降は集落として利用された痕跡は認められなかった。おそらく現代に至るまで、畑や園場等の生産域として土地利用がなされたものと推定される。

大寄遺跡、宮西遺跡に関しては、今後の整理の状況により遺構数は変動することが予想される。しかし、大寄遺跡を含めた柵沢遺跡群は、古代の集落としては熊野・中宿遺跡を含めた岡遺跡群と並ぶ大集落であることは疑いない。「極沢」の遺跡地でもあり、彼々の関連性は勿論、古代柵沢部の動態を解明する上で、また中世社会への移行を考える際に欠くべからざる遺跡といえよう。

第5図 関連遺跡遺構分布図





IV 大寄遺跡 I 区の遺構と遺物

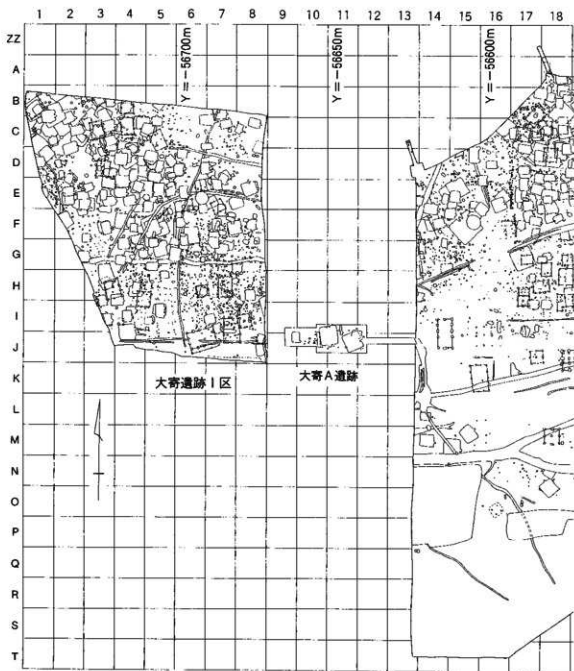
1. I 区の概観

大寄遺跡 I 区は遺跡の西側のブロックで、標高は約 55m 前後である。調査区の西側と北側には小山川によって形成された段丘岸に挟られており、遺跡の限界を示している。調査区内はほぼ平坦な地形で、全面に亘

り遺構が分布している。特に北半部は濃密に遺構が分布しており、複雑に重複した状況であった。

検出された遺構は竪穴住居跡 212 軒、掘立柱建物跡 22 棟、井戸跡 8 基、溝跡 23 条、土塀 142 基、欄列跡 6

第 6 図 大寄遺跡全測図

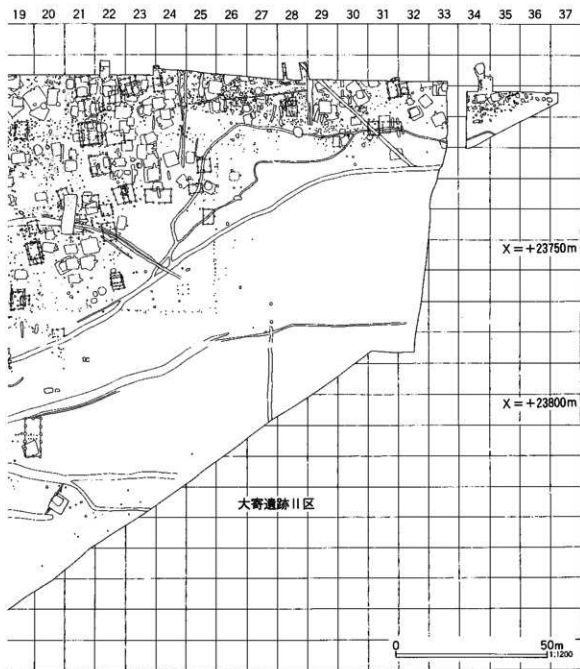


糸、性格不明遺構5基などがある。竪穴住居跡はほぼ全面に分布するが、特に中央から北半に集中する傾向がある。

縄文時代の住居跡は3軒検出された。時期的には前期、関山期のものが1軒、時期が不明確なものか2軒である。いずれも調査区北西部にまとまっている。関山期の第3号住居跡は長方形で、壁柱穴が3連。

古墳時代後期～平安時代の住居跡は209軒検出された。古墳時代後期の住居跡は6世紀末葉～7世紀初頭頃を初現とするようである。その後、7世紀、8・9世紀を経て、10世紀後半～11世紀に至るまで継続的に住居跡が構築される。

6世紀末葉～7世紀前半代の住居跡は、調査区北半にあり、南城には分布しない。北西部の第20・21・27・57

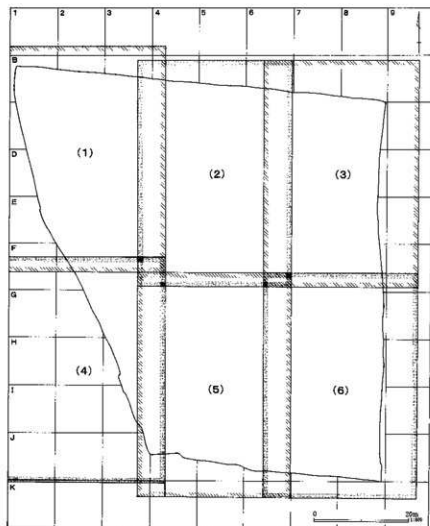


大寄I区

第7図 大寄遺跡I区遺構配置図



第8図 大帯遺跡Ⅰ区全測図区別



号住居跡を中心とする一群と、東端の第51・187号住居跡からなる一群に分かれ、両者の中間地帯にはみられない。第20号住居跡は一辺6.7mの大型住居跡である。7世紀後半～8世紀初頭段階になると分布域は調査区全体に広がり、構成住居数も増加する傾向にある。8世紀前半～後半頃には、調査区中央から西半にかけて分布する。9世紀代になると、南東部に希薄であるが、他のエリアには住居跡群が広がっている。特に、第67号住居跡を中心とする一角にはほぼ同時期、あるいは近接した段階の住居跡が数軒重複して構築されていた。10世紀初頭までは9世紀代の集落様相の延長と考えても良い。10世紀前半になると構成住居数が激減する。調査区北東部にある第132号住居跡を該期としたが、

他には明瞭に抽出できない。

10世紀後半以降になると、調査区全域に集落が拡大する。ロクロ上器高台檜や小皿、羽釜など土器様相も前代と比較して大きく変化するが、住居構造も様変わりする。カマドは東壁に付く場合が多いが、それもコーナー部に寄った位置に設けられ、カマドに正対する壁のコーナーにピット（カマド対向ピットと呼ぶ）をもつ例が多い。また、壁の一面に張り出し状の施設を設ける例も散見される。住居形態は横長あるいは縦長の長方形を取る例が非常に増える点も特色に挙げられよう。

孤立柱建物跡は22棟検出された。住居跡との重複が激しく、時期を明確にできなかったものが多い。大半は古代に属するものと考えている。

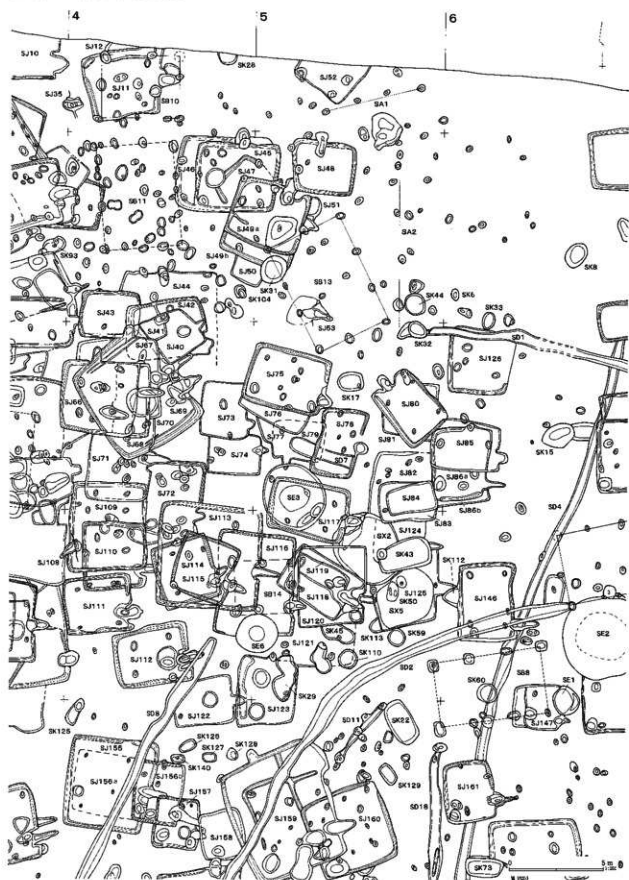
2×1間、2×2間の倉庫跡と考えられる建物と、3×1間、3×2間の側柱建物がある。比較的小型のものが多くないで、最大の建物は第20号孤立柱建物跡で、4×3間の身舎に南側に庇が取り付いている。

井戸跡は8基検出された。古代のものと中世のものがあるが、遺物量が少なく時期を特定できないものが多い。第8号井戸跡は、直径60cmと通常の井戸跡と比較して極めて小さい。深さは1.26mとピットとしては深く、筒状に掘り抜かれている。同様の形態はⅡ区から多数検出されており、井戸跡と考えた。

溝跡は23条検出された。大半は中世以降と考えられるが、第9号溝跡と第4号溝跡は埋没後、10世紀後半



第10图 大寄遺跡I区全測図(2)



大窖I区

第11网 大窖遗址I区全测图(3)

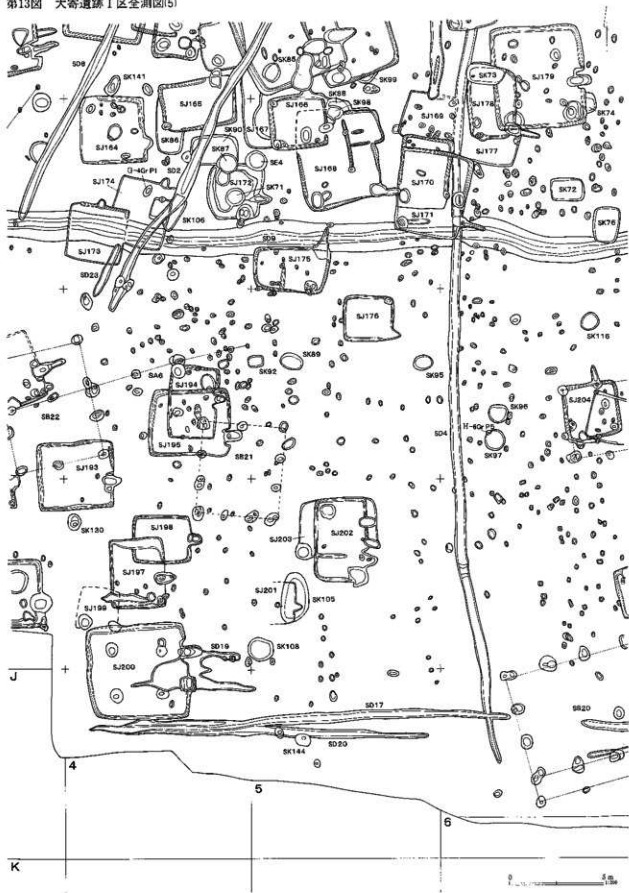


第12图 大寄遺跡I区全測図(4)

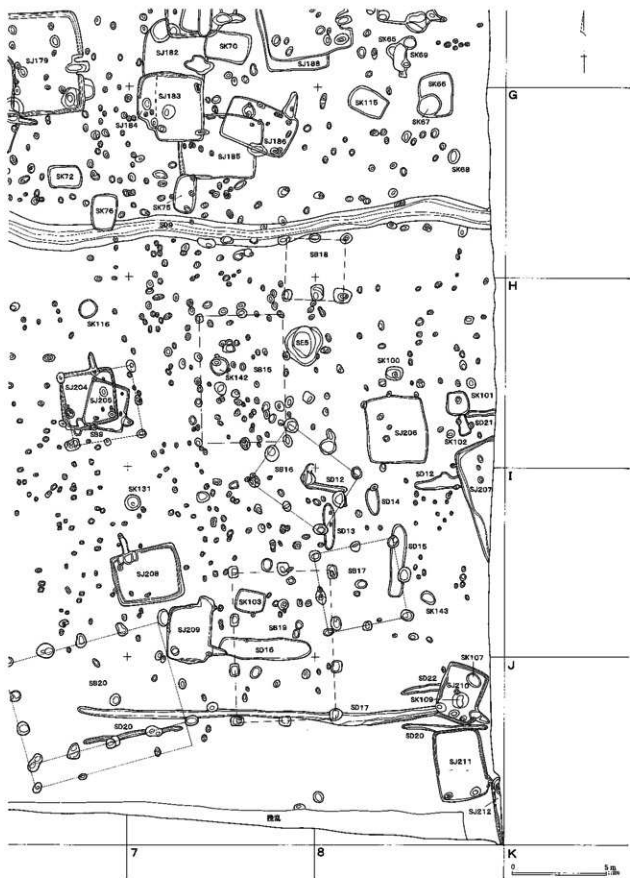


大寄 I 区

第13图 大寄遺跡 I 区全測图(5)



第14图 大寄遺跡I区全測図(6)



以降の住居跡が造られており、確実にそれ以前の所産といえる。第9号溝跡からは7世紀後半代の土器群がまとまって出土しており、少なくとも7世紀代まで掘整時期が遡る可能性が高い。水の流れた形跡はなく、集落の区画溝として機能した可能性も考慮すべきかもしれない。

土壌は144基検出された。时期的にも縄文時代～中世段階、またはそれ以降まで含む可能性がある。性格の特定できないものが大半であるが、窯場と思われるものが数例認められる。注目されるのは第181号住居内から検出された第79号土壌である。長方形で、内部からロクロ土師器小皿が2枚重なって出土した。住居跡もほぼ同時期であり、住居廃絶後に営まれた廃屋窯の可能性が高い。副葬品こそ検出されなかったが、第178号住居跡内の第73号土壌もその可能性がある。Ⅱ区にも数例があり、この時期、廃屋窯が墓制の一つとして採用されていたことは確実といえよう。また、第124号土壌からは人骨が検出され、中世またはそれ以降の墓塚と考えられる。

柵列は6条検出された。第4号柵列と第6号柵列は約22mの間隔でほぼ並行しており、ある段階の区画施設として機能した可能性がある。第2号柵列はほぼ南北にピットが並ぶ。時期は不明確であるが、取えていえば東側10mに第127・134・136・137号住居跡が西壁

を揃えて南北に並んで構築されている。いずれも10世紀後半以降の住居跡で、柵列にはほぼ並行することからこの段階の区画施設と考えることも可能であろう。

出土遺物は土師器、須恵器が主体を占める。須恵器は木野窯跡群産が圧倒的に多いが、时期的にみると、7～8世紀段階では、木野産の他に、南比企産、湖西産と共に群馬産須恵器が定量で供給されている。9世紀になると、木野産が大半を占め、南比企産、群馬産が少量混じる程度になる。9世紀後半代ではほとんど木野産で占められるようである。

10世紀後半段階では羽釜、ロクロ土師器高台碗、ロクロ土師器小皿、甕を基本セットとする土器群に転換する。羽釜は土師質のものが大半であるが、須恵質のものも少量ある。ロクロ整形、非ロクロ整形両者があり、形態もバリエーションが多い。高台碗は内面ヘラミガキと黒色処理を施すものと、二次調整を行わないものがある。小皿は器高がやや高めの一群と低めのものがある。

灰釉陶器・緑釉陶器も量的には少ないが、検出されている。特に注目される資料としては第185号住居跡から9世紀前半の土器群に伴って出土した灰釉淨瓶がある。口縁部の破片で、肩部以下は欠失しているが、初期の灰釉陶器で丁寧なつくりである。痕投産と思われる、K-14号甕式に比定される。

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡 (第15図)

第1号住居跡は、C-1・2グリッドに位置する。北半部は第20号住居跡に、東部は第21号住居跡に切られている。また、第38・39号土壌による擾乱を受けており、遺存状態は悪い。

平面形は円形で、規模は長軸5.82m、短軸5.56mである。床面は削平されており、炉跡、埋甕等の施設は検出されなかった。主軸方向はN-52°-Eを示す。

ピットは4本検出されたが、柱穴配置は不明である。壁溝は幅30-60cm、深さ10cm程である。

出土遺物は無く、時期は明らかにできない。

第2号住居跡 (第16図)

第2号住居跡は、D・E-1グリッドに位置する。掘り込みが認められなかったため平面形は不明確であるが、柱穴配置及び埋土の様相から、縄文時代の円形第15図 第1号住居跡

を基調とする住居跡と考えた。西半部は上面に擾乱が及んでおり、詳細は不明である。

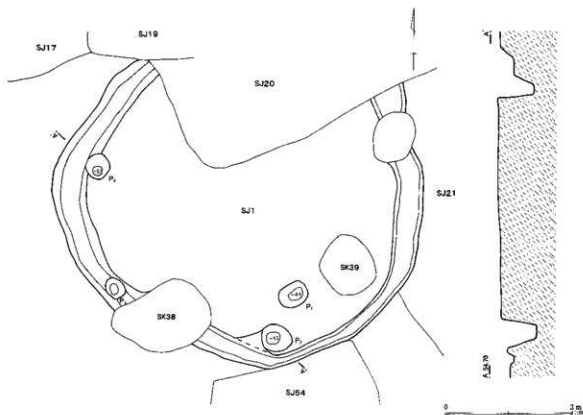
推定規模は径4m程と思われる。柱穴は12本検出され、Pit 1-10はほぼ円形に巡る。Pit 11-12はその外側に位置する。深さはPit 1・9・10・12が40-60cmと比較的深いが、他は浅い。

炉跡、壁溝などの施設は検出されておらず、詳細は不明である。遺物はなく、時期も不明である。

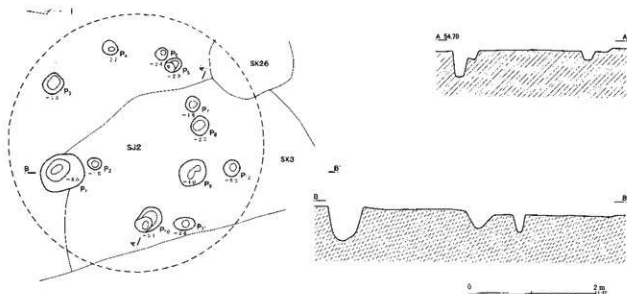
第3号住居跡 (第17図)

第3号住居跡は、B・C-3グリッドに位置する。第4・22・32・33号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。南壁は削平されているが、平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸5.55m、短軸3.56m、深さ0.20mである。主軸方向はN-26°-Wを示す。

床面は中央部に向かってわずかに傾斜している。壁



第16図 第2号住居跡



溝は全周するものと思われ、壁溝に沿って壁柱穴が巡る。柱穴は42本検出され、壁柱穴の内側にも並ぶ。

炉跡は中央やや北側に寄った位置に設けられている。規模は長軸85cm、短軸62cmの楕円形プランで、炉体土器が埋設されていた。

遺物は僅かであったが、炉体土器が出土したため関山Ⅰ式段階であると考えられる。

第3号住居跡出土遺物 (第18図1、第19図1)

第18図1は炉体土器である。口縁部文様帯の一部と、胴部の人形破片が現存し、底部は欠損する。口縁部破片から推測すると、口縁部に櫛歯状の集合平行沈線による幅狭の鋸歯状文様を持つもので、口縁部文様帯は2条の交互刺突文様帯で上下端を区画する。口唇部直下には幅狭の刻み文様帯が巡るものと思われる。文様帯内には、ランダムに円形貼付文を施文する。胴部には、短い多段のループ文様と、1帯の羽状縄文帯を交互に施文する。ループ文様は1段毎に撚り方向を変えた羽状を構成し、胴部上端では7段に施文、その下部には頭にループを持つ羽状縄文を1帯施文して、底部に向けてループ文様の段数を減らす様である。推定口径約31cm、現存高30cmを測る。繊維を多く含むが、器内面の整形が丁寧であり、前期前半の関山Ⅰ式の中でも、Ⅰ式の新しい段階に位置付けられよう。

石器は第19図1の大形の石皿が1点出土した。緑泥片岩製のほぼ完全形の石皿で、中心をややはずして皿状に大きく括れる。長径43.8cm、短径27.5cm、厚さ4.8cm、重さ8950gを測る。

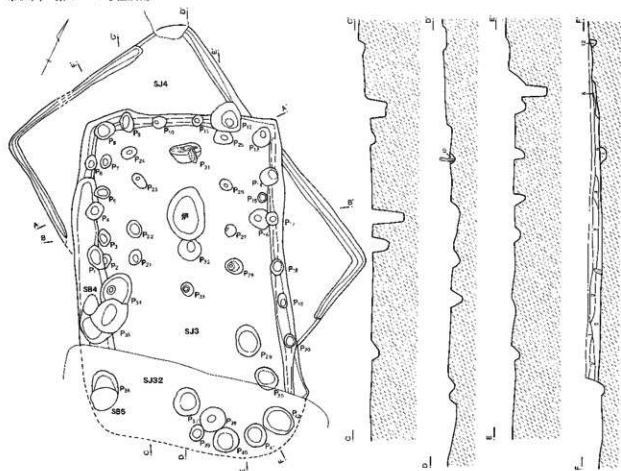
(2) 土壌

確實に縄文時代に属する土壌は第28・30号土壌の2基がある。ここでは遺物の説明を行い、遺構に関しては第236図に記載した。

第28号土壌出土遺物 (第18図1～12)

- 1はやや内彎する器形の口縁部破片で、口唇部は内削状を呈し、口唇直下に縦位の幅状な刻み帯を持つ。口縁部は2本対の細かな刻目を施す梯子状平行沈線で鋸歯状のモチーフを描き、余白にコンパス文を施文し、ランダムに円形貼付文を施文する。鋸歯状の平行沈線の交点には、平行沈線による円形文を施している。
- 2は若干内彎気味に口縁部が立つ器形で、口唇上に双頂状の山形突起を持つ。口縁部の文様を平行沈線で描出し、区画交点と、描線上に円形貼付文を施文する。
- 3～12は胴部破片で、3は結束の羽状縄文と2段の粗いコンパス文を施文する。4は単節 RLの足のやや長いループ縄文を施文するもので、5がやや足が短くなるループ縄文を多段に施文する。6、7は結束の羽

第17図 第3・4号住居跡



ピット深度表 (cm)

番号	深さ	番号	深さ	番号	深さ	番号	深さ	番号	深さ
1	30	8	10	15	12	22	50	29	7
2	8	9	27	16	15	23	10	30	6
3	10	10	19	17	28	24	8	31	38
4	19	11	15	18	41	25	17	32	11
5	12	12	50	19	23	26	17	33	30
6	30	13	22	20	39	27	31	34	30
7	10	14	28	21	26	28	14	35	42

0 2m

- 1 帯 雫 赤 土 ローム殻・白色砂多量
- 2 におい黄褐色土 ローム殻、ロームブロック、白色砂多量
- 3 粘 褐色 土 フォーム殻、白色砂多量、炭化粒少量
- 4 におい黄褐色土 ローム殻、白色砂多量
- 5 粘 色 土 ローム殻、白色砂少量、焼土
- 6 黄 褐色 土 ローム殻、ロームブロック、白色砂多量
- 7 におい黄褐色土 ロームブロック
- 8 粘 褐色 土 ローム殻、白色砂少量
- 9 帯 褐色 土 ローム殻多量、ロームブロック少量、白色砂多量
- 10 黄 褐色 土 ローム殻、白色砂少量
- 11 帯 雫 赤 土
- 12 黄 色 土

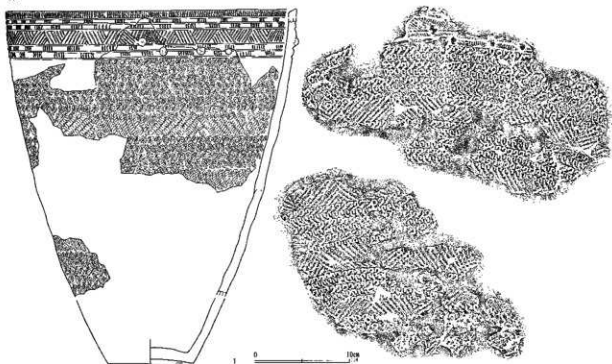
伊勢

- 1 黄 褐色 土 ローム殻・粘土粒少量、白色砂少量
- 2 粘 褐色 土 ローム殻多量、白色砂、粘土粒少量
- 3 におい黄褐色土 ローム殻、白色砂、ロームブロック少量

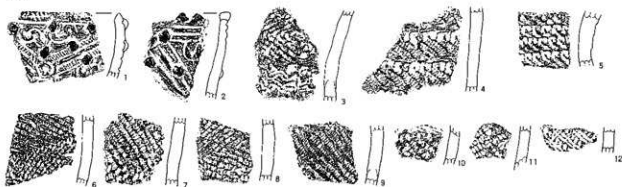
0 1m

第18图 第3号住居跡・第28・30号土塚出土土遺物

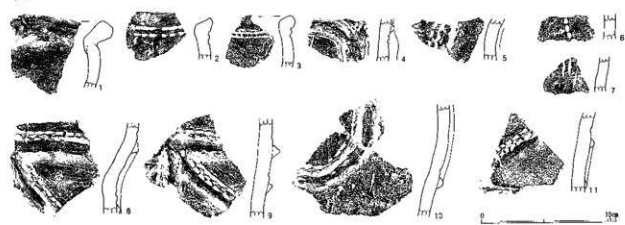
SJ3



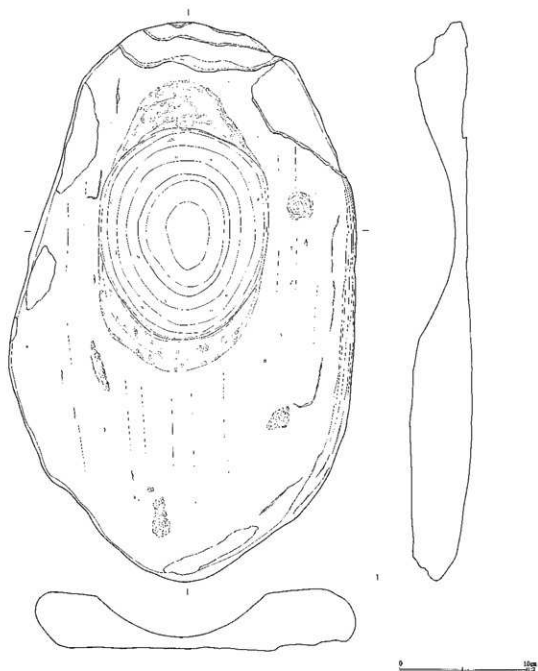
SK28



SK30



第19図 第3号住居跡出土石器



状縄文、8は非結束の羽状縄文と思われる。9は斜縄文、10、11は羽状縄文を施文する。12は「正反の合」による羽状縄文を構成するものと思われる。前期前半の関山式に比定されるが、I式でも新しい段階に位置付けられよう。

第30号土壇出土遺物 (第18図1~11)

1は口縁部が無文の球形になる深鉢形土器で、口唇部が肥厚して屈曲する。前方へと山形状に突出する

突起を4単位に配する構成を採るものと思われる。

2、3は内彎する口縁部を持つ器形で、口唇部が外折し、括れ部に2は2列の結節沈線、3は爪形状の結節沈線を施文する。

4~11は頸部から胴部にかけての破片であり、2、5、8~11は同一個体と思われる。断面三角状の隆帯区画に沿って、2列の角状結節沈線文を施文するものである。4は断面三角の区画隆帯に沿って、細かな平

行結節沈線文を施文する。6は1列の刺突文列が垂下し、7は装状の爪形文を施文する。1、4、6、7には明瞭に雲母が含まれている。中期中葉の阿玉台系統の土器群で、おおよそⅡ式段階に位置付けられるものと思われる。

(3) グリッド出土縄文土器

大寄道跡Ⅰ区からは、縄文時代前期から後期にかけての土器群が検出されている。ここでは時期毎に群分けし、さらに類別して概要を記していくことにする。

第Ⅰ群土器

前期の土器群を一括する。

第1類 (第20図1～第21図86)

前葉の繊維土器である岡山式土器を一括する。1～2は文様を描く平行沈線間に細かな刻みを施すもので、1は口縁部、2は文様帯下端部の破片である。1の口縁部には円筒状の突起が付き、1、2ともランダムに円形貼付文を施す。3は口唇部か内削状を呈し、口縁部幅狭区画帯に、縦位の細かな刻みを施す。4は口縁部破片で口縁部幅狭区画帯と、平行沈線の文様描線外に細かな刻みを施文し、口縁部区画線と文様描線の交点部に、円形貼付文を施す。31は胴部の大形破片であるが、口縁部下端区画線上に円形貼付文を施し、モチーフ描線の平行沈線間に、細かな刻みを施す。胴部はループ文帯を挟んで、羽状縄文を交互に配する構成を採る。32、33は同一個体である。

5～7は平行沈線でモチーフを描くもので、5、6は口縁部か内削状を呈する。7は平行沈線の区画内に平行沈線のコンパス文を充て施文する。

8～10は口縁部の幅狭文様帯内に、平行沈線の条線文で格子目文や鋸歯状文を描く。8は文様帯の区画にコンパス文を使用し、円形添付文を施文する。10は緩い波状線を呈す。

11～13は円形添付文を施す胴部破片で、11は「正反の合」の羽状縄文、12は0段多糸の斜縄文 RL、13はループ縄文を施す。

13～20はコンパス文を施文する胴部破片である。

14、15は同一個体で、ループ文を2段に施文する。

21～29は口縁部破片で、21、22は口縁部に双頭の小突起が付き、23、24は口縁部に縦長の貼付文を施文する。21、22、27はループ文と羽状縄文を交互に、23、29は斜縄文を、24、26、28は「正反の合」、25は羽状縄文を施文する。

30、34～42は羽状縄文帯とループ文帯を交互に施文する胴部破片で、43～52は頭にループを持つ羽状縄文を施文する土器群である。

53は1点のみ存在するが、結節の回転縄文で、54～56は「正反の合」であるが、54は付加糸縄文の可能性もある。57～62、65、66、69は菱形構成の整然とした羽状縄文で、63、64、67、70は結束の羽状縄文である。他は斜縄文が施される破片であるが、羽状縄文構成の一部の可能性もある。

84～86は底部破片で、上げ底が強く、85の底部には羽状縄文を施す。

第2類 (第22図87～99)

前期中半の無繊維土器である諸磯b式土器を一括する。87～95は浮線文系の土器群である。87、88は口縁部か内削し、89は直線的に立ちあがる。90は「く」状に屈曲する、新しい段階の上器である。浮線線はいずれも斜位の細かな刻みを施すが、95は浮線が退化している。

96～98は沈線文系の上器で、96は直線的に立ちあがる口縁部破片である。口縁部の地文縄文は羽状構成を採り、やや新しく位置付けられる可能性もある。97は地文縄文が無く、98は90と同様な屈曲する口縁部破片で、細かな平行沈線文を施文する。

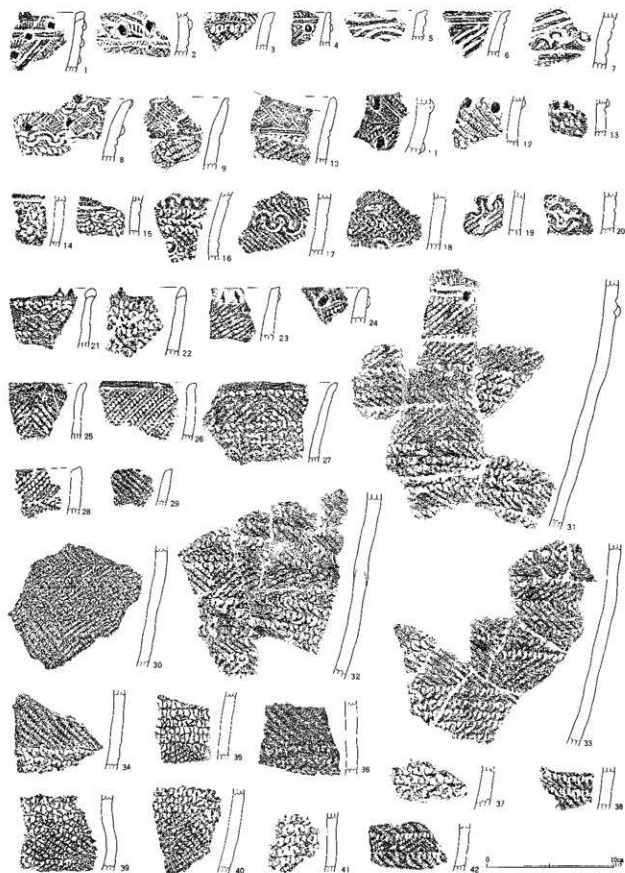
99は角頭状に先細りする口縁部が、やや開く器形を呈し、粗い平行沈線で格子目文を描く。96と胎土成形が類似しており、北陸地方の刈羽式に類似する一群と言えよう。

102～104は、原体および施文の特徴から、第2類に属する縄文土器と思われる。

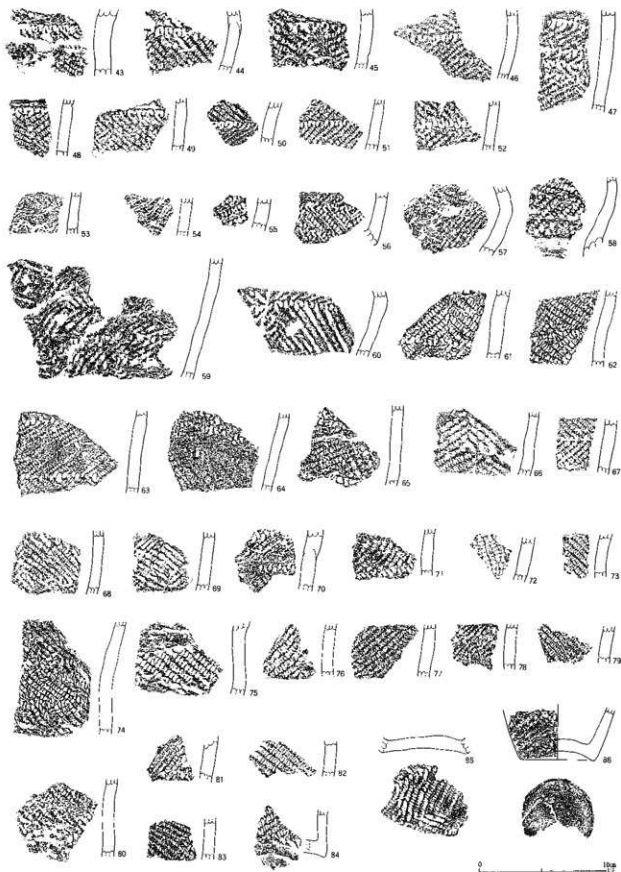
第3類 (第22図100、101)

前期終末の土器群を一括する。100は細かな鋸歯状

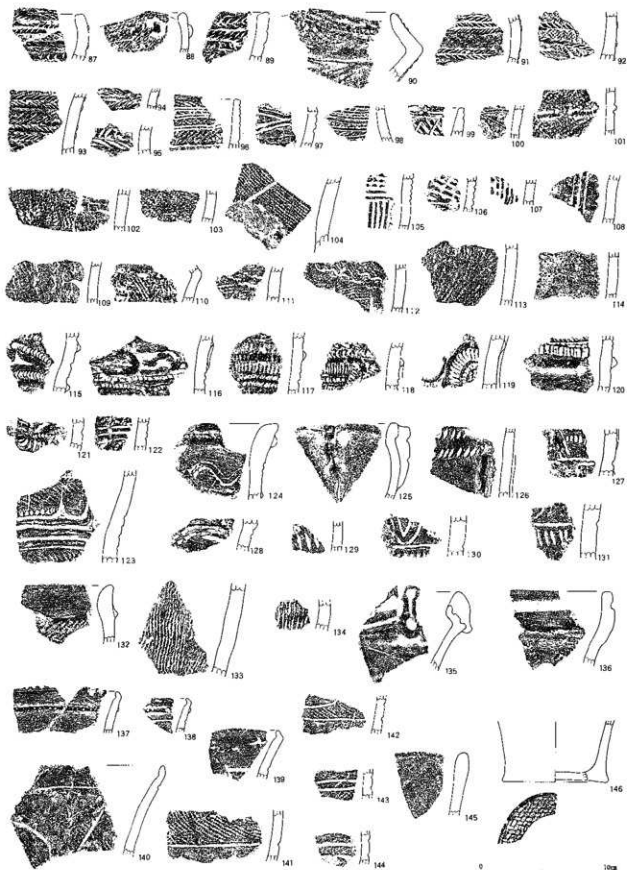
第20図 グリッド出土縄文土器(1)



第21回 グリッド出土縄文土器(2)



第22図 グリッド出土縄文土器(3)



に具による平行刺突文でモチーフを描くもので、時期比定は難しいが、諸磯b式最終末から諸磯c式にかけての段階の胎土に類似する。

101は地文LR縄文上に、結節浮線文を施文するもので、十三菩提式に比定される。

第II群土器

中期の土器群を一括する。

第1類 (第22図105～114)

中期最初頭の上器群を一括する。105～107は集合沈線文系土器の五領ヶ台式段階の上器群である。105、106には葎瓦状の結節沈線文を施文する。108はやや浅い平行沈線文を施文する。

109から112は緩連続縄文を施文するもので、109、110は縦位に、111、112は横位に施文する。113、114は風化が著しいが、石英等を多く含む胎土から、この時期に比定されるものであることは確かである。

第2類 (第22図115～131)

中期中葉の土器群を一括する。115から122は新道系の土器群である。115はやや丸いベン先状の三角押文の区画内に、三角印刻を施す。116は幅状の横帯区画内に断面三角の隆帯による柵目区画や、蛇行隆帯を施し、細かな角押文で文様を描いている。117から121は幅広いキャタピラ文と三角押文を組合わせて施文するもので、隆帯上には加飾はない。112は三角押文と平行沈線文を施文する。

123はパネル状区画内に、剣先状のスリットを交互に施文し、区画内に地文縄文を施文する。北陸地方の新崎式の系統と思われる破片である。

124～131は変形しているものの、阿玉台系の土器群で、胎土に雲母を含み、結節沈線や爪形文を施文するのを特徴とする。124は口縁が閉く器形で、口縁部に平行結節沈線と波状文を描く。125は口縁部が内彎する器形で、口縁部から断面三角の隆帯を垂下する。口唇と隆帯の付着部分には、三角印刻状の隙間が生じている。128は平行結節沈線と、2列の角押文を施文する。126、127、129～131は爪形文を施すもので、126は垂下する隆帯文と、127は三角押文と、130、131は平行沈

線文と平施文されている。おおよそ、阿玉台Ib式からII式にかけての上器群である。

第3類 (第22図132～134)

中期最終末の土器群を一括する。132は口縁部を隆起線にて区画し、以下に縄文を施文する、中期最終末から後期初頭にかけての加曾利E系の上器である。133、134は捺糸文を施文する。

第III群土器

後期の土器群を一括する。

第1類 (第22図135～146)

後期前葉の堀之内式土器を一括する。135は口縁部が強く屈曲する鉢形土器で、盲孔を繋ぐ把手が付き、注口土器になる可能性もある。135は口縁部に沈線が巡る深鉢形土器で、両者とも堀之内I式に比定されよう。

137～146は堀之内II式に比定される土器群で、137～144は朝顔形の深鉢形土器で、磨消縄文でモチーフを描く土器群である。137、138は口縁部に隆起線が、140は沈線が巡る。145は無文の口縁部で、146は網代痕のある底部破片である。

第2類 (第23図147)

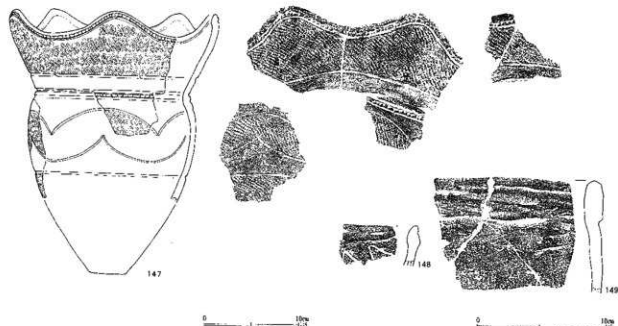
後期中葉の加曾利B式を一括する。復元される1個体分が出土している。147は5単位に波状線と、胴部で括れる器形を呈する。胴部は無文帯と連続刺突文で区画し、下半に磨消縄文の入り組み文を施文し、沈線で底部の縄文帯を区画する。入り組み文は口縁部にあわせて5単位に展開するものと思われる。地文縄文は、単節RLである。推定口径約22cm、現存高20cmを測る。

第3類 (第23図148、149)

後期後半の曾谷式土器を一括する。148は口縁部がやや内彎して閉く波状線を呈し、口縁部に横位の列点文を施文し、胴部に沈線の鋸歯状文を施文する。

149は無文の細線文系の土器で、口縁部との境に強い削りを施して、段を形成している。胴部には横位のケズリを施した後、粗いナデ成形を行っている。曾谷式段階の紐線文系土器と思われる。

第23図 グリッド出土縄文土器(4)



(4) グリッド出土石器

縄文時代の石器は縄文時代の遺構から出土することは珍しく、大半が他の時期の遺構に紛れ込んでいるものが殆どである。石器の特徴から時期を判断されるものも存在するが、大半は推定が困難であり、グリッド出土の石器の時期におおよそ対比されるものと思われる。

石鏃 (第24図1、2)

何れも黒曜石製の石鏃で、1は長さ1.95cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ1.01g、2は長さ1.45cm、幅1.25cm、厚さ0.35cm、重さ0.42gを測る。

石斧 (第24図3～8)

3、4は前期特有の三角形の石斧で、3は頁岩製で長さ9.4cm、幅5.4cm、厚さ1.7cm、重さ80.21g、4は粘板岩製で長さ7.2cm、幅5.6cm、厚さ2.15cm、重さ77.88gを測る。

5は中期の砂岩製の短冊形石斧で、頭部を欠損するが長さ7.25cm、幅4.7cm、厚さ1.7cm、重さ64.34gを測る。

6～8は後期の分冊形状の石斧と思われ、6は頁岩製で長さ11.7cm、幅6.9cm、厚さ1.55cm、重さ111.4g、7は頁岩製で長さ11.35cm、幅7.85cm、厚さ1.5

cm、重さ148.77gを測る。8は粘板岩製で長さ8.7cm、幅5.2cm、厚さ1.3cm、重さ59.08gを測る。

掻器 (第24図9)

9は三角形の掻器と思われるが、短辺部を刃部とする三角形の石斧の可能性もある。頁岩製で、長さ5.4cm、幅7.4cm、厚さ1.55cm、重さ52.81gを測る。

石錘 (第24図10)

10は両サイドに抉りの入る絹雲母片岩製で、長さ11.9cm、幅7.7cm、厚さ1.95cm、重さ282.05gを測る。

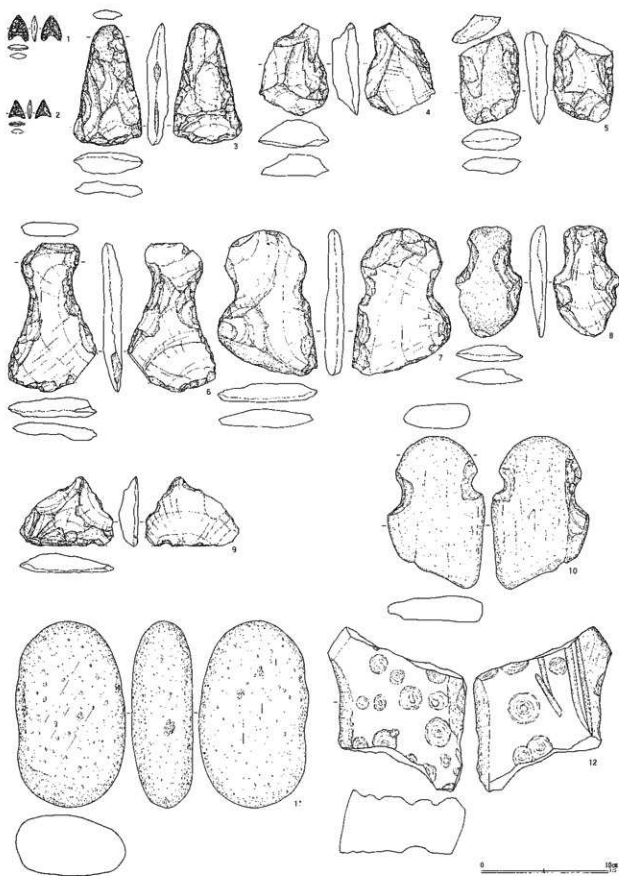
磨石 (第24図11)

11は閃緑岩製の磨石で、片目が良く磨耗している。長さ14.6cm、幅8.6cm、厚さ4.8cm、重さ907.16gを測る。

凹石 (第24図12)

石肌を転用した凹石であり、多孔質安山岩を使用している。表面には、筋状の研ぎ面も見られる。砥石に転用後、破損する。長さ12.8cm、幅10.9cm、厚さ4.9cm、重さ643.55gを測る。

第24図 グリッド出土石器



第 1 表 大寄 I 区グリッド出土縄文土器一覧表

番号	新番号	グリッド	番号	新番号	グリッド	番号	新番号	グリッド
1	S J111	E-4	51	S J48	C-5	101	S K30	C-2
2	S J45	B-4, C-4・5	52	S J99	F-2	102	S J49a	C-4・5
3	S J49a	C-4・5	53	S J20	B・C-1・2	103	S J25	C-2・3
4	S J103	E-3・4	54	S J14	C-1	104	S J62	D-3・4
5	S B3	C-3, D-3	55	S J46	C-4・5	105	S X4	C・D-3
6	S J38	C・D-3・4	56	S J40	C・D-4	106	C-4G	C-4
7	S J99	F-2	57	S X1	D-2・3	107	S X1	D-2・3
8	S J162	G-2・3	58	S J67	D-4	108	S J124	E-5・6
9	S K54	C・D-2	59	F-3G	F-3	109	S X4	C・D-3
10	F-3G	F-3	60	S J107	E・F-3	110	S J32	C-3・4
11	S J48	C-5	61	S J99	F-2	111	S J54	C-1・2
12	S J78	D-5	62	S J107	E・F-3	112	S J26	C-2・3
13	F-30	F-3	63	S K52	D-2	113	S K55	D-3
14	S J99	F-2	64	S J99	F-2	114	S E5	H-7・8
15	S J99	F-2	65	S J99	F-2	115	S K37	C-3
16	S J44	C・D-4	66	S J99	F-2	116	S J153	F-3
17	S J49a	C-4・5	67	S J11	B-4	117	S J109	D・E-4
18	S E3	D・E-5	68	F-2G	F-2	118	S J46	C-4・5
19	注記なし		69	S J162	G-2・3	119	S J38	C・D-3・4
20	F-2G	F-2	70	S J20	B・C-1・2	120	S J91	E-2
21	F-2G	F-2	71	S J93	E-2・3, F-2・3	121	S J120	E-5
22	S J105	E-3	72	S X1	D-2・3	122	S J46	C-4・5
23	S J53	C-5	73	B-5G	B-5	123	S J149	E・F-6, F-7
24	S E3	D・E-5	74	S J107	E・F-3	124	S J153・154	F-3
25	F-3G	F-3	75	S J97	F-2・3	125	S J95	E・F-3
26	S J19	B・C-1・2	76	S J42	C・D-4	126	S J93	E-2・3, F-2・3
27	F-3G	F-3	77	S J97	F-2・3	127	E-2G	E-2
28	S J7	B-3	78	S J20	B・C-1・2	128	S J51	C-5
29	S J59	C・D-2	79	S J99	F-2	129	S J57	C・D-1, D-2
30	S J99	F-2	80	S J103	E-3・4	130	S J11	B-4
31	F-3G	F-3	81	S J45	B-4, C-4・5	131	S J123	E・F-4・5
32	F-3G	F-3	82	C-4G	C-4	132	F-7G	F-7
33	F-3G	F-3	83	S J99	F-2	133	S J136	D-6・7
34	S J99	F-2	84	C-4G	C-4	134	S J46	C-4・5
35	F-2G	F-2	85	S J99	F-2	135	G-17G	G-17
36	S J99	F-2	86	F-3G	F-3	136	S J126	D-6
37	S J32	C-3・4	87	S J46	C-4・5	137	C-7G	C-7
38	S J99	F-2	88	S J67	D-4	138	S K16	E-8
39	E-3G	E-3	89	S J102	E-3	139	S K16	E-8
40	F-3G	F-3	90	S J99	F-2	140	S X3	F・G-3
41	S J99	F-2	91	S J67	D-4	141	S J162	G-2・3
42	S J107	E・F-3	92	S B3	C・D-3	142	G-6G	G-6
43	S J27	B-3, C-2・3	93	S K58	E-2	143	S J17	B・C-1
44	S J91	E-2	94	S J99	F-2	144	F-3G	F-3
45	F-3G	F-3	95	S J59	C・D-2	145	S J57	C・D-1, D-2
46	S J99	F-2	96	C-3G	C-3	146	S J57	C・D-1, D-2
47	F-3G	F-3	97	S J18	B・C-1	147	S X3	F・G-3
48	S J46	C-4・5	98	S J26	C-2・3	148	S J70	D-4
49	F-2G	F-2	99	S J151	E・F-7・8	149	S X1	D-2・3
50	D-2G	D-2	100	S J24	C-2・3			

3. 古墳時代～平安時代の遺構と遺物

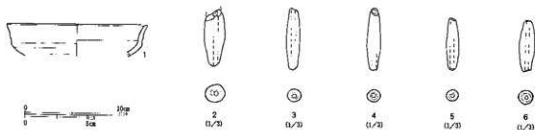
(1) 竪穴住居跡

第4号住居跡 (第17・25図)

第4号住居跡は、B・C-3グリッドに位置する。第3号住居跡の覆土上面に床面が形成されていた。また、第27・32号住居跡と重複し、前者よりも新しく、後者よりも本住居跡の方が古いものと判断された。

平面形は長方形と考えられるが、遺構の重複が激しいため、南東部では明瞭に把握できなかった。

第25図 第4号住居跡出土遺物



規模は長軸3.38m、短軸3.69m、深さ0.11mである。主軸方向はN-64°-Wを示す。

床面はやや凹凸がある。ピット、カマドなどの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏と土鍾がある。第27号住居跡との切り合い関係を考慮すると7世紀代の住居跡と推定される。

第2表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.6)	3.3		ABCDE	1	に灰・褐	10	
2	土鍾	長 4.40cm	最大径 1.55cm	孔径 0.35cm			重量 9.33g		
3	土鍾	長 4.75cm	最大径 1.05cm	孔径 0.30cm			重量 4.86g		
4	土鍾	長 4.85cm	最大径 1.05cm	孔径 0.30cm			重量 4.44g		
5	土鍾	長 4.10cm	最大径 0.95cm	孔径 0.30cm			重量 3.51g		
6	土鍾	長 4.60cm	最大径 1.20cm	孔径 0.25cm			重量 5.25g		

第5号住居跡 (第26図)

第5号住居跡は、B-1・2グリッドに位置する。調査区北西部に位置し、住居北半は調査区外に掛かるため、詳細は不明である。形態は方形基調と考えられる。残存規模は長軸4.74m、短軸3.86m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-55°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。埋土は、3-10cmと非常に浅く、貼床が多少露出している状況であったが、非常に固く、良く踏み締められている。

カマドは調査区内からは検出されなかった。ピットは4本検出され、Pit 1が主柱穴に相当するものと考えられる。壁溝は調査区内では全周する。幅30-40cm、深さ10cm程である。

出土遺物は少量で、図示し得るものは2点である。

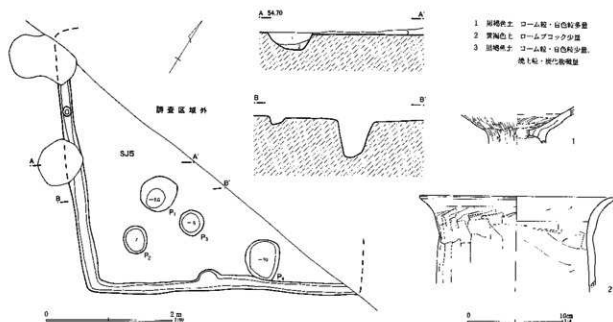
第26図1は土師器台付甕である。2は土師器甕。器壁は厚く、胴部は縦方向のヘラケズリが施される。時期は不明確であるが、2の甕を基準に7世紀代の住居跡と考えておきたい。

第6号住居跡 (第27図)

第6号住居跡は、調査区北西部のB-2グリッドに位置する。大部分は調査区外に延びるため遺構の詳細は不明である。遺構の重複関係は、西壁に重複するピットに切られ、第2号掘立柱建物跡を切っている。

平面形は方形基調と考えられる。残存規模は長軸2.66m、短軸0.96m、確認面からの深さ0.06mである。主軸方向は南壁を基準にするとN-81°-Eを示す。

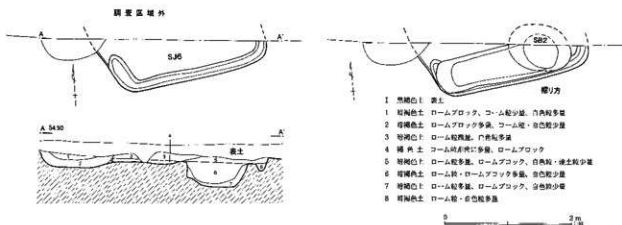
第26図 第5号住居跡・出土遺物



第3表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		4.0		A E H	2	橙	25	
2	甕	(20.6)	9.9		B E H J	3	橙	25	

第27図 第6号住居跡



床面は概ね平坦で、比較的硬く踏み固められている。カマド、柱穴は検出されなかった。壁溝は南壁を中心に巡っている。また、住居床面下から第2号掘立柱建物跡ピットが検出され、掘立柱建物跡よりも本住居の方が新しいことが判明した。

遺物は出土しなかったため、正確な時期は不明とせざるを得ない。おそらく、10世紀以降の住居跡と思われる。

第7号住居跡 (第28図)

第7号住居跡は、調査区北端のB-3グリッドに位置する。大半は調査区外に延びるため、南西コーナーを検出したにとどまる。

平面形は方形基調になるものと考えられる。残存規模は長軸2.40m、短軸1.14m、深さ0.15mである。おそらく小型の住居跡になるものと推定される。主軸方向はN-69°-Eを示す。

床面は平坦であるが、あまり堅く踏み固められた痕跡は認められなかった。カマドは検出されなかった。ピットは1本確認されたが浅く、柱穴とするには無理があろう。

遺物は検出されなかったため、所屬時期を明らかにすることはできないが、10世紀以降の住居跡となるかもしれない。

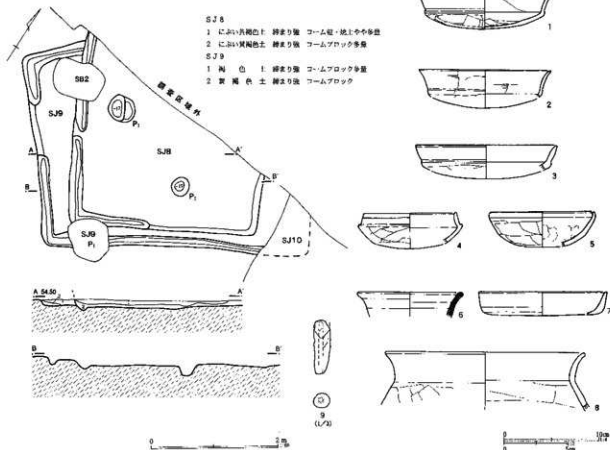
第8号住居跡 (第29図)

第8号住居跡は、B-3グリッドに位置する。住居北側は調査区域外に伸びている。重複関係は第9号住居跡を切り、第2号掘立柱建物跡に切られている。

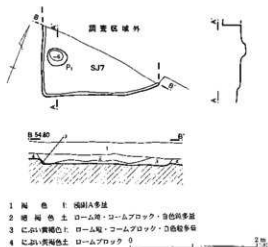
平面形は方形もしくは長方形と推定され、規模は長軸3.12m、短軸3.04m (現在長)、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-60°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは2本検出されたが、いずれも浅く主柱穴と見るのは難しい。壁溝は巡るが、全周はしない。

第29図 第8・9号住居跡・出土遺物



第28図 第7号住居跡



出土遺物は少ない。第29図2-4、6-9は第8号住居跡覆土から出土している。1・5は重複する第2号掘立柱建物跡ピット埋土から出土した。1については本住居跡に伴う遺物と考えられる。5は時期的にやや降り、掘立柱建物跡に伴う遺物と考えた方がよい。

あろう。6・7は混入品か。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と思われる。

第4表 第8・9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.0)	3.8		ABEHJ	2	明赤褐	25	SJ 8・9 Pit 2
2	坏	(14.0)	2.8		EH	2	にぶい黄橙	10	SJ 8 覆土 外面黒色処理か?
3	坏	(15.0)	2.6		BDEHJ	2	にぶい橙	10	SJ 8 覆土
4	坏	(9.6)	3.2		BEH	2	にぶい橙	10	SJ 8 覆土
5	坏	(11.0)	3.7		BEH	2	にぶい褐	15	SJ 8・9 SB 2 Pit 1
6	須恵妻	(12.0)	2.5		EFH	1	灰	10	SJ 8 南北全産
7	坏	(13.6)	2.4	6.2	AH	2	橙	10	SJ 8 底部外面ヘラケズリ 調整不明瞭
8	壺	(21.0)	6.0		DEHJ	2	にぶい黄橙	10	SJ 8
9	土師	長 4.20cm 最大径 1.25cm 孔径 0.35cm 重量 5.61g SJ 8・9							

第9号住居跡 (第29図)

第9号住居跡は、B-3グリッドに位置する。第8号住居跡、第10号住居跡及び第2号孤立柱建物跡に切られており、遺構の遺存状態は悪い。

平面形は長方形と推定される。残存規模は長軸3.55m、短軸3.15m、深さ0.08mである。主軸方向はN-60°-Eを示す。

床面は堅く踏み向められていた。カマド、ピット等の付属施設は検出されなかった。壁溝は南西壁に一部途切れる箇所があるが、他は通る。

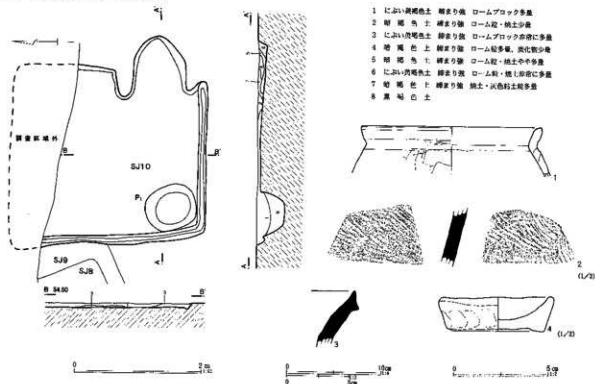
出土遺物はない。時期は不詳であるが、切り合い関係から古墳時代の所産と思われる。

第10号住居跡 (第30図)

第10号住居跡は、調査区北端のB-3・4グリッドに位置する。西側に重複する第9号住居跡を切って掘り込まれていた。

平面形は方形もしくは長方形と考えられるが、北辺は調査区外に延びるため確定できない。小型の住居跡で、残存規模は長軸2.86m、短軸2.64m、深さ0.06mである。主軸方向はN-90°-Eを示す。

第30図 第10号住居跡・出土遺物



床面は概ね平川で堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置されている。燃焼部の掘り込みはほとんどなく、床面と同一レベルで連続する。

ピットは1本、カマドに対向する壁際に掘り込まれていた。深さ40cm。

出土遺物は少なく、4点を図化した。1は土師器の

第5表 第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(19.0)	5.0		EHJ	2	にぶい褐色	10	
2	須恵甕				EH1J	1	灰	破片	木野産
3	須恵甕				BEH1J	1	灰	破片	木野産
4	手すくね?	5.7	1.8	5.2	BDEHJ	2	にぶい黄褐色	95	

第11号住居跡 (第31図)

第11号住居跡は、B-4グリッドに位置する。第12号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。また、第10号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は不整形長方形で、北東コーナーは調査区外にかかる。規模は長軸4.43m、短軸3.56m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は中央部が堅く、壁際はやや軟弱であった。カマドは東壁のはじめ中央に設置されていた。遺存状態は悪く、1・2層が天井部崩落土、3層は掘方土と思われる。ピットは10本検出されたが柱穴は不明確である。壁際は途切れながら巡る。北壁部で幅広くなるが、掘方と判別が難しかったためと考えられる。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・甕がある(第31図1~8)。須恵器は木野産で、2は底部回転糸切り後無調整である。5の環は内外面に有機物の薄い被膜層が付着している。7の環底部には両面に線刻がみら

れて、口縁部は「く」の字状に外反し、器壁は厚い。2・3は須恵器甕で木野産である。4は手すくね風の土器としたが、底面に剝落痕があり、器種を確定できない。住居形態及び出土遺物から10世紀前半の住居跡と考えられる。

れるが、意味は不明である。時期は9世紀前半~中葉と推定される。

第12号住居跡 (第31図)

第12号住居跡は、B-4グリッドに位置する。第11号住居跡に南側を切られ、北部は調査区外に延びるため、西壁の一部が検出されたに留まり、遺構の詳細は不明確である。

残存規模は長軸1.69m、短軸0.50m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-97°-Eを示す。

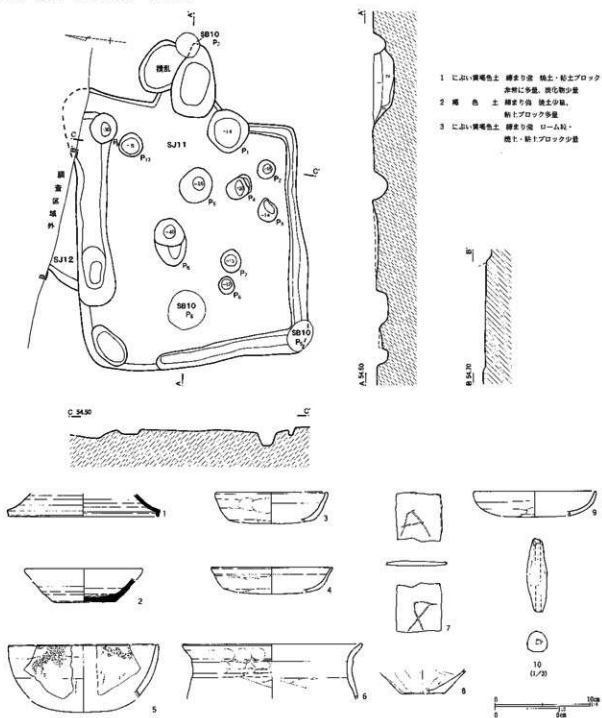
床面は概ね平坦である。カマド、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器環と土師器甕が検出された。第31図9の環は北武蔵型環の破片で、体部中位以下がヘラケズリされる。時期については不明確ながら、遺構の切り合い関係や出土遺物から8世紀前半~中葉頃の住居跡と考えていきたい。

第6表 第11・12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵甕	(16.0)	2.4		EIIIJ	1	黄灰	10	SJ11 木野産
2	須恵環		2.4	6.6	H1J	1	黄灰	70	SJ11 木野産
3	環	(11.6)	3.1	(8.9)	ABCDE	1	にぶい橙	15	SJ11
4	環	(12.8)	2.6	(10.0)	ABCDE	1	橙	10	SJ11
5	環	(16.0)	5.6		BEHJ	2	灰黄褐色	15	SJ11 内外面黒色有機物付着
6	甕	(19.0)	5.8		BEHJ	2	にぶい褐色	10	SJ11
7	環				ABCDE	1	にぶい橙		SJ11 表裏両面に線刻有り
8	甕		2.5	(4.5)	BDEHJ	3	橙	15	SJ11
9	環	(13.8)	2.7		ABCDE	1	にぶい橙	15	SJ12
10	土師		長5.80cm	最大径1.60cm	孔径0.40cm			重量11.63g	SJ12

第31図 第11・12号住居跡・出土遺物



第13号住居跡 (第32図)

第13号住居跡は、調査区北西部のB・C-1グリッドに位置する。第14~16号住居跡と重複するが、新旧関係は不明確であった。出土遺物の検討などから最も古い可能性が高いと考えた。

遺構の遺存状態が悪いため平面形は不明確であるが、

現状では円形プランに近い。残存規模は最大径2.90m、深さ0.16mである。柱穴等の付属施設は検出されなかった。

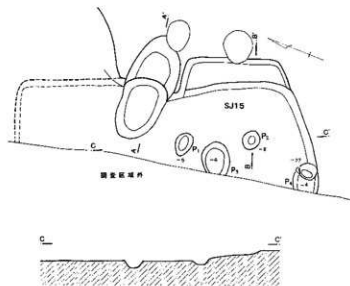
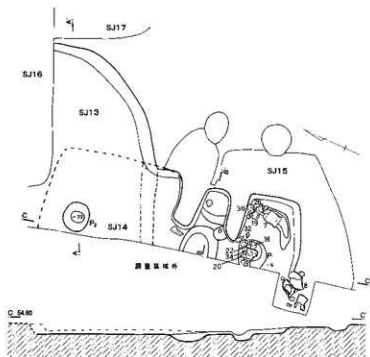
出土遺物は、重複する第14・15号住居跡と混在するため、確実に伴うものを抽出することが難しい(第33・34図)。敢えていえば、第33図5・6の高坏や、胴部の

彫り込みの強い第33図9の裏が伴う可能性があろうか。時期に関しては古墳時代後期、またはそれ以前とするに留めたい。

第14号住居跡 (第32図)

第14号住居跡は、C-1グリッドに位置する。西部は調査区外に掛かり遺構の前葉は不明である。また、第13・15号住居跡と重複し、新旧関係は前者を切り、後者に切られている。

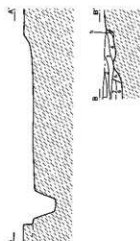
第32図 第13～15号住居跡



平面形は方形と推定されるが、カマド北側の東壁から西壁にかけての部分は明確に検出できなかった。残存規模は長軸4.12m、短軸1.17m(現在長)、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。

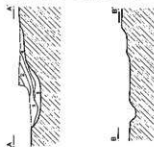
カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁内におさまっている。第4層下面が火床面と思われる。第6～8層はカマド全面の掘方埋土であろう。

ピットは2本検出された。主柱穴としても良い位置



SJ14カマド

- 1 陶 色 土 コム粒少量、焼土塊少量、火灰灰少量
- 2 褐 灰 色 土 焼成色粘土ブロック、焼土粒、炭化物少量
- 3 暗 褐色 土 焼土粒、炭化物、焼成色粘土ブロック少量
- 4 暗 褐色 土 ローム粒多量、ロームブロック、白色粒多量
- 5 に近い黄褐色土 ロームブロック
- 6 に近い黄褐色土 焼土粒、炭化物、焼成色粘土ブロック多量
- 7 黒 褐色 土 ローム粒、白色粒多量、ロームブロック少量
- 8 深 褐色 土 コム粒多量、ロームブロック、炭化物粒少量



SJ15カマド

- 1 陶 色 土 焼土ブロック、炭化物粒少量
- 2 褐 灰 色 土 ロームブロック、焼土粒少量
- 3 暗 褐色 土 焼土粒、炭化物粒多量、焼土ブロック少量
- 4 暗 褐色 土 焼土ブロック、炭化物ブロック少量
- 5 に近い黄褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロック少量

0 2m

にあるがPit 1が上面に遺物があり、深度が浅いため難がある。壁溝はカマド脇のコーナー部に一部検出されたが全周しない。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は第13・15号住居跡のものと混在している。第15号住居跡は本住居の上部に重なることから、相対的に古いものを本住居跡及び第13号住居跡に属するものと考えた(第33図1~14)。

第33図1は環蓋模倣環で、内外面黒色処理が施されている。2は比企型環に似るが、やや小振りで赤彩痕が残らない。3・4は环身模倣環である。7の裏はカマド右脇から出土している。8は本住居跡の破片と南側に隣接する第56号住居跡の破片が接合している。本来的には第56号住居跡に伴うものとした方が良いかもしれない。時期的には古墳時代後期に属する。

第15号住居跡(第32図)

第15号住居跡は、C-1グリッドに位置する。第13号住居跡を切り、第14号住居跡の上面に乗っている。

重複が激しく、遺構の詳細は不明瞭である。

残存規模は長軸4.75m、短軸1.97m(現在長)、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-63°-Eを示す。

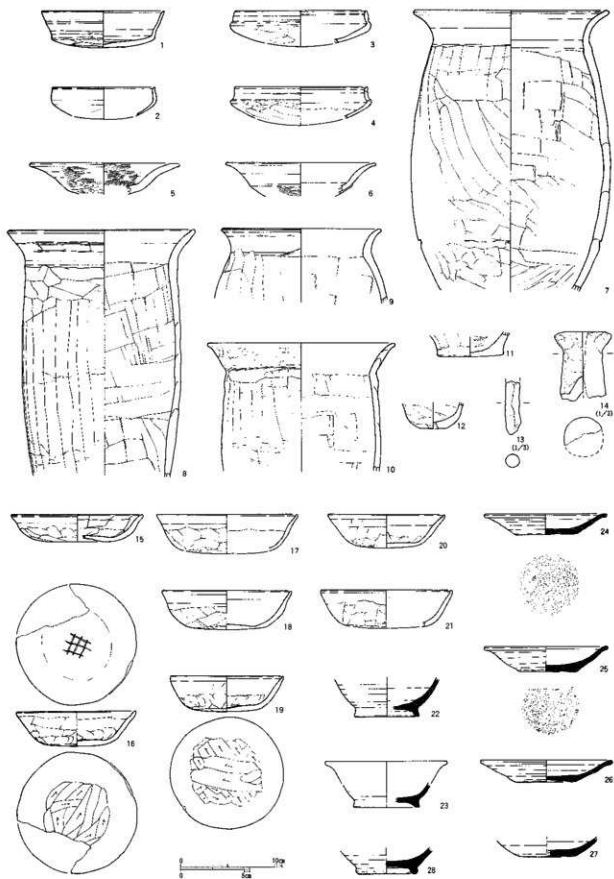
カマドは東壁に設置される。軸は壁ラインに対し、斜行する。底面は2段に掘り込まれ、煙道部は壁外に延びる。火床面は第5層下面か。カマド右脇には幅30~40cm程のテラスが設けられている。棚状施設か。ピットは3本検出されたが、いずれも浅い。

出土遺物は第13~15号住居跡から出土したもののうち、新しい一群を本住居跡に帰属するものと考えた(第33図15~28、第34図29~42)。但し、41・42については伴うか否か不明瞭である。土師器環・甕・小型甕・須恵器環・皿・高台環が検出されている。16の环内面には格子状の線刻がある。36の小型甕胴部には穿孔?がなされ、器表の剥落面にもケズリの跡が見える。須恵器は木野産が主体である。時期的には9世紀後半と考えられる。

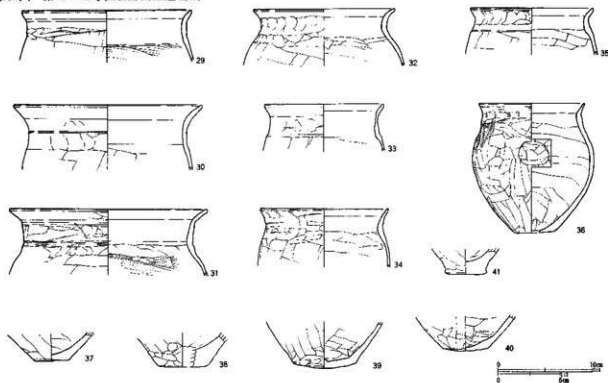
第7表 第13~15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.0)	3.9		HJ	2	褐灰	20	SJ13 内外面黒色処理
2	環	(11.0)	3.0		ABCDE	1	橙	15	SJ13 比企型環か?
3	環	(14.0)	2.9		DHJ	2	灰褐	10	SJ14 内外面黒色処理?
4	環	(14.0)	3.1		HJ	2	にぶい赤褐	15	SJ13
5	高環	(15.0)	3.5		HJ	2	にぶい黄橙	10	SJ13
6	高環	(16.0)	3.5		EHJ	2	橙	10	SJ13 内面はにぶい橙
7	甕	(20.8)	29.5		EHJ	2	にぶい橙	65	SJ14 No.2・3
8	甕	(20.0)	25.9		EHJ	2	にぶい赤褐	60	SJ14 No.8・SJ56
9	甕	(17.0)	7.8		BEHJ	2	にぶい橙	30	SJ13
10	甕	(20.0)	13.5		EHJ	2	橙	20	SJ14・15 No.17
11	甕		2.5	7.1	BDEHJ	2	にぶい橙	50	SJ13
12	手づくね		2.8	(2.8)	BEHJ	2	橙	40	SJ13
13	不明土製品	長 4.20cm	高さ 1.10cm	重量 3.99g	粉		SJ14 カマド		
14	支脚		7.3		BEHJ	2	にぶい橙	40	SJ13
15	環	(14.0)	2.5		AEHJ	2	にぶい橙	15	SJ13
16	環	12.6	3.7	6.8	DEHJ	2	にぶい褐	80	SJ13 No.4
17	環	(15.0)	3.8		DEHJ	2	にぶい赤褐	30	SJ13
18	環	13.8	4.1	8.2	AEHJ	2	橙	75	SJ14 No.13
19	環	12.0	3.8		EHJ	2	にぶい褐	95	SJ14 No.6
20	環	(12.4)	3.5	(6.0)	EHJ	2	にぶい赤褐	50	SJ14 No.8
21	環	(14.0)	3.8	(8.8)	EHJ	2	にぶい橙	10	SJ14 カマド
22	須恵高台環		4.2	(6.9)	AEHJ	2	灰褐	40	SJ14 No.11 木野産
23	須恵高台環		2.5	(7.0)	EHJ	1	灰	20	SJ13 木野産
24	須恵皿	13.1	2.2	6.6	HIJ	1	灰	100	SJ13 木野産
25	須恵皿	13.1	2.6	6.3	AEHJ	2	にぶい黄橙	60	SJ13 No.1 木野産
26	須恵皿	14.0	2.4	5.9	AEHJ	2	褐灰	90	SJ14 No.1 木野産

第33图 第13~15号住居跡出土遺物(I)



第34図 第13～15号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
27	須恵川		2.2	(5.5)	II I J	1	灰	15	SJ14 木野産
28	須恵高台杯		2.8	6.0	ABH I J	2	にぶい橙	100	SJ14 木野産
29	甕	(18.0)	5.5		EII J	2	にぶい橙	15	SJ14 カマド
30	甕	(20.0)	6.8		BDEH J	2	橙	15	SJ13
31	甕	(21.0)	7.0		AEH J	2	にぶい橙	10	SJ14 No.7
32	甕	(15.0)	6.0		EH J	2	にぶい橙	30	SJ14 No.14
33	小型甕	(12.6)	4.9		AH J	2	にぶい橙	10	SJ13
34	小型甕	13.6	6.2		EH J	2	にぶい橙	80	SJ14 No.12
35	小型甕	(13.0)	4.8		EH J	2	にぶい橙		SJ15 カマド
36	小型甕	11.2	13.6	4.2	EII J	2	にぶい橙	90	SJ14 No.4
37	甕		2.9	3.6	ABH I J	2	明赤褐	40	SJ13 底部木炭痕
38	甕		3.6	5.0	EII J	2	にぶい赤褐	15	SJ14
39	甕		4.8	6.6	BH J	2	にぶい橙	40	SJ14
40	甕		3.7	(5.0)	EII J	2	出焼	15	SJ14
41	甕		2.7	4.5	AEH J	2	にぶい橙	100	SJ13 底部木炭痕

第16号住居跡 (第35図)

第16号住居跡は、調査区北西端部のB・C-1グリッドに位置する。北西コーナーは調査区外、北東コーナーは第17～20号住居跡、南コーナーは第13号住居跡と重複する。新田関係は第13・18～20号住居跡を切り、第17号住居跡に切られていた。第1号掘立柱建物跡との切り合いは不明瞭であるが、本住居跡の方が古い可能性が高い。

平面形はほぼ正方形であるが、北壁部は床面が強く結果的にやや歪んだ状態で検出された。規模は長軸5.81m、短軸5.51m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-67°-Eを示す。

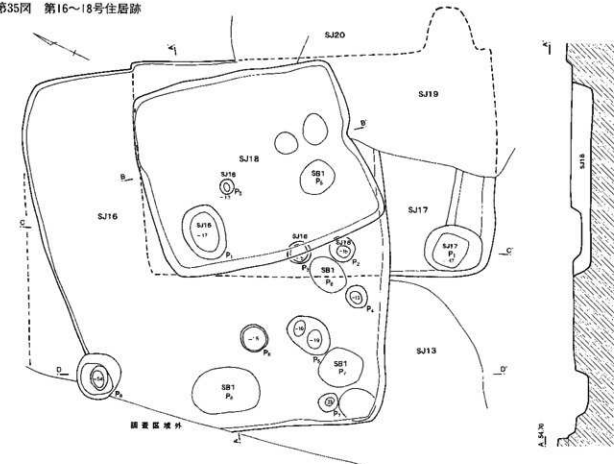
床面はほぼ平坦である。覆土上面に第17号住居跡の粘土が認められた。

カマドは検出されなかった。ピットは8本検出された。主柱穴は不明であるが、Pit 5・8がそれに相当す

る可能性をもつ。

出土遺物は少なく、図化できたものは第36図1の須恵器高台環のみである。床面出土。未野産と思われるが、片岩は含まれない。時期的には9世紀末葉～10世紀初頭頃と推定される。

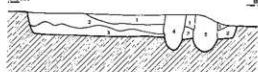
第35図 第16～18号住居跡



第17号住居跡 (第35図)

第17号住居跡は、B・C-1グリッドに位置する。重複する第16・18～20号住居跡を切って掘り込まれていた。確認面で床面の大部分が削平されていたために、遺構の詳細は不明である。

B-54.50



- 1 黒褐色土: ローム粒・白色粘多量、ロームブロック層状に多量
- 2 黒褐色土: ローム粒・白色粘多量、ロームブロック多量、1層より少ない
- 3 黒褐色土: ロームブロックに白色粘多量
- 4 黒褐色土: ロームブロック少量
- 5 黒褐色土: ロームブロック少量

C-54.70



D-54.70



0 2m

平面形は長方形で、規模は長軸5.57m、短軸3.38m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-65°-Eを示す。

カマドは東壁南端に存在したものとされるが、詳細は不明である。ピットは南西コーナーに設けられている。カマド対向ピットと考えられる。また、南壁際に壁溝または掘り方と思われる浅い溝が巡っていた。

出土遺物は少ない(第36図2~6)。2はロクロ土師器の内黒筒で、内面ヘラミガキ、体部下端ヘラケズリが施されている。4も同様にロクロ土師器で、台付鉢第36図 第16~18号住居跡出土遺物

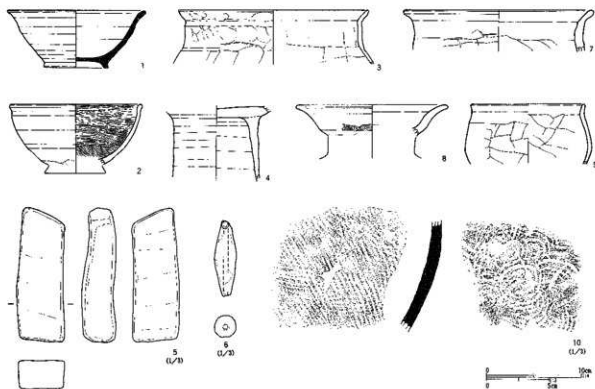
の脚部と考えられる。3の襷は伴わない。時期的には10世紀前半~中頃と考えておきたい。

第18号住居跡 (第35図)

第18号住居跡は、B・C-1グリッドに位置する。重複する第16・17・19・20号住居跡よりも古い。平面形は正方形で、規模は長軸3.54m、短軸3.10m、深さ0.35mを測る。主軸方向はN-37°-Wを示す。

カマド、炉跡、伴うピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ない(第36図7~10)。いずれも小片で



第8表 第16~18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	乳忠高台杯	(14.5)	6.0	(6.8)	E H J	3	灰	40	SJ16 No.1 木野産か 焼き甘い
2	高台碗	(14.0)	6.3		B D E H J	2	にぶい黄橙	20	SJ17 Pit 内黒筒 内面ミガキ、体部下端ケズリ
3	鉢	(20.0)	5.7		B E H J	2	にぶい橙	15	SJ17 Pit
4	台付鉢		8.0		B E H J	2	にぶい橙	80	SJ17 No.1 ロクロ整形、酸化焙焼成
5	磁石?	長 10.50cm	最大径3.75cm	厚さ2.70cm	重量188.85g				SJ17 Pit
6	上鉢	長 5.90cm	厚さ1.70cm	孔径0.35cm	重量12.64g				SJ17
7	鉢	(20.0)	4.3		B E H J	2	にぶい褐	10	SJ18
8	壺	(14.0)	3.1		B E H J	2	にぶい橙	15	SJ18
9	(小型)鉢	(12.0)	6.2		B E H J	2	黄灰	10	SJ18
10	須恵壺						灰		SJ18 木野産 外面平印き 内面同心文状で具

時期決定の目安とするには難がある。7は器壁の厚い甕で胴部は縦方向のヘラケズリが施される。8は二重口縁壺か。9は小型甕または鉢と思われ、胴部はヘラケズリ調整。10は須恵器甕である。時期は不明確であるが、遺物や重複関係から古墳時代前期～7世紀段階までの時間幅の中に収まるであろう。

第19号住居跡 (第37F④)

第19号住居跡は、B・C-1・2グリッドに位置する。第18・20号住居跡を切り、第16・17号住居跡に切られているが、プランは確定できる。

平面形は長方形で、規模は長軸4.57m、短軸3.77m、深さ0.18mを測る。新カマドの主軸方向はN-87.5°-Eを示す。

カマドは2基検出された。1号カマドは東壁の中央に設置され、2号カマドは北壁の西寄りにある。カマドの遺存状態から2号から1号に付け替えられたもの

と考えられる。

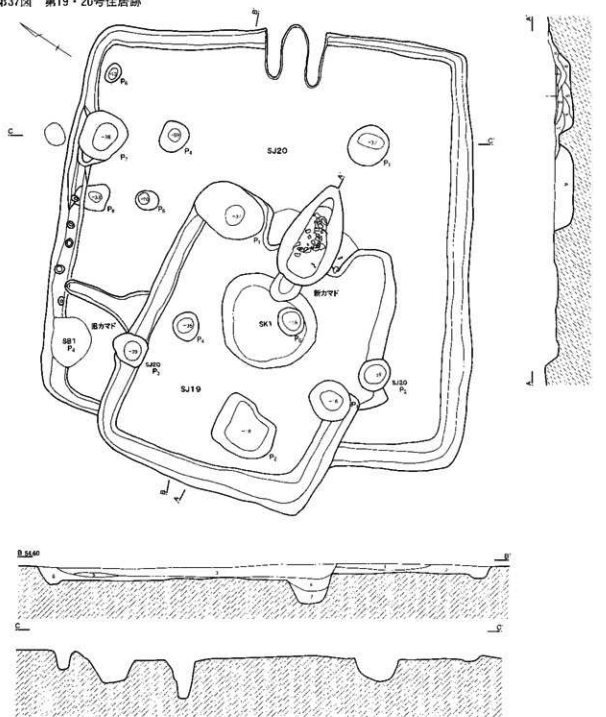
ピットは4本検出された。Pit 1は貯蔵穴と考えられる。他のピットは伴うか否か不明である。また、カマド前面に床下土壌(SK1)が埋り込まれており、ロームブロック混じりの白色粘土が充填されていた。壁溝は全周はしないが巡っている。

出土遺物は比較的多い(第38・39④)。土師器環類・甕・壺・台付甕、須恵器環・甕、土師が検出されている。1～3の土師器環、4の皿、9・10の大振りの環、11の暗文環は本住居跡に伴うものとする。13・14の底部に螺旋暗文を施すタイプは11の暗文環と同類である。須恵器環のうち、16は伴うと見て良い。甕(21～24)は全てカマドから出土した。「コ」の字號定形化以前の武蔵型甕である。29は細物石の集積である。10点出土した。時期的には8世紀末葉～9世紀初頭を中心とした年代であろう。

第9表 第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(11.4)	2.9		DEHJ	2	にぶい褐	40	
2	環	12.0	3.3		BEHJ	2	橙	95	底部焼成後穿孔あり
3	環	(12.4)	2.7		DEHJ	2	にぶい赤褐	45	
4	皿	15.0	2.5		DEHJ	2	にぶい橙	65	
5	環	10.7	4.0		BEHJ	2	橙	95	
6	環	(13.9)	2.2		ABCDE	1		5	内面に放射状暗文
7	環	(12.0)	3.0		EHJ	2	橙	20	
8	環	(16.0)	2.8		EI	2	にぶい橙	10	
9	環	(14.8)	4.0		BHJ	2	橙	40	
10	環	(15.4)	3.6		HJ	2	にぶい赤褐	30	
11	環	(16.4)	3.5		ABCDE	1	橙	10	内面に放射状暗文
12	環	(14.0)	2.8		H	2	灰黄褐	10	内面に放射状暗文
13	環				ABCDE	1	にぶい橙	15	内面ラセン+放射状暗文
14	環				ABCDE	1	にぶい橙	15	内面ラセン+放射状暗文
15	須恵環		1.0	5.1	EHIJ	2	橙	100	底部回転糸切り 未野産
16	須恵環		1.1	(7.4)	BEHIIJ	2	にぶい橙	40	底部回転糸切り 未野産
17	壺	(19.0)	8.6		BEHJ	2	灰褐	30	
18	壺	(20.0)	5.5		BEHJ	2	にぶい褐	20	
19	壺	(24.0)	7.7		DEH	2	にぶい褐	15	
20	壺		15.5	8.2	BEHJ	2	橙	60	
21	甕	(22.0)	5.6		BDEHJ	2	にぶい褐	15	
22	甕	(21.0)	21.8		BDEHJ	2	にぶい橙	40	
23	甕	20.8	22.0		BEHJ	2	橙	70	
24	甕	(22.0)	8.2		BEHJ	2	橙	20	
25	甕		5.4		BDEHJ	2	にぶい橙	70	
26	須恵甕				BEI	2	灰		破片
27	須恵甕				BEIJ	1	灰		破片
28	土盤	共 6.25cm 最大径1.05cm 孔径0.50cm					重量6.60g		にぶい橙

第37図 第19・20号住居跡



SJ19 カマド

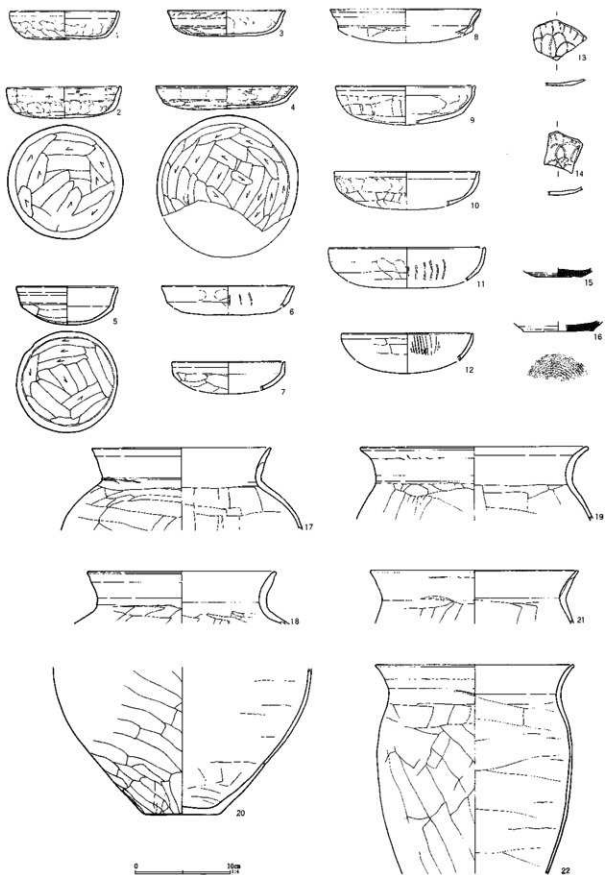
- 1 褐色土 粘土ブロック多数、硬土ブロック少量(カマド北面)
- 2 褐色土 粘土ブロック多数、ローム殻・白色殻少
- 3 緑褐色土 ローム殻・白色殻・粘土殻・炭化物殻少量
- 4 黒褐色土 ローム殻・白色殻少量
- 5 褐色土 ローム殻・白色殻多数、ロームブロック・石灰色粘土ブロック少量
- 6 濃い青褐色土 ローム殻・石灰殻・ロームブロック多数、炭化物殻・粘土殻少量
- 7 濃い青褐色土 ローム殻・白色殻多数、ロームブロック少量
- 8 濃い緑褐色土 ローム殻・白色殻少量
- 9 黄褐色土 ロームブロック・粘土塊・粘土殻・炭化物殻多数

SJ20

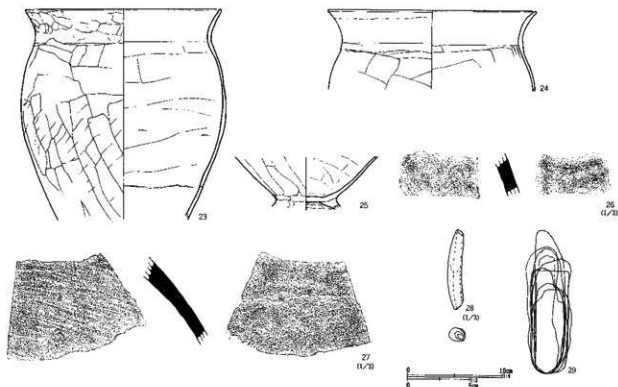
- 1 黄褐色土 ローム殻・白色殻多数、炭化物少量
- 2 青褐色土 ローム殻・石灰殻多数、ロームブロック多数
- 3 黄褐色土 ローム殻・白色殻・ロームブロック多数
- 4 青褐色土 ローム殻・白色殻・ロームブロック多数、粘土殻多数
- 5 黄褐色土 ローム殻・白色殻・ロームブロック多数、炭化物殻・粘土殻多数
- 6 青褐色土 ローム殻・石灰殻・粘土殻多数、ロームブロック少量

0 2m

第38图 第19号住居跡出土物(1)



第39図 第19号住居跡出土遺物(2)



第20号住居跡 (第37・40図)

第20号住居跡は、B・C-1・2グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、第1・18・21号住居跡より新しく、第16・17・19・22・23号住居跡よりも古い。第1号孤立柱建物跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性が高い。

平面形は正方形である。大型の住居跡で、規模は長軸6.78m、短軸6.70m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-65°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆上の堆積状況は自然堆積に近いものと思われる。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁内におさまり、煙道部は削平されていた。火床面は第5層下面か。袖は粘土を使用し、先端には藁を伏せた状態に据えて、芯材としている。煙道部はほぼ削平されている。

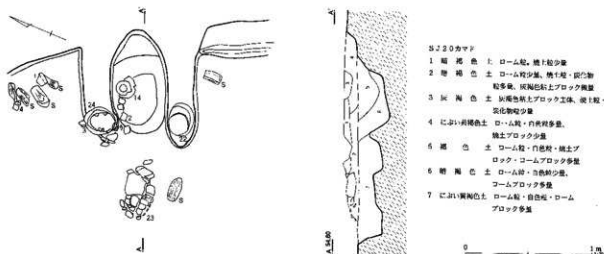
ピットは8本検出された。Pit 1-4は主柱穴と考えられるが、他は伴う可能性は低い。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は比較的多く、カマド内及びその周囲の床面直上から出土している。器種としては土師器環類・高環・甕、須恵器甕がある(第41・42図)。

2の環と14の高環はカマド内から出土した。22・24の甕はカマド袖の補強材として用いられていた。23の甕はカマド前面の床面につぶれた状態で検出された。また、1・3・4の環はカマド周囲の床面から出土している。

1-8は模倣環で、やや小振りのものが主体となる。3・7は混入か。8は坏身模倣環。掘り方出土で伴うか否か不明である。9-13はより新しい一群の土器で他住居からの混入であろう。14の高環はカマド内から出土した。16・17の高環、20・21の甕も伴うものではない。22-24の甕はカマドまたはその周囲から出土したもので住居跡に伴うものである。胴部の長胴化が顕著に進んだ段階である。須恵器の甕(26-27)は伴うか否か不明。未野産である。時期的には7世紀前半段階であろう。

第40図 第20号住居跡カマド



- 第20号カマド
- 1 焼 褐色土 ローム状、焼土粒少量
 - 2 焼 褐色土 ローム状少量、焼土粒、灰土粒少量、灰褐色土ブロック状少量
 - 3 灰 褐色土 灰褐色土ブロック状、灰土粒、灰化粒少量
 - 4 におい黄褐色土 ローム状、内側側少量、焼土ブロック少量
 - 5 焼 褐色土 ローム状、白土粒、焼土ブロック、ロームアブロック少量
 - 6 焼 褐色土 ローム状、白土粒少量、ロームアブロック少量
 - 7 におい黄褐色土 ローム状、白土粒、ロームアブロック少量

第10表 第20号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(12.0)	4.0		BH	2	にぶい褐色	35	内外面黒色処理	
2	坏	(11.4)	3.9		BH	2	にぶい褐色	85		
3	坏	(14.0)	4.2		EIIJ	3	褐色	10		
4	坏	(12.6)	3.3		BDEH	2	にぶい褐色	20		
5	坏	(11.6)	4.0		EIIJ	2	褐色	40		
6	坏	(12.0)	3.6		AEH	2	にぶい褐色	20		
7	坏		3.0		II	2	にぶい黄褐色	10		
8	坏	(12.0)	3.2		HJ	2	褐色	10		
9	坏	(13.0)	2.6		EII	3	褐色	20		
10	坏	(12.0)	3.4		EHJ	2	にぶい褐色	20		
11	坏	(13.0)	2.9		EIIJ	2	にぶい褐色	20		黒色処理?
12	坏	(12.0)	3.0		EH	2	黒褐色	10		
13	坏	(16.0)	3.5		BEIIJ	2	にぶい褐色	25		脚部外面ヘラミガキ
14	高坏	(16.2)	12.9	12.3	BEH	2	褐色	85		
15	高坏		2.3		BEIIJ	2	褐色	80		
16	高坏		4.3		BEHJ	2	にぶい赤褐色	80		
17	高坏		3.0	(13.6)	BDEIIJ	2	褐色	20	脚部外面ヘラミガキ	
18	甕		2.1	5.8	BEHJ	2	灰褐色	90	脚部外面ハケメ	
19	甕又は瓶	(24.0)	3.4		DEIIJ	2	灰黄褐色	10		
20	甕	(16.0)	4.8		BEHJ	2	灰黄褐色	15		
21	甕	(20.0)	2.8		BEIIJ	2	にぶい褐色	10		
22	甕	21.8	15.7		BEHJ	2	にぶい褐色	80		
23	甕	21.2	32.5	2.9		2	にぶい黄褐色	70		
24	甕	20.4	37.9	4.8	BDEHJ	2	にぶい褐色	70		
25	碎石	長4.05cm 最大径3.35cm 厚さ2.50cm 重量19.32g 角閃石安山岩製								
26	甕				EIIJ	1	黄灰	破片	木野産	
27	甕				EHIJ	1	灰	破片	木野産	

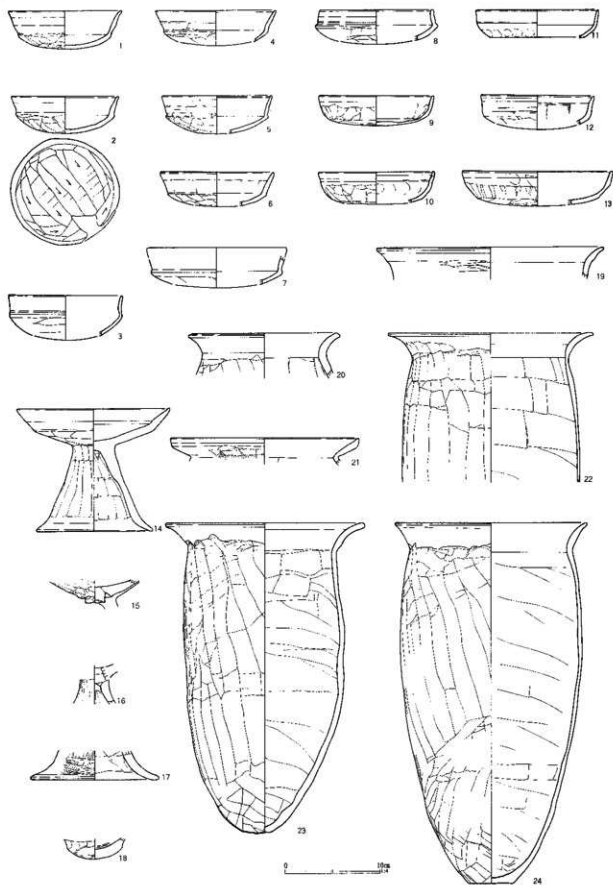
第21号住居跡 (第43図)

第21号住居跡は、C-1・2グリッドに位置する。重複関係は第1号住居跡(縄文時代)を切り、第20・22・24号住居跡に切られていた。遺構の遺存状態は悪

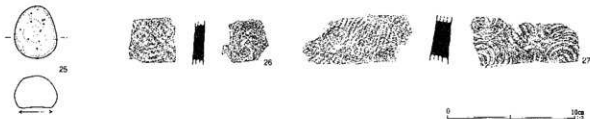
く、詳細は不明である。

平面形は方形または長方形と推定され、残存規模は長軸5.40m、短軸4.60m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-56°-Eを示す。

第41图 第20号住居跡出土遺物(1)



第42図 第20号住居跡出土遺物(2)



カマドは検出されなかった。ピットは4本検出され、Pit 2～4が主柱穴に相当しよう。壁溝は南西壁と南東壁で確認された。

出土遺物は少ないが、遺存率の高い環が3点出土している(第43図)。いずれも床面または床面近くから検

出されたもので、遺構に伴うと考えて良い。1は環身横做環、2は環蓋横做環、3・4は有段口縁環である。4は内外面黒色処理が施されている。7は礫物石の集積である。4点出土した。時期は古墳時代後期、6世紀木葉～7世紀初頭頃であろう。

第11表 第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.8	3.7		A B E H J	2	明赤褐	100	若干、表面が剥離気味
2	環	12.6	4.3		B E H J	2	灰黄褐	95	
3	環	12.6	3.8		B E H J	2	橙	80	
4	環	(13.4)	4.0		B E H J	2	灰黄褐	45	内外面黒色処理
5	壺	(24.0)	5.5		B E H J	2	にぶい赤褐	90	
6	上製支脚		9.3		A E H J	3	にぶい黄橙	50	長 9.30cm 最大径5.20cm

第22号住居跡(第44図)

第22号住居跡は、B・C-2グリッドに位置する。第20・21・23号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しいものと判断した。

平面形は長方形で、規模は長軸4.22m、短軸3.31m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。

床面は緩やかな起伏をもつ。カマドは第23号住居跡カマドと位置的に重なっていた可能性があるが、明確に検出できなかった。

ピットは3本検出されたが、柱穴ではないであろう。壁溝は東壁から北壁にかけて部分的に巡っていた。

出土遺物は少なく、重複する第23号住居跡に帰属すると思われる遺物が混在していた(第45図)。本住居跡に礎火に伴うと思われる遺物は15・16である。15は厚底の甕底部である。底部外面は離れ砂技法によると思われる砂が付着していた。16はロクロ土師器の高右腕である。17は赤焼けの環底部で回転糸切り痕が残され、伴う可能性がある。住居の時期は10世紀前半～中

頃と推定しておきたい。

第23号住居跡(第44図)

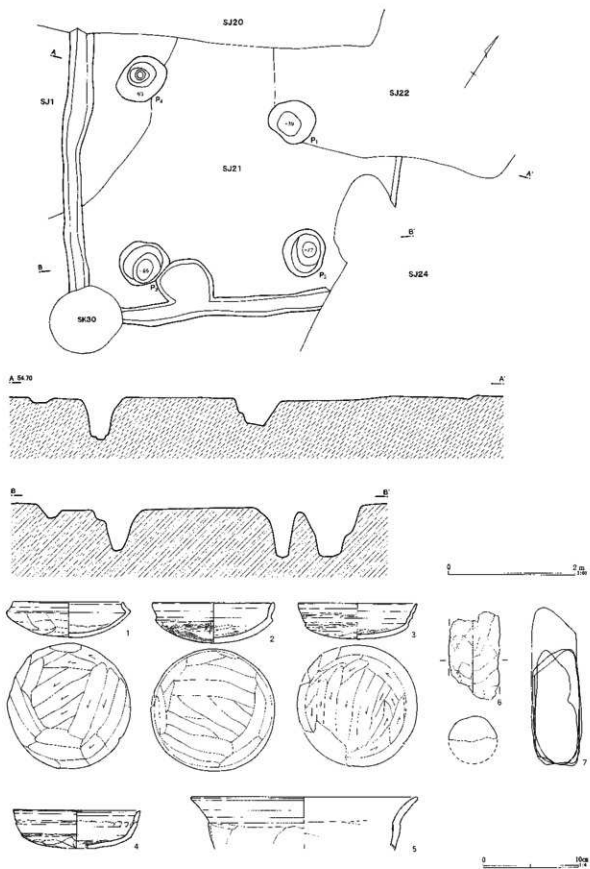
第23号住居跡は、B・C-2グリッドに位置する。重複する第20号住居跡よりも新しく、第22号住居跡よりも古いものと考えられる。遺構の遺存状態が悪く、詳細は不明である。

平面形は方形と考えられる。規模は掘り方ラインでおよそ復元できる。長軸4.00m、短軸3.52m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

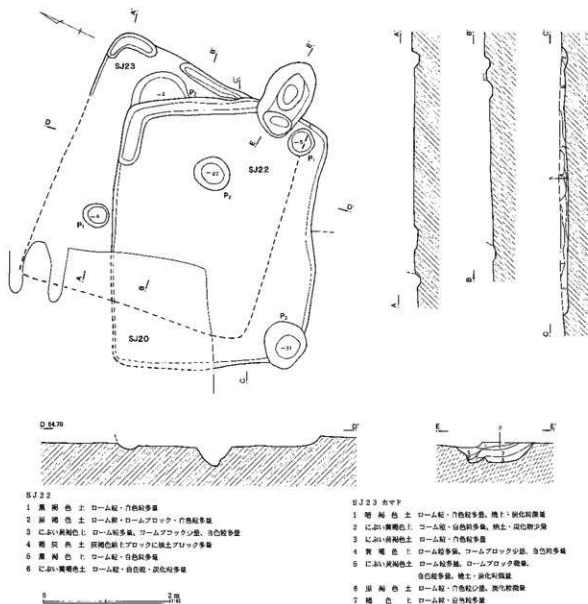
床面は部分的に残るのみで、状態はよくわからない。カマドは東壁の南寄りに設置されていた。燃焼部は壁ラインを掘り込んで構築されていた。ピットは2本検出されたが、いずれも浅く柱穴にはならない。壁溝は東壁部に一部巡っていた。

出土遺物は少なく、重複住居跡のものが混入している。第45図2・9・10は本住居跡の覆土出土。5・12・14はカマドから出土した。1・13は第22号住居跡の掘り方出のものとして本住居跡に伴うであろう。3・6は第22号住居跡出土であるが、本住居に帰属する可能

第43图 第21号住居跡・出土遺物



第44図 第22・23号住居跡



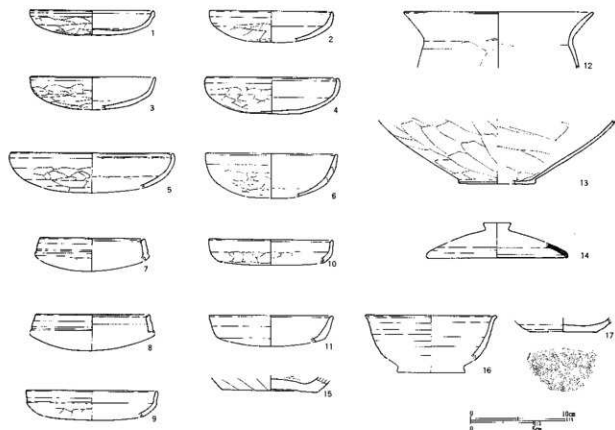
性が高い。カマド出土遺物を中心に考えると第45図7～11及び第22号住居跡に伴うであろう15～17を除い

た遺物が本住居跡に帰属するものと考えておく。時期は8世紀前半と考えられる。

第12表 第22・23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(13.0)	2.6		BIIJ	2	橙	20	SJ22擬り方
2	杯	(12.0)	2.5		EHJ	2	橙	15	SJ22
3	杯	(13.2)	3.4		HJ	2	にぶい赤褐	30	SJ22
4	杯	(13.8)	3.5		EHJ	2	にぶい褐	45	SJ22
5	杯	(17.0)	3.7		EHJ	2	にぶい橙	20	SJ23カマド
6	杯	(13.8)	4.6		BEIJ	2	にぶい橙	10	SJ22
7	杯	11.0	2.3		DEH	2	黒褐	10	SJ22
8	杯	11.0	1.8		DEII	2	黒褐	20	SJ22
9	杯	(13.6)	2.7		EHJ	2	にぶい橙	10	SJ23
10	杯	(13.2)	2.4		ABCDE	1	橙	40	SJ23カマド

第45図 第22・23号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
11	環	(13.2)	2.6		EH	1	にぶい黄緑	10	SJ22
12	甕	(20.0)	5.9		ADEHJ	2	橙	10	SJ23カマド
13	甕		7.8	(8.2)	BEHJ	3	橙	40	SJ22振り方
14	須恵瓦	(15.0)	1.6		HJ	3	褐灰	20	SJ23カマド 内面淡黄緑 群鳥所か
15	甕		1.6	(10.2)	BDEHJ	2	灰黄褐	40	SJ22 底部砂鉄
16	高台椀	(14.0)	4.7		BDHJ	2	橙	10	SJ22 ロクロ土師器
17	環		1.5	7.4	EHJ	2	橙	50	SJ22 ロクロ土師器か

第24号住居跡 (第46図)

第24号住居跡は、C-2・3グリッドに位置する。重複関係は、第21・25号住居跡を切り、第26号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸4.26m、短軸2.95m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-10°-Wを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは2基検出され、1号カマドは北壁の東寄り、2号カマドは東壁の南寄りに設置されていた。カマドの遺存状態から2号カマドから1号カマドに付け替えられたものと考えられる。

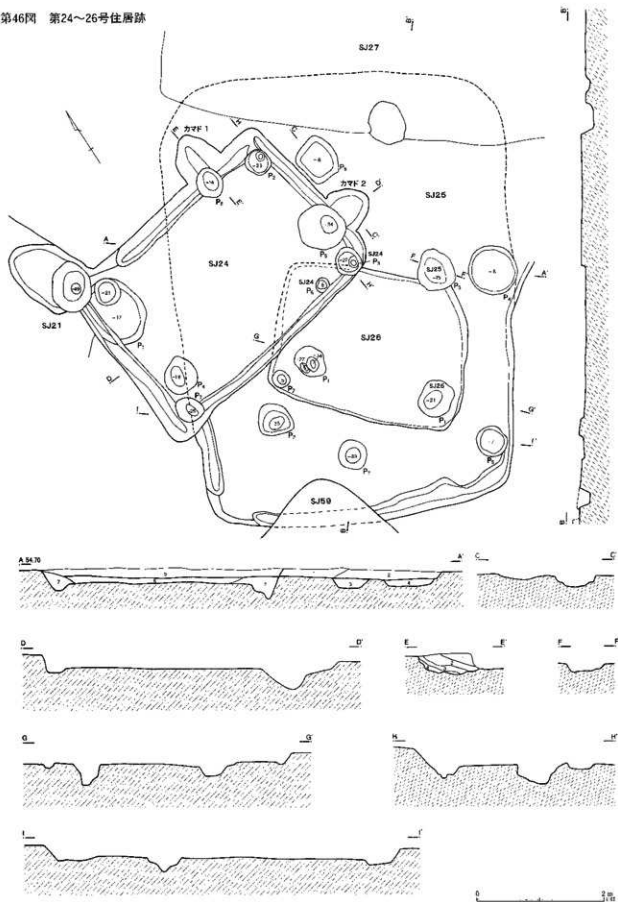
ピットは7本検出された。各コーナーに1本ずつあ

るが、深さがやや浅く、柱穴となるかどうかは不明である。Pit 5・8はカマドに伴う掘り込みと思われる。壁溝は南西コーナーを除いて全周する。

出土遺物は少なく、第25・26号住居跡の遺物と一部は混在していた。第47図1・4・8・14・18が本住居跡から出土した遺物である。1は南壁際、4はPit 1出土である。内屈及び内湾口縁の北武蔵型環かあり、7世紀末葉から降っても8世紀初頭頃の時期であろう。

第25号住居跡 (第46図)

第25号住居跡は、C-2・3グリッドに位置する。6軒の住居跡と重複しており、新旧関係は必ずしも明確にはできなかったが、第27号住居跡よりも新しく、

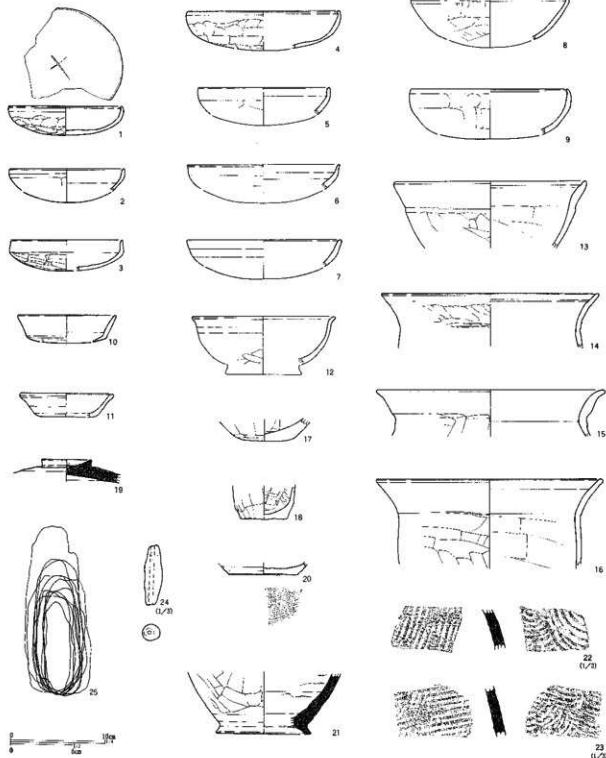


第47図 第24～26号住居跡出土遺物

- 1 陶 褐色土 ローム状多量、ロームブロック・数十粒少量、白色粒多量
 2 陶 色 土 ローム粒、白色粒多量、黄赤粒・粘土粒少量
 3 陶 褐色土 コーム少量、ロームブロック多量、白色粒少量
 4 陶 褐色土 ロームブロック多量、ローム粒、白色粒少量
 5 陶 褐色土 ローム状多量、ロームブロック少量、白色粒・黄赤粒・
 粘土粒多量
 6 紅土・黄褐色土 ローム粒、白色粒・粘土粒、黄赤粒多量
 7 陶 褐色土 ロームブロック多量

S J 2 4 (A V F F)

- 1 陶 褐色土 ローム粒・白色粒・赤土粒・黄赤粒少量、陶器質粘土
 ブロック多量
 2 陶 褐色土 ローム粒、白色粒少量、白色粒上アブロック少量、
 粘土粒多量（×状粒少量）
 3 陶 褐色土 ローム粒・ロームブロック、白色粒多量
 4 片 褐色土 ローム粒・白色粒多量、黄赤粒少量



第24・26・28・59号住居跡よりも古いものと考えられる。第29号住居跡との新田関係は不明である。

平面形は長方形と推定されるが、北側半分は形態を明確に押さえることができなかった。規模は長軸7.05m(推定)、短軸5.42m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-31.5°-Eを示す。

カマドは検出されなかった。ピットは7本検出され、Pit 1・2は主柱穴に相当するかもしれないが、全体の柱穴配置は不明である。壁溝は南壁部を中心に部分的に巡る。

出土遺物は第47図3・5・7・15・17・20・23が本住居跡から検出された。25は罫物石で12点出土した。土器は細片が多く、また、他住居の遺物が混入している可能性がある。時期は不明確であるが、第24号住居跡との新田関係も考慮して、7世紀後半以前とするに

留めたい。

第26号住居跡 (第46図)

第26号住居跡は、C-2・3グリッドに位置する。第24・25号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しいものと考えられる。

平面形は長方形で、規模は長軸3.10m、短軸2.33m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-42°-Wを示す。床面は概ね平坦であるが、掘り込みが浅く、北東部は明確に検出できなかった。カマドは検出されなかったが、第25号住居跡 Pit 3 の上面に重なっていた可能性がある。ピットは2本検出されたが、伴うか否か不明。本住居跡から出土した遺物は、第47図2・9・11-13・19・21・22・24がある。確実に伴うものは11のロクロ土師器小皿と12のロクロ土師器高台碗である。時期的には10世紀後半-11世紀初頭頃であろう。

第13表 第24～26号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.0)	3.0		BEHJ	2	にぶい橙	45	SJ24 底部内面にヘラ記号
2	坏	(12.0)	2.3		DE	2	にぶい橙	5	SJ26
3	坏	(11.8)	3.2		FHJ	2	橙	45	SJ25
4	坏	(16.0)	3.9		BEHJ	2	橙	20	SJ25
5	坏	(13.6)	3.0		ABCDE	1	橙	10	SJ25
6	坏	(15.0)	2.6		ABCDE	1	橙	5	SJ24 Pit 1
7	坏	(16.1)	3.9		ABCDE	1	橙	5	SJ25
8	坏	(16.0)	4.8		BEIJ	2	にぶい橙	10	SJ24
9	坏	(16.4)	5.0		ABCDE	1	橙	10	SJ26
10	坏	(10.2)	2.8		ABCDE	1	にぶい黄橙	5	SJ25
11	小皿	(9.7)	2.5	(6.1)	ABCDE	1	にぶい橙	5	SJ26 ロクロ土師器
12	高台碗	(14.0)	5.0		BEIJ	2	にぶい黄橙	10	SJ26 ロクロ土師器
13	鉢	(20.0)	7.0		BEHJ	2	にぶい橙	10	SJ26
14	甕	(25.0)	5.5		EIJ	2	橙	15	SJ24
15	甕	(24.0)	4.9		ABCDE	2	橙	10	SJ25 大粒の砂子が多量に混入
16	甕	(24.0)	9.5		BEIJ	2	にぶい橙	10	SJ25 Pit 3
17	甕		2.3	(6.0)	ABCDE	2	にぶい褐	35	SJ25 内面は非常に丁寧なナゲで黒色
18	小型甕?		3.6	4.8	BEIJ	2	にぶい褐	90	SJ24
19	須恵瓷		2.4		BHJ	1	灰白	60	SJ26 つまみ径5.4cm 秋間産と思われる
20	坏	1.3	(7.4)		BHJ	1	にぶい黄橙	25	SJ25 ロクロ土師器
21	須恵長頸瓶		6.5	(10.0)	BHIJ	1	灰	20	SJ26 体部下端ヘラクズリ・ナゲ 本野産
22	須恵甕				BEHJJ	1	灰		SJ26 本野産 外面縦格子叩き、内面青海波文
23	須恵甕				BEHJJ	1	灰		SJ25 本野産 外面縦格子叩き、内面青海波文
24	土師	長4.75cm 最大径1.45cm 孔径0.30cm 重量7.80g SJ26							

第27号住居跡 (第48回)

第27号住居跡は、B-3、C-2・3グリッドに位置する。遺構密集区の一隅にあり、多数の遺構と重複していた。重複関係は第3号住居跡よりも新しく、第4・25・28・30号住居跡、第4号掘立柱建物跡よりも古いものと判断した。第29号住居跡との新旧関係は不明であるが、本住居跡の方が古い可能性が高い。

平面形は正方形で、規模は長軸6.13m、短軸6.05m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-46°-Wを示す。床面は概ね平坦である。カマドは北壁の中央に設置され、燃焼部はほぼ壁内におさまる。ピットは12本検出された。Pit 5~7は位置的に主柱穴に相当するが、Pit 7は深度が浅い。カマド左側のPit 1は貯蔵穴と思われる。深さ約50cm。

出土遺物は土師器と須恵器があるが小片が多い。重複する第28号住居跡に帰属すると思われる遺物が一部混在するほか、明らかな混入遺物もある(第49・50回)。第49回1は身身模倣坏で、遺存率が高い。本住居跡に伴う遺物と考えて良いであろう。口径11cmと小型化が進んでいる。他には第49回2~4・6・11~17が本住居跡に帰属する可能性がある。时期的には古墳時代後期、7世紀前半頃と推定される。

第28号住居跡 (第48回)

第28号住居跡はC-2・3グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第25・27・29号住居跡を切っている。第4・5号掘立柱建物跡との前後関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性が高いものと判断した。

平面形は長方形で、規模は長軸3.84m、短軸2.93m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-21°-Wを示す。床面は概ね平坦である。カマドは北壁の東寄りに設置され、燃焼部は壁を掘り込んで構築されていた。焚口部の内脇には片岩系の石が据えられている。

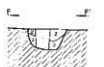
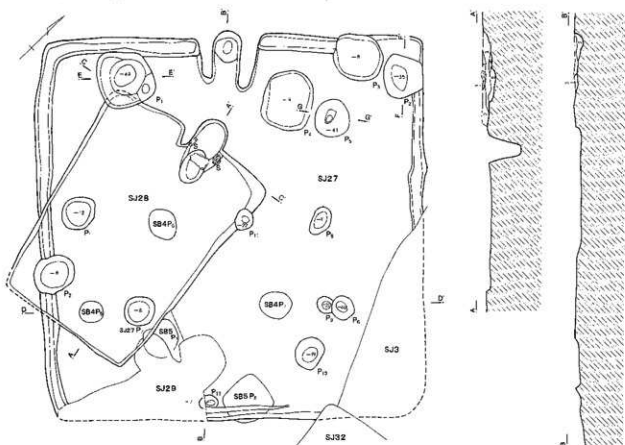
ピットは2本検出されたが、いずれも住居に伴うものではない。

出土遺物は土師器環類(第49回27~29)、須恵器環・蓋類(21~25)、須恵器甕(26・33・34)、土師器甕(30~32)等があるが、一部は重複する第27号住居跡から出土したものも含まれている。須恵器蓋(21~23)と土師器甕はカマドから出土しており、確実に本住居跡に帰属するものである。33・34の須恵器甕は伴うか否か不明である。須恵器供膳器と土師器甕の様相から、时期的には9世紀後半に位置づけられる。

第14表 第27・28号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.0	3.6		DEH	2	にぶい褐色	75	SJ27・28 内外面黒色処理
2	環	(12.0)	2.5		ABCDE	1	橙	10	SJ27カマド
3	環	(11.8)	3.8		EHJ	2	橙	20	SJ27
4	環	(11.2)	2.1		ABCDE	1	明赤褐色	10	SJ28
5	環	(13.0)	1.7		ABCDE	1	橙	10	SJ27
6	環	(16.0)	4.4		A E H J	2	にぶい黄褐色	45	SJ27
7	環	(14.0)	3.0		EHJ	2	にぶい橙	10	SJ27 内面放射状暗文
8	皿	17.0	2.3		ABCDE	1	明赤褐色	10	SJ28
9	皿	(18.0)	2.5		ABCDE	1	橙	10	SJ27
10	皿	(20.0)	1.2		ABCDE	2	橙	20	SJ27
11	鉢	(9.3)	3.4		ABCDE	1	にぶい赤褐色	10	SJ27
12	鉢	(9.4)	4.6		ABCDE	1	にぶい黄褐色	10	SJ28
13	甕	(22.0)	10.7		BEHJ	2	灰黄褐色	20	SJ27
14	甕	(20.0)	16.3		BEHJ	2	橙	40	SJ27 No.11・SJ28
15	甕		6.2	(7.4)	EHJ	2	にぶい褐色	15	SJ27
16	甕		4.1	9.0	EHJ	2	にぶい黄褐色	70	SJ27
17	甕		4.5	8.5	EH	2	にぶい橙	65	SJ27
18	高環		2.0	(16.0)	BHJ	2	にぶい褐色	10	SJ27
19	器台?		3.6		EHJ	2	にぶい橙	45	SJ27

第48回 第27・28号住居跡



SJ27 カヤト

- 1 褐色土 ローム殻・白色粘多量、粘土ブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム殻・白色粘多量、炭化物少量、陶器片・フコク磁器
- 3 におい・黄褐色土 コームブロック

SJ27 Ph1

- 1 褐色土 ローム粘多量、ロームブロック少量、白色粘多量
- 2 におい・黄褐色土 ローム殻・ロームブロック・白色粘多量
- 3 におい・黄褐色土 ロームブロック

SJ27 Ph2

- 1 暗褐色土 ローム殻・白色粘少量
- 2 褐色土 コーム殻・白色粘多量
- 3 におい・黄褐色土 ローム粘多量、ロームブロック少量、白色粘多量

SJ27 Ph5

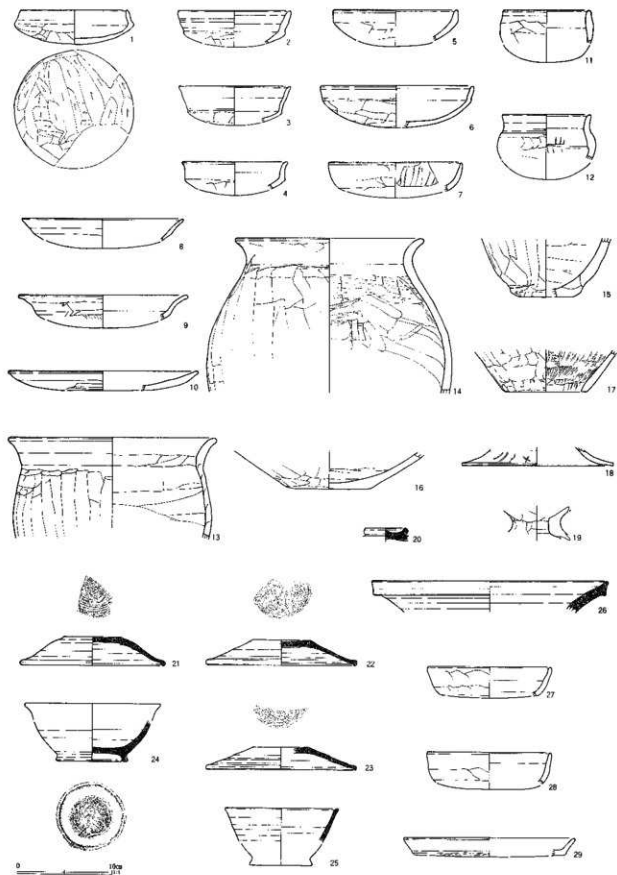
- 1 暗褐色土 コーム殻・白色粘多量
- 2 暗褐色土 コーム粘多量、ロームブロック少量、白色粘多量
- 3 暗褐色土 ローム粘多量、ロームブロック少量、白色粘多量

SJ28 カヤト

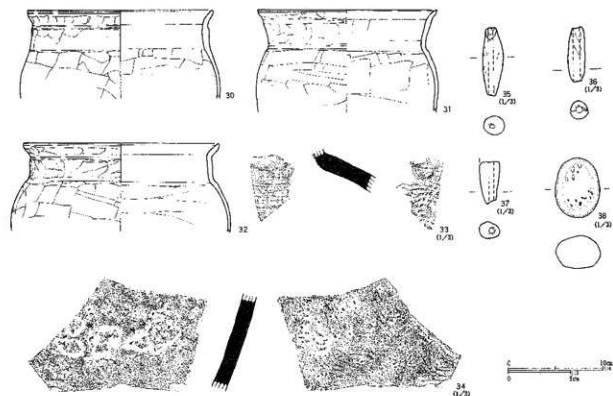
- 1 暗褐色土 コーム殻・白色粘多量、炭化物・粘土粘多量
- 2 におい・黄褐色土 ローム殻・白色粘多量
- 3 褐色土 コーム殻・白色粘少量、粘土粘・炭化物粘
- 4 暗褐色土 粘土ブロック少量
- 5 暗褐色土 ローム殻・白色粘・炭化物粘多量

0 2m

第49图 第27・28号住居跡出土遺物(1)



第50図 第27・28号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
20	須恵蓋		1.4		H J	1	灰白	90	SJ27 つまみ部径4.2cm 群馬産(秋間家か)
21	須恵蓋	(15.0)	3.0	(6.0)	A E H I J	2	にぶい黄橙	15	SJ27・SJ28カマド 末野産
22	須恵蓋	(15.6)	2.7	(6.2)	A H I J	1	灰黄褐	35	SJ27・SJ28カマド 末野産
23	須恵蓋	(15.6)	2.4	(5.8)	A E H I J	2	にぶい橙	25	SJ28カマド 末野産
24	須恵高台碗		4.3	7.6	B E H I J	1	灰	60	SJ28 末野産 底部完存
25	須恵高台碗	(12.0)	3.5		E H I J	1	灰	10	SJ27 末野産
26	須恵鉢	(25.0)	3.3		E H I J	1	灰	10	SJ27 末野産
27	坏	(12.2)	3.0		A B C D E	1	橙	10	SJ27
28	坏	13.0	3.2		A B C D E	2	橙	10	SJ28
29	皿	(18.0)	1.5		A B C D E	2	にぶい赤褐	10	SJ27
30	鉢	19.8	9.3		B E H I J	2	にぶい橙	60	SJ28カマド
31	鉢	(19.0)	10.8		B E H J	2	にぶい橙	40	SJ28カマド
32	鉢	20.8	9.3		B E H J	2	橙	70	SJ28カマド
33	須恵鉢				E H J	1	灰白	破片	SJ28 末野産か
34	須恵鉢				E H J	1	灰白	破片	SJ27 群馬産(秋間か藤岡)
35	土鏃	長 5.35cm	最大径1.60cm	孔径0.30-0.40cm			重量11.30g	SJ28	
36	土鏃	長 4.30cm	最大径1.40cm	孔径0.50cm			重量4.02g	SJ28	
37	土鏃	長 3.30cm	最大径1.60cm	孔径0.40cm			重量5.79g	SJ28	
38	軽石	長 4.70cm	最大幅3.55cm	厚さ2.55cm			重量33.37g		角閃石安山岩製 SJ28

第29号住居跡 (第51図)

第29号住居跡は、C-3グリッドに位置する。重複する第28・30号住居跡に切られ、遺構の遺存状態は極めて悪い。第25・27号住居跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。また、

第5号掘立柱建物跡は本住居跡の床面下に検出され、本住居跡の方が新しいものと考えられる。

平面形は不明。規模は南北長2.32m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-26°-Eを示す。

床面は一定せず、カマドから南壁に向かって段差が

付く。2軒の重複の可能性もあるが、不確定要素が多く、ここでは1軒と把握しておく。

カマドは北壁に設置され、燃焼部は壁を掘り込んで構築されている。ピット、貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、第30号住居跡と混在するため、確実に関連する遺物を抽出できない(第51図1~3)。時期も不明確で、重複遺構との関係から9世紀後半以前と把握するに留めた。

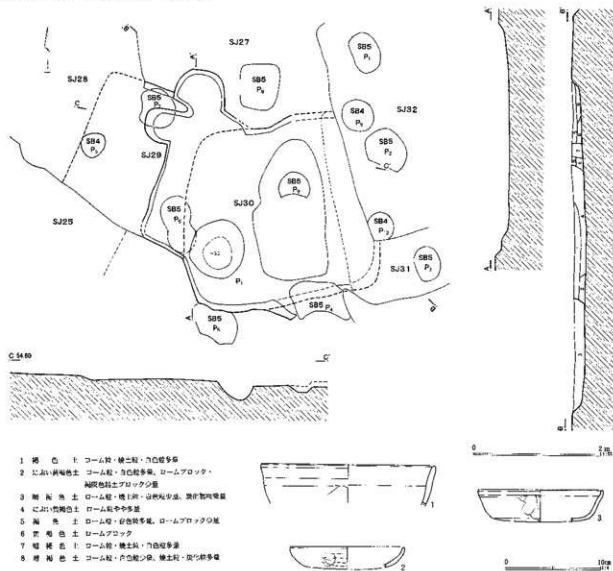
第30号住居跡(第51図)

第30号住居跡は、C-3グリッドに位置する。重複する第29号住居跡及び第5号掘立柱建物跡を切り、第51図 第29・30号住居跡・出土遺物

31号住居跡に切られている。遺構の遺存状態は極めて悪く、規模や形態など不明点が多い。

平面形は方形系統と推定され、規模は長軸3.07m(現在長)、短軸2.85m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。ピットは1本検出されたが、カマドは確認されなかった。

出土遺物は第29号住居跡と混在する形で少量検出されたが、確実に帰属する遺物は抽出できない(第51図1~3)。時期は不明確である。ただ、東側に重複する第31号住居跡とはば軸を揃えていることから、本住居跡から第31号住居跡へ建て替えられた可能性もある。



第15表 第29・30号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(18.0)	4.2		I	1	橙	5	SJ29・30
2	坏	(12.0)	2.5		D	1	粒	10	SJ29・30
3	坏	(13.0)	3.3		AD	1	にぶい橙	10	SJ29・30

第31号住居跡 (第52図)

第31号住居跡は、C-3グリッドに位置する。重複する第30・32号住居跡を切って掘り込まれていた。

平面形は正方形である。推定規模は長軸3.12m、短軸2.46m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-76°Eを示す。

カマドは東壁の南端に設置されている。燃焼部は壁を掘り込んで構築され、石製支脚と抽石が遺存していた。火床面は熱を受け、焼土化していた(第6層)。

ビットはカマド前面から1本検出されたが、柱穴ではなからう。その他、床土層が1基検出されている。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器高台碗が3点、土鏝が2点検出されたに留まる(第53図1~5)。3は内面黒色処理が施されている。時期は10世紀後半代と考えられる。

第32号住居跡 (第52図)

第32号住居跡は、C-3・4グリッドに位置する。重複する第3・33・34号住居跡を切り、第31号住居跡が覆土層に乗っている。第4・5号掘立柱建物跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長軸4.03m、短軸3.20m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-84°Eを示す。床面は平坦で堅く踏み固められていた。カマドは東壁のほぼ中央に設置されている。燃焼部は壁を掘り込み、底面は深い。カマド右脇(南側)の壁外には深さ5cmほどの浅い張り出し部が附属していた。いわゆる棚状施設かもしれない。

ビットは3本検出されたが、不規則な配置で深度も浅く、柱穴にはならないであろう。壁溝はカマドの周囲を除いて通っている。

出土遺物は比較的多い。特にカマドとその周辺部からまとまって出土した。土師器環・甕・台付甕、須恵

器環・高台碗・長頸瓶・甕、灰釉陶器碗などがある(第53・54図6~41)。12・13・16は混入と考えられる。

須恵器供膳器では、無蒸化した高台碗が主体となり、無台環の比率は減っている。須恵器は末野産が主体となり、長頸瓶と甕の一部に東金子産かと思われるものが認められた。

土師器甕はいわゆる「コ」の字状口縁である。28の灰釉陶器碗は東島産で、腰部以下を回転ヘラケズリ調整している。灰釉は跡毛塗りかもしれない。ヶヶ丘1号窯式期の範疇に入る可能性がある。住居の時期は9世紀後半~末葉頃と考えられる。

第33号住居跡 (第52図)

第33号住居跡は、C-3・4グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係は、第3号住居跡を切り、第32号住居跡に切られていた。第34号住居跡との関係は不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は不整形で、北東壁部は擾乱を受けていた。規模は長軸3.40m、短軸2.31m(現在長)、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-130°Eを示す。

カマドは検出されなかった。ビットは1本検出されたが、住居に伴うか否か不明である。

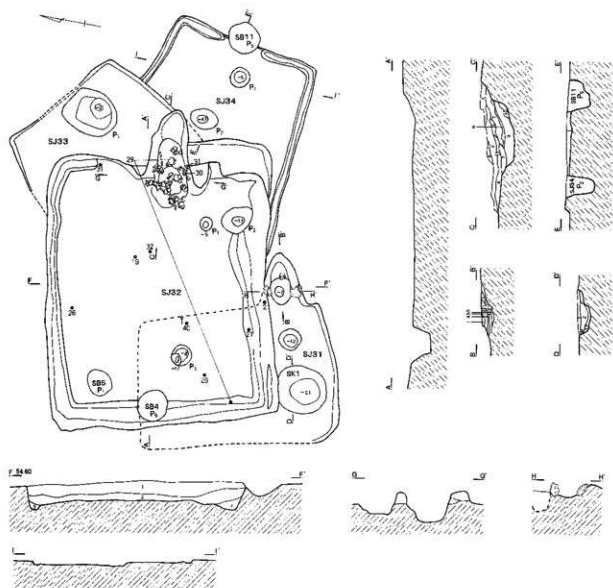
遺物は全く検出されず、住居跡の時期を明確にすることはできない。

第34号住居跡 (第52図)

第34号住居跡は、C-3・4グリッドに位置する。壁溝の存在から遺構の形態や規模は判明するが、床面がほとんど削平されており、遺構の詳細は不明である。重複遺構との関係は、第3号住居跡を切り、第32号住居跡及び第11号掘立柱建物跡に切られていた。第33号住居跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長軸3.26m(現在長)、短軸2.91mを測る。主軸方向はN-101°Eを示す。

第52図 第31～34号住居跡



SJ31 カマド

- 1 褐色土 ローム層、自然砂多量、褐色色粘土ブロック散在
- 2 褐色土 ローム層、自然砂多量、炭土塊、炭化燧石
- 3 濃い黄褐色土 ローム層、自然砂多量、褐色色粘土ブロック散在
- 4 赤褐色土 焼土ブロック
- 5 黄褐色土 ローム層、自然砂多量、炭化燧石、焼土塊少量
- 6 赤褐色土 焼土ブロック

SJ31 床下土層

- 1 褐色土 ローム層、ロームブロック、自然砂多量、焼土塊、炭化燧石少量
- 2 褐色土 ローム層多量、ロームブロック少量、自然砂多量
- 3 黄褐色土 ローム層、自然砂少量、炭化燧石、焼土塊散在
- 4 黄褐色土 ロームブロック

SJ34

- 1 黄褐色土 ロームブロック

SJ32

- 1 黄褐色土 層状多量、ローム層、焼土、炭化物中多量
- 2 褐色土 焼土少量、1層ローム層多量
- 3 黄褐色土 層状多量、ローム層中多量

SJ32 カマド

- 1 黄褐色土 ローム層、自然砂少量、炭化物散在、焼土ブロック多量
- 2 黄褐色土 焼土ブロック主体、焼土ブロック、炭化物散在
- 3 黄褐色土 焼土ブロック主体、焼土塊、炭化物少量
- 4 黄褐色土 ローム層、自然砂、焼土ブロック、炭化物粘土ブロック少量
- 5 黄褐色土 褐色色粘土ブロック主体、炭化物塊、焼土少量
- 6 黄褐色土 焼土ブロック主体、カマド火坑
- 7 黄褐色土 ローム層、自然砂、炭化物塊、焼土ブロック多量
- 8 褐色土 ローム層、自然砂多量、褐色色粘土ブロック、焼土少量
- 9 黄褐色土 ローム層、自然砂、褐色色粘土ブロック、焼土ブロック多量
- 10 黄褐色土 コーム層、自然砂少量、褐色色粘土ブロック多量

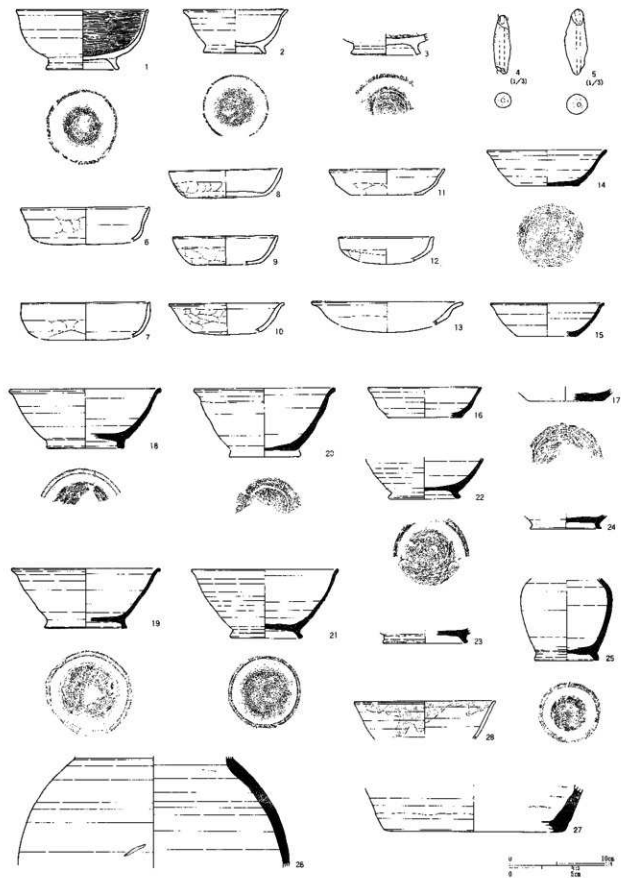
0 2.5

カマドは東壁のほぼ中央に設置されていたが、第11号掘立柱建物跡の柱穴に破壊されて、断片的に焼土が残っていたのみであった。ピットは2本検出されている

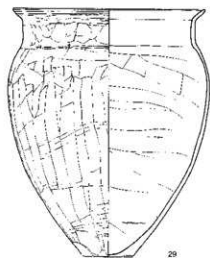
が、伴うか否かは不明である。

出土遺物はごく少なく、図化できたのは第54図42の土師器甕のみである。時期は不明確である。

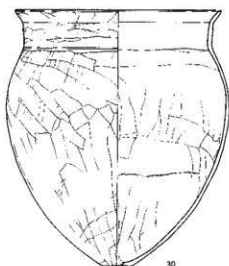
第53图 第31・32・34号住居跡出土遺物(1)



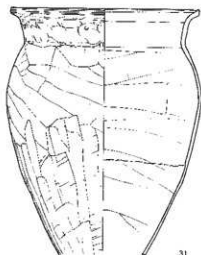
第54図 第31・32・34号住居跡出土遺物(2)



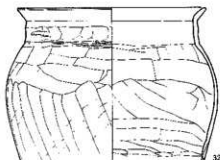
29



30



31



32



36



40



33



37



34



42



41



35



38



39



第16表 第31・32・34号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎止	焼成	色調	残存率	備考
1	高台碗	(14.0)	6.3	7.7	EHJ	2	にぶい黄橙	60	SJ31・32 No5 ロクロ土師器 内黒黒色は薄い
2	高台杯	11.0	4.7	6.5	BEHJ	3	橙	85	SJ31・32 No4 ロクロ土師器
3	高台杯		2.2	(7.0)	AHJ	2	にぶい橙	25	SJ31・32 ロクロ土師器 内黒
4	土鍾	長(4.55)cm 最大径1.25cm 孔径0.35cm 重量6.72g SJ31							
5	土鍾	長5.15cm 最大径1.25cm 孔径0.30cm 重量1.80g SJ31							
6	杯	(13.4)	3.6		ABCDE	2	にぶい橙	5	SJ31・32
7	杯	(13.4)	3.7		ABCDE	1	橙	10	SJ31・32
8	杯	12.0	3.0	(8.6)	AHJ	2	橙	50	SJ32カマドNo.3
9	杯	(11.0)	3.0	(7.2)	EII	2	橙	15	SJ31・32
10	杯	(12.0)	3.1		EH	2	にぶい赤褐	10	SJ31・32
11	杯	(12.0)	2.7		ABCDE	1	にぶい橙	15	SJ31・32
12	杯	(9.9)	3.0		ABCDE	2	にぶい橙	20	SJ31・32
13	杯	(15.6)	2.4		ABCDE	1	黄橙	5	SJ31・32
14	須恵杯	12.6	3.8	6.6	HJJ	1	灰	90	SJ32カマドNo17 木野産
15	須恵杯	(12.0)	3.5	(6.2)	EHIJ	1	灰	10	SJ31・32 木野産
16	須恵杯	(12.0)	3.2	(7.8)	EHIJ	1	灰	10	SJ31・32 木野産
17	須恵碗?		1.5	(8.0)	AHJ	3	灰白	30	SJ31・32 木野産か
18	須恵高台杯	(16.0)	6.2	(8.2)	HJJ	1	灰	40	SJ31・32 木野産
19	須恵高台碗	15.6	6.3	8.8	EHIJ	1	灰	60	SJ31・32 SJ32カマドNo.5・8・18 木野産
20	須恵杯	(15.0)	6.5	(6.8)	HJJ	2	灰	30	SJ31・32 木野産
21	須恵高台碗	15.6	7.3	7.7	EHIJ	1	暗青灰	90	SJ31・32 Na3 木野産
22	須恵高台碗		4.3	(7.6)	EHIJ	2	褐灰	80	SJ31・32 Na12 木野産
23	須恵高台碗		1.6	(9.0)	EHIJ	1	黄灰	15	SJ31・32 木野産
24	須恵高台碗		1.5	(7.4)	EHIJ	1	灰	50	SJ31・32 木野産
25	須恵長頸瓶		8.4	6.8	II	1	灰	80	SJ31・32 Na2 東金子産か 砂っぽい胎土
26	須恵壺		11.7		H	1	灰	15	SJ31・32 Na7 産地不明(東金子産か)
27	須恵壺		5.0	(19.0)	EHIJ	1	灰	20	SJ31・32 木野産
28	灰種陶器	(15.0)	4.0		H	1	灰白	10	SJ31・32 東濃産
29	甕	(20.4)	26.0	(5.2)	EHIJ	2	にぶい褐	60	SJ31・32 Na1 SJ32カマドNo.1・4・6・11・12
30	甕	21.8	26.8	3.2	EHIJ	2	橙	70	SJ32カマドNo.2・4・11・12
31	甕	(20.0)	26.0		EHIJ	2	橙	80	SJ32カマドNo10・13・14
32	甕	(20.0)	16.0		AHJ	2	橙	40	SJ31・32 Na4・9 SJ32カマドNo15
33	甕	(18.0)	7.0		AHJ	2	橙	15	SJ32カマドNo4
34	甕	(20.0)	6.3		BEHJ	2	にぶい黄橙	60	SJ31・32Na11・13 SJ32カマド
35	甕	(20.0)	6.3		EHIJ	2	にぶい橙	10	SJ31・32
36	甕	(18.0)	6.4		EHIJ	2	にぶい赤褐	20	SJ31・32
37	甕?	(24.0)	9.2		BEHJ	2	橙	20	SJ31・32
38	甕		4.4	(3.7)	BDEHJ	2	橙	30	SJ32カマドNo7
39	甕		2.3	3.4	EHIJ	2	橙	65	SJ31・32
40	台付甕		5.4	7.4	DEHJ	2	にぶい褐	80	SJ31・32 Na6
42	甕		6.8		ABCDE	1	橙	5	SJ34カマド

第35号住居跡 (第55図)

第35号住居跡は、B-4グリッドに位置する。遺構の掘り込みが浅く、確認段階で既に床面は削平されており、僅かにカマドのみが残存していた。遺構の形態・規模等の詳細は不明である。

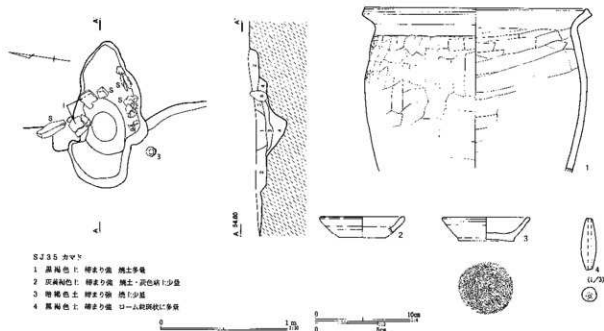
カマドの主軸方向はN-83°-Eを示す。

カマドは壁を掘り込んで構築され、補強に使用した

と思われる片岩系の板石が、袖部とカマド南壁際に残存していた。また、中央床面には石製支脚が掘えられていた。火床面は第3層、4層は掘り方である。

出土遺物は少なく、図示した4点に留まる(第55図1-4)。1は甕でカマド内出土。2・3はロクロ土師器小皿である。時期は11世紀前半と考えられる。

第55図 第35号住居跡カマド・出土遺物



S J 35 カマド

- 1 黒褐色土 埴まり盛 焼土多量
- 2 灰褐色土 埴まり盛 焼土・赤色粘土少量
- 3 暗褐色土 埴まり盛 焼土少量
- 4 黒褐色土 埴まり盛 ローム状団粒に多量

第17表 第35号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(23.7)	16.8		A E H J	2	橙	35	カマドNo2
2	小皿	(9.0)	1.8		A D E	2	にぶい黄橙	20	カマド ロクロ土師器
3	小皿	(9.4)	2.5	5.8	B E H J	1	にぶい赤橙	63	カマドNo11 ロクロ土師器
4	土鋪	長 4.10cm 最大径 1.20cm		孔径 0.25cm	重量 4.88g		にぶい橙		

第36号住居跡 (第56図)

第36号住居跡は、D-3グリッドに位置する。第38・39号住居跡に住居北東部を切られている。また、第3号掘立柱建物跡及び第46号土壇とも重複し、本住居跡の方が新しいものと考えられる。

平面形は正方形で、規模は長軸2.95m、短軸2.93m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-71°Eを示す。床面は緩やかな起伏をもつ。カマドは東壁の南端に設置されている。燃焼部から焚口にかけては平坦で床面と同レベルで続く。燃焼部付近の床面は被熱していた。袖部は明確に検出されなかった。ピットは1本、土壇は1基検出された。土壇は中世以降の所産と思われる、直接伴うものではない。

出土遺物は少ない。図化できたのは第57図25の土師器環のみである。遺物の時期は9世紀代であろうが、遺構に帰属するか否かは不明である。むしろ、カマドの位置や住居形態、主軸方向から見ると、10-11世紀

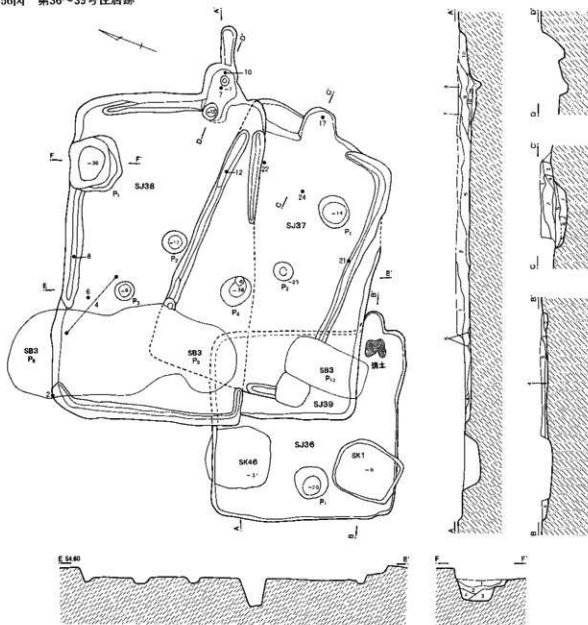
頃の住居と見ることがもできる。もし、そうであれば36→39→38号住居跡の順に建て替えた可能性もあろう。

第37号住居跡 (第56図)

第37号住居跡は、C・D-3・4グリッドに位置する。重複する第38号住居跡に切られていた。第39号住居跡・第3号掘立柱建物跡との新旧関係は不明瞭であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長軸4.20m、短軸2.62m、深さ0.26mを測る。主軸方向はN-92°Eを示す。床面は概ね平坦であった。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁ラインを僅かに掘り込んでいる。袖部は基部が僅かに残る程度で、ほとんど流失していた。ピットは2本検出された。

出土遺物は土師器環・碗・皿・甕がある(第57図13-24)。土師器環は口縁部が内湾気味のものと直立タイプの北武蔵型環が主体となり、皿・碗が伴う。覆土出土遺物はより新しい一群が第38号住居跡、より古い



S.J36

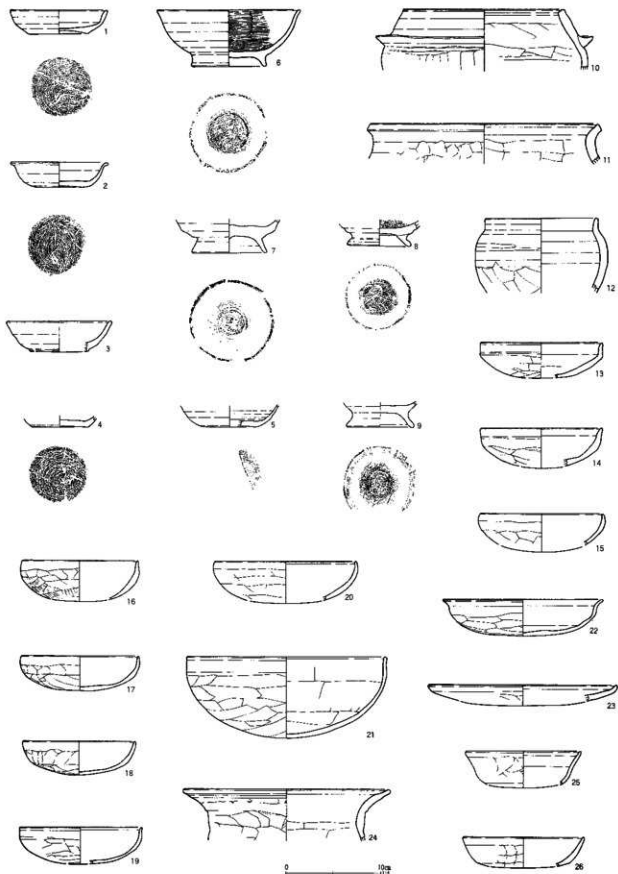
- 1 暗褐色土 硬土・焼土多量、焼土ブロック少量
 - 2 暗褐色土 白色粒、ローム粒多量
 - 3 暗褐色土 褐色粘土ブロック、焼土粒少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量
- S.J37 コヤド
- 1 暗褐色土 ローム粒、白色粘質土、焼土粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒、白色粘質土、焼土粒、灰色粘質土多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒、白色粘質土、焼土粒、灰色粘質土少量
 - 4 におい黄褐色土 ローム粒、白色粘質土、焼土粒多量、灰色粘質土少量
 - 5 暗褐色土 焼土・焼土ブロック多量、炭化物少量
 - 6 暗褐色土 ローム・ロームブロック多量、焼土少量
 - 7 暗褐色土 炭化物、粘土少量(顔り方)

S.J38

- 1 黒褐色土 ローム粒・白色粘質土、焼土粒多量、粘質土ブロック・焼土粒少量
 - 2 黒褐色土 ローム粒少量、白色粘質土、焼土粒・焼土粒少量
 - 3 黒褐色土 ローム粒多量、白色粘質土
 - 4 黒褐色土 ローム粒多量、白色粘質土
 - 5 暗褐色土 ローム粒多量、白色粘質土、焼土粒少量
 - 6 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック、白色粒、焼土粒少量
 - 7 黒褐色土 ローム粒少量、白色粒、焼土粒少量
 - 8 黒褐色土 コーム粒少量、白色粘質土、焼土粒多量
 - 9 黒褐色土 コーム粒少量、焼土粒多量、焼土塊
 - 10 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒、焼土ブロック・焼土粒多量
 - 11 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック、焼土粒多量
- S.J38 Pit
- 1 黒褐色土 ローム粒・白色粘質土、炭化物、焼土粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒・白色粘質土、炭化物少量
 - 3 におい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック、白色粘質土
 - 4 暗褐色土 ローム粒・白色粘質土、炭化物、焼土粒少量

0 5m

第57图 第36~38号住居跡出土土遺物(1)



一群が本住居跡に帰属するものと考えたが、大きな甕
 はないであろう。住居の時期は8世紀初頭前後と考
 えられる。

第38号住居跡 (第56㉔)

第38号住居跡は、C・D-3・4グリッドに位置す
 る。重複する第36・37・39号住居跡、第3号独立柱建
 物跡を切っており、重複遺構群の中では最も新しい。

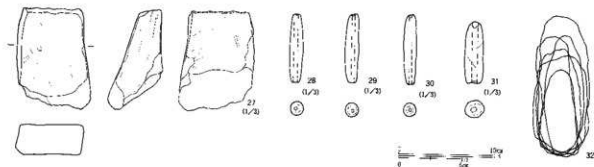
平面形は縦長の長方形で、規模は長軸5.22m、短軸
 3.09m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-83°-Eを
 示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南端に設置
 され燃焼部は大きく壁を掘り込んでいる。また、その
 先には細長く煙道が取り付いている。燃焼部のやや奥
 まった位置に支脚を据えたと思われる浅いピットが検
 出された。壁溝は部分的に巡る。

ピットは4本検出された。Pit 1は住居に伴うとす
 れば貯蔵穴になるかもしれない。Pit 2~4は柱穴で
 はなからう。

出土遺物は少ないが、セツト関係は把握できる。ロ
 クロ土師器の碗皿類、羽釜、甕、小型甕から構成され

第58㉔ 第36~38号住居跡出土遺物(2)



第18表 第36~38号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	10.3	2.4	6.1	BEHJ	2	橙	75	SJ38 ロクロ土師器 胎土分析4
2	小皿	10.4	2.6	5.2	IIJ	2	にぶい橙	95	SJ38 No.14 ロクロ土師器 胎土分析3
3	坪		3.2		ABCDE	2	橙	10	SJ38 摩滅顯著
4	坪		1.2	6.2	BEIIJ	2	灰褐	100	SJ38 No.7・13 ロクロ土師器
5	小皿		2.2	(5.6)	ADEHJ	2	にぶい橙	30	SJ38 ロクロ土師器
6	高台碗	(15.0)	6.0	8.0	BEIIIJ	2	にぶい黄橙	60	SJ38 No.6 内照 ロクロ土師器 胎土分析6
7	高台碗		3.5	8.0	ADFEHJ	3	橙	85	SJ38 No.5 ロクロ土師器 胎土分析5
8	高台碗		2.8		EHIJ	2	にぶい橙	90	SJ38 No.5 内照 ロクロ土師器
9	高台碗		2.2	7.2	EIIJ	2	にぶい褐	90	SJ38 No.9 ロクロ土師器
10	羽釜	(16.4)	6.5		EHIJ	2	灰褐	15	SJ38カマドNo.3 胎土分析13

る(第57㉔1~12)。小皿は口径10cm程、底径5~6cm
 前後である(1~5)。底部は回転糸切り。高台碗は内
 面が磨かれ、黒色処理されるいわゆる内照碗(6・8)
 と素焼きの碗(7・9)がある。羽釜(10)は口縁部が
 強く内傾する。小型甕(12)はロクロ整形後、胴部下
 半にヘラケズリが施されている。時期は10世紀後半か
 ら11世紀初頭であろう。

第39号住居跡 (第56㉔)

第39号住居跡は、C・D-3グリッドに位置する。
 南西コーナー部しか遺存していないため遺構の詳細は
 不明である。重複遺構との新旧関係は、第36号住居跡
 を切り、第38号住居跡に切られていた。第37号住居跡
 及び第3号独立柱建物跡との新旧関係は不明であるが、
 本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.40m、短
 軸1.76m(現在長)、深さ0.15mを測る。主軸方向は
 N-77°-Eを示す。

カマド・壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は全くなく、時期も明確にできない。

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	地皮	色調	残存率	備考
11	甕	(26.0)	4.1		A E H J	2	にぶい橙	10	SJ38
12	甕	(12.0)	7.8		E H J	2	にぶい橘	15	SJ38 No.1 胎上分析11
13	坏	(13.0)	3.7		A B C D E	1	橙	20	SJ37・38
14	坏	(13.0)	4.0			2	橙	15	SJ37・38
15	坏	(13.0)	3.3		E H J	2	橙	15	SJ37・38
16	坏	(12.4)	4.1		H J	2	にぶい橙	15	SJ37・38
17	坏	(12.4)	3.6		E H J	2	橙	45	SJ37カマド No.1
18	坏	12.0	3.6		E H J	3	にぶい橙	70	SJ37カマド
19	坏	(13.0)	3.8		E H J	2	にぶい赤褐	15	SJ37・38
20	坏	(15.0)	4.1		H J	2	橙	15	SJ37・38
21	甕	(21.0)	8.5		A B E H J	2	橙	75	SJ37 No.9
22	皿	(17.0)	3.8		E H J	3	橙	60	SJ37No.1 - SJ38
23	皿	(20.0)	1.6		A B C D E	1	明赤褐	10	SJ37・38
24	甕	(22.0)	5.5		E H J	2	橙	15	SJ37 No.7
25	坏	(12.0)	3.5		A	1	明赤褐	10	SJ36
26	坏	(13.0)	3.0		A B C D E	1	橙	10	SJ37・38
27	砥石		長 7.85cm 最大幅5.95cm 厚さ4.30cm				重量169.78g		SJ37・38
28	土罐		長 5.40cm 最大径1.10cm 孔径0.25cm				容量4.91g		浅黄橙 SJ37・38
29	土罐		長 5.45cm 最大径1.10cm 孔径0.20cm				容量5.23g		浅黄橙 SJ37・38
30	土罐		長 3.50cm 最大径1.00cm 孔径0.20cm				容量4.30g		浅黄橙 SJ37・38
31	土罐		長 4.90cm 最大径1.45cm 孔径0.45cm				容量9.43g		にぶい橙 SJ37・38

第40号住居跡 (第59図)

第40号住居跡は、C・D-4グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、新旧関係は第41・67・70号住居跡を切り、第42号住居跡が上面に乗っていた。第43号住居跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が古いかもしれない。

西壁部は不明であるが、平面形は歪んだ長方形と推定され、規模は長軸3.32m(現在長)、短軸2.57m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-43°-Eを示す。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を掘り込み、底面はほぼ平坦である。また、カマド前面の床面下から土壌が1基検出されている(SK1)。

出土遺物は少なく、土師器環(第60図1・2)、甕(12)、須恵器環(6)、高台椀(7~9)、皿(4)、高台皿(5)、十製紡錘車(16)がある。住居の時期は9世紀後半に位置づけられる。

第41号住居跡 (第59図)

第41号住居跡は、C・D-4グリッドに位置する。第40号住居跡の床面下から検出された。第40・42・43・44・67・70号住居跡と重複している。第70号住居跡との新旧関係は不明であるが、他の住居跡よりも本住居

跡の方が古い。

非常に小型の住居跡で平面形は正方形。規模は長軸2.20m、短軸1.93m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-67.5°-Eを示す。

カマドは東壁の中央に設置されているが、遺存状態が悪く詳細は不明である。

確実に伴う出土遺物はなく、第60図10の須恵器蓋がその可能性をもつのみである。時期は不明である。

第42号住居跡 (第59図)

第42号住居跡は、C・D-4グリッドに位置する。第40・41・43・44・67・70号住居跡と重複するが新旧関係は不明な点を残す。

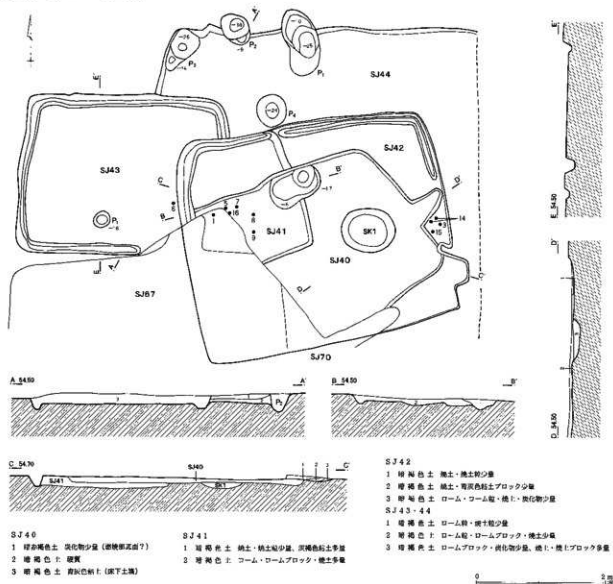
掘り込みが浅く西壁付近が不明であるが、平面形は長方形と推定され、規模は長軸4.17m、短軸3.25m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を掘り込み、底面は被熱していた。

ビッドは検出されず、壁溝は北壁を中心に部分的に巡っていた。

出土遺物はクロコ土師器の高台椀(第60図3・15)、羽釜(13)、甕(14)、灰積陶器碗(11)が本住居跡に

第59図 第40~44号住居跡



伴うものと考えられる。ロクロ土師器高台椀(3)は内面に丁寧なヘラミガキが施されるが、内黒処理は施されない。灰釉陶器(11)は東農産で、灰釉は漬け掛けと思われる。大原2号窯式から虎渓山1号窯式期段階のものであろう。住居の時期は10世紀前半~中頃と考えておきたい。

第43号住居跡(第59図)

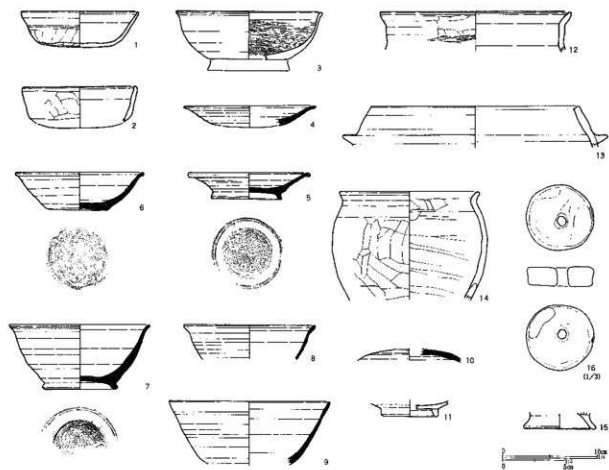
第43号住居跡は、C・D-4グリッドに位置する。第41・44・67・70号住居跡を切り、第42号住居跡に切られている。第40号住居跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長軸3.36m、短軸2.49m、深さ0.21mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかったが、第41号住居跡の上面に粘土塊が残存しており、あるいはカマドの一部であったかもしれない。いずれにせよ東壁部に設置されたものであろう。

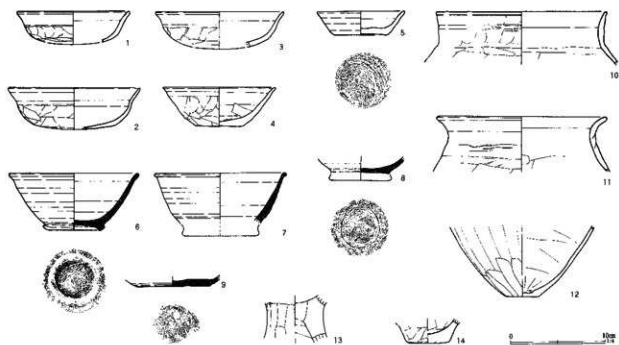
ピットは1本検出されたが柱穴にはならない。壁溝は全周する。

出土遺物は土師器環(第61図1~4)、甕(10・11)、須恵器高台椀(6~8)がある。第61図12も本住居跡に伴うか。時期的には10世紀初頭前後に位置づけ

第60图 第40~42号住居跡出土遺物



第61图 第43・44号住居跡出土遺物



られよう。

第44号住居跡 (第59図)

第44号住居跡は、C・D-4グリッドに位置する。重複する第42・43号住居跡に切られている。

平面形は長方形と推定されるが、東壁-南壁部にかけては明確に検出できなかった。規模は長軸5.06m、短軸1.07m(現在長)、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。

カマドは検出されなかった。ピットは4本存在するがいずれも直接伴うものではない。

礎石に帰属する出土遺物は不明確である。第61区5はおそらく第42号住居跡に帰属するであろう。9・13・14が僅かに本住居跡に伴う可能性があるが、時期を特定できない。時期は9世紀、またはそれ以前とするに留めたい。

第19表 第40・42号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.5	3.7		HJ	3	橙	90	SJ40 No.1
2	環	(12.2)	4.1		ABCDE	1	橙	10	SJ40
3	高台碗	(15.4)	5.0	(8.4)	E H J	2	にぶい黄褐	45	SJ42 No.11 ロクロ土師器
4	須恵皿	(14.0)	2.2		H J	1	灰黄褐	15	SJ40
5	須恵高台皿	12.9	2.9	7.5	H J	1	暗灰	100	SJ40 No.15 木野産
6	須恵環	13.6	4.0	6.5	B E I	1	灰黄褐	85	SJ40 No.18 木野産
7	須恵高台碗	(15.0)	6.8	(8.0)	H J	1	灰黄褐	30	SJ40 No.17 木野産
8	須恵碗	(14.0)	3.6		H J	1	灰白	15	SJ40 No.2 木野産
9	須恵碗	(17.0)	6.6		H J	1	灰	40	SJ40 No.3 木野産
10	須恵蓋				H J	1	灰	30	SJ40-42 転用碗と思われる 重投産か
11	灰釉陶器碗		1.7	(6.0)	H	1	灰白	15	SJ42 東濃産 大原2号-虎渡山1号空式
12	甕	(20.2)	4.2		B C D E	1	にぶい赤褐	15	SJ40
13	羽釜	(22.0)	4.3		A B E H J	2	橙	10	SJ42
14	甕	(14.8)	11.4		H J	2	にぶい赤褐	40	SJ42 No.3・8
15	高台碗		1.6	7.6	H J	2	浅黄橙	90	SJ42 No.2 ロクロ土師器
16	土製陶鉢	縦5.10cm	横5.30cm	厚3.1.55cm	口径0.70cm	重量55.92g			にぶい褐色 SJ42 No.16

第20表 第43・44号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	3.2		D E H J	2	にぶい橙	60	SJ44
2	環	(14.0)	4.3		D E H J	2	橙	40	SJ43
3	環	(13.6)	3.7		D E H J	3	にぶい橙	20	SJ44
4	環	(11.8)	4.1	5.0	D E H	2	にぶい赤褐	30	SJ43・44
5	小皿	(9.2)	2.5	7.7	B D E H J	2	橙	80	SJ44 ロクロ土師器
6	須恵高台碗	(13.6)	6.0	6.6	A E H J	2	褐灰	60	SJ43 No.6
7	須恵環	(14.0)	5.3		B E H J	2	灰褐	30	SJ43
8	須恵環		2.9	6.2	I I J	1	灰黄褐	100	SJ43
9	須恵環		1.1	(8.0)	E H J	1	灰	20	SJ44
10	甕	(18.0)	5.6		D I I J	2	橙	15	SJ43
11	甕	(18.0)	5.8		E H J	2	にぶい橙	15	SJ43
12	甕		7.5	3.4	E I I J	3	にぶい橙	60	SJ44
13	支脚				H J	2	灰褐	30	SJ44
14	甕		2.6	4.4	E I I J	2	橙	60	SJ44

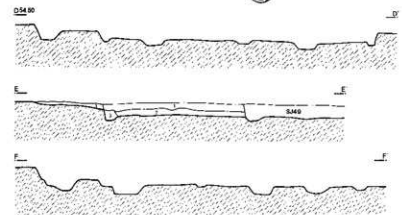
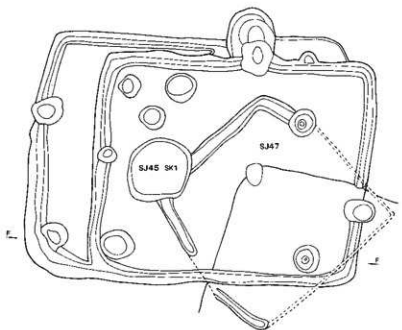
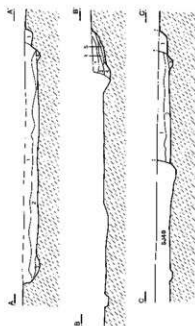
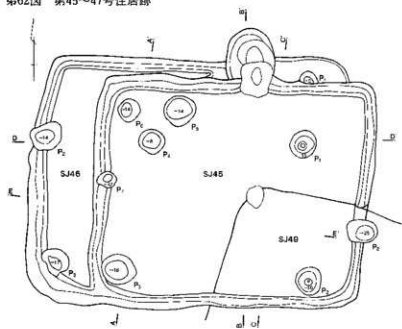
第45号住居跡 (第62図)

第45号住居跡は、B-4、C-4・5グリッドに位置する。重複造構の新旧関係は、第46・47号住居跡を切り、第49号住居跡に切られている。第46号住居跡と

は主軸が一致し、南壁を共有することから直接的な建て替えと考えて良からう。

平面形は横長方形で、規模は長径4.44m、短径3.70m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

第62図 第45～47号住居跡



SJ45

- 1 黒 褐色 土 礎床付設 コーム粒・焼土中多量
- 2 即 脚 柱 土 コーム粒多量
- 3 陶 器 土 コームフツク特多

SJ45 カマド

- 1 陶 器 土 ローム粒・白色粘多量、焼土粒・焼土粒多量
- 2 土赤・黄褐色土 コーム粒・白色粘多量、焼土粒少量
- 3 土赤・黄褐色土 コーム粒・白色粘多量、焼土粒多量
- 4 漆 黒 色 土 赤褐色土・ブロック
- 5 土赤・黄褐色土 ローム粒・白色粘多量、焼土粒・焼土粒少量

SJ46

- 1 黒 褐色 土 ローム粒中多量、焼土少量

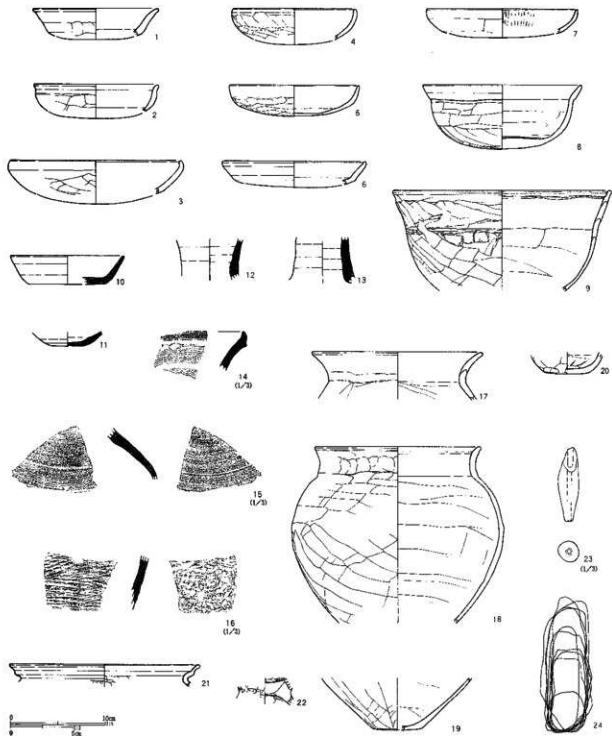
0 2m

床面はほぼ平坦である。南壁際の床面には白色粘土塊が広がっていたが、性格は不明である。カマドは北壁のほぼ中央に設置され、燃焼部は壁を掘り込んでいる。ピットは8本検出された。Pit 1-4は規則的に配置されるが、深度が浅く主柱穴となるか否か不明である。

壁溝は全周する。そのほか、床下土壌が1基検出された。

出土遺物は少なく、重複する第46・47号住居跡と混在するものがある(第63図)。第63図3・10・14~16・23が本住居跡出土の遺物である。その他、5・19が第

第63図 第45~47号住居跡出土遺物



46号住居跡出土の破片と接合している。10の須恵器環は底部回転ヘラケズリが施される平底風の末野産の環である。14・15の表は同一個体と思われる、頸部と肩部に緩な波状文を巡らせている。末野産か。時期は不明確であるが、7世紀後半～8世紀前半の遺物で占められている。8世紀前半と考えておく。

第46号住居跡 (第62区)

第46号住居跡は、C-4・5グリッドに位置する。第45号住居跡に切られており、本住居跡から第45号住居跡に建て替えられたものと考えられる。また、第11号孤立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明確であるが、孤立柱建物跡の方が新しい可能性が高い。

平面形は横長方形で、規模は長径5.09m、短径3.94m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-2°Eを示す。

カマドは北壁の東寄りに設置され、第45号住居跡のカマドと重なっている。ピットは2本検出されたが、柱穴とはならないであろう。

第21表 第45～47号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	環	(13.0)	2.3		ADE	2	橙	10	SJ46	
2	環	(11.7)	2.7		ABCDE	1	にぶい褐	10	SJ46	
3	環	18.0	3.3		ABCDE	1	にぶい橙	15	SJ45	
4	環	(12.8)	3.2		IIJ	2	にぶい赤褐	20	SJ46	
5	環	(13.6)	3.2		EIJ	2	橙	30	SJ45・46	
6	環	(15.0)	2.1		ADE	2	橙	10	SJ46	
7	環	(16.0)	2.5		HJ	2	橙	10	SJ45-47 内面放射状暗文	
8	鉢?	(16.8)	6.7		EIJ	2	にぶい赤褐	40	SJ46	
9	鉢	(23.0)	10.5		AHJ	2	にぶい赤褐	30	SJ45-47	
10	須恵環	(12.0)	3.0	(8.0)	EI	1	褐灰	15	SJ45 末野産	
11	須恵環		1.5	(3.8)	HJ	1	灰	30	SJ46 湖西産	
12	須恵長頸瓶		4.4		H	1	灰白	30	SJ46 秋間産か	
13	須恵長頸瓶		4.8		H	1	灰白	50	SJ45-47 外面自然釉付着	
14	須恵壺				HJ	1	灰白	破片	SJ45 末野産か 15と同一個体	
15	須恵壺				H	1	灰	破片	SJ45 末野産か 14と同一個体	
16	須恵壺				EIIIJ	1	灰	破片	SJ45 末野産	
17	甕	(18.0)	5.0		EIJ	2	橙	10	SJ46	
18	壺	(17.4)	18.5		IIJ	2	にぶい赤褐	60	SJ46	
19	壺		5.5	(5.2)	DEHJ	2	灰黄褐	15	SJ45・46	
20	甕		2.3	4.8	EIJ	2	にぶい褐	60	SJ46	
21	甕	(21.6)	2.3		HJ	2	にぶい橙	10	SJ46 混入	
22	古付甕		2.8		HJ	2	にぶい橙	80	SJ46 混入	
23	土師	長5.80cm 最大径1.65cm 口径0.35-0.45cm 重量12.08g 灰黄褐 SJ45								

第48号住居跡 (第64区)

第48号住居跡は、C-5グリッドに位置する。第49-

出土遺物は少なく小片が多い。第63区1・2・4・6・8・11・12・17・18等が本住居跡出土遺物である。11は湖西産の環Gと思われる。第45号住居跡との関係からみても7世紀後半～8世紀前半頃の住居跡と考えられる。

第47号住居跡 (第62区)

第47号住居跡は、C-4・5グリッドに位置する。第45号住居跡床面下から検出された。南西部は第49号住居跡に切られており、詳細は不明である。

平面形は正方形と推定され、一辺2.85m前後の小型の住居跡と考えられる。主軸方位はN-50°Eを示す。

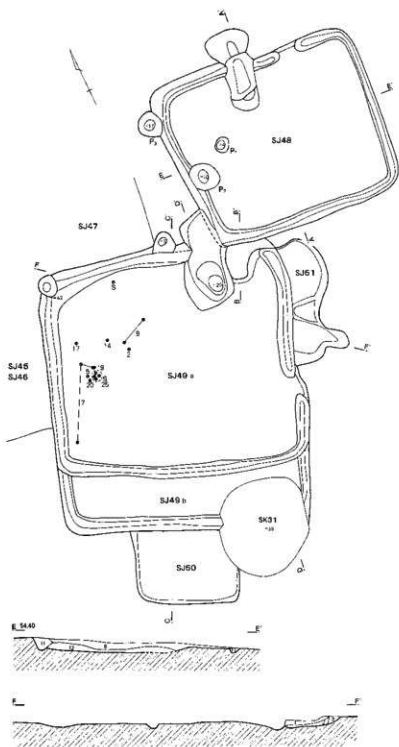
床面は既に削平され、辛うじて壁溝が残るのみである。カマド等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は第45・46号住居跡と混在するため、確実に帰属するものを抽出できない。時期は7世紀後半～8世紀前半以前とするにとどめたい。

51号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

平面形は正方形で、規模は長径3.36m、短径2.82

第64図 第48~51号住居跡

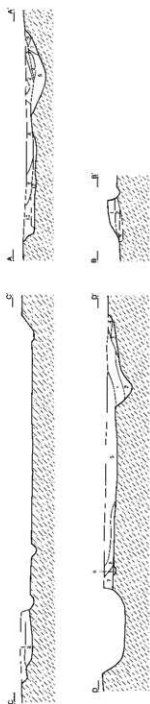


SJ45

- 1 灰褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 2 暗褐色土 粘土・灰土混雑層、灰土・灰土少量
- 3 暗褐色土 粘土・灰土混雑層、灰土・灰土少量
- 4 黒褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 5 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 6 黒褐色土 粘土・灰土混雑層
- 7 暗褐色土 粘土・灰土混雑層、灰土・灰土少量
- 8 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 9 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 10 暗褐色土 粘土・灰土少量

SJ48

- 11 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 12 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- SJ49
- 1 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 2 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 3 暗褐色土 粘土・灰土混雑層
 - 4 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 5 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 6 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 7 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
 - 8 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層



SJ45 セキツ

- 1 暗褐色土 粘土・灰土混雑層、粘土・灰土混雑層
- 2 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 3 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層

SJ48

- 1 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 2 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層

SJ49

- 1 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層
- 2 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層

SJ50

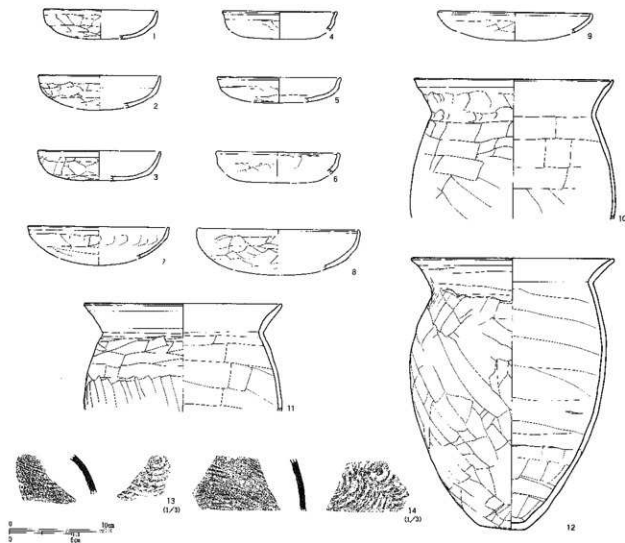
- 1 暗褐色土 コーム状・粘土・灰土混雑層

m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-4°-Eを示す。

床面は2枚あり、最終床面はあまり硬化していなかった。第12層が粘土層で、その下部は堅く締まっていた。カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。燃焼部から煙道部にかけては指鉢状に凹む。第5層上面が火床面に相当するものであろう。ピットは3本検出されたが、遺構に伴う可能性は低い。壁溝はカマド南側に一部途切れる箇所がある。

出土遺物は少ない。土師器環と甕、須恵器甕が検出され、環類は小片が多い。第65図10-12の土師器甕が比較的遺存率が高いが、12は重複する第49号住居跡カマドの遺物とも接合している。時期的には8世紀前半であろう。

第65図 第48号住居跡出土遺物



第49号住居跡 (第64出)

第49号住居跡は、C-4・5グリッドに位置する。南壁部で壁溝が2重に巡り、建て替えたことが確認できる。建て替え前を第49a号住居跡、建て替え後を第49b号住居跡とすると、覆土の状態から第49a号住居跡→第49b号住居跡に拡張されたことが明らかになった。重複遺構との新旧関係は、第45・47・50・51号住居跡を切り、第48号住居跡・第31号土壌に切られていた。

第49a号住居跡の平面形は正方形で、規模は長径4.06m、短径3.63m、深さ0.15mを測る。第49b号住居跡の規模は長径4.59m、短径4.06m、主軸方向はN-14°-Eを示す。

カマドは北壁の東寄りに設置され、燃焼部は壁を切

第22表 第48号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.1		EHJ	2	橙	10	
2	坏	(13.0)	3.4		EIJ	2	にぶい褐	20	
3	坏	(13.0)	3.1		EHJ	2	にぶい橙	15	カマド
4	坏	(12.0)	2.0		CDE	1	橙	5	
5	坏	13.0	2.6		ABCD	2	にぶい黄褐	10	
6	坏	(13.2)	2.1		BCD	1	にぶい黄褐	10	
7	坏	(14.0)	3.3		EHJ	2	橙	20	カマド
8	坏	(17.0)	4.3		DEHJ	2	にぶい褐	30	カマド
9	坏	(16.0)	2.1		DEHJ	2	橙	10	
10	甕	(21.0)	14.6		DEHJ	2	橙	20	
11	甕	(21.0)	11.2		ABEHJ	2	橙	80	
12	甕	21.4	28.5	(4.8)	BDEHJ	2	橙	80	SJ48・49カマド
13	須恵甕				BHJJ	1	灰	破片	木野産 12と同・胴体
14	須恵甕				BHJJ	1	灰	破片	木野産 11と同一個体

り込んでいる。

ビツは壁に掛かって2本検出されたが、伴うものではない。壁溝は東壁中央を除いて全周する。

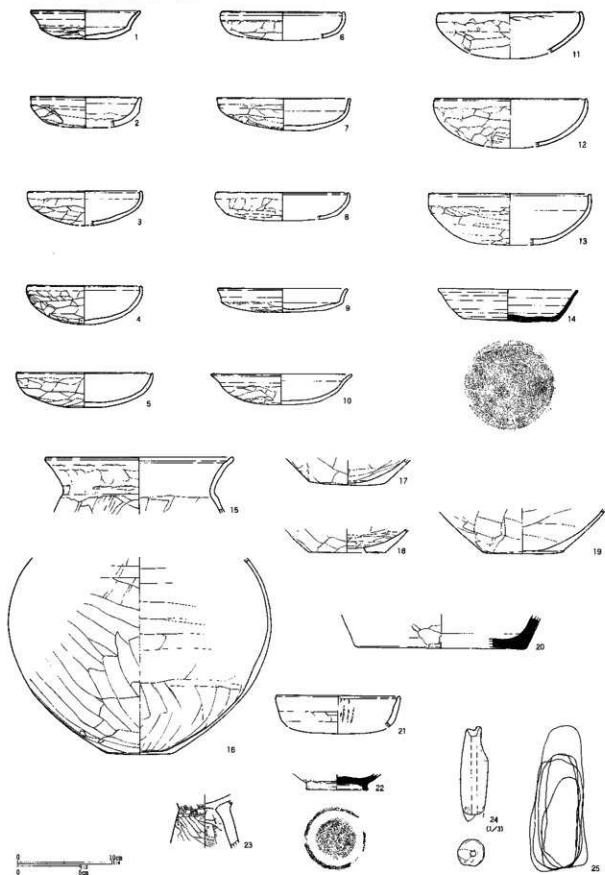
出土遺物は比較的まとまっている(第66図1~20・22~25)。土師器環・皿・釜・壺、須恵器環・甕などの器種がある。5・7の土師器環、14の須恵器環が時期決定の目安となろう。土師器環は北武藏型が主体で、

体部上位は無調整、腰部以下を削るタイプが主体である。14は南比企産の坏で、底部は回転糸切痕を中心部に残す他は、底部と体部下端を幅広く削っている。口径14.6~14.8cm。22・23は明らかな混入である。そのほか、編物石(25)が5点まとまって出た。時期的には8世紀前半である。

第23表 第49・51号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.6)	3.0		HJ	2	にぶい赤褐	40	SJ49
2	坏	11.8	3.1		EHJ	2	にぶい赤褐	55	SJ49 No10 SJ48と接合
3	坏	(12.0)	3.6		DEHJ	2	橙	30	SJ49
4	坏	(12.0)	4.1		AEHJ	2	橙	40	SJ49
5	坏	14.4	3.7		DEHJ	2	橙	80	SJ49 No5
6	坏	(13.0)	2.7		DEHJ	2	にぶい橙	15	SJ49
7	坏	14.0	3.4		EHJ	2	にぶい橙	90	SJ49No2・6・12S
8	坏	(14.0)	2.8		EHJ	2	にぶい橙	20	SJ49
9	皿	(13.8)	2.4		EHJ	2	にぶい褐	60	SJ49 No9・14
10	皿	(15.0)	3.2		DEHJ	2	にぶい褐	30	SJ49
11	坏	15.0	4.3		ABCDE	1	橙	10	SJ49
12	坏	(16.0)	5.0		DEHJ	2	にぶい橙	20	SJ49
13	坏	(17.0)	5.3		EHJ	2	にぶい橙	40	SJ49 SJ46と接合
14	須恵器環	14.8	3.3	9.6	FHJ	1	灰白	85	SJ49 No8 南比企産
15	甕	(20.0)	6.0		DEHJ	2	にぶい橙	15	SJ49
16	壺		20.8	7.2	BDEHJ	2	にぶい赤褐	60	SJ49
17	壺		2.8	8.0	BEHJ	2	にぶい褐	100	SJ49 No7
18	盥		2.4	10.0	ABCDE	1	橙	30	SJ49
19	壺		4.8	(8.8)	DEHJ	2	橙	60	SJ49 No12
20	須恵甕		3.6	(18.0)	FHJ	1	灰	10	SJ49 No13 南比企産
21	坏	(13.2)	3.3		ABD	1	橙	10	SJ51カマド 硝文
22	須恵高台坏		1.6	6.5	EHJJ	1	灰	100	SJ49 木野産
23	台付甕		4.9		EHJ	2	にぶい黄橙	15	SJ49
24	土師	長7.40cm	最大径2.15cm	口径0.45cm	重量30.09g	灰黄褐			SJ49

第66图 第49・51号住居跡出土遺物



第50号住居跡 (第64図)

第50号住居跡は、C-4・5グリッドに位置する。第49号住居跡、第31号土壌と重複し、本住居跡が最も古い。

小型の住居跡で通常の住居跡と同様に扱うのは難しいかもしれない。平面形は正方形で、規模は長径1.69m、短径1.14m(現在長)、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-68°-Wを示す。

床面は平坦である。カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺物は検出されず、時期は不明である。ただ、重複する第49号住居跡との関係から8世紀前半以前という限定はできる。

第51号住居跡 (第64図)

第51号住居跡は、C-5グリッドに位置する。カマドとその周辺が遺存するのみで詳細は不明である。重複遺跡との切り合い関係は、第49号住居跡に切られていた。第13号掘立柱建物跡との新旧関係は不明瞭であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は横長方形で、規模は長径1.99m、短径0.84m(現在長)、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-128°-Eを示す。

カマドは東壁に設置され燃焼部は壁を僅かに切り込んでいる。

出土遺物は非常に少なく、図化できたのは第66図21の暗文環1点のみである。第49号住居跡との関係から見てもおそらく遺構に伴うものではない。本住居跡は第49号住居跡と主軸がほぼ直交することから、本来第49号住居跡のカマドと考えた方が矛盾無く理解できるかもしれない。

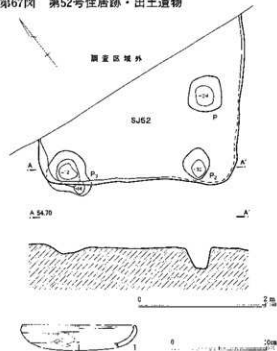
第52号住居跡 (第67図)

第52号住居跡は、B-5グリッドに位置する。北半部は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。

平面形は正方形で、規模は長径3.11m、短径2.65m(現在長)、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-49°-Wを示す。

床面は平坦で堅く締まっていた。カマドは検出され

第67図 第52号住居跡・出土遺物



なかった。ピットは3本検出されたが、伴うか否かは不明である。

出土遺物は非常に少なく、図化できたのは第67図1の土師器片のみである。

第67図1は土師器片で推定口径12.0cm、胎土に石英、長石、角閃石を含み焼成は普通。明赤褐色で残存率は約10%である。

出土土器の時期は8世紀前半と思われるが、住居跡に帰属するか否かは不明である。

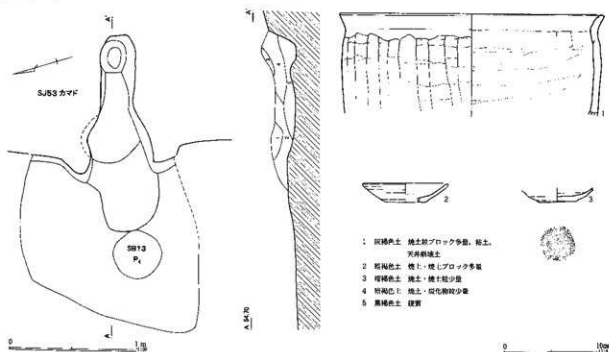
第53号住居跡 (第68図)

第53号住居跡は、C-5グリッドに位置する。第13号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しいものと考えられる。掘り込み自体が浅く、床面は削平されていた。カマドのみ残存していたため遺構の詳細は不明である。カマドの主軸方向はN-107°-Eを示す。

カマド燃焼部の壁面と底面は良く焼けて被熱していた。煙道部は燃焼部と段差無く連続し、先端部はピット状に窪む。

出土遺物は少なく、土師器片(第68図1)とロクロ土師器小皿(2・3)がある。時期は11世紀中葉頃と考えておきたい。

第68図 第53号住居跡カマド・出土遺物



第24表 第53号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(28.0)	10.7		BEHJ	2	橙	25	
2	小皿	(9.0)	2.0	(4.0)	EH	3	にぶい橙	25	ロクロ上師器
3	小皿		1.5	4.2	EH	3	橙	100	ロクロ上師器

第54号住居跡 (第69図)

第54号住居跡は、C-1・2グリッドに位置する。北壁部は第1号住居跡を切っている。第55号住居跡と重複し、西壁を共有し、主軸が直交することから第55号住居跡→第54号住居跡に建て替えられたものと考えられる。小型の住居跡で、平面形は正方形。規模は長径3.01m、短径2.79m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-10°-Wを示す。

床面は起伏があり一定しない。埋土は自然堆積であろうか。カマドは北壁のほぼ中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。壁溝は部分的に検出されたのみである。

出土遺物は土師器環 (第69図2) と脚付盤 (4)、須恵器甕 (5) がある。土師器環は丸底で、口縁部近くまで削り込んでいる。脚付盤はロクロ整形である。胎土・焼成は土師器であるが、器内部分はサンドイッチ状に還元部がみられる。須恵器甕は外面縦格子叩き、内面青

海波文当て具痕が残る。時期は不明確な点もあるが、土師器環から6世紀後半～末頃と捉えておく。

第55号住居跡 (第69図)

第55号住居跡は、C-1・2、D-1グリッドに位置する。本住居跡から第54号住居跡に建て替えられたものと推定される。

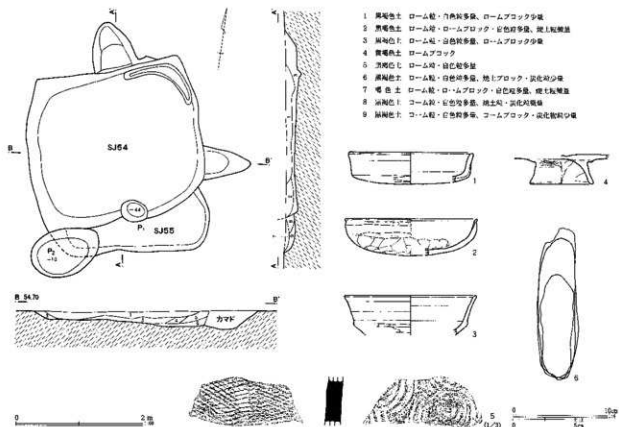
平面形は長方形と思われ、規模は長径2.50m、短径1.64m (現在長)、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。

カマドは東壁に設置されていた。ビットは2本検出されたが、いずれも直接伴うものではない。

出土遺物は土師器環が2点あり (第69図1・3)、いずれもカマド内から出土した。1は模倣環か。3は有段口縁環である。

住居跡の時期は不明確だが、出土遺物と遺構の切り合いを考慮して、6世紀後半代と捉えておく。

第69回 第54・55号住居跡・出土遺物



第25表 第54・55号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地色	色調	残存率	備考
1	環	(13.2)	2.5		ABC D	1	褐	10	SJ55カマド
2	環	(14.0)	3.8		H	2	黒褐	30	SJ54
3	環	(14.0)	4.1		H J	2	にぶい赤褐	15	SJ55カマド
4	脚付盤		3.2	6.6	DE H J	2	にぶい黄橙	80	SJ54
5	硝患袋				H I J	1	青灰	破片	SJ54 木野産

第56号住居跡 (第70回)

第56号住居跡は、C・D-1グリッドに位置する。重複する第57号住居跡に南壁部を切られている。また、西壁部は調査区外に掛かっており、遺構の詳細は不明である。

平面形は北壁部に歪みがあるが、正方形と推定され、規模は長さ6.09m、短径5.29m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-53°-Wを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは調査区内には存在しない。ピットは14本検出された。Pit 1・3は主柱穴に相当しようか。

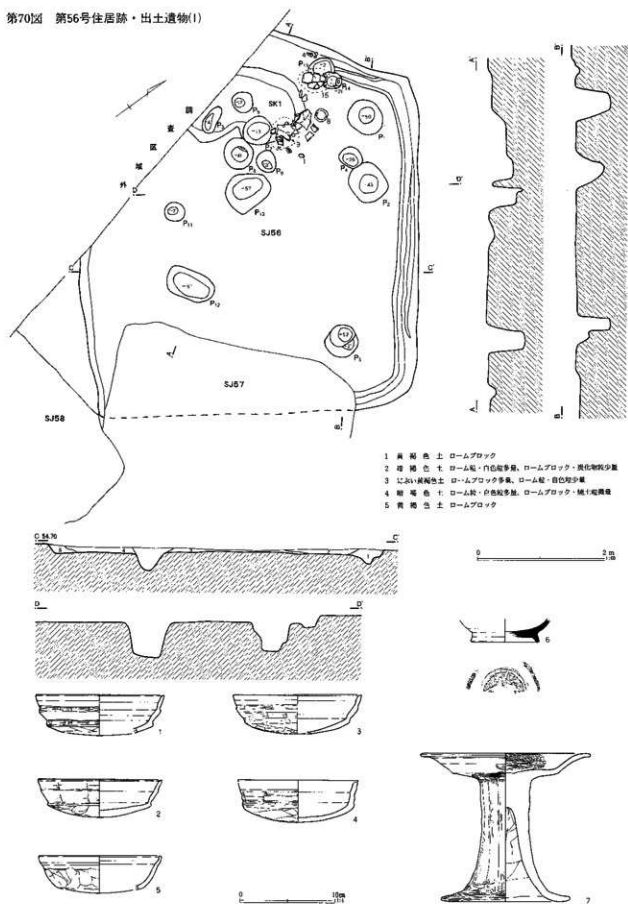
土壌は1基あり、上面に土器が乗っていることから

床下土壌、または掘り方の一部であろう。壁溝は東壁部を中心に巡るが全周はしない。

出土遺物は比較的多くまとまっている (第70-71回)。第70回1~4は有段口縁環、7は高環、8-12、16-17は長胴甕、その他壺(13)と甎(14-15)がある。床面やピット内から出土したものが多く、5・6は混入品。有段口縁環は口径が比較的大きく、稜もしっかりしたものである。高環も和泉期以来の系譜を引くものではない。甕は胴部の張りか弱いタイプが主体である。

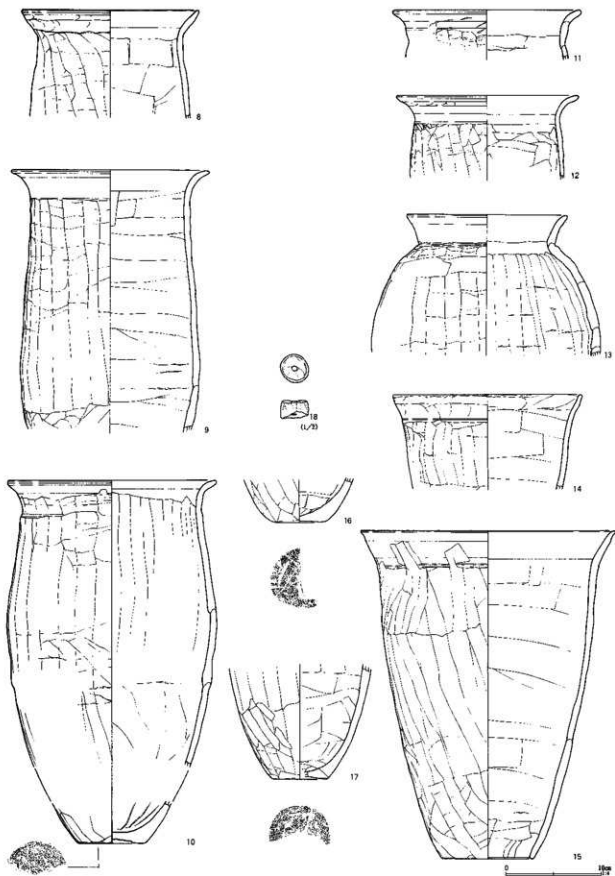
時期的には古墳時代後期、6世紀後半-木葉前後に位置づけられよう。

第70図 第56号住居跡・出土遺物(1)



- 1 黄褐色土 ロームブロック
- 2 暗褐色土 ローム層・白色粘多層、ロームブロック・黄化粘質少量
- 3 におい黄褐色土 ロームブロック多層、ローム殻・白色粘少量
- 4 暗褐色土 ローム殻・白色粘多層、ロームブロック・焼土粘質層
- 5 黄褐色土 ロームブロック

第71图 第56号住居跡出土遺物(2)



第26表 第56号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.6)	4.0		E H J	2	黒褐	15	Na 2 内外面黒色処理
2	坏	(13.2)	4.0		E H J	2	橙	45	ビット1
3	坏	(13.6)	4.1		E H J	2	黒褐	30	Na 1 内外面黒色処理
4	坏	(12.6)	4.4		H J	2	にぶい赤褐	15	Na14
5	坏	(13.0)	3.5		E H J	3	にぶい橙	20	
6	須恵高台坏		2.5	(7.3)	B E H I J	1	灰白	40	未野産
7	高坏	(18.0)	15.6	(13.6)	H J	3	にぶい橙	50	
8	甕	18.8	11.3		B E H I J	2	にぶい赤褐	60	Na7
9	甕	(21.0)	27.6		B E H J	2	にぶい赤褐	40	Na10
10	甕	(22.2)	(38)	(7.0)	B E H J	2	にぶい橙	60	底部木炭痕
11	甕	(20.0)	5.2		B E H J	2	にぶい橙	10	
12	甕	19.2	8.9		A E H J	2	橙	80	Na5・6
13	甕	(17.0)	14.8		E H J	2	にぶい赤褐	40	
14	甕	(20.0)	10.0		B E H J	2	にぶい橙	45	
15	甕	(27.0)	34.4	(9.8)	A E H J	2	橙	40	Na13
16	甕		4.5	6.0	D E H J	2	にぶい赤褐	50	底部木炭痕あり
17	甕		12.3	6.0	E H J	2	橙	60	底部木炭痕あり
18	白玉	直径1.5cm、孔径0.25cm、厚さ1.0cm 重量3.26g 滑石製							

第57号住居跡 (第72図)

第57号住居跡は、調査区西北部のC・D-1、D-2グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第56号住居跡を切り、第58号住居跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は長径4.29m、短径3.90m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-45°-Wを示す。

床面は概ね平坦で、中央部付近が凹く締まっていた。カマドは検出されなかった。第58号住居跡に破壊されたものか。ビットは7本あり、柱穴配置は不明である。Pit 4は貯蔵穴かもしれない。

出土遺物は少ない(第72図)。土師器環・甕・鉢・碗、磁石・編物石がある。編物石(9)はPit 3の周辺に19個、列状に並んだ状態で出土した。時期は、長嗣化の進んだ甕(2)と模倣坏(6)の形態から7世紀前半頃と考えておく。

第58号住居跡 (第73図)

第58号住居跡は、D-1グリッドに位置する。西半は調査区外に掛かり、遺構の詳細は不明である。北東部は第57号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は方形形で、規模は長径3.32m、短径2.99m(現在長)、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。

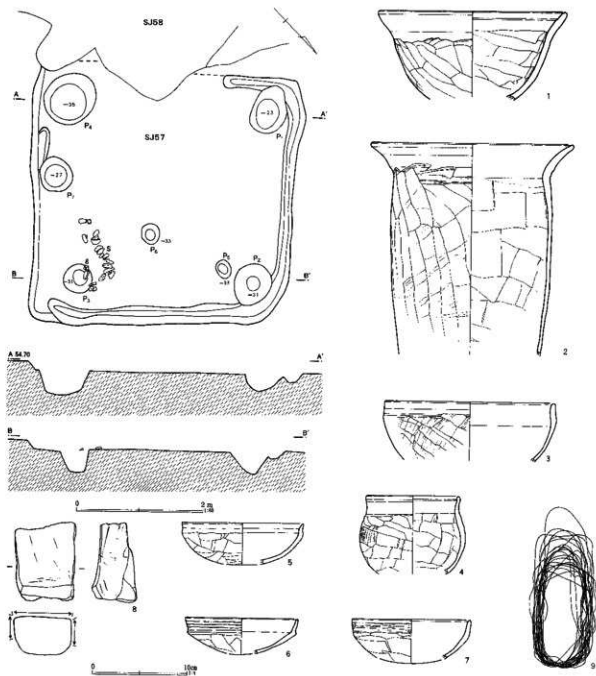
床面は概ね平坦である。カマドは東壁のはば中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれていた。ビットは1本あるが柱穴ではなからう。壁溝は巡っているが、南壁部では壁よりやや内側に位置する。建て替えてあろうか。

出土遺物は土師器環・壺・小空甕(壺)・甕?、須恵器甕などが検出された(第73図1~10、第74図11~12)。土師器環は僅かに丸底で、体部に無調整部を大

第27表 第57号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(20.0)	8.8		D E H J	2	橙	15	
2	甕	21.6	22.1		B D E H J	2	橙	80	
3	碗	(18.0)	6.1		E H J	2	橙	15	
4	碗	(9.6)	8.2		E H J	2	橙	20	
5	坏	(13.0)	4.3		E H J	2	橙	40	
6	坏	(12.0)	3.2		E H J	2	にぶい橙	40	
7	坏	(12.6)	4.1		E H J	2	にぶい橙	40	
8	磁石	長8.40cm 最大幅6.45cm 厚さ4.81cm 重量312.06g							

第72図 第57号住居跡・出土遺物



大きく残すタイプである。上師器壺類も大半は器壁が薄く仕上げられている。8・9は混入か。須恵器甕(11・12)はおそらく同一個体で、胎上の特徴から秋間産の可能性が高い。住居跡の時期は8世紀中葉前後と思われる。

第59号住居跡 (第75図)

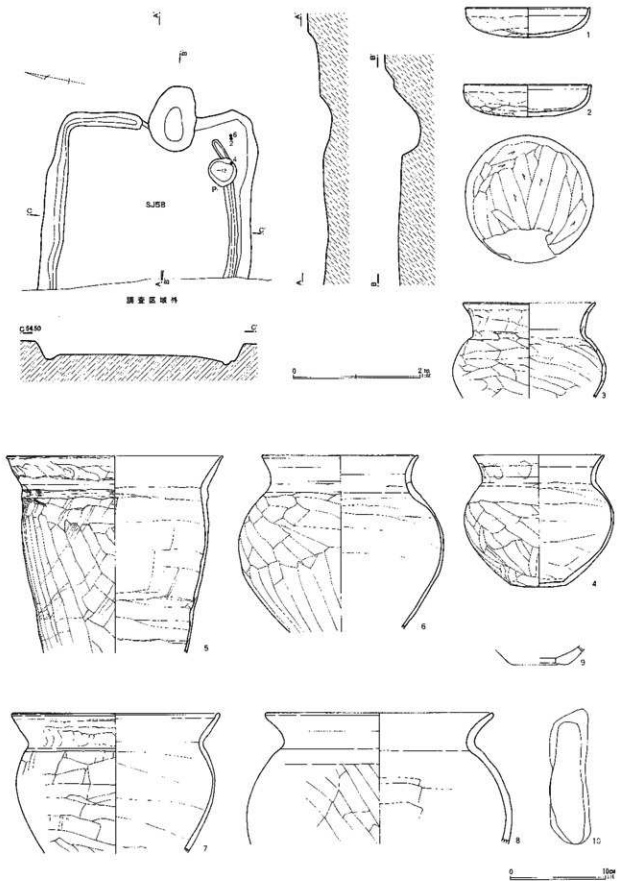
第59号住居跡は、C・D-2グリッドに位置する。重複する第25号住居跡よりも新しく、第52・54号土壘

の上面に床を張って構築していた。

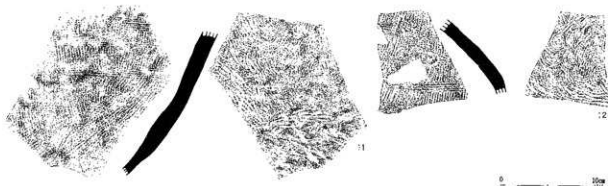
平面形は長方形で、規模は長径4.96m、短径3.46m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-77°Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。ピットは5本検出され、Pit 1~4が主柱穴に相当しよう。但し、深度は浅い。貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に位置する。第52・54号土壘は住居中央付近におさまっており、本住居跡

第73图 第58号住居跡・出土遺物(1)



第74図 第58号住居跡出土遺物(2)



第28表 第58号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.2)	3.1		HJ	2	橙	40	
2	環	13.4	3.4		EHJ	2	橙	85	No3
3	小型甕	(14.0)	10.0		EHJ	3	にぶい黄橙	40	
4	小型甕	(13.8)	13.8	5.6	EHJ	2	橙	90	No2
5	甕	23.0	20.5		BEHJ	2	橙	80	
6	甕	(16.2)	18.5		DEHJ	2	にぶい赤褐	80	No1
7	甕	(22.0)	14.7		EHJ	2	橙	30	
8	壺	(24.2)	13.8		BDE	2	橙	10	
9	甕		2.0		CE	1	にぶい橙	20	
11	須恵甕				HJ	1	黄灰	破片	黒色粒子含む 秋間産 12と同一個体
12	須恵甕				HJ	1	灰	破片	黒色粒子含む 秋間産 11と同一個体

第29表 第59号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(16.0)	1.9		AD	2	橙	5	
2	環	(13.0)	2.8		EHJ	2	橙	10	カマド内
3	環	(12.0)	3.4		EHJ	2	褐灰	20	内外面黒色処理
4	環	(11.8)	3.2		ABCDE	1	橙	25	
5	環	(12.4)	3.4		BDEHJ	2	橙	45	
6	環	14.2	3.0		ABDE	1	橙	10	
7	環	(14.0)	3.2		EHJ	2	灰黄褐	10	
8	甕	(19.0)	15.7		EHJ	2	にぶい褐	15	カマド
9	甕	20.6	19.0		BDEHJ	2	にぶい橙	55	カマド内
10	甕	(20.0)	17.5		EIJ	2	にぶい褐	40	カマド内
11	壺		2.7	(8.0)	EHJ	2	橙	20	
12	深鉢		3.3	(6.0)	BEHJ	2	橙	45	内面は黒色 縄文土器

の床下土層の可能性もあろう。

出土遺物は土師器の環と甕、壺等がある(第75図1~13)。9の土師器甕は頸部外面縦ヘラケズリ調整されている。4・5の土師器環は体部上位に無調整部を残す北式凝型環である。時期は8世紀前半であろう。

第80号住居跡(第76図)

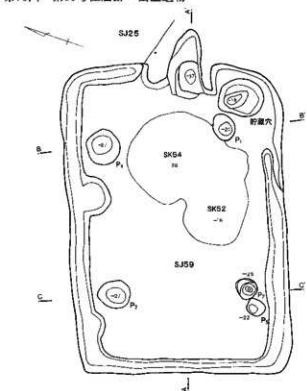
第80号住居跡は、D-2グリッドに位置する。第7号土城を切って構築されていた。

小型の住居跡である。平面形はやや歪んだ長方形で、規模は長径2.73m、短径1.89m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-25°-Wを示す。

床面はやや起伏をもつ。カマドは検出されなかった。ピット等の付属施設もない。

出土遺物は極めて少なく、ロク土師器小皿の小片が1点検出されたのみである。時期は10世紀後半~11世紀初頭頃と推定される。

第75図 第59号住居跡・出土遺物

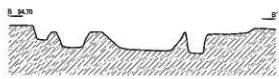
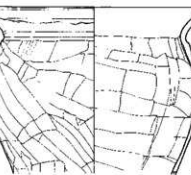
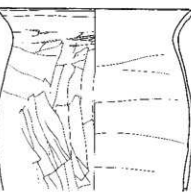
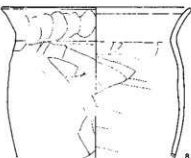


S.J.59

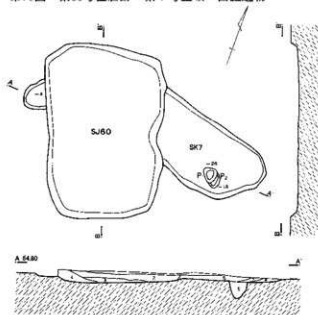
- 1 砂褐色土 ローム粒・白色粘多量、ロームブロック少量
- 2 緑褐色土 ローム粒・白色粘・焼土ブロック・褐色粘土ブロック少量
- 3 黄褐色土 ロームブロック
- 4 黄褐色土 ローム粒・白色粘・焼土・褐色粘土ブロック少量
- 5 灰黒褐色土 灰黒褐色粘土ブロックに褐色土層以て覆む
- 6 明褐色土 焼土ブロック・灰化粘少量、灰野褐色粘土ブロック少量

S.J.59 カマド

- 1 緑褐色土 コム粒・白色粘・褐色粘土ブロック少量
- 2 砂褐色土 ローム粒・白色粘多量、灰化粘・褐色粘土ブロック少量
- 3 黄褐色土 ロームブロック
- 4 濃い黄褐色土 ローム粒・白色粘多量、ロームブロック少量



第76図 第60号住居跡・第7号土壇・出土遺物



- 1 赤褐色土 ローム粒・白色粘多量
- 2 緑褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粘多量、焼土粒少量
- 3 にぶい褐色土 コーム粒・白色粘多量、ロームブロック少量
- 4 にぶい褐色土 コーム粒・白色粘多量、焼土粒、炭化植物少量
- 5 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粘多量
- 6 赤褐色土 ローム粒・白色粘少量
- 7 赤褐色土 ロームブロック
- 8 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粘多量

0 2m



0 10cm

第76図1はロクロ土師器小皿である。推定口径は約10cm。胎土に赤色粒子と白色粒子を含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。残存率は10%以下である。

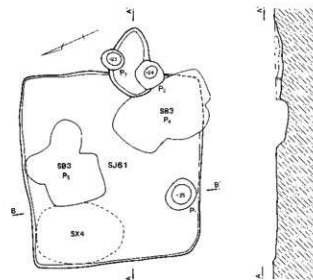
第61号住居跡 (第77図)

第61号住居跡は、C・D-3グリッドに位置する。第3号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明だが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は正方形で、規模は長径3.04m、短径2.91m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-114°-Eを示す。

カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切

第77図 第61号住居跡・出土遺物



り込んで構築されていた。ピットは3本あるが、いずれも柱穴にはならない。

出土遺物は少なく、土師器環 (第77図1) と皿 (2) があるのみである。いずれも小片で、時期も異なる。住居の時期は不明であるが、環の年代を探れば、9世紀代であろうか。

第77図1は土師器環。推定口径12cm。胎土に石英、長石、角閃石を含む。焼成は良好でにぶい橙色。10%残存。2は土師器皿。推定口径20cm。胎土に角閃石を含む。焼成良好でにぶい橙色。残存率は10%以下。



- 1 赤褐色土 褐色粘土ブロック・焼土ブロック
- 2 赤褐色土 ロームブロック・焼土粒・炭化植物少量

0 2m



0 10cm

第62号住居跡 (第78Ⅷ)

第62号住居跡は、D-3・4グリッドに位置する。重複する第63・64・109号住居跡、第47・48・61号上城を切り、第49号上城に切られていた。第6号掘立柱建物跡との関係は不明である。

平面形は歪んだ長方形で、規模は長径4.30m、短径2.55m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。

床面は凹凸をもつ。カマドは東壁の北寄りに設置され、燃焼部は壁を大きく切り込んでいる。

第79Ⅷ1～5は第62～64号住居跡出土遺物であるが、出土遺構を特定できない。確実に伴う出土遺物はないため、第63号住居跡との関係から8世紀初頭以降という上限がわかるのみで、住居跡の時期は不明とせざるを得ない。

第63号住居跡 (第78Ⅷ)

第63号住居跡は、D-3・4、E-3グリッドに位置する。遺構集中区の一隅にあり、住居形態や新旧関係など不明瞭な点がある。第65・108号住居跡を切り、第62号住居跡、第49号上城に切られていた。

平面形は長方形と推定されるが、東壁の北半は明瞭に検出できなかった。規模は長径5.18m、短径4.32m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は概ね平坦だが、北東部に弱い段差が付く箇所がある。カマドは検出されなかった。

出土遺物は少ないが、第79Ⅷ7・8が本住居跡に帰属する。1～5・9についても本住居跡または第64号住居跡に伴う可能性が高い。5の須恵器蓋は群馬産で

ある。時期的には7世紀末～8世紀初頭に位置づけられよう。

第64号住居跡 (第78Ⅷ)

第64号住居跡は、D-3・4グリッドに位置する。重複する第62・66号住居跡よりも古い。第3・6号掘立柱建物跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長径4.57m、短径3.42m(現在長)、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは7本あるが、柱穴配置は不明。壁溝は部分的に巡る。

確実に伴う遺物はない。第79Ⅷ1～5・9については本住居跡または第63号住居跡に帰属するものと考えられるが特定できない。時期は不明である。

第65号住居跡 (第78Ⅷ)

第65号住居跡は、E-3・4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第63号住居跡よりも古く、第108号住居跡よりも新しい。第63号住居跡に住居の大半を破壊され、詳細は不明である。

平面形は方形形と推定され、規模は長径2.64m、短径1.10m(現在長)、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-36°-Eを示す。

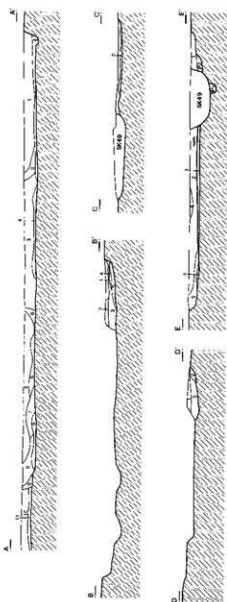
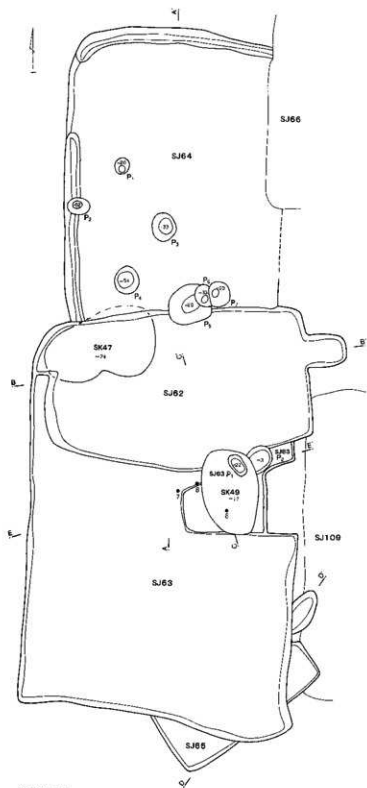
カマドは東壁に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺物は検出されなかった。時期に関しては不明確で、第63号住居跡以前という限り限定しかできない。

第30表 第62～64号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.4)	3.4		E H J	2	橙	20	SJ62-64
2	坏	(14.2)	3.2		A B C D	1	にぶい赤褐色	10	SJ62-64
3	皿	(19.2)	3.1		A B C D E	1	橙	10	SJ62-64
4	皿	18.0	2.8		A B C D E	2	橙	10	SJ62-64
5	須恵器	(18.0)	2.0		II J	1	灰白	10	SJ62-64 群馬産(藤岡産か)
6	碗	(18.0)	5.7		E H J	2	橙	60	SJ63No1
7	甕	(24.0)	21.2		E H J	2	橙	30	SJ63No3
8	甕	(24.0)	15.3		E II J	2	橙	15	SJ63No2
9	甕		5.0	(6.0)	E H J	2	橙	20	SJ62-64

第78団 第62~65号住居跡



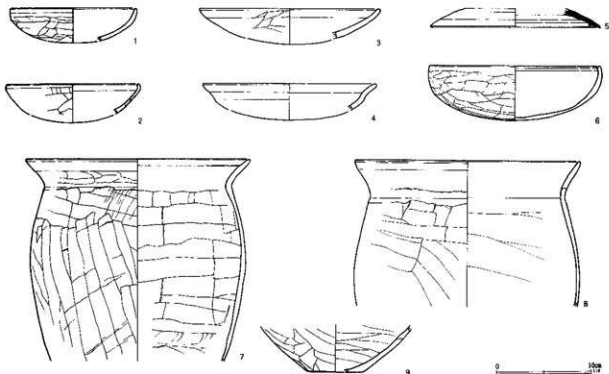
- SJ 62 配列表
- 1 黄褐色土 ローム多量
 - 2 黄褐色土 灰褐色粘土層付
- SJ 63
- 1 暗褐色土 焼土・焼土ブロック・ローム殻・ロームブロック多量、灰褐色粘土層付
 - 2 黄褐色土 ローム殻・焼土殻少量、白色砂多量

- 3 黄褐色土 ローム殻多量、自然砂少量
 - 4 暗褐色土 ローム殻・自然砂・焼土殻少量
 - 5 黄褐色土 コーム殻・自然砂多量、焼土殻少量
- SJ 65 カマド
- 1 暗褐色土 焼土
 - 2 暗褐色土 焼土殻少量
 - 3 黄褐色土 焼土殻・焼土ブロック少量

- SJ 62 - 63 - 64
- 1 黄褐色土 ローム殻・焼土殻少量、白色砂多量
 - 2 暗褐色土 ローム殻少量、自然砂・焼土殻多量
 - 3 黄褐色土 ローム殻少量、自然砂・焼土殻多量
 - 4 暗褐色土 ローム殻多量、自然砂・焼土殻多量
 - 5 黄褐色土 ローム殻少量、自然砂・焼土殻多量
 - 6 暗褐色土 ローム殻・自然砂少量、焼土殻多量
 - 7 黄褐色土 コーム殻・焼土殻多量、自然砂少量
 - 8 暗褐色土 コーム殻・自然砂少量、自然砂多量
 - 9 暗褐色土 コーム殻・自然砂少量、焼土殻少量
 - 10 黄褐色土 ローム殻・焼土殻少量、自然砂多量
 - 11 暗褐色土 コーム殻多量、自然砂少量
- SJ 62 カマド
- 1 暗褐色土 焼土・焼土ブロック・灰褐色粘土層付、黄褐色土少量 (天井裏面付)
 - 2 暗褐色土 焼土・焼土殻少量 (天井裏面付)
 - 3 黄褐色土 自然砂・焼土・焼土殻少量
 - 4 暗褐色土 焼土 (基礎面付?)
 - 5 暗褐色土 ローム・ロームブロック・焼土殻少量



第79図 第62～64号住居跡出土遺物



第66号住居跡 (第80図)

第66号住居跡は、D-3・4グリッドに位置し、多数の遺構と重複している。新川関係は第64・67・68・70・71号住居跡を切っている。このうち、第67・68号住居跡とは住居の軸もほぼ同一で、出土遺物の時期差もあまり見られない。おそらく、第67→68→66号住居跡の順に継続的に建て替えられたものと考えられる。

平面形は正方形で、規模は長径4.25m、短径4.00m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-1°-Eを示す。カマドは2基検出され、1号カマドは北壁のほぼ中央に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでいる。2号カマドは床面下から検出された。東向きのカマドであるか詳細は不明。主軸方向はN-98°-Eを示す。2号カマドの段階の住居跡を66b、1号カマドの段階を66aとすると、第66b→66a号住居跡に建て替えられたものと推定される。

ビットは1本検出されたが、柱穴にはならない。壁溝は西壁を中心に半周する。

出土遺物は第66～68号住居跡まで一連の建て替え住居跡と考えられること、各住居に分離できない遺物

があることからまとめて掲載した(第81・82図)。

第81図1・2・5・6の土師器環、13の須恵器環、27の土師器鉢は本住居跡から検出された。時期は9世紀中葉であろう。

第67号住居跡 (第80図)

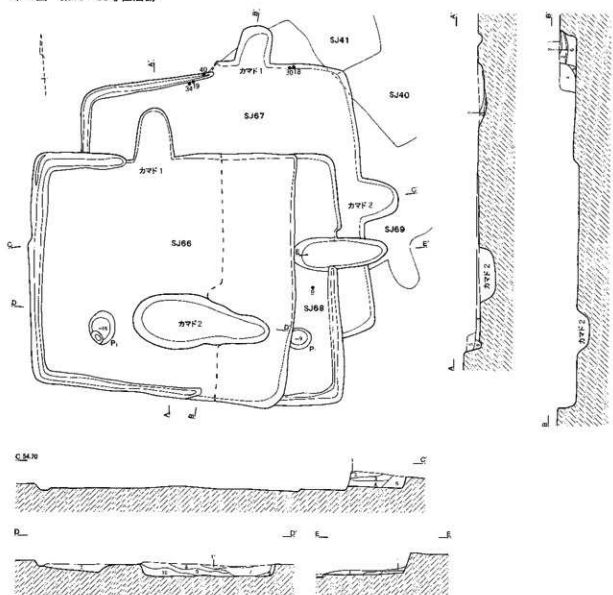
第67号住居跡は、D-4グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、第69・70号住居跡を切り、第40・42・43・66・68号住居跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は長径4.57m、短径4.45m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。

カマドは2基検出され、1号カマドは北壁に、2号カマドは東壁に設置されていた。進捗状態から1号カマド→2号カマドに付け替えられたものと推定される。壁溝は北西部付近に部分的に検出された。

出土遺物は、第81図2・8・11の土師器環、19のロクロ土師器高台碗、18・21～23の須恵器高台碗、25・26の須恵器甕、28・30・31・34・38～41・44の上師器甕類、編物石(47)は本住居跡から出土した。18の須恵器高台碗、30の上師器甕は第70号住居跡の遺物として

第80図 第66~68号住居跡



SJ66

- 1 埴輪色土 焼土・焼土粒多量、炭化物少量、河原色粘土多量
 - 2 埴輪色土 焼土・焼土ブロック少量、炭化物少量
 - 3 埴輪色土 炭化物多量、粘土質
 - 4 灰白土 焼土・炭化物多量 (胎り肌)
 - 5 埴輪色土 焼土・焼土粒多量
 - 6 埴輪色土 ローム多量、炭土少量
- SJ66 カマド2
- 7 埴輪色土 ロームブロック多量、焼土少量
 - 8 埴輪色土 焼土・焼土ブロック多量
 - 9 埴輪色土 ローム地多量、焼土少量
 - 10 埴輪色土 ロームブロック・白色粒多量
 - 11 黒色土 炭化物
 - 12 埴輪色土 焼土・焼土ブロック多量、炭化物少量

SJ67 カマド1

- 1 埴輪色土 焼土・焼土ブロック多量
- 2 埴輪色土 焼土ブロック多量、炭化物少量
- 3 埴輪色土 炭化物多量、焼土・焼土粒少量
- 4 埴輪色土 焼土・焼土ブロック・ローム粒・ロームブロック多量
- 5 埴輪色土 焼土粒少量
- 6 埴輪色土 焼土・焼土ブロック・ローム粒少量

SJ67 カマド2

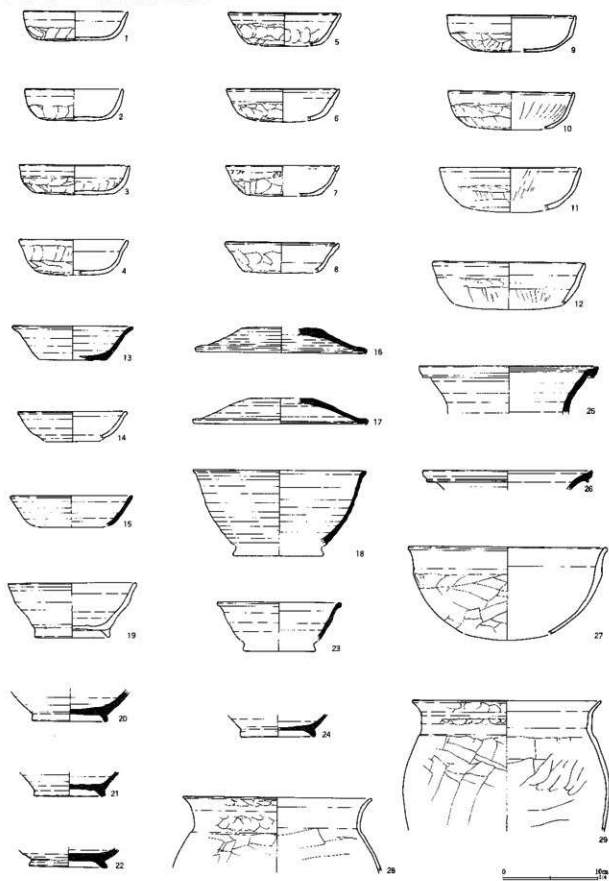
- 1 埴輪色土 焼土・焼土粒少量、河原色粘土多量
- 2 埴輪色土 焼土・焼土粒、焼土ブロック少量
- 3 埴輪色土 焼土・焼土ブロック・焼土ブロック多量、炭化物少量 (灰土層様式)
- 4 埴輪色土 今令砂質、焼土・焼土ブロック多量、炭化物少量
- 5 埴輪色土 焼土・焼土ブロック多量

SJ68 カマド

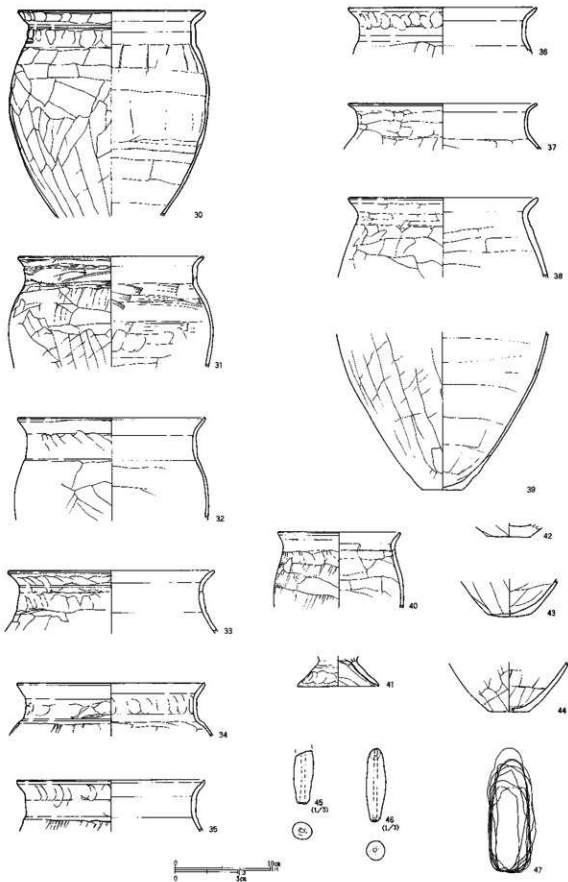
- 1 埴輪色土 焼土・炭化物
- 2 埴輪色土 焼土ブロック少量 (胎り肌)

0 2.5

第81图 第66~68号住居跡出土遺物(1)



第82图 第66~68号住居跡出土遺物(2)



取り上げられているが、時期、及び出土位置から本住居に伴う遺物と思われる。19のロクロ土師器輪と38の甕に伴うか疑問である。时期的には9世紀前半～中頃であろう。

第68号住居跡 (第80図)

第68号住居跡は、D-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第67・69・70号住居跡を切り、第66号住居跡に切られている。しかし、第66号住居跡と南壁を共有し、軸もほぼ一致することから本来は第66

号住居跡と同一住居跡の建て替えと見るのが妥当であろう。

平面形は縦長長方形で、規模は長径4.95m、短径3.98m、深さ0.33mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示す。

カマドは東壁に設置され、燃焼部は壁を大きく切り込んでいる。ピットは1本検出された。

確実に本住居跡に帰属する遺物は第81図9の土師器環のみである。時期は9世紀中葉と考えられる。

第31表 第66～68号住居跡出土遺物観覧表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.1	3.1	8.1	H J	3	にぶい橙	60	SJ66-68
2	環	(10.4)	3.3	(7.9)	H J	3	橙	40	SJ67
3	環	11.7	3.1	8.8	E H J	2	にぶい褐	65	SJ66-68
4	環	(11.4)	3.7	(7.8)	D E H J	3	にぶい橙	20	SJ66-68
5	環	(12.0)	3.5	(7.7)	D E H J	2	にぶい褐	25	SJ66-68
6	環	(12.0)	3.4		E H J	2	橙	10	SJ66
7	環	(12.0)	3.2	(7.4)	H J	3	にぶい橙	40	SJ66-68
8	環	(12.0)	3.1		A B C D E	1	橙	10	SJ68
9	環	(13.6)	3.8		E H J	2	橙	40	SJ68 No.1+SJ70
10	環	(13.6)	3.9	(9.0)	H J	2	橙	30	SJ66-68 放射状堆文
11	環	(15.0)	4.4		D E H J	2	にぶい橙	10	SJ67
12	環	(16.0)	4.4		H J	2	橙	10	SJ66-68 放射状堆文
13	須恵環	(12.8)	3.5	(7.0)	H I J	1	灰	15	SJ66 木野産
14	須恵環	(11.6)	3.0		F H J	1	灰	10	SJ66-68 南比企産
15	環	(13.0)	3.2		H J	2	にぶい橙	20	SJ66-68 ロクロ土師器
16	須恵蓋	(18.0)	2.8		E H I J	2	褐灰	20	SJ66-68 木野産
17	須恵蓋	(18.2)	2.7		H I J	2	灰	40	SJ66-68 木野産
18	須恵輪	(18.2)	7.9		H I J	1	灰	40	SJ70 No.1 木野産
19	高台輪	(13.6)	5.7	8.0	H J	2	にぶい褐	70	SJ67 No.2 上師賢
20	須恵高台輪		3.6	(8.0)	H I J	1	灰	40	SJ66-68 木野産
21	須恵高台輪		2.6	7.6	A H I J	1	灰	80	SJ67 木野産
22	須恵高台輪		2.1	8.2	A B H I J	2	にぶい黄橙	90	SJ67 木野産
23	須恵輪	(12.2)	4.0		E H I J	1	灰	20	SJ67 木野産
24	須恵高台輪		2.4		H I J	1	灰	50	SJ66-68 木野産
25	須恵蓋	(19.0)	5.0		H I J	1	灰	10	SJ66-68 木野産
26	須恵蓋	(18.0)	2.0		H I J	1	灰	10	SJ67 カマド産地不明(群馬産か)
27	鉢	(21.0)	9.1		D E H J	2	にぶい橙	45	SJ66
28	甕	(20.0)	7.9		E H J	2	橙	10	SJ67 カマド
29	甕	(20.0)	13.7		E H J	2	にぶい褐	15	SJ66-68
30	甕	19.8	21.5		E H J	3	にぶい褐	80	SJ70 No.1
31	甕	19.6	11.7		F H J	2	にぶい橙	80	SJ67 No.3
32	甕	(20.0)	10.8		E H J	2	橙	15	SJ67 カマド
33	甕	(22.0)	6.6		E H J	2	にぶい橙	15	SJ66-68
34	甕	(20.0)	5.6		D E H J	2	にぶい橙	25	SJ67 No.2
35	甕	(20.0)	5.3		E H J	2	橙	15	SJ66-68
36	甕	(20.0)	4.9		E H J	2	にぶい橙	15	SJ66-68
37	甕	(20.0)	4.8		E H J	2	橙	15	SJ67 カマド
38	甕	(20.0)	8.3		E H J	2	にぶい橙	10	SJ67

番号	器種	口徑	器高	底徑	胎土	焼成	色調	残存率	備考
39	甕		16.5	4.2	E H J	2	橙	30	SJ67 カマド
40	小型甕	(13.0)	8.0		E H J	2	にぶい橙	40	SJ67 No1 SJ66-68
41	白付甕		3.2	8.6	E H J	2	橙	95	SJ67 No5
42	甕		1.4	4.5	E H J	2	にぶい赤褐	60	SJ66-68 底部木炭痕 混入
43	甕		3.9	4.4	D E H J	2	にぶい褐	60	SJ66-68
44	甕		5.3	(4.2)	H J	2	にぶい橙	20	SJ67 カマド
45	土師		共 (4.15cm)	最大径1.65cm	孔径0.10-0.35cm	重量8.47g	橙		SJ66-68
46	土師		長5.70cm	最大径1.55cm	孔径0.30cm	重量12.31g	橙		SJ66-68

第69号住居跡 (第83図)

第69号住居跡は、D-4グリッドに位置する。第70号住居跡の床面下から検出された。カマドのみ残存し、詳細は不明である。カマドの軸や出土遺物から、本住居跡を建て替えて第70号住居跡を構築したものと考えられる。

平面形は長方形と推定され、規模は長軸5.05m、短軸4.00m前後である。カマドの主軸方向はN-149°-Eを示す。

カマドは南東壁に設けられ、僅かに火床面と掘り方が残存するのみである。

出土遺物は、やや小振りの須恵器蓋 (第85図19) と大振りの須恵器環 (24) がある。須恵器蓋にはかえりが付き、坏は底部手持ちヘラケズリが施されやや丸底風である。時期は第70号住居跡との関係も考慮して、7世紀末～8世紀初頭頃と思われる。

第70号住居跡 (第83・84図)

第70号住居跡は、D-4グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、第40・42・43・66-68号住居跡に切られている。第41号住居跡との関係は不明。また、第71号住居跡とも重複し、第71号住居跡の方が新しいもの

のと判断されている。

平面形は整った方形で、規模は長径6.01m、短径5.11m、深さ0.19mを測る。主軸方位はN-59°-Eを示す。

カマドは北東壁に2基検出された。掘り方の調査で、壁溝も二重に巡ることから判明し、北東壁を基準に僅かに拡張したものと考えられる。北側のカマドが拡張前の住居 (70a)、南側のカマドが拡張後 (70b) に対応するものであろう。

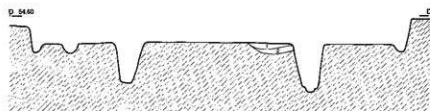
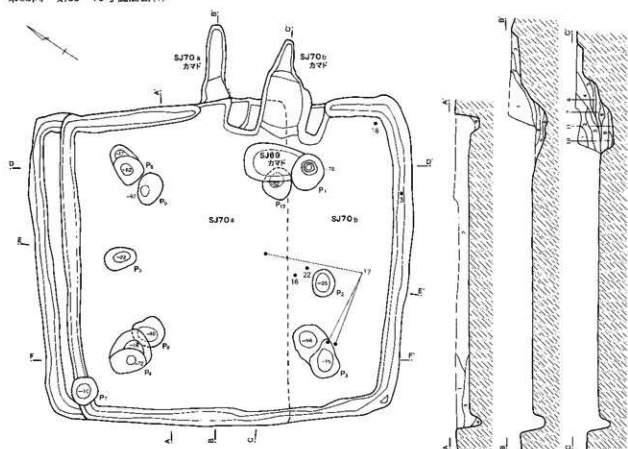
ピットは13本検出された。Pit 1～6が第70b号住居跡の柱穴と考えられる。床面下から検出された Pit 8～10は第70a号住居跡に伴うものであろうか。また、Pit 12・13は第69号住居跡の柱穴に相当する可能性があるであろうか。

出土遺物は比較的多くまとまっている (第85図)。土師器環は口縁部が内彎するタイプの北武藏型坏が主体である。須恵器の蓋 (18～21) は小振りのものと大振りのものの2タイプがあり、内面にかえりが付く。須恵器環 (22～24) も大きさが大小がある。時期的には7世紀末～8世紀初頭段階と考えられる。

第32表 第69・70号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口徑	器高	底徑	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	2.8		D H J	3	橙	10	SJ69・70
2	環	(11.6)	3.5		D E H J	2	群	30	SJ69・70
3	環	(11.6)	3.5		E H J	2	にぶい橙	85	SJ69・70 No1
4	環	(10.6)	3.2		E H J	2	橙	50	SJ70 カマド
5	環	(11.0)	2.8		B E H J	3	橙	15	SJ70 外面は黒い
6	環	10.4	3.0		E H J	2	橙	80	SJ70+ SJ68 カマド
7	環	(12.2)	3.8		H	2	にぶい橙	40	SJ69・70
8	環	(11.6)	3.1		D E H J	2	橙	40	SJ70
9	環	(12.0)	3.7		E H J	2	橙	45	SJ68 No6
10	環	(12.6)	3.7		H J	2	橙	40	SJ67 カマド

第83図 第69・70号住居跡(1)



SJ70

- 1 赤褐色土 焼土・焼土粒・焼土ブロック多量、炭化物質少量
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物質少量
- 3 暗褐色土 ローム・ローム粒少量、ロームブロック・炭化物質少量
- 4 暗褐色土 ローム・ロームブロック多量

SJ70a カマド

- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土多量
- 2 赤褐色土 焼土粒・焼土多量
- 3 褐色土 焼土ブロック多量
- 4 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック少量
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック多量
- 6 暗褐色土 コームブロック多量・焼土粒少量

SJ70b カマド

- 1 褐色土 ローム粒・白色粒・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 暗褐色粘土ブロック・焼土ブロック少量、コーム粒・白色粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・褐色色粘土ブロック多量
- 4 暗褐色土 暗褐色粘土ブロック多量、炭化物質・焼土粒少量、コーム粒少量
- 5 暗褐色土 ローム粒少量、焼土ブロック多量、炭化物質・暗褐色粘土ブロック少量

赤褐色土 焼土ブロック主体

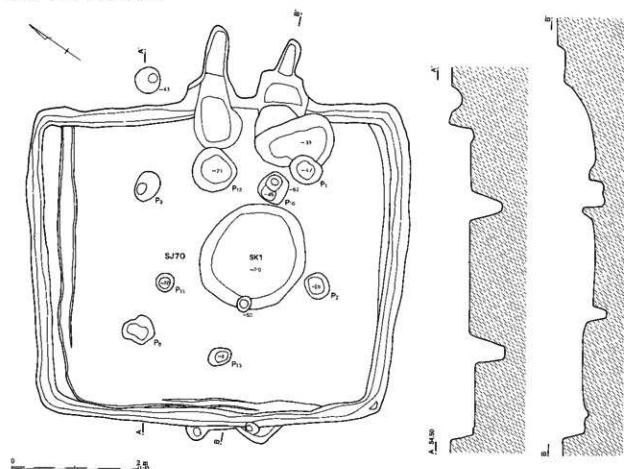
- 7 暗褐色土 暗褐色粘土・焼土ブロック少量
- 8 暗褐色土 ローム粒・炭化物質少量
- 9 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒少量
- 10 暗褐色土 焼土粒少量、ローム粒少量
- 11 暗褐色土 焼土ブロック少量、ロームブロック多量

SJ69 カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒・炭多量
- 2 暗褐色土 焼土粒少量、焼土ブロック・炭少量

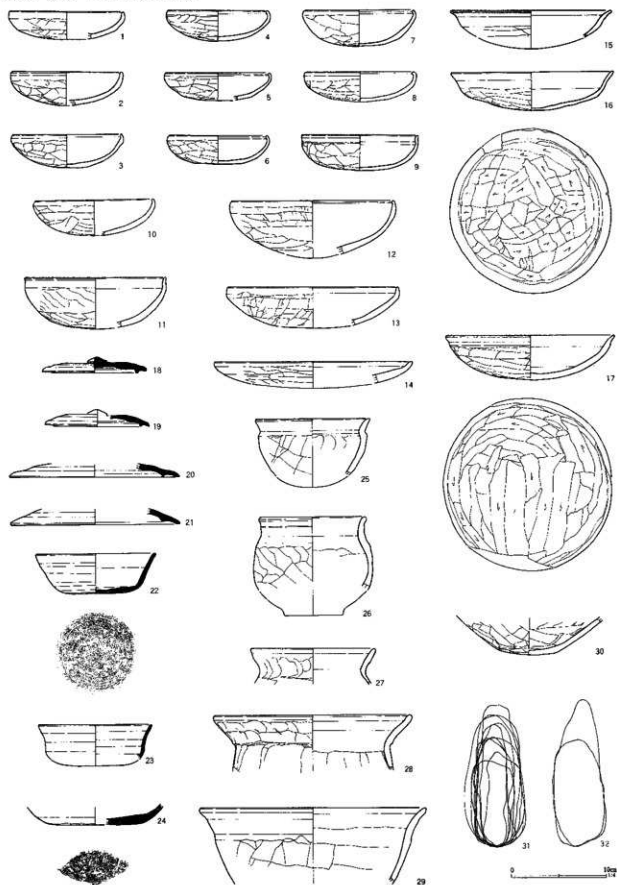
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

第84図 第69・70号住居跡(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
11	環	(15.0)	5.2		BEHJ	2	にぶい橙	20	SJ70
12	碗	(17.0)	5.6		EHJ	2	にぶい橙	30	SJ69・70
13	環	(18.0)	4.0		EIJ	2	橙	15	SJ70
14	皿	(21.0)	2.3		AE	2	にぶい橙	10	SJ70
15	皿	(20.0)	2.8		EI	3	にぶい黄橙	10	SJ70
16	皿	17.0	4.0		EIJ	3	にぶい橙	95	SJ68 No.3
17	皿	17.8	4.7		DEHJ	1	橙	90	SJ68 No.1・4・5 底部円形黒斑あり
18	須恵蓋	(11.0)	1.7		FHIJ	1	灰	55	SJ69・70 19と同一個体と思われる 木野産
19	須恵蓋	(11.0)	2.0		EHIJ	1	灰	10	SJ69 カマド 18と同一個体と思われる 木野産
20	須恵蓋	(18.0)	1.9		BEHJ	3	灰	15	SJ70 木野産
21	須恵蓋	(18.0)	1.7		HIJ	3	灰	10	SJ67 木野産
22	須恵環	(12.7)	4.1	8.4	EHIJ	1	灰	95	SJ68 No.2 木野産
23	須恵環	(12.0)	3.6		HIJ	1	褐灰	10	SJ69・70 木野産
24	須恵環		1.9	(10.0)	HIJ	1	灰	20	SJ69 カマド 木野産 底部手持ちヘラケズリ
25	小型壺	(12.0)	6.0		ABDEH	1	橙	20	SJ68
26	小型壺	(11.4)	7.6		ABCDE	1	橙	20	SJ69・70
27	小型壺	(13.2)	3.7		ABCDE	1	にぶい褐	15	SJ68
28	壺	(21.0)	5.9		EHJ	2	にぶい橙	40	SJ70
29	鉢	(24.0)	8.0		EHJ	1	橙	15	SJ70
30	壺		3.9	6.4	EH	2	褐灰	60	SJ69・70 内面は橙色

第85图 第69·70号住居跡出土遺物



第71号住居跡 (第86図)

第71号住居跡は、D-4グリッドに位置する。重複遺構との新山関係は第70・72・109号住居跡を切り、第66・67号住居跡に切られていた。

平面形は横長方形で、規模は長径4.54m (現在長)、短径3.48m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-97-Eを示す。

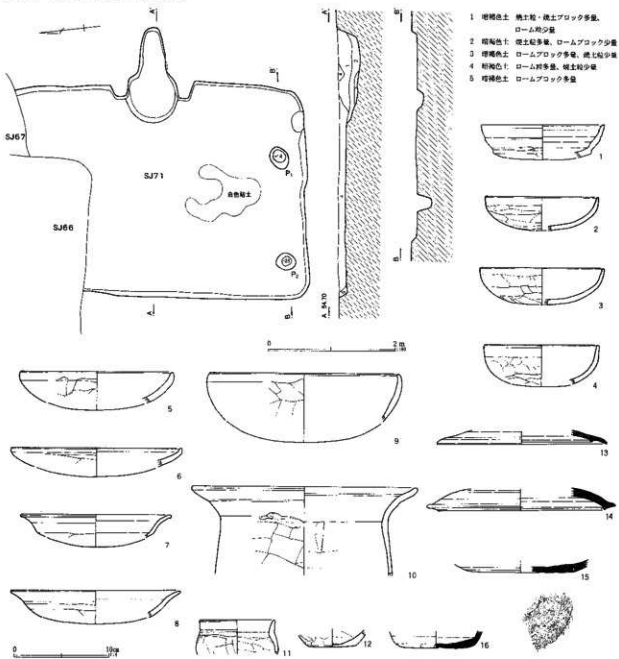
床面は全体に軟弱である。中央南よりの床面には白

色粘土が薄く堆積していた。カマド崩落粘土の可能性もあるが、やや距離が離れており性格は不明である。住居埋土は暗褐色土を基調とし、大きな土層変化は認められなかった。

カマドは東壁の中央に設置され、袖はほとんど流出していた。

ピットは南壁際に2本検出されたが、柱穴には相当しないであろう。

第86図 第71号住居跡・出土遺物

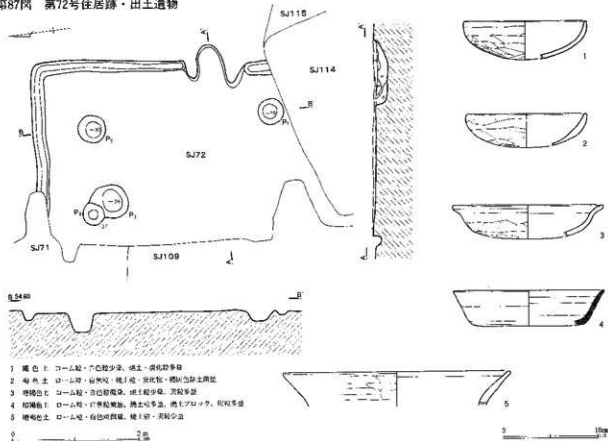


第33表 第71号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	3.4		DE	2	暗赤灰	10	
2	坏	(12.0)	3.5		DEHJ	2	橙	15	
3	坏	(13.0)	3.8		EIJ	2	橙	30	
4	坏	(12.2)	4.0		CDE	1	橙	30	
5	坏	(16.2)	3.2		ABCDE	1	橙	10	
6	皿	(18.2)	1.9		ABCDE	1	橙	10	
7	坏	(15.0)	2.4		EIJ	3	にぶい橙	10	
8	坏	(18.0)	2.8		DEHJ	2	橙	10	
9	坏	20.0	5.9		ABCDE	1	明赤褐	10	
10	甕	(24.0)	9.3		BDEHJ	2	橙	45	カマド
11	小型甕	(8.0)	3.5		EHJ	2	にぶい橙	20	
12	甕	1.8	(5.0)		EHJ	2	橙	20	カマド
13	須恵蓋	(18.0)	1.4		EHIJ	1	灰白	10	末野産
14	須恵釜	(20.0)	2.3		EHJ	1	灰	15	群馬産(藤岡または秋岡?)
15	須恵坏	1.4	(11.8)		BHIJ	1	灰	15	末野産
16	須恵坏	1.8	(7.0)		BIJ	1	灰	25	末野産 底部及び体部下端手持ちへラケズリ

出土遺物は少なくすべて破片である(第86図)。口縁部が直立する丸椀タイプの北武蔵型坏と皿、須恵器のかえり蓋、丸底風の坏が伴う。時期については、重複する第70号住居跡と大きく見れば同一段階であるが、やや新しい様相が認められ、8世紀初頭を中心とした

第87図 第72号住居跡・出土遺物



年代と考えられる。

第72号住居跡(第87図)

第72号住居跡は、D・E-4グリッドに位置する。重複造構との新旧関係は、第71・109・113・114・115号住居跡に切られていた。但し、第109・114号住居跡

第34表 第72号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	3.9		D E H J	2	橙	25	
2	坏	(12.4)	3.3		E H J	3	橙	15	
3	皿	(16.0)	3.2		E H J	2	橙	15	
4	須恵器坏	(16.0)	3.7	(11.0)	E H I J	1	灰	10	木野産 底部回転ヘラケズリ
5	甕	(24.0)	3.6		A D E	2	橙	10	

との関係は不明確である。

平面形は横長の長方形で、規模は長径3.81m、短径2.92m(現在長)、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

カマドは東壁の南寄りに設置され、底面は一段深く掘り込まれている。

ピットは4本検出されたが、全体の柱穴配置は不明である。

出土遺物は土師器坏・皿・甕と須恵器坏がある(第87図)。須恵器坏はやや丸底風で、底部は回転ヘラケズリが施されている。住居跡の時期は出土遺物から8世紀初頭頃と考えられる。重複する第71号住居跡との時期差はほとんどない。

第73号住居跡(第88図)

第73号住居跡は、D-4・5グリッドに位置する。床面はほとんど削平され、掘り方が辛うじて残存するのみである。重複遺構との新旧関係も不明とした方がよいであろう。

平面形は正方形で、規模は長径2.94m、短径2.56mである。主軸方向はN-86°-Eを示す。

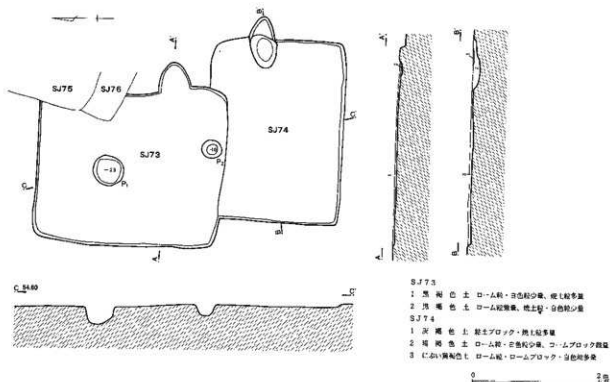
カマドは東壁の南寄りに設置されるが、詳細は不明である。ピットは2本検出されたが、住居に伴うか否か不明である。

遺物は検出されず、時期は不明とせざるを得ない。

第74号住居跡(第88図)

第74号住居跡は、D-4・5グリッドに位置する。

第88図 第73・74号住居跡



第73号住居跡同様、住居掘り方のみ遺存しており、遺構の詳細は不明である。重複遺構との新旧関係も不明としておく。

平面形は長方形で、規模は長径2.89m、短径2.14mである。主軸方向はN-88°-Eを示す。

カマドは東壁の北寄りに設置されるが、掘り方のみ残存していた。ピット他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物はない。時期も不明である。

第75号住居跡 (第89Ⅷ)

第75号住居跡は、D-4・5グリッドに位置し、重複する第76号住居跡を切っている。

平面形は長方形で、規模は長径4.36m、短径3.20m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-110°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、深い掘り方をもつ(第7層)。

ピットは10本検出された。Pit 1は貯蔵穴か、他のピットは柱穴にはならないであろう。

出土遺物は第76・77号住居跡と混在し、明確に分離できないものがある(第89・90Ⅷ)。第89Ⅷ11の土師器環と21の土師器甕はカマドから出土しており、本住居跡に伴うものと見て良い。この2点を基準に考えると、9・10・12・15・16・20が本住居跡に帰属する可能性が高いであろう。14の須恵器環は底部回転糸切後周辺部及び体部下端を回転へラケズリされている。底部が極めて厚く、口縁部に向かって先細りしている。胎上は細かく、やや砂っぽい。群馬産で、秋田か乗附観音山窟跡群産の可能性が高い。本住居跡には伴わない可能性が高い。住居の時期は9世紀後半～末葉頃と考えられる。

第76号住居跡 (第89Ⅸ)

第76号住居跡は、D-4・5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第77号住居跡を切り、第75・79号住居跡に切られていた。

平面形は長方形と推定され、規模は長径3.80m、短径1.36m(現在長)、深さ0.01mを測る。主軸方向はN-116°-Eを示す。

床面はほとんど削平され、カマドは検出されなかった。ピット他の付属施設もない。

出土遺物は第75・77号住居跡と混在している(第89・90Ⅷ)。新しい一群を第75号住居跡に、占相を示す一群を本住居と第77号住居跡に含めて考えておく。第89Ⅷ1~8・13・17~19がそれに該当する。14の環は伴うか否か不明である。時期的には8世紀前半代が中心と推定される。

第77号住居跡 (第89Ⅹ)

第77号住居跡は、D-5グリッドに位置する。重複する第76・79号住居跡に切られていた。僅かにコーナー部が遺存するのみで、詳細は不明である。

平面形は方形系統になろうが、コーナーは鈍角に屈曲している。規模は長径1.56m、短径0.77m(現在長)、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-16°-Wを示す。カマドやピット等の付属施設は検出されなかった。

本住居跡に確実に帰属する遺物は抽出できなかった。第76号住居跡で抽出した遺物の内、本住居に帰属するものがあるのかもしれない。時期は8世紀前半、またはそれ以前と考えられる。

第78号住居跡 (第91Ⅷ)

第78号住居跡は、D-5グリッドに位置し、重複する第7号溝跡を切り、第79号住居跡が覆土上面に乗っている。

平面形は横長の長方形で、規模は長径3.87m、短径2.34m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-103°-Eを示す。

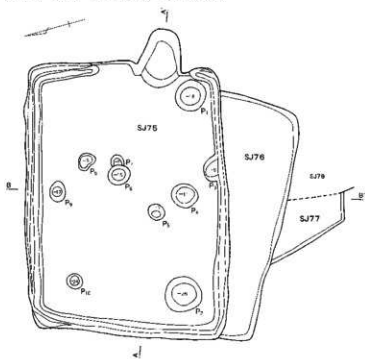
床面は平坦である。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁を大きく掘り込んでいる。

ピットは4本検出されたが、柱穴にはならないであろう。壁溝はカマドを除いて全周する。

出土遺物はカマド内及び床面からまとまって出土している。器種は須恵器環類・甕、土師器環類・甕・甗、灰釉陶器がある(第91・92Ⅷ1~22)。

須恵器環と高台碗は口縁部が強く外反し、底径は縮小している。末野産である。土師器甕は「コ」の字状口縁甕である。灰釉陶器甗(11)は内外面刷毛塗り、

第89図 第75~77号住居跡・出土遺物(1)



SJ75

- 1 暗赤褐色土 焼土・焼土多量、灰褐色土 (大戸板落土)
- 2 暗灰褐色土 焼土少量、灰土・暗褐色土の混合 (天井がけ?)
- 3 黒色土 焼土・灰土多量、炭化物多量、灰褐色土多量、焼土ブロック少量
- 4 黒色土 焼土多量、炭化物少量
- 5 暗褐色土 焼土少量、暗赤褐色土多量
- 6 暗赤褐色土 灰土 (天井がけ?)
- 7 黒色土 焼土・暗赤褐色土少量、炭化物多量
- 8 暗褐色土 焼土・焼土ブロック多量、炭化物少量
- 9 黒色土 ローム・ロームブロック多量

B.5450

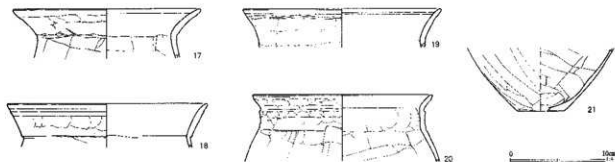


0 2m



0 10cm

第90図 第75～77号住居跡出土遺物(2)



第35表 第75～77号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地産	色調	残存率	備考
1	坏	14.0	3.3		ABE	1	橙	10	SJ75-77
2	坏	13.0	2.9		ADE	2	橙	10	SJ75-77
3	坏	14.0	3.7		CE	1	黄橙	10	SJ75-77
4	坏	(14.0)	2.8		HJ	2	にぶい橙	15	SJ75-77
5	坏	13.2	3.2		HJ	2	にぶい褐	90	SJ75-77
6	坏	(15.4)	3.9		DEHJ	2	橙	10	SJ75-77
7	坏	19.0	2.1		DE	2	橙	10	SJ75-77
8	皿	16.0	2.3		D	2	橙	10	SJ75-77
9	坏	(14.0)	3.6	(10.0)	DEHJ	2	橙	25	SJ75-77
10	坏	(13.0)	4.0		DEHJ	2	にぶい褐	50	SJ76
11	坏	(12.0)	3.9	(7.4)	EHJ	2	橙	20	SJ75 カマド
12	坏	(13.2)	3.4		ADEH	3	橙	10	SJ76
13	須恵壺	(19.0)	2.1		EHIJ	1	灰白	15	SJ75-77 本野産
14	須恵坏	(13.2)	4.0	8.2	HJ	1	灰白	60	SJ75-77 群馬産
15	須恵坏	(13.6)	4.9	(5.2)	HfJ	1	灰	40	SJ75-77 本野産
16	須恵長頸瓶		2.3	(9.4)	IJ	1	灰	40	SJ75-77 東金子産か
17	甕	(20.0)	5.2		EHJ	2	にぶい橙	10	SJ76
18	甕	(21.2)	4.6		ADE	1	橙	10	SJ75-77
19	甕	(21.0)	4.1		EHJ	2	橙	40	SJ75-77
20	甕	(19.0)	7.0		DEHJ	2	にぶい橙	20	SJ75-77
21	甕		6.6	(5.0)	DEHJ	2	褐灰	60	SJ75カマド

体部下位は回転ヘラケズリ調整が施される。胎土から東濃産と考えられる。光ヶ丘1号窯新段階か。9～14・19は混入と思われる。時期的には9世紀末葉～10世紀初頭頃と考えられる。

第79号住居跡 (第91図)

第79号住居跡は、D-5グリッドに位置する。重複する第75～78号住居跡、第3号井戸跡、第7号溝跡を切って構築されていた。掘り込みが浅く、東壁及び北西コーナー付近の壁は明確に検出できなかった。

平面形は横長の長方形で、規模は長径約2.80m、短径2.22m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-178°-Wを示す。

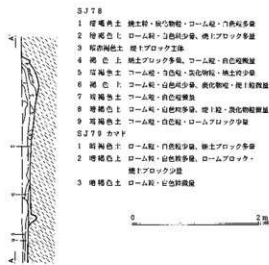
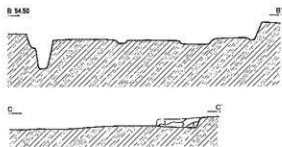
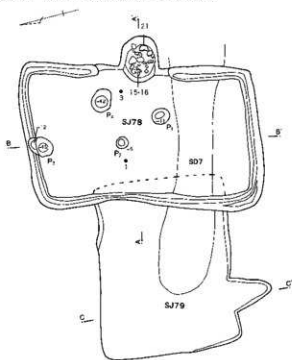
床面は概ね平坦であった。カマドは南壁の西寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。

ピット、その他の付属施設は検出されなかった。出土遺物は少ないが、ロクロ上師器高台輪が出土している。残念ながら所在が不明であるため、図化できなかった。そのほか、上師器坏と甕が少量検出された(第92図23～28)が、混入資料と思われる。住居跡の時期は、ロクロ上師器の存在から10世紀後半～11世紀であろう。

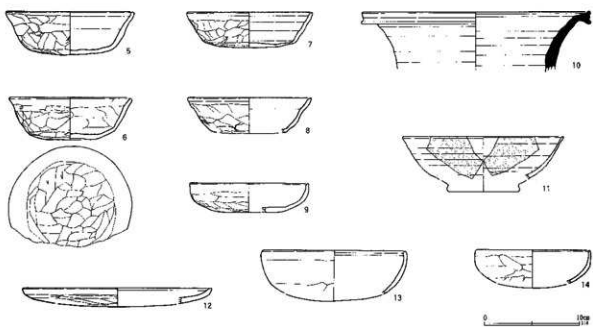
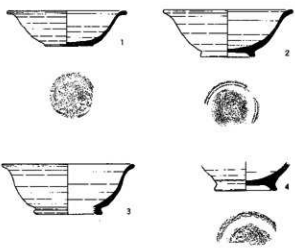
第80号住居跡 (第93図)

第80号住居跡は、D-5・6グリッドに位置する。第81・86号住居跡を切っている。第85号住居跡との新

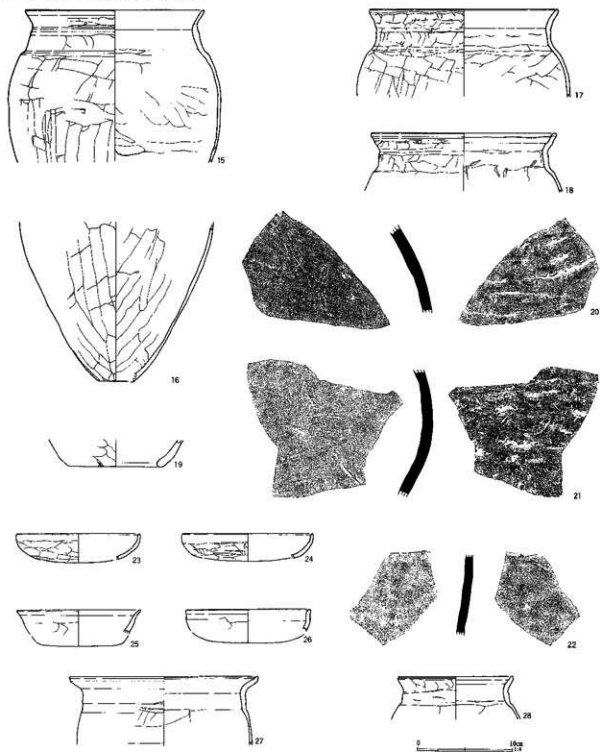
第91図 第78・79号住居跡・出土遺物(1)



- SJ78
- 1 厚褐色土 焼土粒・灰化物粒・ローム粒・白色灰多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒・白色灰少量・焼土ブロック多量
 - 3 暗赤褐色土 焼土ブロック少量
 - 4 褐色土 焼土ブロック多量・ローム粒・白色灰少量
 - 5 厚褐色土 コーム粒・白色灰・灰化物粒・焼土粒少量
 - 6 褐色土 コーム粒・白色灰少量・灰化物粒・焼土粒少量
 - 7 厚褐色土 コーム粒・白色灰少量
 - 8 暗褐色土 コーム粒・白色灰少量・焼土粒・灰化物粒少量
 - 9 厚褐色土 コーム粒・白色灰・ロームブロック少量
- SJ79 カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒・白色灰少量・焼土ブロック多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒・白色灰少量・ロームブロック・焼土ブロック少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒・白色灰少量



第92図 第78・79号住居跡出土遺物(2)



旧関係は明らかにできなかった。

平面形は長方形で、規模は長径3.60m、短径2.76m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-43°-Wを示す。

床面は平坦で堅く締まっていた。カマドは北西壁の西寄りに設置され燃焼部は壁を切り込んでいた。

ピットは7本検出された。Pit 1・2は貯蔵穴の可能性がある。Pit 7はカマド覆土を切り込んでおり、住居跡には伴わない。Pit 3～6は柱穴とみることもできるが、深度が浅い。溝はカマドの周囲を除いて通っている。

第36表 第78・79号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵高台	12.6	3.7	5.1	H I J	1	青灰	95	SJ78 No1 底部糸切り 木野産
2	須恵高台	(13.8)	4.9	(5.8)	E H I J	1	灰	40	SJ78 木野産
3	須恵高台	(14.0)	5.3	(7.2)	H I J	1	青灰	30	SJ78 No3 木野産
4	須恵高台		2.9	(6.6)	H I J	1	灰白	40	SJ78 木野産
5	環	(13.6)	4.5	(8.0)	I J	2	にぶい橙	40	SJ78 カマド
6	環	13.0	4.4	9.0	E H J	2	にぶい黄橙	60	SJ78 カマド
7	環	(13.4)	3.7	(9.5)	H J	2	にぶい橙	55	SJ78
8	環	(13.0)	3.6	(7.8)	E H J	2	にぶい橙	40	SJ78
9	環	(12.6)	3.0		B D E H J	2	橙	40	SJ78
10	須恵甕	(24.0)	6.3		H I J	1	褐灰	15	SJ7820・21と同一個体か 木野産
11	灰釉椀	(18.0)	5.0		H J	1	灰白	10	SJ78
12	皿	(20.0)	2.0		E H J	2	橙	10	SJ78
13	環	(15.0)	4.5		A B D E	1	にぶい黄橙	10	SJ78
14	環	(12.0)	3.5		D E	2	にぶい橙	20	SJ78
15	甕	(19.0)	15.8		B E H J	2	にぶい橙	15	SJ78カマド No4
16	甕		16.7	(3.8)	E H J	2	橙	40	SJ78カマド No4
17	甕	(20.0)	9.1		E H J	2	にぶい橙	20	SJ78
18	甕	19.6	6.2		E H J	2	にぶい橙	40	SJ78
19	須恵		2.8		A B D E	2	にぶい橙	5	SJ78
20	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ78 10・21と同一個体か 木野産
21	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ78 カマド No110・20と同一個体か 木野産
22	須恵甕				H I J	1	青灰	破片	SJ78 木野産
23	環	(13.0)	2.7		E H J	2	橙	15	SJ79
24	環	(14.0)	2.2		D H J	2	橙	15	SJ79
25	環	(12.0)	2.5		D E	2	明赤褐	10	SJ79
26	環	13.0	2.4		A B D	2	にぶい赤褐	10	SJ79
27	甕	(19.8)	7.3		B E	2	にぶい褐	5	SJ79
28	小型甕	(12.0)	4.5		B D E	2	灰赤	15	SJ79 台付甕か

出土遺物は少ない(第93図)。6の羽釜はカマド内から出土しており、本住居跡に伴う遺物と考えて良い。4・5のロクロ土師器椀は伴出遺物と思われる。1～3は大きく時期を異にしており、重複する第81号住居跡の遺物かもしれない。住居の時期は、10世紀後半～11世紀と推定される。

第81号住居跡 (第93図)

第81号住居跡は、D-5グリッドに位置する。重複する第80・85号住居跡に切られている。第86号住居跡との新旧関係は明らかにできなかった。遺構の遺存状

態は悪く、詳細は不明確である。

平面形は正方形と推定され、規模は長径3.03m、短径2.66m(現在長)、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-7°-Eを示す。

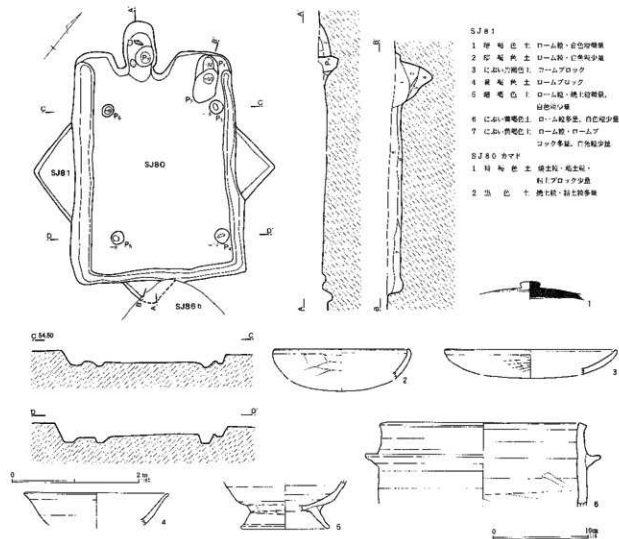
カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺物は検出されなかった。重複する第80号住居跡出土遺物の内、古相を示す一群(第93図1～3)が本住居跡に伴うとすれば、住居の時期は7世紀末葉～8世紀初頭頃であろう。

第37表 第80号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋		1.9		B	2	灰白	35	SJ80 群馬産か
2	環	(14.0)	3.2		A B D E	2	にぶい橙	10	SJ80
3	皿	(18.0)	2.6		E	1	橙	10	SJ80
4	椀	(15.0)	3.4		A D F I	2	にぶい橙	20	SJ80 ロクロ土師器
5	高台椀		5.0	(9.0)	A B D I	2	浅黄橙	45	SJ80 ロクロ土師器
6	羽釜	(20.2)	8.8		A B D I	2	橙	20	SJ80 カマド

第93図 第80・81号住居跡・出土遺物



第82号住居跡 (第94図)

第82号住居跡は、D・E-5グリッドに位置する。重複する第83-86・124号住居跡に切れ、第2号不明遺構との関係は不明確である。

平面形は方形と推定され、規模は長径3.27m、短径3.26m(現在長)、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは6本検出されたが、柱穴配置は不明である。

出土遺物は重複する第83・84号住居跡と明確に分離できないものもあるが、第94図1-14が本住居跡に帰属するものと思われる。第94図3は土師器坏で、確実に本住居跡に伴う資料である。他に、土師器坏・皿・

甕、須恵器蓋・巻などがある。時期的には7世紀末葉～8世紀初頭頃である。

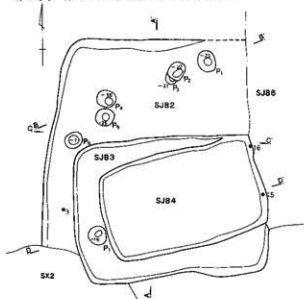
第83号住居跡 (第94図)

第83号住居跡は、D・E-5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第82・86号住居跡、第2号不明遺構を切り、第84号住居跡に切られていた。第124号住居跡との新旧関係は不明確である。

平面形は長方形で、規模は長径3.06m、短径2.29m、深さ0.32mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは1本あるが、伴うか否かは不明。

出土遺物は第95図15-27が本住居跡または第84号住居跡から出土したものである。第84号住居跡は中世

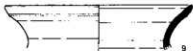
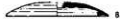
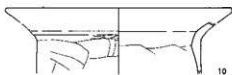
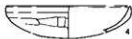
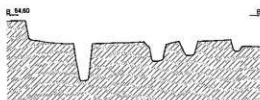
第94図 第82~84号住居跡・出土遺物(1)



SJ82・83・84

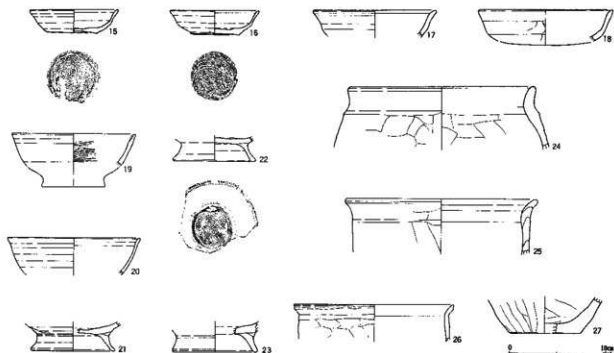
- 1 黄褐色土 ロームブロック多量
- 2 黒褐色土 ローム殻・白色粘土少量、焼土ブロック、炭化物ブロック少量
- 3 黒褐色土 コーム殻・白色殻・炭化物ブロック多量
- 4 褐色土 ローム殻・炭化物ブロック・白色粘土多量
- 5 褐色土 ローム殻・ロームブロック・白色粘土多量
- 6 褐色土 ローム殻・白色粘土多量、ロームブロック・炭化物殻少量
- 7 濃い赤褐色土 ローム殻・ロームブロック・白色粘土多量
- 8 褐色土 ローム殻・白色粘土多量
- 9 黄褐色土 ロームブロック多量
- 10 黒褐色土 ローム殻・白色粘土多量、焼土列多量
- 11 黒褐色土 焼土殻・炭化物殻少量

0 2m



0 10cm

第95図 第82・83・84号住居跡出土遺物(2)



段階の竪穴状遺構または土壁の可能性があり、これらの遺物の大半は本住居跡に帰属する可能性が高いものとする。

器種としてはロクロ土師器小皿(15・16)、高台碗(17・19・23)、厚袋(24・25・27)がある。19・22の高台碗は内面黒色処理が施されている。27の甕底部は離れ砂技法が使われている。住居の時期としては11世紀前半頃であろう。

第84号住居跡(第94図)

第84号住居跡は、D・E-5グリッドに位置する。重複する第82・83・86・124号住居跡を切っている。

平面形は長方形で、規模は長径2.59m、短径1.57m、小型の遺構で、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-78-Eを示す。

床面は中央部がやや深い。カマド・ピットなどの付属施設は検出されなかった。

第95図15・16は壁際から出土しているが、第83号住居跡に伴う可能性が高く、本住居跡に確実に帰属する遺物はない。第83号住居跡及び南側に位置する第43号土塋との関係から、中世以降の竪穴状遺構または、土塋と見るのが妥当かもしれない。

第38表 第82～84号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存率	備考
1	環	(10.0)	2.0		DE	2	橙	15	SJ82
2	環	(11.0)	2.8		BDEHJ	2	にぶい黄橙	10	SJ82-84
3	環	11.4	3.5		BDEHJ	2	橙	95	SJ82 No1
4	環	(13.0)	2.8		ADE	2	にぶい褐	20	SJ82-84
5	皿	(14.0)	2.2		ABDE	2	褐灰	5	SJ82-84
6	皿	(22.0)	2.0		HJ	2	橙	20	SJ82-84
7	碗	(20.0)	5.1		ABDE	2	橙	16	SJ82-84
8	須恵壺	(11.0)	1.5		EHJ	1	灰	30	SJ82-84 木野産か 業地土は粗く湿和材少ない
9	須恵壺	(20.0)	4.8		EIJ	1	灰	10	SJ84 木野産
10	袋		5.4		ABDE	2	明赤褐	20	SJ82-84
11	袋		2.8	4.4	BDEHJ	2	にぶい橙	80	SJ82-84
12	袋		2.7	(3.4)	EHJ	2	にぶい褐	30	SJ82-84
13	袋		1.7	4.4	BDEHJ	2	にぶい橙	60	SJ82-84

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
15	小皿	9.6	2.5	5.3	II J	3	橙	90	SJ83+ SJ84 No1
16	小皿	9.4	2.5	5.1	DEH J	3	にぶい橙	75	SJ84 No2
17	坏	(13.0)	2.8		ADH J	2	橙	40	SJ82-84
18	坏	(14.0)	3.3		ABCDI	1	にぶい赤褐	5	SJ82-84
19	高台碗	(13.0)	3.0		DE	2	にぶい橙	5	SJ83 内面ミガキー黒色処理 ロクロ土師器
20	高台碗	(14.0)	3.9		D	3	にぶい褐	10	SJ84
21	高台碗		3.1	(9.0)	EH J	2	にぶい橙	20	SJ82-84
22	高台碗		2.7	(8.8)	AH J	2	橙	60	SJ83 内黒
23	高台碗		3.3	(9.0)	EII J	2	にぶい橙	20	SJ84
24	甕	(20.0)	6.6		H J	2	にぶい黄橙	10	SJ82-84
25	甕	(20.4)	5.9		ABDI J	3	赤	10	SJ82-84
26	甕	(17.0)	3.9		H J	2	にぶい橙	10	SJ82-84 「コ」の字状口縁装
27	甕		3.9	(7.6)	H J	2	にぶい橙	30	SJ82-84 底部離れ砂

第85号住居跡 (第96図)

第85号住居跡は、D-6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第81・82・86号住居跡を切っている。第80号住居跡との関係は不明である。

平面形は長方形で、規模は長径3.65m、短径2.44m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-96°-Eを示す。床面は概ね平坦で第86号住居跡上面に貼床されている。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を掘り込んでいた。燃焼部中央には石製支脚が据えられていた。その前面にはカマド構築材と思われる板石が散乱していた。

ピットは1本検出されたが、伴うか否か不明である。

出土遺物は少ない。確実に伴うのは第96図2・3のロクロ土師器高台碗である。重複する第86号住居跡から出土した4・5も本住居跡に帰属すると見て良からう。時期は10世紀後半であろう。

第86号住居跡 (第96図)

第86号住居跡は、D-5・6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第83-85号住居跡に切られ、第82号住居跡を切っていた。南壁の内側に壁溝が巡り、床面にも段差が付くため、建て替えられたことが判明した。壁溝の内側を第86a号住居跡、外側を第86b号住居跡とすると、第86b→86a号住居跡に建て替えられたものと考えられる。

平面形は長方形で、規模は長径4.18m、短径3.19m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示す。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は僅かに壁を切り込み、段差をもたず細長く延びる煙道に続く。燃焼部下面は弱く被熱していた。

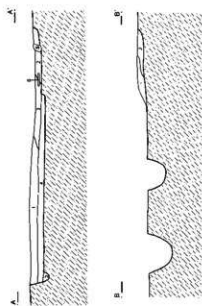
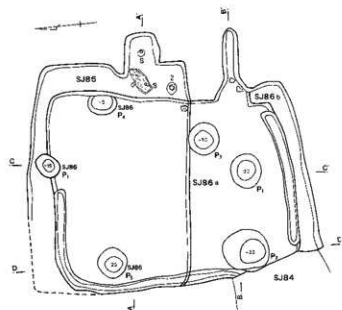
ピットは5本検出されているが、柱穴配属は不明である。壁溝は北壁の西半から南壁にかけて巡る。

出土遺物は第96図1・6-13が本住居跡出土土器で

第39表 第85・86号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(18.2)	5.0		ADE	2	橙	15	SJ86a
2	高台碗	15.5	5.8	7.8	AEH	3	にぶい橙	100	SJ85 No4 ロクロ土師器
3	高台碗		2.1		AEH	2	浅黄橙	40	SJ85 ロクロ土師器
4	高台碗		3.0	8.4	ABCDE	2	橙	60	SJ86a・b ロクロ土師器
5	小皿	(10.0)	2.1		BDE	2	黄橙	15	SJ85 ロクロ土師器
6	坏	(10.9)	3.0		ABDE	2	橙	10	SJ86a
7	坏	(12.0)	2.4		ADE	1	にぶい橙	15	SJ86b
8	坏	(13.0)	2.5		ABCDE	2	橙	15	SJ85
9	坏	(12.0)	2.6		DE	2	橙	15	SJ86b
10	皿	(17.0)	2.5		DE	2	橙	10	SJ86b
11	皿	(15.8)	3.2		AD	1	橙	10	SJ86b
12	皿	(15.8)	4.2		ABCDE	1	橙	40	SJ86a
13	坏				ADE	2	にぶい赤褐	15	SJ86b 内面布目状辰灰あり

第96図 第85・86号住居跡・出土遺物



C 84.85

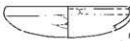
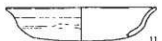


SJ85

- 1 壁 褐色土・ローム殻・粘土粒・炭化物・白色砂少量
- 2 床 褐色土 焼土ブロック (カマド火床部)
- 3 溝 褐色土 ローム殻・ロームブロック・白色砂多量、焼土粒・炭化物少量
- 4 溝 褐色土 ローム殻・ロームブロック・白色砂多量
- 5 壁 褐色土 ローム殻・白色砂多量、焼土粒・炭化物少量

SJ86

- 1 壁 褐色土 ローム殻・白色砂・炭化物粒、焼土粒少量
- 2 床 褐色土 焼土ブロック多量



ある。遺物は第96図1・6と7～13の大きく2時期に分かれる。カマド内から土師器環が出土しており、6がそれに相当する可能性が高いことから、本住居跡の時期としては9世紀後半頃と推定しておきたい。13は坏内面に布目状の土埃が附着している。

第87号住居跡 (第97図)

第87号住居跡は、D・E-2グリッドに位置する。第88号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。床面はほとんど削平され、遺存状態は悪い。

平面形は正方形で、規模は長径3.00m、短径2.58mである。主軸方向はN-39°-Eを示す。

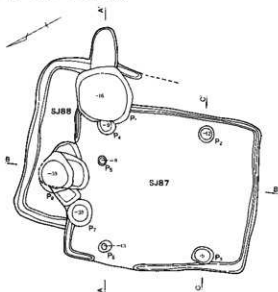
カマドは北壁のほぼ中央に設置されていたが、ピットによって中央部を破壊されており、遺存状態は極めて悪い。ピットは7本検出された。いずれも浅く、柱穴ではないであろう。壁溝は西壁の一部を除いて巡る。確実に伴う遺物は検出されておらず、住居の時期は不明である。

第88号住居跡 (第97図)

第88号住居跡は、D・E-2グリッドに位置する。第87号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。床面は削平されており、南半部は消滅していた。

平面形は長方形で、規模は長径2.70m、短径1.58m(現在長)である。主軸方向はN-118°-Eを示す。

第97図 第87・88号住居跡



カマドは東壁に設置されるが、削平により詳細は不明である。カマド前面に浅い土埃が1基掘られていた。壁溝は北壁中心に巡るが、カマド南側で途切れており、全周するか否かは不明である。

本住居跡に確実に伴う出土遺物はない。時期も不明である。

第89号住居跡 (第98図)

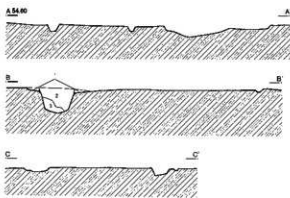
第89号住居跡は、E-1グリッドに位置する。住居西半は調査区外に延びている。

平面形は方形と推定され、規模は長径3.12m、短径1.84m(現在長)、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。底面は平坦で明確な掘り込みをもたない。

ピットは3本検出された。いずれも浅く、柱穴となるか否かは不明である。

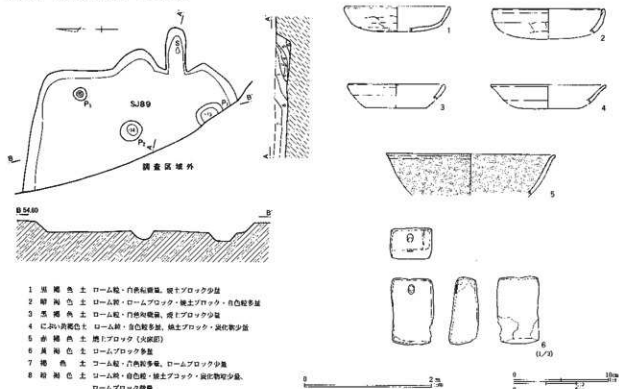
出土遺物は少ない。土師器環(第98図1・2)とロクロ土師器小皿(3・4)、緑釉陶器碗(5)、柿杓の櫛(6)が検出されている。1・2は混入。5は素地土は灰色で硬質。緑色の釉薬が全面に掛かっている。東濃産。6は側面から上面にかけて孔が貫通する。時期は不明確であるが、10世紀代と考えておきたい。



- 1 黒褐色土: コーム形・焼土多量、白土少量
- 2 黒褐色土: ローム多量、コームブロック・焼土多、白土少量
- 3 褐色土: ローム・ロームブロック多量、白土少量

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 m

第98図 第89号住居跡・出土遺物



- 1 赤褐色土 ローム殻・自然粘着層、成土ブロック少量
 2 赤褐色土 ローム殻・ロームブロック・成土ブロック・白色粘着層
 3 赤褐色土 ローム殻・自然粘着層、成土ブロック少量
 4 におい赤褐色土 ローム殻・白色粘着層、成土ブロック・炭灰少量
 5 赤褐色土 成土ブロック（火床跡）
 6 赤褐色土 ロームブロック少量
 7 赤褐色土 コーム殻・自然粘着層、ロームブロック少量
 8 赤褐色土 ローム殻・白色粘着層・成土ブロック・炭灰少量、ロームブロック少量
 9 ロームブロック少量

第40表 第89号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	2.6		AI	1	にぶい赤褐色	15	
2	坏	(10.0)	2.2		AD	1	にぶい橙	10	
3	坏	(10.0)	1.6		AI	1	にぶい橙	5	ロクロ土師器
4	坏	(12.0)	2.0		I	1	にぶい橙	10	ロクロ土師器
5	縁輪碗	(18.0)	4.4		E	1	オリーブ灰	50	縁輪陶器 東遺産
6	壺	長 5.25cm	最大幅3.35cm	高さ2.32cm				重量62.00g	

第90号住居跡 (第99図)

第90号住居跡は、E-2グリッドに位置する。第91号住居跡と第57号土壌を切って構築されていた。第98号住居跡との関係は不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長径3.84m、短径3.02m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。床面は概ね平らで、カマド前面から住居中央部にかけては堅く締まっていた。

カマドは東壁の南寄りに設置され、右側の袖には補強の襖が倒立状態で据えられていた。燃烧部は床面よりもやや低く掘り込まれ、煙道部は緩やかに壁外に延びる。第3層下面が火床面と考えられる。

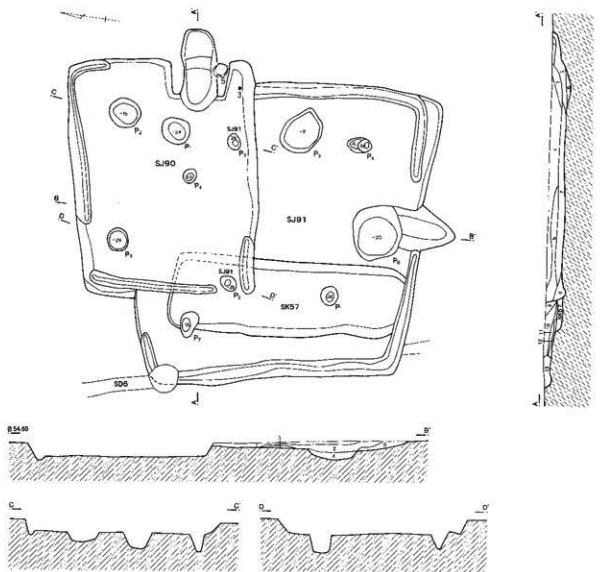
ピットは4本検出されたが、柱穴配置は不明である。壁溝は部分的に巡っていた。

出土遺物は少なく、重複する第91号住居跡と分離できないものがある。第100図2～5は本住居跡から出土した。3はカマド脇から出土した土師器坏で、遺存率も高い。5はカマド袖内に埋め込まれた甕で、両者は確実に伴う遺物である。6～8の壺、砥石(9)はどちらの住居に伴うのか不明である。時期は8世紀前半である。

第91号住居跡 (第99図)

第91号住居跡は、E-2グリッドに位置する。第57号土壌を切り、第90号住居跡に北東部を破壊されていた。また、第96・98号住居跡が覆土上面に乗っていた。

第99図 第90・91号住居跡・第57号土塚



SJ90・91

- 1 灰 褐色土 ローム状少量、白色砂・粘土状多量、炭化植物質少量
- 2 暗 褐色土 焼土粒多量、焼土ブロック・白色砂少量
- 3 濃い赤褐色土 ローム状、白色砂少量、焼土粒少量、炭
- 4 黒 褐色土 コーム状、白色砂少量、焼土粒少量
- 5 灰 褐色土 コームブロック・ローム状、白色砂少量、焼土粒少量
- 6 暗 褐色土 ローム状、ロームブロック多量、炭土粒・白色砂少量
- 7 灰 褐色土 ローム状多量、白色砂少量
- 8 黒 褐色土 ローム状、ロームブロック・焼土粒・白色砂少量
- 9 灰 褐色土 ローム状多量、ロームブロック・白色砂少量
- 10 黒 褐色土 ローム状多量、ロームブロック・焼土粒・白色砂少量

- 11 黒 褐色土 ローム状多量、ロームブロック・焼土粒・白色砂少量
 - 12 黒 褐色土 ローム状・白色砂・焼土粒少量
 - 13 灰 褐色土 フォーム状・白色砂少量、ロームブロック多量
- SJ91
- 1 黒 褐色土 ロームブロック・焼土ブロック多量、焼土粒少量
 - 2 暗 褐色土 ローム状多量、焼土粒・焼土ブロック少量（カマドの底材）
 - 3 暗 褐色土 ロームブロック多量
 - 4 暗 褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロック・焼土粒少量（カマドの底材）
 - 5 灰 褐色土 コームブロック・焼土粒少量（カマドの底材）

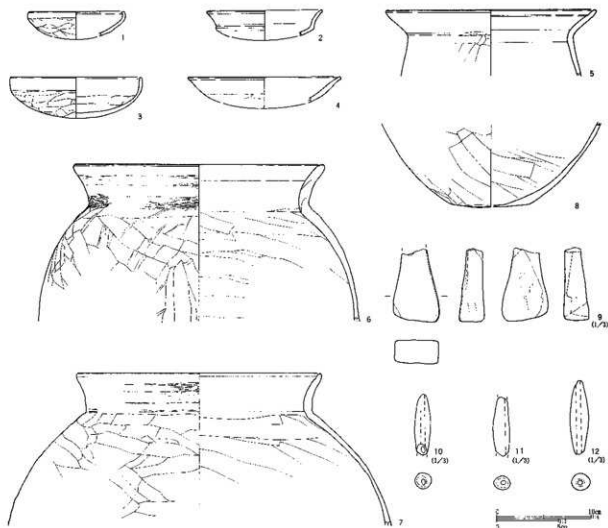
平面形は方形で、規模は長径5.08m、短径4.30m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-178°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは南壁の東寄りに設置され、全面に浅い土塚（掘り方か）を伴う。軸は遺存していなかった。ピットは6本検出され、Pit 1~4

が支柱穴に相当しよう。但し、深度は浅い。

出土遺物は少ない。確実に本住居跡に伴うのは第100図1の上師器環と土鍾（10~12）である。6~8の壺は本住居跡に伴う可能性はあるが、確定できない。時期的には7世紀後半であろう。

第100図 第90・91号住居跡出土遺物



第41表 第90・91号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(10.0)	2.6		CDE	3	橙	30	SJ91
2	坏	(12.0)	2.7		A	2	にぶい橙	10	SJ90
3	坏	13.7	4.3		ADE	2	橙	90	SJ90 ka1
4	坏	(14.0)	2.7		B I	1	橙	10	SJ90
5	甕	(22.0)	6.9		B I	1	にぶい褐	20	SJ90 カマド袖
6	甕	26.6	17.0		H J	2	にぶい橙	60	SJ90・91
7	甕	(26.0)	16.0		H J	2	にぶい橙	40	SJ90・91
8	壺		8.8		EH J	2	にぶい褐	40	SJ90・91
9	砥石	長 5.71cm 最大幅3.70cm 厚さ2.01cm			重量51.21g	SJ90・91			
10	土鏃	長 (4.70) cm 最大径1.30cm 孔径0.30cm			重量6.52g	にぶい橙 SJ91			
11	土鏃	長 (4.62) cm 最大径1.35cm 孔径0.40cm			重量6.75g	にぶい橙 SJ91			
12	土鏃	長 5.80cm 最大径1.50cm 孔径0.40cm			重量10.13g	にぶい橙 SJ91			

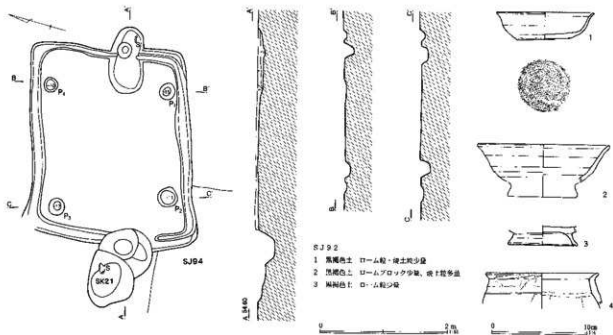
第92号住居跡 (第101図)

第92号住居跡は、E-2・3グリッドに位置する。重植遺構との新田関係は、第94号住居跡を切り、第21号土竈に切られていた。

平面形はやや歪んだ長方形で、規模は長径3.21m、短径2.79m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-81°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置さ

第101図 第92号住居跡・第21号土坑・出土遺物



S J 9 2

1 黒褐色土 ローム粒・埃土質少量

2 黒褐色土 ロームブロック少量、埃土質少量

3 黒褐色土 ローム粒少量

第42表 第92号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	10.4	2.9	5.8	A E H J	2	にぶい橙	90	ロクロ土師器
2	高台碗	(14.0)	3.9		A D H J	2	にぶい橙	10	ロクロ土師器
3	高台碗		2.0	7.4	E I I J	2	橙	90	内黒 内面ヘラミガキ
4	小型鉢	(12.0)	3.7		A B E H J	2	橙	20	

れる。燃焼部は床面より僅かに掘り込まれ、底面に小ピットが穿たれていた。

ピットは4本検出されている。いずれも浅く、支柱穴として良いかは不明である。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器の高台碗(第101図2・3)と小皿(1)、土師器小型鉢(4)が検出されている。3の高台碗内面はヘラミガキが丁寧に施され、黒色処理されていた。時期的には10世紀後半頃と推定される。

第93号住居跡 (第102図)

第93号住居跡は、E・F-2・3グリッドに位置し、重複する第94-97号住居跡を切っている。

平面形は正方形で、規模は長径3.74m、短径3.60m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-98°-Eを示す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は大きく壁を掘り込んで構築されている。火床面は床面とほぼ同じ高さで連

続している。煙道部は水平方向に長く伸びていた。燃焼部及び煙道部の壁は強く被熱していた。

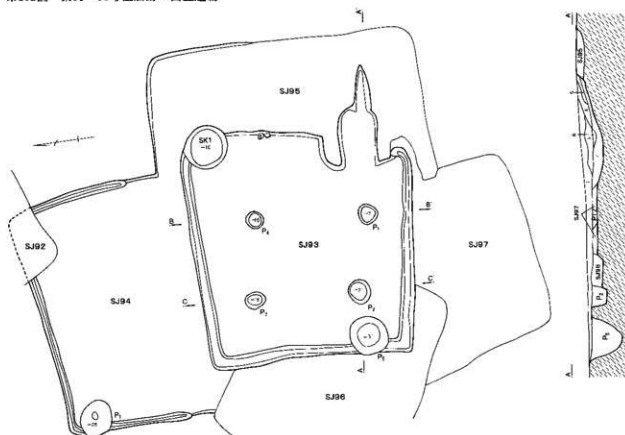
ピットは5本検出された。Pit 1~4は支柱穴配置となるが、深度は浅い。Pit 5はカマドの反対側の壁際に設けられるピット(カマド対向ピット)と考えられる。1号土坑は北東コーナーに検出された。深さは10cmと浅い。壁溝は東壁を除いて巡っていた。

出土遺物は少ない。第102図1・3~5・7~9が本住居跡から出土したが、周辺住居跡からの混入遺物も含まれているようである。本住居跡に伴うものはロクロ土師器高台碗(4・5)と、厚壁(7)である。5は内面をヘラミガキ調整し、黒色処理を施す。7は口縁部が短く「く」の字に折れ、胴部外面を粗く削っている。時期は10世紀後半頃と考えていきたい。

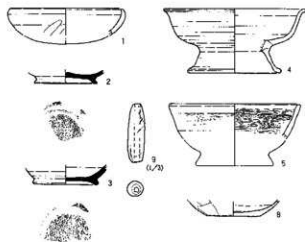
第94号住居跡 (第102図)

第94号住居跡は、E-2・3グリッドに位置する。遺存状態は極めて悪く、床面は削平されていた。重複

第102図 第93～95号住居跡・出土遺物



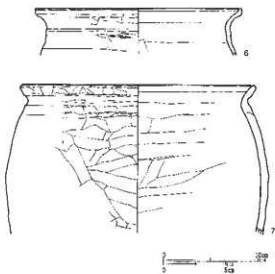
B. 5480



SJ93

- 1 粘質赤土 コーム殻・焼土ブロック・黒土ブロック少量
- 2 暗褐色土 コーム殻・焼土少量
- 3 灰褐色土 焼土殻・焼土ブロック少量、粘土ブロック多量(カマド跡層上)
- 4 灰褐色土 焼土殻・焼土殻、粘土ブロック少量(カマド跡層上)
- 5 灰褐色土 粘土殻少量(カマド跡層下)
- 6 灰褐色土 焼土殻・粘土殻少量
- 7 灰褐色土 焼土殻・粘土殻少量

0 2 m



0 2 m

第43表 第93～95号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	2.8		DE	2	橙	10	SJ93
2	須恵器高台坏		1.5	(6.8)	II I J	1	灰	20	SJ95 木野原
3	須恵器高台坏		2.1	(7.0)	BH I J	3	灰	15	SJ93 木野原
4	高台椀	(15.2)	6.6	(9.4)	II J	3	にぶい橙	20	SJ93 ロクロ土師器
5	高台椀	(14.0)	3.7		H J	2	にぶい黄橙	15	SJ93 内製ロクロ土師器
6	甕	(22.0)	5.0		II J	2	にぶい橙	10	SJ94
7	甕	(25.0)	14.6		DH J	2	にぶい橙	25	SJ93
8	坏		1.8	5.6	BDEH J	2	橙	60	SJ93
9	土鍬	長 4.60cm 最大径 1.30cm 孔径 0.35cm 重量 7.93g SJ93							

遺構との新旧関係は、第92・93号住居跡に切られている。第95・96号住居跡との関係は不明瞭であるが、第96号住居跡より新しく、第95号住居跡より古い可能性がある。

平面形は方形で、規模は長径3.91m、短径2.60m(現在長)、主軸方向はN-83°-Eを示す。

カマドは検出されなかった。ピットは1本あるが、伴う可能性は低い。壁溝は北壁を中心に辛うじて確認されたが、住居南半に向かって消滅していた。

出土遺物は極めて少なく、図化可能な遺物は第102図6の土師器甕のみである。6はいわゆる「コ」の字状口縁甕で、盛時の姿を保っている。時期は不明瞭であるが、遺構及び、出土土器から9世紀後半頃と推定される。

第95号住居跡 (第102図)

第95号住居跡は、E・F-3グリッドに位置する。遺存状態は極めて悪く、北東コーナー部周辺のみ床面が遺存し、南壁部は遺構の範囲が辛うじて判明したのみであった。

重複遺構との新旧関係は、第93・97号住居跡に切られていた。第94号住居跡との関係は不明瞭であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は方形で、規模は長径4.40m、短径1.98m(現在長)、主軸方向はN-4°-Eを示す。

カマド及び、その他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、第102図2の須恵器高台坏の底部が検出されたのみである。3も2の須恵器高台坏と同形態で本住居跡に伴う可能性がある。時期的には、9世紀後半頃であろう。

第96号住居跡 (第103図)

第96号住居跡は、E・F-2グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、第91-98号住居跡を切り、第93・97号住居跡に切られていた。第94号住居跡との関係は不明瞭であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長径3.44m、短径2.85m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-128°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。上面は第97号住居跡に削平され遺存状態は悪い。ピットは1本検出されたが、柱穴ではない。

本住居跡に伴う遺物は検出されなかった。時期は不明瞭だが、8世紀～9世紀後半の中に収まるであろう。

第97号住居跡 (第103図)

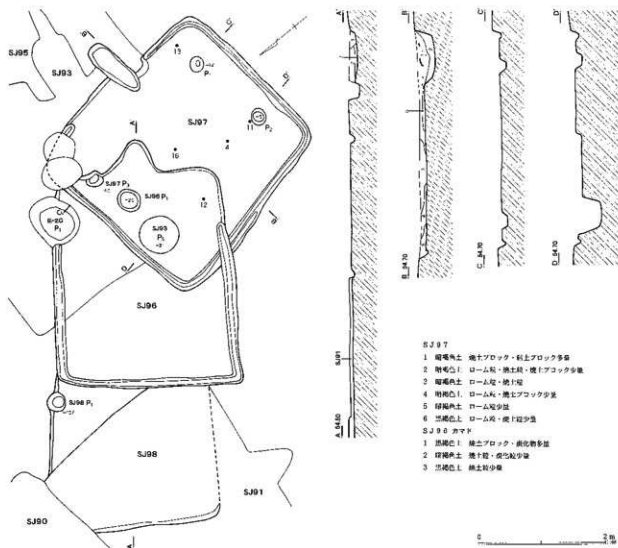
第97号住居跡は、F-2・3グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第95・96号住居跡を切り、第93号住居跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は長径3.38m、短径3.29m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-78°-Eを示す。カマドは東壁の中央からやや南寄りに設置される。燃焼部は壁を大きく掘り込んでいる。

ピットは3本検出された。深度は浅く柱穴となるかどうか不明である。

出土遺物は比較的にまとまっている(第104図)。底部ヘラケズリされる粗製の環類(1～7)、須恵器高台椀(11・12)、「コ」の字状口縁甕などがある。羽釜(15)は重複する第93号住居跡に帰属するものと思われる。壺(16)は混入である。本住居跡の時期は9世紀末葉～10世紀初頭頃である。

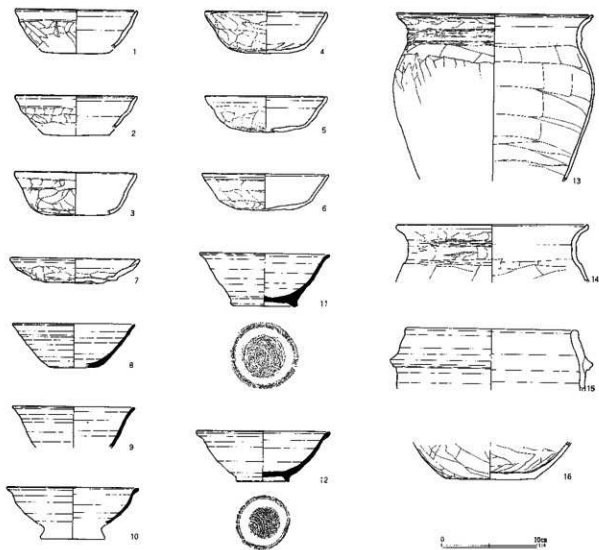
第103図 第96～98号住居跡



第44表 第97号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.0)	4.0		H J	2	橙	20	SJ94・97
2	環	(13.0)	3.4		H J	2	橙	25	
3	環	(13.0)	4.4		H J	2	にぶい褐	20	
4	環	(13.0)	4.3	(8.0)	H J	2	にぶい褐	60	No2
5	環	(12.0)	3.8	(6.4)	H J	2	にぶい褐	30	
6	環	(13.4)	3.8	(7.4)	A B D H J	2	橙	30	カマド
7	皿	13.5	2.5	6.5	H J	2	橙	25	
8	須恵環	(13.0)	4.6	(5.4)	A H J	3	にぶい橙	15	軟質一部還元
9	須恵高台椀	(13.0)	4.3		H I J	1	灰	15	カマド 木野産内向摩流
10	須恵高台椀	(14.0)	3.8		H I J	1	青灰	15	木野産
11	須恵高台椀	(13.8)	5.5	7.0	A H J	1	灰白	60	No1 底部外面爪跡状圧痕 軟質土師器的
12	須恵高台椀	(14.2)	5.3	5.6	H J	3	灰	70	No5 還元焰焼成
13	甕	(20.8)			H J	2	橙	40	No4
14	甕	(20.4)	6.0		D E H I J	2	にぶい橙	15	カマド
15	羽釜	(18.0)	6.4		A D E H I J	3	橙	15	カマド
16	壺		4.2	9.5	B H J	2	黒褐	100	No3 内面はにぶい赤褐

第104図 第97号住居跡出土遺物



第98号住居跡 (第103区)

第98号住居跡は、E-2グリッドに位置する。重複する第91号住居跡を切り、第96号住居跡に切られている。第90号住居跡との新旧関係は不明だが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は方形で、残存規模は長径2.67m、短径2.28m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-37-Eを示す。

カマドは検出されなかった。ピットは1本あるが、伴うものではない。

出土遺物はないため、住居の時期は不明確である。

第99号住居跡 (第105区)

第99号住居跡は、F-2グリッドに位置する。西半は調査区外に延びるため、造構の詳細は不明である。

住居北側に第100号住居跡と第5号溝跡が重複する。第5号溝跡との新旧関係は不明確であったが、第100号住居跡は本住居跡を切っていることが判明した。

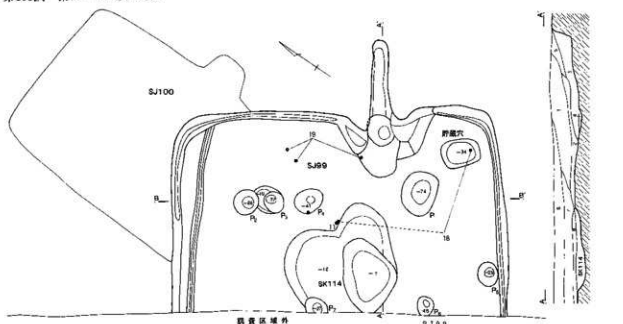
平面形は方形と推定され、規模は長径5.28m、短径3.33m(現在長)、深さ0.36mを測る。主軸方向はN-56-Eを示す。

床面は概ね平坦で、堅く締まっていた。カマドは北東壁のやや南寄りに設置されている。燃焼部は壁内におさまり、煙道部は壁外に長く延びる。

ピットは7本検出された。Pit 1・2は深さ60cmを越え、主柱穴と考えられる。貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に設けられている。深さ34cm。

壁溝はカマドを除いて巡っている。北西壁では二重

第105図 第99・100号住居跡

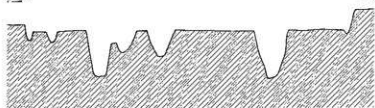


第99号住居跡

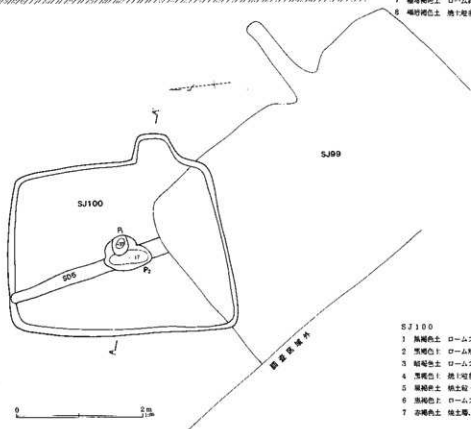
S J 9 9

- 1 凝結色土 ロームブロック・焼土層・焼土ブロック、
焼土ブロック多量（カマド跡残土）
- 2 凝結色土 焼土層・焼土ブロック多量、粘土ブロック少量
（カマド跡残土）
- 3 凝結色土 焼土層多量、焼土ブロック、粘土ブロック少量
（カマド跡残土）
- 4 凝結色土 ロームブロック多量、焼土ブロック少量
（カマド跡残土）
- 5 凝結色土 焼土層・焼土ブロック多量（カマド跡残土）
- 6 凝結色土 焼土層多量、焼土ブロック
- 7 凝結色土 ローム層・粘土ブロック・炭化物層・焼土層少量
- 8 凝結色土 焼土層多量、焼土ブロック少量

S J 1 0 0



S J 1 0 0

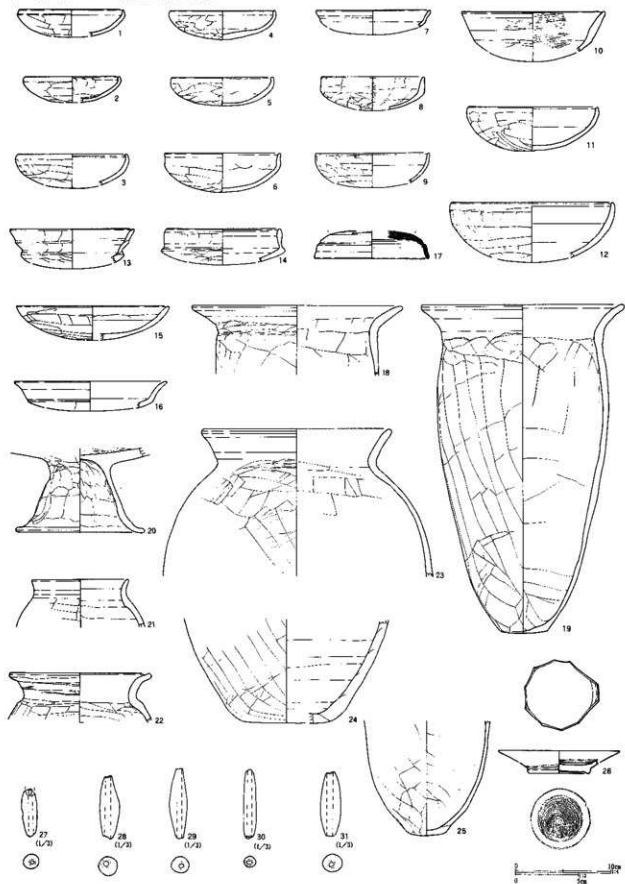


第100号住居跡

S J 1 0 0

- 1 凝結色土 ロームブロック・焼土層・炭化物層少量
- 2 凝結色土 ローム層・ロームブロック・焼土層少量
- 3 凝結色土 ロームブロック少量
- 4 凝結色土 焼土層多量、粘土ブロック・炭化物層少量
- 5 凝結色土 焼土層、炭化物層多量、粘土ブロック少量
- 6 凝結色土 ロームブロック少量、焼土層・炭化物層少量
- 7 凝結色土 焼土層、焼土ブロック少量

第106图 第99・100号住居跡出土遺物



第45表 第99・100号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	2.8		DEH	2	にぶい橙	20	SJ99 カマド内
2	坏	(10.0)	2.7		DEH	2	にぶい褐	20	SJ99 カマド内 貼床内
3	坏	(11.4)	3.2		DEH	3	橙	30	SJ99
4	坏	(11.0)	3.0		DE	2	にぶい橙	30	SJ99
5	坏	10.6	3.0		DE	2	にぶい橙	90	SJ99
6	坏	(12.0)	4.1		DEH	1	橙	60	SJ99
7	坏	(12.0)	1.8		ADE	3	橙	10	SJ99 貼床内
8	坏	(10.8)	4.4		AE	1	にぶい褐	25	SJ99
9	坏	(12.0)	3.1		DE	1	橙	40	SJ99
10	坏	(15.0)	4.5		ADE	1	橙	70	SJ99 口縁部内外面とガキ風
11	坏	13.5	4.6		DEH	2	にぶい橙	80	SJ99 No.1
12	坏	17.0	5.8		DE	2	にぶい橙	45	SJ99
13	坏	(13.0)	3.6		E	1	にぶい赤褐	15	SJ99
14	坏	(12.0)	3.5		ADE	2	にぶい橙	20	SJ99
15	皿	(16.0)	3.6		AE	2	にぶい褐	25	SJ99
16	皿	(16.0)	2.8		ADE	3	橙	5	SJ99
17	須恵蓋	(12.0)	2.9		E	1	灰	20	SJ99 粘土精選 微細な白色粒多量 東海産?
18	甕	(22.2)	7.3		ADE	1	にぶい赤褐	80	SJ99 No.1・3 口縁部内面煤付着
19	甕	(21.2)	34.5	5.0	ADEH	2	橙	70	SJ99 No.2・5・6
20	高坏		8.9	(13.4)	ADH	1	にぶい赤褐	55	SJ99
21	小型壺	(10.0)	5.0		DE	1	にぶい橙	15	SJ99
22	小型壺	(14.7)	5.2		DI	1	にぶい赤褐	45	SJ99
23	壺	(20.0)	15.6		DEH	1	にぶい橙	25	SJ99
24	甕		10.9	(10.0)	BCH	1	にぶい橙	70	SJ100 カマド厚装 粗い硬多量 内面口ロナデ
25	甕		12.2	4.4	BDH	1	にぶい赤褐	40	SJ99 貼床内
26	灰桶段皿	(12.8)	1.5	6.4	H	1	灰白	80	SJ100 灰桶演け掛け 東濃産
27	土鏝	長 3.78cm	最大径1.21cm	孔径0.30cm				重量5.14g	明赤褐 SJ99
28	土鏝	長 4.95cm	最大径1.50cm	孔径0.45cm				重量9.30g	にぶい橙 SJ99
29	土鏝	長 5.50cm	最大径1.45cm	孔径3.50cm				重量8.36g	にぶい橙 SJ99
30	土鏝	長 5.43cm	最大径0.95cm	孔径0.40cm				重量4.07g	橙 SJ99
31	土鏝	長 5.00cm	最大径1.60cm	孔径0.40cm				重量10.43g	にぶい橙 SJ100

に違っており、一度建て替えられたことが判明した。

出土遺物は比較的多い(第106図1～23・25・27～30)。口縁部が内凹、または内湾する北武藏型坏(1～6・11・12)と砲弾形の甕(18・19)が基本セットとなる。皿(15)も伴うものであろう。17は須恵器坏蓋で、口縁部外面に土線が廻る。胎上は精選され、白色微粒子が目立つ。天井部は逆時計回りの回転ヘラケズリ。東海産か。時期的には7世紀後半であろう。

第100号住居跡(第105図)

第100号住居跡は、E・F-2グリッドに位置する。第99号住居跡を切り、第5号溝跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長径3.58m(推定)、短径2.74m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面は概ね平出である。カマド周囲の床面には薄く炭化物が堆積していた。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。カマド及びその周囲には構材材と思われる板石が散乱していた。ピットは1本検出された。

出土遺物は極めて少なく、甕(第106図24)と灰桶陶器段皿(26)、土鏝(31)が1点検出されたのみである。甕は器壁が極めて厚く、粗い硬を多量に含む。外面は粗いヘラケズリ、内面はロクロ調整が施される。段皿は底部回転糸切り、高台は退化している。灰桶は演け掛けである。口縁部を故意に打ち欠いた形跡がある。東濃産、虎渓山1号窯式頃と思われる。住居の時期は10世紀後半頃と思われる。

第101号住居跡 (第107図)

第101号住居跡は、E-3グリッドに位置し、多数の遺構と重複する。新旧関係は第102・103・104・105・106号住居跡のすべてを切っている。掘り込みは極めて浅く、ほぼ床面が露出していた。

平面形は横長方形で、規模は長径3.19m、短径2.25m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-87°-Wを示す。

床面は平坦である。カマドは西壁の北寄りに設置され、燃焼部は壁外に切り込んでいる。燃焼部底面は床面と同一深度で続き、強く被熱していた。

ビッド他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は検出されなかった。住居の時期は不明確であるが、遺構の形態や切り合い関係から、10世紀後半～11世紀代のものと推定される。

第102号住居跡 (第107図)

第102号住居跡は、E-3グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、新旧関係の不明確な部分が残るが、第63・65・103・104・106号住居跡を切り、第101号住居跡に切られている。第105号住居跡との関係は不明確であった。第104号住居跡は本住居跡の南壁をほぼ共有する形で重複することから、第104号住居跡から本住居跡に建て替えた可能性がある。

平面形は横長方形で、規模は長径4.34m、短径2.93m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-92°-Eを示す。床面は概ね平坦である。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んで構築されている。

ビッドは4本検出され、柱穴配置をするが、深度はあまり深くない。カマド前面に土壌が1基検出された。床下土壌と思われる。

出土遺物は周辺住居から混入したものが多く、帰属する遺物を抽出するのが難しい(第108・109図)。1～5が本住居跡から出土した。他に15・19・32～34が他住居との接合資料である。

2は体部未調整で底部をヘラケズリ調整される。やや深めで丸底気味の器形である。9世紀中葉以降一般化する環の先駆形態と思われる。32の甕はカマドから出土しており、本住居跡に帰属する遺物と考えて良い。

武蔵型甕口縁部片で、典型的な「コ」の字状口縁甕にはなっていない。2の環とも時期的に合致する。5の須恵器環は内面に同心円状で具痕が付く。底部外面は、中心部が亲切か当て具痕が判別しがたい。周辺部は回転ヘラケズリ調整される。木野産で、混入資料と思われる。住居の時期としては9世紀前半中心と考えておく。

第103号住居跡 (第107図)

第103号住居跡は、E-3・4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第101・102・104・106号住居跡に切られている。第105号住居跡との関係は不明。第107号住居跡との関係も不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長径4.34m、短径3.32m、深さ0.35mを測る。主軸方向はN-82°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置される。ビッドは1本検出された。

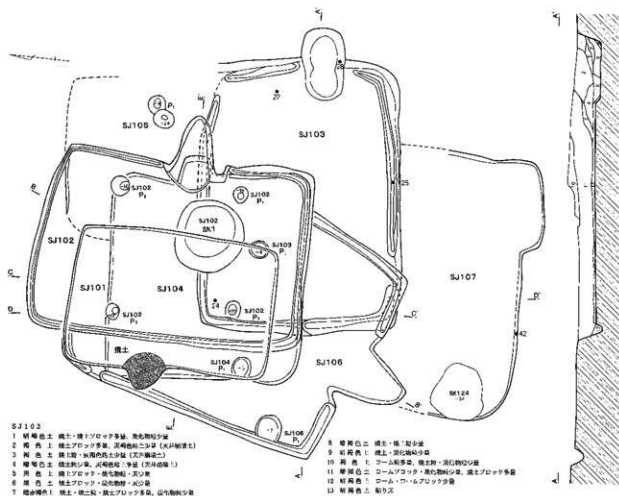
出土遺物は比較的多い。第108図6～第109図31が本住居跡から出土した遺物である。他にも重複住居と接合した資料が数点ある。口縁部が内湾、または直立する北武蔵型環と暗文環、皿、口縁部が「く」の字に折れる甕などがセットとなる。29の甕は胴部外面が留押さえ調整され、削られていない。底部も砂が付着し、未調整である。在地産と思われるが、系譜は不明。34は湖西産のいわゆる「出尻底」の環である。本住居跡に伴う可能性が高い。3の須恵器環は、秋産産と思われる。腰部以下が回転ヘラケズリ調整される。本住居跡に伴う可能性があろう。住居の時期は、8世紀初頭前後であろう。

第104号住居跡 (第107図)

第104号住居跡は、E-3グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第103・106号住居跡を切り、第101・102号住居跡に切られている。第105号住居跡との関係は不明である。カマドの位置が第102号住居跡のそれとほぼ重なり、南壁も一致することから本住居跡から第102号住居跡に建て替えた可能性がある。

平面形は正方形で、規模は長径3.32m、短径3.13

第107岡 第101～107号住居跡

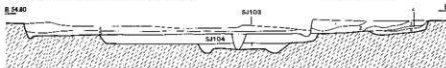


SJ102

- 1 埴輪色土 焼土・焼土ブロック多量、炭化物粒少量
- 2 埴輪色土 焼土ブロック多量、炭化物粒少量（大形割漆土）
- 3 埴輪色土 灰土層・埴輪色土少量（大形割漆土）
- 4 埴輪色土 焼土粒少量、炭化物粒・埴輪（大形割漆土）
- 5 埴輪色土 焼土ブロック・炭化物粒・炭少量
- 6 埴輪色土 焼土ブロック・炭化物粒・炭少量
- 7 埴輪色土 焼土・焼土粒・焼土ブロック多量、炭化物粒少量

- 8 埴輪色土 埴輪・埴輪少量
- 9 埴輪色土 埴輪・炭化物粒少量
- 10 埴輪色土 コーム割漆土、埴輪粒・炭化物粒少量
- 11 埴輪色土 コームブロック・炭化物粒少量、焼土ブロック多量
- 12 埴輪色土 コーム・コームブロック少量
- 13 埴輪色土 埴輪土

B-D40



SJ103

- 1 埴輪色土 コーム粒・白色粒少量

SJ102

- 1 埴輪色土 コームブロック・炭化物粒少量
- 2 埴輪色土 埴輪粒少量、焼土ブロック
- 3 埴輪色土 埴輪粒・焼土ブロック少量
- 4 埴輪色土 コームブロック・埴輪粒・焼土粒
- 5 埴輪色土 埴輪粒・焼土ブロック少量

SJ104

- 6 埴輪色土 埴輪・埴輪多量、焼土ブロック少量

SJ105

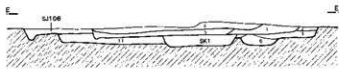
- 7 埴輪色土 埴輪少量（埴輪の出し物）

SJ106

- 8 埴輪色土 コーム・コームブロック少量

SJ107

- 9 埴輪色土 埴輪・焼土ブロック
- 10 埴輪色土 コーム・コーム粒・埴輪多量
- 11 埴輪色土 コーム・コーム粒少量

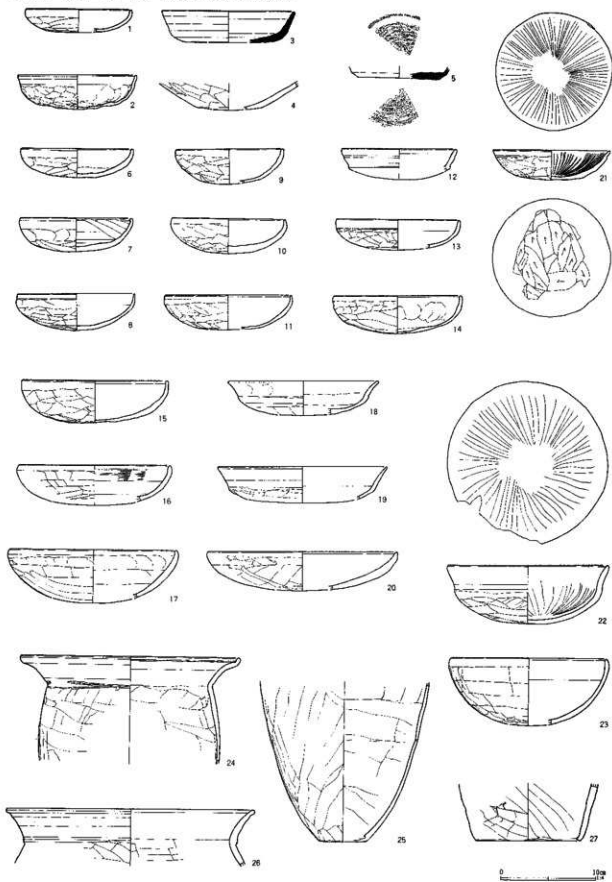


SJ106

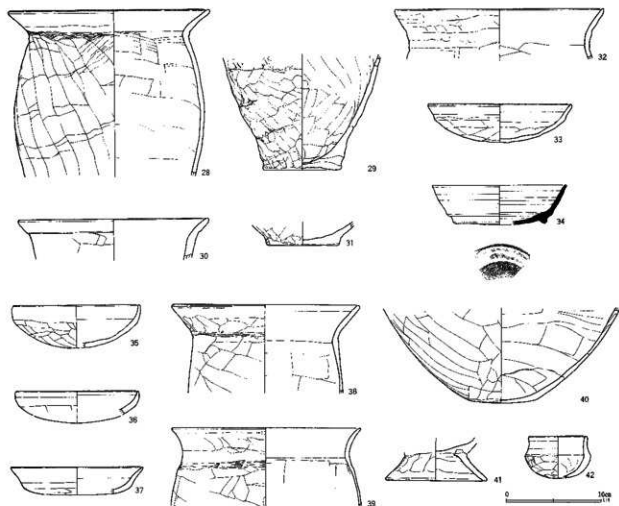
- 1 埴輪色土 コーム粒・埴輪粒・炭化物粒・炭少量
- 2 埴輪色土 コーム粒・埴輪粒・炭化物粒・炭少量
- 3 埴輪色土 コーム粒・白色粒少量、炭化物粒・炭少量
- 4 埴輪色土 埴輪多量、埴輪粒・炭化物粒（大形）
- 5 埴輪色土 コームブロック・埴輪多量

大窑 I 区

第108号 第102~104·106·107号住居跡出土遺物(1)



第109図 第102～104・106・107号住居跡出土遺物(2)



m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。床面は概ね平坦である。カマドは東壁の北寄りに設置されるが、上面は第102号住居跡のカマドに破壊され、遺存状態は悪い。燃焼部は壁を切り込んでいるものと思われる。

ピットは1本検出されたが、伴うものではない。

出土遺物は少なく、土師器環・皿・鉢・壺が検出された(第109図35～41)。ほとんどが混入遺物と思われるが、39の鉢が最も新しい様相をもつ。典型的な「コ」の字状口縁部に变化する以前の形態である。住居の時期は9世紀前半中心と考えておく。

第105号住居跡 (第107図)

第105号住居跡は、E-3グリッドに位置する。遺構密集区の一隅にあり、第63・65・101・102・103・104号住居跡と重複する。第101・102・104号住居跡よりも

古いものと思われるが、他の遺構との関係は不明である。

第102号住居跡と重なる位置に壁ラインが辛うじて確認されたのみで、形態や規模等の詳細はほとんど不明であった。主軸方向はN-7°-Wを示す。

カマドは検出されなかった。ピットは2本あるが、伴うか否か不明。

遺物は検出されず、住居の時期も不明である。

第106号住居跡 (第107図)

第106号住居跡は、E-3グリッドに位置する。第103・107号住居跡を切り、第101・102・104号住居跡に切られていた。

平面形は長方形と推定され、残存規模は長径4.38m、短径3.66m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-156°-Wを示す。

第46表 第102~104・106・107号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎	上	組成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	2.4		BDE I		1	橙	20	SJ102
2	坏	(12.4)	3.6		ADE II J		2	橙	40	SJ102
3	須恵坏	(14.0)	3.3		EH		1	灰白	30	SJ102・104 秋間産か
4	甕		2.8	(7.0)	EH J		2	にぶい褐	20	SJ102
5	須恵坏		1.3	(8.4)	EHI J		1	灰	15	SJ102 底部内外面 当具痕あり 末野産
6	坏	(11.6)	3.1		AI		2	橙	40	SJ103
7	坏	11.6	3.5		D		1	橙	65	SJ103
8	坏	12.4	3.8		DEH J		2	橙	100	SJ103
9	坏	(11.0)	3.6		EII J		2	にぶい橙	20	SJ103
10	坏	(12.0)	3.6		BDH J		2	にぶい黄橙	30	SJ103
11	坏	(13.4)	3.5		AEH J		2	にぶい褐	25	SJ103
12	坏	(12.0)	2.4		D		1	橙	10	SJ103
13	坏	(13.0)	3.0		DEII J		2	にぶい橙	15	SJ103
14	坏	(13.4)	4.0		ADE		2	橙	65	SJ103 底面黒斑
15	坏	(15.6)	4.3		EII J		2	橙	40	SJ102 No6 SJ103
16	坏	(16.0)	3.8		DE		1	橙	15	SJ103
17	坏	(17.4)	5.6		DI		2	橙	25	SJ103
18	皿	(15.6)	3.6		DE		2	黄橙	20	SJ103
19	坏	(20.0)	3.4		AEH J		2	にぶい橙	20	SJ102・103
20	坏	(20.0)	4.0		DEH J		2	橙	20	SJ103
21	坏	12.4	3.1	7.2	DEH J		2	橙	100	SJ103 No7 内面放射状暗文
22	坏	17.0	6.1		BDEH		1	にぶい赤褐	90	SJ103 No3
23	坏	(16.2)	6.9		ADE		3	にぶい褐	30	SJ103 カマド 底面黒斑
24	甕	23.4	11.1		EH J		2	橙	45	SJ103 No1 SJ106 No6
25	甕		16.8	(5.0)	H J		2	にぶい褐	40	SJ103 No5
26	香	(25.8)	5.9		DE		1	橙	10	SJ103
27	甕		6.1	(11.0)	ADE		1	明赤褐	15	SJ103
28	甕	(22.4)	17.5		DEH J		2	橙	60	SJ103 No4
29	甕		12.1	(8.4)	EH J		2	にぶい褐	30	SJ103 No2
30	甕	(20.0)	4.3		DEII		3	明赤褐	15	SJ103
31	甕		2.5	(7.6)	RH J		2	橙	40	SJ103
32	甕	(22.0)	5.3		DH		2	橙	40	SJ102 カマド SJ103・104
33	皿	(14.9)	4.0		DE		1	淡黄橙	30	SJ102・103
34	須恵高台坏	(15.0)	4.8	(10.0)	H J		1	灰白	40	SJ102・103 湖西産 出尻底
35	坏	13.2	4.5		H J		2	にぶい黄橙	60	SJ104
36	坏	(13.0)	2.5		DE		2	橙	10	SJ104
37	坏	(14.0)	2.8		DE		2	橙	10	SJ104
38	甕	(20.0)	9.2		H J		2	にぶい橙	10	SJ104
39	甕	20.0	8.1		H J		2	にぶい橙	70	SJ104
40	甕		10.0	7.0	EH J		2	にぶい褐	40	SJ104
41	台付甕		3.4	(10.8)	AEH J		2	橙	20	SJ104
42	ミニチュア	(6.0)	4.5		AH J		2	橙	60	SJ107 No1

床面は概ね平坦である。カマドは南西壁の中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。ピットは1本検出されている。壁溝はカマドを除いて巡っている。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、重複関係から、8世紀初頭以降9世紀前半以前という限定はできる。

第107号住居跡 (第107図)

第107号住居跡は、E・F-3グリッドに位置する。第106号住居跡に切られている。第103号住居跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性が高い。

平面形は方形と考えられるが、南壁に張り出し部が

存在する。規模は長径4.18m、短径1.94m（現在長）、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-98°-Eを示す。

床面はほぼ平坦であった。カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は第109図42のミニチュア土器が1点検出されたのみである。住居跡の時期は不明確であるが、7世紀代か。

第108号住居跡（第110図）

第108号住居跡は、E-3・4グリッドに位置する。床面は既に削平され、カマドのみ検出された。重複遺構との新旧関係は、第63・65・109・110号住居跡を切っていた。形態・規模などの詳細は不明である。

カマドは西壁に設けられている。カマドの主軸方向はN-126°-Wを示す。側壁は強く被熱していた。燃焼部は壁を切り込み、細長い煙道部に移行する。燃焼部底面には石製支脚が残されていた。また、燃焼部前面には浅い掘り込みが伴っている。

カマドから出土した遺物はない。但し、重複する第109・110号住居跡から出土したロクロ土師器高台碗（第110図1・2）は、他の出土遺物と時間的に大きく異なり本住居跡に帰属する可能性が高いものと考えられる。住居の時期は不明確ながら、ロクロ土師器から10世紀前半～中頃と推定しておきたい。

第109号住居跡（第110図）

第109号住居跡は、D・E-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第110号住居跡を切り、第62・65・71・108・113号住居跡に切られていた。但し、第65・71号住居跡との関係は不明確である。東壁は第110号住居跡と一致し、主軸も揃うことから、第110→109号住居跡に建て替えたものと考えられる。

平面形は正方形で、規模は長径4.60m、短径4.30m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-97°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部から煙道部にかけては浅く掘り込まれ、壁外に延びている。

ピットは4本検出された主柱穴配置を探るが、深度はいずれも浅い。壁溝は全周する。

出土遺物は重複する第108・110号住居跡と混在し、明確に分離できない（第110・111図）。1・2は第108号住居跡、3・4・11は第110号住居跡に帰属する。8の須恵器高台碗は明らかな混入である。1・2・8を除くと、出土土器の時期差はあまり見られない。第110号住居跡とは継続的に建て替えと考えられることから、時期についてもほぼ同一時期と捉えても誤りないであろう。8世紀初頭を中心とした時期と推定しておきたい。

第110号住居跡（第110図）

第110号住居跡は、E-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第108・109・111号住居跡に切られていた。第114号住居跡との関係は微妙であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。遺構配置から、本住居跡から第109号住居跡に建て替えられたものと推定される。

平面形は正方形で、規模は長径3.66m、短径3.44m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部はほぼ壁内におさまり、煙道部が壁外に延びている。

ピットは4本検出された。主柱穴配置を探るが、いずれも深度は浅い。壁溝は全周する。

出土遺物は第108・109号住居跡と混在し、明確に分離できないものがある（第110・111図）。3・4の上師器環と11の甕は本住居跡に伴う資料である。住居の時期は8世紀初頭前後と思われる。

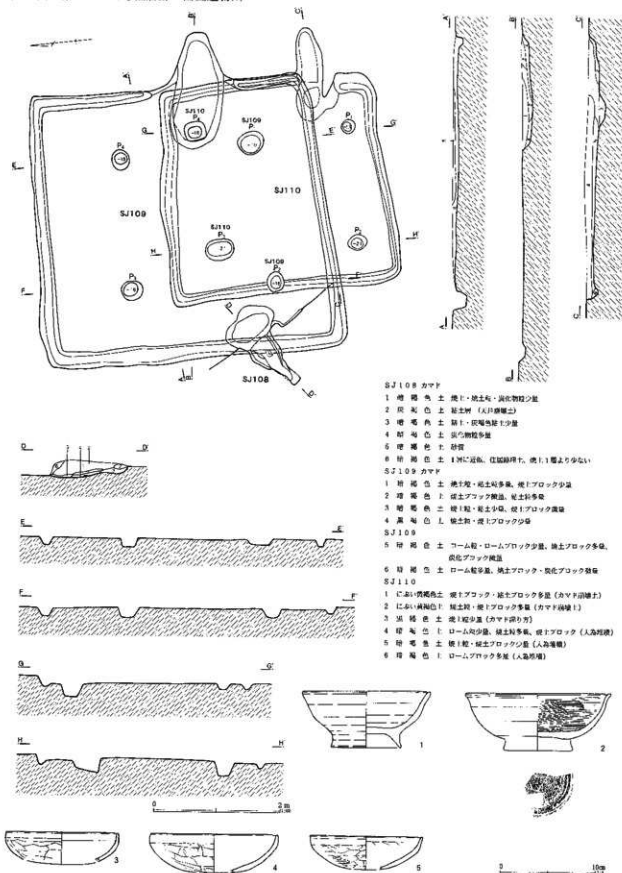
第111号住居跡（第112図）

第111号住居跡は、E-4グリッドに位置する。第63・110号住居跡を切っている。第105号住居跡との関係は不明である。

平面形は長方形で、規模は長径3.91m、短径3.06m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。床面は平坦で、中央部を中心に堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を大きく切り込んでいる。

ピットは4本検出されたが、深度は浅く主柱穴として良いか判然としない。壁溝は部分的に途切れている。出土遺物は上師器環・甕・高杯・甌・台付甕がある

第110図 第108~110号住居跡・出土遺物(1)



SJ108 カマド

- 1 焼 器 赤 土 焼土・焼土丸・灰土物少量
- 2 灰 瓦 白 土 焼土層 (人形燗燗土)
- 3 焼 器 赤 土 焼土・灰褐色焼土少量
- 4 灰 瓦 白 土 灰土物少量
- 5 焼 器 赤 土 赤燗
- 6 埴 瓦 白 土 1層に近接、柱間埋り土、焼土層より少ない

SJ109 カマド

- 1 埴 瓦 白 土 焼土層・焼土丸少量、焼土ブロック少量
- 2 埴 瓦 赤 土 焼土ブロック構造、焼土物少量
- 3 埴 瓦 赤 土 焼土層・焼土少量、焼土ブロック構造
- 4 埴 瓦 白 土 焼土丸・焼土ブロック少量

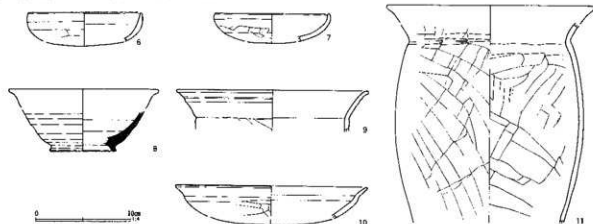
SJ109

- 5 埴 瓦 白 土 コーム粒・ロームブロック少量、焼土ブロック少量、灰化ブロック構造
- 6 埴 瓦 白 土 ローム粒少量、焼土ブロック・灰化ブロック構造

SJ110

- 1 白土・焼褐色土 焼土ブロック・焼土ブロック少量 (カマド燗燗土)
- 2 白土・焼褐色土 焼土丸・焼土少量 (カマド燗燗土)
- 3 埴 瓦 赤 土 焼土少量 (カマド燗燗土)
- 4 埴 瓦 白 土 ローム丸少量、焼土丸少量、焼土ブロック (人形燗燗土)
- 5 埴 瓦 赤 土 焼土丸・焼土ブロック少量 (人形燗燗土)
- 6 埴 瓦 白 土 ロームブロック少量 (人形燗燗土)

第111図 第108～110号住居跡出土遺物(2)



第47表 第108～110号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台碗	13.4	5.9	(7.4)	DHJ	2	にぶい黄橙	65	SJ108～110 ロクロ土師器
2	高台碗	(15.1)	4.8		ADE	3	にぶい橙	25	SJ108～110 内面クガキ+黒色処理
3	坏	(12.0)	3.0		PHJ	2	にぶい橙	20	SJ110 体部上半未調整
4	坏	(12.4)	4.0		DEHJ	2	橙	25	SJ110 体部上端わずかに無調整部あり
5	坏	(12.0)	3.5		EHJ	2	にぶい黄橙	15	SJ108～110 カマド
6	坏	(12.0)	3.0		DE	1	にぶい橙	10	SJ108～110
7	坏	(12.0)	2.9		DE	1	橙	20	SJ108～110
8	須恵高台碗		4.1	7.0	EHIJ	3	灰白	10	SJ108～110 カマド 本野産
9	甕	(20.2)	4.3		BDEI	2	にぶい橙	10	SJ108～110
10	皿	(20.1)	3.3		DE	2	にぶい橙	5	SJ108～110
11	甕		20.9		CDEH	2	にぶい橙	20	SJ110カマド No.1

第112図)

土師器坏は体部無調整で、平底風の底部をもつ浅身の形態である(1～8・12)。甕は武蔵型で、いわゆる「コ」の字状口縁部に移行する前段階のものである。13の小型高坏は、内屈口縁部に台を付けたもので、混入と考えた方がよい。10・15も同様に混入であろう。住居の時期としては、8世紀後半～9世紀初頭前後と考えておく。

第112号住居跡(第113図)

第112号住居跡は、E-4グリッドに位置する。カマドから南東コーナーにかけて、第8号清跡に上面を削平されていたが、遺構の全容は把握できる。

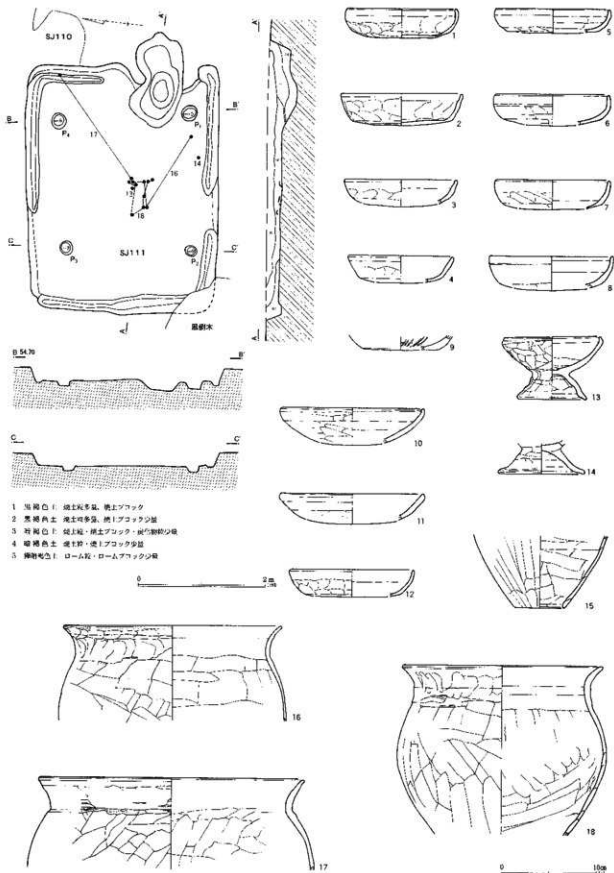
平面形は長方形で、規模は長径4.01m、短径3.28m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-77°-Eを示す。床面は全体的に強く締まっていた。住居埋土はロームブロックが多量に含まれ、人為的な埋め戻しの形跡を留めていた。

カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部から煙道部にかけて壁を大きく切り込んでいた。第2層下面が大床面に相当する。第3層は掘り方である。右袖内には土師器甕(第114図18)が埋設されていた。カマドの補強材に使用されたものと考えられる。

ピットは4本検出されたが、いずれも浅く主柱穴にはならないであろう。また、カマド前面の床下から土壌が検出された。いわゆる床下土壌と思われる。壁溝はカマド周囲を除き、全周する。

出土遺物は土師器坏を主体に、皿・甕・巻、須恵器坏と石製の権が検出されている(第114図)。土師器坏は扁平な器形で、底部は丸底気味、体部に無調整部を残すタイプが主体である。須恵器の坏は南比企産で底部回転糸切後周辺部がヘラケズリされている。21は榎科に用いる石製の権と思われ、側面上部から上面にかけて孔が貫通する。9・11～13は混入であろう。住居の時期は8世紀中頃～後半頃と考えられる。

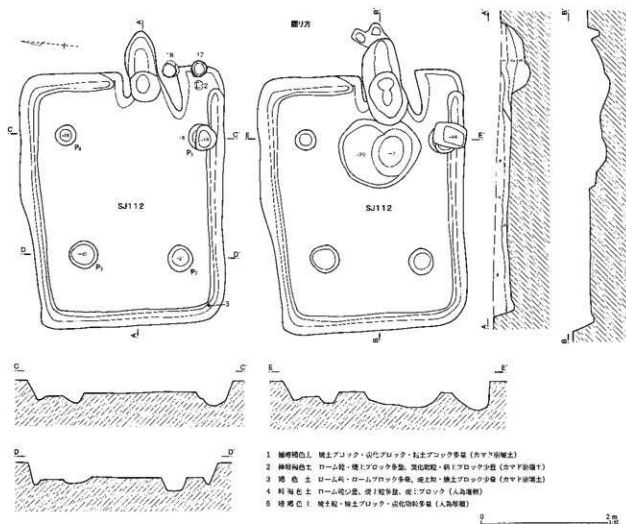
第112図 第111号住居跡・出土遺物



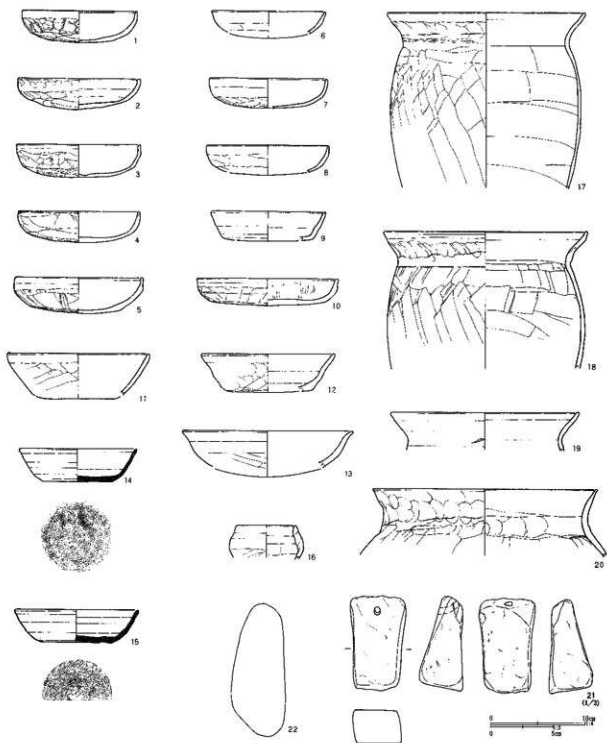
第48表 第111号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.4)	3.0		AEH	1	にぶい橙	35	
2	坏	(12.6)	3.3	(10.2)	DEH	2	にぶい橙	70	
3	坏	(11.6)	2.5		DEH	2	橙	25	
4	坏	(11.0)	2.7	(8.4)	DEH	2	にぶい橙	15	
5	坏	(12.0)	2.4	(9.2)	AD	2	明褐	15	
6	坏	(12.0)	3.1	(10.2)	DEH	2	暗褐	20	
7	坏	(12.0)	2.9	(10.5)	ADE	2	にぶい橙	25	
8	坏	(13.0)	3.3	(11.0)	ADE	1	明赤褐	15	
9	坏		1.5	(8.0)	ADE	1	にぶい赤褐	15	暗文
10	坏	(15.0)	3.6		DEH	2	橙	15	
11	坏	(15.0)	2.8		ADE	3	にぶい橙	15	
12	坏	(13.0)	2.9		DEH	3	にぶい黄橙	20	
13	高坏	10.2	6.5	7.0	ABCD	2	にぶい赤褐	95	No1
14	台付甕		3.2	(9.0)	DEH	1	橙	65	No10
15	甕		7.6	(3.2)	BEH	1	にぶい赤褐	25	
16	甕	(23.0)	10.0		ADE	2	橙	40	No3・5・8・10
17	壺	(28.0)	9.5		DEH	2	にぶい褐	15	No4・12
18	甕	(20.9)	17.7		ADEH	2	明赤褐	40	No2・3・5-9

第113図 第112号住居跡



第114図 第112号住居跡出土遺物



第113号住居跡 (第115図)

第113号住居跡は、D・E-4、E-5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第114・115号住居跡を切り、第116号住居跡に切られる。第14号掘立柱建物跡との関係は不明確であるが、本住居跡の方が新し

い可能性がある。

大型の住居跡で、平面形は整った正方形、規模は長径5.49m、短径5.49m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-97°-Eを示す。

床面は平坦で比較的強く締まっていた。カマドは東

第49表 第112号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(12.0)	3.3		DHJ	2	にぶい橙	30		
2	坏	12.6	3.2		DE	2	橙	95	No.2	
3	坏	(13.0)	3.5		DHJ	2	橙	60	No.2	
4	坏	12.7	3.3		DHJ	2	にぶい橙	75		
5	坏	13.5	3.8		DHJ	2	橙	85		
6	坏	(12.0)	2.3		DEH	2	橙	15		
7	坏	(12.4)	3.1		DHJ	3	橙	50		
8	坏	(13.0)	2.8		DEHJ	2	にぶい黄褐	15		
9	坏	(12.0)	3.0	(9.6)	DEHJ	1	にぶい橙	5		
10	坏	(15.0)	2.9		HJ	2	にぶい橙	55		
11	坏	(15.0)	4.3		ADE	1	にぶい橙	20		
12	坏	(14.0)	3.9		EH	1	にぶい褐	10	カマド	
13	坏	(18.0)	3.8		DEHJ	3	洗黄橙	10		
14	須恵环	(12.4)	3.5	7.4	FHJ	1	灰褐	70	南北企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ	
15	須恵环	(13.2)	3.4	7.4	FHJ	1	灰	50	南北企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ	
16	ミニチュア	(6.2)	3.5		EII	1	にぶい橙	10	掘り方	
17	甕	21.0	18.5		ABDEHJ	2	にぶい褐	60	No.1	
18	甕	(21.4)	14.4		ADH	1	明赤褐	60	カマド抽内	
19	甕	(20.0)	4.0		HJ	2	にぶい褐	15		
20	壺	23.6	7.0		ABDH	1	橙	95		
21	楯	長7.45cm 最大幅4.40cm 孔径0.60cm 厚さ3.40cm 重量132.29g								

第50表 第113号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(10.0)	2.2		ABD	1	橙	10	
2	坏	(12.8)	3.4		BD	2	橙	20	カマド
3	坏	(13.8)	3.7	(8.2)	ABE	1	明赤褐	10	
4	皿	(20.0)	3.2		ADE	2	橙	10	
5	須恵皿	(13.0)	2.0	6.4	HIJ	1	灰	60	底層宛存 木野産
6	須恵皿	13.4	2.6	5.5	HIJ	1	灰	75	木野産
7	小型壺	(10.0)	7.5		DHJ	2	橙	30	
8	須恵甕	1.8	(14.0)		EH	1	灰	10	内面自然釉付着 胎土精選 東金子産?

壁の南寄りに設置され、幅狭の燃焼部に長く延びる煙道が付く。燃焼部左右の側壁には板石が据えられ、その周辺にも板石が散乱していた。カマド構築材に用いられていたものと考えられる。第4・7層下面が火床面と思われる、その下部に掘り方をもつ。

ピットは4本検出された。配置から土柱穴と考えられる。壁溝はカマドを除き、全周する。

出土遺物は少ない。器種としては土師器坏と皿・小型壺、須恵器皿・甕がある(第115図)。2はカマド内から出土しているが、おそらく混入と思われる。3の土師器坏、5・6の須恵器皿、8の甕が本住居跡に帰属するものと考えられる。住居の時期としては9世紀後半と考えられる。

第114号住居跡(第116図)

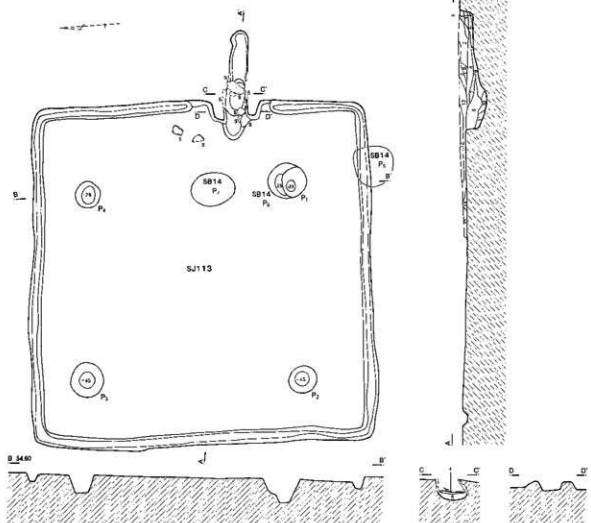
第114号住居跡は、E-4グリッドに位置する。第110号住居跡カマドを内壁が切り、上面を第113-115号住居跡に削平されていた。

平面形は正方形で、規模は長さ3.43m、短径3.18m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-61°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切って掘り込まれている。

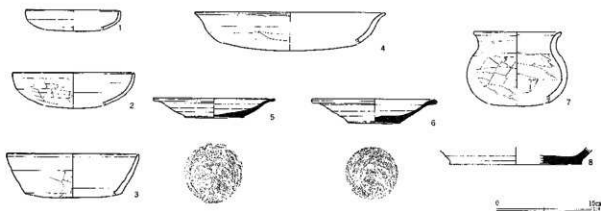
ピットは4本配置されるが、いずれも浅く土柱穴となるかどうかは不明である。壁溝は全周する。

出土遺物は少ない。第116図1は東壁際から出土した土師器坏である。扁平な丸底の上器で、口縁直下から底部にかけてヘラケズリ調整される。2は住居中央

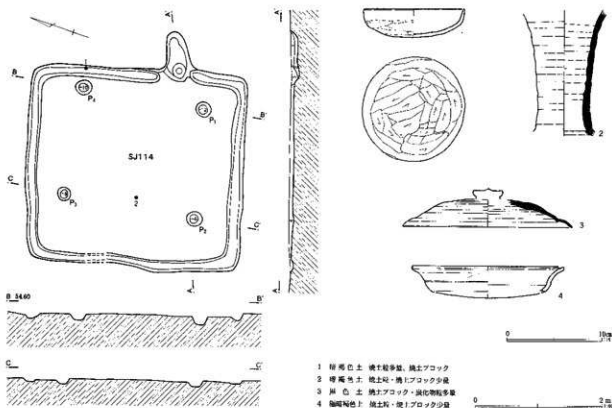
第115図 第113号住居跡・出土遺物



- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 1 赤 褐色 土 焼土ブロック | 9 濃い黄褐色土 ローム地・フォームブロック・白色砂少量 |
| 2 濃い黄褐色土 ローム地・白色砂少量、ロームブロック・焼土少量 | 10 赤 褐色 土 ローム地・白色砂少量 |
| 3 褐色 土 ローム地・焼土ブロック・白色砂少量 | 11 濃い黄褐色土 ローム地・白色砂少量、ロームブロック少量 |
| 4 赤 褐色 土 コーム地・白色砂少量、焼土ブロック少量 | 12 赤 褐色 土 ローム地・白色砂少量、焼土ブロック・白色砂少量 |
| 5 赤 褐色 土 ローム地・白色砂少量、ロームブロック少量 | 13 黄 褐色 土 ローム地・白色砂少量 |
| 6 赤 褐色 土 ロームブロック | 14 赤 褐色 土 ローム地・白色砂少量、ロームブロック少量 |
| 7 赤 褐色 土 ローム地・白色砂少量、焼土粒・炭化物粒 | 15 赤 褐色 土 ローム地・焼土粒・白色砂少量、ロームブロック少量 |
| 8 赤 褐色 土 ローム地・白色砂少量、焼土粒少量 | |



第116図 第114号住居跡・出土遺物



- 1 赤褐色土・黒い粘り帯、黒土アコック
 2 赤褐色土・黒土アコック・黒土アコック少量
 3 赤褐色土・黒土アコック・黒土アコック少量
 4 赤褐色土・黒土アコック少量

第51表 第114号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	10.8	3.0		DHJ	2	にぶい褐	95	No1
2	須恵瓦頭瓦		13.2		H	1	灰	90	No1 湖西産か 府部自然産
3	須恵壺	(18.0)	2.9		H I J	2	灰	20	木野産
4	坏	(16.0)	2.7		D	1	明赤褐	5	

やや西寄りの位置から出土した須恵器長頭瓦である。緻密な胎土で湖西産か。3は須恵器かえり蓋である。口縁部内面に弱いかえりが付く。木野産である。

出土遺物から、住居の時期は8世紀前半(1/4期)頃と考えられる。

第115号住居跡(第117図)

第115号住居跡は、E-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第114号住居跡を切り、第113・116号住居跡に切られていた。第14号孤立柱建物跡との新旧関係は不明である。

平面形は正方形で、規模は一辺3.22m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-110°-Eを示す。

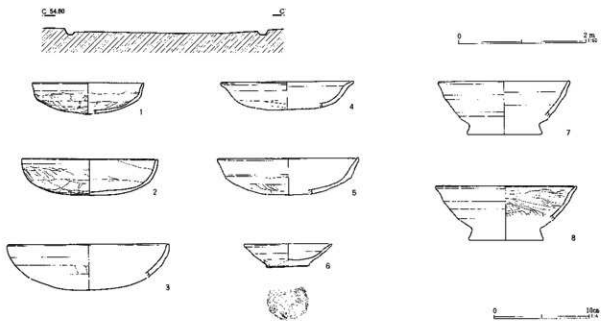
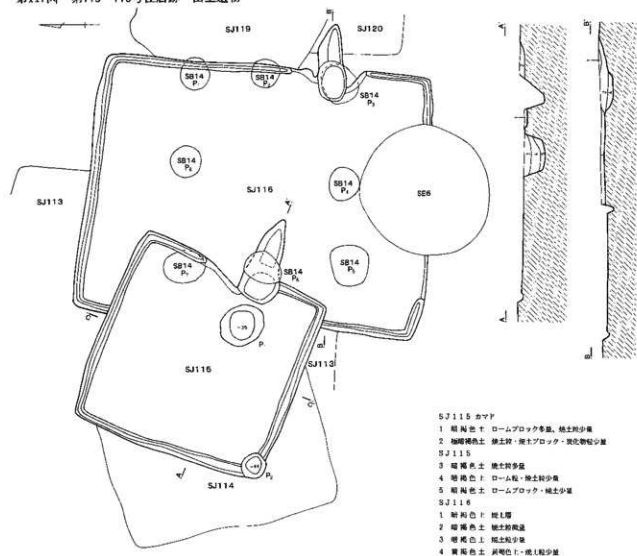
床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部の先に細長く延びる煙道部分が狭く。

ピットは2本検出された。Pit 1はカマド前面に位置し、掘り方または床下土壌と考えられる。Pit 2は伴うものではない。

壁溝はカマドを除いて全周する。

出土遺物は少ない。第117図1～5・7が本住居跡から出土した。土師器坏とロクロ土師器高台碗がある。1・2の坏は重複住居との接合資料である。4は第113号住居跡に帰属するものかもしれない。7はPit 1出土であるが、重複する第116号住居跡に帰属するものと考えられる。結局、遺構に確実に伴う資料は不明瞭である。重複住居跡との関係から住居の時期は、8世紀前半以降、9世紀後半以前という限定ができるのみである。

第117図 第115・116号住居跡・出土遺物



第52表 第115・116号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.8)	3.2		DHJ	2	にぶい橙	40	SJ114・115
2	坏	(14.2)	3.8		DHJ	2	にぶい橙	60	SJ113・115
3	坏	(17.0)	3.5		D	1	橙	5	SJ115
4	皿	(14.0)	2.7		D	1	橙	10	SJ115
5	皿	(16.0)	3.8		DHJ	2	にぶい橙	10	SJ115
6	小皿	9.4	2.4	4.6	EHJ	2	にぶい橙	80	SJ116 カマド
7	高台碗	(14.0)	3.8		EHJ	2	にぶい黄橙	25	SJ115 ビット1 ロクロ上師器
8	高台碗	(15.0)	3.6		HJ	2	にぶい橙	15	SJ116 ロクロ上師器 内面ヘラミガキ

第116号住居跡 (第117図)

第116号住居跡は、E-4・5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第113・115・118～120号住居跡を切っている。また、第14号掘立柱建物跡とも重複するが、掘立柱建物跡柱穴がカマドの火床面の下から検出され、埋土中に焼土や炭化物が含まれないことから、本住居跡の方が新しいことが判明した。南壁部は第6号井戸跡に切られていた。

平面形は横長方形で、規模は長径5.49m、短径4.24m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、煙道が壁外に延びている。壁溝は南壁の一部を除いて通る。ビット他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ない。第117図6のロクロ土師器小皿はカマド内から出土した。8の高台碗は内面ヘラミガキ調整される。7の高台碗は重複する第115号住居跡から出土したものであるが、本住居跡に帰属するであろう。住居の時期は11世紀前半頃と推定される。

第117号住居跡 (第118図)

第117号住居跡は、D・E-5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第2号不明遺構を切っていた。第3号井戸跡との関係は、調査当時本住居跡の方が新しいと考えたが、遺物の検討の結果、本住居跡の方が古いものと判断した。

平面形は縦長の長方形で、規模は長径4.15m、短径3.06m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-105°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。

ビットは2本検出されている。深度が浅く柱穴となるか否か不明である。壁溝はカマドを除き通っている。出土遺物は土師器の坏・皿・甕・壺・台付甕、須恵器の盤・皿・高台杯・壺類がある(第118図)。第118図8・21・22は明らかな混入である。土師器坏は口縁部が内屈または内彎するタイプで占められている(1~7)。2・4の坏と15・16の甕はカマド内から出土した。住居の時期は7世紀末葉～8世紀初頭頃と考えられる。

第118・119号住居跡 (第119図)

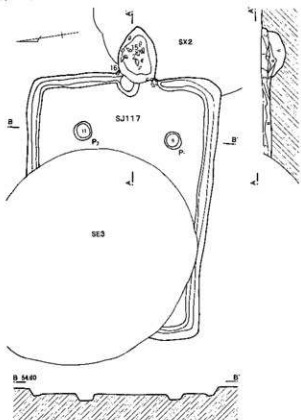
第118・119号住居跡は、E-5グリッドに位置する。第118号住居跡は、第119号住居跡下面から検出された。ほぼ相似形をなし、カマドが僅かに南にずれることから第118→119号住居跡に建て替えたものと判断した。しかし、第118号住居跡の床面が明瞭に検出できず、あるいは第119号住居跡の掘り方と考えた方が自然かもしれない。重複遺構との新旧関係は、第14号掘立柱建物跡・第2号不明遺構を切り、第116・120号住居跡に上面を削平されていた。

平面形は長方形である。第119号住居跡はカマド右脇に突出部がある。第118号住居跡の規模は長径3.32m、短径2.64m、主軸方向はN-113°-Eを示す。第119号住居跡の規模は長径4.09m、短径2.65m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-119°-Eを示す。

第119号住居跡の床面は、貼床され概ね平坦であるが、全体に軟弱だった。カマドは東壁の南寄りに設置されていた。燃焼部から煙道部にかけて壁を切り込んで構築されている。

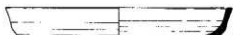
ビットは第118号住居跡下面から6本検出されたが、柱穴にはならないであろう。その他の付属施設は検出

第118図 第117号住居跡・出土遺物



- 1 薄青褐色土 ローム質・白色粒・粘土ブロック・炭燻層、焼土粒多量
- 2 粉 褐色土 ローム質・焼土粒・白色粒少量
- 3 粉 褐色土 コーム質・白色粒・粘土ブロック少量、焼土粒・炭燻層
- 4 粉青褐色土 ローム質・粘土ブロック・白色粒・炭少量、焼土粒多量
- 5 黄 褐色土 ローム質・粘土粒・白色粒少量、炭燻層
- 6 粘土質褐色土 コーム質・白色粒少量、焼土粒燻層、炭燻層
- 7 黄 褐色土 焼土粒・白色粒多量、炭燻層粒燻層
- 8 黄 褐色土 焼土粒・白色粒少量
- 9 灰 褐色土 コーム質・白色粒少量、焼土粒燻層

0 2m



0 50cm

第53表 第117号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.0	2.5		ABCDE	1	にぶい橙	10	
2	坏	(12.0)	3.5		EHJ	2	にぶい橙	30	カマド No8
3	坏	(12.0)	3.5		AEHJ	2	にぶい黄橙	40	
4	坏	(11.0)	2.5		DHJ	2	橙	25	カマド
5	坏	(10.0)	3.2		IJ	2	橙	20	
6	坏	(12.0)	3.5		HJ	2	橙	15	
7	坏	13.0	2.3		DE	2	橙	10	
8	坏	(14.0)	3.6	(10.0)	DHJ	2	にぶい橙	15	床直
9	皿	16.0	2.0		ABCDE	1	にぶい橙	10	
10	坏	(20.2)	3.2		AEHJ	2	橙	20	
11	皿	20.0	3.3		ABCDE	1	橙	10	
12	坏	(18.0)	3.5		AHJ	2	橙	20	
13	皿	22.0	2.6		ABCDE	1	にぶい橙	5	
14	台付甕		5.1	(12.0)	HJ	2	にぶい橙	40	
15	甕	(22.0)	10.2		BDEHJ	2	橙	30	カマド No12
16	甕	(22.0)	5.5		EIJ	2	にぶい橙	15	カマド No1
17	甕	(22.0)	4.8		DEHJ	2	にぶい褐	10	床直
18	須恵甕	(22.0)	2.8		BEHJ	3	灰白	10	群馬産か
19	須恵盤	(24.0)	3.5		EHH	1	灰	10	群馬産か
20	須恵甕		3.7		HIJ	1	灰	10	木野産
21	須恵皿		1.1	(6.0)	HIJ	1	褐灰	20	木野産
22	須恵高台椀		1.5	(6.6)	HIJ	1	灰黄褐	20	木野産

されなかった。

出土遺物は全て破片である。器種的には土師器坏類・甕類・須恵器高台椀・皿・瓶類・ロクロ土師器坏・椀類などがある(第119・120図)。第119図1～6が第118号住居跡出土遺物、7～29が第119号住居跡から出土した。大きく8世紀前半、9世紀後半、10世紀後半以降の3時期の遺物が混在する。ロクロ土師器(21～

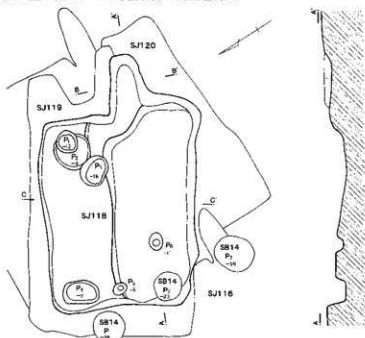
24)は重複する第116号住居跡に伴うものと推定される。3・5～8・12・17～19・25～28は、上面の第120号住居跡とはほぼ同一時期の遺物であり、ここでは第120号住居跡に帰属させておく。

小片がほとんどではあるが、結果的に1・2・4・9～11・13～16・20を第118・119号住居跡に伴う遺物と考えておきたい。時期は8世紀前半と考えられる。

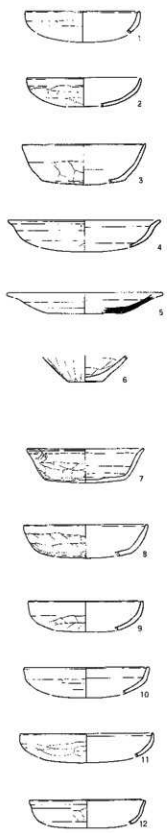
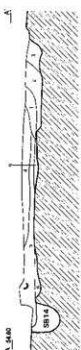
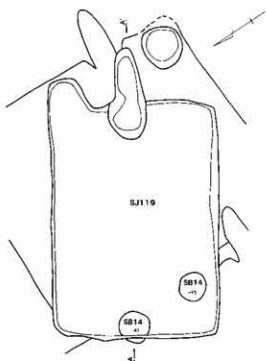
第54表 第118・119号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.0	2.2		HJ	2	橙	10	SJ118
2	坏	(12.0)	3.0		BDEHJ	2	にぶい橙	10	SJ118
3	坏	(12.0)	4.0	(7.8)	D	2	にぶい黄橙	10	SJ118 体部無調整
4	坏	(16.0)	3.8		ADE	3	橙	10	SJ118
5	須恵皿		1.9	(7.4)	HIJ	2	黄灰	30	SJ118 木野産
6	甕		2.8	3.5	EHJ	2	にぶい赤褐	65	SJ118
7	坏	(12.4)	3.5		DHJ	2	橙	40	SJ119 カマド
8	坏	(13.0)	3.3		HJ	2	灰黄褐	15	SJ119 内外面黒色処理
9	坏	(10.0)	3.0		DE	2	にぶい橙	20	SJ119
10	坏	(13.0)	2.8		ADE	2	橙	10	SJ119
11	坏	(14.0)	2.5		HJ	2	にぶい橙	15	SJ119
12	坏	(12.0)	2.6		DE	2	にぶい橙	5	SJ119
13	坏	(11.0)	2.1		BDE	2	にぶい褐	15	SJ119
14	坏	(14.0)	2.3		DE	2	にぶい橙	10	SJ119 カマド
15	皿	(16.0)	2.3		ADEH	2	橙	5	SJ119 カマド
16	坏	(14.0)	3.0		ADE	1	橙	10	SJ119 内面放射線文

第119図 第118・119号住居跡・出土遺物(1)



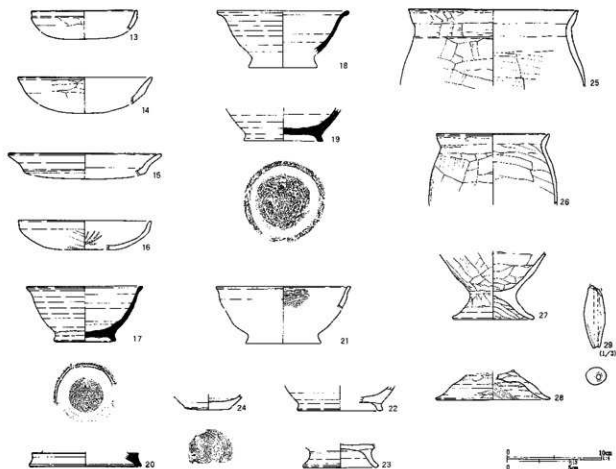
SJ118カマド
1 焼褐色土・焼土・焼土ブロック・灰燼入



- SJ119
- 1 焼褐色土・焼土ブロック少量、灰褐色焼土ブロック・灰褐色土少量
 - 2 黄褐色土・ローム・ローム対多量、焼土対少量
 - 3 焼褐色土・ローム・ローム対少量、焼土ブロック少量
 - 4 黄褐色土・ローム・焼土対多量、灰燼物・灰褐色焼土ブロック少量
 - 5 黄褐色土・焼土対多量、焼土対少量
 - 6 黄褐色土・灰1層・灰化灰対少量(下層住居層埋土)



第120図 第118・119号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	投込	色調	残存率	備考
17	須恵高台碗	(12.4)	5.8	(6.6)	H I J	1	にぶい黄橙	70	SJ119 未野産
18	須恵高台碗	(14.0)	4.5		H I J	1	灰	20	SJ119 未野産
19	須恵高台碗		3.5	8.4	H I J	1	灰	100	SJ119 未野産
20	須恵駄		1.5	(12.0)	H J	1	灰	15	SJ119 黒色粒子含む 秋間産か
21	高台碗	(14.0)	2.4		AD	2	灰白	5	SJ119 内面ミガキ 黒色処理 ロクロ土師器
22	高台碗		2.7	(9.0)	BH J	2	橙	15	SJ119 ロクロ土師器
23	高台碗		3.0	8.0	E H J	2	にぶい橙	60	SJ119 ロクロ土師器
24	坏		1.6	4.8	E H J	2	にぶい橙	60	SJ119 ロクロ土師器
25	甕	(18.0)	8.0		E H J	2	にぶい橙	15	SJ119
26	小型甕	(12.0)	7.6		H J	2	褐	20	SJ118・119
27	台付甕		7.2	8.6	E H J	2	にぶい橙	100	SJ119
28	台付甕		3.2	(12.2)	H J	2	橙	40	SJ119
29	土蒔		長 4.95cm	最大径1.65cm	孔径0.40cm		重量10.02g	灰黄褐	SJ119

第120号住居跡 (第121図)

第120号住居跡は、E-5グリッドに位置する。重複遺構との新田関係は、第118・119・121号住居跡、第2号不明遺構、第45号土塼を切り、第116号住居跡に切られている。

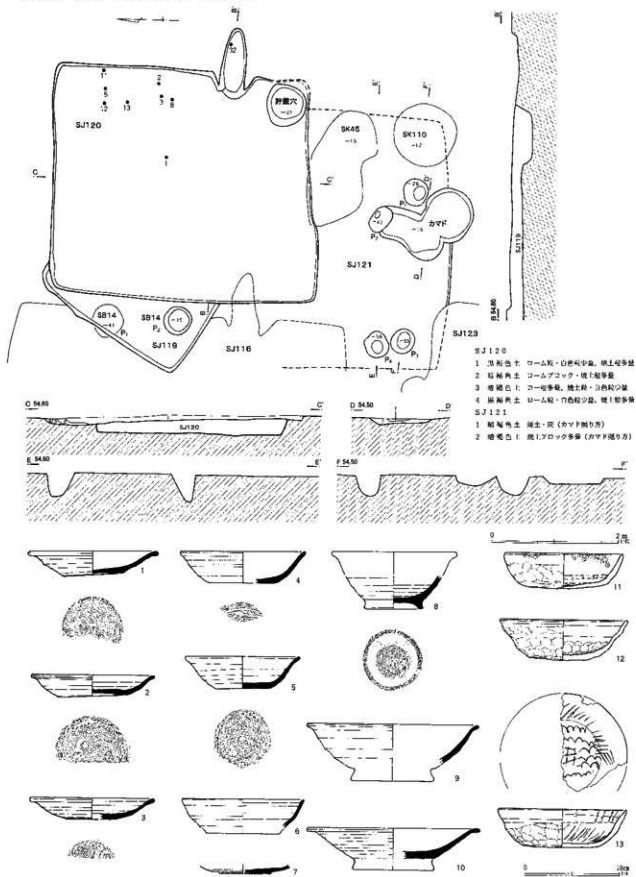
平面形は横長の方形で、規模は長径4.23m、短径

3.64m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-94°-Eを示す。

床面はやや凹凸が顕著である。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。

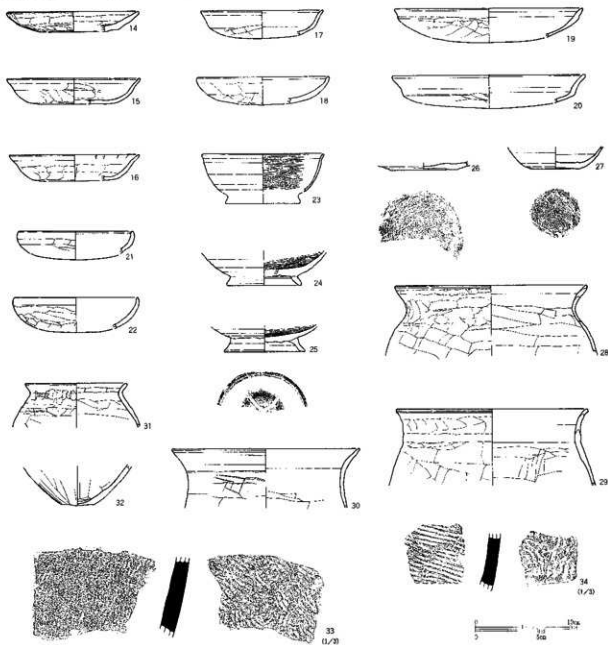
ピットはない。貯蔵穴は、南東コーナーに設けられていた。

第121図 第120・121号住居跡・出土遺物(1)



出土遺物は比較的多い(第121・122図1~20・22~34)。器種としては須恵器環・皿・高台碗・高台皿・甕、土師器環・皿・甕・ロクロ土師器高台碗・坏などがある。第121図1~3・5・8・11~13は北東コーナ一周辺部、32はカマド内から出土した。これらは住居に伴う遺物と考えて良い。13の土師器環は見込み部にラセン暗文を並列に施し、中心部付近には格子状の篋描、体部内面に放射状暗文が施されている。須恵器は1点を除き、末野産である。

第122図 第120・121号住居跡出土遺物(2)



本住居に伴う遺物は1~5、7~17、28・29・31・32等であろう。18~22は本住居跡に伴う遺物ではない。重複する第121号住居跡に帰属するものも含まれている。また、ロクロ土師器(23~27)は第116号住居跡、あるいは第124号住居跡の西壁が本住居上面まで及んでいたとすれば、第124号住居跡に伴う可能性もある。住居の時期は9世紀後半である。

第121号住居跡(第121図)

第121号住居跡は、E-5グリッドに位置する。カマ

大寄1区

第55表 第120・121号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵皿	13.6	2.5	6.5	BIJ	2	灰褐	50	SJ120 Na5
2	須恵皿	12.9	2.2	7.5	BIJ	1	灰黄褐	50	SJ120 Na12 木野産
3	須恵皿	(13.0)	2.2	(5.4)	BEIJ	2	灰	35	SJ120 Na11 木野産
4	須恵坏	(1.3)	3.3		BEIJ	1	褐灰	25	SJ120 木野産
5	須恵坏	12.0	3.4	5.9	EIJ	1	暗青灰	85	SJ120 Na2 木野産
6	須恵坏	(12.0)	3.0		FH	1	灰	10	SJ120 南北倉産
7	須恵皿		1.0	(5.0)	EIJ	1	灰	20	SJ120 木野産
8	須恵高台椀		3.5	6.2	EIJ	2	灰	70	SJ120 Na13 木野産
9	須恵器機	(18.0)	4.2		BIJ	2	灰	20	SJ120 野蔵穴 木野産
10	須恵高台皿	(18.0)	3.2		EIJ	2	灰	5	SJ120 高台割落 木野産
11	坏	(12.3)	3.2	(9.2)	ADE	1	にぶい橙	45	SJ120 Na1 口縁部内外面に油塗
12	坏	13.4	4.2	7.4	ADHJ	2	橙	100	SJ120 Na3 体部指押え 底部ケズリ
13	坏	(13.4)	4.0	(8.0)	ABDEH	1	褐灰	35	SJ120 Na4 放射線文→ラセン線文
14	皿	(14.0)	2.0		ABHJ	1	にぶい褐	10	SJ120 体部指押え
15	皿	(14.0)	2.6	(8.8)	EH	1	にぶい赤褐	20	SJ120
16	皿	(13.6)	2.7	(8.9)	DEF	1	にぶい褐	15	SJ120 白色針状物質入る
17	皿	(12.8)	2.6		ADE	1	明赤褐	10	SJ120
18	皿	(13.0)	2.8		EHJ	2	橙	15	SJ120
19	皿	(20.0)	3.0		AEHJ	2	橙	20	SJ120
20	皿	(20.2)	2.9		DH	2	橙	5	SJ120
21	坏	(12.0)	2.3		ADH	2	橙	10	SJ121 カマド掘り方
22	坏	(13.0)	3.3		DEIJ	2	橙	30	SJ120
23	高台椀	(12.0)	4.0		DEH	2	にぶい褐	15	SJ120 ロクロ土師器 黒色処理
24	高台坏		3.7	(8.0)	EHJ	2	にぶい黄橙	45	SJ120 ロクロ土師器 内面黒色処理 ミガキ
25	高台椀		2.8	8.6	DEH	2	橙	50	SJ120 ロクロ土師器 底部外面へラ記号
26	坏		0.8	(7.0)	EHJ	2	にぶい褐	75	SJ120 ロクロ土師器
27	坏		2.3	5.0	AEHJ	2	橙	100	SJ120 ロクロ土師器
28	甕	(20.4)	7.4		EHJ	2	橙	30	SJ120
29	甕	(20.4)	8.0		EHJ	2	橙	15	SJ120
30	甕	(20.0)	6.2		BEIJ	2	にぶい橙	10	SJ120
31	小型甕	(10.8)	4.7		HJ	2	にぶい黄褐	15	SJ120
32	甕		4.1	3.5	ABD	1	橙	60	SJ120 Na14
33	須恵甕				HIJ	1	暗灰		SJ120 外面ナグ 内面同心円当て 具 木野産
34	須恵甕				IIIJ	1	灰黄褐		SJ120 外面平行叩き 木野産

下の掘り方が辛うじて検出されたのみで、形態や規模等の詳細は不明である。重複遺構との新旧関係は、第116・210・123号住居跡に切られている。第110号土壌との関係は不明である。第45号土壌は掘り方の一部かもしれない。

平面形は方形系と推定される。推定規模は長径4.00m、短径2.14mである。

カマドは南壁に設置されているが、掘り方が検出されたのみで詳細は不明である。

ピットは3本検出された。遺構との関係は不明。

出土遺物はカマド掘り方から坏が1点出土している(第122図21)。重複する第120号住居跡から出土した

第122図18-20・22はあるいは本住居跡から混入したものかもしれない。住居の時期は不明確であるが、8世紀前半頃と考えておく。

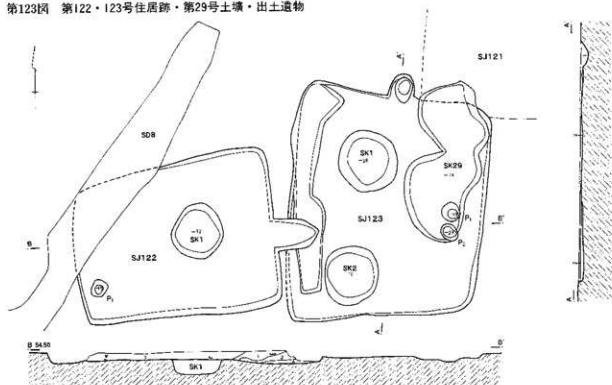
第122号住居跡(第123図)

第122号住居跡は、E・F-4グリッドに位置する。第123号住居跡にカマド上面を削平され、第8号溝跡に住居北西コーナー部を破壊されていた。

平面形は長方形で、規模は長径3.19m、短径2.56m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、上面は第123号住居跡に削平されていた。底面の掘り込みは浅い。

第123図 第122・123号住居跡・第29号土壇・出土遺物



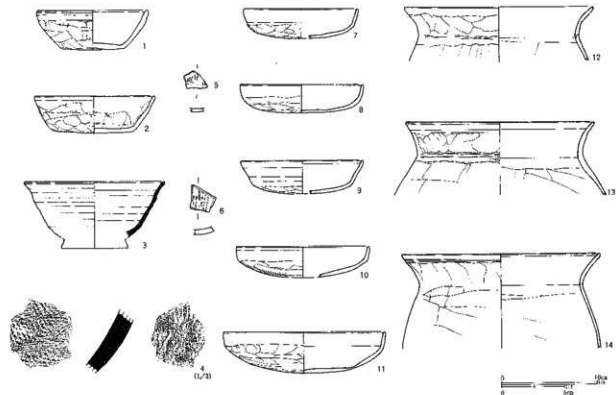
SJ122

- 1 埴輪状土 焼土粒少量、灰白色土多量
- 2 葦 茎上 灰に焼土・炭化物
- 3 埴輪状土 ロームブロック・焼土粒多量
- 4 黄褐色土 ロームブロック、藪り土

SJ123

- 1 埴輪状土 ローム状・硬土
- 2 埴輪状土 焼土粒多量、灰白色土ブロック
- 3 埴輪状土 ロームブロック多量

0 2m



第56表 第122・123号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎七	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.4)	4.2	6.6	DEHJ	2	橙	60	SJ123
2	坏	12.8	3.9	8.2	EIJ	2	にぶい橙	95	SJ123 床面
3	須恵高台碗	(14.0)	5.9		IJ	1	灰	30	SJ123 掘り方 木野産
4	須恵壺				IIJ	1	灰	破片	SJ123 木野産 外面縦格子印き 内面当具痕
5	坏	(12.0)	3.1		EH	2	明褐	小片	SJ123 放射状暗文
6	坏	(13.0)	2.9		DEH	1	明褐	小片	SJ123 放射状暗文
7	坏	(13.0)	2.9		EIJ	2	にぶい橙	15	SJ122
8	坏	(13.0)	3.5		DEHJ	2	にぶい黄橙	30	SJ122
9	坏	(14.0)	3.2		IJ	2	にぶい赤褐	50	SJ122
10	坏	17.2	4.3		BDEHJ	2	にぶい褐	75	SJ122
11	壺	(20.0)	5.7		DEHJ	2	橙	15	SJ122
12	壺	(20.0)	7.7		EIJ	2	橙	40	SJ122
13	壺	(21.0)	10.0		EIJ	2	にぶい褐	30	SJ122

ピットは1本検出されたが、住居に伴うか否か不明である。また、住居中央部の床面から土壌が1基検出された。いわゆる床下土壌と思われる。

出土遺物は土師器坏と甕・壺がある(第123図7~14)。土師器坏は、扁平で底部はやや丸底風となる北武蔵型坏が主体である。甕は器壁の薄い武蔵型甕で、口縁部は緩やかに外反する(12・14)。時期的には8世紀中葉を中心とした段階と思われる。

第123号住居跡(第123図)

第123号住居跡は、E・F-4・5グリッドに位置する。重複する第121・122号住居跡を切っていた。第29号土壌との関係は不明確であるが、あるいは本住居跡の掘り方の一部かもしれない。

平面形は長方形で、規模は長径3.79m、短径3.12m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-7°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは北壁の中央に設置されるが、燃焼部の底面付近が辛うじて残ったのみで、詳細は不明である。

ピットは2本検出されたが、住居の柱穴ではなからう。土壌は2基あり、床下土壌または掘り方と考えられる。西壁際の溝状の落ち込みは掘り方であろう。

出土遺物は少なく、土師器坏、須恵器高台碗・甕が検出された(第123図1~6)。土師器坏は平底で、腰部が直線的に開く(1・2)。時期的には9世紀末葉~10世紀初頭頃と考えられる。

第124号住居跡(第124図)

第124号住居跡は、E-5・6グリッドに位置する。掘り込みが浅く、床面の大半は削平されていた。カマドの一部と掘り方が辛うじて残存していたのみである。重複遺構との新旧関係は、第2号不明遺構を切り、第43号土壌に切られていた。第82・125号住居跡との関係は不明確である。

平面形は方形系と推定され、推定規模は東西長2.65m、南北長2.35m、主軸方向はN-92°-Eを示す。

カマドは東壁に設置され、細長く伸びる煙道部が検出された。4層上面が火床面と思われる。

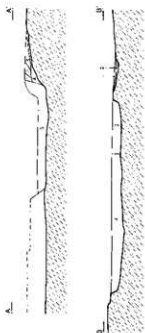
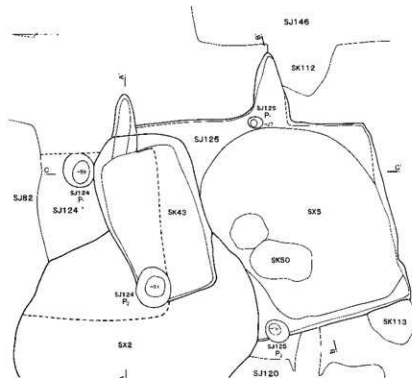
ピットは2本検出され、いずれも住居跡に伴うものと考えられる。Pit 2はカマド対向ピットか。

出土遺物は少ない。ロクロ土師器小皿(第124図1)・高台碗(2)、非ロクロの皿(4)、高台碗(5)?、灰釉陶器高台皿(3)と砥石(6)が出土した。小皿はPit 1内から出土した。底部回転糸切で、須恵器坏をスケールダウンした形態である。灰釉皿は東濃産と考えられ、灰釉は黄け掛けされている。住居の時期は10世紀後半と推定される。

第125号住居跡(第124図)

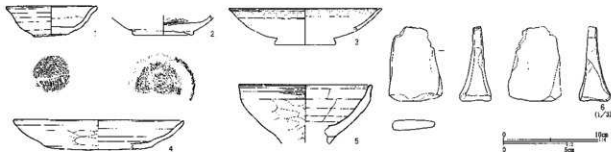
第125号住居跡は、E-5・6グリッドに位置する。極めて掘り込みが浅いうえ、第43・112号土壌、SX 5(倒木痕)に破壊され、遺存状態は悪い。第124号住居跡との新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が古

第124図 第124・125号住居跡・出土遺物



S J : 24 カマ

- 1 壁 褐色土 ローム・ロームブロック多量、焼土粒
 - 2 瓦葺り土: ローム・ロームブロック多量
 - 3 壁 褐色土 焼土・焼土粒少量
 - 4 瓦葺り土: 焼土・焼土ブロック少量
 - 5 壁 褐色土: ローム多量・瓦化物多量・焼土粒少量
- S J 1 2 5
- 1 壁 褐色土 焼土 (柱敷部)
 - 2 壁 褐色土: 以上・瓦化ブロック多量
 - 3 壁 褐色土 焼土粒少量
 - 4 壁 褐色土: 焼土粒・ロームブロック・ローム多量



第57表 第124号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	9.6	3.1	3.8	ABE J	2	桜	75	P111 ロクロ土師器
2	高古付碗		2.1	(6.0)	BD	2	灰白	40	内面黒ガキ・黒色処理 ロクロ土師器
3	灰釉皿	(16.0)	2.4		BH	3	灰白	10	東濃産
4	皿	(18.0)	3.0		BE I	2	明赤褐	10	体部指押え 底部ケズリ
5	碗か	(14.0)	6.2		D I	1	にぶい黄橙	15	内面黒色処理 赤口クロ
6	碓石	長 7.83cm 最大幅 5.60cm 厚さ 3.40cm 重量 100.05g							

い可能性が高い。第120号住居跡との関係は不明。

(在長)、短径3.11m、深さ0.02mを測る。主軸方向は

平面形は歪んだ横長方形で、規模は長径3.70m (例

N-90°-Eを示す。

床面は削平されていた。第3・4層はSX5埋土である。カマドは東壁の南寄りに設置され、底面の床面被熱層が僅かに残るのみである。ピットは2本検出された。

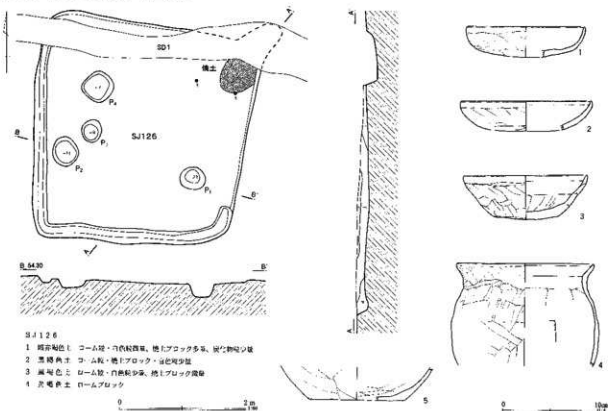
出土遺物はない。時期も不明とせざるを得ない。

第126号住居跡 (第125図)

第126号住居跡は、D-6グリッドに位置し、第1号溝跡に北壁部周辺を破壊されている。

平面形は正方形で、規模は長径3.52m、短径3.08m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。床面はやや凹凸をもつ。カマドは北東コーナーに設置されたものと思われるが、第1号溝跡によって失われている。カマド前面の床面には焼土が堆積していた。

第125図 第126号住居跡・出土遺物



第58表 第126号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(12.4)	3.2		EHJ	2	橙	15	
2	杯	(14.0)	3.0		A E H J	2	橙	10	
3	杯	(13.0)	4.6	(6.8)	D H J	2	にぶい黄橙	65	カマド No8
4	小型甕	(14.4)	10.8		A D E H J	2	褐	40	カマド No11
5	甕		3.5	(10.0)	A D E H J	2	褐	15	カマド

ピットは4本検出されたが、本住居跡に伴う可能性は低い。

壁溝は西壁から南壁にかけて巡っていた。

出土遺物は少なく、土師器杯と甕が検出されている(第125図)。3の土師器杯と4の土師器小型甕はカマド周辺から出土した。住居の時期は9世紀末~10世紀初頭頃に位置づけられよう。

第127号住居跡 (第126図)

第127号住居跡は、調査区北東部のB・C-6・7グリッドに位置する。東側に第129-131号住居跡が近接して構築されている。カマド下部に第4号溝跡が重複するが、本住居跡の方が新しいことが判明した。

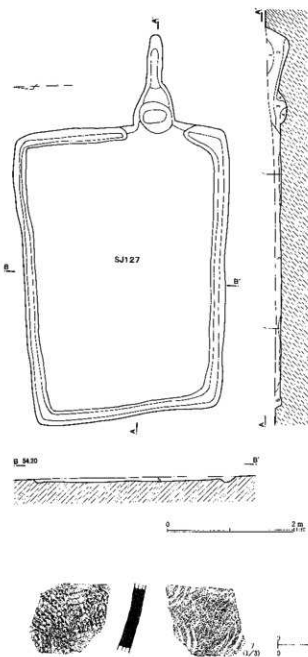
平面形は長方形で、規模は長径4.58m、短径3.41

m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。床面は概ね平坦であった。住居埋土は粘性の強い暗褐色土で、大きな土層変化は認められなかった。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込み、細長く延びる煙道部が狭く。燃焼部底面は浅く掘り込まれ、粘土製の支脚が据えられていた。

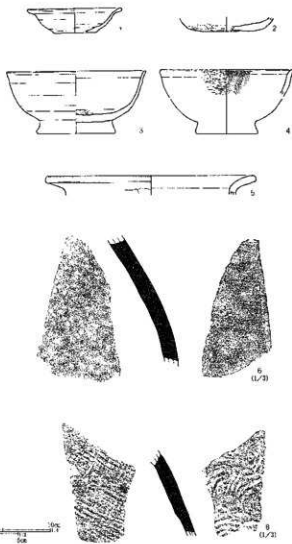
壁溝は全周する。ピットその他の付属施設は検出されなかった。

第126図 第127号住居跡・出土遺物



出土遺物は少ない。土師器環・小皿・高台碗・甕と須恵器甕の破片がある(第126図)。3はロクロ土師器の高台碗で、底部が剥落している。カマド内出土て住居に伴うものと考えられる。4も同タイプで、内黒処理が施されている。1・2も伴うものである。5・7・8は混入であろう。住居の時期は10世紀末~11世紀初頭頃と推定される。

- 1 白・黄褐色土 暗褐色土・ロームブロック、下部は赤化(燻煙天井部)
- 2 暗褐色土 粘土質多量、白色粒
- 3 暗褐色土 粘土質多量、白色粒
- 4 暗褐色土 粘土質多量(カマド煙道(須り目))
- 5 暗褐色土 粘土質、白色粒多量
- 6 暗褐色土 粘土質、白色粒多量
- 7 暗褐色土 粘土質多量、ロームブロック多量(壁内部分)



第59表 第127号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成色	測	残存率	備考
1	小皿	(10.0)	2.5	(4.6)	AHJ	2	浅黄橙	10	ロクロ上師器
2	坏		1.5	(8.0)	DIIJ	2	にぶい橙	30	底部中央未調整(離れ砂か)
3	高台碗	14.7	5.3		A E H J	2	にぶい黄橙	55	カマド ロクロ上師器
4	高台碗	(13.7)	2.9		B D E	1	橙	5	内外面ヘラミガキ 内面黒色処理 ロクロ上師器
5	焚	(22.0)			HJ	2	灰褐	10	
6	須恵装				II I J	1	灰白	破片	木野産
7	須恵装				HI J	1	灰	破片	木野産
8	須恵装				II I J	1	灰	破片	木野産

第128号住居跡 (第127図)

第128号住居跡は、調査区北端のB-7グリッドに位置する。住居北半は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。重複遺構との新田関係は、第4号溝跡、第129号住居跡、第27号土壇を切り、第130号住居跡に切られていた。

平面形は方形系と推定されるが、歪みがある。規模は長径2.14m、短径1.60m(現在長)、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-71'-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁に設置され、底面の掘り込みはあまり認められない。

ピットその他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は2点あるが、第128-130号住居跡出土遺物となり本住居跡に伴う保障はない(第127図1・2)。1・2は8世紀前半段階と思われるが、住居の時期は不明とせざるを得ない。

第129号住居跡 (第127図)

第129号住居跡は、B・C-7グリッドに位置する。北壁部は調査区外に延び、全容は不明である。重複遺構との新田関係は、第4号溝跡を切り、第128号住居跡に切られていた。

平面形は正方形と推定され、規模は長径3.32m、短径3.08m(現在長)、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-94'-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁に設置されていた。底面の掘り込みはなく、強く被熱した痕跡は認められなかった。

ピットは2本検出された。壁溝は全周する。

確実に帰属する遺物はない。第127図1・2は第128-

130号住居跡から出土した可能性もあり、明確に分離できない。住居の時期も不明である。

第130号住居跡 (第127図)

第130号住居跡は、調査区北端のB-7グリッドに位置する。大半は調査区外にあるため、遺構の詳細は不明である。断面観察から、第128号住居跡を切っていることが証明した。一応、住居跡としたが、小型であるため確定はできない。

平面形は方形系で、規模は長径0.59m、短径0.38m(現在長)、確認面からの深さ0.05mを測る。主軸方向はN-87'-Eを示す。

ピットは1本検出された。他の付属施設は検出されなかった。

確実に帰属する遺物はない。第127図1・2は第128-129号住居跡から出土した可能性もあり、出土遺構を限定できない。住居の時期は不明である。

第131号住居跡 (第128図)

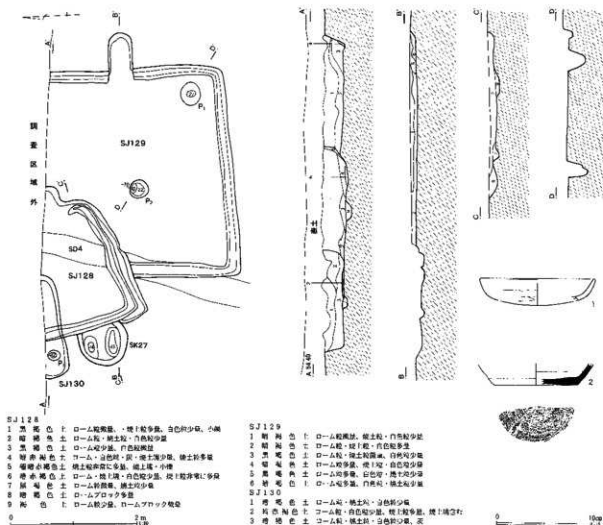
第131号住居跡は、調査区北東部のC-7グリッドに位置する。第42号土壇が重複しているが、本住居跡の方が新しい。

平面形は横長方形で、規模は長径3.70m、短径2.80m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-5'-Wを示す。

床面はやや起伏をもつ。カマドは北壁の東端に設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築される。底面は僅かに窪み、第3層が床面となる。左側の袖は粘土が残っていたが明確には検出されなかった。燃焼部には、土器と共にカマド構築材に使用された板石が崩壊した状態で残されていた。

ピットは1本南東コーナーから検出された。カマド

第127図 第128～130号住居跡・第27号土壇・出土遺物



第60表 第128～130号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(12.0)	2.3		A	2	にぶい黄橙	10	SJ128～130
2	須恵焼		2.3	(9.0)	HJ	1	灰	50	SJ128～130 底部「×」のへら記号 秋側産か

対向ピットで、住居に伴うものと考えられる。壁溝はカマドと Pit 1 周囲を除き巡っていた。

出土遺物の大半はカマド内から検出された(第128図)。1～4はロクロ上脚器の小皿である。4は口縁部に油煙が付着し、灯明皿として使用されたものと思われる。5はロクロ上脚器の無台杯、6～8は高台椀である。大小の2種があり、7は内面黒色処理、8は内面ミガキと黒色処理が施されている。9は器壁の厚い甕で胴部外面に粗いケズリが施される。住居の時期は10世紀末葉～11世紀初頭頃と考えられる。

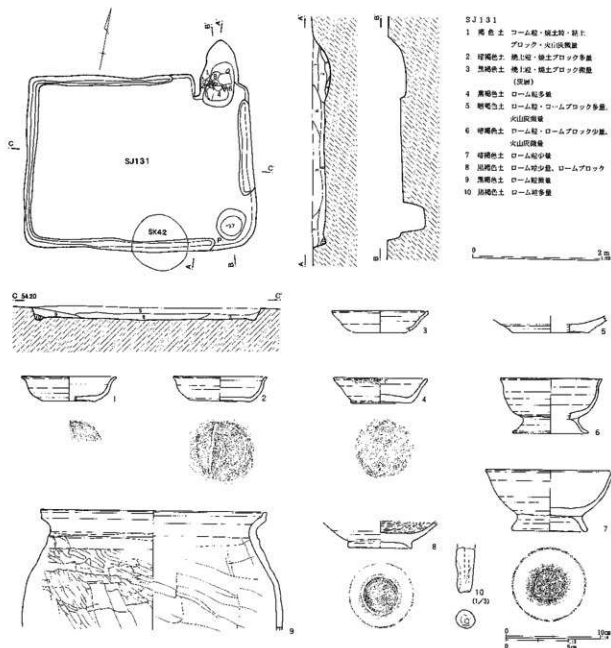
第132号住居跡(第129図)

第132号住居跡は、調査区北東部のC-7・8グリッドに位置する。

小型の住居跡で、平面形は横長方形である。規模は長径3.10m、短径2.16m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-101°Eを示す。

床面は貼床されやや起伏をもつ。床面下には掘り方が検出された。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込み、細長い煙道部が続く。燃焼部から煙道部の側壁は強く被熱していた。燃焼部底面に

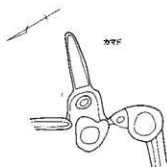
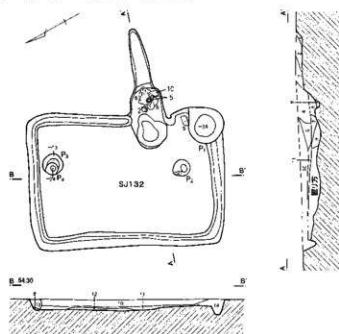
第128図 第131号住居跡・出土遺物



第61表 第131号住居跡出土遺物観察表

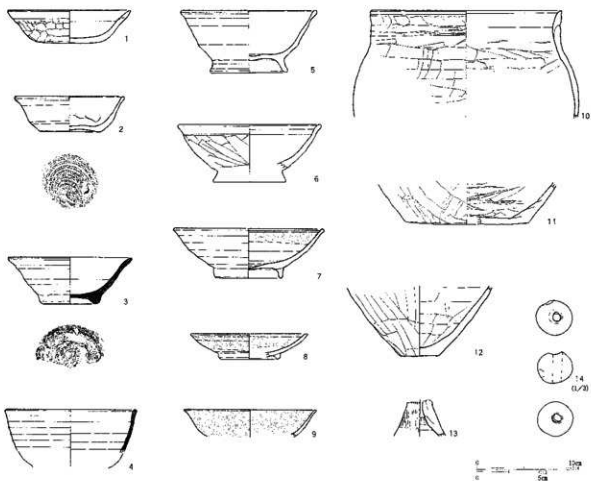
番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(10.0)	2.6	(5.5)	H J	2	橙	25	カマドNo3 ロクロ土師器
2	小皿	9.9	2.7	6.4	A E H J	3	にぶい橙	80	カマドNo2・4 ロクロ土師器
3	小皿	(10.0)	2.1		A D H	3	淡橙	10	ロクロ土師器
4	小皿	10.0	2.7	6.4	H J	3	にぶい橙	100	No1 ロクロ土師器 11縁部内面に油煙付着
5	杯		1.8		B E H J	2	橙	20	No6 ロクロ土師器 底部円板状切り
6	高台檜	(10.6)	5.8	(8.0)	B H J	3	にぶい橙	30	カマドNo7 ロクロ土師器
7	高台檜	(14.0)	6.2	7.9	B H J	2	にぶい橙	40	ロクロ土師器 内面黒色処理
8	高台檜		2.9	6.8	H J	2	橙	80	カマドNo5 ロクロ土師器 内面ミガキ
9	甕	(24.0)	12.5		H J	2	にぶい橙	20	カマド
10	上鉢	長(3.55)cm	最大径1.50cm	孔径0.35cm			重量6.93g		にぶい橙

第129図 第132号住居跡・出土遺物



- 1 粉褐色土 焼土河少量
- 2 黒褐色土 焼土河少量
- 3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 4 粉色土 ローム粒少量、焼土粒、火山灰少量
- 5 汚緑色土 ローム・ロームブロック少量
- 6 黒褐色土 ローム粒少量、焼土河少量
- 7 粉褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 8 褐色土 ローム粒少量
- 9 灰白色土 コーム粒・焼土粒少量
- 10 褐色土 コーム粒少量、ロームブロック、火山灰少量
- 11 黒褐色土 焼土粒少量、炭化物粒少量
- 12 灰褐色土 ローム粒少量、ロームブロック少量
- 13 褐色土 ローム粒・火山灰少量
- 14 黒褐色土 焼土粒少量

0 2m



第62表 第132号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.0)	3.9	7.0	BEJ	2	にぶい橙	45	
2	環	11.3	3.7	5.8	DIIIJ	3	浅黄	80	カマドNa5 酸化焰 須恵器的 墨斑 末野産
3	須恵高台杯	(13.0)	4.9	(6.2)	HIIJ	2	灰白	30	粗い胎土 末野産
4	須恵碗	(14.0)	4.5		EIIJJ	1	灰	10	東金子産か
5	高台碗	(14.0)	6.6	7.7	EHIJ	3	灰黄	65	カマドNo1・2 須恵器的 末野産 器みあり
6	(高台) 碗	(15.0)	4.7		ADE	3	橙	25	クロコ整形? 体部手持ちヘラケズリ
7	高台碗	(15.6)	5.2	6.8	H	1	灰白	30	灰釉刷毛喰り 外面無釉 大原2号窯式か 東濃産
8	灰釉高台皿	(12.2)	2.7	(6.0)	EII	2	灰オリーブ	15	灰釉漬け掛け 東濃江産 輪化?
9	緑釉碗	(14.0)	2.8		H	1	青灰	5	東濃産 深緑色の釉
10	甕	(20.0)	11.3		DE	2	橙	15	カマドNa4
11	甕		4.5	(13.0)	ADEHJ	2	にぶい橙	20	
12	甕		7.3	(4.0)	AE	1	黄橙	30	器厚い
13	甕台		3.6		ADEH	2	明赤褐	80	カマドNo7
14	土瓦	長径2.80cm 高さ2.50cm 孔径0.70cm 重量17.58g にぶい赤褐 貯蔵穴							

は支脚据え付け孔と思われる小孔が検出された。また、覆土中にはカマド構築材と思われる板石が3点崩壊した状態で残されていた。

ビットは3本検出された。Pit 1は貯蔵穴か。Pit 2・3は伴うか不明である。

出土遺物は土師器環類・甕、須恵器環類、灰釉陶器、緑釉陶器、土玉などがある(第12図)。1は非クロコの環で、体部は指押さえとナゲ、底部もナゲ調整と思われる、ケズリは不明瞭である。2と5は同一の胎土と焼きである。2は内外面に黒斑状の焼き斑が観察される。片岩を含む粗い胎土で、末野産と推定されるが、須恵器として良いか疑問がある。3は灰色で明らかに還元焰焼成されている。非常に粗い胎土で、片岩を多量に含む。作りも雑で、器壁は厚い。末期的な須恵器である。末野産。6は土師器でクロコ整形しているかもしれない。体部外面は手持ちヘラケズリ調整される。7は東濃産の灰釉陶器碗である。内面のみ灰釉が刷毛塗りされる。口縁部内面に沈線が走り、体部外面のケズリはない。底部は糸切り痕が残る。大原2号窯式と思われる。8は灰釉陶器小皿である。素地土は粗く、

東濃江産の可能性が高い。灰釉は漬け掛け、体部の削り調整はない。底部回転糸切である。9は緑釉陶器皿。素地上は灰色に堅く焼けている。緑釉は深緑に発色している。東濃産と思われる。甕(10・12)は器形と調整に「コ」の字状口縁装の影響も見られるが、口縁部形態や器壁の厚さは退化傾向が如実に現れている。13は混入である。住居の時期は10世紀前半と考えられる。

第133号住居跡(第130図)

第133号住居跡は、調査区北東端部のC-8グリッドに位置する。

平面形は縦長の長方形で、規模は長径3.89m、短径2.80m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-101°-Eを示す。

床面はやや凹凸がある。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。第3層下面が火床面と思われる。

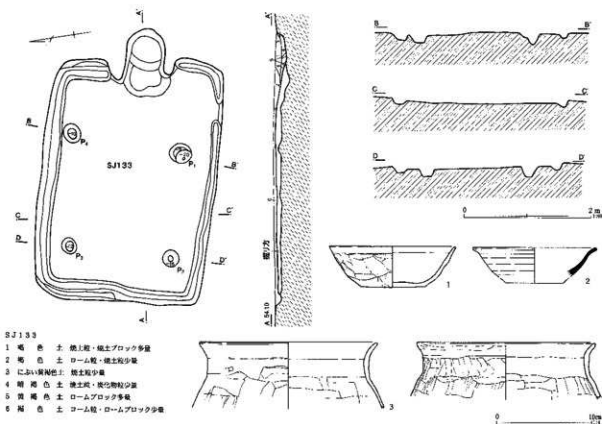
ビットは4本検出されたが、いずれも深度が浅く、土柱穴となるか否か不明である。

出土遺物は土師器環、須恵器環、土師器甕がある(第130図)。主にカマドから出土している。1は土師器環

第63表 第133号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.4)	4.3	6.8	AIIJ	2	にぶい橙	60	カマド 体部下半+底部ケズリ
2	須恵環	(14.0)	3.1		EHIJ	1	灰	10	カマド 末野産
3	甕	(19.0)	7.0		EHIJ	2	にぶい褐	15	
4	甕	(19.0)			DEHJ	2	にぶい褐	30	カマド

第130図 第133号住居跡・出土遺物



て、体部下位と底部をへら削り調整している。2は須恵器坏で末野産。3・4は「コ」の字状口縁装である。住居の時期は9世紀後半に位置付けられる。

第134号住居跡 (第131図)

第134号住居跡は、C・D-6・7グリッドに位置し、重複する第4号溝跡を切って構築されていた。

平面形は縦長の長方形で、規模は長さ3.49m、短径2.13m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-104°-Eを示す。

床面は概ね平坦であった。堆積状態は概ね自然堆積

と判断された。カマドは東壁の南端部にやや斜め方向に設置されていた。燃焼部は壁を切り込み、側壁は強く被熱していた。また、底面にも被熱痕跡が認められ、覆土中から土器が多く出土した。

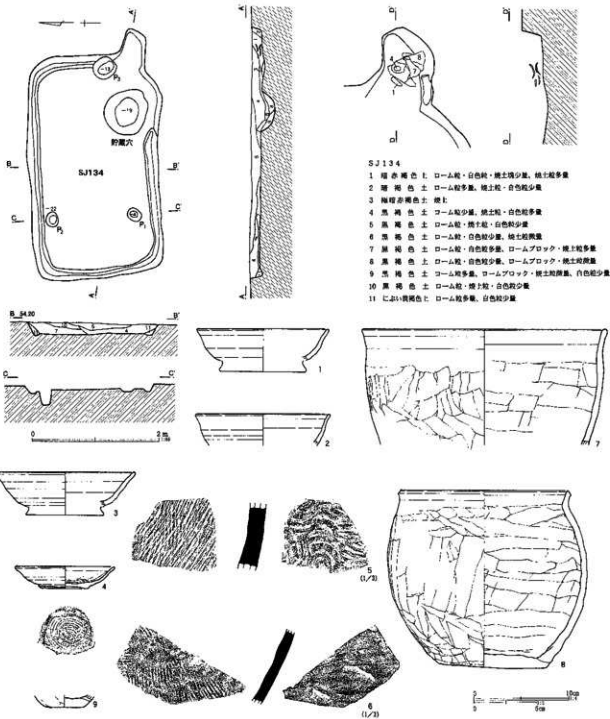
ピットは3本検出されたが、柱穴にはならないうろう。貯蔵穴はカマド前面の南壁際に位置する。断面観察から住居埋没時には開口していたことが判明した。壁溝はカマド周囲を除き巡っている。

出土遺物は、ロクロ土師器の椀皿類と土師器甕、須恵器甕がある (第131図)。1~3はロクロ土師器高台

第64表 第134号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	高台椀	(14.0)	3.3		BHJ	2	にぶい褐色	25	カマドNo.7 ロクロ土師器
2	高台椀	(14.0)	3.3		ABCDEH	2	褐色	15	ロクロ土師器
3	高台椀	(15.0)	3.6		DEHJ	2	にぶい黄褐色	35	カマド ロクロ土師器
4	小皿	10.6	2.3	5.4	EIIJ	2	にぶい褐色	80	カマドNo.9 ロクロ土師器
5	須恵器				BHIIJ	1	にぶい褐色	破片	末野産 外面平行叩き 内面同心円当てて具
6	須恵器				EHIJ	1	黄灰	破片	末野産 外面平行叩き 無文当てて具
7	鉢	(26.0)	12.1		DEHJ	2	にぶい赤褐色	25	カマドNo.10
8	甕	17.8	18.6	11.3	BIJ	2	にぶい赤褐色	70	カマドNo.5 胴部外面粗いケズリ 末野産
9	甕		1.3	4.0	BHIIJ	2	にぶい黄褐色	100	末野産

第131図 第134号住居跡・出土遺物



SJ134

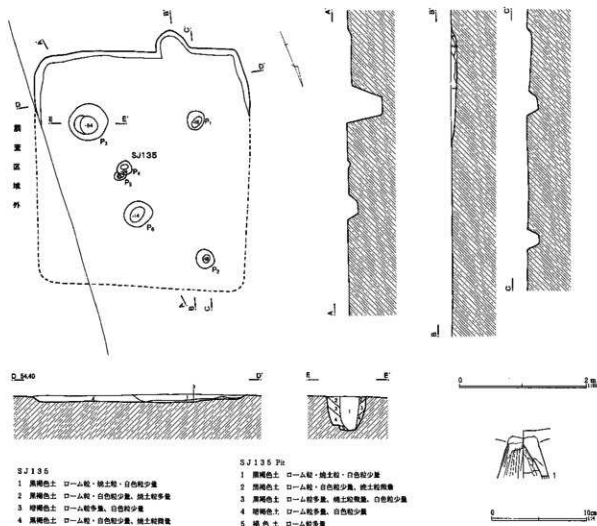
- 1 褐色 褐色土 ローム殻・白色砂・焼土塊少量、焼土粒多量
- 2 褐色 褐色土 ローム粒多量、焼土粒・白色砂少量
- 3 褐色 褐色土 焼土
- 4 黒褐色土 コーム粒少量、焼土粒・白色砂多量
- 5 黒褐色土 ローム殻・焼土粒・白色砂少量
- 6 黒褐色土 ローム殻・白色砂少量、焼土塊少量
- 7 黒褐色土 ローム殻・白色砂多量、ロームブロック・焼土粒多量
- 8 黒褐色土 ローム殻・白色砂少量、ロームブロック・焼土粒多量
- 9 黒褐色土 コーム粒多量、ロームブロック・焼土粒少量、白色砂少量
- 10 黒褐色土 ローム殻・焼土粒・白色砂少量
- 11 同上(褐色土) ローム粒多量、白色砂少量

柄と思われる。4はロクロ土器小皿で底部は回転糸切り。7は鉢か。8は広口の小型甕である。甕を多量に含む極めて粗い胎土で、胴部は粗いヘラケズリ調整が施されている。須恵器類は混入か。住居の時期は10世紀末葉～11世紀初頭と考えられる。

第135号住居跡 (第132図)

第135号住居跡は、D-8グリッドに位置する。東壁から北壁にかけては調査区外に延びている。掘り込みが浅く、南壁部周辺は壁が立ち上がるが、他の部分は床面が露出していた。硬化面の残存範囲で規模を確定した。

第132図 第135号住居跡・出土遺物



平面形は長方形と推定され、規模は長径3.40m、短径3.83m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-165°-Wを示す。

床面は南壁部がやや深く、全体に堅く締まっていた。カマドは南壁の西寄りに設置され、壁を切り込んでいる。火床面付近が残っているに過ぎず、詳細は不明である。

ピットは6本検出された。Pit 3は深く、柱底が残るため、柱穴とするに十分であるが、他のピットは浅く配置も不規則である。

出土遺物は土師器高坏が1点検出されたのみである。古墳時代前期の遺物と思われ、混入の可能性が高い。住居の時期は不明とせざるを得ない。

第132図1は土師器小型高坏脚部片である。残存高

4.5cm。胎土に石英、長石、砂粒を含み焼成は良好。にぶい橙色を呈し、図化部の約65%残存する。脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整。

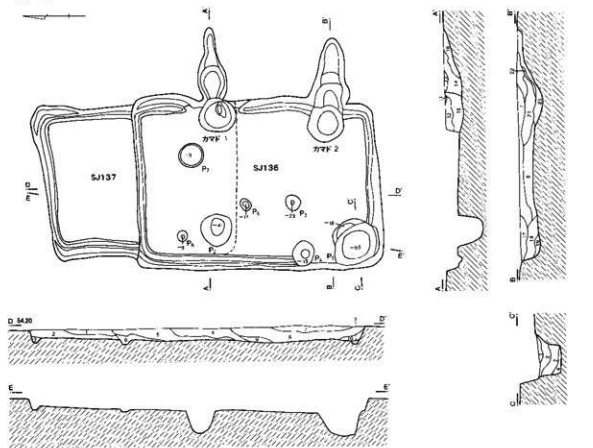
第136号住居跡 (第133図)

第136号住居跡は、D-6・7グリッドに位置する。重複する第137・142号住居跡及び第4号溝跡の全てを切っている。本住居跡と第137号住居跡とは主軸が一致し、東辺を共有する形で重複することから、第137→136号住居跡に建て替えたものと考えられる。

平面形は横長の長方形で、規模は長径3.90m、短径2.74m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。

床面は概ね平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは東壁に2基検出された。1号カマドは重複関係や埋

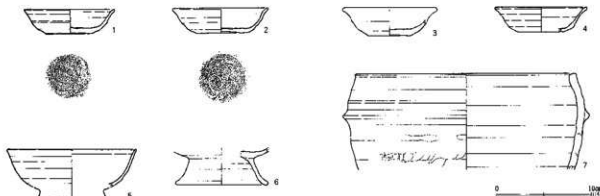
第133図 第136・137号住居跡・出土遺物



SJ136・137

- 1 赤褐色土 ローム粒・少量、白色粘多量、炭化物粒、焼土粒少量
- 2 赤褐色土 ローム粒、白色粘多量、ロームブロック・焼土粒少量
- 3 黄褐色土 ロームブロック土体
- 4 黒褐色土 ローム粒、白色粘多量、焼土粒、炭少粒
- 5 黒褐色土 ローム粒、白色粘、炭多量、焼土粒少量
- 6 赤褐色土 ローム粒、白色粘多量、ロームブロック少量
- 7 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック、白色粘多量
- 8 赤褐色土 ローム粒、白色粘少量、ロームブロック、白色粘、炭化物粒少量
- 9 赤褐色土 ローム粒、ロームブロック少量、白色粘多量
- 10 におい黄褐色土 ローム粒、白色粘、ロームブロック少量
- 11 赤褐色土 焼土ブロック
- 12 黒褐色土 ローム粒、白色粘少量
- 13 におい黄褐色土 ローム粒、白色粘多量
- 14 黒褐色土 ローム粒、白色粘、焼土粒、炭化物粒少量、ロームブロック少量

- 15 黒褐色土 ローム粒、白色粘ロームブロック、焼土粒、炭化物粒土ブロック少量
- 16 におい黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒、白色粘多量
- 17 黒褐色土 ローム粒、白色粘多量、ロームブロック土体
- 18 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック、白色粘多量、炭化物粒少量
- 19 黒褐色土 ロームブロック土体
- 20 赤褐色土 ロームブロック、ローム粒多量、白色粘、焼土粒土上ブロック少量
- 21 におい黄褐色土 コーム粒、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒多量、白色粘少量
- 22 赤褐色土 焼土ブロック土体(カマド火鉢座)
- 23 赤褐色土 ロームブロック多量
- 24 赤褐色土 P10
- 1 赤褐色土 ローム粒、白色粘多量
- 2 におい黄褐色土 コームブロック
- 3 黒褐色土 ローム粒、白色粘少量
- 4 黄褐色土 ロームブロック



第65表 第136・137号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	9.4	2.5	5.0	DEH	2	橙	85	SJ136 ロクロ土師器
2	小皿	10.0	2.6	5.4	ADE	2	橙	100	SJ136 Pit 5内
3	小皿		1.7	4.3	ADH	2	橙	20	SJ136 カマド2 ロクロ土師器
4	小皿	(9.4)	2.6	(4.6)	ABDHI	2	橙	25	SJ136・137 ロクロ土師器
5	(高台) 椀	(13.8)	4.0		DEJ	3	橙	30	SJ136・137 ロクロ土師器
6	高台椀		3.9	(9.4)	ADE	2	にぶい黄橙	40	SJ136 カマド2
7	羽釜	(23.2)	10.1		ADE	1	橙	10	SJ136 カマド1 ロクロ整形

土の状況から第137号住居跡に伴うものと考えられる。2号カマドが本住居跡に対応する。東壁の南端に設けられ、燃焼部は壁を切り込み、細長く煙道部が延びている。燃焼部から煙道部の側壁は強く被熱していた。

ピットは7本検出された。Pit 1はカマドに正対する南西コーナーに位置し(カマド対向ピット)、本住居跡に伴うものである。深さ55cm。Pit 5は埋土中からロクロ土師器小皿の完形品が出土した。Pit 2は2号カマドの対面に位置することから、第137号住居跡のカマド対向ピットと考えるのが妥当であろう。

出土遺物は少ない。ロクロ土師器の小皿と高台椀、羽釜が出土しているが、重複する第137号住居跡の遺物が混じる(第133図)。第133図1～3の小皿と6の高台椀は本住居跡に伴う遺物と考えられる。2は完形で、Pit 5内から出土している。住居の時期は11世紀前半代と考えられる。

第137号住居跡 (第133図)

第137号住居跡は、D-6・7グリッドに位置する。第4号溝跡を切って構築され、第136号住居跡に建て替えられたものと考えられる。

平面形は横長方形で、推定規模は長径3.30m、短径2.44m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

カマドは第136号住居跡1号カマドが本住居跡に伴うものと判断される。燃焼部は壁を大きく切り込んで構築され、細長く延びる煙道部が続く。燃焼部から煙道部の側壁は強く被熱していた。

第136号住居跡 Pit 2が本住居跡に伴う、カマド対向ピットと思われる。深さ41cm。壁溝は残存部については巡っている。

出土遺物は少ない(第133図)。第133図7の羽釜は1号カマドから出土したもので、本住居跡に伴う資料である。4のロクロ土師器小皿と5の高台椀は第136号住居跡と本住居跡のどちらに帰属するのか確定できない。本住居跡から第136号住居跡に継続して建て替えられたことから、時期的にはほぼ同一段階と見てよいであろう。住居の時期は11世紀前半と推定される。

第138号住居跡 (第134図)

第138号住居跡は、E-7グリッドに位置する。壁溝のみ残存し、床面は既に削平されていた。第139号住居跡の床面下から壁溝が検出され、本住居跡の方が古い。第141号住居跡との関係は不明である。また、第12号獨立柱建物跡との新旧関係も不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は歪んだ方形で、規模は長径3.76m、短径3.27m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示す。

床面は削平され遺存しなかった。カマドは検出されなかった。可能性としては第53号七竈と重なる位置に存在したと見ることできる。

ピットは5本検出されたが、柱穴にはならないであろう。壁溝は全周する。

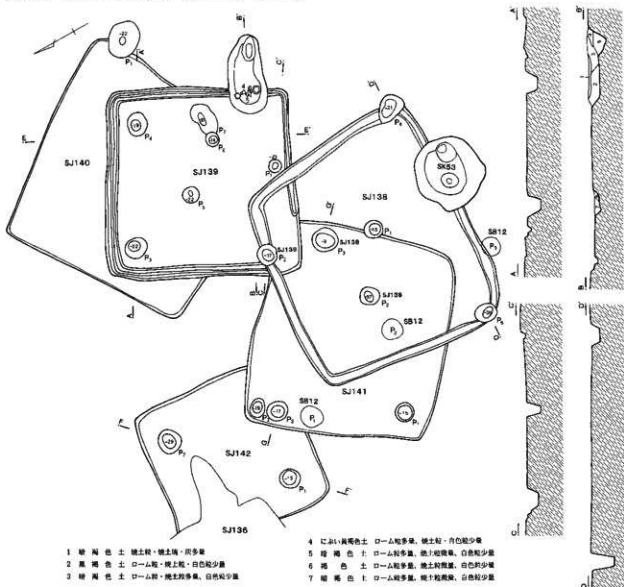
出土遺物は検出されなかったため、住居の時期に関しては第139号住居跡構築以前という限定ができるのみである。

第139号住居跡 (第134図)

第139号住居跡は、D・E-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第138・140・141号住居跡を切っている。

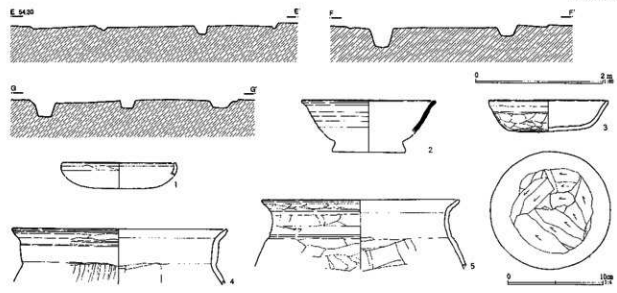
平面形は整った正方形で、規模は長径3.06m、短径

第134图 第138~142号住居跡・第53号土塚・出土遺物



- 1 黄褐色土 雑土砂・雑土塊・瓦多量
- 2 黄褐色土 ローム状・硬土層・白色砂少量
- 3 黄褐色土 ローム状・硬土層多量、自然砂少量

- 4 紅土・黄褐色土 ローム状多量、雑土粒・白色砂少量
- 5 黄褐色土 ローム状多量、硬土層薄、白色砂少量
- 6 黄褐色土 ローム状多量、雑土粒薄、白色砂少量
- 7 黄褐色土 ローム状多量、硬土層薄、白色砂少量



第66表 第139号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	1.3		DE	2	橙	10	
2	須恵高台碗	(14.0)	3.5		AB	2	明赤灰	10	
3	環	12.7	3.3	8.5	AHJ	2	橙	100	カマドNo 1
4	甕	(23.0)	5.8		A E H J	2	橙	10	カマドNo 5
5	甕	(21.0)	7.3		D E H J	2	橙	15	カマドNo 3・4

2.99m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-118°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。

ピットは5本検出されたが、いずれも浅く住居の柱穴になる可能性は低い。壁溝は南西コーナーを除き全周する。

出土遺物は少ない。土師器の環・甕、須恵器碗がある(第134図)。3の土師器環、4・5の甕はカマド内から出土した。住居の時期は9世紀中葉を中心とした時期と思われる。

第140号住居跡(第134図)

第140号住居跡は、D・E-7グリッドに位置する。第139号住居跡と重複し、本住居跡の方が古いものと考えられる。

平面形は正方形と推定され、規模は長径3.43m、短径3.27m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-147.5°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは壁に掛かって1本検出されたが、住居に伴うものではない。

出土遺物はない。住居の時期は第139号住居跡構築以前という限定ができるのみで、詳細は不明である。

第141号住居跡(第134図)

第141号住居跡は、D-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第142号住居跡を切り、第139号住居跡に切られている。第138号住居跡との関係は不明である。また、第12号孤立柱建物跡との新旧関係も不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は正方形と推定され、規模は長径3.28m、短径3.05m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-130°-

Eを示す。

カマドは検出されなかった。ピットは3本あるが、住居に伴うか否か不明。

遺物は検出されなかった。住居の時期は第139号住居跡構築以前という限定ができるのみで、詳細は不明である。

第142号住居跡(第134図)

第142号住居跡は、D・E-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第136・141号住居跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は長径2.51m、短径2.43m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-7°-Eを示す。カマドは検出されなかった。ピットは2本あるが、柱穴となるか否か不明である。

出土遺物はない。住居の時期も不明である。

第143号住居跡(第135図)

第143号住居跡は、E-8グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第144号住居跡と第63号土壌に切られていた。遺構の遺存状態が悪く、詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、規模は長径3.73m、短径0.90m(現在長)、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-4°-Wを示す。

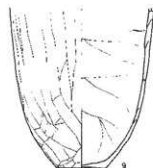
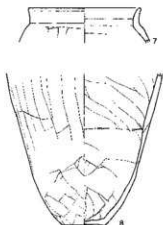
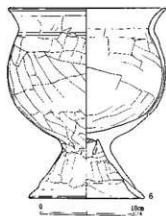
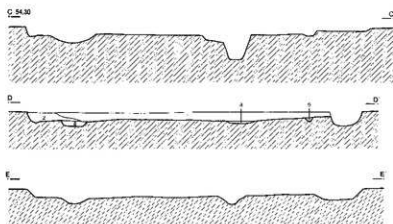
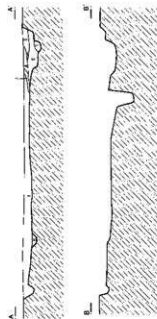
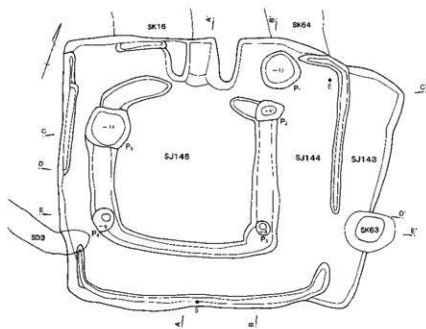
床面は平坦である。カマドは検出されなかった。

確実に伴う出土遺物はない。第135図2・3・8・9は本住居跡、または第144・145号住居跡から出土した遺物である。2のやや口径の大きい模倣環は本住居跡に帰属する可能性があろう。時期は不明確であるが、7世紀代と推定される。

第144号住居跡(第135図)

第144号住居跡は、E-8グリッドに位置する。重複

第135図 第143～145号住居跡・第63号土壇・出土遺物



SJ143・144・145

- 1 褐色土 rome 灰少量、コームブロック多数
- 2 褐色土 rome 灰少量、rome ブロック少量
- 3 褐色土 灰白土質、ブロック多数
- 4 褐色土 硬土質、焼土ブロック多数
- 5 褐色土 焼土質多数、灰白土質少量
- 6 黄褐色土 rome 灰少量、rome ブロック少量、焼土質

出土資料図説

- 7 黄褐色土 rome 灰、rome ブロック、焼土粘着層
- 8 褐色土 rome 灰少量、rome ブロック多数
- 9 黄褐色土 rome の前層土

第67表 第143～145号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	9.0	2.9		B D H J	2	橙	100	SJ144 Pit 1
2	坏	(12.0)	3.3		D I I J	2	にぶい褐	15	SJ143-145
3	坏	(11.0)	2.8		A E H J	2	橙	20	SJ143-145
4	坏	12.0	4.1		D E H J	2	橙	60	SJ144
5	坏	12.4	4.4		D E H J	2	橙	75	SJ144 No. 2
6	台付甕	(16.8)	20.1	(12.4)	B I I J	2	にぶい赤褐	70	SJ144 No. 1
7	小甕	(12.0)	3.7		D E H J	2	橙	10	SJ144
8	甕		16.0	4.6	H J	2	にぶい褐	75	SJ143-145
9	甕		16.9	5.0	A H J	2	褐	60	SJ143-145

遺構との新旧関係は、第143・145号住居跡、第16・64号土城を切り、西壁部では第3号溝跡が覆土上部に乗っていた。

平面形は正方形で、規模は長径4.56m、短径4.34m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-17°-Wを示す。

床面は平坦であった。カマドは北壁の中央に設置され、燃焼部は壁内におさまる。袖は粘土を積み上げて構築されていた。煙道部は削平されており遺存しない。

ピットは5本検出された。Pit 1はカマド脇にあり、貯蔵穴と考えて良からう。Pit 2～5は主柱穴配置を採るか、深度は浅い。

出土遺物は第135図1、4～7が木住居跡から出土した。2・3、8・9は第143～145号住居跡出土で帰属関係が不明確である。1は丸椀タイプの坏で、口縁部がやや内湾気味に直立する。体部から底部はヘラケズリ。Pit 1から出土した。5の坏は南壁際、6の台付甕は北東コーナー部から出土した。住居の時期は7世紀末葉～8世紀初頭前後であろう。

第145号住居跡 (第135図)

第145号住居跡は、E-8グリッドに位置する。第144号住居跡床面下から検出された。第144号住居跡をそのままスケールダウンした形態で、入れ子状に重複することから、述で替えもしくは、第144号住居跡の掘り方と見るのが妥当であろう。

平面形は正方形で、規模は長径3.04m、短径2.85m、主軸方向はN-71°-Eを示す。

床面は削平されている。壁溝状の溝が検出されたのみで、カマド・ピット等の付属施設はない。

本住居跡に確実に伴う出土遺物はないが、第144号

住居跡との関係から、同時期またはその直前段階に位置付けられよう。

第146号住居跡 (第136図)

第146号住居跡は、E-6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第4号溝跡を切り、第2号溝跡・第112号土城に切られていた。

平面形は横長方形で、北東コーナーに張出部が付く。張出部に沿って壁溝も巡ることから、確実に移行に伴う施設である。規模は長径4.06m、短径2.83m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-83°-Eを示す。

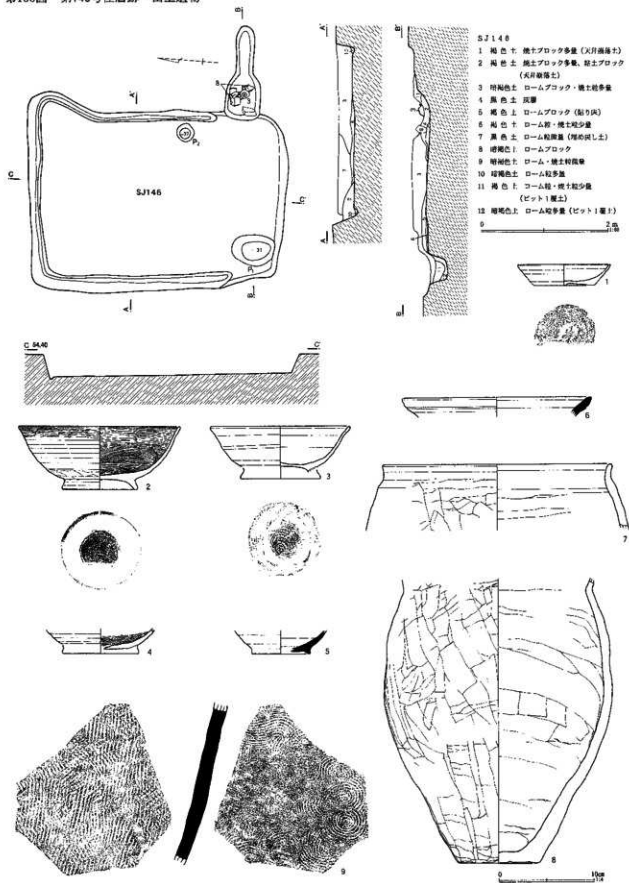
床面は全体に堅く締まっていた。概ね平坦であるが、Pit 1の東側は貼床され、若干高まりが認められた。

カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、細長く延びる煙道部に絞く。燃焼部から煙道部にかけての側壁は強く被熱していた。袖は認められず、燃焼部と床面はあまり段差無く続く。カマド前面の南東コーナー付近の床面には灰の薄い堆積層が広がっていた。燃焼部内にはロクロ土師器の高台碗と、甕、カマド構築材の一部と思われる角礫が残されていた。

ピットは2本検出されている。Pit 1はカマドの対壁のコーナーにあり、遺構に伴うものである(カマド対向ピット)。

出土遺物はロクロ土師器小皿・高台碗、土師器甕、須恵器高台碗・壺・甕がある(第136図)。ロクロ土師器小皿は底部ヘラ切りと思われる。2の高台碗はPit 1出土。内面と口縁部外面をヘラミガキ、内黒処理を行っている。体部下端はヘラケズリ調整。3は高台部を欠く。内面は黒ずんでいるが、黒色処理とは異なる

第136図 第146号住居跡・出土遺物



第68表 第146号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(9.8)	2.2	6.4	DHJ	2	橙	45	底部ヘラ切りか・ロクロ上脚器
2	高台椀	(17.2)	5.6	(8.0)	BHJ	2	にぶい橙	30	Pit 1 ロクロ土脚器 内面ミガキ+黒色処理
3	高台椀	14.9	4.8		HJ	2	にぶい橙	90	カマドNo.1 ロクロ土脚器 内面黒色処理?
4	高台椀		2.7		EIJ	2	にぶい橙	40	ロクロ土脚器 内面ミガキ
5	須恵高台椀		2.5	(6.0)	HJ	1	灰	25	
6	須恵壺	(20.0)	2.0		HJ	1	灰	10	木野産?
7	甕	(24.2)			BHJ	2	にぶい橙	10	胎土粗い
8	甕		29.9	(8.6)	HJ	2	にぶい橙	55	カマドNo.2・3
9	須恵甕				HJ	1	灰	破片	木野産

ようである。カマド内出土。7・8は非ロクロの厚甕。7は胴部縦ケズリ。8は口縁部を欠く、胴部は縦方向の粗いヘラケズリ調整。カマド内出土。5・6・9は混入。9の内面は二次的に磨った痕跡があり、黒底状の黒いシミが残る。転用碗か?。住居の時期は10世紀末葉~11世紀初頭頃と考えられる。

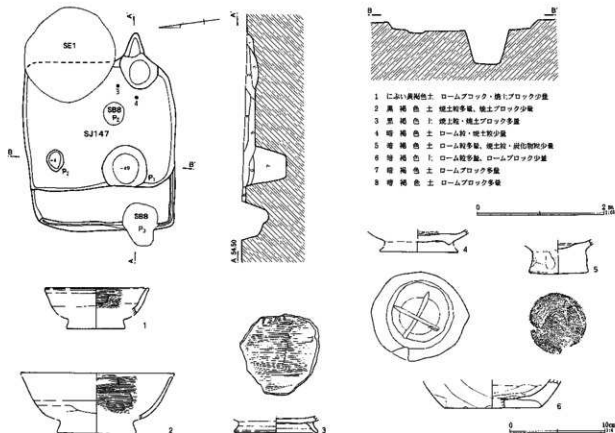
第147号住居跡 (第137図)

第147号住居跡は、E・F-6グリッドに位置する。第1号井戸跡によって東壁部を切られていた。第8号

掘立柱建物跡との関係は、本住居跡の方が新しい可能性が高い。西壁部に段差が付くことからカマドの位置は変えないで、建て替え(縮小)を行った形跡がある。

建て替え後の住居跡を第147a号住居跡、建て替え前を第147b号住居跡とすると、第147a号住居跡の平面形は正方形で、規模は長径2.41m、短径2.01m、深さ0.18mを測る。第147b号住居跡は長方形で、規模は長径2.68m、短径(2.41)m、深さ0.06mを測る。主軸方向は両者共通でN-86°-Eを示す。

第137図 第147号住居跡・出土遺物



第69表 第147号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	(高台) 碗	(10.0)	2.3		BDE	2	にぶい橙	10	内面ミガキ+黒色処理 ロクロ土師器
2	高台碗	(16.0)	3.5		ADEH	2	にぶい橙	10	内面ミガキ+黒色処理 ロクロ土師器
3	高台碗		1.9		EH	2	にぶい黄橙	75	№1 内面ミガキ+黒色処理 ロクロ土師器
4	高台碗		1.8		EII	1	にぶい黄橙	95	№2 内面ミガキ+黒色処理底部「X」ヘラ記号
5	高台皿		3.5	6.2	D/E	2	にぶい黄橙	80	Pit 1 胎土精選 掘入品か ロクロ土師器 混入?
6	盥		3.0	(10.0)	EII J	2	にぶい黄橙	25	

床面は概ね平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南端に設置され燃焼部全面は緩やかに窪む。袖はない。

ビットは2本検出された。Pit 1は第147号住居跡西壁際掘り込まれ、カマド対向ビットと考えられる。

出土遺物は少ない。ロクロ土師器の高台碗(第137図1~4)と台状底部をもつ皿?、盥がある。1~4は内面ヘラミガキと黒色処理が施される。4の底部には「X」印のヘラ記号が記されている。5は台状(円柱状)底部をもつもので、胎土も精選され、非在産とされる。底部は糸切りである。住居の時期は10世紀後半~11世紀初頭頃と考えられる。

第148号住居跡 (第138図)

第148号住居跡は、E・F・6、F・7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第7号掘立柱建物跡を切り、第2号井戸跡に北西部を切られていた。第149号住居跡との関係は、第149号住居跡床面の遺存状態から本住居跡の方が新しいものと判断した。

平面形はやや歪んだ方形で、規模は長さ3.90m、短径3.50m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-68°-E

を示す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ビットは2本あるが、住居に伴うか否かは不明である。

出土遺物は、ロクロ土師器小皿(第138図4)と、高台碗(7・10)がある。4は底部を欠き、口縁部には油煙が付着する。7は内面ヘラミガキと黒色処理が施される。住居の時期は10世紀末葉~11世紀初頭頃であろう。

第149号住居跡 (第138図)

第149号住居跡は、E・F・6、F・7グリッドに位置する。北壁部を第2号井戸跡に切れ、カマドから東壁部を第148号住居跡に切られていると判断した。

平面形はやや横長の方形で、規模は長さ3.29m(現在長)、短径2.84m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

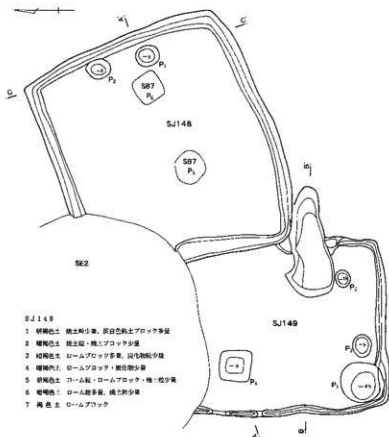
床面は平坦で堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。第2層下層が火床面、第3・4層は掘り方であろう。明確な袖は確認できなかった。

ビットは4本検出された。Pit 1はカマド対向ビットで、確実に伴うものである。

第70表 第148・149号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	10.4	2.0	6.5	BH J	2	にぶい橙	100	SJ149 カマド底部ヘラケズリ 口縁片口風
2	小皿	(10.0)	2.7	4.9	A E H J	2	にぶい橙	60	SJ149 ロクロ土師器
3	小皿	(9.8)	2.2	(7.4)	H J	2	にぶい橙	40	SJ149 底部ヘラ切り ロクロ土師器
4	小皿	10.0	2.2		BH	1	にぶい黄	50	SJ148 口縁部の内外面に油煙付着
5	高台碗	(14.0)	6.9	8.4	H J	2	にぶい橙	45	SJ149 カマド 内面ミガキ 体部風化
6	高台碗	(15.0)	4.6		BD	1	にぶい橙	20	SJ149 カマド 内面ミガキ+黒色処理
7	高台碗		2.9		E J	2	にぶい黄橙	35	SJ148 内面ミガキ+黒色処理 ロクロ土師器
8	高台碗		3.0		B E II	3	にぶい黄橙	70	SJ149 ロクロ土師器
9	高台碗		2.1	(6.0)	DH	1	にぶい橙	60	SJ149 ロクロ土師器
10	高台碗		2.3	(9.8)	A B D H	2	にぶい橙	10	SJ148 ロクロ土師器
11	羽釜	(25.1)	9.6		E J	2	褐	10	SJ149 ロクロ整形 土師貫

第138図 第148・149号住居跡・出土遺物

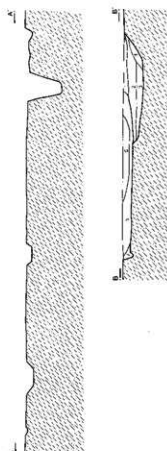


SJ148

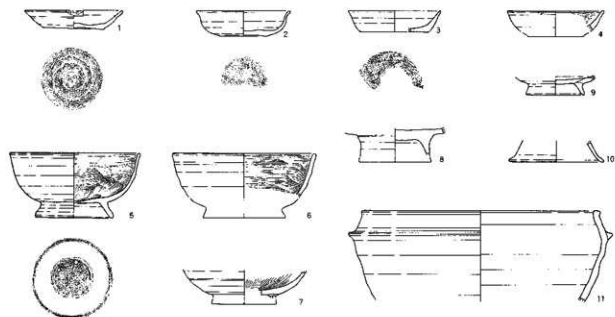
- 1 砂質赤土 焼土和少量、灰白色粘土ブロック多量
- 2 輝靑赤土 焼土和、焼土ブロック少量
- 3 粘靑赤土 ロームブロック多量、石灰質和少量
- 4 輝靑赤土 ロームブロック、焼土和少量
- 5 砂質赤土 コーム和、ロームブロック、焼土和少量
- 6 輝靑赤土 ローム和少量、焼土和少量
- 7 黄赤土 ロームブロック

SJ149

C. 5440



0 2m



0 10cm

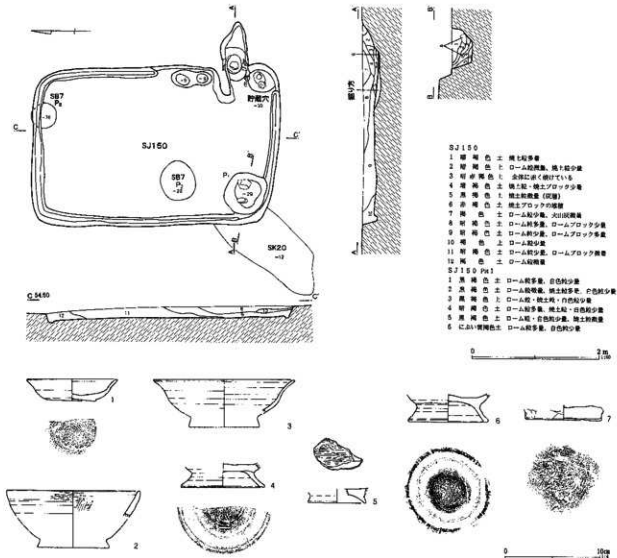
出土遺物はロクロ土師器小皿(第138図1~3)、高台椀(5・6・8・9)、土師質羽釜(11)がある。小皿は体部が直線的に延びる1・3が底部へら切り、体部に丸味をもつ2が底部回転糸切りである。高台椀は器形や高台形態、調整方法にバラエティーがある。羽釜はロクロ整形で酸化焙焼されている。住居の時期は10世紀末葉~11世紀初頭頃と考えられる。

第150号住居跡(第139図)

第150号住居跡は、E・F-7グリッドに位置する。第7号掘立柱建物跡及び第20号土壌を切っている。

平面形は横長方形で、規模は長径3.93m、短径2.56m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示

第139図 第150号住居跡・出土遺物



す。床面はやや起伏をもつが、全体に堅く締まっている。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。袖はあまり明確なものではない。燃焼部底面は浅い掘り方をもつが、火床面はほぼ平坦で床面と大差ないレベルで続く。カマド脇の南東コーナーには貯蔵穴が設けられていた。深さ30cm。

ビットは南西コーナー部から1本検出された。カマド対向ビットと考えられる。煙溝はカマド周辺を除いて全周する。

出土遺物は少ない。器種としてはロクロ土師器小皿(第139図1)とロクロ土師器高台椀(2~6)、甕が

第71表 第150号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	9.6	2.3	5.0	A B H J	2	橙	60	底部回転切削 ロクロ土師器
2	高台樽?	(12.0)	2.4		D	1	にぶい橙	5	内面ミガキ ロクロ土師器
3	高台樽	(15.0)	3.5		E H J	2	にぶい橙	30	ロクロ土師器
4	高台樽		2.6	8.9	D E H J	1	橙	50	Pit 1 ロクロ土師器
5	高台樽		1.5	(6.0)	A H I	2	にぶい橙	25	内面ミガキ+黒色処理 ロクロ土師器
6	高台樽		3.0	8.5	A E H J	1	にぶい橙	100	カマドNo.4 ロクロ土師器
7	甕		1.5	7.8	A I J	2	橙	90	底部木葉痕 ナゲ削す

第151号住居跡 (第140図)

第151号住居跡は、E・F-7・8グリッドに位置する。第2号溝跡に北東コーナー部を削平されていた。

平面形は概ね正方形で、規模は長径4.40m、短径3.95m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-108°-Wを示す。

床面はやや起伏をもち、床面下に掘り方が検出された。カマドは西壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁内におさまっている。軸は粘土を用いて構築されていた。

ピットは5本検出された。Pit 1~4は主柱穴配置をとるが、深度はいずれも浅い。壁溝はほぼ全周する。出土遺物はカマドとその周辺部から多量に検出された(第140~142図)。全て土師器で、器種としては坏類を主に、鉢、小型甕、甕、壺、甗がある。

土師器の坏は重なった状態で出土したものが多し。カマド左脇には、下から順に19・12・7・14・10・11の土師器坏が6枚、入れ子状に重なって出土した。また、その横の壺(40)、甕(34)に挟まれた位置に18・20・8・3・24の坏が5枚、本来重なったものが横倒しになった状態で出土した。南壁際からは17と21が同様に重なって出土している。

土師器の坏は薄手て、作りの良い一群(1~17・24)と厚手て雑な作りの一群(18~23)に大きく分かれる。前者のなかでも、胎土が粉っぽく、手に付着する土器が多く認められる(1・3・4・7・8・10・12・13・24)。このタイプは黒斑が無く、雲母状の微粒子を含む点で共通する特徴である。口径11cm大が主体をなすが、大型坏(14~16)も含まれる。大型坏には口縁下端に沈線を巡らすものがある(14・15)が、基本的に体部のケズリによって口縁下の線を作り出すタイプ

が主流である。

後者は体部が深く、丸腕風である。底部のヘラケズリは雑で、全体に厚手の作りである。黒斑の認められるものが多い。

鉢や小型壺はほとんどの土器が体部下位に二次被熱の痕跡が残る。器面が剥落するものも認められる。甕は胴部が長く伸びるタイプで、砲弾状になるもの(34)と胴部が直線的になるもの、やや膨らみをもつもの(35)がある。土師器坏類と甕の特徴から、住居の時期は7世紀前半~中頃と考えられるであろう。

第152号住居跡 (第143図)

第152号住居跡は、F・G-2・3グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第80号土壊と第3号不明遺構を切っている。第3号不明遺構は、風倒木痕と思われる。

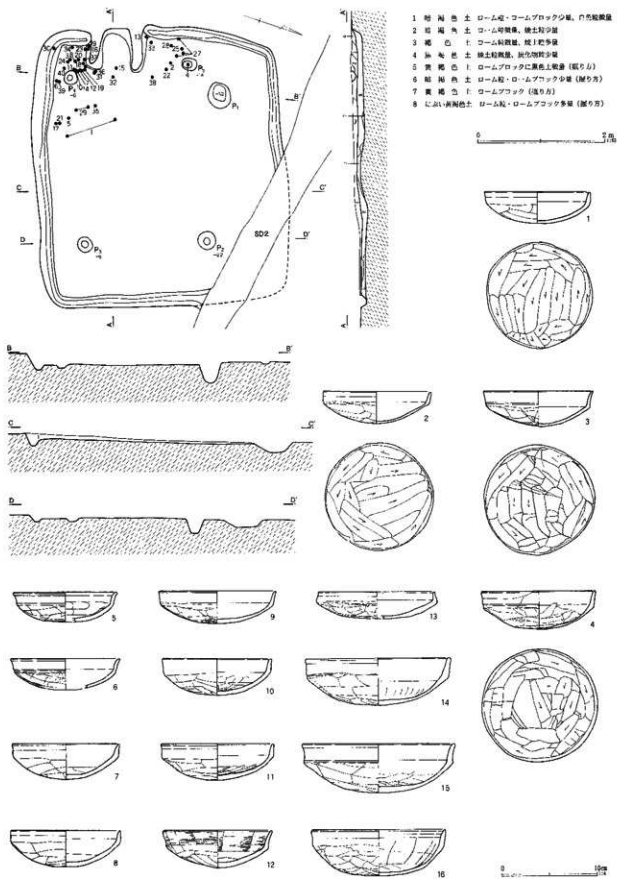
平面形は正方形で、規模は長径3.04m、短径2.88m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は平出で全体に堅く締まっていた。カマドは東壁のほぼ中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。底面の掘り込みは浅く、ほぼ底面が火床面か。埋土には焼土が多量に含まれ、第1~3層はカマド崩落土と考えられる。

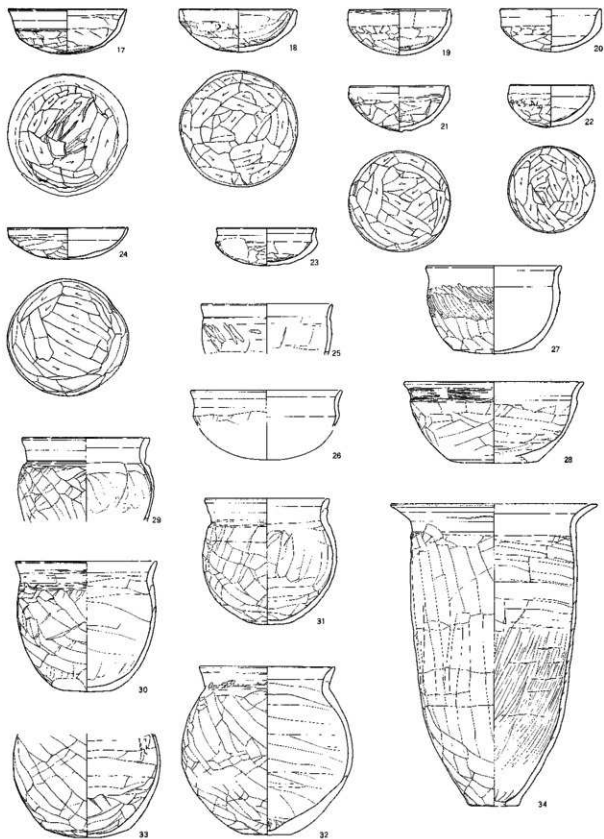
ピットは4本検出された。主柱穴配置をとるが、深さはいずれも浅い。

出土遺物は少なく、いずれも小片である(第143図)。いわゆる模倣坏(1・4・5)と北武蔵型坏(2・3)がある。模倣坏は退化形態、北武蔵型坏は口縁部が内湾気味に短く直立するタイプである。時期的には7世紀後半~8世紀初頭頃の土器群であろう。

第140図 第151号住居跡・出土遺物(1)

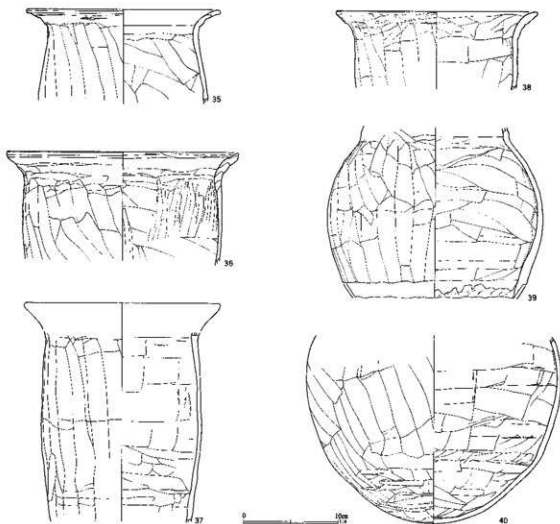


第141号 第15号住居跡出土遺物(2)



0 10cm

第142図 第151号住居跡出土遺物(3)

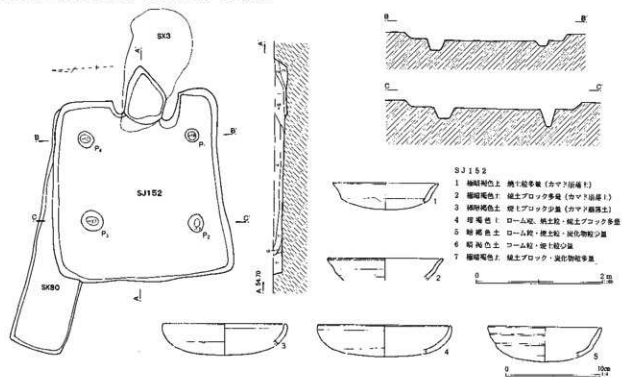


第72表 第151号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.0	3.3		A E H J	1	橙	100	No28・32 粉っぽい 無黒斑
2	坏	11.3	3.4		A E H J	1	橙	95	No45
3	坏	11.6	3.7		A H	1	橙	95	No7 粉っぽい 無黒斑
4	坏	12.0	4.0		E H J	1	橙	100	No42 無黒斑
5	坏	(10.7)	3.1		E H	1	にぶい橙	60	No29
6	坏	(11.6)	3.1		I J	1	にぶい黄褐色	45	No3
7	坏	11.2	3.7		A E H	1	橙	100	No12 粉っぽい 無黒斑
8	坏	11.5	3.8		E H	1	橙	100	No5 粉っぽい 無黒斑
9	坏	12.4	3.4		B E H	1	橙	70	カマド No17
10	坏	11.4	3.8		E H	1	橙	100	No10 粉っぽい 無黒斑
11	坏	11.8	3.8		D E H J	1	にぶい橙	100	No9 内面黒色処理
12	坏	11.4	3.9		E H	1	橙	100	No13 粉っぽい 無黒斑
13	坏	(12.0)	2.8		A D E H J	1	橙	40	No32 粉っぽい 無黒斑
14	坏	(15.5)	5.8		A E H	1	橙	100	No11 底部黒斑 内面ヘラナゲ 口縁下端沈線
15	坏	16.0	5.1		A E H	1	橙	100	No25 口縁下沈線
16	坏	(14.2)	4.8		H J	2	橙	60	カマドNo18 底部黒斑
17	坏	12.6	4.7		E H J	1	橙	90	No27 底部ヘラキズ 無黒斑
18	坏	12.3	4.5		D E H J	2	にぶい橙	100	No15・22・56

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
19	坏	10.6	4.8		BDH	1	にぶい橙	100	No.14 黒斑
20	坏	10.5	4.5		BDEH	1	橙	100	No.4
21	坏	10.4	4.8		BDHJ	2	にぶい橙	100	No.26
22	坏	8.8	4.4		BDEHJ	2	橙	100	No.40
23	坏	(10.4)	4.0		DEHJ	2	橙	90	No.19 器表面剥離 黒斑
24	坏	12.6	3.3		EHJ	1	橙	100	No.8 粉っぽい 無黒斑
25	鉢	(14.0)	5.3		BHJ	2	にぶい褐	20	No.48
26	鉢	(18.0)	3.8		HJ	2	にぶい褐	20	
27	鉢	14.2	9.2	8.2	BDEJ	2	にぶい橙	55	No.46・47・49 胴部上端粗い ミガキ
28	小型壺	(18.6)	8.5	(9.6)	AEH	1	にぶい橙	45	No.50 底部器面剥落 (二次被熱)
29	小型壺	(13.6)	8.8		BDEHJ	2	にぶい橙	40	No.30・33
30	小型壺	15.0	13.7	7.0	BDHJ	2	にぶい褐	80	No.1 器面剥落 (二次被熱)
31	小型壺	13.2	13.2		BDH	1	灰貫褐	90	No.23
32	小型壺	(14.4)	17.6	5.2	HJ	2	橙	65	No.24 胴下位二次被熱
33	小型壺		11.0	9.0	BHJ	2	にぶい橙	85	No.51 外面黒斑
34	甕	(22.0)	31.6	5.4	AHJ	2	にぶい赤褐	60	カマドNo.6
35	甕	(20.6)	9.9		HJ	2	にぶい橙	15	No.34
36	甕	(24.4)	11.5		ABDHJ	2	にぶい橙	80	カマドNo.21・23
37	甕		19.9		BDHJ	2	にぶい褐	40	No.16
38	甕	(21.0)	8.2		BHJ	2	にぶい褐	45	No.39
39	壺		17.9		BDHJ	2	にぶい橙	90	カマドNo.3
40	壺		19.7		BDHJ	2	にぶい褐	75	カマドNo.2 丸底

第143図 第152号住居跡・第80号土壌・出土遺物



第153号住居跡 (第144区)

第153号住居跡は、F-3グリッドに位置する。第154号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。カマドが並列し、主軸もほぼ一致することから第154→153号

住居跡に建て替えたものと考えられる。

平面形は横長方形で、規模は長径4.05m、短径3.04m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-75°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置

第73表 第152号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	2.1		ABD	2	橙	5	貼床
2	坏	(13.0)	2.3		DEH	2	明赤褐	5	貼床
3	坏	(14.0)	3.0		ADE	2	橙	5	
4	坏	(12.0)	3.2		ADE	3	橙	10	有段口鉢
5	坏	(12.0)	2.3		DEH	2	明赤褐	10	

され、第154号住居跡カマドと並列している。燃焼部はほぼ壁内におさまり、底面は床面を傷かに掘り込んで構築されている。煙道部は壁外に長く伸び、側壁上部は強く被熱していた。釉は白色～灰褐色系の粘土を用いて構築されていた。

ビットは7本検出されたが、いずれも浅く柱穴と見るのは無理であろう。土壌は2基検出されている。床下土層または、掘り方と考えられる。壁溝は全周する。

出土遺物は極めて多い(第145～148図)。主に覆上下層から床面にかけて、礫と共に多数の土器が投棄(放棄?)されたような状態で検出された。

器種としては、土師器環・皿・碗・鉢・小型甕・甌・甕・台付甕・壺、須恵器蓋、小型壺・甕などがある。土師器環(第145図1～28)は口縁部が内湾乃至内湾気味に直立するタイプが主体を占める。大きさは口径11cm前後の小型品が最も多く、14cm前後の中型品、16cmを越える大型品がある。皿も定量で存在し(29～42)、口縁が逆「ハ」の字状に開くものが主体となる。甕は口縁部が「く」の字状に折れ、胴部上位で膨らむものと、直線的に伸びるものがある。調整は胴部上位に横乃至斜めケズリが施される。

第74表 第153号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.0	3.3		DHJ	2	にぶい橙	75	体部上位無調整
2	坏	(11.0)	2.3		DEH	2	橙	40	体部上位無調整
3	坏	(11.0)	2.4		AD	1	明赤褐	40	体部上位無調整
4	坏	(10.0)	2.9		DEH	2	橙	30	体部上半無調整
5	坏	11.4	3.7		DHJ	2	にぶい橙	65	№6・7 体部上半無調整
6	坏	11.8	3.6		DEH	2	橙	100	№70 体部上半無調整
7	坏	(13.0)	2.7		DHJ	2	にぶい橙	15	体部上半無調整
8	坏	(11.1)	3.1		DEH	2	橙	45	体部上半無調整
9	坏	(11.6)	2.7		DHJ	3	にぶい橙	15	SJ153・154 体部上半無調整
10	坏	(12.2)	3.0		DHJ	2	橙	80	体部上位無調整
11	坏	(13.0)	3.3		DHJ	2	橙	20	№32 体部上半無調整
12	坏	(12.6)	3.3		AHJ	2	にぶい赤褐	20	体部上半無調整

須恵器蓋は身受けのかえりが付く(43)。口径11.5cm前後の環とセットになるものであろう。木野差。住居の時期は7世紀末葉～8世紀初頭頃である。

第154号住居跡 (第144図)

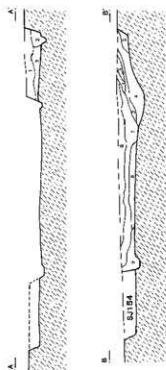
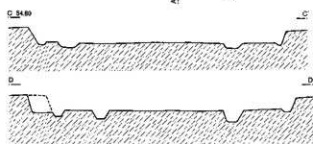
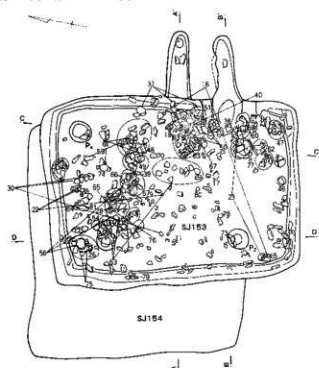
第154号住居跡は、F-3グリッドに位置する。重複する第153号住居跡に切られていた。第153号住居跡とは東壁を共有し、カマドが並列すること、土軸がほぼ一致することから、本住居跡→第153号住居跡に建て替えたものと考えられる。

平面形は正方形で、規模は長径3.64m、短径3.42m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-77°Eを示す。床面はほぼ平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置されるが、燃焼部は第153号住居跡構築段階に破壊され、遺存していなかった。煙道部は細長く壁外に伸び、側壁上部は被熱していた。

ビット・鉄溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない(第149図)。土師器の環と鉢がある。3・4は混入と思われる。重複関係からは第153号住居跡に先行するが、遺物の時期は、ほぼ同一段階と思われる。

第144区 第153・154号住居跡



SJ153

- 1 褐色土 陶器片多しブロック
- 2 褐色土 雑土ブロック (天井形跡土)
- 3 褐色土 ローム層・雑土層・白色粒少量、
雑土ブロック多量
- 4 褐色土 ローム層・白色粒少量、雑土多量
- 5 褐色土 ローム層・雑土層・白色粒少量
- 6 褐色土 ローム層・白色粒・白色粒少量、
雑土多量
- 7 褐色土 ローム層・白色粒少量、雑土多量
- 8 褐色土 ローム層・白色粒少量、ローム
ブロック少量
- 9 褐色土 コーム粒多し

SJ154 掘り方

- 1 褐色土 灰
- 2 褐色土 雑土・白色粒少量 (灰層あり)
- 3 褐色土 コームブロック・雑土・灰
- 4 褐色土 コームに骨殖土

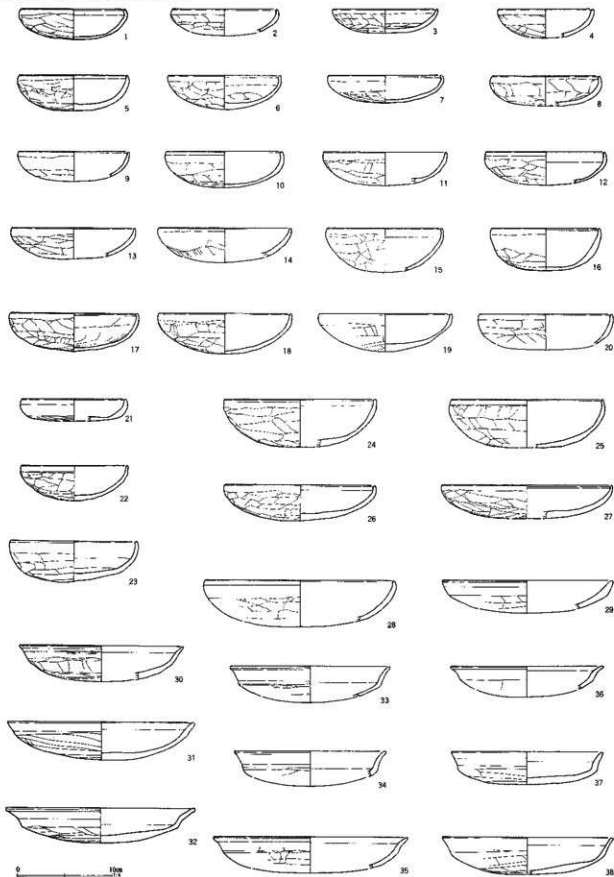
SJ154 方マド

- 1 褐色土 雑土・雑土多量、成りブロック・
雑土少量
- 2 褐色土 雑土少量
- 3 褐色土 ローム多量、ローム粒少量

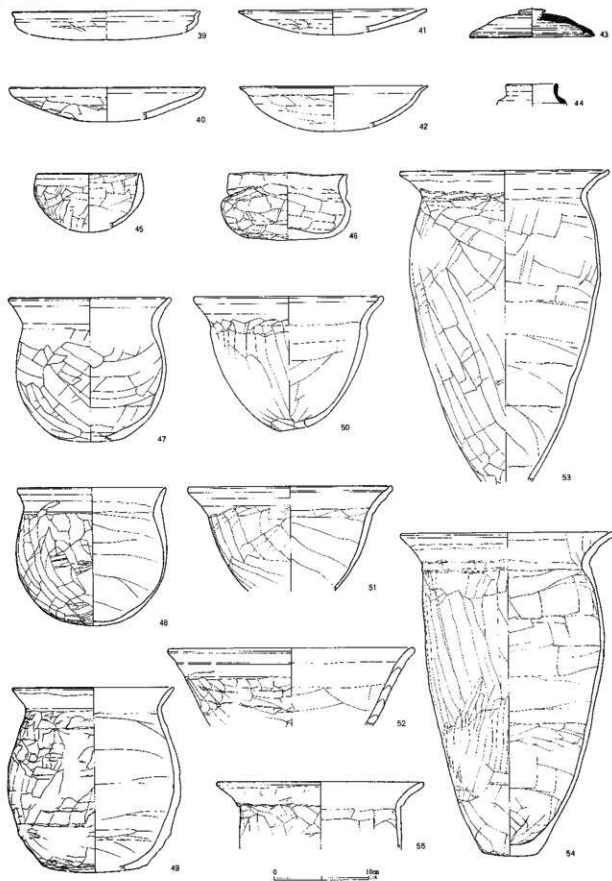
0 3m

大寄1区

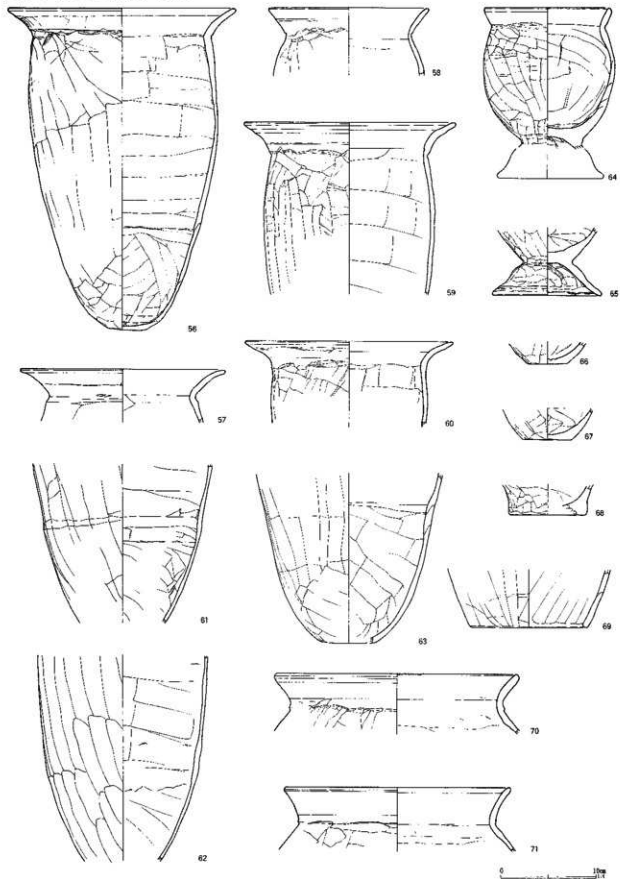
第145图 第153号住居跡出土遺物(1)



第146图 第153号住居跡出土遺物(2)



第147図 第153号住居跡出土遺物(3)



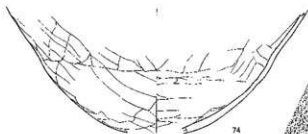
第148图 第153号住居跡出土遺物(4)



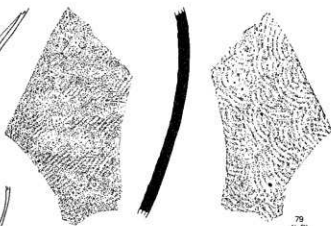
72



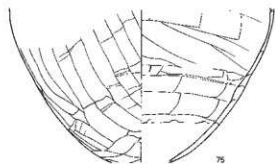
73



74



79
(1/3)



75



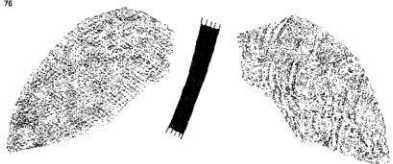
80
(1/3)



76



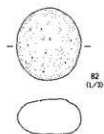
77
(1/3)



81
(1/3)



78
(1/3)



82
(1/3)



83
(1/3)

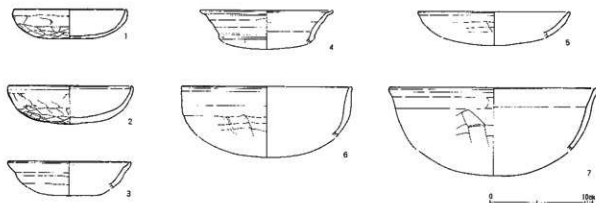


大審1区

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
13	坏	(13.0)	3.0		DHJ	2	にぶい橙	20	体部上端無調整
14	坏	(14.0)	3.0		DIIJ	2	にぶい橙	15	体部上位無調整
15	坏	(12.0)	4.5		DHJ	2	にぶい黄橙	15	口縁直下までケズリ
16	坏	11.4	4.4		DIIJ	2	橙	100	カマド No52・76 体部上半無調整
17	坏	13.6	4.0		BDHJ	2	橙	60	No49 体部上位無調整
18	坏	(14.0)	4.3		DIIJ	2	にぶい橙	30	口縁直下までケズリ
19	坏	(14.0)	3.9		ADE	2	橙	25	No73
20	坏	(14.0)	3.1		ADI	2	橙	20	体部上半無調整
21	坏	(11.0)	2.3		DEH	2	橙	20	体部上半無調整
22	坏	11.4	3.7		BDIIJ	2	にぶい橙	60	No4・5・46 体部上端無調整
23	坏	13.4	4.3		DEHJ	2	にぶい橙	40	No52・62 体部上位無調整
24	坏	(16.0)	5.0		DEHJ	2	橙	30	口縁直下ケズリ
25	坏	(16.0)	5.0		DEHJ	2	にぶい橙	20	体部上位無調整
26	坏	16.0	3.8		BDHIJ	2	橙	100	No1 口縁直下無調整
27	坏	(18.0)	3.5		DHJ	2	にぶい褐	30	SJ153+154 体部上位無調整
28	坏	(20.0)	4.3		DHJ	3	橙	10	No20 体部上位無調整
29	皿	(16.0)	2.9		DEH	2	橙	10	
30	皿	15.4	3.6		DHJ	2	にぶい褐	45	No8・12・27
31	皿	(19.4)	4.5		DEH	2	橙	65	No15・76・81
32	皿	(20.0)	4.2		EHIJ	2	にぶい橙	20	カマド 口縁直下からケズリ
33	皿	(17.0)	3.1		HJ	2	にぶい黄橙	10	口縁直下からケズリ
34	皿	(16.0)	2.6		ADH	1	橙	10	
35	皿	(20.6)	3.3		DHJ	2	にぶい黄橙	10	口縁直下僅かに無調整
36	皿	(16.0)	2.4		ADI	2	明赤褐	15	口縁直下からケズリ
37	皿	(15.8)	3.4		ADE	1	橙	50	口縁直下からケズリ
38	皿	(18.0)	3.9		ADI	2	橙	20	No84 口縁直下からケズリ
39	皿	(20.0)	2.3		DHJ	2	にぶい橙	10	No17
40	皿	20.8	3.3		ACDHI	1	にぶい橙	70	No78 口縁直下からケズリ 黒斑
41	皿	(19.7)	2.3		DE	2	橙	25	口縁直下からケズリ
42	皿	(20.0)	4.3		DHJ	2	橙	10	体部上端無調整
43	須恵瓷	(13.2)	3.3		IIJ	1	灰	30	木野原 つまみ欠落
44	須恵小型壺	(5.6)	2.4		HJ	1	青灰	25	木野原か
45	碗	(12.0)	5.8		DHJ	2	にぶい黄橙	25	黒斑あり
46	鉢	12.4	7.1	9.4	BDEHIJ	2	にぶい褐	100	No56 妙な成整形 歪みあり 黒斑
47	小型甕	(16.9)	15.0	7.0	DEH	1	にぶい橙	65	No64 二次被熱により底部器面剥落
48	小型甕	15.6	14.5		DHJ	2	にぶい橙	90	No2・77 底部一側部黒斑
49	小型甕	17.2	19.5	(10.0)	DHJ	2	にぶい褐	80	No16・40 胴部下位被熱し、器面剥落
50	甕	(20.0)	14.1	2.8	DEJ	2	橙	30	No69・80・82 カマド
51	甕	21.6	11.0		HJ	3	にぶい赤褐	70	No80
52	鉢	(26.0)	8.2		ADEH	2	にぶい橙	15	内面黒色
53	甕	22.2	32.5		IJ	2	にぶい橙	70	No16・18・21・22・47
54	甕	22.7	33.9	5.8	DEH	2	にぶい褐	90	No2
55	甕	(22.0)	7.1		DEHJ	2	橙	80	No19
56	甕	24.2	33.7	4.2	DHJ	2	橙	70	No1・2・18・22 SJ154
57	甕	21.6	5.6		DEH	3	にぶい褐	60	No18・19・44
58	甕	(17.0)	7.0		DEHJ	2	にぶい橙	30	
59	甕	22.4	18.0		BDHJ	2	にぶい橙	70	No11・16
60	甕	(22.0)	9.0		DHJ	2	にぶい橙	30	No58・59・61
61	甕	16.7			AHJ	2	橙	40	No13・14・16・40
62	甕	21.6			BHJ	2	にぶい褐	65	No26・58・61・63 SJ154
63	甕	17.6	(5.8)		DEH	2	灰褐	30	No78
64	台付甕	13.2	14.8		ADE	2	にぶい橙	90	No3 外面二次被熱 器面剥落
65	台付鉢	7.1	11.5		DEHJ	2	にぶい橙	80	No53

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
66	鉢		2.3	4.1	H J	2	黄灰	60	No.18・40 底部情内彩に垂む
67	鉢		3.3	5.0	II J	2	にぶい褐	70	No.23
68	鉢		3.3	(8.0)	DH J	2	黄灰	35	外面ナデ、混入か
69	甌		6.1	(12.2)	DE II J	2	にぶい赤褐	15	No.78
70	壺	(26.0)	6.3		DE H J	2	にぶい橙	20	No.8・48
71	壺	(24.0)	6.8		II J	2	橙	15	カマド
72	壺	18.2	6.5		H J	2	にぶい橙	70	No.清減
73	壺	(22.0)	7.0		BE H J	2	にぶい橙	25	No.36
74	壺		13.0		H J	2	にぶい褐	45	No.12・13
75	壺		16.0		DE H J	2	にぶい橙	45	No.1
76	壺		2.5	(9.0)	H J	2	橙	20	No.18
77	須恵焼				II J	1	灰	破片	平行叩き+同心円当て具 秋田産
78	須恵焼				H J	1	灰	破片	末野産か・平行叩き後ナデ
79	須恵焼				II J	1	灰	破片	末野産 縦斜格子叩き+同心円当て具
80	須恵焼				H J	1	灰	破片	平行叩き+同心円当て具 秋田産?
81	須恵焼				II J	1	灰	破片	末野産 縦斜格子叩き+同心円当て具
82	軽石	長5.70cm	最大幅5.10cm	厚さ2.30cm	重量55.30g	角閃石安山岩			
83	不明土製品	長4.65cm	最大径2.95cm	厚さ0.80cm	重量11.93g	にぶい黄橙			

第149図 第154号住居跡出土遺物



第75表 第154号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.0	3.1		DH J	2	橙	45	口縁上位無調整
2	坏	13.4	4.0		DH J	2	にぶい橙	50	体部上位無調整
3	坏	(20.0)	2.8		DE	2	橙	10	カマド 体部上位無調整
4	坏	(14.0)	3.4		E II	2	明赤褐	10	
5	坏	(16.0)	5.2		DE	3	にぶい橙	20	
6	坏	(16.0)	2.7		DE	2	橙	10	
7	鉢	(22.0)	6.5		ADE	2	にぶい橙	10	

第155号住居跡 (第150㉒)

第155号住居跡は、F-4グリッドに位置する。第156号住居跡と第8号溝跡に切られていた。

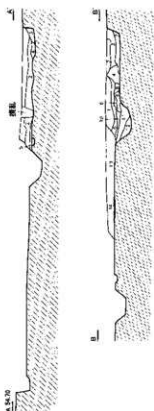
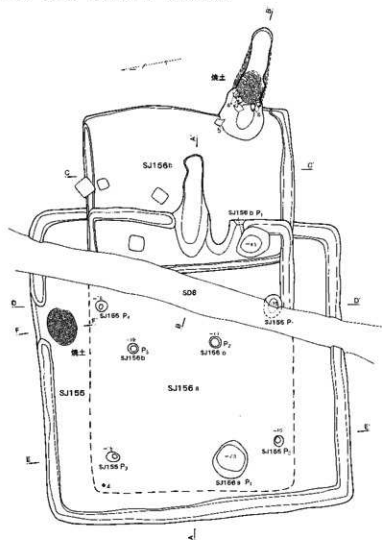
平面形は正方形で、規模は長径4.98m、短径4.91m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-8°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは当初東壁の中央に設置されたものと考えたが、出土遺物などからこれは

第156b号住居跡のものかと判断した。一方、北壁の壁溝が切れる部分の内側に焼土の堆積箇所が認められたため、ここにカマドが設けられたものと考えた。ほとんど痕跡をとどめておらず、カマドの具体的な構造は不明である。

ピットは4本検出された。Pit 1~4は支柱火配置を採るが、深度は浅い。壁溝はカマドが存在したと思

第150図 第155・156号住居跡・出土遺物(1)



SJ156a

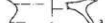
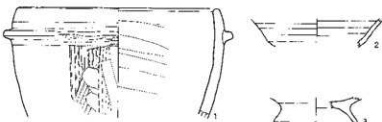
- 1 暗褐色土 焼土粒多量、焼十粒ブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒、焼土粒少量
- 3 暗褐色土 焼土粒多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒少量
- 5 暗褐色土 ローム粒少量

C 6470



SJ156b

- 1 暗褐色土 焼土少量、灰褐色粘土多量
- 2 暗褐色土 焼土、焼土粒多量、焼十粒ブロック少量(瓦片状)
- 3 暗褐色土 焼土、焼土粒多量
- 4 暗褐色土 焼土、焼土粒多量、灰褐色粘土少量
- 5 暗褐色土 焼土粒少量
- 6 暗褐色土 焼土粒少量
- 7 暗褐色土 焼土、焼十粒ブロック、灰褐色粘土少量
- 8 暗褐色土 焼土ブロック多量(瓦片状)
- 9 暗褐色土 焼土、焼土粒、灰褐色粘土多量
- 10 暗褐色土 焼土少量、灰、灰褐色粘土
- 11 暗褐色土 ローム粒少量、焼土少量(瓦片状)
- 12 暗褐色土 ローム、ロームブロック多量、灰褐色粘土少量
- 13 暗褐色土 ローム、ロームブロック少量、焼土粒多量
- 14 暗褐色土 灰褐色粘土少量(瓦片状?)



0 10cm

われる部分を除き全周する。

出土遺物は少なく、遺物の一部は重複する第156号住居跡に帰属するものが含まれている(第150・151図)。第151図6の上師器環が、唯一本住居跡から出土した。やや扁平化した丸底風の底部で、体部上半は無調整である。住居跡の時期は8世紀中頃と考えられる。

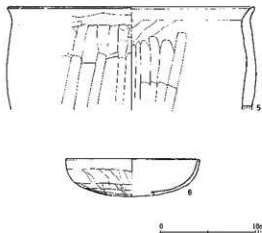
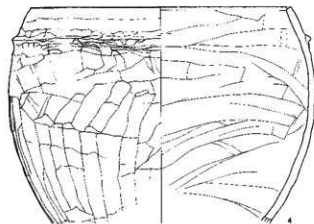
第156号住居跡(第150図)

第156号住居跡は、F-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第155・157号住居跡を切り、第8号溝跡に切られていた。一度建て替えた住居跡と考えられ、古段階の住居跡を第156b号住居跡、建て替え後のそれを第156a号住居跡とする。北壁と南壁ラインをそのままに、東から西に平行移動したものと考えられる。

第156a号住居跡は、平面形は長方形と推定されるが、西半部は規模が確定できない。出土遺物から見て、第155号住居跡西壁付近まで延びていたものと推定される。推定規模は長軸長4.50m、短軸長3.30m、深さ0.15mである。主軸方位は、N-112°-Eを示す。

カマドは東壁の南寄りに設けられている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、細長く延びる煙道部に続く。

第151図 第155・156号住居跡出土遺物(2)



第76表 第155・156号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	羽釜	(21.2)	11.5		BDEJ	2	明黄褐色	10	SJ156b
2	(高台) 碗		2.9		EII	2	橙	10	SJ156a ロクロ上師器
3	高台碗		2.7	(8.6)	A E H	2	橙	15	SJ156b ロクロ上師器
4	羽釜	(27.6)	22.7		HJ	2	にぶい褐色	30	SJ156a No.1
5	鉢	(26.0)	10.8		IJ	2	にぶい赤褐色	10	SJ156b No.2 胴部上端無調整
6	環	(14.0)	3.9		E H J	2	橙	20	SJ155 体部上端無調整

燃焼部から煙道部の底面はほぼ平坦で、側壁は被熱していた。ピットは3本検出された。Pit 1は第155号住居跡床面を切っており、本住居跡に伴う可能性が高い。西壁際に存在したカマド対向ピットかもしれない。Pit 2・3は伴うか否か不明。深度は浅い。壁溝は住居西半で未確認であるが、本来巡っていた可能性が高い。第156b号住居跡は、第157号住居跡を切り、第156a号住居跡及び第8号溝跡に切られていた。平面形は横長の長方形で、規模は長径3.28m、短径2.61m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-112°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南端に設置され、住居の主軸に対してやや傾いている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、細長く延びる煙道部に続く。燃焼部から煙道部にかけての側壁と燃焼部底面は強く被熱していた。焚口部南端には軸石が直立した状態で遺存している。焚口部前面はピット状の掘り方を持つ。

ピットは1本西壁際の南端に掘り込まれていた。住居に伴うカマド対向ピットと考えられる(Pit 1)。他のピットは中世段階の所産である。

出土遺物は少ない。第150図2のロクロ上師器高台碗と第151図4の羽釜は第156a号住居跡から出土した。

羽釜は非ロクロ整形で、胴部は粗いハケメ調整の後、ヘラケズリが施されている。第150図1の羽釜と3のロクロ土師器高台碗、第151図5の甕は第156b号住居跡出土である。羽釜と甕も非ロクロ整形である。住居の時期は11世紀中頃に位置付けられる。

第157号住居跡 (第152図)

第157号住居跡は、F-4グリッドに位置する。第158号住居跡にカマド上面を切られ、第156号住居跡に住居北西部を切られていた。

平面形はほぼ正方形で、規模は長径2.74m、短径2.49m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-101°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で、カマド前面を中心に堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を掘り込んで構築されている。底面はほぼ平坦で、床面を僅かに掘り込んでいた。カマド脇の南東コーナー部にはビットが1本確認された。貯蔵穴であろう。他にビットは5本検出されたが、伴う可能性は低い。土壌は3区検出されている。1号土壌はカマド前面の床下土壌で上面は貼床されていた。2号土壌はカマド対向ビットの可能性もあるが、深さは18cmと浅い。3号土壌は、重複する第156b号住居跡のカマド前面の掘り方である。

出土遺物は極めて少なく、カマド内から羽釜が1点検出されたに留まる(第152図2)。2は土師質の羽釜で、形態は整っておりロクロ整形か。時期は不明確であるが、羽釜の存在から10世紀後半頃と推定される。

第158号住居跡 (第152図)

第158号住居跡は、F-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第157号住居跡を切り、第2号溝

跡に切られていた。第159号住居跡との関係は、当初第159号住居跡重複部にカマドが存在しないことから、本住居跡の方が古いものと考えた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長径2.63m、短径2.12m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-76°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ビットは1本南西コーナー付近から検出された。深さ36cmで、規模や位置等からカマド対向ビットとなる可能性がある。

出土遺物は土師器口縁部小片(第152図1)と円筒埴輪片(3~6)が検出されたのみである。3は口縁部、4は透孔部、5は突帯(剥落)部、7は底部である。埴輪片は住居に伴うものではない。遺構の切り合い関係から見て、11世紀前半代の住居跡と考えておきたい。

第159号住居跡 (第153図)

第159号住居跡は、F-4・5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第158・160号住居跡を切り、第2号溝跡・第85号土壌に切られていた。

平面形は横長方形で、東壁の北端に張り出し状の施設を伴う。比較的大型の住居跡で、規模は長径6.66m、短径5.85m、深さ0.21mを測る。主軸方向はN-79°-Eを示す。

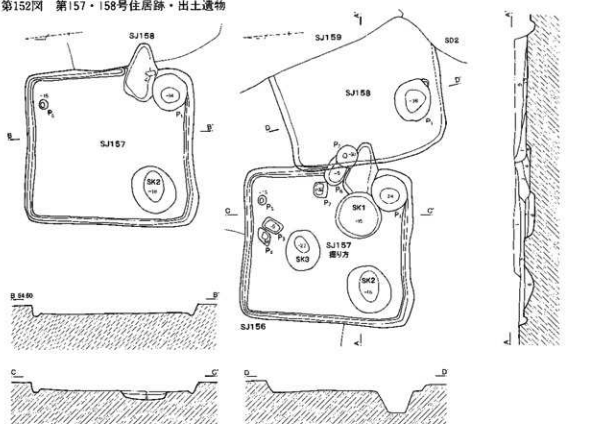
床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。住居中央からやや西よりの床面には、4箇所被熱した痕跡が残されていた。

カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部から煙道部は壁を切り込んで構築されている。燃焼部底面と側壁上面は強く被熱し、両側壁には片岩系の板石が据え

第77表 第157・158号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	1.5		E	2	橙	5	SJ158
2	羽釜	(22.0)	7.0		DHJ	1	浅黄橙	20	SJ157 Na.1 胴部ナゲ 土師質
3	円筒埴輪				DEHJ	2	にぶい赤褐	破片	SJ158 口縁部片
4	円筒埴輪				DHJ	2	橙	破片	SJ158 円形透孔
5	円筒埴輪				DEHJ	2	にぶい赤褐	破片	SJ158 突帯直下
6	円筒埴輪				DEHJ	2	橙	破片	SJ158
7	円筒埴輪				DHJ	2	にぶい褐	破片	SJ158 底部片

第152図 第157・158号住居跡・出土遺物



SJ157

- 1 埴輪色土 埴土・埴土粒・白磁粒少量
- 2 埴輪色土 埴土粒・ロームブロック少量
- 3 埴輪色土 赤褐色埴土・埴土粒・埴土粒少量
- 4 埴輪色土 ロームブロック・埴土粒少量、埴土粒少量

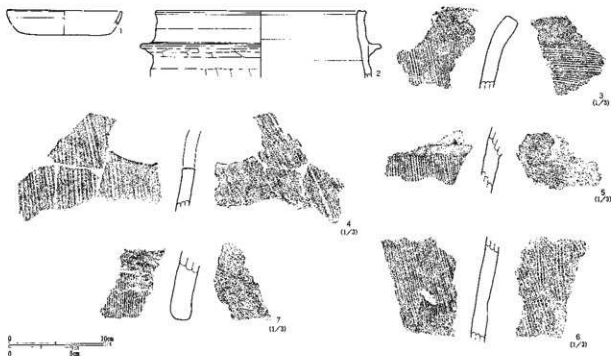
5 埴輪色土 埴輪色土少量、埴土粒・埴土粒少量

- 6 埴輪色土 ローム粒少量、埴土粒少量 (SK2)
- 7 赤褐色土 埴土粒 (SK1)
- 8 埴輪色土 ローム粒・埴土粒少量 (SK1)

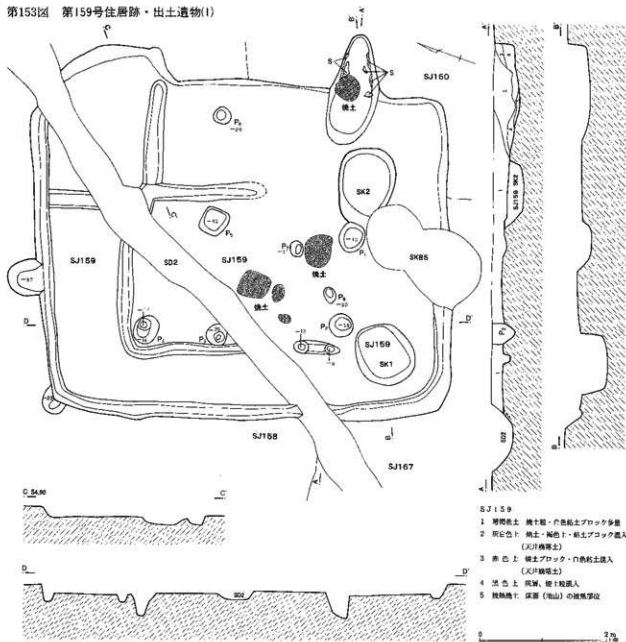
SJ158

- 9 埴輪色土 埴土粒・ローム粒少量、埴土ブロック少量
- 10 埴輪色土 ローム粒・赤褐色埴土、ロームブロック少量
- 11 埴輪色土 埴土粒・埴土粒少量、埴土粒少量

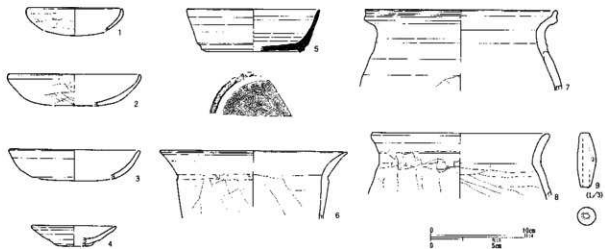
0 2m



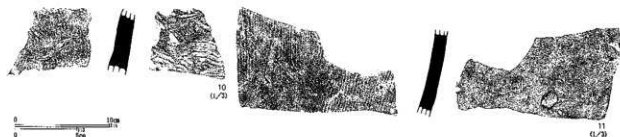
第153図 第159号住居跡・出土遺物(Ⅰ)



- SJ159
- 1 黄褐色土 焼土粒・白色粘土ブロック少量
 - 2 灰白色土 焼土・褐色土・粘土ブロック混入
(XIV層粘土)
 - 3 赤色土 焼土ブロック・白色粘土混入
(XIV層粘土)
 - 4 淡色土 灰質、硬土混入
 - 5 焼熟焼土 灰質(火山)の焼熟灰



第154図 第159号住居跡出土遺物(2)



第78表 第159号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(10.0)	2.4		DEHJ	3	橙	15	
2	坏	(14.0)	3.3		DEH	2	浅黄橙	15	
3	坏	(13.8)	3.0		ADH	2	橙	10	
4	小皿	(8.9)	2.1	(3.5)	EH	1	橙	30	SK1 ロクロ+脚器
5	須恵高台坏	(14.0)	4.5	(11.0)	H	1	灰白	30	底部回転ケズリ 秋間産か
6	甕	(20.0)	7.0		EHJ	2	にぶい橙	10	カマド
7	甕	(20.0)	8.5		HJ	2	にぶい橙	15	SK1 ロクロ整形
8	甕	(19.0)	6.9		EHJ	2	にぶい橙	15	粗い胎土 胴部タケズリ
9	上鉢	長4.30cm 最大径1.45cm 孔径0.40~0.55cm 重量8.15g 灰黄褐							
10	須恵甕				H1J	1	灰	破片	カマド 未野産 外面平行印き
11	須恵甕				FHJ	1	灰	破片	カマド 南北産 外面平行印き

られた状態で残されていた。カマドの補強施設と考えられる。

ピットは8本検出されているが、確実に伴うものはない。土壌は2基検出された。1号土壌はカマドに対面する南西コーナー部にあり、住居跡に伴うものである。カマド対向ピットであろう。2号土壌は上面に貼床されており、床下土壌と考えられる。

壁溝は二重に巡っている。外側の壁溝は北・西壁と南壁の西半から検出された。内側のそれは東壁と南壁を共有する形で、相似形に巡っていた。上面に貼床されていたため、拡張前の住居壁溝と考えられる。その他、北壁から住居の中心部に向かって、溝が1条検出された。間仕切り溝か。

東壁北端の拡張部は、当初土壌の重複と考えたが、床が平坦に続き、断面観察によっても明確な切り合いが見られなかったため、住居に伴う施設であるとの結論に達した。

出土遺物は少ない(第153・154図)。第153図4のロクロ土脚器小皿と7のロクロ整形甕は、1号土壌から出土したもので、住居に伴う遺物と考えられる。8の

厚裏は極めて粗い胎土で、胴部は縦方向のケズリ調整が加えられている。覆土出土であるが、やはり遺構に伴うものと考えられる。1・3、5・6・10・11は混入と思われる。5の須恵器坏Bは群馬産、おそらく秋間産と思われる。底部は回転ヘラケズリ調整される。住居の時期は11世紀前半~中頃と考えられる。

第160号住居跡(第155図)

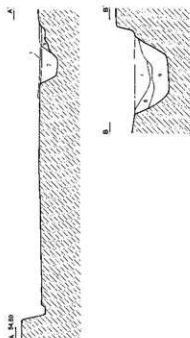
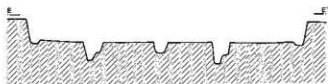
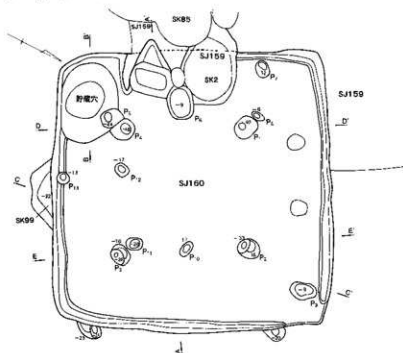
第160号住居跡は、F-5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第99号土壌を切り、第159号住居跡に上面を削平されている。

平面形は整った正方形で、規模は長さ4.43m、短径4.35m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-117°-Wを示す。

床面は平坦で全体的に堅く締まっていた。カマドは南西壁の南寄りに設置されているが、上面が削平されており、詳細は不明である。袖部は左袖基部が僅かに残り、右袖はほとんど遺存していなかった。

ピットは13本検出された。Pit 1~5・11は主柱穴と考えられる。Pit 3・11、Pit 4・5は2本近接して存在し、建て替えがあったことを示している。

第155図 第160号住居跡・第99号土壇・出土遺物



SJ160 カマド

- 1 母褐色土 灰層、焼土利混入
- 2 母褐色土 ローム塊・焼土塊混入 (振りかき?)
- 3 褐色土 ローム粒・焼土粒・柱土粒混

SJ160

- 4 母褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、焼土粒多量
- 5 母褐色土 ローム塊混、焼土少量
- 6 母褐色土 ローム粒少量

SJ160 貯蔵穴

- 7 母褐色土 焼土粒多量、ローム粒少量
- 8 黒褐色土 灰多量、焼土塊少量、ロームブロック混
- 9 褐色土 ローム粒混 少量、焼土粒多量



第79表 第160号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.0)	3.5		DHJ	2	橙	15	体部上端無調整
2	坏	(12.0)	2.5		AH	1	橙	15	
3	坏	(11.0)	3.0		DEHJ	2	にぶい橙	20	器面荒れ
4	須恵長頸瓶		4.3		BHJ	1	灰	15	未野産か
5	台付甕		4.6		A BHJ	2	橙	60	
6	甕			(5.0)	HJ	2	にぶい橙	30	
7	壺	(18.0)	5.8		B DHJ	2	橙	10	
8	甕	(22.0)	9.4		B DHJ	2	にぶい橙	10	
9	須恵壺				H I J	1	灰黄	破片	未野産 外面縦格子叩き 内面同心円書て具

貯蔵穴はカマド左脇の南コーナー部に設けられている。楕円形で長径1.20m、深さ0.55mである。

出土遺物は少なく、小片がほとんどである(第153図)。小振りの土師器模倣灰(3)や、内屈口縁坏(1)と土師器長頸瓶等がある。住居の時期は7世紀後半～末葉前後であろう。

第161号住居跡(第156図)

第161号住居跡は、F-6グリッドに位置し、第4号溝跡を切って構築されていた。

平面形は正方形で、規模は長径3.20m、短径2.76m、深さ0.27mを測る。主軸方向はN-83°Eを示す。

床面は平坦で、全体に堅く踏みしめられていた。カマドは東壁の南端に設置され、燃焼部は壁を切り込んで構築され、細長く伸びる煙道部に続く。燃焼部から煙道部にかけての側壁上面は良く被熱していた。燃焼部底面は一段低く掘り込まれていたが、これは掘り方で、火床面は第4層下面が相当する。焚口部付近は中世のビットによって攪乱を受けていた。

ビットは8本検出された。Pit 1は、カマドに対面する南西コーナーに掘り込まれ、深さ24cm。カマド対向ビットと考えられる。Pit 2はPit 1の北側に接して掘り込まれている。形態や深さが近似するが、上面に貼床が認められ、Pit 1開口時には併存していたものと考えられる。他のビットは住居に伴う可能性は低い。

出土遺物は少ない(第156図)。1は灰釉陶器段皿で、床面から約3cmほど浮いた位置で、裏返しの状態出土した。口縁部外面にへら状工具による刻みがあり、輪花碗の可能性が高い。灰釉は濃く掛けて、内面

は降灰が掛かり、重ね焼きされた器種の高台範囲のみ灰が抜けている。底径は段皿のそれよりも小さく、段皿とセットになる高台碗と共に焼成されたものと推定される。底部は回転糸切りで高台は低い。東壁産。丸石2号窯式段階か。2はロクロ土師器高台碗、3は無台碗で、内面ミガキと黒色処理が施されている。Pit 1出土。4はロクロ整形甕で、底部は回転糸切り。胴部外面はナデ調整される。5は須恵質の瓶。胎土は粗く厚手の作り。住居の時期は11世紀前半頃であろう。

第162号住居跡(第157図)

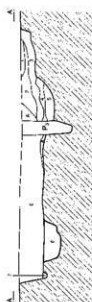
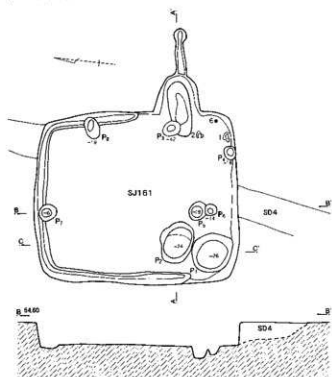
第162号住居跡は、調査区西端のG-2・3グリッドに位置する。南西コーナー付近は調査区外に伸びている。第163号住居跡及び第9号溝跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は正方形で、規模は長径3.90m、短径3.40m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-91°Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築される。袖部は流失しており、明確に検出できなかった。

住居中央部から土塊が2基検出された。上面には貼床が施され、理上はロームブロックを多量に含む埋め戻し上で、床下土層と考えられる。壁溝はカマドの北側の壁沿いに検出された。ビットは検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・皿・甕、須恵器皿・高台碗・甕などがある(第157図3・4・6～22)。土師器皿(6)は重複する第163号住居跡からの混入遺物と思われる。また、須恵器甕(18～20)も混入か。須恵器皿(7)、高台碗(10)、土師器甕(17)はカマド内から出土した。須恵器供膳器は全て未野産である。出土遺物から、住

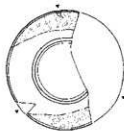
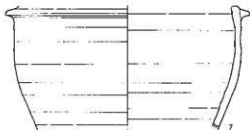
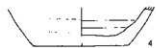
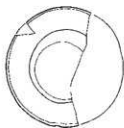
第156図 第161号住居跡・出土遺物



SJ161

- 1 陶器色: 下層単焼 (天戸焼落上)
- 2 陶器色: ロームブロック・粘土ブロック多量
- 3 陶器色: 焼土ブロック多量, 灰少量 (不丹赤土)
- 4 陶器色: 灰緑, 粘土・炭化物多・灰黒入
- 5 陶器色: ローム・粘土・灰褐色土少量, 膠り方
- 6 陶器色: ロームブロック混入, 人為的堆積成し
- 7 陶器色: ローム・地層色土混入, 壁層上
- 8 陶器色: ロームブロック混状 (ピット跡)

0 2m



0 5cm

第80表 第161号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	灰釉段皿	12.4	2.1	6.8	H J	1	灰白	70	No.1 灰釉漬け掛け 輪花 東濃産 丸石2号室式
2	高台碗		2.8	6.6	A E H J	2	にぶい黄橙	90	No.2 ロクロ土師器
3	碗	(16.0)	5.9	10.4	H J	2	にぶい黄橙	60	Plt 1 内面ノガキ→黒色処理
4	甕		4.0	(10.0)	A B E I J	3	にぶい赤褐	25	底部回転糸切り ロクロ整形
5	須恵瓶		8.0	(12.0)	E H J	2	灰白	20	在地産 焼き甘い 混入
6	鉢	(22.0)	7.3		E H J	2	にぶい黄褐	5	
7	羽釜		12.7		E H I J	2	橙	10	No.3 ロクロ整形 土師質 混入?
8	土鉢	長(2.05)cm 最大径1.14cm 孔径0.35cm 重量1.79g にぶい黄橙							
9	土鉢	長4.60cm 最大径1.15cm 孔径0.35cm 重量4.29g にぶい黄橙							

居の時期は9世紀後半と考えられる。

第163号住居跡 (第157図)

第163号住居跡は、G-2 グリッドに位置する。住居西半は調査区外に延び、南側は第162号住居跡に切られていたため、形態や規模などの詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長径2.95m、短径1.83m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-45°-Wを示す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。壁溝は一部を除き巡っていた。ピットは壁に掛かって1本検出されたが、遺構に伴うものではない。

出土物は少なく、土師器が3点検出されている

(第157図1・2・5)。また、重複する第162号住居跡から出土した皿(第157図6)も本住居跡に帰属する可能性が高い。1・2は混入かもしれない。5の大振りの坏と6の皿を基準に7世紀末葉～8世紀初頭頃の住居跡と考えておきたい。

第164号住居跡 (第159図)

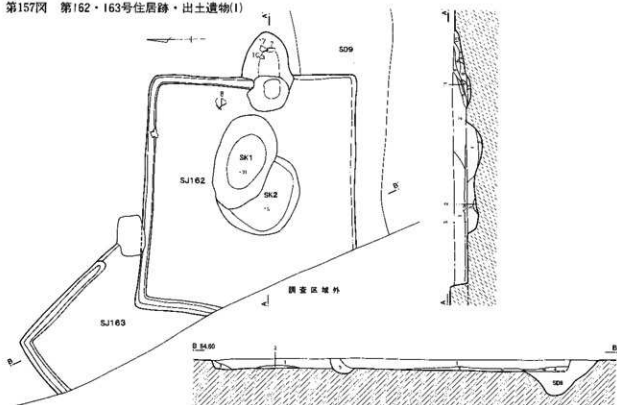
第164号住居跡は、F・G-4 グリッドに位置する。第8号溝跡が北西コーナー部を掠めている。

平面形は正方形で、規模は長径3.66m、短径3.53m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-87°-Eを示す。床面は概ね平坦で、カマド前面から住居中央付近が堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置さ

第81表 第162・163号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.8)	3.0		A H	1	にぶい橙	20	SJ163 粉っぽい
2	坏	(11.0)	2.7		D E H	2	橙	25	SJ163
3	坏	(14.0)	3.4		A D H	2	にぶい橙	10	SJ162
4	坏	(12.6)	3.2		A D H	2	にぶい赤褐	15	SJ162
5	坏	(18.0)	5.2		D E H	2	にぶい橙	13	SJ163
6	皿	(19.2)	4.3		D E H J	3	橙	30	SJ162
7	須恵皿	(15.3)	2.5	6.8	H I J	2	褐灰	60	SJ162 カマド No.3 末野産
8	須恵皿	15.4	2.7	7.0	B H I J	2	にぶい橙	80	SJ162 No.2 末野産
9	須恵高台碗	(16.0)	6.2	(6.8)	H I J	1	灰	25	SJ162 末野産
10	須恵高台碗			7.7	B H I J	1	灰	80	SJ162 No.1 末野産
11	須恵高台碗	(17.0)	6.7		H I J	1	灰	20	SJ162 末野産 高台割離
12	須恵高台碗	(12.8)	5.2	(6.8)	H I J	1	暗青灰	30	SJ162 末野産
13	須恵(高台)碗	(13.0)	4.4		H I J	1	灰	15	SJ162 末野産
14	須恵(高台)碗	(13.8)	4.8		H I J	1	灰	15	SJ162 末野産
15	甕	(18.4)	9.9		A D E H	2	にぶい褐	15	SJ162
16	甕	(16.0)	7.0		A E H J	2	にぶい褐	35	SJ162
17	甕	(18.0)	9.0		A D E H J	2	にぶい褐	15	SJ162 カマド No.2
18	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ162 末野産 平行叩き→同心円出て具
19	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ162 末野産 平行叩き→同心円出て具
20	須恵長頸瓶				H J	1	褐灰	破片	SJ162 産地不明(東金子産?) 割部カキ目
21	須恵甕				I J	1	灰	破片	SJ162 群馬(碓氷産?) 縦割り叩き後ナデ
22	土鉢	長(3.15)cm 最大径1.50cm 孔径0.30cm 重量6.02g にぶい赤褐 SJ162							

第157図 第162・163号住居跡・出土遺物(1)

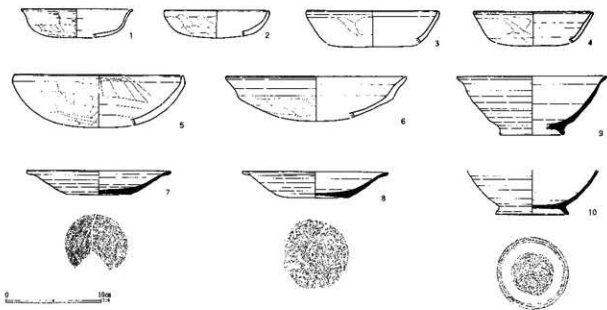


SJ162

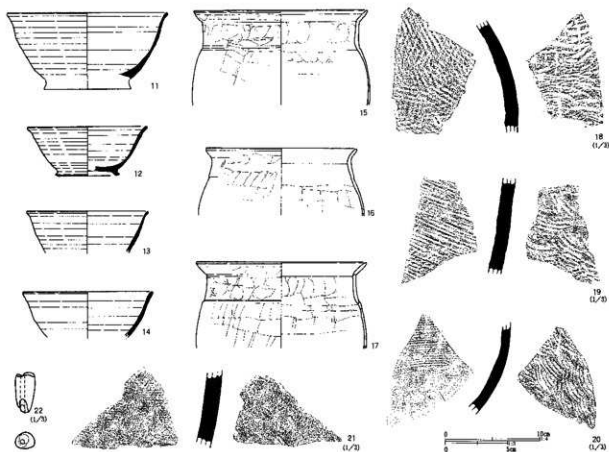
- 1 暗褐色土 焼土・焼土粒・炭化物粒少量、炭屑
- 2 暗褐色土 焼土粒多量、焼土ブロック少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量、粘土片
- 4 暗褐色土 灰褐色焼土多量、焼土粒少量
- 5 暗褐色土 灰褐色焼土・炭土粒多量
- 6 灰褐色土 ブロック焼土・炭土粒、灰片層状
- 7 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量、粘土少量
- 8 黒色土 炭化物粒・灰多量、焼土粒・焼土ブロック少量
- 9 暗褐色土 灰褐色焼土・焼土粒少量
- 10 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量、炭化物粒少量

- 11 暗褐色土 焼土粒少量
 - 12 暗褐色土 11層より厚い、11層に近状
- SJ163
- 1 暗褐色土 ローム・ロームブロック多量、粘土少量
 - 2 暗褐色土 焼土・焼土ブロック、炭化物粒少量
 - 3 暗褐色土 ローム・ローム粒・焼土・焼土粒多量、炭化物粒少量
- SJ163
- 1 暗褐色土 焼土・焼土粒・白炭粒少量
 - 2 暗褐色土 焼土粒
 - 3 暗褐色土 焼土多量、焼土ブロック少量

0 2m



第158図 第162・163号住居跡出土遺物(2)



れ、燃焼部は壁を僅かに掘り込んでいる。袖部は流失、または取り外されたものと思われ、検出されなかった。ピットは9本検出されたが、住居に伴う柱穴は不明確である。また、住居中央部の床面下から土塚が1基検出された(SK1)。床下土塚と思われる。壁溝は途切れている。

出土遺物は土師器・環・皿・甕・壺がある(第159図)。土師器は口縁部が内湾するものと、直立するものがあるが、後者が基準となろう。住居の時期は8世

紀前半頃と考えられる。

第165号住居跡(第160図)

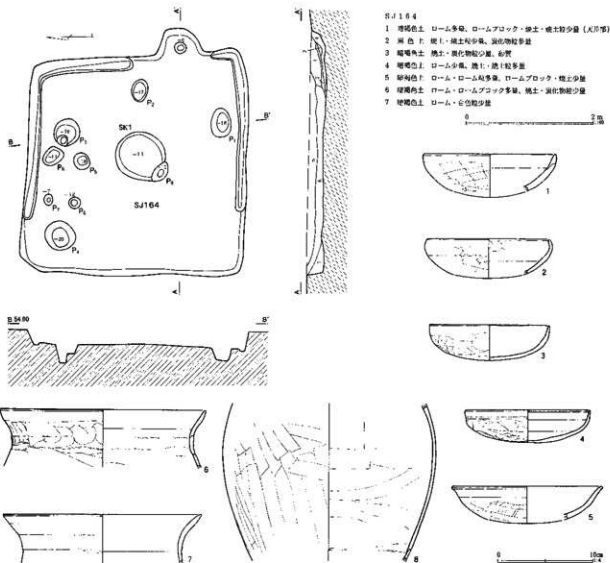
第165号住居跡は、F・G-4グリッドに位置する。第2号溝跡が切断し、西壁部は第86号土塚、カマド先端部は第158号住居跡によって切られているが、遺構の規模や形態は判明する。

平面形は長方形で、規模は長径3.98m、短径2.85m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。床面は全体に南に向かって傾斜していた。カマド

第82表 第164号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(14.0)	3.9		ADE	1	にぶい橙	15	
2	環	(13.0)	3.7		DE	2	橙	10	
3	環	(12.8)	3.7		DHJ	2	にぶい橙	60	カマド 体部上位無調整
4	環	13.2	3.4		DIIJ	2	にぶい橙	65	体部上位無調整
5	皿	(16.0)	3.5		B DH J	3	橙	30	
6	壺	(22.0)	6.0		HJ	2	にぶい褐	20	
7	甕	(21.0)	5.2		E H J	3	橙	10	胴部上端ヨコケズリ
8	壺		16.6		ADEH	1	明赤褐	30	

第159図 第164号住居跡・出土遺物



は北壁の束寄りを設置され、燃焼部から煙道部にかけて壁を切り込んでいる。袖はあまり明確ではなく、左袖は検出されなかった。

ピットはカマド脇と北西コーナー付近にあるが、い

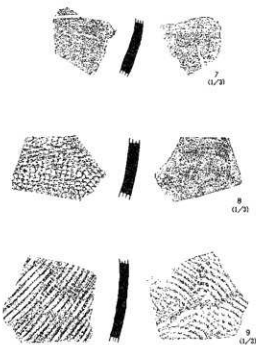
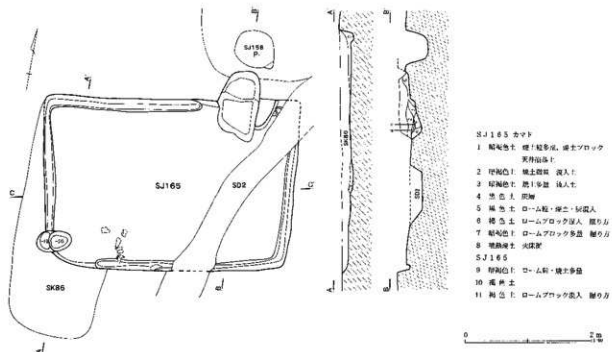
ずれも住居に伴うものではない。壁溝は北西コーナーが途切れるが、ほぼ全周する。

出土遺物は少なく、全て小片である(第160図)。土師器の坏・皿・小型甕、須恵器長頸瓶・甕が検出され

第83表 第165号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	3.4		DHJ	2	にぶい橙	20	
2	坏	(14.0)	3.9		ADH	2	明赤褐	5	
3	坏	(13.0)	2.9		ADH	2	橙	20	カマド
4	皿	(20.0)	2.5		DEHJ	1	橙	10	
5	小型甕	(16.0)	6.1		DEHJ	2	にぶい橙	20	
6	須恵長頸瓶	(12.0)	3.9		HJ	1	灰白	10	黒色粒子吹き出す 秋田または洞内産
7	須恵長頸瓶				HJ	1	灰	破片	沈線+櫛掻波状文 未野産か 雲地上組い
8	須恵甕				HIJ	1	灰	破片	未野産 縦格子印き+同心円当て具ナゲ消し
9	須恵甕				HIJ	1	灰黄	破片	未野産 縦格子印き+同心円当て具

第160図 第165号住居跡・出土遺物



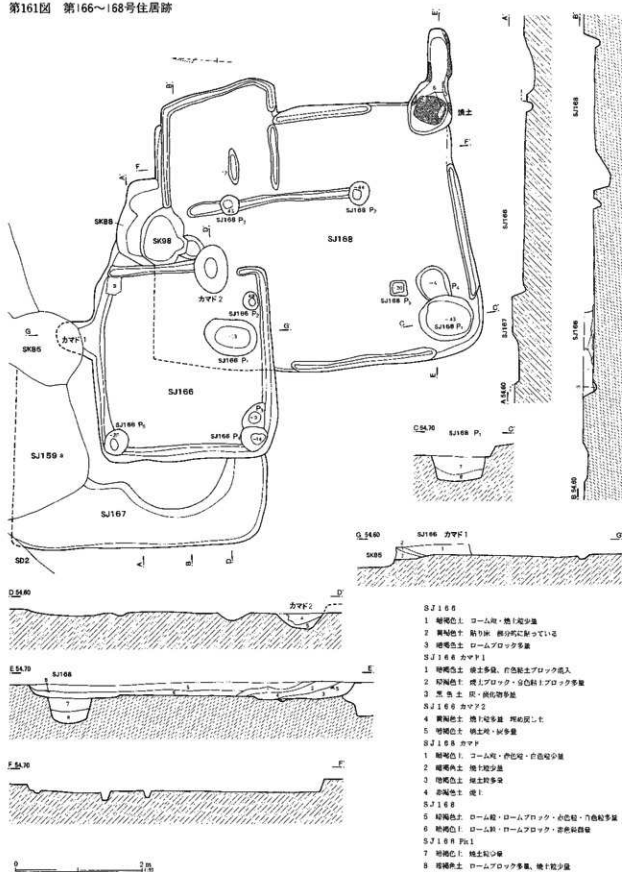
ている。1は模倣坏で古墳時代後期、2・3は北武蔵型坏で9世紀代、4は皿で8世紀初頭頃か。6～9は須恵器類・瓷類で時期的には不明確であるが、皿と同一段階か。時期決定可能な資料に乏しく、住居年代は不明確である。カマド内から出土した坏(3)を基準にすれば9世紀代となろう。

第166号住居跡 (第161図)

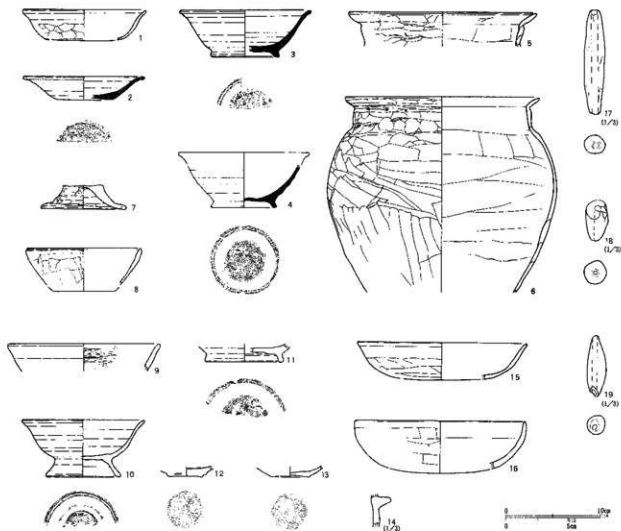
第166号住居跡は、F・G-5グリッドに位置する。重複遺構との新川関係は、第167号住居跡を切り、第159・168号住居跡・第85号土壌に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長径3.08m、短径2.92m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

第161図 第166～168号住居跡



第162図 第166・168号住居跡出土遺物



床面はやや凹凸が顕著であった。住居中央部が強く縮まり、壁周辺はやや軟弱である。カマドは2基検出された。1号カマドは北壁の東寄りに設置され、先端部を第85号土壌に破壊されている。側壁上面は被熱していた。軸は検出されなかった。2号カマドは東壁の南寄りに設置されているが、上面は第168号住居跡の床が乗っており掘り込みのみ検出された。埋上には焼土・灰が多量に含まれていた。2基のカマドの構築順は判然としないが、2号カマドから1号カマドに付け替えられた可能性がある。

ピットは5本検出された。いずれも深度が浅く、柱穴にはならないであろう。壁溝は2号カマドを除き、全周する。

出土遺物は土師器の環・甕・台付甕、須恵器の皿・

高台椀、十銭がある(第162図1~7・17・18)。4の須恵器高台椀は重複する第168号住居跡から出土したが、本住居跡に帰属するものと思われる。8の土師器環も第168号住居跡出土であるが、本住居跡に伴う可能性が高い。土師器甕は典型的な「コ」の字状口縁襲て、胴部が強く張る。須恵器はいずれも木野産である。遺物のセット関係から、住居の時期は9世紀後半~末葉頃と考えられる。

第167号住居跡 (第161図)

第167号住居跡は、F・G-4・5グリッドに位置する。重複する第159・166号住居跡、第85号土壌に切られており、遺構の詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長径3.84m、短径1.40m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-

第84表 第166・168号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	3.1		E H J	2	にぶい黄緑	10	SJ166 2号カマド
2	須恵瓦	(13.0)	2.5	(5.8)	E H J	1	暗青灰	30	SJ166 木野産
3	須恵高台椀	(13.8)	4.9	(7.2)	H I J	2	にぶい褐	30	SJ166
4	須恵高台椀		4.3	7.0	A H I J	1	灰褐	60	SJ168 木野産
5	甕	(20.0)	3.5		B E H J	2	にぶい橙	15	SJ166
6	甕	20.5	20.4		D H J	2	にぶい橙	40	SJ166
7	台付甕		2.5	(9.0)	D E H J	2	にぶい橙	60	SJ166
8	坏	(12.0)	3.9		D E H J	2	橙	15	SJ168
9	高台椀	(16.0)	2.9		E H	2	灰黄褐	10	SJ168 ロクロ土師器 内面ミガキー黒色処理
10	高台椀	(13.0)	6.0	(8.0)	E H J	2	褐	20	SJ166 ロクロ土師器
11	高台椀		1.9	(8.2)	A E H J	2	橙	40	SJ166・168 ロクロ土師器
12	小皿		1.1	4.0	A D H	2	橙	80	SJ168 底部糸切り
13	小皿		1.2	4.0	H	1	橙	80	SJ166・168 底部糸切り 胎土精選
14	羽釜				B J	2	にぶい赤褐	SJ168 Pit 1	土師質 蹄部小片
15	皿	(18.0)	3.8		D H J	2	橙	20	SJ168
16	坏	(18.0)	5.0		A D E	2	にぶい橙	10	SJ168
17	土鉢	長 8.25cm 最大径1.60cm 孔径0.50cm					重量19.64g	にぶい褐	SJ166
18	土鉢	長 (3.25) cm 最大径1.70cm 孔径0.25cm					重量7.44g	にぶい黄緑	SJ166
19	土鉢	長 (4.80) cm 最大径1.50cm 孔径0.35cm					重量8.82g	明赤褐	SJ168

5°-Wを示す。

床面は削平され、周溝状に巡る掘り方が辛うじて残るのみである。カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は検出されず、重複遺構との関係から9世紀後半以前という限定ができるのみで、住居の正確な年代は不明とせざるを得ない。

第168号住居跡 (第161図)

第168号住居跡は、G-5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第166号住居跡を切り、第88・98号土壌に切られていた。また、カマド煙道部は第171号住居跡と重複する。新旧関係は微妙であるが、被熱焼土の状況から本住居跡の方が新しいものと判断した。

平面形は横長方形で、東壁北半に張り出し状の施設を作う。規模は長径4.75m、短径4.15m、張出部4.65m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-86°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部から煙道部にかけては壁を切り込んで構築され、燃焼部底面と側壁は被熱していた。底面はほぼフラットで床面との段差はあまりない。袖は存在しなかった。

ピットは5本検出された。南西コーナーには、カマド対向ピット (Pit 1) が掘り込まれていた。深さ43cm。Pit 2・3は深さも深く柱穴と見て良いかもしれない。Pit 4は掘り方の一部か。Pit 5は中世の所産である。壁溝は途切れながら巡っていた。特に張出部にも壁に沿って巡ることから、一体の空間であることを示している。また、Pit 2とPit 3を結ぶライン状に間仕切り状の溝が検出された。同様に張出部から住居中央に向かって、間仕切り溝が2本検出されている。

出土遺物は少なく、土師器環・皿、ロクロ土師器高台椀・小皿、羽釜、土鉢が検出されている (第162図4・8-16・19)。このうち、ロクロ土師器高台椀 (9-11) と小皿 (12-13)、羽釜 (14) が華美に伴う遺物と考えられる。13の小皿は胎土が精選されている。住居の時期は11世紀前半頃と考えられる。

第169号住居跡 (第163図)

第169号住居跡は、F・G-5・6グリッドに位置する。床面は削平されており、東半部の規模や形態は確定できなかった。遺構の遺存状態は極めて悪い。重複遺構との新旧関係は、第8号溝跡と第170号住居跡に切られている。第4号溝跡との関係は不明である。

平面形は方形系と推定され、規模は長径2.7m前後

(推定)、短径2.44mである。主軸方向はN-24°-Eを示す。

床面は削平され、状況は不明。カマドは北壁の西寄りに設置されているが、上面に第8号溝跡が重なっており、詳細は不明である。埋土中には焼土が多量に含まれていた。

ピットは住居内及び壁に掛かって14本検出されたが、確実に遺構に伴うものはない。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器高台碗の口縁部小片(第163図8)と須恵器甕胴部片(9)があるのみである。高台碗は重複する第170号住居跡に伴うものであろう。甕は外面平行向き、「×」状のヘラ記号が残る。内面は同心円文当て具。時期に関しては第170号住居跡以前という限定ができるのみで、具体的な年代は不明とせざるを得ない。

第170号住居跡 (第163図)

第170号住居跡は、G-5・6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第169号住居跡・第4号溝跡を切り、第168・171号住居跡に切られていた。遺構の遺存状態はあまり良くない。

平面形は横長の長方形で、規模は長径3.80m、短径2.56m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

残存部の床面は平坦で、第171号住居跡のそれとほぼ同一面である。カマドは東壁の南寄りに設置されている。上面は第171号住居跡に削平され、燃焼部の被熱面が辛うじて残存するに過ぎない。

ピットは4本検出された。Pit 1はカマドと対面する西壁コーナーにあり、住居に伴うピット(カマド対向ピット)と考えられる。壁溝は南壁を除き検出された。

出土遺物は少なく、土師器の環(第163図1-4・6)、ロクロ土師器小皿(5)、厚縁底部(7)が検出された。ロクロ土師器小皿は北西コーナー部から検出され、確実に住居に伴う遺物である。7の厚縁も伴出遺物と考えて良い。底部は砂底である。土師器環は混入と考えられる。住居の時期は10世紀後半-11世紀初頃頃と考えられる。

第171号住居跡 (第163図)

第171号住居跡は、G-5・6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第168・170号住居跡、及び第4・9号溝跡を切っている。

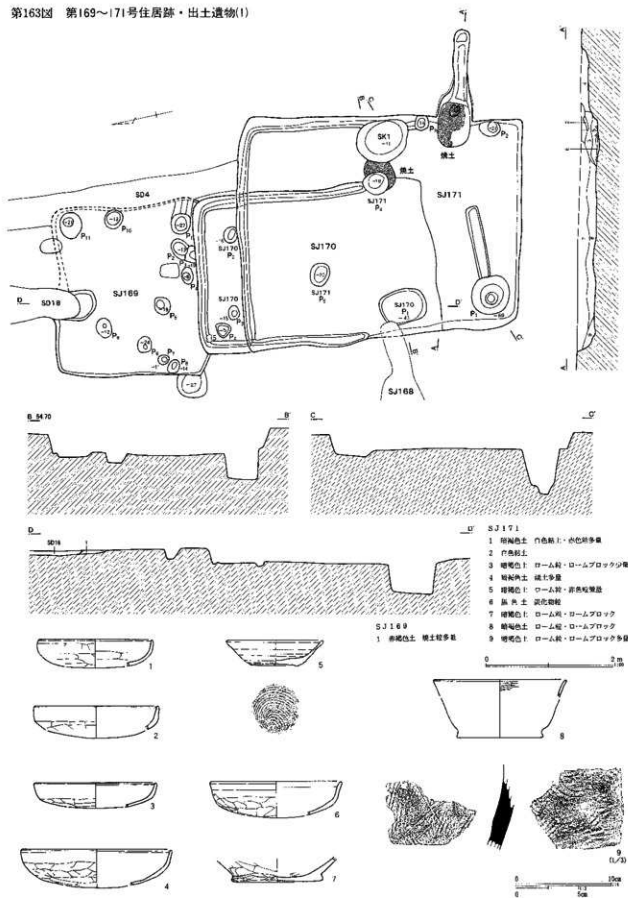
平面形は横長方形で、規模は長径4.52m、短径3.69m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-107°-Eを示す。床面はやや起伏を持つ。全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置されていた。燃焼部は壁を掘り込み、細長く延びる煙道部に続く。燃焼部から煙道部にかけての側壁と燃焼部底面は強く被熱していた。燃焼部底面はほぼ床面と同一レベルで続いている。袖部は明確ではない。但し、袖部に相当する位置の壁際に、白色粘土が僅かに残されていた。

ピットは5本検出されている。Pit 1は南西コーナー部にあり、カマド対向ピットと考えられる。深さ69cm。土壌は1基カマド北側の壁際から検出された。部分的に白色粘土が剥がれた状態で検出された(SK1)。

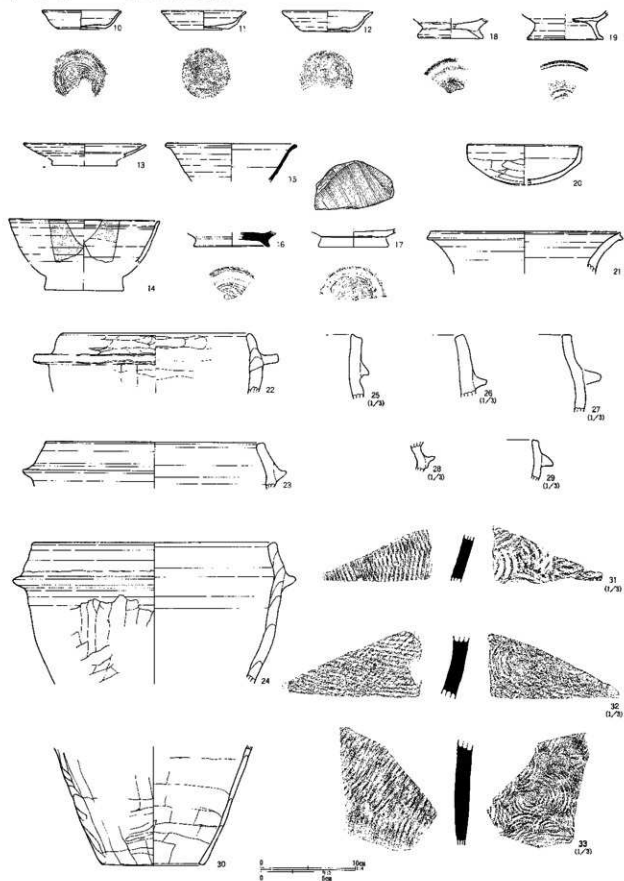
出土遺物はロクロ土師器小皿(第164図10-12)、灰釉陶器段皿(13)・灰釉陶器高台碗(14)、須恵器高台碗(15・16)、ロクロ土師器高台碗(17-19)、土師器環(20)、ロクロ土師器大口壺(21)、羽釜(22-29)、土師器瓶(30)、須恵器甕(31-33)が検出された。このうち、土師器環、甕、須恵器高台碗、甕は混入である。ロクロ土師器小皿は口径8~9cm代、底部は回転糸切り。11は部分的に還元している。灰釉陶器段皿(13)は底部を欠く。内面の段は弱く、降灰により、釉の範囲は不明。外面の釉は薄く、施釉範囲は不明。灰釉漬り掛けと思われる。胎土から東濃産である。虎渡山1号窯式か。灰釉陶器高台碗(14)は口縁部内面に沈線か一糸走る。灰釉は漬り掛けて、胎土はやや砂っぽい。東濃産と思われる。虎渡山1号窯式か。

17のロクロ土師器高台碗は内面ミガキと黒色処理が施されている。羽釜は全て土師質で、非ロクロ整形とロクロ整形の両者がある。23と24は酷似しており、同一個体と思われる。時期は10世紀後半-11世紀と考えられる。

第163図 第169～171号住居跡・出土遺物(1)



第164图 第169~171号住居跡出土遺物(2)



第85表 第169～171号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	2.7		ADEH	2	にぶい橙	10	SJ170
2	坏	(13.0)	2.5		EH	2	にぶい赤褐	25	SJ170
3	坏	(13.0)	2.5		EIJ	2	にぶい橙	15	SJ170 口縁直下ケズリ
4	坏	(16.0)	3.7		DEHJ	2	にぶい褐	15	SJ170 体部上位無調整
5	小皿	10.0	2.6	5.2	DEH	1	にぶい橙	80	SJ170 No.1
6	坏	(14.0)	3.5		HJ	2	にぶい橙	20	SJ170 体部上位無調整
7	甕		2.5	(9.6)	DEH	1	にぶい橙	45	SJ170底部砂底
8	高台碗	(14.0)	1.8		EH	2	にぶい橙	5	SJ169 内面ミガキ+藍色処理
9	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ169 外面「X」ヘラ記号?未野産
10	小皿	8.4	1.9	5.2	H J	2	橙	60	SJ171 底部糸切りロクロ土師器
11	小皿	9.0	1.9	5.3	H I J	1	黄灰	70	SJ171 部分的に還元している ロクロ土師器
12	小皿	9.6	2.2	5.8	DEH	1	橙	70	SJ171 底部糸切り ロクロ土師器
13	灰種段皿	(12.0)	1.4		H	1	灰白	10	SJ171 内面降灰 外面灰種液け掛け (不明瞭)
14	灰種高台碗	(14.0)	4.3		H	1	灰白	10	SJ171 内面洗滌 灰種液け掛け
15	須恵高台碗	(14.0)	4.0		H J	3	灰	15	SJ171 未野産か
16	須恵高台碗		1.6	(8.0)	H I J	1	灰	20	SJ171 未野産
17	高台碗		0.9		DEH	2	にぶい褐	45	SJ171 ロクロ土師器
18	高台碗		2.2	(7.0)	DHJ	2	にぶい橙	20	SJ171 カマド ロクロ土師器
19	高台碗		2.7	(8.0)	ADH	2	にぶい橙	25	SJ171 ロクロ土師器
20	坏	(12.0)	4.1		E H J	2	にぶい褐	20	SJ171
21	広口壺	(20.0)	4.4		E I J	2	橙	10	SJ171 ロクロ塗彩
22	羽釜	(20.0)	6.2		B E H J	2	にぶい褐	10	SJ171 白色粗粒は多量ロクロ雑な作り
23	羽釜	(23.0)	4.8		E H J	2	にぶい褐	10	SJ171 ロクロ塗彩 Na24と同一個体
24	羽釜	(26.0)	12.8		B H I J	2	にぶい褐	15	SJ171 カマド ロクロ整形ヘラケズリ
25	羽釜				B E J	2	灰褐	5	SJ171 雑な作り
26	羽釜				B E J	2	灰褐	5	SJ171 胎土粗い
27	羽釜				B D E	1	橙	5	SJ171 ロクロ塗彩か 剥落 土師質
28	羽釜				A E H	1	にぶい褐	5	SJ171
29	羽釜				B E J	2	灰褐	5	SJ171
30	碗		12.3	(11.0)	H J	2	にぶい橙	20	SJ171
31	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ171 未野産 平行叩き+同心円当て具
32	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ171 未野産 平行叩き+同心円当て具
33	須恵甕				H I J	1	灰	破片	SJ171 未野産 平行叩き+同心円当て具

第172号住居跡 (第165図)

第172号住居跡は、G-4・5グリッドに位置する。重複する第4号井戸跡、第71・87号土壌に切られている。西壁から北壁部では床面が削平され、掘り方からプランを推定した。

小型の住居跡で平面形は正方形と推定される。規模は一辺2.90m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-96°Eを示す。

カマド前面の床面は堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置され燃焼部は壁を切り込んでいた。遺存状態は極めて悪く、軸は検出されなかった。

カマド右脇のコーナー部からは貯蔵穴が検出された。

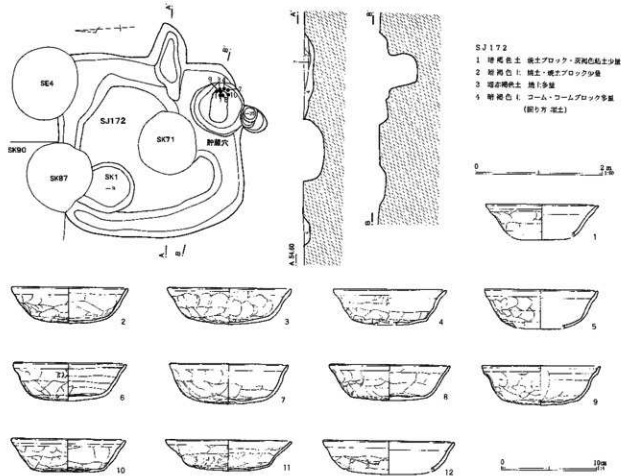
直径85cm、深さ50cm。埋土は焼土粒子混じりの褐色土である。貯蔵穴内からは土師器環が10点ままとって出土している。

土壌は1基、住居北西部から検出された。掘り方の一部か。また、住居中央部から検出された第71号土壌は確認段階では住居を切っているように思えたが、床面が削平されていることから、あるいは住居の床下土壌となる可能性もある。

灰溝は検出されなかったが、周溝状に掘り方が巡っていた。

出土遺物は、全て土師器環である(第165図)。カマド内から1点出土したがその他の大半は貯蔵穴から検

第165図 第172号住居跡・出土遺物



第86表 第172号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.3		E H J	2	褐	20	No.2・7 貯蔵穴
2	坏	12.4	3.7	8.0	E H J	2	にぶい褐	85	貯蔵穴 底部黒斑
3	坏	(13.0)	3.8	(8.6)	E H J	2	にぶい褐	60	No.1 貯蔵穴
4	坏	(12.0)	3.7	(8.2)	A E H J	2	にぶい褐	30	貯蔵穴底部～体部下端黒斑
5	坏	(11.0)	4.0		A E H J	2	橙	20	カマド
6	坏	12.1	4.0	8.0	E H J	2	にぶい褐	65	No.2 貯蔵穴
7	坏	(12.6)	4.1	8.4	H J	2	褐	60	No.4 貯蔵穴
8	坏	(12.8)	3.7	(8.2)	A E H J	2	にぶい褐	45	貯蔵穴
9	坏	(12.4)	4.1	(8.1)	A E H J	2	にぶい褐	60	No.6 貯蔵穴
10	坏	12.2	3.4	(7.8)	E H J	2	にぶい褐	70	No.3 貯蔵穴
11	坏	13.4	3.2	(8.2)	A E H J	2	にぶい褐	70	No.10 貯蔵穴 底部黒斑 通み大きい
12	坏	(14.0)	3.1		H J	2	にぶい褐	20	No.2

出された。基本的な形態は共通し、体部上位を指押さえし、口縁部は屈曲して立ち上がるタイプである。また、底部は平底乃至平底気味に作り、ヘラケズリ調整される。体部は指押さえか軽いナゲ調整である。やや深身のものと浅身のものがある。住居の時期は9世紀後半である。

第173号住居跡 (第166図)

第173号住居跡は、G-4グリッドに位置する。遺構の遺存状態は極めて悪く、掘り方が辛うじて残るのみであった。重複する第9号溝跡を切り、第23号溝跡に切られていた。第174号住居跡との関係は不明である。

平面形は正方形で、規模は長径3.27m、短径3.05

大寄1区

m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-20°-Eを示す。床面は削平されていた。カマドは北壁の中央に設置されるが、掘り方部分が残るのみで、詳細は不明である。断面観察により、風倒木底を切っていることが判明した。

付属施設は、北壁から東壁にかけて壁溝が検出されたに留まる。ピットはない。

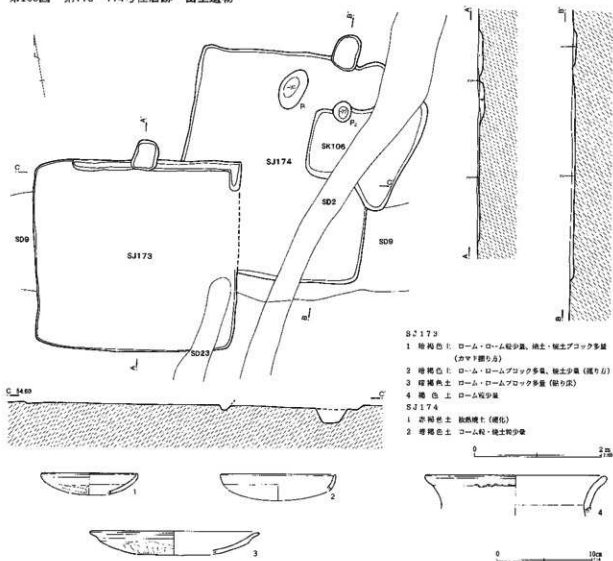
出土遺物は少なく、いずれも小片である(第166図)

1・3・4)。1の環はカマド内から出土した。出土遺物は7世紀後半～8世紀前半頃と思われるが、住居の時期に一致するか否かは不明である。重複する第9号溝跡との関係から、7世紀後半以降とするに留めたい。

第174号住居跡(第166図)

第174号住居跡は、G-4グリッドに位置する。床面は削平され、掘り方が残るのみで、遺存状態は極めて悪い。重複遺構との新旧関係は、第9号溝跡を切り、

第166図 第173・174号住居跡・出土遺物



- SJ173
 1 焼褐色土 ローム・ローム粒少量、粘土・粘土ブロック多量 (かまど掘り方)
 2 焼褐色土 ローム・ロームブロック多量、粘土少量 (掘り方)
 3 暗褐色土 ローム・ロームブロック多量 (掘り方)
 4 黒色土 ローム粒少量
- SJ174
 1 赤褐色土 風倒木(腐化)
 2 焼褐色土 ローム粒・粘土粒少量

第87表 第173・174号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(10.0)	2.1		DEH	3	橙	15	SJ173 カマド
2	環	(12.0)	1.7		ADH	2	橙	5	SJ174
3	皿	(18.0)	2.3		A E H J	2	にぶい橙	10	SJ173
4	壺	(19.0)	4.2		ADE	2	橙	15	SJ173

第2号溝跡・第106号土壇に切られていた。第173号住居跡との新田関係は不明である。

平面形は長方形で、規模は長径3.65m、短径3.02m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-25°-Eを示す。床面は削平されていた。カマドは北壁の東寄りに設置され、燃焼部底面のみ残存し強く被熱していた。上部構造は削平され不明である。

付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環の細片が1点検出されたのみである(第166図2)。住居の時期は、重複する第9号溝跡との関係から7世紀後半以降という限定ができるのみである。ただし、カマドがコーナー近くに寄り、底面が被熱するという特徴から見ると、10世紀後半以降の可能性があらう。

第175号住居跡(第167図)

第175号住居跡は、G・H-5グリッドに位置する。重複する第9号溝跡の上部に構築されていた。

平面形は横長方形で、規模は長径3.96m、短径2.61m(第167図)。第175号住居跡・出土遺物

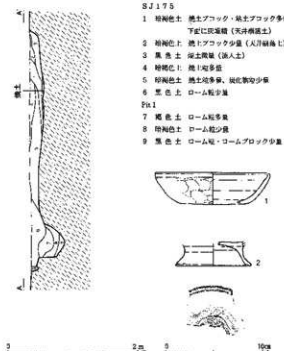
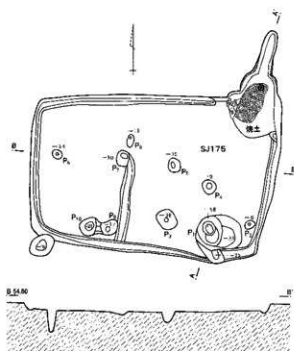
m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-16°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体に堅く締まっていた。カマドは北壁の東端に設置され、カマド主軸は北壁に対してやや斜行する。燃焼部は壁を切り込み、細長く伸びる煙道部に続く。底面はほぼフラットで床面との段差はあまりない。燃焼部底面と側壁は被熱していた。また、燃焼部底面には小ピットが穿たれており、支脚を据え付けた孔と考えられる。燃焼部手前の壁際に片岩系の板石が3点散乱していた。カマド構築材の一部であらう。

ピットは10本検出された。Pit 1は南東コーナーにあり、カマド対向ピットと考えられる。底面は2段に掘り込まれ、深さ58cm。他のピットの層底は不明確であるが、その大半は中世段階の所産と考えられる。

壁溝はカマドを除き全周する。また、南壁からPit 7に向かって浅い溝が伸びていた。住居に伴う施設と考えられ、間仕切り溝の可能性がある。

出土遺物は少なく、土師器環とロクロ土師器高台碗



第88表 第175号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	LJ	径	器高	底径	胎	上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)		3.2		A D E H		2	橙	15	
2	高台碗			2.5	(8.0)	D H I J		2	橙	40	ロクロ土師器

があるのみである(第167図1・2)。住居形態から見て、ロクロ土師器高台椀が住居に伴う遺物と考えられる。時期は10世紀後半～11世紀と推定される。

第176号住居跡(第168図)

第176号住居跡は、II-5グリッドに単独で位置する。平面形は正方形で、規模は長径2.73m、短径2.39m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-93°Eを示す。床面は概ね平坦で、全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南端に設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、先端に石製支脚が据えられていた。煙道部は削平されている。焚口から燃焼部にかけての底面は被熱していた。底面はほぼ平坦で、床面との段差はない。

ピットは2本検出された。Pit 1は北東コーナーに位置する。深さ24cm。Pit 2は造構に伴わない。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は比較的多まっている(第168図)。ロクロ土師器小皿(第168図1～8)、ロクロ土師器高台椀(9～16)、鉢(17)、甕(18)がある。ロクロ土師器小皿は8点出土し、口径9～10cm前後と小振りである。器高は2.0cmと浅いものと2.9cmとやや深いものがある。高台椀も8点出土しているが、形態差はかなり

ある。11は坏部が浅く、高台は高いタイプである。12は坏部は深く高台は低い。内面はミガキと黒色処理が施されている。17は鉢としたが、判然としない。体部はロクロ整形されるが、口縁部は指頭(非ロクロ)で折り返し、雑な指ナゲが施されている。体部下半は手持ちへラケズリ調整、底部はナゲで切り離し痕は確認できない。18は大型の甕で、胴部は縦方向のナゲ調整が施されている。ケズリは不明瞭である。住居の時期は10世紀後半と考えられる。

第177号住居跡(第169図)

第177号住居跡は、F・G-6グリッドに位置する。床面は削平されており、幸うじて方形の掘り方と思われる掘り込みが検出されたのみで、遺構の遺存状態は極めて悪い。重複遺構との新旧関係は、第4号溝跡を切り、第171・179号住居跡・第73号土壌に切られていた。第178号住居跡との関係は不明瞭であった。また、第4号溝跡との関係についても不明とした方が良いかもしれない。

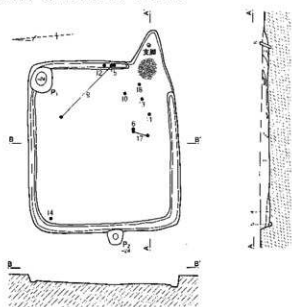
平面形は横長の長方形で、規模は長径5.29m、短径3.16m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-16°Wを示す。

床面は削平されていた。カマドは検出されなかった。

第89表 第176号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(10.0)	2.4	5.0	E H J	3	にぶい橙	40	ロクロ土師器
2	小皿	(9.6)	2.5	(5.0)	E H J	2	にぶい橙	40	カマド ロクロ土師器
3	小皿	(10.0)	2.5	6.6	H J	2	にぶい褐	40	ロクロ土師器
4	小皿	(10.0)	2.8	5.4	A E H J	2	にぶい橙	65	ロクロ土師器
5	小皿	(10.0)	2.9	(6.2)	A H I J	2	にぶい褐	40	ロクロ土師器
6	小皿	9.4	2.0	5.2	H J	1	にぶい橙	90	№6 ロクロ土師器
7	小皿	9.2	2.7	5.3	D E I J	2	にぶい橙	85	ロクロ土師器 底部未切り
8	小皿	(10.2)	2.9	(5.8)	A D E H J	2	橙	45	ロクロ土師器
9	高台椀	(14.2)	6.7	7.8	H J	3	橙	55	№12・15 ロクロ整形
10	高台椀	13.2	6.4	7.2	D H J	2	にぶい橙	80	№3 ロクロ土師器
11	高台椀	(14.6)	6.3	8.8	B I J	2	にぶい黄橙	60	№5 ロクロ土師器
12	高台椀	15.5	6.9	7.9	E H J	2	にぶい黄橙	70	№14ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
13	高台椀		3.1	8.4	D H J	2	にぶい橙	80	№4 ロクロ土師器
14	高台椀		4.4	7.5	B H J	2	にぶい褐	60	№10 ロクロ土師器
15	高台椀	(13.6)	4.5		B D H J	2	にぶい褐	30	№15 ロクロ土師器
16	高台椀		2.6	(8.2)	H J	2	にぶい橙	50	ロクロ土師器
17	鉢	15.3	9.2	7.0	B D E H J	2	にぶい橙	100	№6 ロクロ土師器 ナゲ側胴部下半ケズリ
18	甕	(28.0)	17.1		D E H J	2	にぶい褐	20	№2 胴部削りケズリ後ナゲ調整

第168図 第176号住居跡・出土遺物



SJ176 土マフ

1 褐色土、ローム粒・粘土質少量

2 緑褐色土、ローム粒・粘土質少量

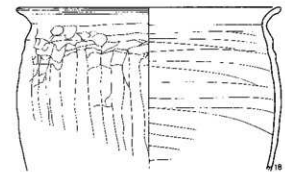
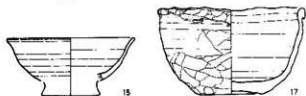
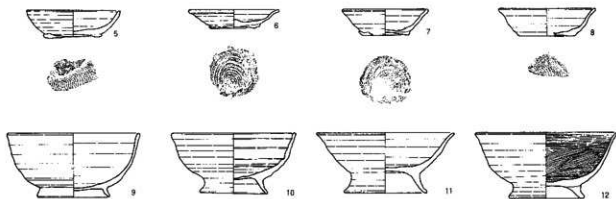
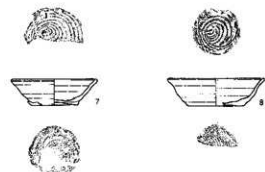
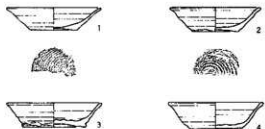
SJ176

3 緑褐色土、ローム粒・粘土質、灰色粒少量

4 褐色土、ローム粒・ロームブロック・粘土粒・灰色粒少量

5 緑褐色土、ロームブロック

0 2m



ピットその他の付属施設も存在しない。

出土遺物は検出されなかった。住居の時期も不明確で、重複遺構との関係から10世紀後半以前という限定ができるのみである。

第178号住居跡 (第169図)

第178号住居跡は、F・G-6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第177・179号住居跡を切り、第73号土壌に切られていた。第73号土壌は北壁ラインに沿って住居内におさまる形で掘り込まれていた。断面観察から住居を切っているのは間違いない、形態や大きさ、埋土の状況から、廃絶した住居を利用した廃屋墓の可能性があらう。

平面形は横長の長方形で、規模は長径3.63m、短径2.70m、深さ0.38mを測る。主軸方向はN-102-Eを示す。

床面はほぼ平坦で、カマド前面から住居中央部にかけて強く踏み固められていた。カマドは東壁の南端に設置され、燃焼部と煙道部は壁を切り込んで構築されている。燃焼部は床面から僅かに掘り込まれ、底面と側壁は被熱していた。煙道部は燃焼部から一段高く連続し、水平方向に延びる。

ピットは4本検出された。Pit 1は南西コーナーに位置し、住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。その他のピットは住居に伴うものではない。

出土遺物は少ない。ロクロ土師器小皿 (第170図1~3)、ロクロ土師器高台椀 (4)、羽釜 (5)、小型甕 (6)、鉢 (第171図2) が検出されている。2の小皿は完形で、西壁際から出土した。鉢はカマド内出土。住居の時期は10世紀末葉~11世紀初頭と考えられる。

第179号住居跡 (第169図)

第179号住居跡は、F・G-6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第74号土壌を切り、第178号住居跡・第73号土壌に切られていた。

平面形は整った正方形で、規模は長径5.28m、短径5.06m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-90-Eを示す。

床面はほぼ平坦で、住居中央部の床面は強く硬化し

ていた。カマドは東壁のやや南寄りに設置されている。燃焼部はほぼ壁内におさまり、煙道部が壁外に短く立ち上がる。第5層は掘り方で、その上面が火床面と考えられる。燃焼部の先端付近、中央からやや北に寄った位置に土製支脚が据えられていた。袖は白色粘土を用いて構築されているが、かなり流出しており、遺存状態はあまり良くない。

ピットは14本検出された。Pit 1~4は主柱穴である。他のピットに関しては伴う可能性は低い。

貯蔵穴は、カマド脇の南東コーナーに設けられていた。不整形で、長径1.08m、深さ47cm。

出土遺物は比較的多い (第170図7~21・第171図22~27)。特にカマド及びその前面から多量に出土した。第170図19・20、第171図23の長胴甕はカマド前面の床面に漬れた状態で出土した。カマド架構材に使用されたものか。7~9の土師器環と須恵器高盤 (15) は貯蔵穴から出土した。

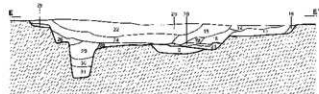
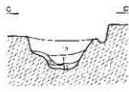
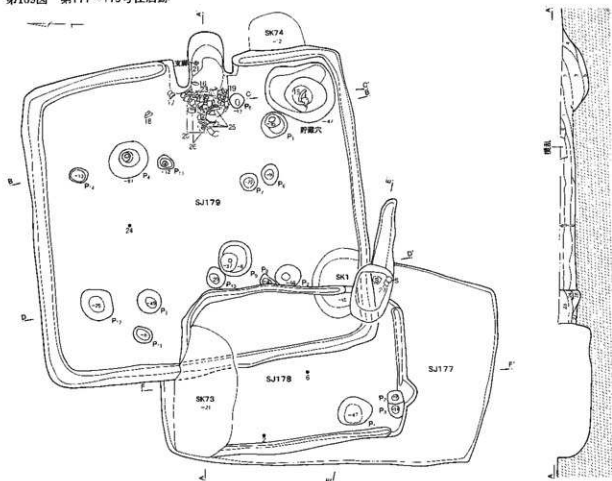
出土遺物は土師器環 (7~14)、土師器甕 (16~20・22・23・25)、土師器壺 (24)、土師器甕 (26)、須恵器高盤 (15) と土製支脚 (21) がある。土師器環は北武蔵型環が主体で、口縁部が内湾するものと短く直立するタイプがある。須恵器高盤は口縁直下から環部外面は回転ヘラケズリ、一部ケズリが及ばない範囲がある。また、環部下端はロクロナデされる。脚部は欠く。環部内面はナデ調整。胎土に片岩を含み、末野産と考えられる。住居の時期は8世紀初頭頃と考えられる。

第180・181号住居跡 (第172図)

第180・181号住居跡は、F-7グリッドに位置し、2軒重複している。新旧関係は不明確であるが、第181号住居跡の方が新しいものと思われる。重複遺構との新旧関係は、第182号住居跡・第77号土壌を切り、第70・78号土壌に切られていた。第79号土壌は住居主軸に直交する長方形土壌で、内部からロクロ土師器小皿と高台椀が2枚重なった状態で出土しており、第180号住居跡廃絶後構築された廃屋墓の可能性が高い。

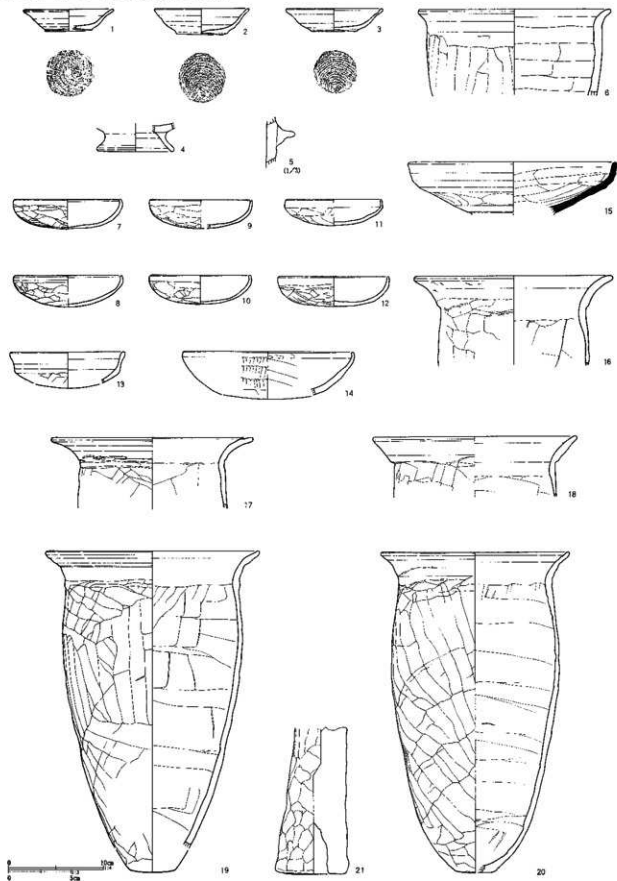
第180号住居跡の平面形は横長方形で、規模は長径4.29m、短径3.04m、深さ0.10mを測る。主軸方向は

第169図 第177～179号住居跡

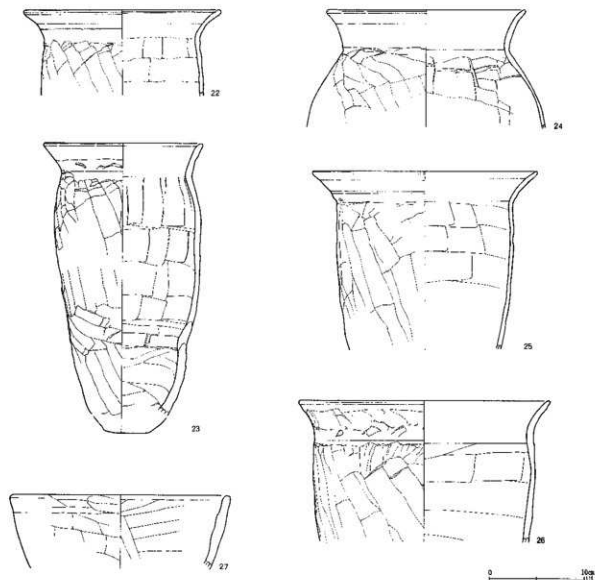


- SJ179
- 1 総築色土 掘上・掘下均等築、機土アワック・板間内陥：少量
 - 2 総築色土 掘上・掘下均等築、機土アワック少量
 - 3 総築色土 掘上・掘土アワック、板間内陥少量
 - 4 総築色土 掘上・掘土アワック、板間内陥少量
 - 5 総築色土 掘上・掘土アワック少量 (板間内陥)
 - 6 総築色土 掘上・掘土アワック少量
 - 7 総築色土 コム・コム掘、機土掘少量
 - 8 総築色土 コム・コム掘少量
 - 9 総築色土 SJ179南壁
- SJ178 野糞穴
- 10 総築色土 コム・コム掘少量、機土掘、掘少量
 - 11 総築色土 コム・コム掘少量
 - 12 総築色土 コム・コム掘、板間内陥少量
 - 13 総築色土 コム・コム掘少量、機土掘
- SJ177
- 14 総築色土 掘上・掘土アワック少量
 - 15 総築色土 コム掘・コム掘少量、機土掘少量
 - 16 総築色土 コム・コム掘少量
 - 17 総築色土 コム・コム掘少量、コムアワック、機土掘アワック少量
 - 18 総築色土 掘上・掘土アワック少量、コム・コム掘少量
 - 19 総築色土 コム掘少量
 - 20 総築色土 掘上・掘土アワック少量
 - 21 総築色土 コム・コム掘・コムアワック少量、機土掘少量
 - 22 総築色土 コム・コム掘少量
 - 23 総築色土 コム掘少量、機土掘少量
 - 24 総築色土 コム掘少量、機土掘少量
 - 25 総築色土 コム掘少量
 - 26 総築色土 コム掘少量、コム掘少量
 - 27 総築色土 コム掘少量
 - 28 総築色土 コム掘少量
 - 29 総築色土 コム掘少量
 - 30 総築色土 コム掘少量
 - 31 総築色土 コム掘少量

第170图 第178·179号住居跡出土遺物(1)



第171図 第178・179号住居跡出土遺物(2)

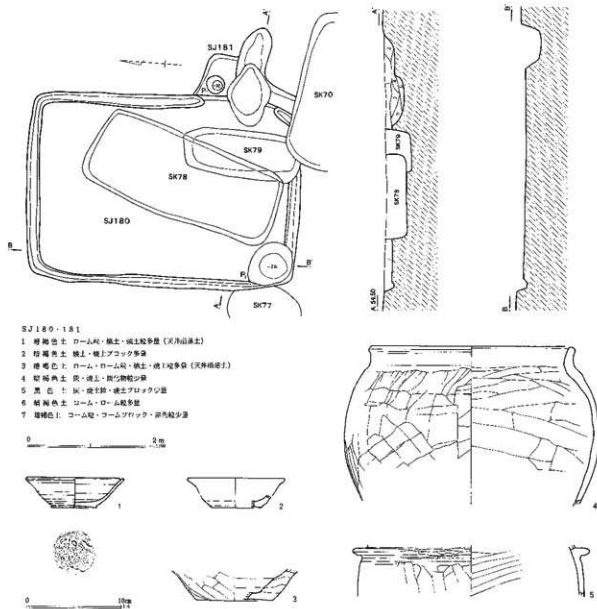


第90表 第178・179号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(9.6)	2.2	5.0	HJ	2	にぶい橙	60	SJ178 底部糸切り ロクロ土師器
2	小皿	10.0	2.8	4.9	ADHJ	2	橙	100	SJ178 Na1 底部糸切り ロクロ土師器
3	小皿	(10.2)	2.4	4.5	DHJ	2	にぶい橙	80	SJ178 底部糸切り ロクロ土師器
4	高古輪		3.0	(8.0)	DH	2	にぶい黄橙	25	SJ178 ロクロ土師器
5	羽釜				DH	2	橙	5	SJ178
6	小型甕	(20.4)	9.0		BHJ	2	橙	15	SJ178 Na1
7	坏	11.2	3.1		DEHJ	3	橙	90	SJ179 貯蔵穴 Na1
8	坏	11.2	3.3		DEHJ	3	橙	100	SJ179 貯蔵穴
9	坏	(10.8)	3.0		HJ	3	橙	40	SJ179 貯蔵穴
10	坏	10.4	3.0		DEHJ	3	橙	100	SJ179
11	坏	(10.0)	2.7		EHJ	3	橙	45	SJ179
12	坏	(11.8)	3.1		HJ	2	にぶい橙	40	SJ179 カマド
13	坏	(12.0)	3.3		EH	1	にぶい黄橙	10	SJ178・179
14	坏	(18.0)	4.5		DEH	1	橙	5	SJ179

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
15	須恵高甕	(21.8)	5.5		B I J	1	灰黄褐	30	SJ179 貯蔵穴 No 2 木野産
16	甕	(21.0)	9.4		B E H J	2	にぶい橙	2	SJ179 カマド No 2
17	甕	(21.4)	7.5		D E H J	2	橙	30	SJ179 カマド No13
18	甕	(21.6)	6.3		E H J	2	にぶい橙	16	SJ179 No 8
19	甕	22.8	31.1		D H J	2	にぶい橙	70	SJ179 カマド No10・12
20	甕	(20.0)	33.5	(4.0)	D E H	2	にぶい橙	80	SJ179 カマド No 5・8
21	土製支脚		15.3	7.2	E H	1	にぶい赤褐	65	SJ179 カマド No 1 外面被熱
22	甕	(21.0)	8.9		H J	2	橙	35	SJ179 貯蔵穴
23	甕	16.6	28.7		H J	2	にぶい橙	70	SJ179 カマド No11
24	壺	(21.0)	12.3		D H J	2	にぶい橙	30	SJ179 No 4
25	甕	(23.6)	18.7		H J	3	橙	60	SJ179 カマド No 6・9・10
26	瓶	26.6	14.9		H J	2	褐	60	SJ179 カマド No 4・7
27	鉢	(22.5)	7.7		D E H	2	褐	15	SJ178 カマド No 1

第172図 第180・181号住居跡・出土遺物



第91表 第180・181号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(10.4)	3.1	4.7	H J	2	にぶい橙	60	SJ180 Pit 1 ロクロ土師器
2	小皿		1.5	(4.0)	E II	1	橙	20	SJ181 ロクロ土師器
3	甕		3.3	(4.0)	B E J	1	にぶい黄橙	25	SJ181
4	甕	21.2	16.7		E H I	1	にぶい橙	20	SJ180 カマド
5	羽釜		5.4		A H J	1	にぶい橙	15	SJ181 非ロクロ 胴部外面ナデ

N-88'Eを示す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は床面をやや掘り込んでいる。煙道部は燃焼部から段を持って立ち上がり、水平方向に延びる。ピットは1本検出された。Pit 1は南西コーナーにあり、住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。壁溝はカマドを除き全周する。

第181号住居跡はカマド周辺が検出されたにとどまり、造構の詳細は不明である。カマドは第180号住居跡カマドの上面に重なり、燃焼部側壁上面は被熱していた。床面の状況は不明である。その他、付属施設としてピットが1本検出されている。

出土遺物は少ない。第172図1と4は第180号住居跡から出土した。1は第180号住居跡 Pit 1の西壁際から出土したロクロ土師器小皿である。やや器高が高く小型環に近い。4は厚甕で、胴部上端は横へラケズリ、以下縦及び斜めケズリが施されている。第172図2・3・5は第181号住居跡出土。5は非ロクロの羽釜で口縁部を欠く。胴部外面は指ナデ。住居跡の時期は不明確であるが、第180号住居跡は10世紀後半、第181号住居跡は10世紀末葉以降となろう。

第182号住居跡 (第173図)

第182号住居跡は、F-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第77号土壌を切り、第180(181)・183・184号住居跡、第70号土壌に切られていた。遺構の遺存状態は悪く、詳細は明らかにできなかった。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長径3.57m、短径2.62m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-94'Eを示す。

床面はほぼ削平されていた。カマドは東壁の南寄りに設置されるが、ローム・焼上粒子を多量に含む掘り

方が辛うじて残存したに過ぎず、遺存状態は極めて悪い。袖部は検出されなかった。

ピットは2本検出されたが、遺構に伴う可能性は低い。出土遺物は土師器環が1点検出されたに留まる(第173図1)。体部無調整の平底環かと思われ、8世紀後半～9世紀代か。小片であるため、必ずしも住居に伴う保証はないが、重複遺構との関係から見る限り特に齟齬はない。

第183・184号住居跡 (第173図)

第183・184号住居跡は、F・G-7グリッドに位置する。重複する第182・185号住居跡を切っていることが判明した。第183号住居跡と第184号住居跡の関係については、2軒の重複と考えたが、床面は同一レベルで続き、断面観察によっても明瞭に切り合い関係が捉えられなかった。第184号住居跡のカマドが検出されなかったことから、第184号住居跡から第183号住居跡に建て替えられたものと判断した。第184号住居跡とした部分を第183号住居跡の張り出し状施設と考えれば、両者は一体の住居となる可能性も否定できない。

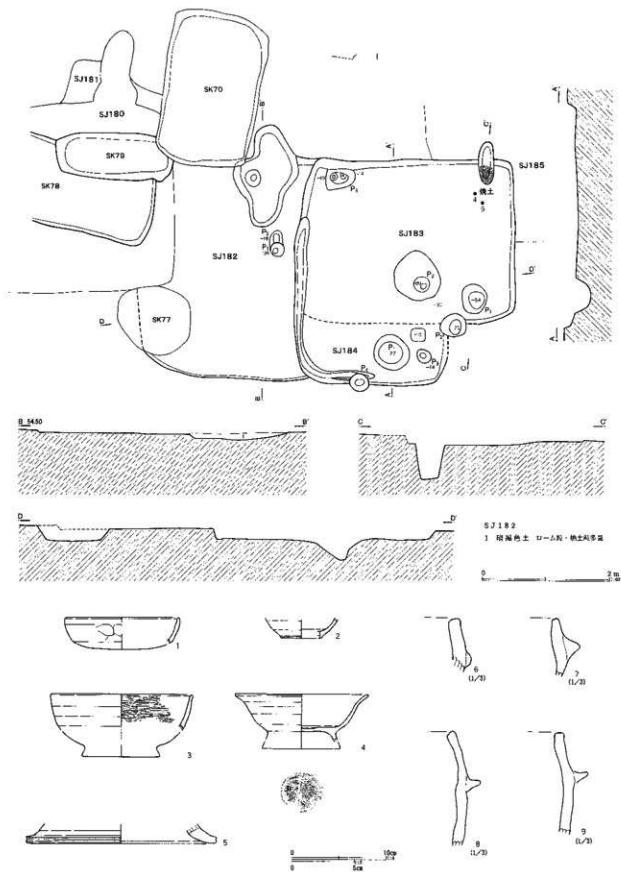
第183号住居跡は平面形はやや横長の長方形で、規模は長径3.46m、短径2.58m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-1'Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南端に設けられていたが、第185号住居跡調査時に削平してしまい、燃焼部の掘り方が辛うじて遺存するのみである。掘り方上面は被熱し、その前面は炭化物と灰層が広がっていた。

ピットは3本検出された。Pit 1は南西コーナー一部に位置する。住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。深さ54cm。Pit 2は上面に貼床され、住居よりも古い。Pit 3は住居よりも新しく、中世の所産と考えられる。

大畚I区

第173图 第182~184号住居跡・出土遺物



第92表 第182・183号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(10.0)	2.7		DEH	2	橙	10	SJ182 体部無調整
2	小皿		2.0	(4.0)	AEH	1	にぶい橙	20	SJ183 ロクロ土師器
3	高台椀	(15.0)	3.7		DH	2	にぶい橙	10	SJ183 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
4	高台椀	(14.0)	5.0		DEH	2	橙	40	SJ183・185 ロクロ土師器
5	甌		2.0	(19.6)	DEJ	3	明赤褐	10	SJ183 土師質
6	羽釜				BEJ	3	にぶい黄褐	5	SJ183 土師質 ロクロ整形か 質低い
7	羽釜				BDEJ	2	にぶい橙	5	SJ183 土師質非ロクロ 胴部タテズリ
8	羽釜				BDEJ	1	にぶい橙	5	SJ183 土師質 非ロクロ 下端にケズリ痕
9	羽釜				A EJ	1	橙	5	SJ183 No.4 土師質 ロクロ整形 胴部欠失

第184号住居跡は南北長2.40m、第183号住居跡の西壁ラインよりも0.95m西に張り出す。壁溝は北壁から西壁にかけて検出された。ピットは4本検出されている。Pit 1は伴う可能性もあるが、他のピットは遺構に属するものではない。

出土遺物は少なく、全て第183号住居跡から検出された(第173図2～9)。3・4はロクロ土師器高台椀で、3は内面ミガキと黒色処理が施されている。2はロクロ土師器小皿。5は土師質の甌と思われる。ロクロ整形。6～9は土師質の羽釜。ロクロ整形のものと非ロクロのもの両者がある。時期は10世紀後半～11世紀初頭頃と考えられる。

第185号住居跡 (第174図)

第185号住居跡は、G-7グリッドに位置する。重複遺構との新川関係は、第183・186号住居跡及び第75号土塼に切られている。

平面形はやや歪んだ長方形で、規模は長径4.52m、短径3.42m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、カマド前面の床面は特に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築される。袖は遺存していなかった。

ピットは4本検出されたが、いずれも住居に伴うものではない。壁溝は住居西半で部分的に確認された。

出土遺物は、カマド及び住居北東部から比較的まとまって検出されている(第175図1～16)。1～6は土師器環。5は完形品で南東コーナー部に流れ込んだや

うな状況で出土した。6は深身で大振りの環。体部下半はヘラケズリされる。7・8は須恵器環である。7は完形の環で、底部糸切り無調整。やや厚手で、口径に対する底径比が大きい。秋田産である。8はやや大振りで、薄手である。焼きは悪い。末野産である。9は末野産の須恵器高台椀。10は灰釉陶器淨瓶の口縁部片で、住居中央部の床面から出土した。外面全体に灰釉が掛かるが、やや発色が悪い。作りは丁軍で、頸部に沈線が2条走る。内面は絞り痕。胎土は緻密で、黒色粒子の吹き出しが目立つ。痕投産、K-14号窯式の範疇と考えられる。11～15は土師器壺甕類。14の妻口縁部は弓状に外反する。15の口縁部は「コ」の字状に近づいている。16は須恵器甕胴部片。時間的には9世紀前半と考えられる。

第186号住居跡 (第174図)

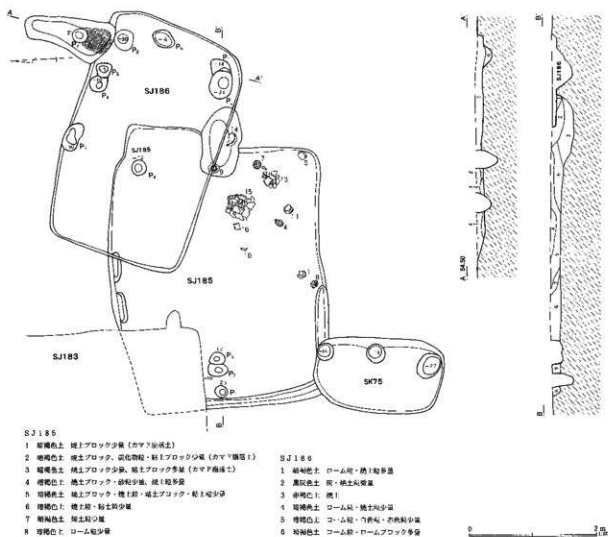
第186号住居跡は、G-7グリッドに位置し、第185号住居跡を切っている。

平面形は横長方形で、規模は長径3.73m、短径2.44m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-20°-Eを示す。

床面はやや起伏があり、カマド前面を中心に堅く締まっていた。カマドは北壁の東端に設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、煙道部は同一レベルで続く。燃焼部と床面の段差はあまりなく、燃焼部底面は被熱している。

ピットは8本検出された。Pit 1・2はカマドに対面する南東コーナーに位置し、住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。深さはやや浅く24cm。他のピットは中世の所産と推定される。

第174図 第185・186号住居跡



出土遺物は少なく、ロクロ上師器高台柄と羽釜片が検出された(第175図17~19)。17は内面ヘラミガキと黒色処理、18は内面ヘラミガキ調整されるが、黒色処理は施されない。19はロクロ整形の羽釜片で、Pit 1出土。住居の時期は10世紀後半~11世紀初頭であろう。

第187号住居跡(第176図)

第187号住居跡は、F-7・8グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第188号住居跡を切り、第83・84号土壌に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長径4.59m、短径4.52m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-79°-Eを示す。床面は平坦で、住居中央付近からカマド前面にかけて硬化していた。カマドは東壁の南寄りに設置され、

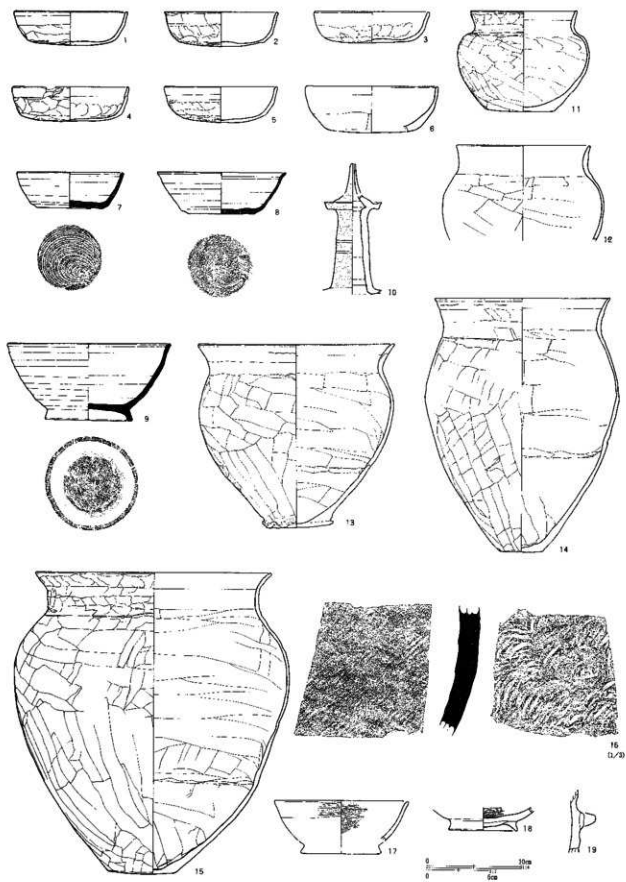
燃焼部は壁内にはぼおさる。袖は白色粘土を用いて構築されているが、遺存状態はあまり良くない。

ピットは16本検出された。Pit 1~4は配置と深さから主柱穴と考えられる。他のピットの用途は不明である。

貯蔵穴はカマド右脇の南東コーナー部に設けられている。榎川形プランで長径0.75m、深さ0.34m。底面は2段に掘り込まれている。

出土遺物は少なく、土師器環と甕、須恵器甕が検出されている(第176図)。1~5は浅身の模倣坏で、口縁部の立ち上がりは短く、口縁下の稜も弱くなっている。6は深碗風で、カマド内から出土した。住居の時期は7世紀前半と推定される。

第175图 第185・186号住居跡出土遺物



第93表 第185・186号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.0	3.6	9.0	EII J	2	橙	85	SJ185 No 9
2	坏	(12.0)	3.6	(8.8)	E H J	2	にぶい橙	45	SJ185 No10
3	坏		3.2		DE H	2	橙	60	SJ185
4	坏	(12.2)	3.5	(10.6)	DE H J	2	橙	50	SJ185 No 7 口縁打ち欠き?
5	坏	12.0	3.8		E H J	2	にぶい橙	100	SJ185No5
6	坏	(13.9)	4.7	(9.2)	E H J	2	橙	10	SJ185 体部下半-底部ケズリ
7	須恵坏	11.3	3.8	6.8	H	1	灰	100	SJ185 No 3 黒色粒子多 秋開産
8	須恵坏	(13.6)	3.3	6.8	ABH I J	2	にぶい橙	60	SJ185 No10 酸化焙焼成に近い 木野産
9	須恵高台碗	17.3	8.1	9.1	BH I J	3	にぶい橙	90	SJ185 No 2 木野産 焼き甘い 二次被熱痕あり
10	灰釉浄瓶		10.4		H	1	灰オリーブ	90	SJ185 No12 描投産 K-14号窯式 黒色粒了含む
11	小型壺	11.3	10.5	7.2	ADEH J	2	褐	95	SJ185 No 8
12	小型壺	(14.0)	9.9		DE H	3	にぶい褐	20	SJ185
13	甕	20.8	19.3	7.4	DE H J	2	橙	90	SJ185 No 4
14	甕	18.6	26.5	4.6	ADH J	2	にぶい褐	60	SJ185 No 1
15	甕	25.1	31.6	7.3	A E H J	2	にぶい褐	70	SJ185 No 6
16	須恵甕				BH I J	1	灰	破片	SJ185 No11 木野産 平行叩き+同心円当て具
17	高台碗	(14.0)	4.2		DE H	1	浅黄橙	10	SJ186 内面ミガキ+黒色処理
18	高台碗		2.4	(7.0)	EII J	2	にぶい黄橙	30	SJ186 内面ミガキ
19	刺登				DE H	1	にぶい黄橙	5	SJ186 Pit 1 ロクロ整形

第188号住居跡 (第176図)

第188号住居跡は、F-7・8グリッドに位置し、重複する第187号住居跡に切られていた。平面形は長方形で、規模は長径4.13m(現在長)、短径3.25m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-13°Wを示す。

床面は平坦で、第187号住居跡の床面とはほぼ同一レベルで続く。カマドは検出されなかった。

ピットは南壁に掛かって1本検出されたが、遺構に伴うものではない。

出土遺物は検出されなかった。住居の時期は不明確で、第187号住居跡との関係から7世紀前半またはそれ以前という限定ができるのみである。

第189号住居跡 (第177図)

第189号住居跡は、F-8グリッドに位置し、重複す

る第94号土壌に切られていた。

平面形は正方形を基本とするが、北壁と南壁に張り部を設けている。規模は長径3.94m、短径3.06m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-102°Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南端に設置されている。カマド主軸はやや南に振れている。燃焼部は壁を切り込み、細長く延びる煙道部に続く。

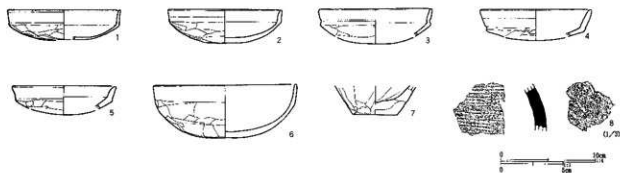
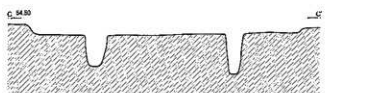
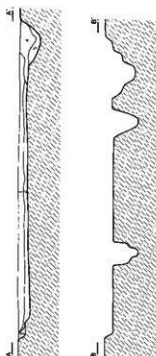
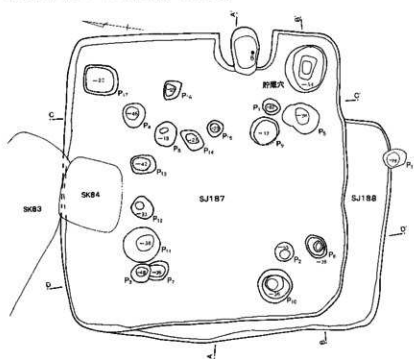
ピットは5本検出された。Pit 1は南西コーナー部にあり、住居に伴うものと考えられる(カマド対向ピット)。Pit 2~4は中世段階のものと推定される。Pit 5は床面が乗っており、住居よりも古い。深さ1.26mと非常に深く、井戸跡の可能性が高い。

土壌は3基検出された。1・2号土壌は床下土壌と思われる。3号土壌に関しては、カマド前面に灰層が

第94表 第187号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.1		H J	3	橙	40	粉っぽい素地上
2	坏	(12.0)	3.5		EII J	2	橙	30	
3	坏	(12.0)	2.9		A E J	2	にぶい橙	15	
4	坏	(11.8)	2.8		ABCDE	1	明赤褐	10	口縁下端沈積
5	坏	(11.0)	2.3		ABCDE	1	橙	10	
6	坏	(15.0)	5.5		H J	3	橙	70	カマド No.1 粉っぽい素地上
7	甕		3.1	4.6	E H J	2	橙	60	
8	須恵甕				BEH J	1	灰白	破片	群馬産(藤岡産か) 平行叩き

第176図 第187・188号住居跡・出土遺物



SJ187

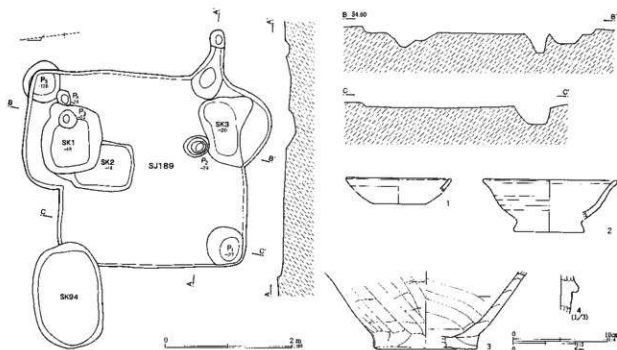
- 1 青褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色砂・白色粘土層
- 2 黒褐色土 ローム粒層
- 3 黄褐色土
カマド
- 4 黒褐色土 粘土質・白色粘土少量
- 5 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少量

広がっていたため、住居に伴うものと判断した。南壁の張り出しは3号土壌と一体と考えられ、あるいは住居以前の土壌の可能性もある。北壁の張り出しは住居に付設されていたものと考えて良い。

出土遺物は少なく、ロクロ上師器の小皿、高台椀、

甕、羽釜が検出されている(第177図)。いずれも小片で、全体の器形が判明するものはない。3の甕は器壁が厚く、底部は砂底である。4の羽釜は土師質で、踵は低い。時期は10世紀末葉～11世紀前半と推定される。

第177図 第189号住居跡・出土遺物



第95表 第189号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(11.0)	1.4		DEH	1	浅黄橙	10	ロクロ土師器
2	高台碗	(14.0)	4.1		ABEH	3	にぶい黄橙	20	
3	甕		8.1	(10.0)	EHJ	2	褐	15	Pit 1 底部粗砂付着
4	羽釜				EH	2	にぶい褐	5	土師質

第180号住居跡 (第178図)

第190号住居跡は、H-3・4グリッドに位置し、住居北東部は攪乱を受け大きく抉り取られている。第22号掘立柱建物跡との新旧関係は不明。第6号櫓列との関係は本住居跡の方が古いものと考えられる。

平面形は比較的整った正方形で、規模は長径3.90m、短径3.60m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-69°-Eを示す。

床面は全体に平坦で、壁際を除き、堅く踏み固められていた。

カマドは東壁の南寄りに設置され、焼成部は壁を切り込んでいる。焼成部底面は緩やかに窪み、細長く延びる煙道部に続く。焼成部側壁上部は強く被熱していた。カマド袖は白色粘土を用いて構築されていたが、かなり流失しており、遺存状態はあまり良くない。

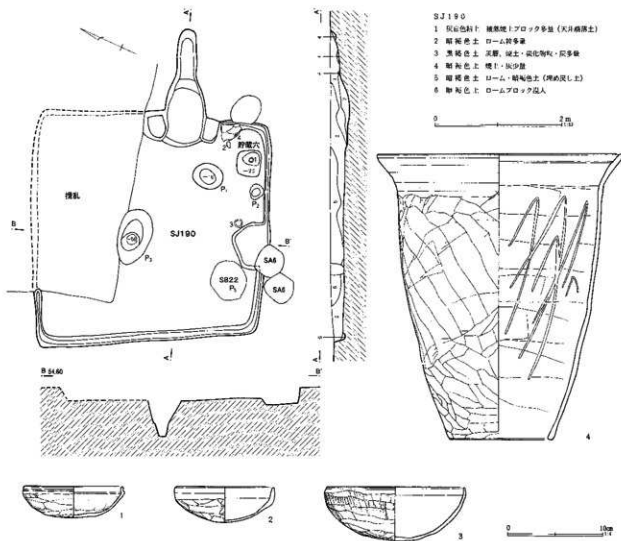
ピットは3本検出された。Pit 1は貼床を除去した

段階で検出された。深さ16cmと浅く、壁から底面にかけて白色粘土が薄く敷かれていた。性格は不明である。Pit 2・3は住居床面を切っていた。

貯蔵穴はカマド右脇の南東コーナー付近に位置する。方形プランで、長径42cm、深さ22cm、埋土上層から完形に近い土師器環が出土している。

出土遺物は少ないが、完形、または残存率の高い土師器環と甕が検出された(第178図)。第178図1は貯蔵穴内出土。小振りの環で、口縁部が短く立ち上がる。2はカマド脇の床面から出土した。完形。3は住居中央南壁寄りの覆上下層から出土した。口径14.6cmとやや大振りである。1～3の環はいずれも体部上端から底部にかけてヘラケズリ調整が施されている。4の甕はカマド右脇の壁直下に横倒しの状態で検出された。住居の時期は7世紀後半と考えられる。

第178図 第190号住居跡・出土遺物



第96表 第190号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	10.5	3.3		EHJ	2	にぶい褐	95	No.3 貯蔵穴
2	坏	10.4	3.7		EHIJ	2	にぶい橙	100	No.2 底部黒斑
3	坏	14.6	5.7		EHIJ	2	橙	95	No.4
4	瓶	26.0	29.9	(10.8)	BDEHIJ	2	橙	90	No.1 内面木口ナゲミガキ

第191号住居跡 (第179図)

第191号住居跡は、H・I-3グリッドに位置する。住居の大半は調査区外に延びており、カマドと東壁部が検出されたに留まる。東側に隣接する第192号住居跡とカマドが切り合い、本住居跡の方が新しいことが判明した。

平面形は方形系と推定され、規模は長径2.79m、短径0.74m (現在長)、深さ0.08mを測る。主軸方向は

N-74°-Eを示す。

床面は貼床され、南に向かってやや傾斜している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに設置されていた。燃焼部から煙道部にかけて、壁を切り込んで構築され、底面には灰層が薄く堆積していた。袖部は明確に検出できなかった。

貯蔵穴はカマド脇のコーナー部に設けられている。深さ34cm。

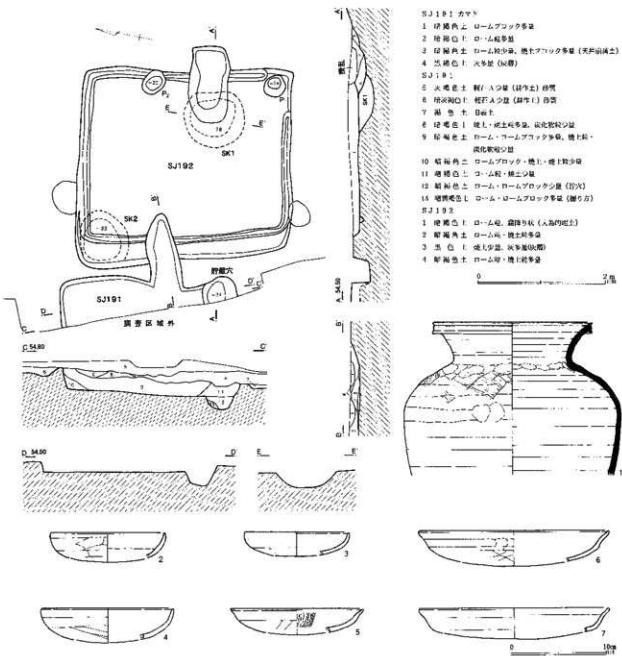
大寄Ⅰ区

出土遺物は須恵器の小型甕(壺)と土師器環の破片が検出されたのみである(第179図1・2)。須恵器甕は末野麻と思われる。焼きは良い。2の土師器環は体部は無調整で、やや平底風の底部に移行するものと思われる。住居の時期は不明確であるが、8世紀後半頃であろうか。

第192号住居跡(第179図)

第192号住居跡は、H・I-3グリッドに位置し、第

第179図 第191・192号住居跡・出土遺物



191号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。

平面形は正方形で、規模は長径3.38m、短径3.25m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-82°-Eを示す。床面は平坦である。住居理上はロームブロック・ローム粒子混じりの暗褐色土で、人為的に埋め戻された形跡が認められた。

カマドは東壁のほぼ中央に設置され、燃焼部から煙道部は壁をやや切り込んで構築されていた。袖部は検

第97表 第191・192号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(16.8)	16.0		B I J	1	暗緑灰	15	SJ191 木野宗
2	坏	(12.0)	2.6		DE	2	橙	10	SJ191
3	坏	(11.0)	2.4		DEH	2	橙	15	SJ192 カマド
4	坏	(14.0)	3.2		DEH	2	にぶい橙	10	SJ192
5	坏	(14.0)	2.5		CDEH	1	橙	5	SJ192 内面放射暗文
6	皿	(20.0)	3.2		DH	2	黄橙	10	SJ192
7	皿	(20.0)	2.5		EH	2	橙	5	SJ192

出されず、住居廃絶時に片づけられた可能性が高い。

ピットはカマド両脇から2本、壁に掛かって2本、合計4本検出されたが、住居に伴う可能性は低い。

壁溝はカマドを除き全周する。西壁部の壁溝は壁から50cmほど内側を巡っており、一度拡張されたものと考えられる。

土壌は2基検出された。1号土壌はカマド前面に位置し、上面には床面が乗っていた。床下土壌と考えられる。2号土壌は北西コーナー部にあり、掘り方の一部かもしれない。

出土遺物は少なく、土師器環3点と皿が2点検出されたに過ぎない(第179図3～7)。いずれも小片で、器形の判明するものはない。5の内面には放射状暗文が施されている。丸底の坏、暗文坏、皿の組み合わせから、住居の時期は8世紀前半と考えると良からう。

第193号住居跡(第180図)

第193号住居跡は、H・I-3・4グリッドに位置する。第22号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明瞭である。調査時の所見では、本住居跡床面下から第22号掘立柱建物跡 Pit 1が検出され、本住居跡の方が新しいものと判断した。

平面形は正方形で規模は長径4.07m、短径3.58m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-96°-Eを示す。

床面は全体に平坦で、壁際を除き、堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部はほぼ壁内におさまり、煙道部は急角度で壁外に立ち上がる。袖は白色粘土が用いられておらず、あまり明確なものではない。

ピットは2本検出されたが、遺構に伴うものではない。壁溝は部分的に途切れていた。

出土遺物は少なく、土師器環と皿・甕が検出されている(第180図)。1は完形の坏で、南壁際の床面から出土した。口縁部は直立し、体部はやや扁平化している。2の坏はカマド内出土。3・4は丸底深身の坏。4はほぼ床面出土。6の壺はカマド内出土。7・8の甕は同一個体と思われる。口縁部は水平方向に強く折れ、胴部器壁は薄い。住居跡の時期は7世紀末葉～8世紀初頭頃と考えられる。

第194号住居跡(第181図)

第194号住居跡は、H-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第195号住居跡、第21号掘立柱建物跡を切っていた。

平面形は横長方形で、規模は長径3.82m、短径2.63m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。

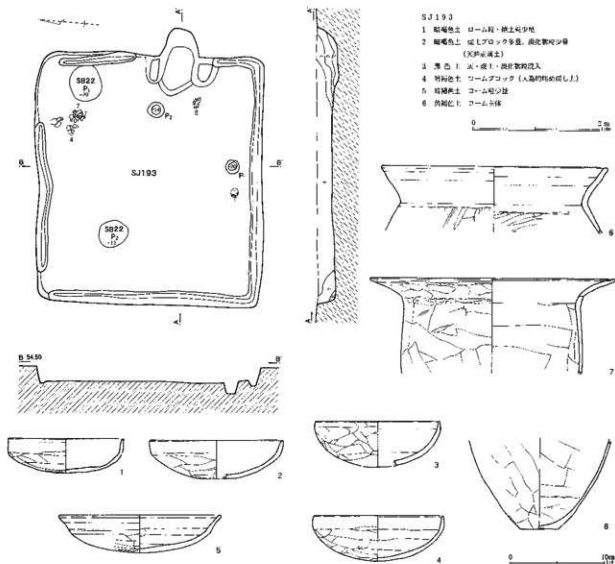
床面は全体に平坦で、堅く踏み固められていた。カマドは東壁の北寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、中世のピット(Pit14)の擾乱を受けている。袖はあまり明確なものではない。

ピットは17本検出されたが、大半は中世のピットと考えられる。カマド前面にある Pit 2からは土師器環と須恵器高台皿が、Pit 3からは土師器環・甕、須恵器高台碗の破片が出土しており、住居に伴うものと思われる。

土壌は2基検出されている。1号土壌は上面に床面が乗っており、床下土壌または、掘り方の一部と思われる。2号土壌は北西コーナー部にあり、深さ48cmと深い。貯蔵穴の可能性もあるが性格は不明である。底面からは、土師器小型甕の破片上にミニチュア土器が3点並んだ状態で出土した。

出土遺物は少ない(第181図)。第181図1～3はミニ

第180図 第193号住居跡・出土遺物



第98表 第193号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.2	3.6		ADH J	2	橙	100	No.1
2	環	(14.0)	4.0		H J	2	にぶい褐	20	カマド
3	環	(13.0)	4.7		AEH	2	にぶい黄橙	20	底部黒斑
4	環	13.8	4.7		DEH J	2	にぶい褐	75	No.4 底部黒斑
5	皿	(17.0)	4.9		EH J	1	にぶい橙	20	
6	蓋	(24.0)	6.9		EH J	2	橙	15	カマド
7	甕	(26.0)	10.0		DEH J	2	にぶい褐	20	No.3
8	蓋		9.5	4.0	EII J	2	褐	20	No.2

チュア土器である。1・3は2号土塚、2は西壁際から出土した。いずれも同一形態で、底部は平底でやや突出気味。ナデ調整。体部は指頭ナデ、口縁部はヨコナデが施されている。4・5は土師器環。体部は無調整(指押さえ)、底部は平底となる。6～11は須恵器椀

皿類で、末野座と思われるが、7・8は片岩が含まれない。12・13は「コ」の字状口縁装で、器壁はやや厚く、やや形態に崩れがみられる。14・15は小型甕、おそらく台付装であろう。16は小型の鉢か。住居の時期は、9世紀末葉頃に位置付けられる。

第195号住居跡 (第181図)

第195号住居跡は、H-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第21号独立柱建物跡を切り、第194号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長径4.36m、短径3.58m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。床面は概ね平坦である。カマド前面は堅く締まっていたが、壁際はやや軟弱であった。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。袖部には白色粘土が僅かに残存していた。

ピットは5本検出されたが、柱穴と考えられるものはない。壁溝はカマドのある南東コーナー部周辺を除き巡っていた。また、北壁から壁ラインに直交するように溝が延びていた。間仕切り溝か。

出土遺物は少ない(第182図)。1は深身の土師器形で、底部を欠く。体部は無調整で、体部下端にケズリが入る。粘上積み上げ痕を明瞭に残す。2は小型(台

付) 甕でカマド内出土。3~5は典型的な「コ」の形状口縁甕である。4と5は同一個体かもしれない。7は須恵器裏底部である。時期的には9世紀後半である。

第196号住居跡 (第183図)

第196号住居跡は、調査区西端のI-3グリッドに位置する。住居西半は調査区外に延び、また乱瓦の影響で遺構の詳細は不明である。

平面形は方形と推定されるが、南壁の壁溝外側にも掘り込みが認められた。壁溝ラインよりもやや外側に膨らみ、建て替いに伴うものか、明確にできなかった。規模は長径4.06m、短径3.03m(現在長)、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-81°-Eを示す。

床面は平坦で、貼床は2枚確認された。カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部はやや壁を切り込んでいた。底面は緩やかに窪み、第4層が張り方、その直上が火床面となろう。袖は検出されなかった。

ピットは4本検出されたが、柱穴は不明である。Pit

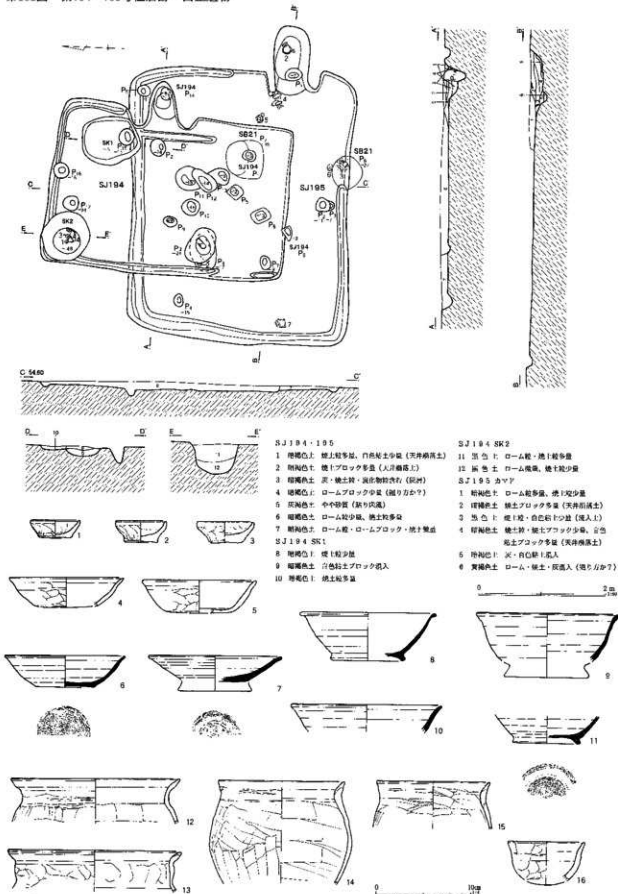
第99表 第194号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	ミニチュア	5.2	1.8	3.6	HJ	2	にぶい橙	75	Na 3 SK 2内
2	ミニチュア	5.2	2.2	3.6	HJ	2	にぶい濁	95	Na 1
3	ミニチュア	6.0	2.2	3.3	DIIJ	2	にぶい濁	100	Na 5 SK 2内
4	環	(12.0)	3.0		AEH	1	にぶい橙	15	Pit 2 体部無調整
5	環	(12.0)	3.4	(7.1)	AElI	1	橙	20	Pit 3 体部無調整
6	須恵環	(12.6)	3.3	(6.0)	DHIIJ	3	灰	40	木野産 軟質
7	須恵高台皿	(14.0)	2.7		ADHJ	2	橙	25	Pit 2 木野産? 内面重ね焼き痕
8	須恵高台杯	(14.0)	5.0	(7.0)	AH	2	にぶい黄橙	15	木野産か
9	須恵高台椀	(15.0)	5.0		HIIJ	2	濁灰	15	SK 1 木野産
10	須恵高台椀	(16.0)	2.9		HIIJ	1	灰	15	Pit 3 木野産
11	須恵高台椀		2.9	(7.0)	AHIIJ	3	にぶい黄橙	30	木野産
12	甕	(18.0)	4.7		ABDH	2	濁	15	
13	甕	(18.4)	4.2		DEH	2	橙	15	
14	小型甕	(13.4)	10.8		IIJ	2	にぶい橙	25	Na 4・6 外面二次被熱
15	小型甕	(12.0)	5.0		DEHJ	2	にぶい濁	20	
16	鉢?	(8.0)	4.1		AEH	2	にぶい黄濁	25	SJ194+195 確認面

第100表 第195号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.4)	5.0		DEHIIJ	2	にぶい濁	30	積み上げ痕明瞭 体部無調整 体部下端ケズリ
2	小型甕	12.4	9.8		DEHJ	2	橙	80	SJ195 カマド Na 1 + 194
3	甕	(19.0)	6.5		DEHIIJ	2	橙	20	Na 4
4	甕	(20.6)	11.8		DEHJ	2	にぶい橙	20	Na 2
5	甕		11.0		EIIJ	2	にぶい濁	60	カマド Na 1・2
6	台付甕		2.7	10.2	DEHJ	2	橙	100	Na 3
7	須恵甕		5.5	(16.4)	EHIJ	1	灰	60	Na 5 木野産

第181図 第194・195号住居跡・出土遺物



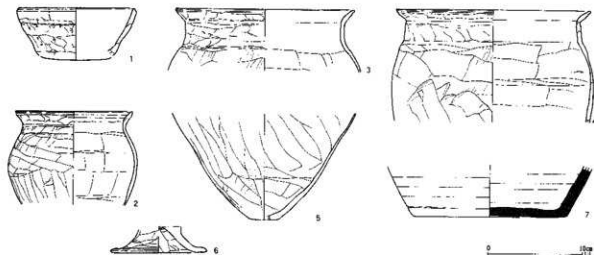
SJ194・195

- 1 埴間色土 埴土粒多量、白粉質土少量（天井橋瓦土）
 - 2 埴間色土 埴土ブロック多量（大津橋瓦土）
 - 3 埴間色土 灰・埴土粒・灰土動物骨片（灰神）
 - 4 埴間色土 ロームブロック少量（廻り方か？）
 - 5 埴間色土 中や碎粒（灰り灰濁）
 - 6 埴間色土 ローム粒少量、埴土粒多量
 - 7 埴間色土 ローム粒・ロームブロック・埴土層
- SJ194 SK1
- 8 埴間色土 埴土粒少量
 - 9 埴間色土 白色粘土ブロック混入
 - 10 埴間色土 埴土粒多量

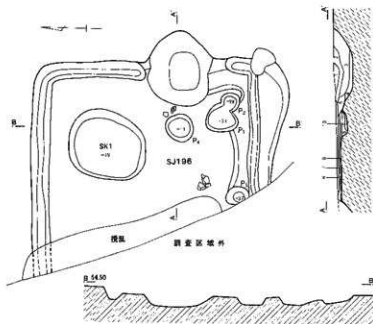
SJ194 SK2

- 11 灰色土 ローム粒・埴土粒多量
 - 12 灰色土 ローム塊、埴土粒少量
- SJ195 カマド
- 1 埴間色土 ローム粒多量、埴土粒少量
 - 2 埴間色土 埴土ブロック多量（天井橋瓦土）
 - 3 灰色土 埴土粒、白色粘土粒（灰土）
 - 4 埴間色土 埴土粒・埴土ブロック少量、灰色土ブロック多量（天井橋瓦土）

第182図 第195号住居跡出土遺物



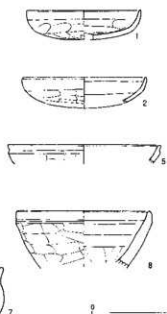
第183図 第196号住居跡・出土遺物



SJ196

- 1 埴輪内上 埴土製手摺
- 2 埴輪内上 埴土製・灰色埴土手摺 (天舟形)
- 3 埴輪内上 埴土製・灰色埴土アコック手摺 (天舟形)
- 4 埴輪内上 ローム・破片混入 (掘り方)
- 5 埴輪内上 埴土アコック手摺、同色埴土手摺 (天舟形上の「背」?)
- 6 埴輪内上 ローム製・埴土手摺
- 7 埴輪内上 ローム製・ロームアコック混入 (掘り方)
- 8 埴輪内上 ローム製・ロームアコック混入 (掘り方)
- 9 焼土 炭化物製 (P14 床下のヒット)
- 10 赤土 埴土・白灼土 (P14 床下のヒット)

0 2m



4は上面に貼床が乗っている。土壇は1基、北東コーナー内側から検出された。床上下壇または、掘り方の

一部であろう。壁溝はカマドを除き廻っている。南壁側の壁溝内側

第101表 第196号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.0		DEH	2	にぶい橙	30	攪乱内
2	坏	(13.0)	2.7		A EH	2	にぶい橙	25	SK 1
3	皿	(15.0)	2.8		DEH	2	にぶい橙	10	
4	皿	(16.0)	3.6		EH	2	にぶい橙	15	
5	坏	(16.0)	2.0		DEH	1	橙	10	攪乱内
6	甌	(30.0)	9.9		DEH	2	にぶい黄橙	10	
7	鉢	(9.0)	5.0		DEH	1	にぶい橙	35	攪乱内
8	鉢	(14.0)	6.0		A EH	2	明赤褐	25	攪乱内

にも溝が巡るが、これは掘り方と思われる。

出土遺物は少ない(第183図)。土師器の坏・皿・鉢・甌があるが、1・5・7・8は攪乱上内から出土したもので、確実に遺構に伴う遺物とは断定できない。1・2の土師器坏は扁平化した丸底風のタイプで、1は口縁下に無調整部を残す。2は口縁直下からケズリが施される。2の坏と皿の存在から、住居の時期は8世紀前半と考えられる。

第197号住居跡(第184図)

第197号住居跡は、I-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第198号住居跡を切り、南西コーナー部を第199号住居跡に切られていた。また、南壁の内側は溝状に延びる攪乱によって床面が削平されている。第198号住居跡とは主軸もほぼ一致し、時期も近いことから建て替えの可能性が高い。

平面形は横長方形で、規模は長径3.66m、短径3.03m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。

床面はほぼ露出していた。全体に平坦で堅い。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築されている。先端付近は中世のピットの攪乱を受けていた(Pit 4)。燃焼部底面は緩やかに窪み、更に一段掘り込まれていた。掘り方と思われる(第4層)。袖部は遺存していなかった。

ピットは4本検出された。Pit 1は住居に伴うもの

で、貯蔵穴かもしれない。Pit 2~4は遺構に伴うものではない。

壁溝は南壁から西壁にかけて巡る。北壁部は掘り方と重なって不明瞭であった。

出土遺物は少ない。第184図2の碗は本住居跡と重複する第198号住居跡の破片が嵌合した。4はカマドから出土した土師器の發である。口縁部が弓状に外反するもので、「コ」の字状口縁装に移行する前段階の形態である。住居の時期は不明瞭であるが、8世紀末葉~9世紀初頭頃と思われる。

第198号住居跡(第184図)

第198号住居跡は、I-4グリッドに位置し、重複する第197号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長径3.19m、短径2.58m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。床面は平坦で、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面は床面を僅かに掘り込んでいる。第6層が掘り方と考えられ、その直上面が火床面であろう。

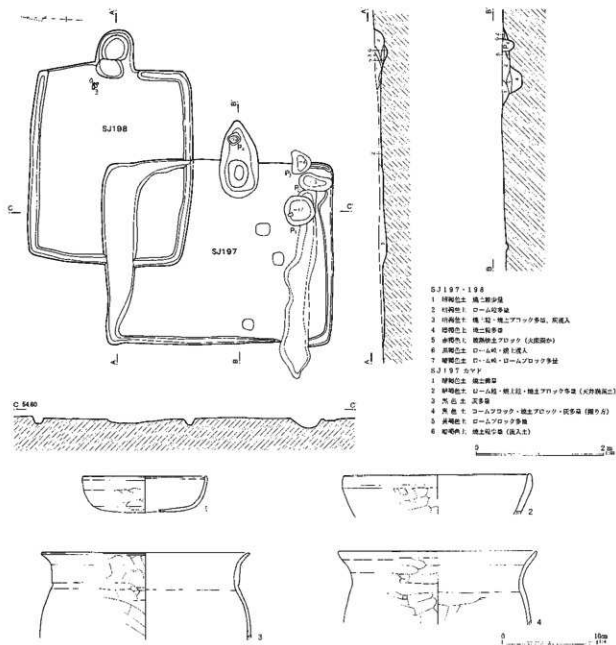
ピットは検出されなかった。壁溝は東壁北半を除き、巡っていた。

出土遺物は少ない。第184図1は覆土出土の土師器坏である。底面は平底風となり、ヘラケズリ調整され

第102表 第197・198号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.7	(9.6)	DEH	2	にぶい黄褐	10	SJ198 袖部無調整
2	碗	(20.0)	4.0		A DEH	2	橙	10	SJ197・198
3	甌	(22.0)	9.1		A DEH	1	にぶい黄褐	15	SJ198カマドNo1
4	甌	(21.0)	7.8		A DE I	2	橙	5	SJ197カマド

第184図 第197・198号住居跡・出土遺物



る。体部は無調整である。3はカマド内出土の土師器甕である。住居の時期は不明確であるが、8世紀末葉～9世紀初頭頃と推定される。

第199号住居跡 (第185図)

第199号住居跡は、I-4グリッドに位置する。第200号住居跡の上面にカマド火床面と思われる硬化した被熱層が確認された。また、その西側に直径75cm、深さ31cmのピットが検出された。おそらくカマド対向ピットとなるものと考え、その範囲を住居跡と認定し

た。床面は削平されており、規模・形態等の詳細は不明である。新旧関係は、第197・200号住居跡よりも新しい。

出土遺物は Pit 1 から板状の礫が2点検出されたのみである。時期は不明確ながら、カマド燃焼部底面が被熱することや、カマド対向ピットを持つことから10世紀後半～11世紀段階の住居跡と推定される。

第200号住居跡 (第185図)

第200号住居跡は、調査区南西部のI・J-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第199号住居

大寄Ⅰ区

跡、第17・19号清跡が覆土上面に被っていた。

平面形は正方形である。比較的大型の住居跡で、規模は長さ5.40m、短径5.02m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、壁際を除き堅く踏み固められていた。カマドは東壁に2基設けられていた。袖部や埋土の遺存状態から、南側のカマド(2号カマド)から北側のカマド(1号カマド)に付け替えられたことが判明した。

1号カマド燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面

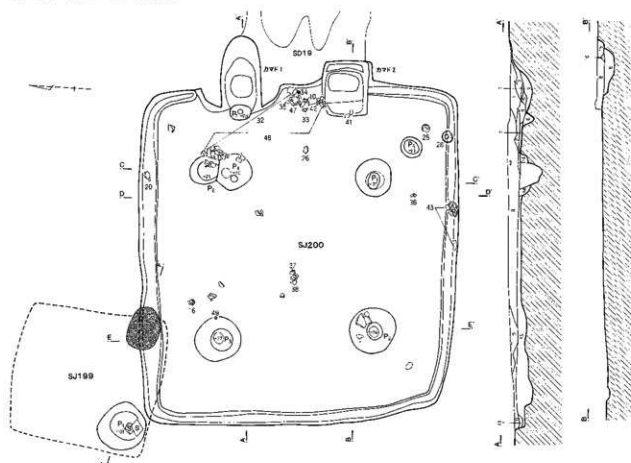
は床面よりも掘り下げられている。第6層は掘り方と思われ、6層上面が火床面となろう。袖は白色粘土を用いて構築されているが、カマド前面にかなり流出していた。2号カマドは方形の掘り込みで、燃焼部は壁をやや切り込んでいた。袖は取り外されており、遺存しない。

ピットは7本検出された。Pit 1~4は主柱穴で、柱痕が遺存していた。いずれも深さ70cmを越え、非常に深くしつかりした掘り込みである。壁溝はカマドを除き全周する。

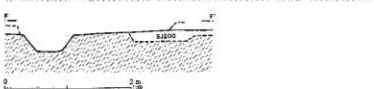
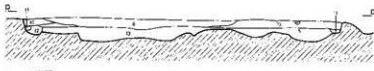
第103表 第200号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	13.0	3.5		ADEH	1	明赤褐	60	掘り方 体部上端無調整
2	環	12.6	3.7		ADEGH	2	橙	25	体部上端無調整
3	環	12.3	3.7		ADGH	2	橙	30	カマド2 口縁直下からケズリ
4	環	(12.6)	3.3		DEH	2	橙	40	体部上端無調整
5	環	13.0	3.8		ADEH	2	橙	75	Pit 3 体部上端無調整
6	環	(14.0)	3.9		DEH	2	にぶい橙	20	体部上端無調整
7	環	(14.0)	4.1		DEH	2	橙	60	体部上位無調整
8	環	11.6	3.1		ADGH	2	にぶい褐	25	体部上端無調整
9	環	(12.0)	3.2		DEH	2	橙	45	体部上端無調整
10	環	(12.0)	2.9		DEH	2	橙	35	Na11 体部上部僅かに無調整
11	環	(12.8)	3.3		DEH	2	橙	30	体部上位無調整
12	環	12.5	3.2		DEH	2	橙	70	体部上端無調整
13	環	(13.8)	3.2		ADEH	2	橙	45	埋土面 体部上位無調整
14	環	(12.3)	3.1		DEH	2	橙	60	内底面「×」 線刻体部上端無調整
15	環	(12.0)	3.0		DEH	2	にぶい褐	40	体部上位無調整
16	環	12.2	2.5		DEH	2	橙	45	No28 体部上位無調整
17	環	(13.0)	2.9		ADEH	2	明褐	20	体部上端無調整
18	環	(13.0)	3.4		BDEH	2	橙	75	
19	環	15.0	3.1		ADGHI	2	橙	30	口縁直下からケズリ
20	環	11.1	3.4		DRH	2	橙	100	Na7 底部黒灰体部上端無調整
21	環	13.3	2.9	10.6	DEH	2	にぶい橙	80	体部無調整
22	環	14.2	3.0	11.2	DEH	2	橙	75	須みあり
23	環	(13.0)	3.4	(11.0)	DEH	1	にぶい橙	10	
24	皿?	(13.0)	3.0		DEH	2	にぶい橙	20	体部上端無調整
25	環	13.2	3.9		DEH	2	橙	95	No15
26	環	(13.4)	3.1		ADEH	1	橙	50	No13 内面放射暗文
27	環	14.7	2.4	11.0	DEH	1	橙	75	体部ヘラケズリ 内面放射暗文 内面荒れる
28	環	16.4	4.6		DEH	3	にぶい橙	100	Na16 須みあり
29	環	(16.0)	4.6		DEH	2	橙	30	
30	環	(16.8)	6.2		DEH	2	にぶい橙	25	
31	皿	(14.0)	3.2		DEH	2	橙	40	Pit6
32	皿	15.2	3.7		DEG	2	橙	90	No.2・9
33	皿	14.4	3.8		DEH	2	橙	85	No11
34	環				DEH	2	橙		No.9 内底面「×」線刻
35	環				DEH	2	橙		No10 内底面「×」線刻
36	須恵コップ形	(7.5)	5.5	5.9	BF	1	灰	65	No17 底部+体部下端回転ケズリ 南北企張
37	須恵環	(13.0)	3.3	(8.4)	H	1	灰	25	No22 秋間産 底部ヘラ切り

第185図 第199・200号住居跡



C 54.60



SJ199・200

1 壁跡色土 ローム状・粘土質・白色灰土ブロック少量

2 内側粘土 焼土層少量

3 壁跡色土 焼土ブロック多数（天井滴石）

4 壁跡色土 穴・壁土・石灰塊散入

5 壁跡色土 ローム状・焼土・灰散入

6 焼土 土割土ブロック散在

7 壁跡色土 焼土層

8 壁跡色土 コーム粘土層、焼土層少量

9 壁跡色土 焼土層、灰土層少量

10 壁跡色土 ローム状多数、焼土層少量

11 壁跡色土 ローム状多数

12 壁跡色土 ローム状多数

13 壁跡色土 コームブロック・焼土層（張り目・穴）

14 焼土色土 コームブロック・焼土層（張り目・穴）

SJ200 カマド

16 焼土 焼土灰層跡

17 黒粘土 灰層の一部

SJ200 均火

1 壁跡色土 ローム状多数、焼土層少量

2 壁跡色土 焼土層

3 壁跡色土 ローム状多数、焼土・焼土層少量

4 壁跡色土 ローム・ローム状・コーム・コームブロック多数（埋め戻し）

5 壁跡色土 ローム・ローム状・コームブロック多数

6 壁跡色土 コームブロック・焼土層少量

7 壁跡色土 ローム・粘土・石灰散在少量

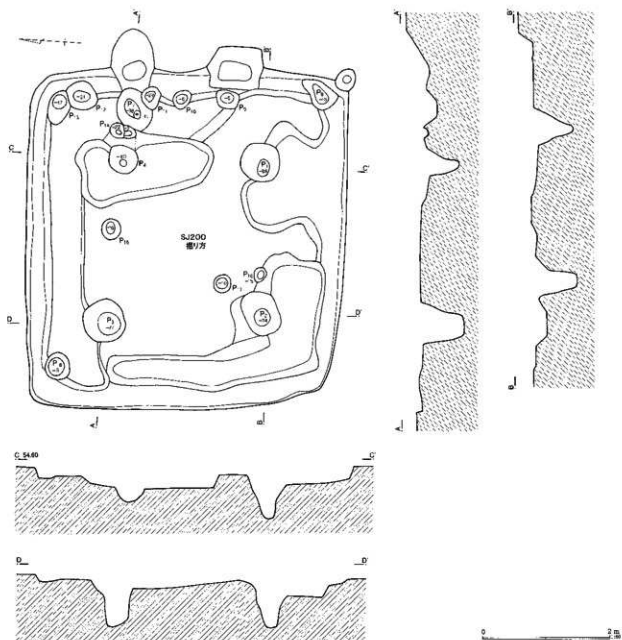
8 壁跡色土 ローム・コームブロック多数

9 壁跡色土 ローム・ローム状多数

10 壁跡色土 ローム・石灰色土ブロック少量

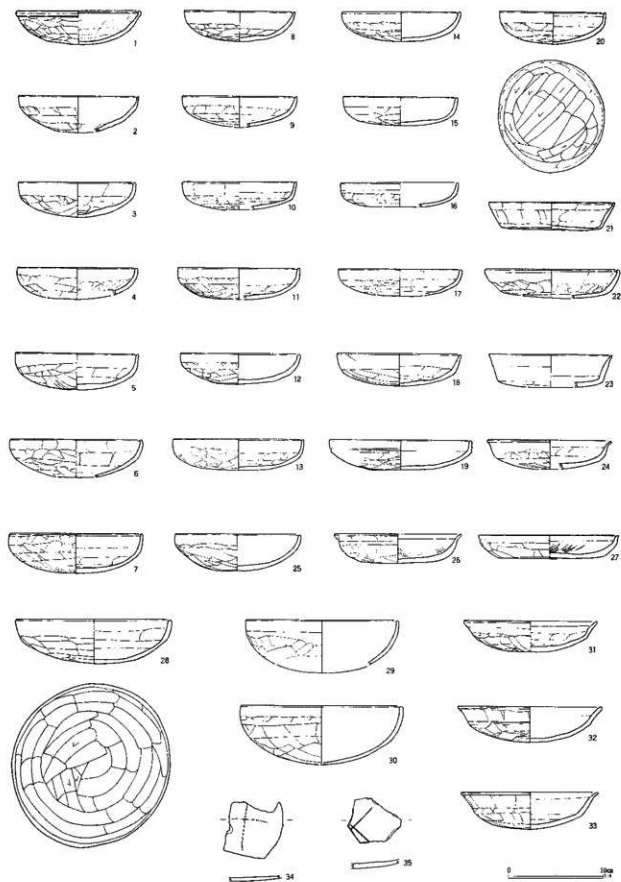
11 壁跡色土 ローム多数、灰層焼土少量

第186図 第200号住居跡掘り方

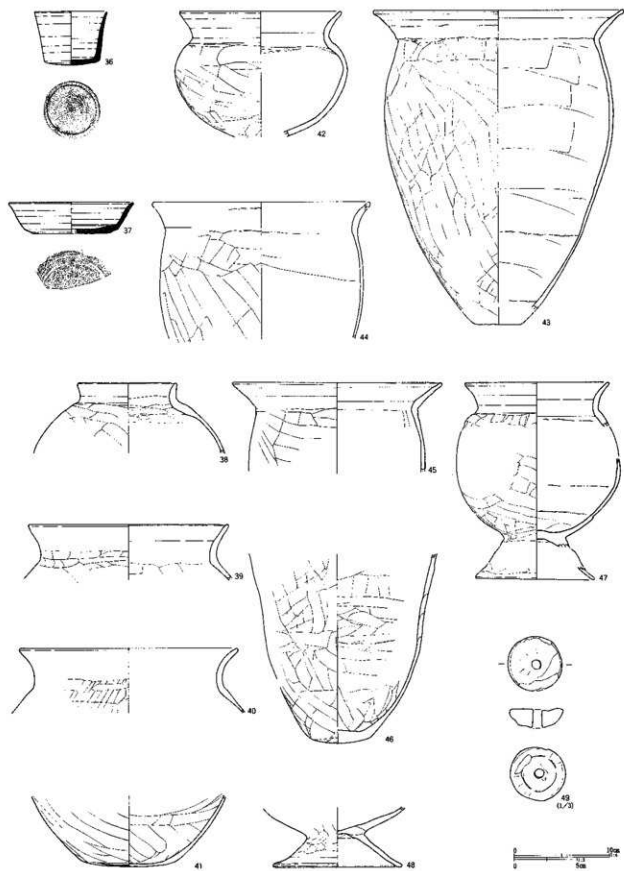


番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
38	壺	10.5	7.4		ABCD	1	にぶい橙	60	No23
39	壺	(21.0)	5.8		DEH	1	にぶい橙	20	Pit 2
40	壺	(23.0)	6.8		ADE	2	にぶい橙	15	
41	壺		7.5	(10.2)	DEH	1	橙	30	No14 カマド2 カマド掘り方 黒炭
42	小型台付甕	(17.0)	13.3		DEH	2	明赤褐	35	No11・12 外面被熱48と同一體
43	甕	(26.6)	34.0		EHJ	2	橙	60	No18・19
44	甕	(22.8)	14.3		DEH	2	にぶい橙	30	
45	甕	(22.0)	9.5		ADEJ	2	にぶい橙	15	カマド2 段ケズリ
46	甕		19.9	6.4	ADEH	2	にぶい褐	40	
47	台付甕	15.2	20.8	12.5	EHJ	2	にぶい褐	60	No10 外面被熱
48	小型台付甕		6.3	(13.4)	DEH	2	明赤褐	25	No12 42と同一體
49	紡錘車	上径4.28cm 下径2.75cm		厚さ1.50cm	重量38.74g	No27			

第187图 第200号住居跡出土遺物(1)



第188图 第200号住居跡出土遺物(2)



床面を除去したところ、基本的に支柱穴の外側を周溝状に掘り下げた形の掘り方が検出された(第186図)。東壁際に不整形の小ピットが連続して掘られていた。

出土遺物は多い(第187・188図)。器種としては、土師器の環・皿・甕・台付甕・壺、須恵器の環・コップ形土器、石製紡錘車がある。土師器環類の出土量が最も多い。第187図1～20・25・28～30は北武藏型環である。1は口縁部が短く内屈するタイプで型式的には古い様相を持つ。主体は口縁部がやや長く内湾気味に直立するタイプで、やや扁平なものである。14・34・35は内面見込み部に「×」状の線刻がある。28～30は深碗タイプで、口径は一回り大きく16cm前後である。26・27は暗文環。内面に放射状の暗文が施されている。24?・31～33は皿。口径は14～15cmとやや小型である。第188図43の土師器裏は器形がほぼ判明する資料である。口縁部は「く」の字状に折れ、胴部上半が膨らむ。42・47・48は台付甕。42と48は同一個体であることが判明した。

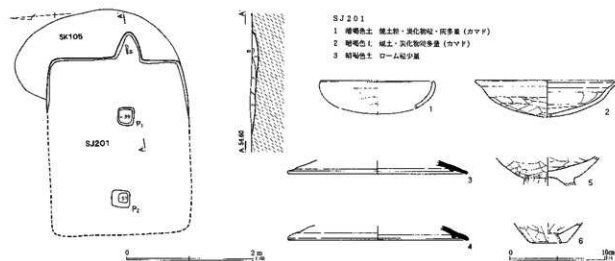
須恵器は少なく、環とコップ形土器がある。環(37)は底部へラ切り後軽いナデ調整されるもので、胎土から秋田産と考えられる。コップ形土器(36)は、体部下端と底部が回転ヘラケズリ調整される。南比企産である。住居の時期は8世紀前半(2/4期)頃と考えられる。**第201号住居跡**(第189図)

第201号住居跡は、I-5グリッドに位置する。第105号土壌を切ってカマドが構築されていた。カマドと床面の一部が検出されたため、詳細は不明である。

平面形は方形と推定され、規模は長さ2.25m、短径1.10m(現在長)、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-95°-Eを示す。

床面は大半が削平され、カマドとその周囲が僅かに残存していたが、あまり硬化した部分はみられなかった。カマドは東壁の南寄りに設置され、焼土・灰を多量に含む。遺存状態が悪いため、具体的な構造は不明確である。ピットは2本検出されたが、住居に伴うものではない。

第189図 第201号住居跡・出土遺物



第104表 第201号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	3.8		DEH	2	橙	10	カマド
2	皿	(15.0)	3.8		DEH	2	橙	30	
3	須恵環壺	(19.0)	1.4		EJ	1	灰	5	木野産
4	須恵環壺	(19.0)	1.5		HJ	3	灰黄	5	カマド 木野産
5	台付甕		3.0		ADEH	2	暗赤褐	50	
6	甕		2.1	(4.0)	DEH	2	にぶい黄橙	25	

出土遺物は少ない(第189図)。土師器環と皿・古付甕・甕、須恵器蓋が検出されている。第189図1の土師器環と4の須恵器蓋はカマド内出土。須恵器蓋は2点あり、いずれも内面に身受けのかえりが付く。木野産。住居の時期は8世紀初頭頃と考えられる。

第202号住居跡(第190図)

第202号住居跡は、I-5グリッドに位置する。第203号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。向住居は北壁を共有することから、第203号住居跡から本住居跡に建て替えられたものと考えられる。

平面形は横長方形で、規模は長径4.42m、短径2.78m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面は概ね平坦であった。カマド前面から中央付近の床面は堅く踏み固められていた。壁周辺は全体に軟弱であった。

カマドは東壁に2基検出された。1号カマドは東壁の南よりに設けられ、燃焼部は壁を切り込んでいる。袖部には白色粘土が僅かに認められたが、明瞭な袖部ではない。底面は掘り下げられ、掘り方向を持つ。第4層が吹層である。2号カマドは東壁の北よりに検出された。袖部は全く残されておらず、遺存状態から、2号カマドから1号カマドに付け替えられたものと考えられる。

貯蔵穴は1号カマド右脇の南東コーナー部に設けられていた。不整円形で、南壁ラインよりも外側に膨らんでいる。深さ35cm。貯蔵穴内からは土器がまとまって出土した。また、対角線上の北西コーナーには1号土壇がある。上面には床が張られておらず、住居使用時には開口していたものと考えられる。掘り方を除去した段階で、北東コーナー、南西コーナーにもそれぞれ土壇が検出された(SK2・3)。掘り方か。

出土遺物はカマド及び貯蔵穴周辺から多量に検出されている(第191・192図)。器種としては土師器環・甕、須恵器高台椀・皿と土製紡錘車がある。1号カマドからは2の土師器環、12・14の須恵器高台椀、24の土師器甕、28の小型甕、土製紡錘車(22)が検出されている。貯蔵穴からは4の土師器環、8の須恵器皿、

10・11・13の須恵器高台椀、18~20・29の土師器甕が出土した。18は混入であろう。

土師器甕は「コ」の字状口縁装の退化形態である。須恵器はほとんどが木野産と思われ、高台椀と皿が基本セットとなる段階である。住居の時期は9世紀末葉~10世紀初頭頃と考えられる。

第203号住居跡(第190図)

第203号住居跡は、I-5グリッドに位置し、第202号住居跡に切られていた。北壁の共有状況や出土遺物から本住居跡から第202号住居跡に建て替えられたものと考えられる。

平面形は縦長の長方形であるが、南東コーナーから南壁部にかけての部分か明確に検出できなかった。規模は長径4.15m、短径3.15m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南端に設けられ、住居の主軸に対して、カマドのそれはやや南に振れている。燃焼部は楕円形の掘り込みを持ち、焼上灰が多量に含まれていた。袖は検出されなかった。

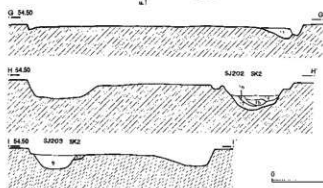
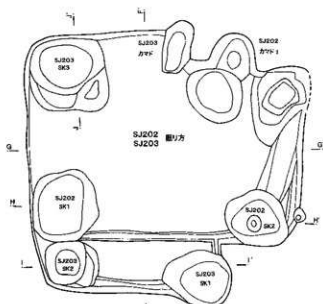
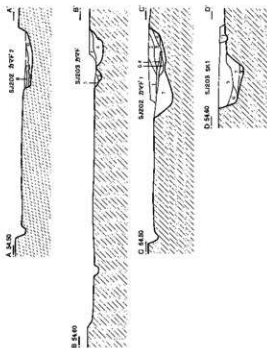
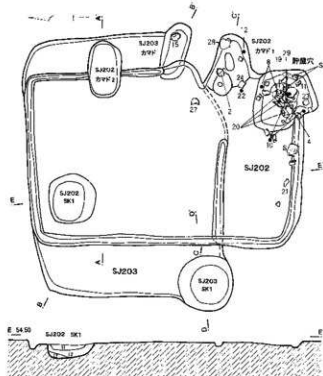
南西コーナー部には土壇が1基設けられていた。壁ラインからやや外側に張り出すため、帰属関係に不明確な点もあるが、住居に伴うと判断した。土師器環(6)が出土している。床面を除去した段階で、北西コーナー、北東コーナーから土壇が検出された。掘り方であろうか。

出土遺物は土師器皿・甕、須恵器高台椀などがある(第191・192図)。第191図6の土師器皿と15の須恵器高台椀はカマドから、30の甕底部が覆土から出土した。その他、第202・203号住居跡のいずれに属するか帰属関係が不明確な遺物もあるが、両住居跡出土遺物はほぼ同時期である。9世紀末葉~10世紀初頭頃に位置付けられよう。

第204号住居跡(第193図)

第204号住居跡は、H-6グリッドに位置する。重複する第9号掘立柱建物跡を切り、第205号住居跡に切られていた。カマドが2基設けられ、南壁部の壁ラインと壁溝ラインが一致しないことから、建て替えられ

第190図 第202・203号住居跡・掘り方



- SJ202 カマド I - 2
- 1 褐色土 白色硝子ブロック多量 (大川原層土)
 - 2 褐色土 硝子ブロック・白色硝子ブロック多量 (大川原層土)
 - 3 暗褐色土 硝子・硝化物類・灰 (天井沼浜土)
 - 4 白色土 灰・硝子粒混入。灰層
 - 5 暗褐色土 ローム層・硝子粒混入
 - 6 暗褐色土 灰土・硝子粒混入 (掘り方の一部)
 - 7 茶褐色土 コームブロック少量
 - 8 暗褐色土 コームブロック・硝子粒混入 (掘り方)
 - 9 暗褐色土 コーム灰・硝子粒・灰化硝子粒混入
 - 10 黄褐色土 灰・硝子粒多量

SJ202 SK1 - 1

- 11 黄褐色土 硝子・硝化物類・硝子層
- 12 暗褐色土 ローム層・灰土ブロック多量
- 13 暗褐色土 硝子粒混入・白色硝子ブロック多量
- 14 黄褐色土 灰土粒混入
- 15 暗褐色土 コームブロック・白色硝子ブロック多量
- 16 白色土 白色硝子層
- 17 暗褐色土 ロームブロック多量

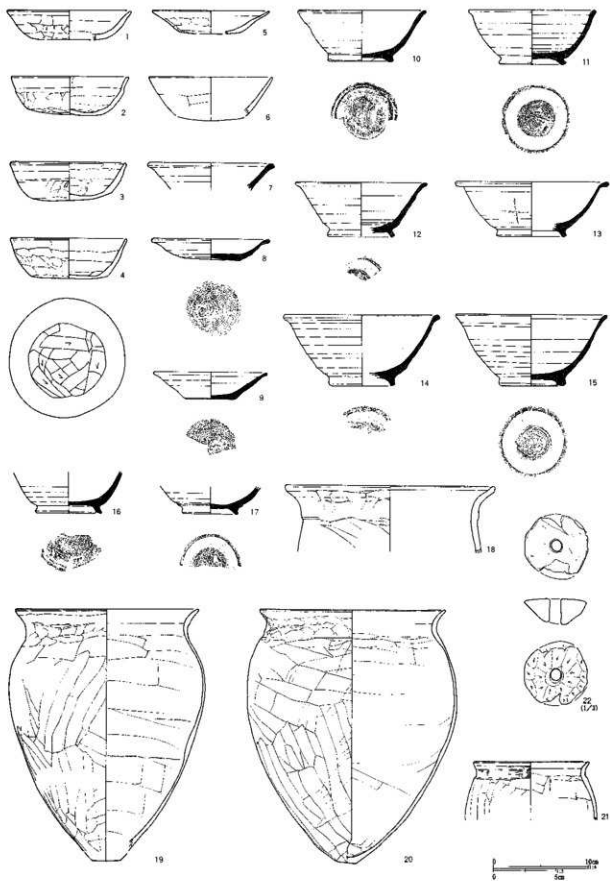
SJ203 カマド

- 1 暗褐色土 硝子粒多量
- 2 白色土 灰・硝子粒混入
- 3 暗褐色土 硝子ブロック少量
- 4 褐色土 ロームブロック・硝子土ブロック・白色硝子多量 (大川原層土・天井沼浜土)

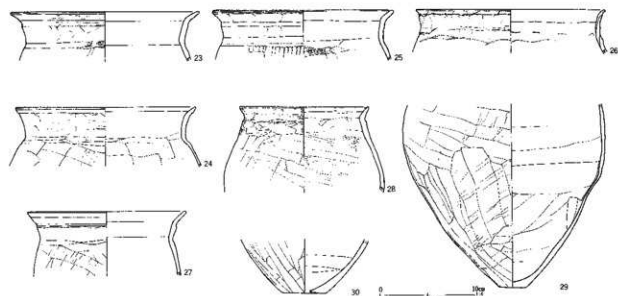
SJ203 SK1 - 2

- 5 黄褐色土 灰土粒混入。硝子ブロック少量
- 6 暗褐色土 白色硝子ブロック少量。硝子層
- 7 暗褐色土 白色硝子ブロック多量
- 8 黄褐色土 灰硝子土混入
- 9 暗褐色土 硝子粒・硝子粒多量
- 10 暗褐色土 ロームブロック層
- 11 SJ202・203 掘り方
- 12 暗褐色土 白色硝子ブロック混入

第191図 第202・203号住居跡出土遺物(1)



第192図 第202・203号住居跡出土遺物(2)



第105表 第202・203号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	容高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.1)	3.0		DEH	1	橙	15	SJ202・203 体部下位ヘラケズリ
2	坏	12.2	4.0		A E II	1	にぶい橙	80	SJ202 カマドNo.7 体部無調整
3	坏	12.0	4.2	8.4	A D E H	1	橙	55	SJ202・203 外面割離
4	坏	12.2	4.2	8.2	A D II J	2	橙	100	SJ202 貯蔵穴No.7 体部無調整
5	鼎	(12.3)	2.4	(6.6)	D E H	1	にぶい橙	20	SJ203 カマド
6	坏	(13.0)	4.0		E H	1	橙	15	SJ203 SK 1 体部ケズリ
7	須恵(高台)陶	(13.0)	2.8		E H	2	灰	15	SJ202・203 木野産か
8	須恵皿	12.4	2.2	5.9	H I J	3	暗灰黄	85	SJ202 貯蔵穴No.9・18 木野産
9	須恵皿	(12.0)	2.8	(5.6)	E I J	2	青灰	20	SJ202・203 木野産
10	須恵高台陶	13.4	5.4	6.9	B I J	3	灰黄褐	95	SJ202 貯蔵穴No.3・4・5 軟質焼き甘い 木野産
11	須恵高台陶	(13.2)	5.7	6.6	B I J	2	灰	65	SJ202 貯蔵穴 No.2 木野産
12	須恵高台陶	(13.8)	5.7	(6.6)	H I J	2	灰	20	SJ202 カマドNo.4 木野産
13	須恵高台陶	(16.0)	5.7	(6.6)	A B I	3	灰黄	25	SJ202 貯蔵穴 No.4 体部「X」腐則 木野産
14	須恵高台陶	(16.0)	7.4	(6.4)	E I J	2	灰	25	SJ202 カマド+203 木野産
15	須恵高台陶	16.0	7.4	7.0	B H I J	1	灰	95	SJ203 カマドNo.1 木野産
16	須恵高台陶		4.4	(7.0)	H I	3	灰黄	25	SJ202 SK 1 木野産
17	須恵高台坏		2.9	5.4	B E I	2	暗青灰	35	SJ202・203
18	甕	(22.0)	7.0		A D E II	1	橙	15	SJ202 貯蔵穴
19	甕	(19.4)	25.5		E H J	3	橙	40	SJ202 貯蔵穴No.5
20	甕	19.6	21.6	2.2	A D E H	2	橙	60	SJ202 貯蔵穴 No.6・13・14
21	小型甕	(12.2)	6.1		D E H J	2	橙	20	SJ202 No.9
22	紡錘甕	口径4.90cm	口径0.80cm	厚3.2.00cm	重量33.02g	にぶい赤褐	SJ202カマド	No.8	
23	甕	(20.0)	5.1		A D E H	1	橙	10	SJ202 No.2
24	甕	(19.0)	6.2		A D E H	1	橙	20	SJ202 カマドNo.9
25	甕	(19.0)	5.3		D E H	2	橙	30	SJ202・203
26	甕	(20.0)	4.6		A D E H	2	橙	20	SJ202・203
27	甕	(16.8)	6.7		A D E II	3	橙	25	SJ202 No.16
28	小型甕	13.6	9.0		A D E H	1	橙	45	SJ202 カマドNo.1
29	甕	19.3	3.0		A D E H	1	にぶい橙	85	SJ202 貯蔵穴 No.3
30	甕		5.7	(4.6)	A D E II	1	にぶい橙	25	SJ203

た可能性が高い。

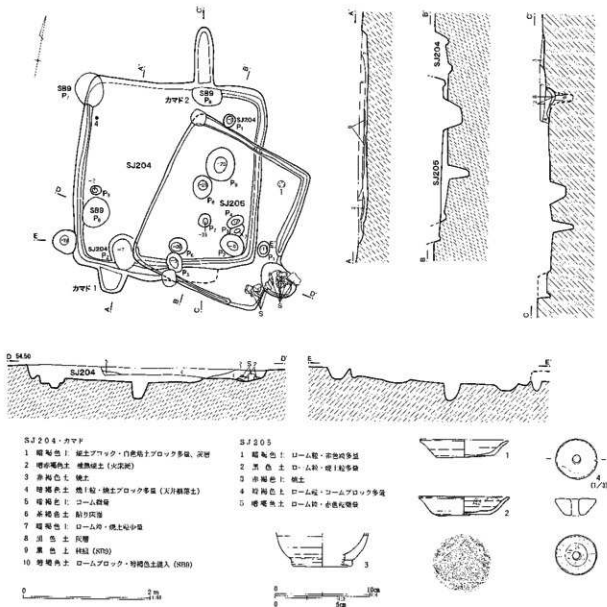
平面形は正方形で、規模は長径2.99m、短径2.81m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-6°-Wを示す。床面は概ね平坦である。覆土中層に硬化面が認められ、住居の建て替えに伴う貼床層と考えられた。貼床面は1号カマドに伴うもので、北壁部までは及ばない。2号カマドの段階から1号カマド構築段階で若干埋め戻して建て替えたものと判断される。1号カマドは南壁の西寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面は被熱していた。床面との段差はない。カマドの主軸方向はN-176°-Eである。

第193図 第204・205号住居跡・出土遺物

2号カマドは北壁の東寄りに設置される。煙道部は焼土を多量に含み、長く延びる。底面は床面を僅かに掘り込み、灰層が形成されていた。灰層下部には第9号掘立柱建物跡ピットが掘り込まれている。

ピットは3本検出された。Pit 2はカマド前面の掘り方か。Pit 1・3は中世の所産である。壁溝は1号カマドから西壁部と2号カマドから東壁・南壁部にかけて巡るが、1号カマドの左右でややずれる。

出土遺物は極めて少なく、ロクロ土師器高台椀(第193図3)と石製紡錘車(4)が検出されたのみである。高台椀は底部に粘土甲板を張り付け、内部を窪ま



第106表 第204・205号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	9.4	1.9	6.1	ABDH1J	2	橙	100	SJ205 No.1 ロクロ土師器
2	小皿	9.6	2.0	5.6	ABHJ	2	橙	85	SJ205 口縁部内面に油塗
3	高台椀		3.5	(6.0)	AI	2	にぶい橙	15	SJ204 ロクロ土師器
4	石製紡輪	上径3.30cm 下径1.70cm		孔径0.70cm	厚さ1.35cm	重量17.27g			SJ204 No.1 滑石製

せることで高台状に整形している。時期は10世紀後半以降となろうか。

第205号住居跡 (第193図)

第205号住居跡は、H-6・7グリッドに位置し、重複する第204号住居跡を切っている。

平面形は正方形で、規模は長径2.52m、短径2.36m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-112°-Eを示す。床面は平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは南東壁の南端に設置されていた。焼焼部は壁を切り込んで構築され、底面は床面とはほぼ同一レベルで続く。側壁と底面は強く被熱していた。また、焼焼部中央には石製支脚が据えられた状態で残されていた。その周囲にはカマド構築材に使用された石材が散乱していた。

ピットは9本検出されたが、住居に伴う柱穴とは異なる。Pit 9については伴う可能性もある。カマド対向ピットと同様な性格かもしれない。壁際は部分的に検出された。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器小皿が2枚検出されたのみである (第193図1・2)。いずれも口径は9.5

cm前後、器高2.0cm前後と小振りで非常に浅い。2は口縁部内面に油塗が付着している。住居の時期は11世紀中頃に位置付けられる。

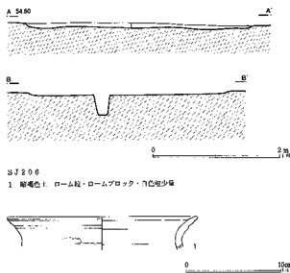
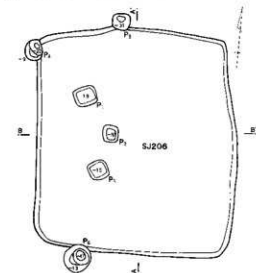
第206号住居跡 (第194図)

第206号住居跡は、H-8グリッドに位置し、風割木痕を切って構築されていた。

平面形は長方形で、規模は長径3.61m、短径3.19m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-4°-Wを示す。床面はほとんど削平された状態であった。カマドは検出されなかった。

ピットは6本検出されたが、いずれも中世の所産で、住居に直接伴うものはない。

出土遺物は土師器壺の破片が1点検出されたのみである (第194図1)。第194図1は土師器壺。推定口径20.0cm、器高3.4cmで、胎土に角閃石・白色粒子・砂粒を含む。焼成は不良で、灰褐色。胴部に横方向のケズリ痕が見える。住居の時期は古墳時代後期から古代と思われるが詳細は不明である。



第207号住居跡 (第195図)

第207号住居跡は、調査区東端のH・I-8グリッドに位置する。住居の大半は調査区外に延び詳細は不明である。また、第12号溝跡が覆土上部に乗っている。

平面形は長方形で、規模は長径6.19m、短径2.44m(現在長)、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-17-Wを示す。

床面は概ね平坦で、全面貼床されていた。カマドは検出されなかった。ピットは住居内から2本、壁に掛かって2本検出されたが、住居の柱穴とは異なるものと考えられる。壁溝は巡っている。

出土遺物は土師器小型壺が1点検出された(第195図1)。1の小型壺は推定口径12.0cm、器高6.1cm。胎上に赤色粒子・石英・角閃石を含む。焼成は普通で橙褐色。残存率10%程度の小片である。時期は不明確であるが、古代の住居跡(7~8世紀か)であろう。

第208号住居跡 (第196図)

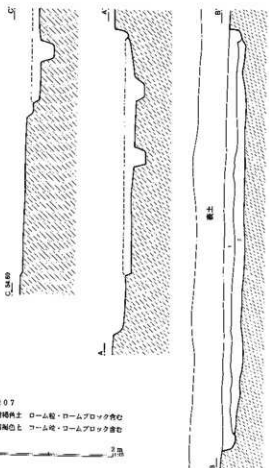
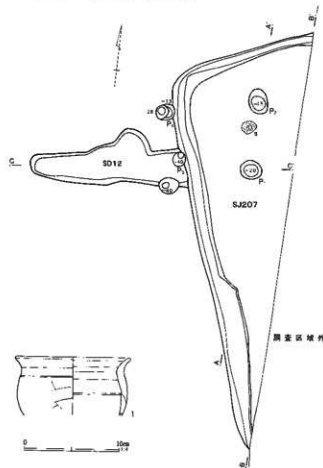
第208号住居跡は、調査区南東部のI-6・7グリッドに位置する。

平面形は横長方形で、規模は長径3.61m、短径3.03m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-17-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは北壁の西寄りに設置される。燃焼部は壁内におさまり、細長く伸びる煙道部に続く。燃焼部立ち上がり部分と煙道部の側壁は強く被熱していた。燃焼部下面は床面を僅かに掘り込み掘り方を形成する(第6層)。第5層は灰層で、第5層下面が火床面に相当する。袖は白色粘土を用いて構築されていたが、上部はかなり流出しており、遺存状態は余り良いとはいえない。

ピットは2本検出された。いずれも小ピットで、柱穴とは異なる。他に中世の方形小ピットが掘り込まれていた。壁溝はカマドを除き全周する。

第195図 第207号住居跡・出土遺物



SJ207
1 焼成土 rome製・romeブロック焼成
2 焼成土 コーム塊・romeブロック焼成

出土遺物は少なく、土師器環の小片と砥石が検出されたのみである(第196図)。1~3は土師器環。いわゆる模倣環で、同種の環の中でも小型化しており、新しい様相が窺える。砥石(4)は上部を欠く。四面共に良く使い込まれ平滑である。刃傷状の条線が残っている。作居の時期は7世紀中葉~後半であろう。

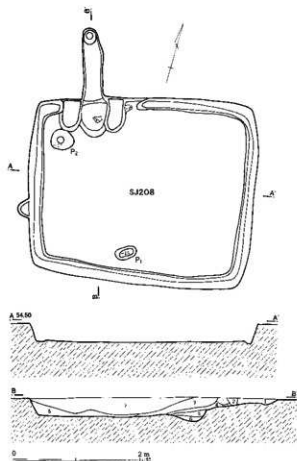
第209号住居跡(第197図)

第209号住居跡は、調査区南東部のI・J-7グリッドに位置する。第16号溝跡がカマド焼遺部上面に乗っていた。また、第20号掘立柱建物跡が重複し、本住居跡の方が新しいものと考えられる。

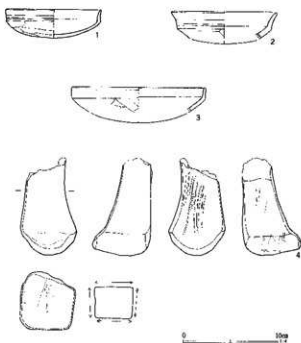
平面形は横長の不整形で、規模は長径3.12m、短径2.33m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-102°-Eを示す。

床面は壁際から中心部に向かって傾斜していた。カマド前面から中央部付近の床面は堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南端に設置されていた。焼焼部は壁を切り込んで構築され、底面には石製支脚が据えられた状態で遺存していた。石製支脚から前面にかけて底面は強く被熱していた。また、被熱焼土層の南側には浅いピット状の掘り込みが検出された(Pit 1)。袖は検出されなかった。

第196図 第208号住居跡・出土遺物



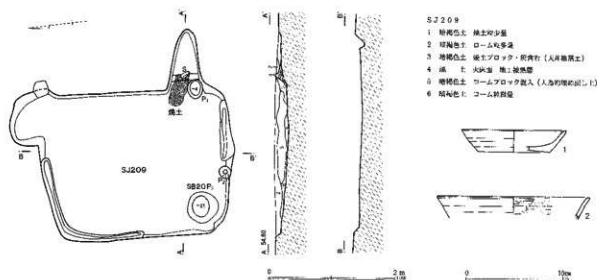
- 1 瓦 白土 焼土ブロック・白色粘土層(瓦片焼土)
- 2 瓦 白土 ピット層上(中世?)
- 3 焼土層 焼土粒・粘土層
- 4 白色粘土 焼土ブロック多量(人形焼土)
- 5 黒角土 灰・粘土層・灰化層・白色粘土少量(灰層)
- 6 黒角土 ローム・焼土層(埋込み)
- 7 焼土層 ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量(埋込み)
- 8 焼土層 焼土粒層



第107表 第208号住居跡出土遺物観察表

番号	部種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	10.0	3.0		DEH	2	橙	80	口縁下に沈線
2	坏	(11.0)	2.8		EII	1	にぶい赤褐	10	口縁下端沈線
3	坏	(14.0)	2.6		BDEH	1	橙	10	
4	砥石	長10.02cm	最大幅5.99cm	厚さ6.20cm					重量316.13g

第197図 第209号住居跡・出土遺物



第108表 第209号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	皿	(11.0)	2.3	(7.2)	A E J	2	橙	20	ロクロ土師器
2	高台碗	(16.0)	2.3		D H	2	にぶい橙	10	カマド内面ミガキー黒色処理 ロクロ土師器

ピットは2本検出された。Pit 2は伴うか否か不明である。また、南西コーナーには第20号掘立柱建物跡 Pit 2が掘り込まれていた。カマド対向ピットがあるとなれば、まさに同一位置に重なることになる。壁溝は部分的に巡る。

北壁東部に半円形の張り出し状施設が検出された。重複の可能性も考えたが、埋土は同一であり、住居に伴う施設と思われる。床面は同一レベルで続いていた。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器の小皿と高台碗が検出された(第197図)。1は小皿で推定口径11cm。底部は回転糸切り雕し。2はロクロ土師器高台碗。内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。住居の時期は10世紀末葉～11世紀初頭頃であろう。

第210号住居跡 (第198図)

第210号住居跡は、調査区南東部のJ-8グリッドに位置する。第107号土壌を切り、第109号土壌に切られていた。また、第17・22号溝跡が覆土上面に乗っていた。

平面形は横長方形で、規模は長径3.00m、短径2.27m、深さ0.09m。主軸方向はN-117°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南端に設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、細長く延びる煙道部に続く。燃焼部と床面の段差はあまりない。燃焼部底面は強く被熱し、石製支脚が据えられた状態で遺存していた。燃焼部脇には小ピットが掘り込まれ(Pit 4)、焼土・灰混じりの土が詰まっていた。

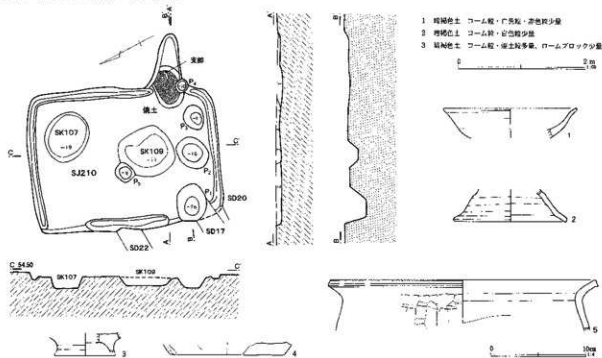
ピットは5本検出された。Pit 1は南西コーナーに掘り込まれ、住居に付属するカマド対向ピットである。深さ26cm。Pit 2・3も住居に伴うものであるが、柱穴とは異なる。

第107号土壌は上面に貼床されており、住居使用時には開口していなかったことは明らかである。床下土壌または、掘り方の可能性がある。

壁溝は西壁に途切れる箇所があるが、他はカマドを除き巡っていた。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器高台碗と土師器甕が検出されている(第198図)。第198図1～3はロクロ土師器高台碗である。2は高台破片と思われる、高台は非常に高い。歪みか顕著である。Pit 2出土。4は土師

第198図 第210号住居跡・出土遺物



第109表 第210号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台碗	(14.0)	3.1		DEH	2	にぶい橙	10	ロクロ土師器
2	高台碗		3.4	11.8	DEH	1	橙	95	Pit 2 高台部 ロクロ土師器
3	高台碗		2.1		BDEH	3	濁	20	ロクロ土師器
4	甕		1.3	(12.0)	BIJ	3	にぶい橘	20	底部ナデ
5	甕	(28.0)	5.3		ADJ	2	橙	15	胴部タテケズリ

器の姿底部。非常に器壁が厚く、重量感がある。底部はナデ調整。5も土師器姿で、口縁部は短く「く」の字状に折れる。端部は面取りされている。胴部は縦方向のヘラケズリ調整が施される。住居の時期は10世紀後半～11世紀初頭頃と考えておきたい。

第211号住居跡 (第199図)

第211号住居跡は、調査区南東端部のJ-8グリッドに位置する。第212号住居跡とカマド部分が重複する。カマド煙道部が確認されなかったことから、本住居跡の方が古いものと判断した。また、第20号溝跡が北壁上面に乗っていた。

平面形は横長方形で、規模は長径3.82m、短径2.67m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、堅く締まっているが、一部擾乱を受けている。カマドは東壁の南寄りに設置される。

燃焼部は壁を切り込んで構築される。煙道部は第212号住居跡に切られていた。燃焼部側壁は被熱していた。埋土には焼土と灰が少量に含まれている。燃焼部側壁際には小ピットが一対穿たれている。カマド構築石材の据え付け痕かもしれない。また、燃焼部底面にも小ピットがあり、支脚埋設ピットか。

ピットは2本検出された。Pit 1はカマドに対面する南西コーナーにあり、該期の住居に通存にみられるカマド対向ピットと考えられる。深さ21cm。Pit 2も併うものと思われるが、柱穴とは異なる。

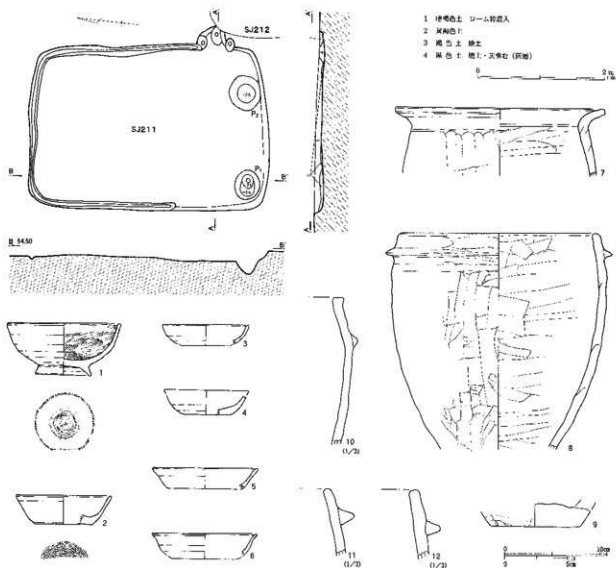
出土遺物はロクロ土師器高台碗、ロクロ土師器小皿、土師器甕、羽釜がある(第199図)。第199図1のロクロ土師器高台碗は小振りて、内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。2～6はロクロ土師器小皿である。いずれも小片で、口径は不安定である。7は厚装で、

大寄I区

胴部は縦方向のヘラケズリが施されている。8・10-12は土師質の羽釜。8・11・12は非ロクロ整形、

10はロクロ整形である。11・12は胎土や形態が極めて類似し、同一個体と思われる。9は袋底部。器壁が極

第199図 第211号住居跡・出土遺物



第110表 第211号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	技法	色調	残存率	備考
1	高台碗	(11.7)	5.4	5.8	ABDE	2	黄橙	65	内面ミガキ+黒色処理
2	小皿	(10.0)	3.0	(6.0)	ADEH	2	にぶい黄橙	10	
3	小皿	(9.0)	2.0		EJ	1	にぶい黄橙	10	
4	小皿		2.1	(5.0)	ADEH	2	にぶい黄橙	20	
5	小皿	(11.0)	2.1		ADEH	2	にぶい黄橙	15	
6	小皿	(11.0)	2.3		ADEH	2	にぶい黄橙	10	
7	椀	(22.0)	7.1		HIJ	1	橙	15	胴部タテケズリ
8	羽釜	(20.2)	22.7		DEJ	1	にぶい橙	15	外面黒硝 土師質 非ロクロ
9	袋		2.4	9.2	BDE	2	にぶい橙	85	底部ナデ 器壁厚い
10	羽釜				BEHJ	2	橙		土師質 ロクロ整形
11	羽釜				ABDIIJ	1	にぶい橙		土師質 非ロクロ 12と同一個体
12	羽釜				ABDHJ	1	にぶい橙		土師質 非ロクロ 11と同一個体

めて厚く、重量感がある。底部外面はナデ調整。住居の時期は10世紀後半であろう。

第212号住居跡 (第200図)

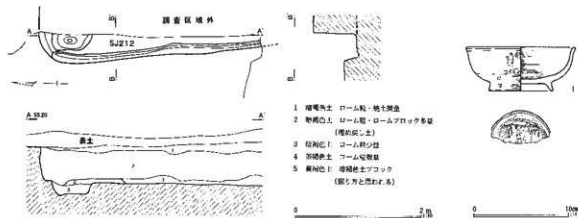
第212号住居跡は、調査区南東端部のJ-8グリッドに位置する。住居の大半は調査区外に延び、西壁付近が調査されたのみで、遺構の形態や規模等の詳細は不明である。第211号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しいものと判断した。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長径3.50m、短径0.52m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

床面の状況は不明。カマドは検出されなかった。ピ

ット状の掘り込みは1本北西コーナー部に検出されたが、掘り方の一部と考えられる。壁溝は西壁際に巡っていた。

出土遺物はロクロ土師器高台碗が1点検出されたのみである(第200図1)。1はロクロ土師器高台碗。小振りの椀で、腰部の丸味が強い。推定口径11.4cm、器高4.6cm、底径6.6cm。胎上に白色粒子と砂粒、雲母状の微粒子が含まれる。焼成は良好で、色調は黒褐色。約15%残存する。内外面、前面ヘラミガキと黒色処理が施されている。住居の時期は10世紀後半と考えられる。



(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第201図)

第1号掘立柱建物跡は、B・C-1グリッドで検出された。北西コーナーは調査区外に延びていた。重複遺構との新旧関係は、第16・17・18・20号住居跡、第1号土壌を切っていた。第18号住居跡覆土を切っていることは確認されているが、第17号住居跡との関係は不明とした方がよいかもしい。

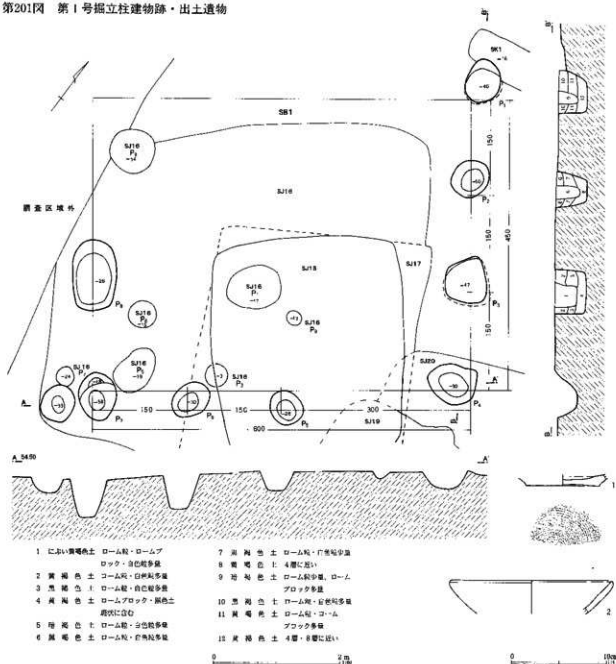
3×3間の側柱建物跡と考えられるが、北西側の桁行の柱穴は検出されなかった。また、南東側の桁行の柱穴配置は不揃いである。建物としての企画性にやや欠ける点があることは否めない。規模は桁行6.0m、梁行4.50mほどに復元できる。主軸方向はN-53°-Eを示す。

桁行の柱間は南東側では西から1.5m・1.5m・3.0m、北東側梁行の柱間は約1.5mである。

柱穴は楕円形が主で、46~70cm、57~111cmで、方形を呈するものもある。深さは26~58cmである。

遺物はPit 4から土師器環とロクロ土師器皿が検出されている(第201図)。1はロクロ土師器皿か。底径は7.8cmと大きく、底部は回転糸切り無調整である。胎上に赤色粒子・白色粒子・角閃石・砂粒と雲母状の微粒子が含まれる。焼成は良好でにぶい橙色。2は土師器環か。非ロクロ整形に思えるが、表面が風化しており不明瞭である。胎土は1のロクロ土師器皿と類似している。色調は鈍い褐色。建物の時期は不明確であるが、遺構の切り合い関係や出土遺物から10世紀前半

第201岡 第1号掘立柱建物跡・出土遺物



以降と推定される。

第2号掘立柱建物跡 (第202岡)

第2号掘立柱建物跡は、B-2・3グリッドで検出された。北半部は調査区外に延び、南側の桁行の柱穴と西側の柱穴が検出されたのみである。重複遺構との新旧関係は、第8・9号住居跡を切り、第6号住居跡及び、第3号土壌に柱穴上面を削平されていた。

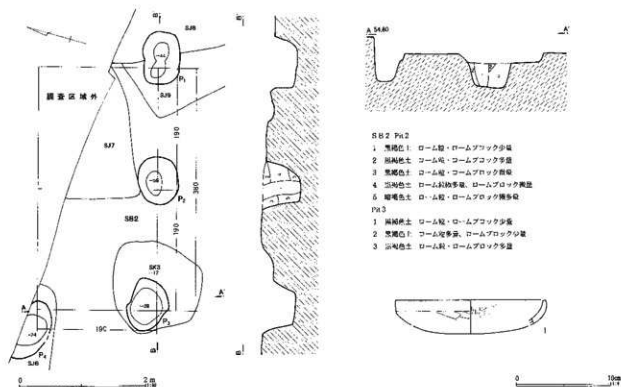
建物規模は不明で、現状では東西2間、南北1間が確認された。規模は桁行3.80m、梁行1.90mほどに復

元できる。主軸方向はN-78°-Eを示す。

柱間間隔は桁行・梁行ともに1.9m前後と思われる。柱穴形態は楕円形または不整長方形で長径57-83cm、深さは24-56cmである。Pit 2・3からは柱痕が確認された。

出土遺物は土師器片が3点ある。第202岡1はPit 2から出土した土師器暗文環の口縁部片である。内面に放射状暗文が施されている。他の2点は重複する第8・9号住居跡出土遺物として掲載してある(第29岡

第202図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物



1・5)。1は第8号住居跡に伴う遺物と思われる。5はPit 1から出土した北武蔵型である。重複住居の遺物とは時期的に異なり、本建物跡に帰属するものと考えられる。

第202図1は土師器暗文環。推定口径16.0cmで胎上に赤色粒子・白色粒子・角閃石を含む。焼成は良好で、明赤褐色。残存率10%程度の小片である。建物の時期は7世紀後半～8世紀初頭頃と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第203図）

第3号掘立柱建物跡は、C・D-3グリッドで検出された。北側に第4・5号掘立柱建物跡が重複し、南側に第6号掘立柱建物跡が接する。遺構密集区の一隅にあり、多数の遺構と重複していた。新旧関係は第37・61号住居跡を切り、第36・38・39号住居跡に切られていた。第64号住居跡との関係は不明確であるが、本建物の方が新しい可能性がある。また、第4・5号掘立柱建物跡との新旧関係は、明確に把握できなかった。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行6.9m、梁行4.6m前後となる。主軸方向はN-13°-Wを示す。

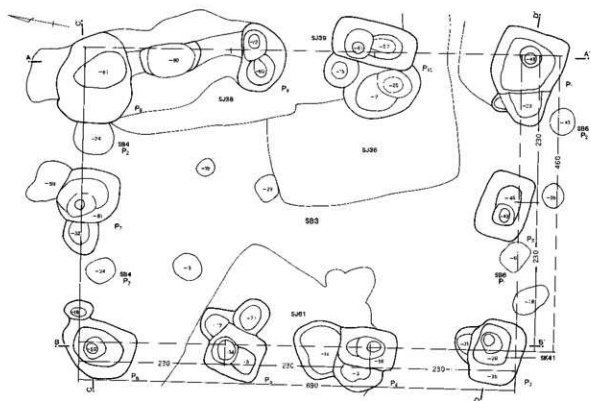
柱間隔は桁行、梁行共に2.3m前後に復元できる。

Pit 1・4・5・9・10では柱穴が複数重複する状況が認められ、明確には捉えられなかったが、柱位置を僅かにずらして建て替えられた可能性もある。また、Pit 8、Pit 9間は桁行形の溝状遺構で連結しており、溝持ち掘立柱建物跡と考えられる。

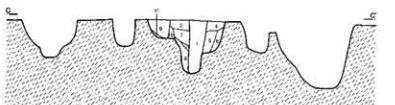
柱穴形態は方形あるいは長方形を基調としており、長径69～162cm、深さは35～83cmである。

出土遺物は少なく、土師器環、土師器鉢、須恵器環、須恵器鉢が検出された（第204図）。1はPit 1出土の土師器環。推定口径12.0cm。胎上に白色粒子・角閃石を含む。焼成は普通。色調はにぶい橙色。残存率10%。体部は軽いナデ（無調整）、底部はヘラケズリ。2はPit 3出土の土師器環。推定口径11.0cm。胎上に白色粒子・角閃石を含み、焼成は良好。色調は橙色。残存率15%。体部はナデ、底部はヘラケズリ調整。底部は平底風である。3はPit 4出土の須恵器高台碗。推定口径14.5cm。胎上に石英・白色粒子・片岩を含む。焼成は普通。色調は黄灰色。残存率10%。末野添てあ

第203図 第3号掘立柱建物跡



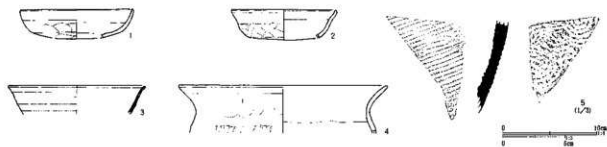
A.5440



- S.33 P₁10
 1 灰 褐色土 コーム状、内包粒多量、粘土粒少量
 2 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量
 3 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量
 4 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量、ローム粒、内包粒少量
 5 灰 褐色土 ローム状、白色粒少量
 6 灰 褐色土 コーム状、ロームアフラック多量、ローム粒、白色粒少量
 内包粒少量
- S.33 P₂7
 1 灰 褐色土 ローム状、白色粒多量、焼土粒多量、炭化物粒多量
 2 灰 褐色土 ローム状、白色粒、焼土粒、ロームアフラック多量
 3 灰 褐色土 ローム状、白色粒、焼土粒、ロームアフラック多量
 4 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量、内包粒、焼土粒多量、炭化物粒多量
 5 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量、内包粒、焼土粒多量、炭化物粒多量
 6 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量、内包粒少量
- 7 灰 褐色土 ローム状、ロームアフラック多量
 8 灰 褐色土 ローム状、白色粒少量
 9 灰 褐色土 ローム状、白色粒少量、焼土粒少量
 10 C.3-1 内包粒土 ローム状、白色粒少量、ロームアフラック多量
 11 灰 褐色土 ローム状、炭化物

0 10m

第204図 第3号掘立柱建物跡出土遺物



る。4は土師器甕。Pit 4出土。推定口径22.0cm。胎土に角閃石・白色粒子・雲母状微粒子を含む。焼成は普通で、色調はにぶい棕色。胴部は横ヘラケズリ。残存率10%。5は須恵器甕胴部下位の破片でPit 5出土。胎土に赤色粒子・石英・白色粒子・片岩を含む。焼成は普通。色調は黄灰色。外面は平行（擬格子）叩き、内面は同心円文当て只痕が残る。木野産。

建物の時期は不明瞭であるが、重複遺構との関係及び出土遺物から8世紀後半～9世紀中頃迄の間に構築されたものと推定される。

第4号掘立柱建物跡（第205図）

第4号掘立柱建物跡は、C-3グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第27号住居跡を切り、第28・30～32・38号住居跡に切られていた。第29号住居跡及び、第3・5号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

3×2間、南北棟の側柱建物跡で、規模は桁行5.70m、梁行4.20mである。主軸方向はN-12°-Wを示す。

柱間間隔は、梁行は2.10mで揃うが、桁行は1.9m等間には揃わない。

柱穴は径33～54cmの楕円形あるいは円形基調で、比較的小型である。深さは29～67cm、隅柱が深くしゃかりしている。

出土遺物は、Pit10から土師器環、Pit 5から古墳時代の高環のいずれも小片が検出されたのみである。第205図1は土師器環。推定口径16.0cm。胎土に白色粒子・角閃石・砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色。残存率は10%程度である。Pit10出土。出土遺物から建物の時期を特定することは難しい。重複遺構と

の関係から7世紀前半以降、9世紀後半以前という時期にはおさまるであろう。更にいえば、第3号掘立柱建物跡と主軸がほぼ一致し、建物同士は重複することから、2棟の建物跡は一定時間の中での建て替えとみることできる。8世紀後半～9世紀中頃に位置づけることもできようか。

第5号掘立柱建物跡（第206図）

第5号掘立柱建物跡は、C-3グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第27号住居跡を切り、第28～32号住居跡に切られていた。第3・4号掘立柱建物跡との新旧関係は明確にできなかった。

2×2間の総柱建物である。規模は桁行3.4m、梁行3.4m。主軸方向はN-18°-Wを示す。

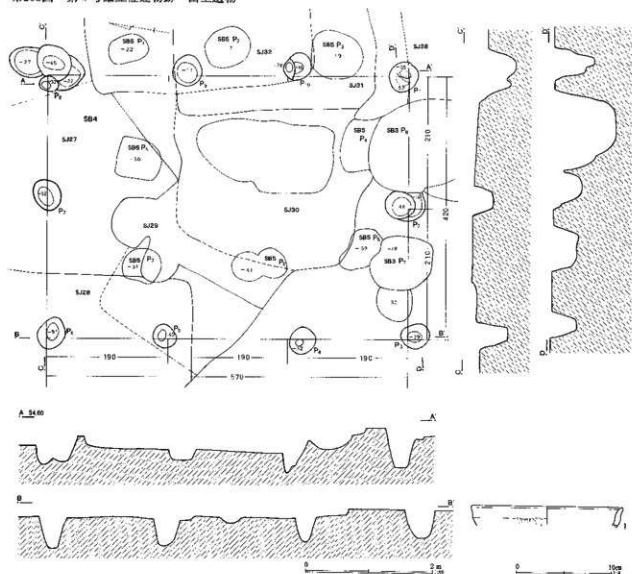
柱間はほぼ1.7m等間に揃う。柱間間隔が狭く、且つ総柱建物という点から、高床の倉庫跡と考えるのが妥当であろう。東柱に相当するPit 9は長大な楕円形土壕状の掘り方を持ち、断面観察によって柱痕が検出された。また、Pit 7には柱抜き取り痕と思われる土層が観察された。

柱穴（柱掘り方）は楕円形あるいは方形で、やや規格性に欠ける。全体に小型で直径40～85cm、深さは8～59cmである。

出土遺物は少なく、Pit 3・4・8から土師器環の小片が各1点検出されたのみである。1点は小型の模倣環、2点は口縁部が内湾する北武蔵型環である。

第206図1は土師器環。推定口径16.0cm。胎土に赤色粒子・角閃石・白色粒子を含み、焼成は良好である。色調は棕色。残存率10%。Pit 8出土。2は小型の土師器環である。推定口径9.6cm。胎土に石英・角閃石・白色

第205図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物



粒子・砂粒を含み、焼成は普通。色調は橙色。残存率は10%程度。Pit 4出土。

建物の時期は不明確であるが、重葺造構との関係から7世紀前半以降、9世紀後半以前にはおさまる。異なる柱穴から、ほぼ同時期と思われる北武蔵型環が出土する点を考慮すると、7世紀後半～8世紀初頭頃の建物となる可能性もある。

第6号掘立柱建物跡 (第207図)

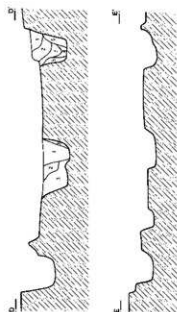
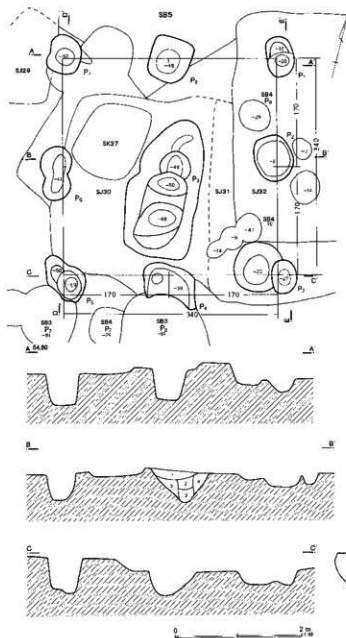
第6号掘立柱建物跡は、D-3グリッドに位置し、第3号掘立柱建物跡柱穴と接する。第62～64号住居跡と重複し、新旧関係は不明確であるが、本建物跡の方が新しい可能性が高い。

3×2間の総柱建物に復元できるが、柱筋がややずれ気味で、精査したにも関わらず Pit 5・Pit 6に相当する柱穴は検出されなかった。一部のみ置き柱(礎石)建ちの建物であろうか。また、Pit 5-Pit 6、Pit 7-Pit 12、Pit 8-Pit 9間の柱間が狭く、見方によっては2×2間の総柱建物の南側に庇が取り付く建物と考えることもできる。規模は桁行4.6m、梁行4.6mの正方形で、主軸方向はN-6°-Eを示す。

桁行の柱間は東側では南から1.2m・1.7m・1.7m、梁行のそれは2.3mを基準線とするが、若干ずれる傾向にある。

柱穴は円形あるいは楕円形基調で、直径36～90cm、

第206図 第5号掘立柱建物跡・出土遺物



S329 Pit 6

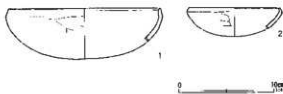
- 1 黒褐色土 ワーム類・自然粒質
- 2 黄褐色土 コームブロック主体
- 3 に近い褐色土 コーム類・ロームブロック・自然粒質

S330 Pit 7

- 1 黒褐色土 コーム類・焼土類・自然粒少量
- 2 赤褐色土 コーム類多量・焼土類・自然粒少量
- 3 黒褐色土 コーム類多量・焼土類・自然粒少量・炭化物
- 4 褐色土 コーム類多量・焼土類・自然粒少量
- 5 黒褐色土 コーム類多量・焼土類・自然粒少量・粘質土

S335 Pit 9

- 1 黒褐色土 コーム類・自然粒質
- 2 赤褐色土 コーム類・自然粒少量
- 3 褐色土 コーム類・自然粒少量
- 4 に近い褐色土 コームブロック主体
- 5 黒褐色土 コーム類・自然粒少量・ロームブロック多量



深さは30～73cmである。

出土遺物は少なく、Pit12から羽釜の鈎部破片と、模倣環小片が検出されたのみである。建物の時期は不明確であるが、羽釜片の出上を根拠に10世紀後半～11世紀頃の建物と考えておく。

第7号掘立柱建物跡 (第208図)

第7号掘立柱建物跡は、E・F-7グリッドに位置する。重複する第148・150号住居跡に切られていた。

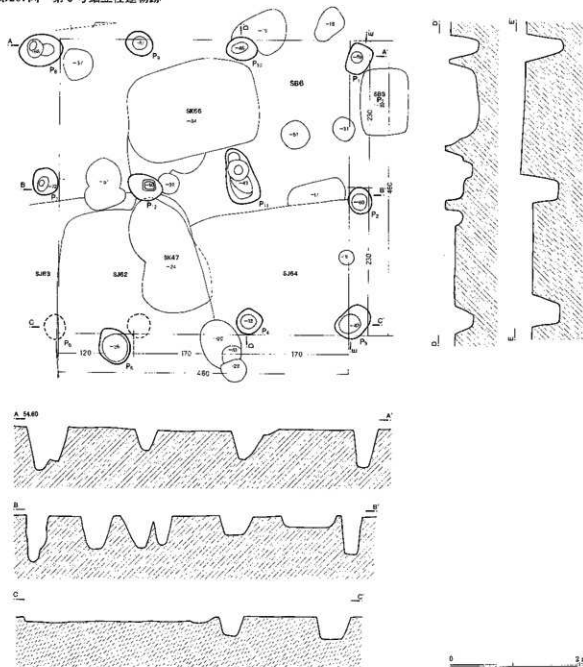
2×2間のほぼ正方形の側柱建物と考えられる。柱

筋が通らず、柱穴規模や柱間も規格性に乏しい。規模は桁行3.8m、梁行3.8mとなるが、Pit 1-Pit 3間は柱穴心間で4.20mを測り、やや長い。主軸方向はN-26°-Wを示す。

柱間間隔はやや不揃いで、Pit 1-Pit 7間、Pit 3-Pit 5間、Pit 5-Pit 7間がそれぞれ1.60m、2.20m、Pit 1-Pit 3間は2.10m等間となる。

柱穴形態は楕円形あるいは方形で、規模は直径27～63cm、深さは18～59cmである。

第207図 第6号掘立柱建物跡



出土遺物は検出されなかった。時期については重複造構との関係から10世紀後半以前という限定しかできない。

第8号掘立柱建物跡 (第209図)

第8号掘立柱建物跡は、E・F-5・6グリッドに位置する。重複造構との新旧関係は、第4号溝跡を切り、第147号住居跡に切られていた。

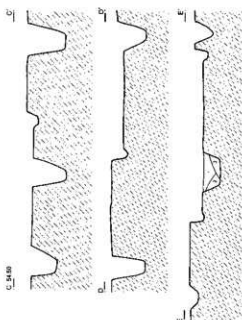
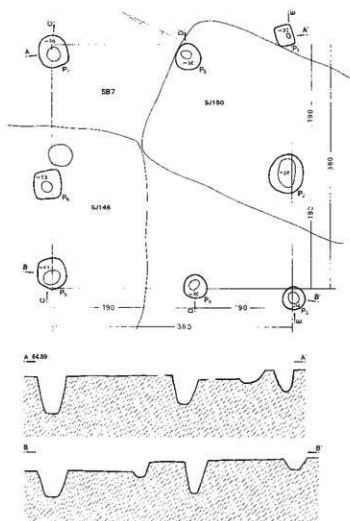
桁行3間、梁行1間の東西棟の建物跡である。梁行

の中間柱は精査したにも関わらず検出できなかった。規模は桁行5.7m、梁行3.8mに復元できる。主軸方向はN-80°-Eを示す。

桁行の柱間は1.9m等間にはば揃うが、Pit 1-Pit 8間、Pit 4-Pit 5間はやや狭い。梁行は3.8m。柱穴掘り方の形態は方形が基調で、規模は径39-71cm、深さは18-58cmである。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確である

第208図 第7号掘立柱建物跡



S1190 Pit 1

- 1 黒褐色土 ローム粒多量、白色砂少量、焼土少量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量、白色砂少量、焼土少量
- 3 暗褐色土 ローム粒多量、白色砂少量

0 2m

が、重複住居跡との関係から10世紀後半以前という限定は可能である。

第9号掘立柱建物跡 (第210図)

第9号掘立柱建物跡は、H-6・7グリッドに位置し、第204号住居跡と重複する。断面観察により、カマド火床下に Pit 6 が検出されたことから、本建物跡の方が古いのは確実である。

2×2間、ほぼ正方形の建物である。総柱建物になる可能性を考え、建物中心部を精査したが、柱穴は検出されず、側柱建物であることが判明した。規模は桁行、梁行共に3.6m。主軸方向はN-11°-Wを示す。

柱間は1.8m等間にはほぼ等しい。柱穴掘り方は、円形または楕円形で、直径34~80cm、深さは30~67cmである。全体に小型で深い柱穴が多い。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は不明確であるが、重複住居跡との関係から、10世紀後半以前という限定はできる。

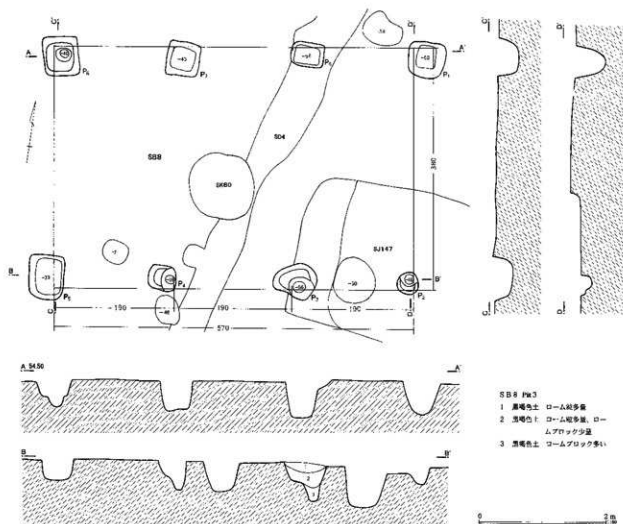
第10号掘立柱建物跡 (第211図)

第10号掘立柱建物跡は、B-4グリッドに位置する。重複する第11・12号住居跡を切って構築されていた。

現状では2×2間の側柱建物と考えたが、北側桁行の中間柱が存在しないことから、調査区外に延びる可能性が高い。また、Pit 1に相当する北東隅柱は検出されず、柱筋も全体にずれ気味である。規模は桁行4.20m、梁行3.40m、主軸方向はN-89°-Eを示す。

桁行の柱間は2.10m、梁行は東側では南から2.10m・1.30m、西側梁行は南から1.80m、1.60mとなり、等間に揃わない。

第209図 第8号掘立柱建物跡



柱穴掘り方は楕円形が主体で径31～65cm、深さは9～49cmである。

出土遺物は少なく、Pit 3から土師器環のほぼ完形品が1点検出されたのみである。第211号1は土師器環、口径12.1cm、器高3.4cm、底径8.0cm。胎土に石英・白色粒子・角閃石・砂粒を含み、焼成は良好。色調は橙色。全体に作りは丁寧で、口縁部ヨコナデ、体部は無調整、底部は平底風で、ヘラケズリ調整されている。建物の時期は重複住居跡との関係及び出土遺物から9世紀中葉～後半頃と推定される。

第11号掘立柱建物跡 (第212号)

第11号掘立柱建物跡は、C-4グリッドに位置する。第34・46号住居跡と重複し、本建物跡の方が新しい。

3×3間、南北棟の側伴建物と考えられる。規模は

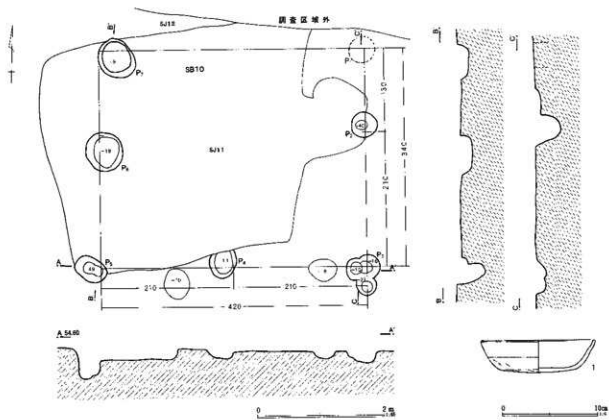
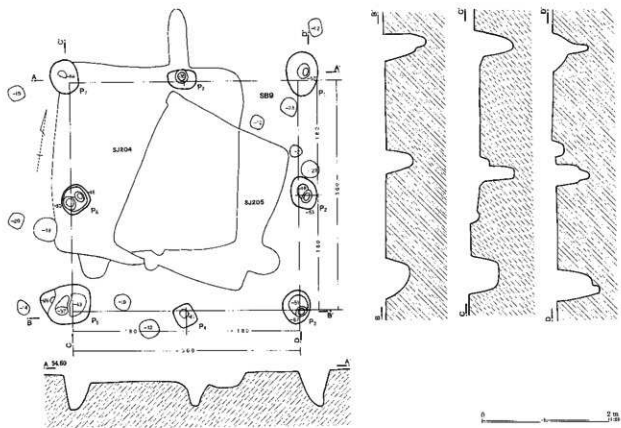
桁行5.4m、梁行4.2mである。主軸方向はN-5°Wを指す。

柱筋はほぼ通るが、柱間は一定しない。西側桁行の柱間は北から1.5m・1.5m・2.4mで、東側は北から1.8m・0.6m・1.2m・1.8mである。東側桁行はPit2を除く外、ほぼ1.8m等間に揃う。梁行の柱間は西から1.2m・1.2m・1.8mとなり、やはり等間には揃わない。

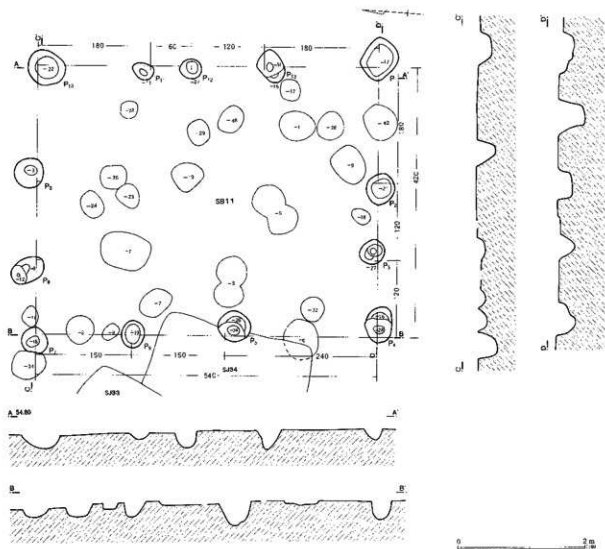
柱穴は楕円形あるいは方形で直径36～65cm、深さは11～39cmと全体に浅い。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は、重複する第46号住居跡との関係から7世紀後半以降となるが、それ以上の限定は困難である。

第210图 第9号独立柱建物跡



第212図 第11号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡 (第213図)

第12号掘立柱建物跡は、E-6・7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第4号溝跡を切り、第2号溝跡に切られていた。第138・141号住居跡及び第2号井戸跡との関係は不明確であるが、第138・141号住居跡よりも新しく、第2号井戸跡よりも古いものと考えた。

3×2間の東西棟の総柱建物で、規模は桁行5.70m、梁行3.80mである。主軸方向はN-77-Eを指す。

柱間間隔は桁行・梁行共にほぼ1.9m等間に揃う。側柱の柱筋はPit 2・5が北側にはずれるが、概ね揃っている。Pit 11・12は床東と考えられ、Pit 2・7を結ぶ桁行ラインの柱筋からはややずれ気味である。柱穴

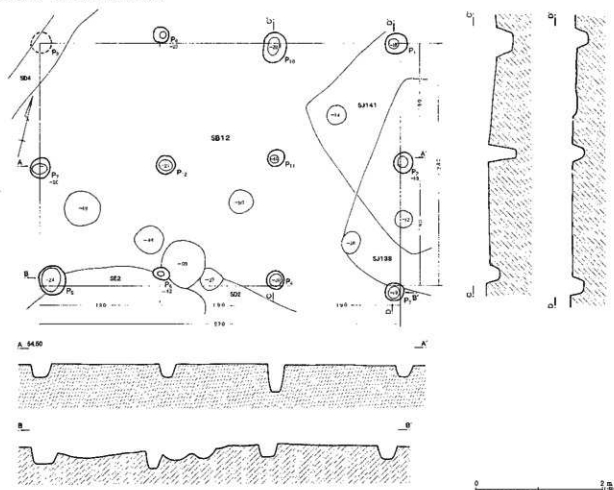
は小型で径26-35cmの円形と20-48cmの楕円形のものがある。深さは20-44cmと全体に浅い。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は不明確であるが、柱穴が小型で、8・9世紀に通常の掘り方形跡とは明らかに異なる。また、中世の小型方形プランの柱穴とも相違する。中世と思われる第2号井戸跡よりも古い可能性が高く、消去法ながら、一応古代末期、10-11世紀段階の建物と推定しておく。

第13号掘立柱建物跡 (第214図)

第13号掘立柱建物跡は、C・D-5グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第53号住居跡よりも古い。第49・51号住居跡、第31号土壇との関係は不明確であるが、本建物跡の方が古い可能性がある。

第213図 第12号掘立柱建物跡



3×2間、南北棟の掘立柱建物である。規模は桁行6.30m、梁行4.20mである。柱筋は通っているが、南側梁行長が若干狭く、全体に台形配置となっている。主軸方向はN-26°-Wを示す。

柱間間隔は2.1mを基準としたものと思われるが、桁行の柱間隔は等間に揃わない。

柱穴掘り方は円形または楕円形で、直径36~54cm、深さは14~41cmである。

出土遺物は少なく、Pit 2から土師器杯と須恵器蓋の破片が検出されたのみである。第214図1は土師器模倣杯。推定口径11.0cm、残存高5.0cm。胎土に砂粒と礫を含み、焼成は普通。色調はにぶい褐色である。残存率は約10%。須恵器蓋は天井部の小片で、中~大型製品であろう。模倣杯は小振りで口径部が長い。やや異質の土器である。あるいは有段口径杯の系譜下にあ

るものか。建物の時期は不明瞭であるが、7世紀後半~8世紀初頭頃と考えておく。

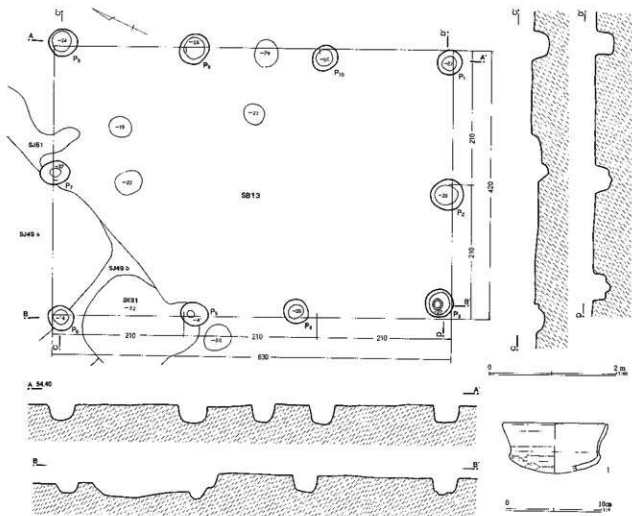
第14号掘立柱建物跡 (第215図)

第14号掘立柱建物跡は、E-4・5グリッドに位置する。第113~116・118号住居跡、第6号井戸跡と重複する。第116号住居跡及び第6号井戸跡に切られていることは判明しているが、他の遺構との新旧関係は不明確な点がある。第113・118号住居跡よりも古い可能性が高い。第114・115号住居跡との関係は判然とせず、一応本建物跡の方が新しいものと考えた。

2×2間の掘立柱建物である。規模は桁行2.80m、梁行2.80mに復元できるが、東側梁行が中心間で約2.40mとやや狭く、台形に近い形態となる。東西棟の建物とすると主軸方向はN-91°-Eを示す。

柱間間隔は、東西梁行ではほぼ等間に揃うが、南北

第214図 第13号掘立柱建物跡・出土遺物



のそれは不揃いである。

柱穴は円形あるいは楕円形で径46~70cm、深さは26~51cmである。

出土遺物は少ない。Pit 5から須恵器高台椀と土師器甕、Pit 7から土師器環が検出されている。第215図1は須恵器高台椀である。推定口径14.0cm。胎上に白色粒子・片岩・礫を含み、焼成は普通。色調は暗青灰色である。残存率約10%。Pit 5出土。重複する第113号住居跡に帰属するものと思われる。2は土師器環である。推定口径12.0cm。胎上に角閃石・砂粒を含む。焼成は普通。色調は橙色。残存率は約10%である。Pit 7出土。3は土師器甕。推定口径23.0cm。胎上に石英・角閃石・砂粒を含み焼成は普通。色調はにぶい橙色。残存率は約40%である。

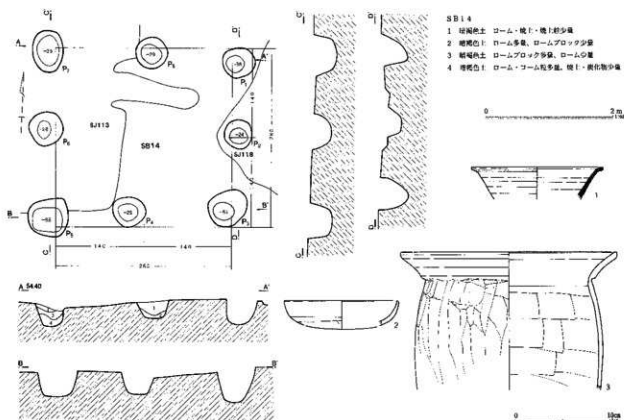
建物の時期は明確にできないが、重複遺構との関係から8世紀前半以降9世紀後半以前におさまる可能性が高い。第215図2の土師器環が建物の時期に近いとすると8世紀前半~中葉頃となろうか。

第15号掘立柱建物跡 (第216図)

第15号掘立柱建物跡は、H-7グリッドに位置する。中世段階の小ピット群の群在する一角から検出された。第16号掘立柱建物跡と重複するが、直接柱穴同士の切り合いはないため新旧関係は不明である。また、第5号井戸跡と重複し、本建物跡の方が古いことが判明した。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行6.60m、梁行4.40mである。主軸方向はN-2°-Wを示す。柱間は桁行、梁行共にほぼ2.20m等間に揃う。柱筋

第215図 第14号掘立柱建物跡・出土遺物



は概ね揃っているが、東側柱筋の Pit 9・Pit10がやや外に彫らんでいる。

柱穴掘り方は楕円形あるいは、方形で直径37～64cm、深さは36～73cm。平面規模はやや小型であるが、深くてしっかりしたものが多く、柱穴埋土は黒褐色土を基調としていた。柱は抜き取られたものと思われ、明瞭な柱痕は認められなかった。

出土遺物は少なく、Pit 7から十師器模倣環の小片が検出されたに過ぎない。第216図1は十師器環である。推定口径14.0cm。胎土に赤色粒子・白色粒子・角閃石を含み、焼成は良好。色調は橙色である。残存率は10%以下の小片。建物の時期は不明瞭である。出土した十師器環はおそらく混入と考えて良いものである。第5号井戸跡よりも古いことから古代であることは間違いないがそれ以上の限定は難しい。

第16号掘立柱建物跡 (第217図)

第16号掘立柱建物跡は、調査区南東部のH・I-7・8グリッドに位置する。第15号掘立柱建物跡と重複す

るが、柱穴同士の切り合いはなく新旧関係は不明である。また、重複する第12・13号溝跡に上面を削平されていた。

2×2間の総柱建物である。規模は桁行4.80m、梁行3.60mになる。主軸方向はN-56°-Wを示す。

桁行の柱間は2.40m (8尺)、梁行の柱間は1.80m (6尺) 等間にはば揃う。

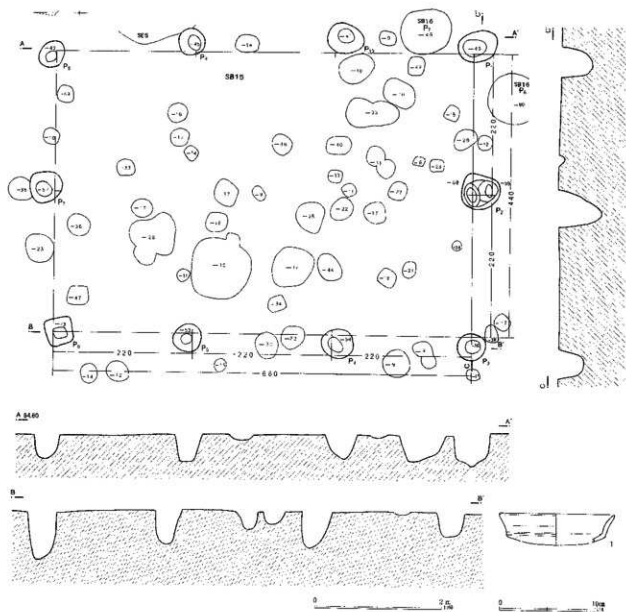
柱穴は円あるいは楕円形で、直径52～92cm、深さは24～82cmであるが、Pit 5は規模が小さく、深度も浅い。柱穴埋土にはローム粒子・ロームブロックが多量に含まれ、Pit 1は柱痕が確認できた。

出土遺物は検出されなかった。時期に関しては、中世小ピットが掘立柱建物跡柱穴を切っていたことから、古代の範疇にはいることは間違いないが、それ以上の限定は難しい。主軸がかなり振れている点を重視すれば、7世紀代に遡る可能性も十分だろう。

第17号掘立柱建物跡 (第218図)

第17号掘立柱建物跡は、調査区南東部のI-7・8

第216図 第15号掘立柱建物跡・出土遺物



グリッドに位置する。第19号掘立柱建物跡と重複するが柱穴同士の切り合いはなく、新旧関係は不明である。また、Pit 1・2上面には第15号溝跡が乗っていた。

2×2間、ほぼ正方形の総柱建物で、規模は桁行4.20m、梁行4.20mである。主軸方向はN-12°-Wを示す。柱間は2.10m(7尺)等間にはほぼ揃う。柱穴は楕円形または不整形で、直径46-97cm、深さは22-70cmである。柱穴埋上にはロームブロックが多量に含まれ、柱は抜き取られたものと思われ、柱痕跡は確認できなかった。

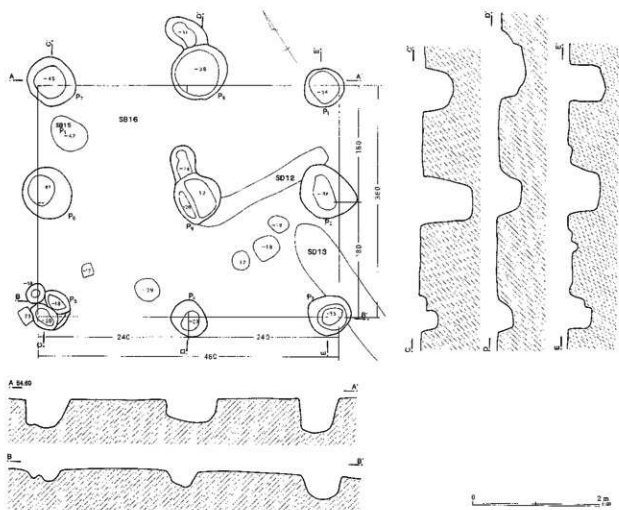
出土遺物は検出されなかった。建物の時期は不明確であるが、Pit 6は中世の小ピットに切られており、古代の所産であることは間違いない。総柱建物である第16号掘立柱建物跡と近接しており、時期的にも近い段階であろうか。

第18号掘立柱建物跡 (第219図)

第18号掘立柱建物跡は、調査区南東部のG・II-7・8グリッドに位置する。第9号溝跡と重複し、本建物跡の方が新しいものと考えられる。

2×1間、ほぼ正方形の側柱建物である。北側柱筋

第217図 第16号掘立柱建物跡



の西側延長上にはほぼ同一規模の柱穴が2木、等間隔に並ぶが、対応する柱穴は検出されず、建物からは除外した。規模は桁行3.20m、梁行3.20m、主軸方向はN-1°-Eを示す。

桁行の柱間は1.60m等間、梁行は中間柱が無く、柱間は3.20mである。柱穴は楕円形あるいは方形で、南側梁行柱穴が規模が大きく、北側のそれはやや小規模である。直径は46-97cm、深さは38-77cmである。Pit 5からは柱痕跡が確認できたが、他の柱穴埋土はロームブロックを多量に含む土壌で、柱痕は検出されなかった。梁行中間柱を欠くが、柱穴自体は全体的に深くてしっかりしており、また、正方形の小規模建物であることから倉庫状の施設と推定される。

出土遺物は Pit 1 から土師器環が2点、土師器壺が1点、須恵器甕の小片が1点、Pit 6 から土師器環が2

点検出された。いずれも小片で、土師器環は口縁部が短く内湾する北武蔵型環である。須恵器甕は外面平行(縞斜格子)叩き、内面同心円当て具痕が残る。

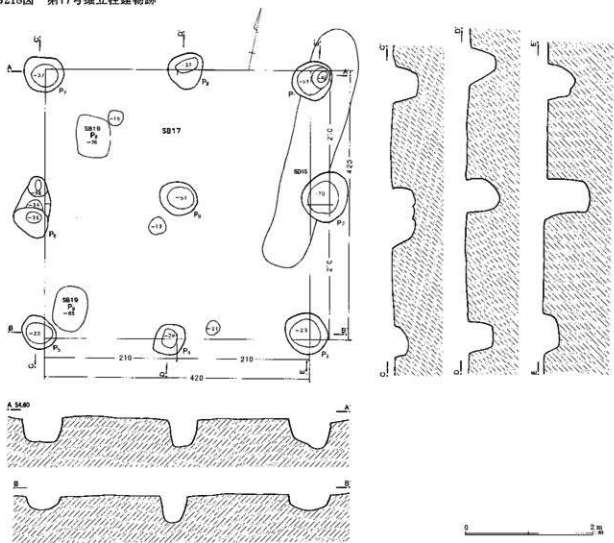
第219図1は土師器環。推定口径12.0cm、胎土に角閃石・白色粒子を含み、焼成は普通である。色調は橙色。残存率は10%以下。Pit 6 出土。口縁直下からヘラケズリが施されている。

2は土師器環である。推定口径13.5cm、胎土に赤色粒子・白色粒子・角閃石を含み、焼成は普通である。色調は橙色。残存率は約10%。Pit 1 出土。表面は風化している。

3は大振りの土師器環である。推定口径16.0cm。胎土に白色粒子・角閃石を含み、焼成は普通である。色調はぶい橙色。残存率は10%以下。Pit 1 出土。

4は土師器壺である。推定口径20.0cm。胎土に赤色

第218図 第17号掘立柱建物跡



粒子・白色粒子・砂粒・角閃石を含み、焼成は良好。色調は橙色。残存率は約15%。胴部はヘラケズリされ、器壁は薄い。

出土遺物は7世紀後半～末葉段階のものが多い。おそらく建物構築段階で、第9号溝跡から混入したものと思われる。第9号溝跡との関係から7世紀後半以降となるが、それ以上の限定は難しい。8世紀代か。

第19号掘立柱建物跡 (第220図)

第19号掘立柱建物跡は、調査区東南部のI・J-7・8グリッドに位置する。第17号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴同士の切り合いはなく新旧関係は不明である。重複する第17号溝跡は、掘立柱建物跡柱穴の上層に被っており、本建物跡の方が確実に古いことが確認された。また、中世の小ピットが柱穴を切っており、

古代の建物であることは間違いない。

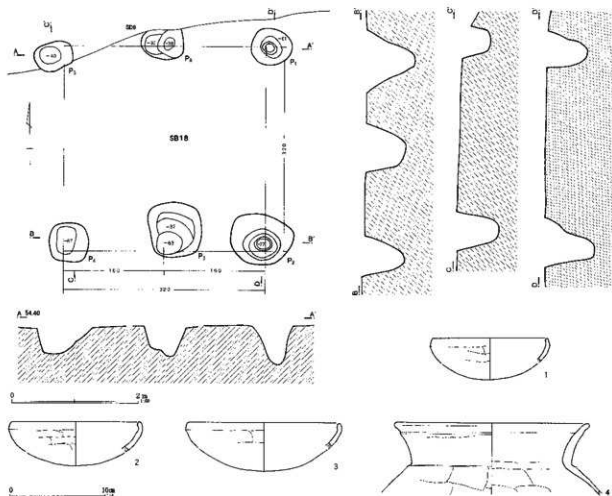
3×2間、南北棟の側柱建物である。規模は桁行7.80m、梁行5.40m、主軸方向はN-1°-Wを示す。

柱間は桁行で概ね2.60m等間、梁行で2.70m等間に復元できる。柱間寸法は広く、特に、梁行では9尺等間となる。柱筋はほぼ通っているが、梁行の中間柱は棟持ち柱風にやや外側に張り出している。

柱穴掘り方は方形あるいは長方形で、規模は長径60～74cm、深さは26～92cmである。Pit 2・Pit10を除いて深くてしっかりしたものが多く、柱底が明瞭に検出できたものはなく、ほとんどが抜き取られたものと思われる。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土を基調としていた。

出土遺物は須臾器の蓋胴部小片が1点検出されたの

第219号 第18号掘立柱建物跡・出土遺物



みである。建物の時期は不明確である。

第20号掘立柱建物跡 (第221・222号)

第20号掘立柱建物跡は、調査区南端のⅠ・Ⅱ-6・7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第209号住居跡、第17・20号溝跡に切られていた。

本調査区内では最大規模の建物である。東西棟、4×3間の身舎に南庇が取り付く。規模は桁行8.80m、梁行6.80m、主軸方向はN-74°-Eを示す。

桁行の柱間は概ね2.20m前後となるが、北側柱列のPit14・Pit15はややずれており、等間に揃わない。梁行の柱間は1.80m等間に揃う。

庇の出は約1.40mである。庇柱は柱筋がきれいに揃わず、柱間も等間にはならない。また、Pit 6・Pit 7間には柱穴は検出されなかった。正面観(出入り口)に関係するのだろうか。

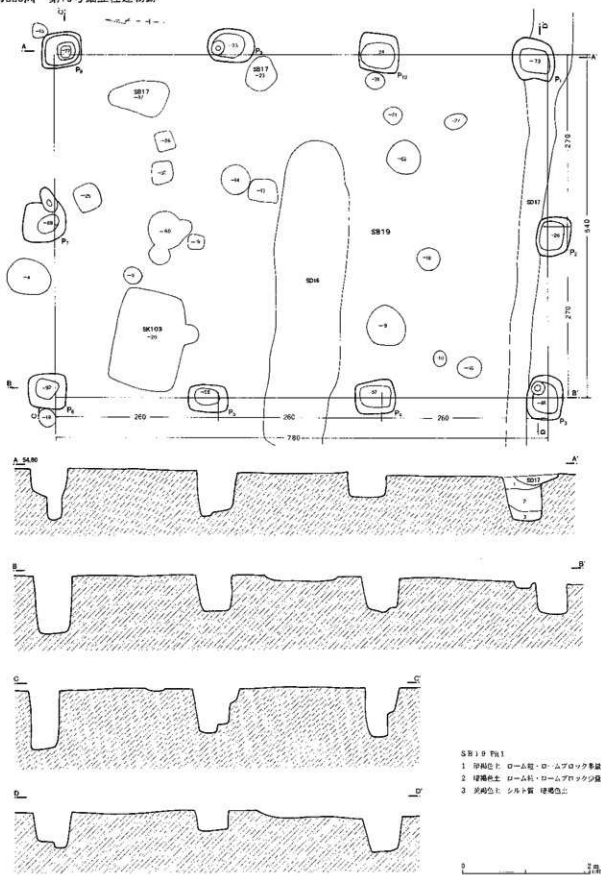
柱穴はU形が主体となるが、南北の桁行柱を中心に、柱穴が瓢箪状に2個連結するものが多く認められた。一度建て替えが行われた可能性があろう。

柱穴直径は48~100cm、深さは22~73cmである。柱痕または柱抜き取り痕は大半の柱穴で確認できた。北側桁行では、柱痕は柱掘り方の北に寄り、西側梁行では柱痕は柱掘り方の西側に偏っていた。但し、南西隅柱のPit 9のみ柱痕が北東寄りにあり、柱筋はきれいに通らない。

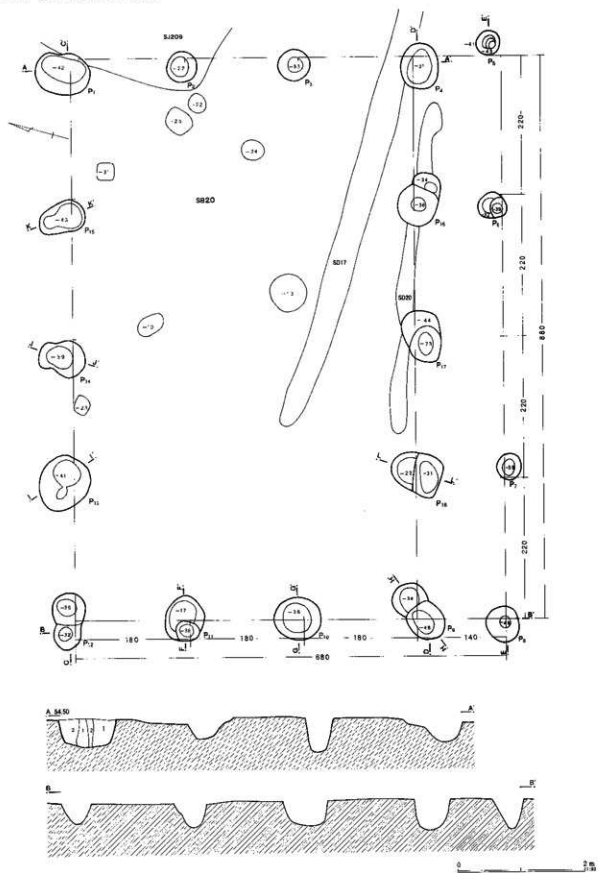
庇柱は身舎柱よりも一回り小さいが、深さは40cm前後を測り、比較的深い。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期に関しては第209号住居跡との関係から10世紀後半以前であることは確実であるが、上限は明確にできない。

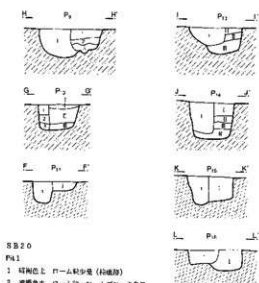
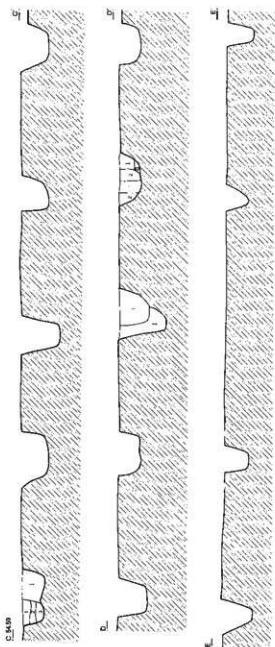
第220号 第19号掘立柱建物跡



第221网 第20号掘立柱建物跡(1)



第222号 第20号掘立柱建物跡(2)



第20

Pit 1

- 1 暗褐色土 ローム粒少量 (柱礎跡)
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

Pit 9

- 1 暗褐色土
- 2 黒土
- 3 暗褐色土 赤色土
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒色土ブロック多量

Pit 10

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量
- 2 黒土
- 3 赤色土 ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 5 黒土
- 6 暗褐色土 赤褐色土少量

Pit 11

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量

Pit 12

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量

Pit 13

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量

Pit 14

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒多量
- 4 暗褐色土 暗褐色土少量

Pit 15

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 ローム粒少量

Pit 16

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 暗褐色土少量

Pit 17

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 赤褐色土少量

Pit 18

- 1 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒少量

第21号掘立柱建物跡 (第223号)

第21号掘立柱建物跡は、H・I-4・5グリッドに位置する。第194・195号住居跡と重複し、Pit 7は第194号住居跡の床面を除去して検出されており、本建物跡の方が古いことが判明した。

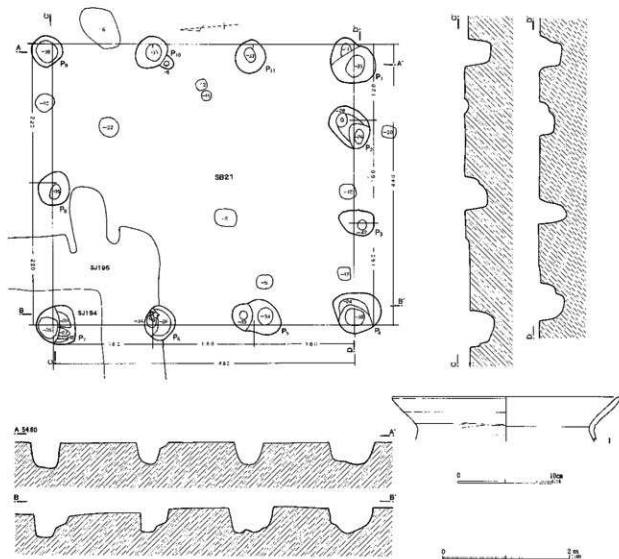
3×3(2)間、南北棟の建物で、規模は桁行4.80m、梁行4.40mになる。主軸方向はN-6°-Eを示す。桁行の柱間は1.60m等間にはば揃う。梁行は北側が

2間、南側が3間構成となっていた。北側の柱間は2.20m等間となるが、南側では西から1.60m・1.60m・1.20mとなり、等間には揃わない。

柱穴は円形または楕円形が主体で、直径48~80cm、深さは24~42cmである。Pit 2が我がが、他の柱穴は概ね30~40cm前後である。

柱痕はPit 8で明瞭に確認できた。Pit 4では柱を抜き取ったと思われる痕跡が認められた。他の柱穴で

第223図 第21号掘立柱建物跡・出土遺物



は明瞭に柱痕、または柱抜き取り痕跡を確認することはできなかった。柱穴埋土はローム粒と混じりの褐色土または暗褐色土を基調としており、柱痕には明るい褐色土が充填されていた。

出土遺物は Pit 4 から、土師器甕の口縁部片が 1 点検出されたのみである。第223図1は土師器甕である。推定口径24.0cm前後。口縁部が「く」の字状に外反し、胴部上端は横方向のヘラケズリ調整される。胎上に角閃石・白色粒子・砂粒を含み、焼成は普通である。色調は橙色。残存率は10%以下である。Pit 4 出土建物の時期は、重複住居跡との関係から 9 世紀後半以前である。Pit 4 出土の土師器甕が建物の時期を示す保

証はないが、一応 8 世紀前半と考えておきたい。

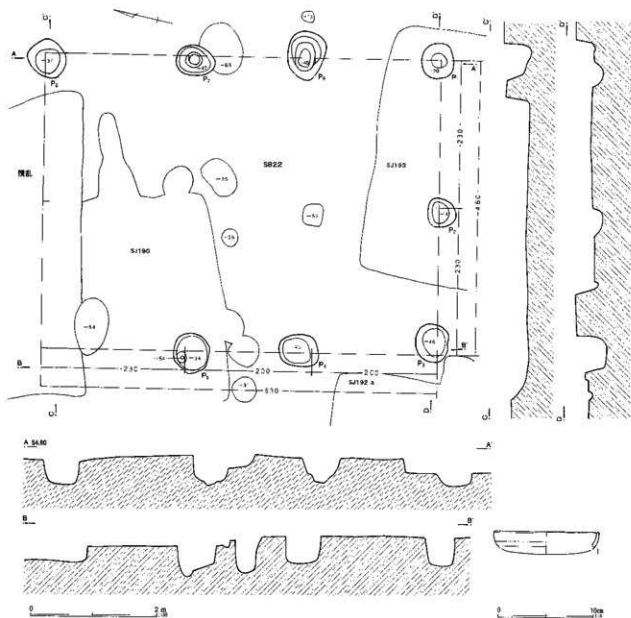
第22号掘立柱建物跡 (第224図)

第22号掘立柱建物跡は、H-3・4グリッドに位置する。北側梁行は深い攪乱を受けており、北西隅柱と梁行中間柱は検出されなかった。第190・193号住居跡と重複し、新旧関係は不明確な点を残すが、調査所見では Pit 1・2 は第193号住居跡床面下から検出された。第190号住居跡との関係は不明であった。

3×2間、南北棟の側柱建物と考えられる。規模は桁行6.30m、梁行4.60mに復元できる。主軸方向は N-13°-Wを示す。

桁行の柱間は等間に揃わず、南から2.00m・2.00

第224図 第22号掘立柱建物跡・出土遺物



m・2.30mとなる。梁行の柱間は2.30m等間である。柱筋はきれいに通っている。

柱穴形態は円形または楕円形で、直径48～78cm、確認面からの深さは14～54cmである。

出土遺物は Pit 1 から須恵器製の胴部片、Pit 3・Pit 4 から土師器環の小片が各1点検出されたのみである。

第224図1は土師器環である。推定口径11.0cm前後

と思われる。胎土に角閃石・白色粒子・砂粒を含む。焼成は普通で、色調はにぶい橙色。残存率は10%以下。Pit 3 から出土した。北武蔵型環と思われ、口縁部の下位は無調整である。

建物の時期は不明確であるが、重複遺構との関係から8世紀初頭以前となる可能性がある。但し、出土遺物は時期的にやや下降するものが含まれ、明確な時期決定の資料に欠ける。

(3) 溝跡

第1号溝跡(第225区)

第1号溝跡は、調査区北東部D-5~8グリッドに位置する。長さ約31mで、東端は調査区外に抜けている。重複する第126号住居跡を切り、第32号土塼との関係は不明である。

最大幅1.10m、深さは概ね30cm前後、最大でも60cmである。溝底の傾斜は東に向かって標高を下げている。出土遺物はない。時期は中世以降と推定される。

第2号溝跡(第225区)

第2号溝跡は、調査区東部のH-4グリッドからE-8グリッドにかけて検出された。弓なりにカーブし、東端は調査区外に抜けている。溝跡の南西部では、約6m隔たり、第8号溝跡が平行し、北東部では10m程の間隔を明け、第1号溝跡が平行して延びている。また、第2号溝跡の北側には第3・10号溝跡が近接して存在する。おそらくこれらの溝跡と本溝跡は関連したものであろう。第4・9号溝跡を始め、多数の遺構と重複するが、全ての遺構を切っていた。

規模は長さ約59m、幅は一定せず、約40~110cmである。深さは10~25cm前後と比較的浅い。溝底の傾斜は南から北、西から東に向かうに従い、標高を下げる傾向にある。

出土遺物はない。時期は中世以降と思われる。

第3号溝跡(第225区)

第3号溝跡は、E-7グリッドに位置する。ほぼ東西南方向に延びる溝跡で、南側には第10号溝跡、第2号溝跡が近接して掘られている。両溝跡ともほぼ平行することから一体の機能を持っていたのであろう。

規模は、長さ約4.40m、幅25~60cm、深さ10~20cm程である。溝底は概ね平坦であるが、西端はやや深くなる。

出土遺物は須恵器高台碗(第228区1)と土甕(第228区2)がある。いずれも混入と考えられる。溝跡の時期は中世以降と考えられる。

第4号溝跡(第226区)

第4号溝跡は、B-7グリッドからJ-6グリッド

にかけて、調査区東部を南北に貫くように検出された。北端は調査区外に延びている。多数の遺構と重複している。第177号住居跡との新旧は不明であるが、その他の住居跡は全て溝跡を切っていた。また、第1・2・17号溝跡、第8号掘立柱建物跡も第4号溝跡を切っていることが判明した。第9号溝跡に関しては新旧関係が判然としない。本溝跡と一体であるか、または本溝跡の方が新しい可能性もある。

規模は長さ78m、幅は40~50cm、深さは5~25cmと全体に浅い。底面の傾斜は南が高く、北に向かうに従って標高が下がる傾向にある。

出土遺物は少ない。第228区3は須恵器の坏でG-6グリッドから出土した。体部下位~底部全面回転ヘラケズリ調整される。南比企産で8世紀初頭~前半頃のものであろう。第228区4は土師器小型(台付)甕。混入と考えた方が良いかもしれない。

重複住居跡のほとんどが10世紀後半以降のもので、7~9世紀代の住居跡が切り合わない点は注意される。溝跡土中には恒常的に水が流れた形跡は窺えないことから区画溝として機能したと考えている。第9号溝跡との関係が不明確であるが、同時期とすれば、7世紀後半~末葉、第9号溝跡よりも新しい段階としても8世紀初頭~前半頃を中心に機能していた可能性がある。

第5号溝跡(第225区)

第5号溝跡は、D-1~F-2グリッドにかけて検出された。やや屈曲しながら南北に延びており、重複する第91号住居跡、第99・100号住居跡を切っていた。

規模は長さ約17m、幅は一定せず20~50cm程である。深さは10~50cmで、北に向かうに従って深くなり、溝底レベルも下がっている。

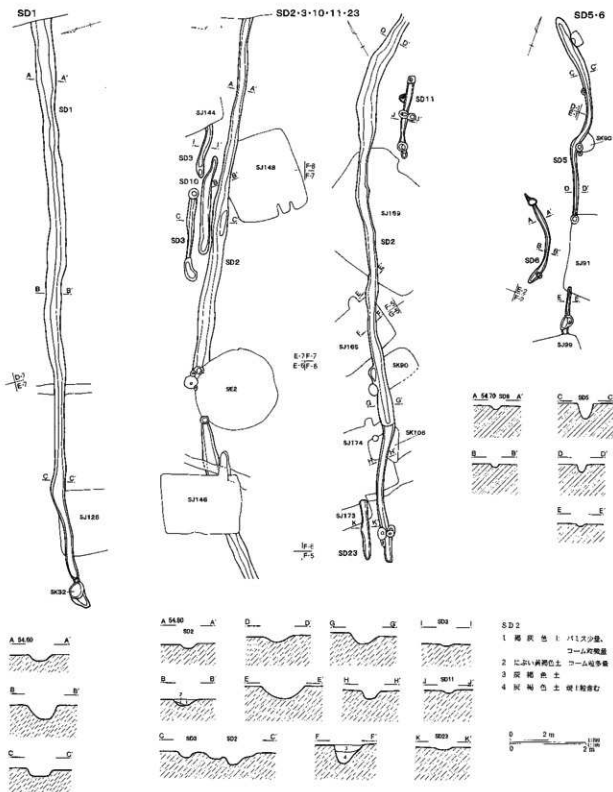
出土遺物は少なく、土師器坏がある(第228区5)。おそらく混入と考えられ、溝跡の時期は第100号住居跡との関係からみて中世以降となるものと考えられる。

第6号溝跡(第225区)

第6号溝跡は、調査区西端のE-1・2グリッドにある。南北方向にやや弧を描いて延びている。

大寄1区

第225図 溝跡(1)



規模は長さ約5.00m、幅30cm、深さ10cm前後である。

出土遺物はない。時期も不明である。

第7号溝跡 (第226図)

第7号溝跡は、D-5グリッドに位置する。第78・79号住居跡に切られていた。第82号住居跡との関係は不明確であるが、本溝跡の方が古い可能性が高い。

規模は長さ4.70m、幅は50～85cm、確認面からの深さ30cm前後である。埋土は暗褐色土から黒褐色土で、焼土粒子が含まれる。

出土遺物は土師器環が1点検出された(第228図6)。おそらく、重複する第78号住居跡に伴う遺物と推定される。時期は9世紀末葉以前であることは確実で、8世紀初頭以前となる可能性もある。性格は不明である。

第8号溝跡(第226図)

第8号溝跡は、E-3グリッドからG-2グリッドにかけて位置する。第2号溝跡の内側、約6m隔たり平行していた。第112・122・155・156号住居跡・第91号土壌を切って構築されていた。また、第9号溝跡と重複し、本溝跡が切っていることが判明している。

規模は長さ4.40m、幅50～80cm、深さ10～25cm前後である。溝底レベルは全体に平坦であるが、中央付近がやや深い傾向にある。

出土遺物は土師器環が2点検出されている(第228図7・8)。遺構の重複関係からみて、いずれも溝跡に伴うものではない。第2号溝跡と関連した溝と思われる。時期は近世以降と考えられる。

第9号溝跡(第226図)

第9号溝跡は、G-2グリッドからG-8グリッドにかけて、調査区をほぼ東西に横断するように延びていた。重複する全ての住居跡と、第2・8・23号溝跡、第76号土壌に切られていた。第4号溝跡との関係は不明瞭であるが、ほぼ同時期か本溝跡の方が古いものと思われる。

規模は、長さ61.00m、幅1.10～1.50m、深さ40～60cm前後である。溝底面はほぼ平坦で、調査区西端と東端の溝底レベルを比較しても標高差はほとんどない。埋土には砂粒や礫は目立たず、水が流れた痕跡を見出すことはできなかった。

出土遺物が多い(第228～230図9～49)。土師器環類が多く、他に土師器甕・壺類、須恵器蓋や長頸瓶・甕の破片が検出されている。土師器環は口縁部が内屈または内湾する北武蔵型環が主体となり、口縁部が短く

立ち上がる模倣環系統の土器(14)、在地暗路文環(23)が伴う。須恵器蓋(44)はG-5グリッドの覆土上層から出土した。小振りで宝珠つまみ、内面にかえりを伴う。末野産である。長頸瓶は頸部片。3段成形の接合面で割離している。秋間産か。時期は7世紀後半～末葉頃のものでほぼ占められ、比較的短時間で埋没したものと思われる。底面の傾斜が無く、水の流れた形跡も認められないことから水路として機能した可能性は低いであろう。区画施設か。

第10号溝跡(第225図)

第10号溝跡は、E-7・8グリッドに位置する。第2号溝跡の北側に平行して延びる。長さ5.05m、幅50cm、深さは5cmと非常に浅い。溝底は西から東に向かって僅かに傾斜している。

出土遺物はない。第2号溝跡と一体のものと思われ、時期は近世以降と推定される。

第11号溝跡(第223図)

第11号溝跡は、F-5グリッドに位置する。第2号溝跡の南側にほぼ平行して検出された。5本の小ピットと重複するが、本溝跡の方が新しい。

規模は長さ5.40m、幅20～40cm、深さ5～10cmである。

出土遺物はない。性格は不明であるが、第2号溝跡と一体的な関係にあるものと思われる。時期は近世以降と考えられる。

第12号溝跡(第226図)

第12号溝跡は、調査区南東部のI-7・8グリッドに位置する。第16号掘立柱建物跡及び第207号住居跡と重複し、本溝跡の方が新しい。掘り込みが浅く途中が途切れており、本来は第14号溝跡とも重複するが、関係は不明である。

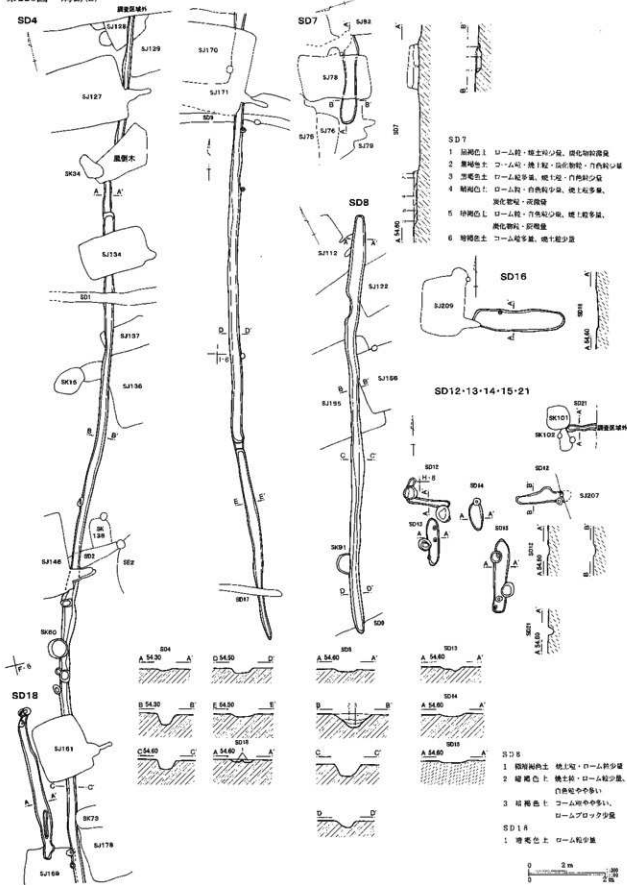
規模は長さ9.00m、幅は一定せず30～80cm、深さ4～10cmである。

出土遺物はない。時期は不明であるが、おそらく近世以降と推定される。

第13～15号溝跡(第226図)

第13～15号溝跡は、調査区南東部のI-8グリッド

第226区 溝跡(2)



に位置する。第12号溝跡に直交するように、3本の溝跡が平行して延びている。

第13号溝跡は長さ2.50m、幅60cm、深さ5cm。第14号溝跡は長さ1.45m、幅68cm、深さ8cm。第15号溝跡は長さ7.85m、幅80cm、深さ5～10cmである。いずれの溝跡も埋土や規模が近似し、相互に関連したものと思われる。

出土遺物は、第13号溝跡から須恵器釜底部片が検出された(第230図50)が、遺構に伴うものではない。時期は不明確ながら、おそらく近世以降の所産と推定される。

第16号溝跡(第226図)

第16号溝跡は、調査区南東部のI・J-7グリッドに位置する。第209号住居跡カマドの上面に乗っていた。

規模は長さ4.95m、最大幅1.10m、深さは6cm前後と非常に浅い。ほぼ東西方向に軸を向け、西方にある第19号溝跡の延長線上に当たる。おそらく両者は同一の遺構と推定される。第19号溝跡からは近世以降の陶磁器片が出土しており、本溝跡も近世以降の所産と考えられる。

第17号溝跡(第226図)

第17号溝跡は、調査区南端のJ-4～8グリッドに位置する。ほぼ東西方向に軸を向ける。第20号溝跡が一部重複しつつ、平行する。おそらく一休の溝跡と思われる。また、第200・210号住居跡、第4号溝跡と重複し、本溝跡の方が新しいことが判明した。

規模は一部途切れる部分を含めて長さ45m、幅40～50cm、深さは10～20cm前後である。溝底レベルは大きな差はないが、東に向かうに従って僅かに標高を下げる傾向にある。

出土遺物はない。時期は不明であるが、近世以降と思われる。

第18号溝跡(第226図)

第18号溝跡は、調査区中央部のF-5グリッドに位置する。第4号溝跡の西側0.6～2m程度隔たつてほぼ南北流する。南端は第169号住居跡と重複する。新田岡

係は不明瞭であったが、本溝跡の方が新しいものと判断した。

規模は長さ約7m、最大幅80cm、深さは5cm前後と極めて浅い。出土遺物はなく、時期は不明である。

第19号溝跡(第227図)

第19号溝跡は、調査区南西部のI・J-4グリッドに位置する。第200号住居跡の上面に乗っていた。掘り込みが浅いために不定形土塊状の形態をなすが、本来は東西方向に軸を向けていたものと考えられる。東側延長上には第16号溝跡があり、おそらく同一遺構と推定される。

規模は長さ6.60m、最大幅2.20m、深さは5cm前後と極めて浅い。

出土遺物は近世以降の陶磁器片と須恵器甕が1点検出されたのみである(第230図51)。須恵器甕は混入してある。時期は近世以降の所産と考えられる。

第20号溝跡(第227図)

第20号溝跡は、調査区南端のJ-4～8グリッドに位置する。第17号溝跡と西端付近で重複し、部分的に途切れながら南側を平行して延びる。第200・211号住居跡、第20号掘立柱建物跡を切っていた。

規模は途切れる部分を含めて長さ約46m、幅30～50cm、深さは5cm程度と極めて浅い。

出土遺物はなく時期は不明であるが、近世以降と推定される。

第21号溝跡(第226図)

第21号溝跡は、H-8グリッドに位置する。東端は調査区外に延びている。第101・102号土壇との新旧関係は不明である。

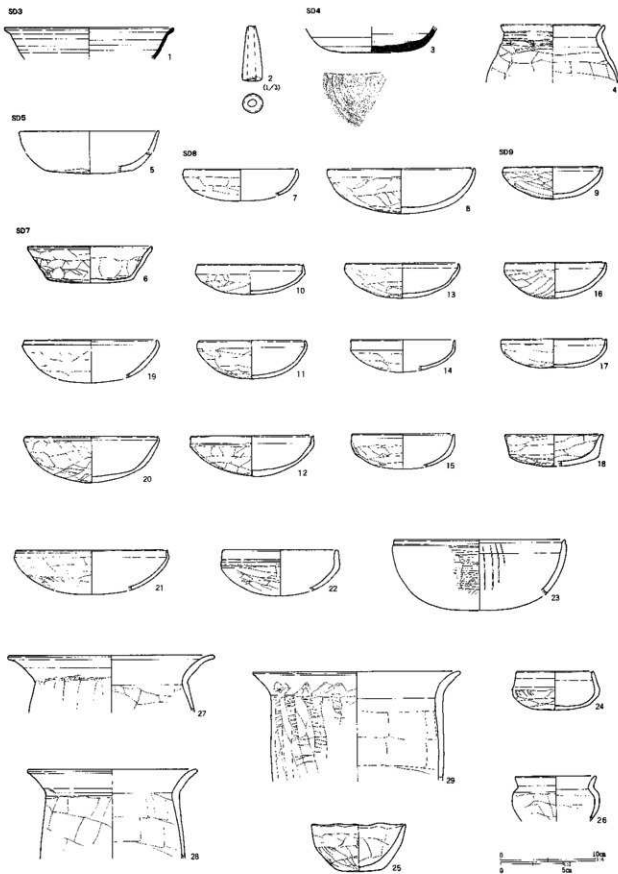
規模は長さ1.50m、幅35cm、深さ15cm前後である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第22号溝跡(第227図)

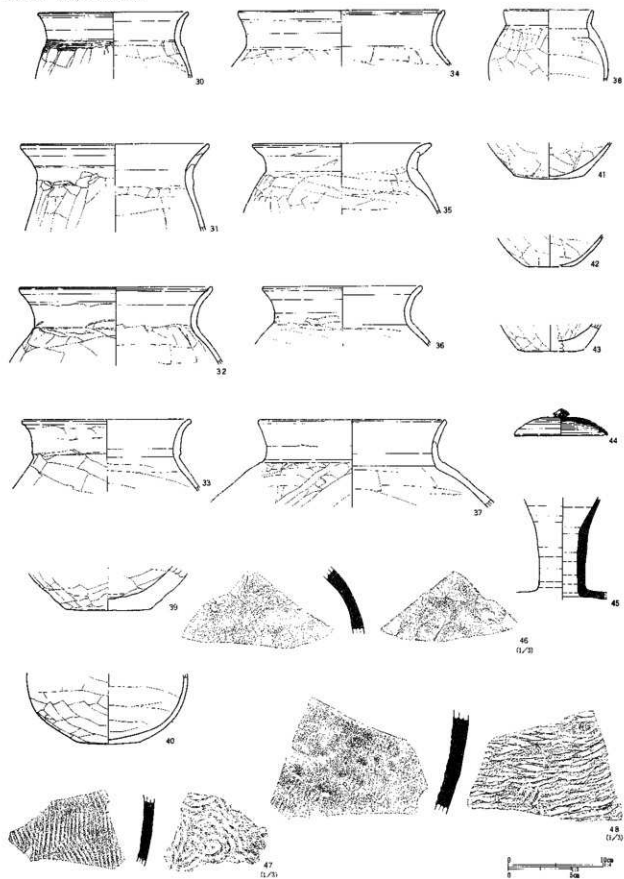
第22号溝跡は、調査区南東部のJ-8グリッドに位置する。第210号住居跡の覆土上面に乗っていた。第17・20号溝跡の北側に平行して延び、一連の溝跡と考えられる。

規模は長さ2.20m、幅35cm、深さは5cmと極めて浅

第228图 清跡出土遺物(1)



第229图 沟跡出土遺物(2)



い。出土遺物はなく、時期は不明。おそらく近世以降と推定される。

第23号溝跡 (第227図)

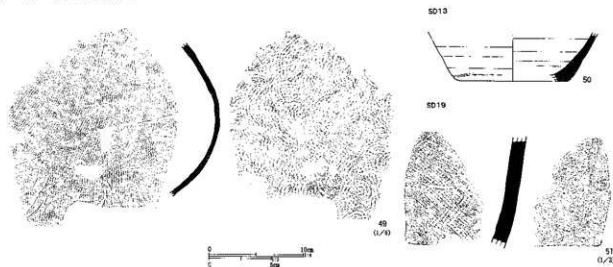
第23号溝跡は、G・H-4グリッドに位置する。第2号溝跡の西側約0.50mにあり、ほぼ平行する。第173

号住居跡及び第9号溝跡を切っている。

規模は長さ3.00m、幅40~50cm、深さは5cm前後と非常に浅い。

出土遺物はなく、時期は不明である。おそらく第2号溝と関連した溝跡と思われる。

第230図 溝跡出土遺物(3)



第111表 溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵高台碗	(18.0)	3.3		H I J	2	灰黄	15	SD3 未野産
2	土埴	長 4.35cm 最大径 1.35cm		孔径 0.70cm			重量 9.50g		にぶい橙 SD3
3	須恵碗		2.7	(8.8)	F H J	1	灰	15	SD 4 南北産
4	碗	(11.0)	6.0		D H J	2	橙	30	SD 4
5	環		2.1		D E H	2	橙	5	SD 5
6	環	13.3	3.8	9.0	D E H J	2	橙	90	SD 7
7	環	(12.0)	2.8		D E H	2	橙	20	SD 8
8	環	15.6	4.7		D E H J	2	橙	90	SD 8
9	環	10.4	3.4		D E H J	2	橙	100	SD 9
10	環	(11.2)	3.1		D H J	2	橙	35	SD 9
11	環	11.4	4.0		D H J	2	橙	80	SD 9
12	環	13.0	4.3		D E H J	2	橙	100	SD 9
13	環	(12.0)	3.6		D H J	2	橙	25	SD 9
14	環	(11.0)	3.4		A H J	3	橙	25	SD 9
15	環	(11.0)	3.5		H J	2	橙	20	SD 9
16	環	10.6	3.7		D E H J	2	橙	95	SD 9
17	環	11.0	3.0		H J	2	橙	90	SD 9
18	環	(10.4)	3.3		H J	2	灰褐	45	SD 9
19	環	(14.0)	4.0		E H J	2	にぶい橙	15	SD 9
20	環	(14.0)	4.8		D H J	2	橙	65	SD 9
21	環	(16.0)	4.2		H J	2	にぶい橙	15	SD 9
22	環	(12.0)	4.3		A D E	1	にぶい橙	20	SD 9
23	環	(18.0)	5.8		A D E	2	にぶい橙	10	SD 9 内面放射暗文 外面ケズリ+ミガキ
24	環	8.2	4.0		H J	2	にぶい橙	70	SD 9
25	環	10.0	4.9	4.9	H J	2	褐	90	SD 9
26	小型壺	(8.6)	4.7		H J	3	橙	15	SD 9

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地色	色調	残存率	備考
27	罎	(22.0)	6.0		DHJ	2	にぶい褐	20	SD 9
28	罎	(18.0)	9.3		HJ	2	橙	20	SD 9
29	罎	(22.0)	11.5		DEHIJ	2	にぶい橙	15	SD 9
30	罎	(16.0)	6.9		EHIJ	2	にぶい橙	35	SD 9
31	罎	(20.0)	9.2		BHIJ	2	にぶい橙	20	SD 9
32	壺	(20.6)	8.2		DHJ	2	にぶい黄橙	25	SD 9
33	壺	(18.0)	7.5		EHIJ	2	灰黄褐	15	SD 9
34	壺	(22.0)	5.9		HJ	2	にぶい橙	30	SD 9
35	壺	(19.0)	7.4		ABDHIJ	2	にぶい橙	30	SD 9
36	壺	(17.0)	6.3		DHJ	2	にぶい橙	20	SD 9
37	壺	(20.0)	9.2		AHIJ	2	橙	15	SD 9
38	壺	(9.6)	7.5		HJ	3	橙	40	SD 9
39	壺		3.5	7.0	EHIJ	2	灰黄褐	80	SD 9
40	壺		7.4	6.8	EHIJ	2	橙	90	SD 9
41	壺		3.8	(7.6)	BHIJ	2	にぶい橙	40	SD 9
42	壺		3.4	(5.0)	HJ	3	橙	15	SD 9
43	甗		2.8	(7.0)	EHIJ	2	にぶい橙	25	SD 9
44	須恵蓋	9.6	2.8		FHJ	1	灰白	90	SD 9 南比企産
45	須恵長頸瓶		10.7		EHIJ	1	灰白	80	SD 9 秋田産か
46	須恵罎				EHIJ	2	灰白		SD 9 群馬産
47	須恵罎				HIIJ	1	灰		SD 9 本野産
48	須恵罎				HJ	1	灰		SD 9 本野産
49	須恵罎				HIIJ	1	灰		SD 9 本野産
50	須恵罎		5.1	(12.0)	AHIJ	1	にぶい黄橙	15	SD13 本野産
51	須恵罎				HIIJ	1	灰		SD19 本野産

(4) 井戸跡

第1号井戸跡 (第231図)

第1号井戸跡は、E・F-6グリッドに位置する。

第147号住居跡を切って掘り込まれていた。

規模は直径1.35m、深さ2.00m、上面がやや崩落しているが、ほぼ筒状に掘り込まれていた。埋土は11層に分かれ、覆土上層 (第4層) 及び最下層 (第11層) には礫が多量に含まれていた。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、住居跡との切り合い関係から古代末以降、おそらく中世段階の井戸跡と考えられる。

第2号井戸跡 (第231図)

第2号井戸跡はE・F-6グリッドに位置する。第2号溝跡に上面を切られ、第12号独立柱建物跡を切っている。

直径4.30m、深さは2.00m以上となる。調査終了後、重機によって断面を断ち割ったところ、深さ約4mになることが判明した。

埋土は上層が黒褐色土や暗褐色土を主体に構成され、深さ90cm前後の層位に拳大から人頭大の礫が多量に投げ込まれていた。下層は褐色味の強い土壌で、礫を多量に含んでいた。底面は礫層に達していた。

出土遺物はほとんどなく、僅かに砥石が検出されたに留まる (第232図1)。時期は不明確であるが、中世段階に相当するであろう。

第3号井戸跡 (第231図)

第3号井戸跡はD・E-5グリッドに位置する。第117号住居跡と重複し、本井戸跡の方が新しいものと判断した。

形態はやや楕円形で、長径3.70m、短径3.20mである。井筒はテラス面の中心部に掘り込まれていた。直径1.50m、確認面からの深さは2.15mである。

テラス面は深さ約50cmほどで、ほぼ平坦である。埋土はローム粒子・ロームブロックを多量に含み、掘り方と考えられる。井筒埋土上層は流れ込み土、第6層

は暗褐色土と黄褐色土の互層をなしていた。

出土遺物は多い(第232~234図2~44)。土師器環・皿・甕・壺・台付甕・甕、須恵器環・蓋・甕などの器種があるが、重複する第117号住居跡からの混入品が多く含まれているようである。土師器環では第232図6・13・14、須恵器蓋(21)、須恵器環(22)、土師器甕(24)、須恵器甕(38)等が本井戸跡に伴う可能性がある。須恵器環(22)は、南比企産。底部回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施される。時期的には8世紀後半頃と考えられる。

第4号井戸跡(第231図)

第4号井戸跡はG-4・5グリッドに位置する。第172号住居跡と重複し、本井戸跡の方が新しい。

形態は円形で、規模は直径1.15m、深さは90cmと井戸としては浅い。ほぼ円筒形に掘り込まれ、第6層上面に多量の礫が投げ込まれていた。

出土遺物はない。時期は不明であるが、重複住居との関係から10世紀以降となる。

第5号井戸跡(第231図)

第5号井戸跡はH-7・8グリッドに位置し、重複する第15号掘立柱建物跡を切っていた。

形態は不整形円形で、規模は直径2.15m、深さは1.80m以上となる。井筒部は桶形で、長径1.60m。上部はロート状に開いており、崩落部、または掘り方であろう。

埋土下層には礫が多量に含まれ、上層には火山灰(浅間B軽石)が認められた。

出土遺物は青磁碗、羽釜、須恵器甕、平瓦、埴輪片がある(第234図45~51)。青磁碗(第234図45)は口縁部小片で、外面に鑄造弁文を描出している。龍泉窯系。50は円筒埴輪片。突帯部が彫落している。51は馬形埴輪片と思われる。遺物は時期、器種共に雑多でまとまりがない。

青磁碗の上出からみると中世の井戸跡と考えられるが、埋土上層に浅間B軽石が確認され、断面観察の所見を考慮すると、古代に遡る可能性もある。浅間A軽

石を浅間B軽石と誤認したのか。古代または中世であろうが、時期決定は保留しておく。

第6号井戸跡(第231図)

第6号井戸跡は、E-4・5グリッドに位置し、第116号住居跡を切って掘り込まれていた。

形態は円形で、規模は直径2.00m、深さは1.60mである。埋土上層には焼土・炭化物が多量に含まれ、最下層には黒色有機質土が堆積していた。

出土遺物は丸瓦、土師器環、須恵器高台碗がある(第235図52~55)。丸瓦(52・53)は凸面ナデ、凹面は布目、52は有段(土縁)式である。

井戸の時期は、重複遺構との関係から古代末期以降であることは確実で、おそらく中世段階の所産と推定される。

第7号井戸跡(第237図)

第7号井戸跡は、F・G-3グリッドに位置する。第23号土塼として掲載したが、形態や規模から井戸跡とする。

平面形は円形で、規模は直径98cm、深さ90cmである。断面は筒状に掘り込まれるが、底面に向かってやや窄まっている。

出土遺物は須恵器甕の破片が2点ある(第242図12・13)。時期は不明確であるが、古代の井戸跡の可能性はある。

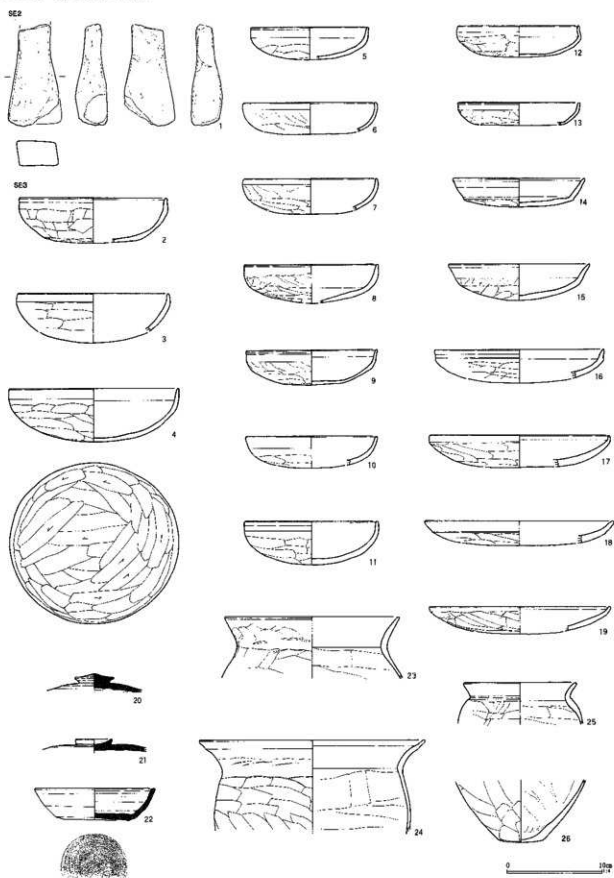
第8号井戸跡(第177図)

調査区東端のF-8グリッドに位置する。第189号住居跡 Pit 5が相当する。第189号住居跡北東コーナーから遺構上面に乗っており、住居跡よりも古いことは確実である。

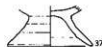
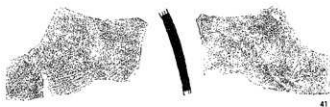
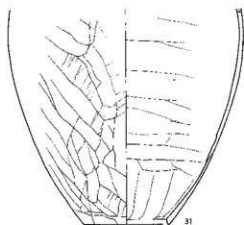
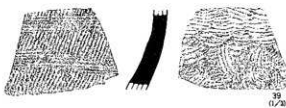
形態は円形で、規模は直径60cm、深さ1.26mである。ほぼ円筒形に掘り抜かれていた。直径の割に深度の深いタイプで、大寄遺跡Ⅱ区に類例が多い。

出土遺物はなく時期は不明確であるが、大寄遺跡Ⅱ区では古墳時代後期~奈良時代頃のものが多く、ほぼ同時期と考えておきたい。

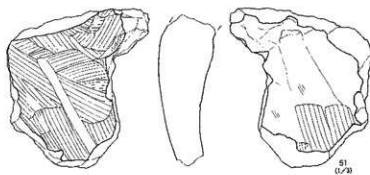
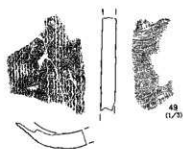
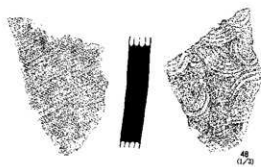
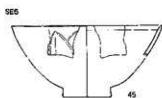
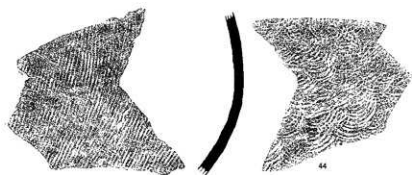
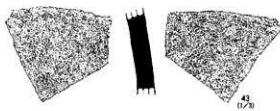
第232図 井戸跡出土遺物(I)



第233图 井戸跡出土遺物(2)

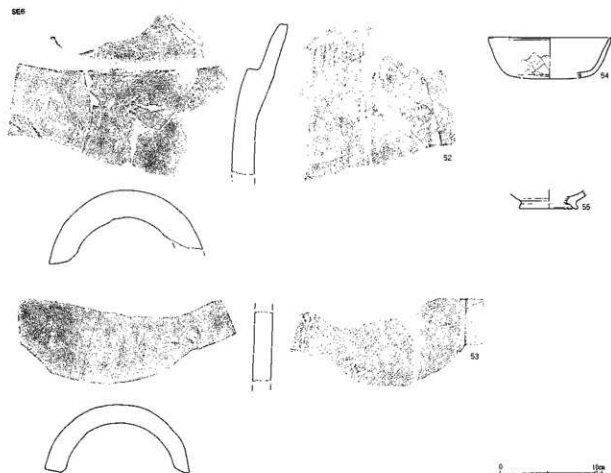


第234图 井戸跡出土遺物(3)



大寄Ⅰ区

第235図 井戸跡出土遺物(4)



第112表 井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	磁石	長10.65cm	最大幅5.40cm	厚さ3.20cm			重量204.83g	SE 2	
2	坏	(15.5)	4.7		DE	1	にぶい橙	25	SE 3 体部-底部ケズリ
3	坏	(16.0)	4.0		DEIIJ	2	橙	15	SE 3
4	坏	18.0	5.6		DEHJ	2	橙	100	SE 3
5	坏	(12.4)	3.4		HJ	2	橙	25	SE 3
6	坏	(14.0)	3.0		DEH	2	にぶい黄橙	20	SE 3 体部上半無調整
7	坏	(14.0)	3.3		HJ	2	にぶい橙	20	SE 3
8	坏	(14.0)	4.1		EHJ	2	にぶい橙	40	SE 3
9	坏	(14.0)	3.6		DEHJ	2	にぶい赤褐	90	SE 3
10	坏	(14.0)	3.0		DEHJ	2	灰黄褐	10	SE 3
11	坏	(14.0)	4.6		BEHJ	2	にぶい橙	60	SE 3
12	坏	12.9	3.3		EIIJ	2	橙	80	SE 3
13	坏	(13.0)	2.4		HJ	3	にぶい橙	15	SE 3
14	坏	14.0	3.0		ADEHJ	2	にぶい赤褐	65	SE 3
15	坏	15.0	3.8		DIIJ	2	にぶい橙	80	SE 3
16	皿	(18.0)	3.0		DEH	2	橙	20	SE 3
17	皿	(19.0)	3.4		DIIJ	2	にぶい橙	25	SE 3
18	皿	(20.0)	2.3		EHJ	2	にぶい橙	15	SE 3
19	皿	(19.2)	2.6		HJ	2	橙	20	SE 3
20	須恵釜		2.0		ABIIJ	1	灰	40	SE 3 未野産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地成	色調	残存率	備考
21	須恵蓋		1.6		EH1J	1	灰	40	SE 3 本野産
22	須恵坏	12.6	3.4	7.0	FHJ	1	灰	65	SE 3 南北金奈
23	甕	(18.6)	6.5		ADEHJ	2	にぶい褐	40	SE 3
24	甕	(24.0)	9.8		ADEHJ	2	橙	60	SE 3
25	小型甕	(12.0)	4.4		DEHJ	2	にぶい褐	20	SE 3
26	甕		6.5	(5.0)	DEHJ	2	褐灰	40	SE 3
27	甕	(22.0)	8.8		BDEHJ	2	にぶい橙	25	SE 3
28	甕	(24.0)	9.2		DHJ	2	にぶい橙	15	SE 3
29	甕	(24.4)	6.4		BDHJ	2	橙	40	SE 3
30	甕	(20.0)	6.0		HJ	2	にぶい橙	15	SE 3
31	甕		22.5	(9.0)	ADHJ	2	橙	15	SE 3
32	甕		2.9	(8.0)	DEHJ	2	にぶい褐	40	SE 3
33	甕		3.3	(8.0)	EHJ	2	にぶい褐	60	SE 3
34	甕		3.8	(14.0)	AEHJ	2	にぶい橙	20	SE 3
35	甕		1.9	(10.2)	EHJ	3	にぶい黄橙	55	SE 3
36	甕		3.2	8.6	DEHJ	3	橙	100	SE 3
37	古付甕		4.2	(9.0)	EHJ	2	にぶい褐	50	SE 3
38	須恵甕		17.0	(13.4)	FHJ	1	暗灰	75	SE 3 輪山産
39	須恵甕				HJ	1	灰	破片	SE 3 黒色粒子 秋田産
40	須恵甕				BEH1J	1	褐灰	破片	SE 3 本野産 SJ42 25 と同一個体
41	須恵甕				HIJ	1	灰	破片	SE 3 本野産 平行叩き+ナデ 無文当て具
42	須恵甕				BH1J	1	灰	破片	SE 3 本野産 振斜格子叩き+同心田当て具
43	須恵甕				BIJ	1	灰	破片	SE 3 黒色粒子 秋田産
44	須恵甕				BEH1J	1	褐灰	破片	SE 3 本野産 平行叩き+同心田当て具
45	青磁碗	(16.0)	3.3		1 灰オリーブ	2	にぶい赤褐	SE 5 龍泉窯系青磁碗 逸升文	
46	羽釜				ADEJ	1	にぶい赤褐	5	SE 5
47	須恵甕	(28.0)	5.1		HIJ	1	暗灰	10	SE 5 本野産
48	須恵甕				EHJ	1	灰	破片	SE 5 群馬産か
49	平瓦				IIJ	2	灰	SE 5 凸面鏡叩き 凹面布目 明灰色でやや軟質	
50	円筒埴輪				DEHJ	3	橙	破片	SE 5 凸面割離 外面タテハケ 内面ヘラナデ
51	彫象埴輪				DHJ	2	橙	破片	SE 5
52	丸瓦				BDEJ	1	灰黄	SE 6	
53	丸瓦				HJ	1	灰黄	SE 6 凸面鏡叩き 凹面布目 模骨痕あり	
54	坏	(13.0)	4.2	(8.7)	DEH	2	にぶい橙	10	SE 6 底部ケズリ 体部ナデ
55	須恵古高筒		1.9	(5.8)	RIJ	1	にぶい赤褐	25	SE 6 本野産

(5) 土壌

大宮遺跡1区から検出された土壌は総数142基である。土壌の時期は、古代が57基(確実)に9世紀以降になる土壌は3基、中世は4基、縄文は2基、不明が78基であった。不明の中には、中世に属する土壌が多く含まれると思われる。

土壌の性格は不明なものが多いが、一部に土壌器として考えられるものがある。

第73・79号土壌は、どちらも住居の中に収まり、住居が廃絶した後、構築されていることなどから、廃屋墓の可能性が大きい。第81～84号土壌は、平面形が長方

形、主軸が揃うこと、また、埋土が人為的に埋め戻されていることなどから、中世の土壌墓群と考える。第124号土壌からは人骨が出土している。

以下、各土壌について述べていく。

第1号土壌(第236図)

第1号土壌は、B-1グリッドに位置し、第1号竪立柱建物跡 Pit 1 に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.9m、短径0.61m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-83°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

土壌の時期は、第1号掘立柱建物跡が10世紀後半頃とすれば、それ以前となる。

第2号土壌 (第236図)

第2号土壌は、C-1グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、西側にピットが重複する。規模は長径1.56m、短径1.40m、深さ0.06mを測る。

遺物は、土師器環(第242図1)がピットから出土している。

第3号土壌 (第236図)

第3号土壌は、B-2・3グリッドに位置し、第2号掘立柱建物跡 Pit 3 を切っていた。

平面形態は不整形で、規模は長径1.50m、短径1.42m、深さ0.16mを測る。

遺物は、底面より約5cm浮いた所から、ロクロ土師器小皿・甌(第242図2・3)が出土している。

時期は、10世紀後半～11世紀と考えられる。

第4号土壌 (第236図)

第4号土壌は、B-2グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.9m、短径0.82m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第5号土壌 (第236図)

第5号土壌は、B-2グリッドに位置する。

平面形態は円形で、断面形は段を有する。規模は長径0.64m、短径0.58m、深さ0.32mを測る。

出土遺物はなかった。

第6号土壌 (第236図)

第6号土壌は、C-6グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.59m、短径0.47m、深さ0.26mを測る。

遺物は土師器甕(第242図4)が出土している。

時期は土師器甕の特徴から8世紀前半と考えておく。

第7号土壌 (第76図)

第7号土壌は、D-2グリッドに位置し、第60号住居跡に切られている。住居跡が10世紀後半～11世紀頃に位置付けられ、土壌はそれ以前となる。

平面形態は、長方形だが、土壌西側は住居と重複し

ていて、不明である。土壌内には Pit 1・2 がみられる。規模は、長径1.80m、短径1.11m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-74°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第8号土壌 (第236図)

第8号土壌は、C-6グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.30m、短径1.08m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-53°-Eを示す。

遺物は群馬産と思われる須恵器甕(第242図5)が出土している。内面に、平行当て具が使用されている点に特徴がある。

第9号土壌 (第236図)

第9号土壌は、C-7グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.22m、短径1.06m、深さ0.04mを測る。

出土遺物はなかった。

第10号土壌 (第236図)

第10号土壌は、C・D-8グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.18m、短径1.08m、深さ0.22mを測る。

出土遺物はなかった。

第11号土壌 (第236図)

第11号土壌は、D-7・8グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.00m、短径0.94m、深さ0.13mを測る。断面形は段を有する。

出土遺物はなかった。

第12号土壌 (第236図)

第12号土壌は、D-8グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.93m、深さ0.13mを測る。

出土遺物はなかった。

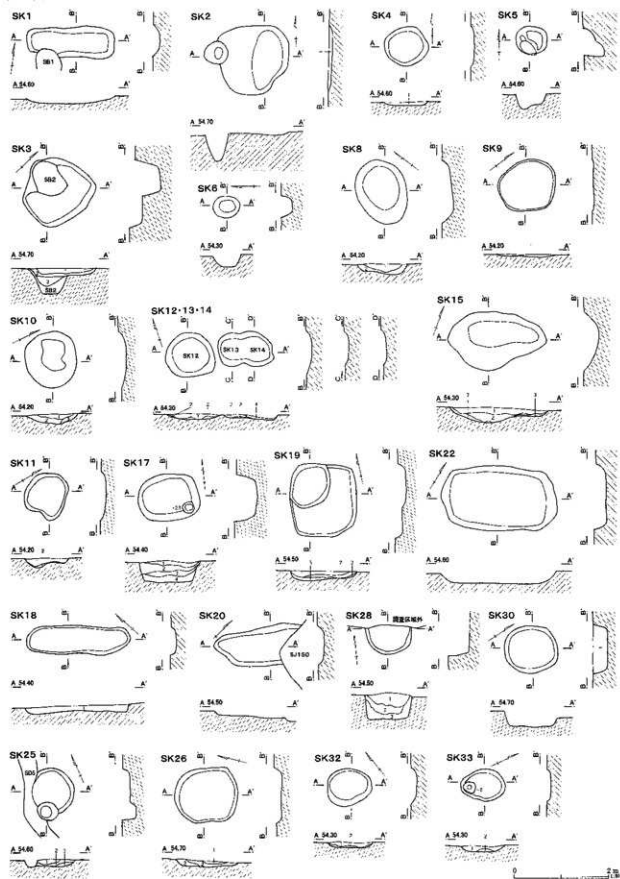
第13号土壌 (第236図)

第13号土壌は、D-8グリッドに位置し、第14号土壌と重複する。

平面形態はおそらく円形で、規模は長径0.70m、推定短径0.60m、深さ0.07mを測る。

出土遺物はなかった。

第236图 土壕(1)



新田関係は、第14号土城より古い。

第14号土城 (第236図)

第14号土城は、D-8グリッドに位置し、第13号土城と重複する。

平面形態は不整形で、規模は長径0.74m、推定短径0.70m、深さ0.11mを測る。

出土遺物はなかった。

新田関係は第13号土城より新しい。

第15号土城 (第236図)

第15号土城は、D-6グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径2.08m、短径1.22m、深さ0.32mを測る。主軸方向はN-71°-Eを示す。断面形はレンズ状で、自然堆積である。

出土遺物はなかった。

第16号土城 (第241図)

第16号土城は、E-8グリッドに位置する。第144号住居跡北壁に土城南側を切られている。住居跡は8世紀初頭前後に位置付けられ、土城の時期は、それ以前となる。

平面形態は長方形で、規模は長径2.88m、短径1.27m、深さ0.80mを測る。主軸方向はN-32°-Wを示す。断面は2段に掘り込まれている。

出土遺物はなかった。

第17号土城 (第236図)

第17号土城は、D-5グリッドに位置する。

平面形態は方形で、南東の角にピットがある。規模は長径1.28m、短径0.98m、深さ0.46mを測る。断面形は箱型で4層に分かれる。焼土塊・炭化物を含む。

遺物は、第1・2層からの出土が多く、焼石が出土している。北壁際の、床面からやや浮いた位置にクロコ土師器小皿(第242図6)が検出された。他にクロコ土師器高台椀(第242図7)と羽釜(第242図8~10)が出土している。

時期は10世紀後半~11世紀と考えられる。

第18号土城 (第236図)

第18号土城は、E・F-8グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.20m、短径0.58

m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-41°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第19号土城 (第236図)

第19号土城は、F-8グリッドに位置する。

平面形態は方形で、北西隅に掘り込みがある。規模は長径1.52m、短径1.40m、深さ0.20mを測る。

出土遺物はなかった。

第20号土城 (第236図)

第20号土城は、F-7グリッドに位置し、土城北東部分を第150号住居跡に切られている。

平面形態はおそらく長方形で、規模は長径1.44m(残存長)、短径0.82m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-42°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第21号土城 (第101図)

第21号土城は、E-2・3グリッドに位置する。土城東側が第92号住居跡を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.33m、短径0.86m、深さ0.23mを測る。断面は2段に掘り込まれる。出土遺物はなかった。

第22号土城 (第236図)

第22号土城は、F-5グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.47m、短径1.34m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-59°-Eを示す。遺物は土師器杯(第242図11)が出土している。9世紀代の暗文杯である。

第23号土城 (第237図)

第23号土城は、検討の結果、第7号井戸跡とした。詳細は298ページを参照願いたい。

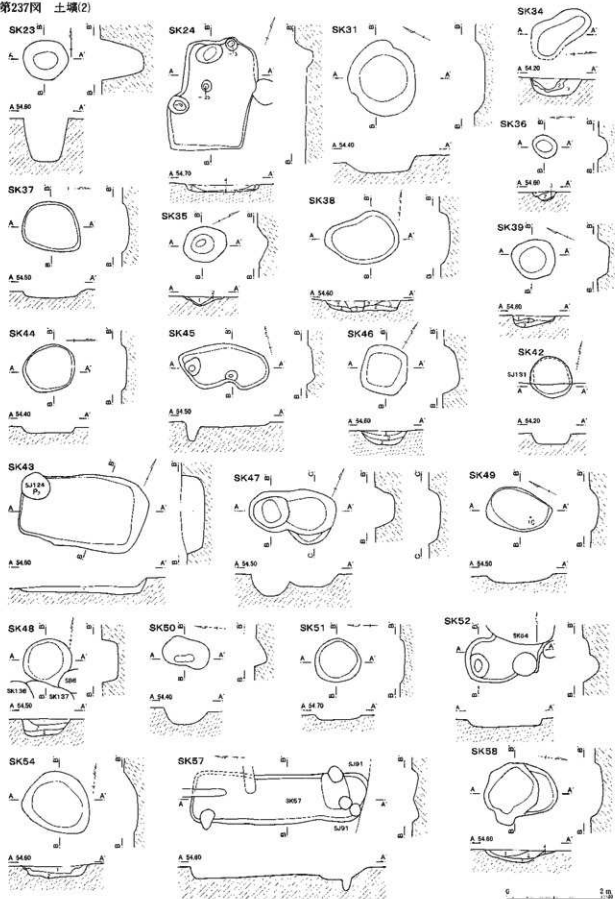
第24号土城 (第237図)

第24号土城は、D・E-2グリッドに位置する。

平面形態は長方形に近い不整形で、ピット状の掘り込みが4ヶ所みられる。土塼というよりも住居の一部の可能性もあろう。規模は長径2.28m、短径1.60m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-19°-Wを示す。遺物は羽釜の破片(第242図14)が出土している。

第25号土城 (第236図)

第237号 土坑(2)



第25号土壌は、E-2グリッドに位置し、土壌西側が第5号溝跡に切られている。溝は中世以降なので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態は不整形円で、規模は長径1.08m、短径0.82m、深さ0.30mを測る。断面は南西に段を有する。

出土遺物はなかった。

第26号土壌 (第236図)

第26号土壌は、D・E-1グリッドに位置し、縄文時代の住居である第2号住居跡を切っている。

平面形態は方形で、規模は長径1.34m、短径1.12m、深さ0.14mを測る。

出土遺物はなかった。

第27号土壌 (第127図)

第27号土壌は、B-7グリッドに位置し、土壌東側を第128号住居跡に切られている。住居は時期不明だが、古代であることは確実に、土壌も古代またはそれ以前であろう。

平面形態はおそらく円形で、土壌内に2つの掘り込みがある。規模は、長径0.60m(残存長)、短径0.78m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第28号土壌 (第236図)

第28号土壌は、B-4グリッドに位置し、土壌北側は調査区外となっている。

平面形態はおそらく円形で、規模は長径1.00m、短径0.60m(残存長)、深さ0.50mを測る。断面形は箱型で3層に分かれる。

出土遺物は縄文土器(第18図1~12)である。遺物の詳細については、28ページを参照のこと。

時期は縄文時代前期である。

第29号土壌 (第123図)

第29号土壌は、E・F-5グリッドに位置し、第123号住居跡と重複する。住居跡の掘り方の一部の可能性がある。住居が9世紀末~10世紀初頭と考えられ、土壌の時期はそれ以前となる。

平面形態は不整形で、規模は長径2.40m、短径1.14m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-8°-Eを示す。

遺物は数点出土しており、その中には、縄文時代後期照ノ内式土器の破片が2点ある。

第30号土壌 (第236図)

第30号土壌は、C-2グリッドに位置し、土壌北側を第21号住居跡に切られている。

平面形態は円形で、規模は長径1.12m、短径1.00m、深さ0.31mを測る。土層は単層ではほぼ「古埋土」である。

遺物は阿玉台式土器の破片と礎が出土している(第18図)。時期は縄文時代中期である。

第31号土壌 (第237図)

第31号土壌は、C-5グリッドに位置し、第49b・50号住居跡を切る。

平面形態は不整形円形で、規模は長径1.60m、短径1.42m、深さ0.20mを測る。

遺物は、土師器(第242図15)が出土している。

第32号土壌 (第236図)

第32号土壌は、C・D-5グリッドに位置し、第1号溝跡と重複する。新田開掘は土壌の方が古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.96m、短径0.76m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-51°-Wを示す。出土遺物はなかった。

第33号土壌 (第236図)

第33号土壌は、C・D-6グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、南側にピットが掘り込まれている。規模は長径0.94m、短径0.69m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-24°-Eを示す。

遺物は土師器鉢(第242図16)が出土している。

第34号土壌 (第237図)

第34号土壌は、C-6・7グリッドに位置する。土壌南東側を、風倒木根により壊されている。

平面形態は不整形で、規模は推定長径1.42m、短径0.66m、深さ0.40mを測る。主軸方向はN-35°-Wを示す。土層は3層に分けられる。

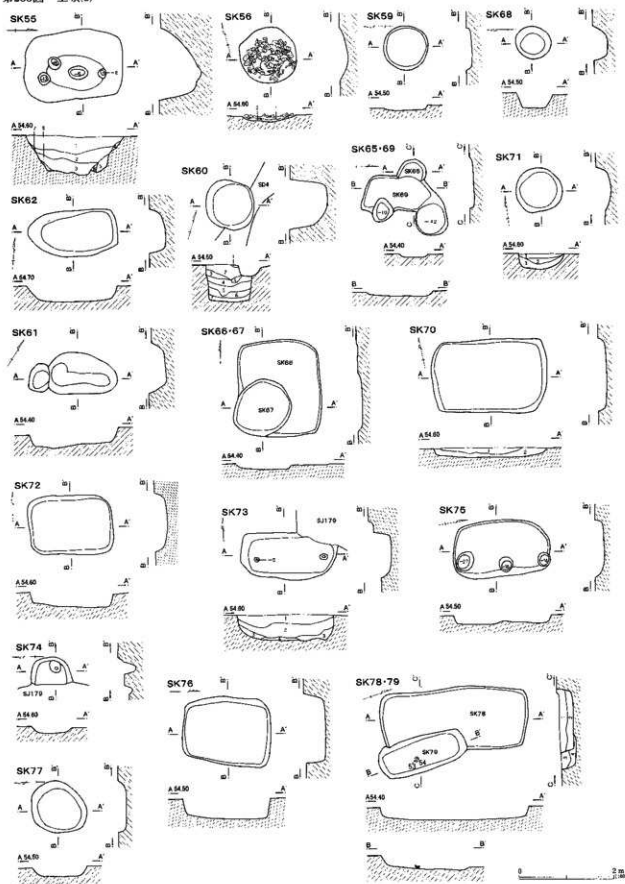
出土遺物はなかった。

第35号土壌 (第237図)

第35号土壌は、B-3グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.76

第238图 土壤(3)



m、深さ0.20mを測る。断面形は2段に掘り込まれ、自然堆積である。

出土遺物はなかった。

第36号土壌 (第237図)

第36号土壌は、B-2グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は小さく、長径0.51m、短径0.50m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなかった。

第37号土壌 (第237図)

第37号土壌は、C-3グリッドに位置し、第30号住居跡と重複する。新旧関係は不明で、住居に伴うものかも知れない。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.36m、短径1.04m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-38°Eを示す。

遺物は土師器皿・坏(第242図17・18)が出土している。

第38号土壌 (第237図)

第38号土壌は、C-1グリッドに位置し、第1号住居跡(縄文時代)を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.56m、短径1.10m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-86°Eを示す。

遺物はクロコ土師器高台椀(第243図19)、土師器甕・坏(第243図20・21)が出土している。

第39号土壌 (第237図)

第39号土壌は、C-2グリッドに位置し、第38号土壌と同様に、第1号住居跡(縄文時代)を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径0.94m、短径0.82m、深さ0.23mを測る。

遺物は羽釜(第243図22)が出土している。

第42号土壌 (第237図)

第42号土壌は、C-7グリッドに位置し、土壌の半分以上を、第131号住居跡に切られている。住居は10世紀後半であるため、土壌の時期はそれ以前と考えられる。

平面形態はおそらく円形で、規模は推定で長径0.87m、短径0.84m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師器坏(第243図23)が出土している。

第43号土壌 (第237図)

第43号土壌は、E-5グリッドに位置し、第124・125

号住居跡、第2・5号性格不明遺構を切っている。

平面形態は長方形で、第124号住居跡Pit 2が土壌西側向に重複する。規模は長径2.70m、短径1.60m、深さ0.35mを測る。主軸方向はN-67°Eを示す。土層は単層で一括埋土である。

遺物はクロコ土師器高台椀(第243図24)、土師器環・甕(第243図25~27)、羽釜(第243図28)が出土している。25~27は第2号性格不明遺構に伴うものである。古代の整穴状遺構の可能性もある。

第44号土壌 (第237図)

第44号土壌は、C-5グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.12m、短径0.96m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第45号土壌 (第237図)

第45号土壌は、E-5グリッドに位置し、第120・121号住居跡と重複する。第120号住居跡に切られている。第121号住居跡の掘り方の一部からしれない。

平面形態は不整形で、ビット状の環り込みが、土壌西側と南側にみられる。規模は長径1.84m、短径0.80m、深さ0.37mを測る。主軸方向はN-76°Wを示す。出土遺物はなかった。

第46号土壌 (第237図)

第46号土壌は、D-3グリッドに位置し、第36号住居跡に切られている。住居は10~11世紀と考えられるので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態は方形で、規模は長径1.04m、短径0.96m、深さ0.30mを測る。土層は3層に分かれ、自然堆積と思われる。出土遺物はなかった。

第47号土壌 (第237図)

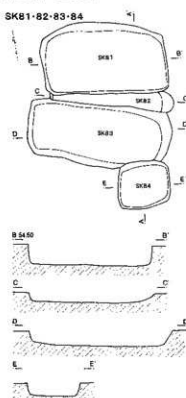
第47号土壌は、D-3グリッドに位置し、第62号住居跡に切れ、第48号土壌を切っていた。

平面形態は不整形で、土壌が3基重なった様である。規模は長径1.84m、短径1.10m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-66°Eを示す。

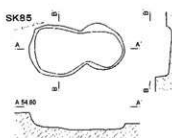
遺物は土師器甕・坏(第243図29・30)、クロコ土師器小皿(第243図31)が出土している。土壌に伴うもの

第239图 土壕(4)

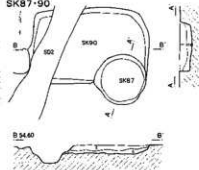
SK81·82·83·84



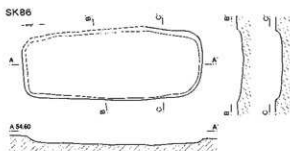
SK85



SK87-90



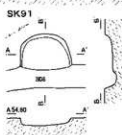
SK86



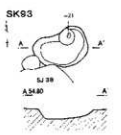
SK89



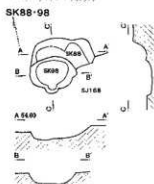
SK91



SK93



SK88·98



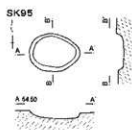
SK92



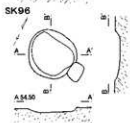
SK94



SK95



SK96



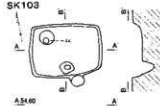
SK97



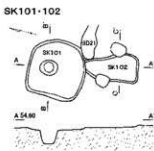
SK100



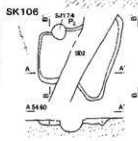
SK103



SK101·102



SK106



SK107



0 2m

は小皿で、土師器は第62号住居跡に伴うと考えられるが、断定できない。

第48号土壌 (第237図)

第48号土壌は、D-3グリッドに位置する。第62号住居跡、第6号掘立柱建物跡、第47・137号土壌と重複する。第48号土壌が最も古い。

平面形態は円形で、規模は長径1.04m、短径0.90m、深さ0.34mを測る。土層は3層に分けられ、人為的堆積と考えられる。

遺物は「コ」の字状口縁の土師器甕(第243図32)が出土している。

第49号土壌 (第237図)

第49号土壌は、D・E-3グリッドに位置し、第62・63号住居跡を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.40m、短径0.92m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-26°-Wを示す。

遺物は土師器皿(第243図33)が出土している。

第50号土壌 (第237図)

第50号土壌は、E-5グリッドに位置し、第5号性格不明遺構を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径0.90m、短径0.60m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-8°-Wを示す。

遺物は土師器皿(第243図34)が出土している。

第51号土壌 (第237図)

第51号土壌は、D-2グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.98m、短径0.94m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第52号土壌 (第237図)

第52号土壌は、D-2グリッドに位置し、第59号住居跡・第54号土壌と重複する。第54号土壌に切られており、この土壌と共に第59号住居跡の床下土壌の可能性がある。住居は8世紀前半なので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態は不整形で、ビット状の掘り込みが3ヶ所みられる。規模は長径1.54m、短径0.90m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-90°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第53号土壌 (第134図)

第53号土壌は、E-7グリッドに位置する。第138号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は不整形で、ビット状の掘り込みが2ヶ所みられる。規模は長径1.16m、短径1.15m、深さ0.26mを測る。

出土遺物はなかった。

第54号土壌 (第237図)

第54号土壌は、C・D-2グリッドに位置し、第59号住居跡・第52号土壌と重複する。新旧関係は、第52号土壌を参照。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.41m、短径1.26m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-52°-Wを示す。

遺物は土師器環・甕(第243図35~37)が出土している。

第55号土壌 (第238図)

第55号土壌は、D-3グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、ビット状の掘り込みが4ヶ所みられる。規模は長径2.08m、短径1.46m、深さ0.90mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

出土遺物はなかった。

第56号土壌 (第238図)

第56号土壌は、D・E-3グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.22m、短径1.12m、深さ0.18mを測る。

土壌の上面から礫が集中して出土している。図化できる遺物はなかった。

礫はほとんどが焼けていたが、焼土は確認されなかった。屋外炉とは考えにくい。集石土壌とするに留めたい。

第57号土壌 (第237図)

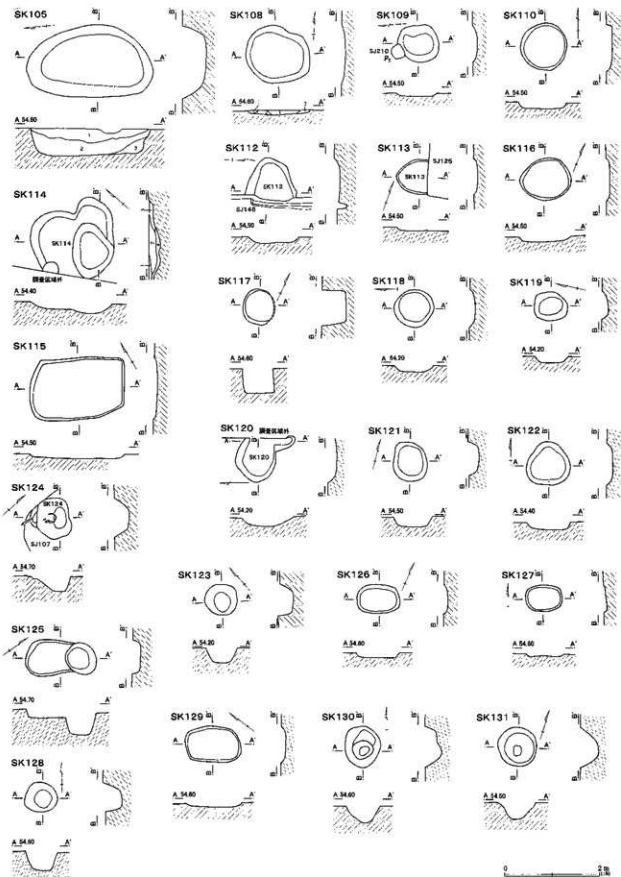
第57号土壌は、E-2グリッドに位置し、第90・91号住居跡に切られている。第91号住居跡が7世紀後半なので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態は長方形で、規模は長径0.90m、短径0.56m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-3°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第58号土壌 (第237図)

第240图 土壤(5)



第58号土壌は、E-2グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.54m、短径1.14m、深さ0.26mを測る。

遺物は土師器装(第243図38)が出土している。

第59号土壌(第238図)

第59号土壌は、E-5グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.94m、短径0.92m、深さ0.10mを測る。

遺物は木野産須恵器装(第243図39)が出土している。

第60号土壌(第238図)

第60号土壌は、E・F-6グリッドに位置し、第4号溝跡と重複する。新田関係は第4号溝跡より古い。

平面形態は円形で、規模は径1.04m、深さ0.78mを測る。断面形は箱型で、7層に分けられる。

遺物は土師器環(第243図40)が出土している。

第61号土壌(第238図)

第61号土壌は、D-3グリッドに位置し、第62号住居跡と重複する。新田関係は不明である。

平面形態は不整形で、規模は長径1.88m、短径0.90m、深さ0.32mを測る。主軸方向はN-59°-Eを示す。

遺物は土師器環(第243図41・42)が出土している。

第62号土壌(第238図)

第62号土壌は、D-2グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.92m、短径0.96m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第63号土壌(第135図)

第63号土壌は、E-8グリッドに位置し、第143号住居跡の東壁を切っている。住居が7世紀代と推定されるので、土壌の時期はそれ以降であろう。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.60m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-74°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第64号土壌(第241図)

第64号土壌は、E-8グリッドに位置し、第144号住居跡に土壌南側を切られている。

平面形態はおそらく長方形で、規模は長径1.38m

(現在長)、短径0.89m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-28°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第65号土壌(第238図)

第65号土壌は、F-8グリッドに位置し、土壌東側を第69号土壌に切られている。住居が8世紀初頭前後なので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態はおそらく円形で、規模は長径0.58m、短径0.38m(残存長)、深さ0.07mを測る。

出土遺物はなかった。

第66号土壌(第238図)

第66号土壌は、F・G-8グリッドに位置し、土壌の南西角を第67号土壌に切られている。

平面形態は方形で、規模は長径2.00m、短径1.74m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

出土遺物はなかった。

第67号土壌(第238図)

第67号土壌は、G-8グリッドに位置し、第66号土壌を切る。

平面形態は円形で、規模は径1.20m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第68号土壌(第238図)

第68号土壌は、G-8グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.78m、短径0.70m、深さ0.28mを測る。

出土遺物はなかった。

第69号土壌(第238図)

第69号土壌は、F-8グリッドに位置し、第65号土壌と重複する。新田関係は第65号土壌より新しい。

平面形態は不整形で、規模は長径1.89m、短径0.70m、深さ0.10mを測る。

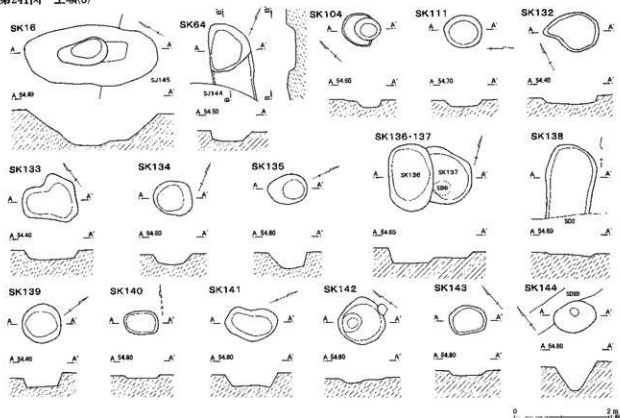
出土遺物はなかった。

第70号土壌(第238図)

第70号土壌は、F-7グリッドに位置し、第180(181)号住居跡、第79号土壌を切っている。重複する遺構が10世紀後半なので、土壌の時期はそれ以降であろう。

平面形態は長方形で、規模は長径2.42m、短径1.52

第241岡 土壌(6)



SK2
1 暗褐色土 ローム粒少量

SK3

- 1 暗褐色土 コム土層、ロームブロック、
自然土山頂少量
2 暗褐色土 コム粒多量、ロームブロック、
黄土ブロック少量
3 暗褐色土 コム粒少量、ロームブロック多量

SK4

- 1 暗褐色土 コム粒少量

SK6

- 1 黒褐色土 シルト質、火成灰 (浅層部)
2 黒褐色土 シルト質、ローム粒少量、火山灰
(浅層部)

SK9

- 1 黒褐色土 シルト質、ローム粒少量

SK10

- 1 黒褐色土 シルト質、火成灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK11

- 3 におい褐色土 ローム粒、ロームブロック多量

SK11

- 1 黒褐色土 シルト質、火成灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK12・13・14

- 1 黒褐色土 シルト質、ローム粒、ローム
ブロック多量
2 暗褐色土 ローム粒、コム土ブロック多量
3 黒褐色土 シルト質、ローム粒、ローム
ブロック多量

SK15

- 1 黒褐色土 シルト質、火山灰 (浅層部)
2 黒褐色土 シルト質、ローム粒少量
3 暗褐色土 ローム粒多量

SK17

- 1 暗褐色土 シルト質、粘土質、炭化物多量
2 暗褐色土 シルト質、粘土質、炭化物少量
3 暗褐色土 シルト質、コム土層、粘土質、
炭化物多量

SK18

- 4 暗褐色土 シルト質、コム土層、コム土ブロック
黄土多量、炭化物少量

SK18

- 1 暗褐色土 ローム粒多量、土層からの腐敗土を含む

SK19

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒少量

SK20

- 3 暗褐色土 コム粒多量、ローム粒少量

SK24

- 1 褐色土 コム土層、自然粒多量、ローム
ブロック、炭化物多量、粘土質、少量

SK25

- 2 暗褐色土 ローム粒、自然粒多量、
ロームブロック少量
3 暗褐色土 ローム粒、自然粒多量、ローム
ブロック少量

SK26

- 4 黄褐色土 ロームブロック、褐色土層状を含む

SK25

- 1 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック少量
2 黒褐色土 ローム粒少量、炭1ブロック少量
3 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック少量

SK28

- 1 黒褐色土 ローム土、自然粒多量
2 黒褐色土 コム土層、自然粒多量、コム
ブロック少量

SK28

- 3 黒褐色土 シルト質、コム土層、コム土ブロック、
自然粒多量

SK28

- 1 暗褐色土 粘土質、炭化物少量、火山灰(少量)

SK29

- 2 黒褐色土 コム土層、黄土、炭化物少量

SK30

- 3 黒褐色土 コム粒中や多い

SK30

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒多量

SK32

- 1 暗褐色土 シルト質、火成灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、火成灰 (浅層部)

SK33

- 1 黒褐色土 シルト質、火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、火山灰 (浅層部)

SK34

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK35

- 1 暗褐色土 ローム土、ロームブロック多量

SK36

- 2 暗褐色土 ローム土、ロームブロック多量

SK36

- 1 黒褐色土 コム土層少量
2 黒褐色土 コム土層少量
3 暗褐色土 ローム土、ロームブロック多量

SK38

- 1 暗褐色土 ローム土、自然粒多量
2 におい褐色土 ローム土、ロームブロック、
自然粒少量

SK39

- 3 におい褐色土 自然粒多量、ローム
ブロック少量

SK39

- 4 暗褐色土 コム土層少量
5 暗褐色土 焼1塊、炭化塊、褐色土層状を含む
ブロック多量

SK39

- 1 暗褐色土 ローム土、コム土ブロック、
自然粒少量、粘土質、ローム粒少量

SK40

- 2 暗褐色土 コム土層、褐色土層状を含む
ブロック多量

SK40

- 1 暗褐色土 ローム土、褐色粒多量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 コム土層少量
2 暗褐色土 ローム土、ロームブロック少量
3 暗褐色土 コム土層、ローム粒少量

SK48

- 1 暗褐色土 ローム土、ロームブロック、
粘土質少量

SK46

- 2 暗褐色土 ローム土、ロームブロック、粘土質
ブロック多量

SK46

- 1 暗褐色土 ローム土、ロームブロック、
黄土少量、ローム
ブロック多量

SK46

- 2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

- 1 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
2 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)
3 暗褐色土 シルト質、ローム粒少量、
火山灰 (浅層部)

SK46

大寄Ⅰ区

SK55

- 1 黒褐色土 ローム層・白色砂多量、
焼土層、炭化物少量
- 2 黒褐色土 ローム層・炭化物、炭化
灰、白色砂多量
- 3 黒褐色土 コーム層・ロームブロック・
白色砂少量
- 4 黄褐色土 ロームブロック
- 5 黄褐色土 ローム層・白色砂少量
- 6 黄褐色土 ロームブロック少量
- 7 黄褐色土 ロームブロック
- 8 黄褐色土 ロームブロック

SK56

- 1 黒褐色土 ローム層・白色砂少量、
炭化物少量
- 2 におい黒褐色土 コーム層・白色砂多量、ローム
ブロック少量

SK58

- 1 黒褐色土 ローム層・ロームブロック少量
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量、コム砂少量
- 3 黒褐色土 ロームブロック・ローム砂少量
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量

SK60

- 1 黄褐色土 ロームブロック
- 2 黄褐色土 焼土層・白色砂多量
- 3 黄褐色土 ローム・ロームブロック多量
- 4 黄褐色土 ローム・ローム砂多量、コム
ブロック少量

SK70

- 1 黒褐色土 ローム多量、焼土少量
- 2 黒褐色土 ローム層・焼土砂少量
- 3 黒褐色土 ローム多量、ロームブロック少量
- 4 黒褐色土 コーム砂少量、白色砂多量
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量、焼土少量

SK71

- 1 黄褐色土 ローム・ロームブロック・焼土・
焼土砂少量
- 2 黄褐色土 焼土砂少量、白色砂少量
- 3 黄褐色土 コーム砂・焼土・炭化物少量

SK73

- 1 黄褐色土 フーム・ローム砂多量、ローム
ブロック少量
- 2 黄褐色土 フーム砂多量、ロームブロック少量
- 3 黄褐色土 コーム多量
- 4 黒褐色土 炭化物

SK78・79

- 1 黄褐色土 ローム層・白色砂少量
- 2 黄褐色土 ローム層・ロームブロック少量
- 3 黄褐色土 ローム層・ロームブロック少量
- 4 黄褐色土 ローム砂多量

SK81・82・83・84

- 1 黄褐色土 ローム層・ロームブロック多量
- 2 黄褐色土 ローム層・ロームブロック多量
- 3 黄褐色土 ローム層・ロームブロック少量
- 4 黄褐色土 ローム層・ロームブロック少量

SK87・90

- 1 黄褐色土 ローム層・白色砂多量、炭化物少量
- 2 黄褐色土 ローム層・ロームブロック・焼土少量
- 3 黄褐色土 ローム層・ロームブロック・
白色砂少量
- 4 黄褐色土 ローム砂多量、ロームブロック少量

SK89

- 1 黄褐色土 焼土層・炭化物
- 2 灰白色土 炭化物層

SK105

- 1 黄褐色土 ローム層・ロームブロック・
焼土砂少量
- 2 黄褐色土 焼土砂・焼土ブロック少量
- 3 黄褐色土 焼土砂・炭化物・炭中多量

SK108

- 1 黄褐色土 ローム砂少量
- 2 黄褐色土 コーム砂多量、炭化物少量
- 3 黄褐色土 コーム砂・焼土砂少量

SK114

- 1 黄褐色土 ロームブロック・焼土
ブロック少量
- 2 黄褐色土 黄褐色土ブロック・焼土
ブロック少量
- 3 黄褐色土 焼土ブロック・黄褐色土
ブロック少量

SK109

- 1 黄褐色土 ローム砂少量
- 2 黄褐色土 コーム砂多量、炭化物少量
- 3 黄褐色土 コーム砂・焼土砂少量

m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-79°-Wを示す。
出土遺物はなかった。

第71号土壌 (第238図)

第71号土壌は、G-4グリッドに位置し、第172号住
居跡を切る。

平面形態は円形で、規模は長径0.99m、短径0.90
m、深さ0.32mを測る。

遺物はロクロ土師器小皿・土師器杯・羽釜 (第243図
43-45)が出土している。44は住居跡の遺物であろう。

第72号土壌 (第238図)

第72号土壌は、G-6グリッドに位置する。
平面形態は長方形で、規模は長径1.78m、短径1.24
m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第73号土壌 (第238図)

第73号土壌は、F-6グリッドに位置し、第177-179
号住居跡・第4号溝跡と重複する。本土壌が最も新しい。

平面形態は長方形で、上層内の東西にビット状の掘
り込みがみられる。規模は長径2.02m、短径0.99m、
深さ0.54mを測る。主軸方向はN-89°-Wを示す。断
面形は箱型で、第4層は炭化物層である。

上層の位置・形態などから、第178号住居跡の腐屋蓋
と考えられる。

遺物はロクロ土師器高台椀 (第243図46・47) と群馬

産と思われる須恵器壺 (第243図48) が出土している。
第74号土壌 (第238図)

第74号土壌は、F・G-6グリッドに位置し、土壌
西側を第179号住居跡に切られている。

平面形態はおそらく円形で、土壌内にビット状の掘
り込みがある。規模は長径0.83m、短径0.58m (残存
長)、深さ0.10mを測る。

遺物は、木野産の須恵器壺 (第244図49) とロクロ土
師器高台椀 (第244図50) が出土している。第179号住
居跡の時期は8世紀初頭であり、49はその時期に該当
するが、50はそれ以後に混入したものであろう。

第75号土壌 (第238図)

第75号土壌は、G-7グリッドに位置し、第185号住
居跡の南西角を切っている。住居は9世紀前半なので、
土壌の時期はそれ以降であろう。

平面形態は長方形で、上層東壁の両側と中央に、ビ
ット状の掘り込みが3ヶ所並んでいる。規模は長径
2.04m、短径1.20m、深さ0.20mを測る。主軸方向は
N-11°-Eを示す。

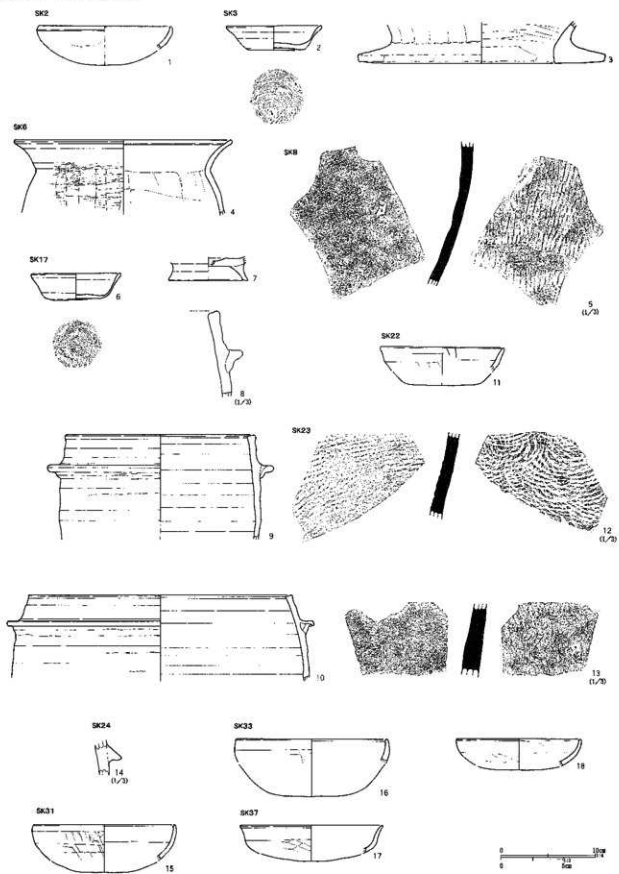
出土遺物はなかった。

第76号土壌 (第238図)

第76号土壌は、G-6グリッドに位置し、第9号溝
跡を切っている。

平面形態は方形で、規模は長径1.88m、短径1.44

第242図 土曜出土遺物(1)



六寄1区

m、深さ0.44mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

遺物は須恵器甕の破片(第244図51)が出土している。甕は洗滌で区画された中に8本の梅歯による波状文が施されている。末野産である。

第77号土壇(第238図)

第77号土壇は、F-7グリッドに位置し、第180(181)・182号住居跡に土壇の大部分を切られている。第182号住居跡が8世紀後半～9世紀代なので、土壇の時期はそれ以前と考えられる。

平面形態は凹形で、規模は長径1.17m、短径1.08m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師器暗文杯(第244図52)が出土している。

第78号土壇(第238図)

第78号土壇は、F-7グリッドに位置し、第180(181)号住居跡・第79号土壇を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長径3.14m、短径1.32m、深さ0.29mを測る。主軸方向はN-19°-Eを示す。断面形は箱型を呈する。

出土遺物はなかった。

第79号土壇(第238図)

第79号土壇は、F-7グリッドに位置し、第180(181)号住居跡を切り、第78号土壇に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.88m、短径0.74m、深さ0.41mを測る。主軸方向はN-0°を示す。断面形は箱型を呈する。

遺物は、底面からクロコ土師器高台椀・小皿(第244図53・54)が、2枚重なった状態で出土している。高台椀は内面にミガキが施され、黒色処理されている。

土壇は第180号住居跡が廃絶された直後に、構築された廃屋築と考えられる。

第80号土壇(第143図)

第80号土壇は、F-2・3グリッドに位置し、土壇東側半分を第152号住居跡に切られている。住居が7世紀後半～8世紀初頭なので、土壇の時期はそれ以前であろう。

平面形態はおそらく長方形で、規模は長径3.07m(現在長)、短径0.90m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-73°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第81号土壇(第239図)

第81号土壇は、F-7グリッドに位置し、第82号土壇を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径2.60m、短径1.52m、深さ0.44mを測る。主軸方向はN-83°-Wを示す。断面形は箱形で、土層はロームブロックを含む暗褐色上の単層で、埋め戻されている。

出土遺物はなかった。

第82号土壇(第239図)

第82号土壇は、F-7グリッドに位置し、第81・83号土壇と重複する。

平面形態は、第81・83号土壇に切られているため不明だが、両土壇と同様、長方形と考えられる。規模は長径2.62m、短径0.43m(残存長)、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-76°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第83号土壇(第239図)

第83号土壇は、F-7グリッドに位置し、第187号住居跡、第82・84号土壇と重複する。本土壇が最も新しい。

平面形態は長方形で、規模は長径3.04m、短径1.28m、深さ0.32mを測る。主軸方向はN-72°-Wを示す。断面形は箱形で、土層は第81号土壇と同様である。

出土遺物は、クロコ土師器小皿(第244図55)がある。

第84号土壇(第239図)

第84号土壇は、F-7グリッドに位置し、第187号住居跡を切って、第83号土壇に切られている。

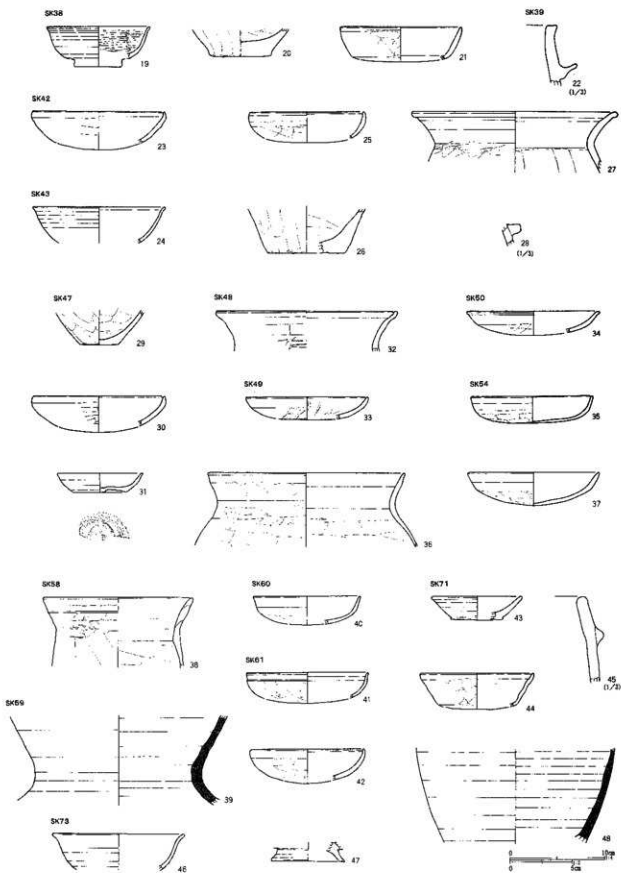
平面形態は方形で、規模は長径1.08m、短径1.00m、深さ0.26mを測る。土層は第81号土壇と同様である。遺物は土師器杯(第244図56)が出土している。

第85号土壇(第239図)

第85号土壇は、F-5グリッドに位置し、第159・166・167号住居跡と重複する。本土壇が最も新しい。住居が10世紀後半～11世紀なので、土壇の時期はそれ以降であろう。

平面形態は不整形で、規模は長径2.00m、短径1.06m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-15°-Eを示す。

第243図 土壇出土遺物(2)



遺物は土師器環(第244図57)が出土しているが、土城に伴うものかは不明である。

第86号土壌(第239図)

第86号土壌は、F・G-4グリッドに位置し、第165号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径3.80m、短径1.53m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

出土遺物はなかった。

第87号土壌(第239図)

第87号土壌は、G-4グリッドに位置し、第172号住居跡・第90号土壌を切っている。第90号土壌が10世紀後半なので、土壌の時期はそれ以降であろう。

平面形態は円形で、規模は径1.06m、深さ0.26mを測る。断面形は箱型を呈する。

出土遺物はなかった。

第88号土壌(第239図)

第88号土壌は、G-5グリッドに位置し、土城南側半分を第166・168号住居跡、第98号土壌に切られている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.31m、短径0.72m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-81°-Wを示す。

出土遺物は土師器環・甕(第244図58・59)がある。

第89号土壌(第239図)

H-5グリッドに位置する。

第89号土壌は、平面形態は楕円形で、規模は長径1.18m、短径0.86m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-66°-Wを示す。土層は2層に分けられ、第2層は灰白色粘土なので、粘土溜土壌と考えられる。土城上面の第1層は焼土粒・炭化物で、粘土層を切っているが、その性格は不明である。

出土遺物はなかった。

第90号土壌(第239図)

第90号土壌は、G-4グリッドに位置し、第172号住居跡を切っていて、第87号土壌・第2号溝跡に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径2.56m、短径1.54m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

遺物は、ロクロ土師器高台碗と土鍾(第244図60・61)

が出土している。高台碗は内面をミガキと黒色処理が施されている。

第91号土壌(第239図)

第91号土壌は、G-3グリッドに位置し、土城東側半分を第8号溝跡に切られている。溝が近世遺構なので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態はおそらく円形で、規模は長径1.06m、短径0.76m(残存長)、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第92号土壌(第239図)

第92号土壌は、H-4・5グリッドに位置する。

平面形態は方形で、規模は長径0.78m、短径0.62m、深さ0.06mを測る。

出土遺物はなかった。

第93号土壌(第239図)

第93号土壌は、C-3・4グリッドに位置し、土城南側を、第38号住居跡に切られている。住居が10世紀後半-11世紀なので、土壌の時期はそれ以前であろう。

平面形態は不整形で、北側にピット状の掘り込みがある。規模は長径0.97m、短径0.72m、深さ0.29mを測る。出土遺物はなかった。

第94号土壌(第239図)

第94号土壌は、F-8グリッドに位置し、第189号住居跡と重複する。新旧関係は住居跡より新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.66m、短径1.10m、深さ0.46mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第95号土壌(第239図)

第95号土壌は、H-5グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.05m、短径0.78m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

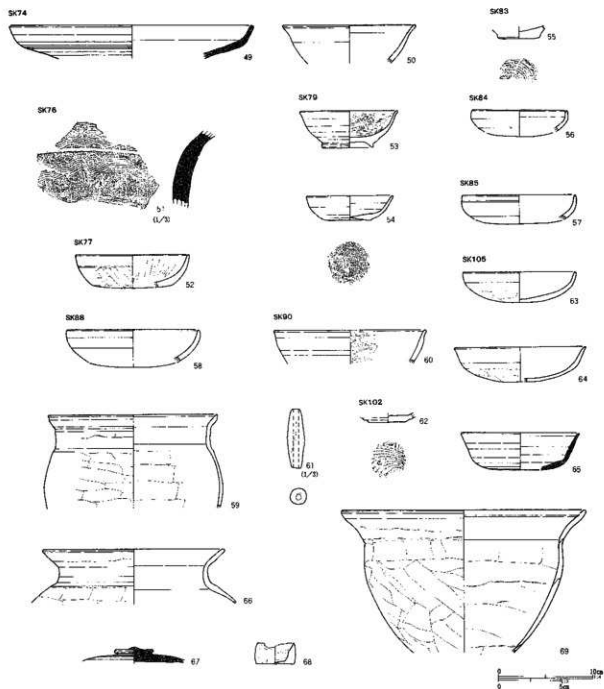
出土遺物はなかった。

第96号土壌(第239図)

第96号土壌は、H-6グリッドに位置し、ピットと重複する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.04m、短径1.01m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-81°-Wを示す。

第244図 土壌出土遺物(3)



出土遺物はなかった。

第97号土壌 (第239図)

第97号土壌は、H-6グリッドに位置する。Pit 5に切られている。

平面形態は円形で、規模は長径1.14m、短径1.12m、深さ0.14mを測る。

出土遺物はなかった。

第98号土壌 (第161図)

第98号土壌は、G-5グリッドに位置し、第166-168号住居跡、第88号土壌を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.00m、短径0.74m、深さ0.20mを測る。

出土遺物はなかった。

第99号土壌 (第155図)

第99号土壌は、F-5グリッドに位置し、第160号住居跡と重複する。

平面形態は住居跡に切られて、不明である。規模は残存部で長径1.10m、短径0.32m、深さ0.22mを測る。

出土遺物はなかった。

第100号土壌 (第239図)

第100号土壌は、H-8グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、中央にピットがみられる。規模は長径0.98m、短径0.62m、深さ0.57mを測る。主軸方向はN-83°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第101号土壌 (第239図)

第101号土壌は、H-8グリッドに位置し、第102号土壌、第21号溝跡と重複する。第102号土壌より新しいが、溝との関係は不明である。

平面形態は方形で、中央にピットがみられる。規模は長径1.21m、短径1.18m、深さ0.37mを測る。

出土遺物はなかった。

第102号土壌 (第239図)

第102号土壌は、H-8グリッドに位置し、第101号土壌、第21号溝跡と重複する。第101号土壌より古い。溝との関係は不明である。

平面形態は不整形で、規模は長径1.12m、短径0.52m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-13°-Wを示す。

出土遺物はロクロ土師器小皿 (第244図62) がある。

第103号土壌 (第239図)

第103号土壌は、I-7グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、土壌内にピット状の掘り込みが2ヶ所みられる。規模は長径1.54m、短径1.12m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第104号土壌 (第241図)

第104号土壌は、C-4グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径0.83m、短径0.68m、深さ0.16mを測る。

出土遺物はなかった。

第105号土壌 (第240図)

第105号土壌は、I-5グリッドに位置し、土壌西側半分が第201号住居跡に切られている。

平面形態は楕円形で、規模は長径2.68m、短径1.52m、深さ0.52mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

遺物は土師器杯・皿・壺・鉢・小型土製品、須恵器杯・蓋 (第244図63-69) が出土している。

第106号土壌 (第239図)

第106号土壌は、G-4グリッドに位置し、第174号住居跡を切り、第2号溝跡に切られている。住居が10世紀後半以降で、溝が近世以降なので、土壌の時期はその間であろう。

平面形態は不整形で、規模は長径1.50m、短径1.08m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第107号土壌 (第198図)

第107号土壌は、J-8グリッドに位置し、第210号住居跡と重複する。新旧関係は第210号住居跡より古い。住居に伴う床下土壌または掘り方の可能性がある。

平面形態は円形で、規模は長径0.78m、短径0.68m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなかった。

第108号土壌 (第240図)

第108号土壌は、I-4・5グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.35m、短径1.20m、深さ0.08mを測る。

出土遺物はなかった。

第109号土壌 (第240図)

第109号土壌は、J-8グリッドに位置し、第210号住居跡と重複する。新旧関係は第210号住居跡より新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.76m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-3°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第110号土壌 (第240図)

第110号土壌は、E-5グリッドに位置し、第121号住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

平面形態は円形で、規模は長径0.98m、深さ0.14mを測る。

第113表 土壇出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(14.0)	2.4		ADEH	1	にぶい橙	10	SK 2 珙
2	小皿	10.2	2.6	6.0	BJ	2	橙	85	SK 3 ロクロ土師器
3	瓶		4.4	26.0	BHJ	2	にぶい橙	20	SK 3
4	甕	(23.2)	7.9		ADEH	2	にぶい赤褐	15	SK 6
5	須恵甕				BHJ	1	灰	SK 8	群馬産か 平行叩き後ナゲ消し 平行当て具
6	小皿	9.6	2.8	4.8	BDHJ	2	にぶい橙	100	SK17 ロクロ土師器
7	高台碗		2.6	8.2	BHJ	2	にぶい褐	45	SK17 ロクロ土師器
8	羽釜				BDHJ	2	にぶい橙	5	SK17
9	羽釜	(20.0)	11		BDHJ	2	にぶい橙	10	SK17
10	羽釜	(28.0)	9		EIJ	2	にぶい黄橙	10	SK17
11	羽釜	(13.0)	2.5		DEH	2	にぶい褐	5	SK22 珙文
12	須恵甕				HIJ	1	硝灰	破片	SE 7 末野産 平行叩き+同心門当て具
13	須恵甕				HJ	1	灰	破片	SE 7 群馬(秋田)産か 平行叩き+同心門当て具
14	羽釜				DEJ	1	灰褐	5	SK24
15	環	(13.0)	3.8		DEH	1	にぶい褐	10	SK31
16	鉢	(16.0)	2.5		ADEH	2	橙	5	SK33
17	皿	(15.0)	3.0		AEH	2	にぶい橙	10	SK37
18	環	(13.0)	2.8		DEH	1	にぶい橙	20	SK37
19	高台碗	(11.0)	3.4		EIJ	2	にぶい黄橙	20	SK38 ロクロ土師器 内黒ミガキ
20	甕		2.9	6.6	BHJ	2	にぶい赤褐	75	SK38
21	環	(14.0)	2.9		AEH	2	橙	10	SK38
22	羽釜				BDEJ	2	にぶい橙	5	SK39
23	環	(14.0)	3.3		ADEH	2	橙	10	SK42
24	高台碗	(14.0)	3.8		DEH	2	にぶい橙	10	SK43 ロクロ土師器
25	環	(12.0)	2.8		ADEH	2	橙	20	SK43
26	甕		4.6	8.0	BHJ	3	にぶい橙	15	SK43
27	甕	(22.0)	6.4		AEHJ	2	橙	10	SK43
28	羽釜				EHJ	3	にぶい褐	1	SK43
29	甕		3.7	4	EHJ	2	にぶい褐	80	SK47
30	環	(14.0)	3.2		DEH	2	橙	5	SK47
31	小皿	(9.0)	2.0	5.6	DEHJ	1	にぶい橙	30	SK47 ロクロ土師器 底部ヘラ切り
32	甕	(20.0)	4.2		DEHJ	1	にぶい橙	10	SK48
33	皿	(13.0)	2.3		ADEH	2	橙	10	SK49
34	皿	(14.0)	2.3		ADEH	2	明赤褐	5	SK50
35	環	(13.0)	2.8		HJ	2	にぶい橙	50	SK54
36	環	(14.0)	3.5		AHJ	2	橙	40	SK54
37	甕	(21.0)	7.7		ADEHJ	2	橙	30	SK54
38	甕	(16.0)	7.4		HJ	2	にぶい褐	15	SK58
39	須恵甕		9.5		BEHJ	1	灰	20	SK59 末野産
40	環	(11.4)	2.9		DEHJ	2	橙	10	SK60
41	環	(13.0)	2.7		EHJ	2	にぶい褐	10	SK61
42	環	(12.0)	3.3		AHJ	2	橙	15	SK61
43	小皿	(9.4)	2.4	5.4	ADH	3	にぶい橙	30	SK71 ロクロ土師器
44	環	(12.0)	3.5	8.2	DEH	2	にぶい赤褐	10	SK71
45	羽釜				EGHJ	3	にぶい橙	5	SK71
46	高台碗	(14.0)	3.8		DEH	2	にぶい橙	10	SK73 ロクロ土師器
47	高台碗		2	7.8	EHJ	2	にぶい黄橙	80	SK73 ロクロ土師器
48	須恵甕		9.9		BEHJ	1	灰	10	SK73 群馬産か
49	須恵甕	(26.0)	3.5		EIIJ	1	灰	20	SK74 末野産
50	高台碗	(14.0)	4		DEJ	2	橙	15	SK74 ロクロ土師器
51	須恵甕				BHJ	1	灰	破片	SK76 末野産
52	環	(12.0)	3.4	8.4	ADEH	1	明赤褐	15	SK77 珙文

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
53	高台椀	10.4	4.9	5.4	DHJ	2	橙	90	SK79 ロクロ土師器 内黒 ミガキ
54	小皿	9.2	2.6	4.7	AHJ	3	にぶい黄橙	100	SK79 ロクロ土師器
55	小皿		1.3	4.5	AEH	3	にぶい橙	50	SK83 ロクロ土師器
56	杯	(10.0)	2.3		DEH	2	明赤褐	10	SK84
57	杯	(12.0)	2.6		ADEH	3	橙	5	SK85
58	杯	(14.0)	3.5		DEJ	2	橙	15	SK88
59	鉢	(18.0)	9.3		ADHJ	2	橙	15	SK88
60	高台椀	(16.0)	3.5		AJ	1	浅黄橙	5	SK90 ロクロ土師器 内黒 ミガキ
61	土鉢	長 4.70cm		最大径1.40cm	口径1.45cm		重量7.04g		にぶい黄橙 SK90
62	小皿		0.9	4.0	DEHJ	3	橙	90	SK102 ロクロ土師器
63	杯	(12.0)	3.3		DHJ	2	橙	20	SK105
64	皿	(14.0)	3.6		DHJ	3	にぶい橙	40	SK105
65	須恵杯	(12.6)	3.9	9.6	HJ	3	灰黄	15	SK105
66	壺	(19.4)	5.7		AEHJ	2	橙	35	SK105
67	須恵蓋		1.7		HJ	1	灰	10	SK105 木野産
68	小型土製品	(3.8)	2.2	4.1	DEHJ	2	にぶい黄	50	SK105
69	鉢	(26.0)	14.9		AHJ	2	橙	20	SK105

出土遺物はなかった。

第111号土塚 (第241図)

第111号土塚は、D-3グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.78m、短径0.67m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第112号土塚 (第240図)

第112号土塚は、E-6グリッドに位置し、第124号住居跡カマドと第146号住居跡西壁を切っている。住居は10世紀後半～11世紀末なので、土塚の時期はそれ以降であろう。

平面形は不整形で、規模は長径1.10m、短径0.90m、深さ0.14mを測る。

出土遺物はなかった。

第113号土塚 (第240図)

第113号土塚は、E-5グリッドに位置し、土塚東側を第125号住居跡に切られている。

平面形態はおそらく楕円形で、規模は長径0.80m、短径0.74m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-72°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第114号土塚 (第240図)

第114号土塚は、F-2グリッドに位置し、西側は調査区外である。第99号住居跡と重複し、住居の床下土

塚と考えられる。住居が7世紀後半なので、土塚も同時期であろう。

平面形態は不整形で、規模は長径1.78m、短径1.54m、深さ0.24mを測る。土層は4層に分けられ、埋め戻されている。

出土遺物はなかった。

第115号土塚 (第240図)

第115号土塚は、G-8グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.02m、短径1.28m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-62°-Wを示す。出土遺物はなかった。

第116号土塚 (第240図)

第116号土塚は、H-6グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.09m、短径0.90m、深さ0.08mを測る。

出土遺物はなかった。

第117号土塚 (第240図)

第117号土塚は、B-1グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.75m、短径0.64m、深さ0.52mを測る。

出土遺物はなかった。

第118号土塚 (第240図)

第118号土塚は、C-7グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.83m、短径0.77

m、深さ0.12mを測る。

出土遺物はなかった。

第119号土壌 (第240図)

第119号土壌は、D-7・8グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.61m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-13°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第120号土壌 (第240図)

第120号土壌は、D-8グリッドに位置する。土壌東側は調査区外のため、不明である。

平面形態は不整形で、規模は長径1.12m、短径0.93m (現在長)、深さ0.21mを測る。

出土遺物はなかった。

第121号土壌 (第240図)

第121号土壌は、E-2グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.81m、短径0.70m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-15°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第122号土壌 (第240図)

第122号土壌は、E-7グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.93m、短径0.88m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第123号土壌 (第240図)

第123号土壌は、E-8グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.68m、短径0.64m、深さ0.31mを測る。

出土遺物はなかった。

第124号土壌 (第240図)

第124号土壌は、F-3グリッドに位置し、第107号住居跡と重複する。新旧関係は第107号住居跡より新しい。

平面形は不整形で、規模は長径0.87m、短径0.82m、深さ0.33mを測る。主軸方向はN-48°-Wを示す。上面から人骨が出土しており、中世以降の土壌蓋と考えられる。

第125号土壌 (第240図)

第125号土壌は、F-4グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.48m、短径0.77m、深さ0.48mを測る。主軸方向はN-35°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第126号土壌 (第240図)

第126号土壌は、F-4グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.61m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-66°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第127号土壌 (第240図)

第127号土壌は、F-4グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.77m、短径0.55m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第128号土壌 (第240図)

第128号土壌は、F-4グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.67m、短径0.63m、深さ0.39mを測る。

出土遺物はなかった。

第129号土壌 (第240図)

第129号土壌は、F-5グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.16m、短径0.76m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-37°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第130号土壌 (第240図)

第130号土壌は、I-4グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.86m、短径0.75m、深さ0.35mを測る。主軸方向はN-0°を示す。断面は段を有する。

出土遺物はなかった。

第131号土壌 (第240図)

第131号土壌は、I-6・7グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は径0.82m、深さ0.35mを測る。出土遺物はなかった。

第132号土壌 (第241図)

第132号土壌は、D-7グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.16m、短径0.82m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-67°-Wを示す。

大畚I区

第114表 大畚I区土壕一覽表

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	形 態	並 列	備 考
1	B-1	1.90	0.61	0.14	N-83°-E	長方形	SB 1	古代
2	C-1	1.56	1.40	0.06		不整形		古代
3	B-2・3	1.50	1.42	0.16		不整形	SB 2	平安
4	B-2	0.90	0.82	0.10		円形		不明
5	B-2	0.64	0.38	0.32		円形		不明
6	C-6	0.59	0.47	0.26		円形		古代
7	D-2	1.80	1.11	0.09	N-74°-W	長方形	SJ60	古代
8	C-6	1.30	1.08	0.22	N-53°-E	槽円形		古代
9	C-7	1.22	1.06	0.04		円形		不明
10	C・D-8	1.18	1.08	0.22		円形		古代
11	D-7・8	1.00	0.94	0.13		不整形		古代
12	D-8	1.00	0.93	0.13		円形		不明
13	D-8	0.70	0.60	0.07		円形	14	不明
14	D-8	0.74	(0.70)	0.11		不整形	13	不明
15	D-6	2.08	1.22	0.32	N-71°-E	不整形		古代
16	E-8	2.88	1.27	0.80	N-32°-W	長方形	SJ144	古代
17	D-5	1.28	0.98	0.46		方形		平安
18	E・F-8	2.20	0.58	0.14	N-41°-W	長方形		不明
19	F-8	1.52	1.40	0.20		方形		不明
20	F-7	1.44	0.82	0.12	N-42°-E	長方形	SJ150	古代
21	E-2・3	1.33	0.86	0.23		不整形	SJ92	不明
22	F-5	2.47	1.34	0.22	N-59°-E	長方形		平安
23	F・G-3	0.96	0.82	0.90		円形		SE 7に變更
24	D・E-2	2.28	1.60	0.34	N-19°-W	不整形		古代
25	E-2	1.08	0.82	0.30		不整形	SD 5	不明
26	D・E-1	1.34	1.12	0.14		方形		不明
27	B-7	0.60	0.78	0.15		円形	SJ128	不明
28	B-4	1.00	0.60	0.50		円形		縄文
29	E・F-5	2.40	1.14	0.14	N-8°-E	不整形	SJ123	古代
30	C-2	1.12	1.00	0.31		円形	SJ21	縄文
31	C-5	1.60	1.42	0.20		円形	SJ49b・50	古代
32	C・D-5	0.96	0.76	0.12	N-51°-W	槽円形	SD 1	古代
33	C・D-6	0.94	0.69	0.14	N-24°-E	槽円形		古代
34	C-6・7	1.42	0.66	0.40	N-35°-W	不整形		古代
35	B-3	0.90	0.76	0.20		円形		不明
36	B-2	0.51	0.50	0.18		円形		不明
37	C-3	1.36	1.04	0.14	N-38°-E	槽円形	SJ30	古代
38	C-1	1.56	1.10	0.22	N-86°-E	槽円形	SJ 1	古代
39	C-2	0.94	0.82	0.23		円形	SJ 1	古代
42	C-7	(0.87)	0.84	0.20		円形	SJ131	古代
43	E-5	2.70	1.60	0.35	N-67°-E	長方形	SL124・125 SX 2・5	平安
44	C-5	1.12	0.96	0.15		円形		不明
45	E-5	1.84	0.80	0.37	N-76°-W	不整形	SJ120・121	古代
46	D-3	1.04	0.96	0.30		方形	SJ36	古代
47	D-3	1.84	1.10	0.24	N-66°-E	不整形	SJ62 SK48	古代
48	D-3	1.04	0.90	0.34		円形	SJ62 SB 6 SK47・137	古代
49	D・E-3	1.40	0.92	0.18	N-26°-W	槽円形	SJ62・63	古代
50	E-5	0.90	0.60	0.28	N-8°-W	不整形	SX 5	古代
51	D-2	0.98	0.94	0.10		円形		不明
52	D-2	1.54	0.90	0.34	N-90°-W	不整形	SJ59 SK54	古代
53	E-7	1.16	1.15	0.26		不整形	SJ138	不明
54	C・D-2	1.41	1.26	0.22	N-52°-W	槽円形	SJ59	古代

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	形態	重複	備考
55	D-3	2.08	1.46	0.90	N-0°	長方形		不明
56	D-E-3	1.22	1.12	0.18		円形		不明
57	E-2	0.90	0.56	0.10	N-3°-W	長方形	SJ90・91	古代
58	E-2	1.54	1.14	0.26		不整形		古代
59	E-5	0.94	0.92	0.10		円形		古代
60	E-F-6	1.04	1.04	0.78		円形	SD 4	古代
61	D-3	1.88	0.90	0.32	N-59°-E	不整形	SJ62	古代
62	D-2	1.92	0.96	0.34	N-85°-E	楕円形		不明
63	E-8	0.78	0.60	0.17	N-74°-E	楕円形	SJ143	不明
64	E-8	1.38	0.89	0.19	N-28°-W	長方形	SJ144	古代
65	F-8	0.58	0.38	0.07		円形	SK69	不明
66	F-G-8	2.00	1.74	0.62	N-0°	方形	SK67	不明
67	G-8	1.20	1.20	0.10		円形	SK66	不明
68	G-8	0.78	0.70	0.28		円形		不明
69	F-8	1.89	0.70	0.10		不整形	SK65	不明
70	F-7	2.42	1.52	0.18	N-79°-W	長方形	SJ180・181 SK79	不明
71	G-4	0.99	0.90	0.32		円形	SJ172	古代
72	G-6	1.78	1.24	0.30	N-90°-E	長方形		不明
73	F-6	2.02	0.99	0.54	N-89°-W	長方形	SJ177・178・179 SD 4	古代
74	F-G-6	0.83	0.58	0.10		円形	SJ179	古代
75	G-7	2.04	1.20	0.20	N-11°-E	長方形	SJ185	不明
76	G-6	1.88	1.44	0.44	N-0°	方形	SD 9	古代
77	F-7	1.17	1.08	0.20		円形	SJ180(181)・182	古代
78	F-7	3.14	1.32	0.29	N-19°-E	長方形	SJ180(181)・SK79	古代
79	F-7	1.88	0.74	0.41	N-0°	長方形	SJ180 SK78	古代
80	F-2・3	3.07	0.90	0.16	N-73°-W	長方形	SJ152	古代
81	F-7	2.60	1.52	0.44	N-83°-W	長方形	SK82	中世
82	F-7	2.62	0.43	0.20	N-76°-W	長方形	SK81・83	中世
83	F-7	3.04	1.28	0.32	N-72°-W	長方形	SJ187 SK82・84	中世
84	F-7	1.08	1.00	0.26		方形	SJ187 SK82・83	中世
85	F-5	2.00	1.06	0.34	N-15°-E	不整形	SJ159・166・167	不明
86	F-G-4	3.80	1.53	0.14	N-0°	長方形	SJ165	不明
87	G-4	1.06	1.06	0.26		円形	SJ172 SK90	不明
88	G-5	1.31	0.72	0.20		不整形	SJ166・168 SK98	古代
89	II-5	1.18	0.86	0.06	N-66°-W	楕円形		不明
90	G-4	2.56	1.54	0.14	N-90°-E	長方形	SJ172 SK87 SD 2	古代
91	G-3	1.06	0.76	0.15		円形	SD 8	不明
92	H-4・5	0.78	0.62	0.06		方形		不明
93	C-3・4	0.97	0.72	0.29		不整形	SJ38	古代
94	F-8	1.66	1.10	0.46	N-90°-E	楕円形	SJ189	不明
95	II-5	1.05	0.78	0.14	N-90°-E	楕円形		不明
96	H-6	1.04	1.01	0.10	N-81°-W	楕円形		不明
97	H-6	1.14	1.12	0.14		円形	H-6GrPS	古代
98	G-5	1.00	0.74	0.20		不整形	SJ166・168 SK88	不明
99	F-5	1.10	0.32	0.22		不整形	SJ160	古代
100	H-8	0.98	0.62	0.57	N-83°-W	楕円形		不明
101	H-8	1.21	1.18	0.37		長方形	SD21 SK102	不明
102	II-8	1.12	0.52	0.05	N-13°-W	不整形	SD21 SK101	古代
103	I-7	1.54	1.12	0.19	N-80°-W	方形		不明
104	C-4	0.83	0.68	0.16		不整形		不明
105	I-5	2.68	1.32	0.52	N-2°-E	楕円形	SJ201	古代
106	G-4	1.50	1.08	0.15		不整形	SJ174 SD 2	不明
107	J-8	0.78	0.68	0.18		円形	SJ210	古代

大帯1区

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	形態	番 号	備 考
108	I-4・5	1.35	1.20	0.08		不整形		不明
109	J 8	0.88	0.76	0.09	N-3° E	楕円形	SJ210	不明
110	E-5	0.98	0.98	0.14		円形	SJ121	不明
111	D-3	0.78	0.67	0.15		円形		不明
112	E-6	1.10	0.90	0.14		不整形	SJ124・146	不明
113	E-5	0.80	0.74	0.08	N-72°-E	楕円形	SJ125	古代
114	F-2	1.78	1.54	0.24		不整形	SJ99	古代
115	G-8	2.02	1.28	0.06	N-62°-W	長方形		不明
116	H-6	1.09	0.90	0.08		円形		不明
117	B-1	0.75	0.64	0.32		円形		不明
118	C-7	0.83	0.77	0.12		円形		不明
119	D-7・8	0.70	0.61	0.14	N-13°-W	楕円形		不明
120	D・E-8	1.12	0.93	0.21		不整形		不明
121	E-2	0.81	0.70	0.22	N-15°-W	楕円形		不明
122	E-7	0.93	0.88	0.15		円形		不明
123	E-8	0.68	0.64	0.31		円形		不明
124	F-3	0.87	0.82	0.33	N-48°-W	不整形	SJ107	不明
125	F-4	1.48	0.77	0.48	N-35°-E	不整形		不明
126	F-4	0.92	0.61	0.11	N-66°-E	楕円形		不明
127	F-4	0.77	0.55	0.07	N-90°-E	楕円形		不明
128	F-4	0.67	0.63	0.39		円形		不明
129	F-5	1.16	0.76	0.10	N-37°-W	楕円形		不明
130	I-4	0.86	0.75	0.35	N-0°	楕円形		不明
131	I-6・7	0.82	0.82	0.35		円形		不明
132	D-7	1.16	0.82	0.22	N-67°-W	不整形		不明
133	D-7	1.17	0.96	0.23		不整形		不明
134	E-2	0.81	0.62	0.23		円形		不明
135	D・E-3	0.85	0.62	0.34	N-23°-E	楕円形		不明
136	D・E-3	1.41	0.96	0.39	N-17°-W	楕円形	SJ62・63	不明
137	D・E-3	1.17	0.80	0.27	N-72°-W	楕円形	SJ62・63SK48・136 SB 6	不明
138	E-6	1.49	1.08	0.09	N-6°-E	長方形	SD 2 SB12	古代
139	E-8	0.84	0.81	0.28		円形		不明
140	F-4	0.72	0.48	0.08	N-84°-W	楕円形		不明
141	F-4	1.12	0.66	0.30	N-21°-E	不整形		不明
142	H-7	1.00	1.00	0.08		円形		不明
143	I-8	0.78	0.59	0.11	N-52°-W	楕円形		不明
144	J-5	0.88	0.66	0.60	N-50°-W	楕円形	SD20	不明

出土遺物はなかった。

第133号土壌 (第241図)

第133号土壌は、D-7グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.17m、短径0.96m、深さ0.23mを測る。

出土遺物はなかった。

第134号土壌 (第241図)

第134号土壌は、E-2グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.81m、短径0.62m、深さ0.23mを測る。

出土遺物はなかった。

第135号土壌 (第241図)

第135号土壌は、D・E-3グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.85m、短径0.62m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-23°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第136号土壌 (第241図)

第136号土壌は、D・E-3グリッドに位置する。第

62・63号住居跡、第137号土壌を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.41m、短径0.96

m、深さ0.39mを測る。主軸方向はN-17'-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第137号土壌 (第241図)

第137号土壌は、D・E-3グリッドに位置する。第62-63号住居跡、第6号掘立柱建物跡を切り、第136号土壌に切られる。

平面形態はおそらく楕円形で、規模は長径0.80m(残存長)、短径1.17m、深さ0.27mを測る。主軸方向はN-72'-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第138号土壌 (第241図)

第138号土壌は、E-6グリッドに位置する。第12号掘立柱建物跡・第2号溝跡に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.49m(残存長)、短径1.08m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-6'-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第139号土壌 (第241図)

第139号土壌は、E-8グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.84m、短径0.81m、深さ0.28mを測る。

出土遺物はなかった。

第140号土壌 (第241図)

第140号土壌は、F-4グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.72m、短径0.48m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-84'-Wを示す。出土遺物はなかった。

第141号土壌 (第241図)

第141号土壌は、F-4グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.12m、短径0.66m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-21'-Eを示す。出土遺物はなかった。

第142号土壌 (第241図)

第142号土壌は、H-7グリッドに位置する。

平面形態は円形で、土壌内に掘り込みがみられる。規模は径1.00m、深さ0.08mを測る。

出土遺物はなかった。

第143号土壌 (第241図)

第143号土壌は、I-8グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.59m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-52'-Eを示す。出土遺物はなかった。

第144号土壌 (第241図)

第144号土壌は、J-5グリッドに位置する。第20号溝跡と重複する。新田関係は土壌の方が古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.66m、深さ0.60mを測る。主軸方向はN-50'-Wを示す。出土遺物はなかった。

(6) 柵列跡

第1号柵列跡 (第245図)

第1号柵列跡は、調査区北端のB-5グリッドに位置する。ピットが4本は等間隔に並んでいるが、柱筋はきれいに揃わない。ピット間隔は1.7~1.8m程度である。ピットの深度は19~32cmである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第2号柵列跡 (第245図)

第2号柵列跡は、C・D-5グリッドに位置し、ほぼ南北方向に7本のピットが並ぶ。柱筋は概ね揃うが、Pit 5 ははずれている。

柱間は Pit 1~4 と Pit 4~6 間は2.4m等間に揃

うが、Pit 5・7は大きくずれており、除外して考えた方がよいであろう。深さは Pit 5・7を除くと12~27cmと比較的浅いもので揃う。

出土遺物はなく、時期は不明である。

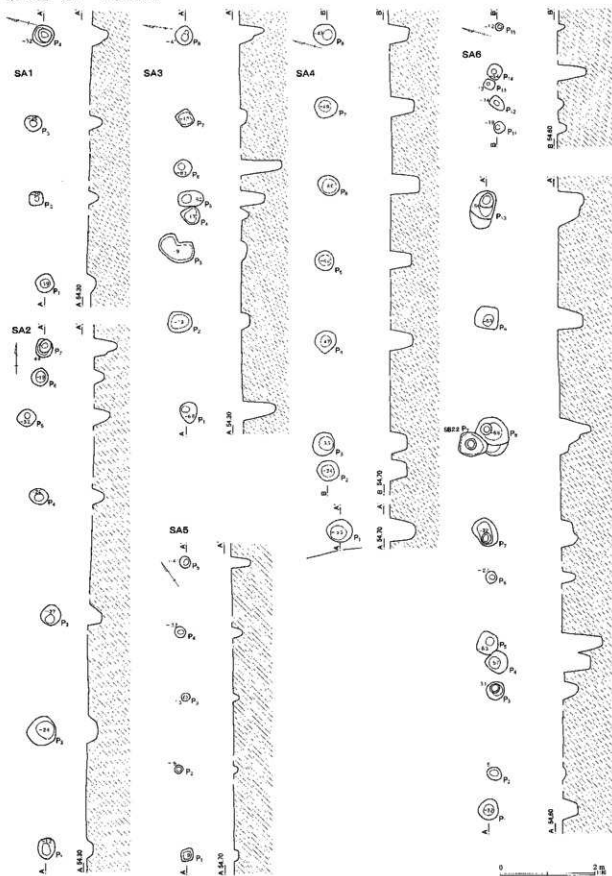
第3号柵列跡 (第245図)

第3号柵列跡は、調査区北東部のC-7・8、D-7グリッドに位置する。8本のピットが東西方向に列状に並ぶが、柱間は等間とはならない。深さも9~83cmと揃っていない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第4号柵列跡 (第245図)

第245図 第1~6号横列跡



第4号柵列跡は、F-2・3グリッドに位置する。8本のピットが列状に並ぶが、Pit 1は柱筋からはずれる。ピット間隔はPit 4～8に関しては1.65m等間にほぼ揃う。Pit 1～3については間隔が不揃いで、除外して考えた方がよいかもしれない。深さは、33～60cm、Pit 4～8では40cm代のものが多く、比較的揃っている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第5号柵列跡 (第245図)

第5号柵列跡は、F・G-3グリッドに位置する。5本のピットが列状に並ぶが、柱筋がややぶれており、柱間も等間に揃わない。軸方位は北から35°程東に振れている。ピット直径は20～30cm、深さはPit 5が41cmと深い。他は浅い。

(7) 性格不明遺構

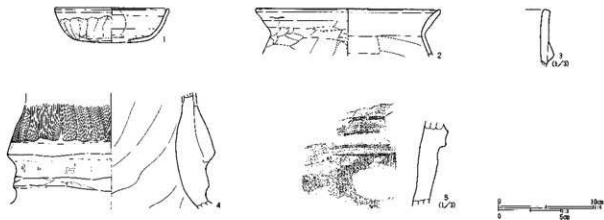
第1号性格不明遺構 (第9図)

第1号性格不明遺構は、D-2・3グリッドに位置する。長径3.50m、短径3.20m、楕円形を呈する変色部が認められたため、調査を行ったところ、土層が捻転していることが判明した。おそらく風倒木痕の可能性が高いものと考えられる。

出土遺物は土師器環がある(第246図1)。遺物の時期は9世紀代と思われ、本遺構の時期も9世紀以降と推定される。

第2号性格不明遺構 (第247図)

第246図 第1・5号不明遺構出土遺物



出土遺物はなく、時期は不明である。

第6号柵列跡 (第245図)

第6号柵列跡は、調査区西部のII-3・4グリッドに位置する。第190号住居跡よりも新しく、第194号住居跡よりも古い。第22号独立柱建物跡との関係は不明確であるが、本柵列跡の方が新しい可能性が高い。

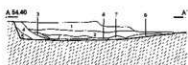
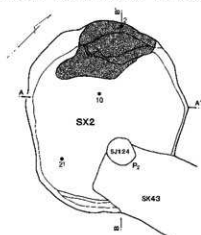
15本のピットが列状に並ぶが、Pit 2・3・6・11～13・15は柱穴規模が小さく、除外した方がよいかもしれない。Pit 5・7・8・9・10・15間の柱間はほぼ2.40m等間に揃う。Pit 1～5間は3.50mと間隔は広い。深さはPit 5が最も深く83cm、主体は40～50cm前後である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、重複住居跡との関係から8～9世紀代にはおさまるであろう。

第2号性格不明遺構は、E-5グリッドに位置する。重複する第83・117・120・124号住居跡・第43号土塚に切られていた。第82号住居跡との関係は不明確であったが、本遺構の方が古い可能性がある。第125号住居跡との新旧は不明である。

平面形は楕円形で、規模は長径4.04m、短径3.34m、深さ0.37mを測る。主軸方向はN-51°-Wを示す。調査段階では、遺構北西部に焼上混じりの白色粘土が多量に認められたことから、カマドを伴う住居跡と考えたが、平面プランが方形にはならず、床面が傾斜

第247図 第2号不明遺構・出土遺物



5尺2

- 1 暗褐色土 焼土・焼土粒・炭化物多量
- 2 暗褐色土 焼土・焼土粒・炭化物多量
- 3 灰褐色土 焼土少量、粘土ブロック多量
- 4 暗褐色土 焼土・炭化物少量
- 5 暗褐色土 フォーム・フォームブロック少量
- 6 暗褐色土 ローム多量、焼土少量
- 7 暗褐色土 ローム少量、2層より厚い

0 2m



11



12



13



14

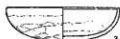
0 50cm



1



2



3



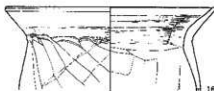
4



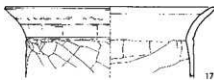
5



15



16



17



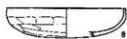
20



6



7



8



9



10



18



19



21



21



21



21

第115表 第1・5号性格不明遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.6	(8.0)	H	1	明赤褐	35	SX 1 体部無調整(ナデ)
2	甕	(19.6)	5.0		DEHJ	2	にぶい橙	10	SX 5
3	胡蓋				DEH	2	橙	5	SX 5 倒木痕内 土師黄 ロクロ彫形
4	形象埴輪				BDJ	2	にぶい黄橙		SX 5 倒木痕内 人物埴輪か
5	円筒埴輪				BEHJJ	2	褐		SX 5 倒木痕内 外面タテハケ 内面ナデ

第116表 第2号性格不明遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	3.5		DEH	2	にぶい橙	35	
2	坏	(13.5)	3.5		DEH	2	橙	20	Na 6
3	坏	(11.8)	3.5		ADEH	2	明赤褐	40	
4	坏	(15.2)	3.5		ADE	2	赤褐	15	
5	坏	(16.0)	4.1		DEJ	2	にぶい赤褐	10	
6	坏	(11.0)	2.9		BD	1	にぶい褐	25	
7	坏	(11.0)	3.7		A EI	1	にぶい橙	25	
8	坏	(12.3)	3.0		DEH	2	にぶい橙	15	
9	坏	(14.0)	2.2		A EH	2	赤褐	5	
10	坏	(12.2)	3.9		DEH	2	橙	60	Na 3
11	皿	(16.8)	4.8		CDEH	3	橙	30	
12	皿	(18.0)	3.3		DI	1	橙	25	
13	皿	(20.0)	3.9		ADE	2	橙	10	
14	盤	(22.0)	4.3		ADEJ	1	橙	55	
15	甕	(20.0)	10.9		DEH	1	橙	20	胴部タテケズリ
16	甕	(22.0)	8.8		ADEI	1	にぶい橙	15	
17	甕	(22.0)	7.4		DEH	2	にぶい橙	35	
18	甕		5.7	4.3	DEH	2	灰褐	60	
19	甕		2.7	4.7	BDEHJ	2	黒褐	40	底部木葉痕
20	壺	(22.0)	6.8		ADEH	1	橙	25	
21	紡錘車	上径4.50cm 下径2.40cm		孔径0.70cm	厚さ2.40cm	重量39.46g	にぶい橙		

していること、踏み固められた痕跡がないこと、また、カマドと考えた焼上混じりの粘土堆積層と灰層がみられないことなどから通常の住居跡とは異なる性格の遺構と把握した。

土上は暗褐色上を基調として、粘土ブロックやロームブロックが混じっていた。北西部の白色粘土堆積層は住居中央部に向かって流れ込んだような状況で検出された。

ピット・壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・皿・甕・壺と土製紡錘車がある(第247図)。大略7世紀後半～8世紀前半までの土器群と思われるが、重複する第82号住居跡や第117号住居跡の土器が混じっている可能性がある。15の甕は胴部縦方向のヘラケズリが施され、古い様相といえる。時期に関しては、重複する第117号住居跡との関係か

ら7世紀末～8世紀初頭以前と考えておく。

第3号性格不明遺構(第12図)

第3号性格不明遺構は、F・G-3グリッドに位置する。第152号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

形態は不整形円形で、規模は長径2.04m、最大幅1.02mである。上層が捻転した痕跡が認められたため、風倒木痕跡と判断した。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、重複住居との関係から7世紀末～8世紀初頭以前という限定はできる。

第4号性格不明遺構(第9図)

第4号性格不明遺構は、C・D-3グリッドに位置し、第61号住居跡の床面下から検出された。

形態は楕円形で、規模は長径1.38m、短径0.96mである。土層が捻転していたことから風倒木痕跡と判断し

大寄1区

た。出土遺物はなく、時期は不明である。

第5号性格不明遺構 (第10図)

第5号性格不明遺構は、E-5グリッドに位置する。第125号住居跡を切り、第43・50号土壇に切られている。

形態は不整形円形で、規模は長径3.48m、短径2.46

(8) ピット・グリッド・表採出土遺物

ピット 大寄遺跡1区からは多数のピットが検出された。おそらく縄文時代から中世段階のものと推定されるが、遺物を伴うものが非常に少なく、時期を明確に分離することは不可能に近い。

その中で、小型で平面プランが方形の一群がある。主に調査区南東部に密集する傾向が認められる。このタイプは遺構の重複関係から、古代の遺構を全て切っ

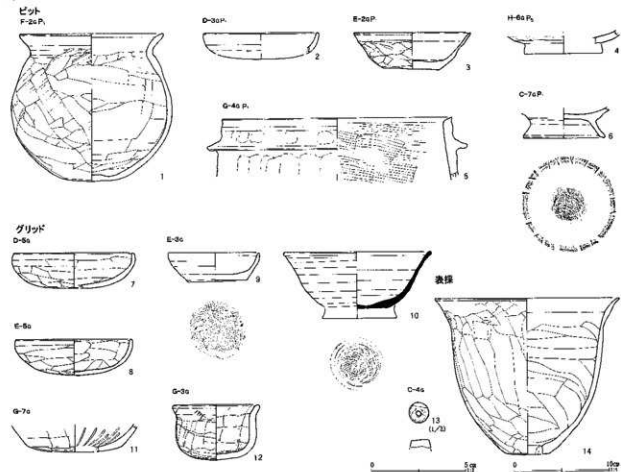
mである。性格は風倒木痕と考えられる。

出土遺物は土器器蓋・羽釜・埴輪片がある(第246図2~5)。埴輪片は第50号土壇に帰属する可能性が高い。時期は不明確であるが、第43・50号土壇が中世の所産と推定されることから、古代から中世の範囲に入るものである。

ており、中世段階のピット群と考えることができる。性格としては建物跡群を構成する柱穴と推定されるが、柱穴配設がうまくまとまらず、明確に把握することができなかった。

ピット出土遺物は第248図1~6にまとめた。遺物が出土したピットについては全測図にピット番号を記載した。

第248図 ピット・グリッド・表採出土遺物



第117表 ビット・グリッド・表採出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	小型甕	(15.2)	15.4		ABDEH	1	にぶい赤褐色	70	F-2G P1
2	環	(12.0)	2.2		DEH	2	橙	10	D-3G P1
3	環	12.4	3.9	6.0	EHJ	2	にぶい橙	100	E-2G P1
4	灰釉陶器		1.3		EH	1	灰黄	5	H-6G P5 東濃産 内面面ね焼き痕 降灰あり
5	羽釜	(24.0)	6.5		BDEJ	2	にぶい橙	20	G-4G P1
6	高台椀		3.2	8.4	DEH	2	にぶい橙	95	C-7G P1 ロクロ上師器
7	環	12.5	3.7		ADE	2	にぶい赤褐色	80	D-5G
8	環	12.2	3.8		DEH	2	にぶい橙	70	E-5G
9	小型	8.6	3.0	6.3	DEH	1	にぶい橙	100	E-3G No.2 ロクロ十脚 11線 -部故意に(?)欠く
10	須恵環	15.6	6.0	5.6	AHJ	1	灰白	80	E-3G No.1 SK49
11	環		2.9	(10.0)	DEH	3	にぶい橙	20	G-7G
12	小型甕	(9.0)	5.8		DEH	1	にぶい橙	55	G-3G
13	白玉	直径1.05cm	孔径0.30cm	厚さ(0.45)cm			重量0.79g		C-4G
14	甕	(19.6)	16.4	(4.5)	ABIIJ	2	にぶい褐	40	表採

第248図1は小型甕で、F-2グリッド Pit 1出土。2はD-3グリッド Pit 1出土の北武藏型環。3はE-2グリッド Pit 1出土の土師器環。4はH-6グリッド Pit 5出土の灰釉陶器高台椀。高台は剥落している。東濃産である。5はG-4グリッド Pit 1出土の土師羽釜。胴部外面縦へラケズリ。非ロクロ整形。6はC-7グリッド Pit 1出土のロクロ土師器高台

椀である。

グリッド・表採 第248図7~13はグリッドから検出され、遺構の帰属関係が不明な土器である。7・8は土師器環、9はロクロ上師器小型である。10は須恵器高台椀、13は白玉である。14は採集資料の土師器小型甕である。

(9) I区出土鉄製品

ここでは大寄遺跡I区出土の鉄製品をまとめて掲載する(第249図)。主な鉄器には刀子・鎌・鏃・紡錘車・鉄斧等がある。16の鎌は基部に抉りの入る鎌身部の長いタイプと思われ、中世的な鎌の出現を考える上で興味深い。また、31は頭部に環が付く棒状製品で、鉋前とセットとなる鎌の可能性があると考えており、注目されよう。

1は刀子である。残存長12.0cm。切先と柄部先端を欠く。両開式で、刀身部長は7.6cm。柄部には木質が錆着している。第153号住居跡出土。

2は刀子である。残存長11.3cm。切先と柄部の大半を欠く。棟側に環が付くが、刃側は不明瞭である。大型の刀子となろう。第162号住居跡出土。

3は刀子である。残存長4.7cm。刀身と柄部の大半を欠く。両開式である。第66号住居跡出土。

4は小型の鎌か。残存長5.5cm、幅1.5cm。全体に湾

曲し、内側に刃が付く。鎌にしては小さく、用途不明である。第179号住居跡出土。

5は刀子である。残存長7.2cm。切先と柄部を欠く。棟側に環が付く片開式である。第127号住居跡出土。

6は刀子である。残存長9.9cm。刀身部を欠くが、柄部は完存する。片開式である。第66・67号住居跡出土。

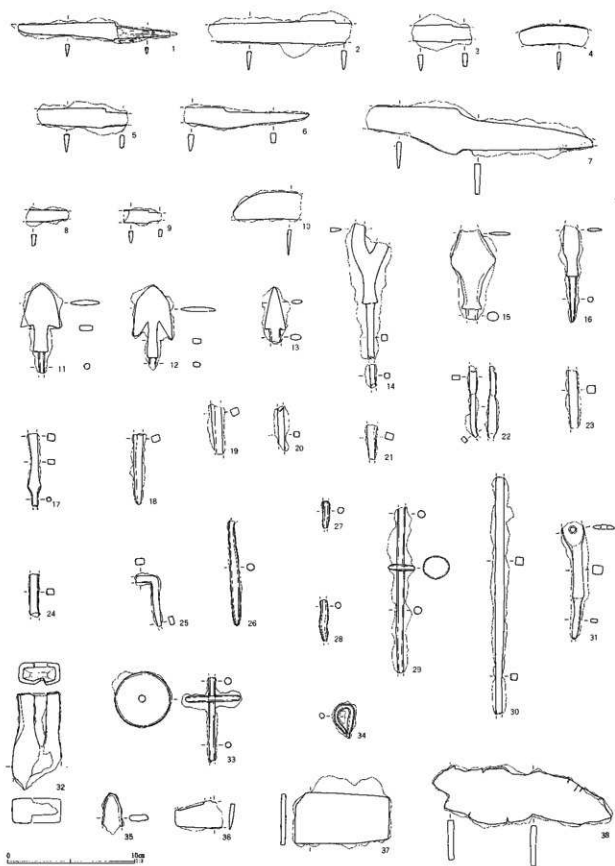
7は小刀または大型の刀子である。残存長18.1cm。柄部先端と刀身部を欠いている。両開式である。両側の幅3.6cm。柄部には僅かに木質が遺存する。出土遺構不明。

8は刀子柄部片である。残存長3.3cm。第78号住居跡出土。

9は刀子である。刀身部と柄部の大半を欠く。残存長3.1cm。両開式。出土遺構不明である。

10は鎌の切先部か。残存長5.3cm。刃幅2.1cm。第70

第249图 I区出土铁製品



号住居跡出土。

11は長三角形両丸造闊篋被形式の鉄鏃である。残存長7.0cm、鏃身部（先端から闊まで）長5.3cm、基部を欠く。第194号住居跡出土。

12は五角形賜状両丸造闊篋被形式の鉄鏃である。残存長6.7cm、鏃身部は完存し、長さ5.6cm、基部を欠く。第196号住居跡出土。

13は長三角形形式の鉄鏃である。厚く錆に覆われ、断面は推定。残存長4.7cm、第6号井戸跡出土。

14は雁股鏃と思われる。刃部と基部を欠く。残存長約13.0cm、鏃身部と基部は闊で区画される。第114号住居跡出土。

15は尖根鏃か。鏃身部先端と基部の大半を欠く。残存長7.0cm、闊篋被である。H-7グリッド Pit 2 出土。

16は尖根または柳葉式の鏃か。細長い鏃身部の下端に挟りが入る。残存長7.6cm、闊篋被で、基部は3.6cm、第171号住居跡出土。

17は鉄鏃基部か。残存長5.7cm、闊？の上部は断面方形、下部は円形である。第179号住居跡 Pit 3 出土。

18は鉄釘か。残存長5.5cm、断面方形で、下部に向かって細くなる。E-5グリッド Pit 2 出土。

19-25は棒状鉄製品。断面は方形となる。釘や鏃の一部の可能性もあるが、具体的な製品を特定できない。25は直角に屈曲し、鏃の可能性もあろう。19は残存長4.0cm、第148号住居跡出土。20は残存長3.4cm、第89号住居跡出土。21は釘か。残存長2.7cm、F-4・5グリッド出土。22は残存長5.6cm、上半と下半で幅が異なる。用途不明品。第20号住居跡出土。23は残存長4.5cm、第179号住居跡出土。24は残存長3.3cm、第18号住居跡出土。25は鏃か。長辺部の長さ4.0cm、第2号不明

遺構出土。

26-29は断面円形の、用途不明棒状鉄製品である。26は残存長8.1cm、上端は屈曲する。第99号住居跡出土。27は残存長2.2cm、第187号住居跡出土。28は残存長3.3cm、第131号住居跡出土。29は長さ12.9cmの丸棒に直径2.0cmのリングが取り付けられている。紡錘車の紡錘部が欠損したものと考えられるが、断定できない。第176号住居跡出土。

30は残存長18.5cmの角棒状製品である。第124号住居跡または第2号不明遺構出土。

31は角棒状の頭部に環が¹付く。鏃の可能性もある。鏃とすれば、紐通し孔と柄部が残存し、開錠部が欠失することになる。残存長9.1cm、第160号住居跡 Pit 2 出土。

32は鉄斧である。残存長7.5cm、幅3.3-3.8cm、厚さ1.7cmを測る。基部は遺存するが、刃部を欠く。幅狭であることから手斧と思われる。第31号住居跡出土。

33は鉄製紡錘車である。残存長6.7cmの紡軸に直径4.3cmの紡錘が取り付けられている。第2号不明遺構出土。

34は断面円形の棒状鉄製品である。リング状に曲がっている。用途不明。第2号不明遺構出土。

35は残長3.1cmの鉄片。製品とは異なるかもしれない。第40-42号住居跡出土。

36は残存長3.7cm、幅2.3cmの鉄板状製品の残欠。火打ち金の可能性があろうか。第20号住居跡出土。

37は板状鉄製品。長さ7.4cm、最大幅4.0cm、厚さ0.4cm、用途不明品である。第112号住居跡出土。

38は板状鉄製品残欠である。長さ14.4cm、幅4.3cm、厚さ0.4-0.5cm、鑄造品と思われる。用途不明。第156号住居跡カマド出土。

大窑 I 区

第118表 大窑遗址 I 区遺構新旧对照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SJ1	SJ28	SJ51	SJ24c	SJ161	SJ109	SJ152	SJ92	SJ203	SJ160
SJ2	SJ107	SJ52	SJ25	SJ162	SJ78a	SJ153	SJ93	SJ204 a	SJ145
SJ3	SJ15a	SJ53	SJ27	SJ163	SJ78d	SJ154	SJ94	SJ205	SJ144
SJ4	SJ15b	SJ54	SJ29a	SJ164	SJ118	SJ155	SJ98	SJ206	SJ153
SJ5	SJ1	SJ55	SJ29b	SJ165	SJ77	SJ156	SJ98b	SJ207	SJ147
SJ6	SJ2	SJ56	SJ130a	SJ166	SJ78b	SJ157	SJ99	SJ208	SJ149
SJ7	SJ3	SJ57	SJ31	SJ167	SJ78c	SJ158	SJ100	SJ209	SJ150
SJ8	SJ4a	SJ58	SJ33	SJ168	SJ76a	SJ159	SJ101 - 103	SJ210	SJ151
SJ9	SJ4b	SJ59	SJ34	SJ169	SJ76b	SJ160	SJ102	SJ211	SJ152
SJ10	SJ5	SJ60	SJ88	SJ170	SJ76d	SJ161	SJ105	SJ212	SJ158
SJ11	SJ6	SJ61	SJ85	SJ171	SJ96	SJ162	SJ130	SB1	SB1
SJ12	SJ9	SJ62	SJ37a	SJ172	SJ97	SJ163	SJ141	SB2	SB2
SJ13	SJ7	SJ63	SJ37b - d	SJ173	SJ75a	SJ164	SJ127	SB3	SB3
SJ14	SJ30b	SJ64	SJ37c	SJ174	SJ75b	SJ165	SJ125	SB4	SB4
SJ15	SJ30c	SJ65	SJ76c	SJ175	SJ75d	SJ166	SJ105	SB5	SB5
SJ16	SJ8a	SJ66	SJ38c - d	SJ176	SJ75c	SJ167	SJ148	SB6	SB6
SJ17	SJ8b	SJ67	SJ38a - b	SJ177	SJ42	SJ168	SJ122 - 104	SB7	SB7
SJ18	SJ8d	SJ68	SJ39b	SJ178	SJ95	SJ169	SJ124	SB8	SB8
SJ19	SJ8c	SJ69	SJ36	SJ179	SJ72	SJ170	SJ125	SB9	SB23
SJ20	SJ10	SJ70	SJ39a	SJ120	SJ74	SJ171	SJ119	SB10	SB10
SJ21	SJ11	SJ71	SJ41	SJ121	SJ111	SJ172	SJ132	SB11	SB11
SJ22	SJ12a	SJ72	SJ35	SJ122	SJ121	SJ173	SJ140	SB12	SB12
SJ23	SJ12b	SJ73	SJ43d	SJ123	SJ120	SJ174	SJ139	SB13	SB13
SJ24	SJ13a	SJ74	SJ43c	SJ124	SJ79	SJ175	SJ131	SB14	SB14
SJ25	SJ13b	SJ75	SJ43a	SJ125	SJ83a	SJ176	SJ133	SB15	SB15
SJ26	SJ13c	SJ76	SJ43b	SJ126	SJ48	SJ177	SJ87	SB16	SB16
SJ27	SJ14a	SJ77	SJ43c	SJ127	SJ53	SJ178	SJ117	SB17	SB17
SJ28	SJ14b	SJ78	SJ44	SJ128	SJ54a	SJ179	SJ116	SB18	SB18
SJ29	SJ86b - c	SJ79	SJ45	SJ129	SJ54b	SJ180	SJ114	SB19	SB19
SJ30	SJ86	SJ80	SJ47	SJ130	SJ54c	SJ181	SJ113	SB20	SB20
SJ31	SJ81	SJ81	SJ71	SJ131	SJ55	SJ182	SJ123	SB21	SB21
SJ32	SJ17	SJ82	SJ46a	SJ132	SJ56	SJ183	SJ128	SB22	SB22
SJ33	SJ19a	SJ83	SJ46b	SJ133	SJ57	SJ184	SJ134	SX1	SX1
SJ34	SJ19b	SJ84	SJ46c	SJ134	SJ52	SJ185	SJ115	SX2	SJ80
SJ35	SJ18a	SJ85	SJ49	SJ135	SJ58	SJ186	SJ129	SX3	SX6
SJ36	SJ84	SJ86a	SJ50	SJ136	SJ51	SJ187	SJ32	SX4	SJ85内
SJ37	SJ20b	SJ86b	SJ50b	SJ137	SJ62	SJ188	SJ32b	SX5	SX5
SJ38	SJ20a	SJ87	SJ81a	SJ138	SJ60a	SJ189	SJ112	SE1	SE1
SJ39	SJ20c	SJ88	SJ81b	SJ139	SJ60b	SJ190	SJ137	SE2	SX2
SJ40	SJ40b	SJ89	SJ89	SJ140	SJ65	SJ191	SJ142	SE3	SE3
SJ41	SJ40c	SJ90	SJ82a	SJ141	SJ66	SJ192	SJ143	SE4	SE4
SJ42	SJ40a	SJ91	SJ82b	SJ142	SJ61	SJ193	SJ138	SE5	SE5
SJ43	SJ21b	SJ92	SJ108	SJ143	SJ59a	SJ194	SJ135	SE6	SE2
SJ44	SJ21a	SJ93	SJ91a	SJ144	SJ59b	SJ195	SJ136	SD1	SD24
SJ45	SJ23a	SJ94	SJ91b	SJ145	SJ59c	SJ196	SJ157		
SJ46	SJ23b	SJ95	SJ68	SJ146	SJ110	SJ197	SJ154		
SJ47	SJ23c	SJ96	SJ91	SJ147	SJ70a - b	SJ198	SJ155		
SJ48	SJ25	SJ97	SJ91c	SJ148	SJ67	SJ199	SJ161		
SJ49a	SJ24a	SJ98	SJ91d	SJ149	SJ69	SJ200	SJ162		
SJ49b	SJ24b	SJ99	SJ90 - 90a	SJ150	SJ64	SJ201	SJ156		
SJ50	SJ73	SJ100	SJ90b	SJ151	SJ63	SJ202	SJ159		

報 告 書 抄 録

ふりがな		おおよりいせき					
書名		大寄遺跡Ⅰ					
副書名		岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告					
巻次		Ⅱ（第1分冊）					
シリーズ名		埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書					
シリーズ番号		第268集					
編著者名		富田和夫					
編集機関		財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団					
所在地		〒369-0108 埼玉県大里郡大里村大字船木台4-4-1				TEL 0493-39-3955	
発行年月日		西暦2000（平成12）年12月25日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
大寄遺跡	埼玉県岡部町大字榎 沢293番地8	11405 138	36° 12' 45"	139° 11' 42"	19970106 ～ 19970331 19970401 ～ 19980331 19980401 ～ 19980430	34,100	工業団地 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
大寄遺跡Ⅰ区	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	3軒	縄文土器		
		古墳時代	竪穴住居跡	16軒	土器 須恵器 土製品 鉄製品		
	奈良・平安時代	竪穴住居跡	193軒	土器 須恵器			
		独立柱建物跡	22棟	土器 須恵器 土製品 鉄製品			
大寄遺跡Ⅱ区	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	3軒	縄文土器		
			古墳時代	竪穴住居跡	11軒	土器 須恵器 土製品 鉄製品	
	奈良・平安時代	竪穴住居跡	109軒	土器 須恵器			
		独立柱建物跡	10棟	土器 須恵器 土製品 鉄製品			
中世以降	溝跡	1条	灰釉陶器				
	井戸跡	4基	土器 須恵器 土製品 鉄製品				

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第268集

大里郡岡部町

大寄遺跡Ⅰ

岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

第1分冊

平成12年12月22日 印刷

平成12年12月25日 発行

発行／財団法人 埼玉埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493(39)3955

印刷／樺太陽美術